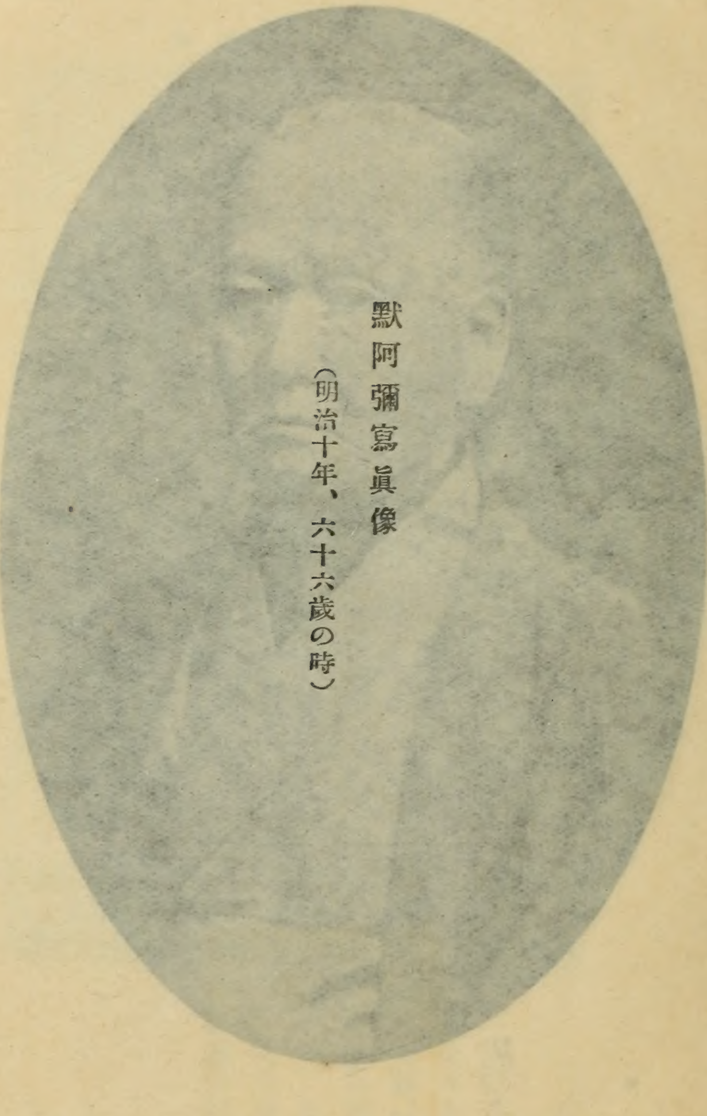
露伴全集

第十七巻

黙阿弥全集

第十七巻



默阿彌寫眞像

（明治十年、六十六歳の時）



解　説

この三枚續きの錦繪（國周筆）は、明治座の前身千歳座の開場式に際して版行されたものである。明治十八年二月新築工事成り、二月の四、五、六、七の四日間花々しく開場式を擧げた。先代守田勘彌が一切の指揮に任じてゐたので、第一日には貴顯、紳士、官員を始め、六二連、水鳥連等の劇通、新聞記者等を招待し、精養軒の西洋料理を饗應したといふ。式は總て古例に倣ひ一同チョン髷にて舞臺へ並び、卷（マキ）を讀んだといふ。その時眞の髷は芝翫一人のみであつたといふ。中央三方の上に卷を置いてゐるのは團十郎、その右は菊五郎、左は左團次、前列左端は芝翫、片岡我童の後方、後列左より二人目は默阿彌といふことになつてゐる。


千歳座初始之圖

河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集　第十七卷

東京　春陽堂刊行

默阿彌全集　第十七卷目次

挿繪目次

昔今歌舞伎吉例

鶴ヶ岡の神前に
靜御前が法樂舞
頼朝公の上覽に囃子は
畠山重忠卽工藤祐經
御贔屓御餘光
今吹返天津風
龜ヶ谷の別邸に一﨟
職が新殿の祝
朝比奈が執持に列座は
十郎祐成卽五郎時致

十八年舞臺開　めづらしい對面の榮

屋島の浦に宗盛が下知に射掛し敎經の矢表に立つ嗣信が
忠死を惜む源廷尉義經公も都をば月もろともに落て行く
吉野の道も白雪の蹴拔の塔に忠信が御名を負うて覺範を
討て立退く小柴が許廻り逢うたる小車が緣に匿ふ落人を
餘所に見退す義心の景季討手に向ふ義時が諭しに天晴健
氣な切腹昨日に替る卿の君海尊龜井駿河を初め茅にも心
置すじの佐澤の里に敎信尼が待設けたる山伏接待淺香廡
生へ辨慶が最期の折の物語に又會稽の旗上と老女が旗揃

千歳曾我源氏礎

「千歳曾我源氏礎」は明治十八年二月、千歳座に於て書卸された、作者七十歳の時のことである。義經の吉野落、靜の法樂の舞、碁盤忠信、山伏接待、等を題材とし、源平盛衰記に據つたもの。活歴がかつた晩年の作中では、代表的なものゝ一つである。千歳曾我と名題を据ゑたのは、千歳座の開場式の行はれた、最初の興行の時だつたからである。九代目團十郎が法樂の舞の靜と、旗揃への教信尼とを、非常の努力を以て勤めたが、何れも舞臺的に成功したものとは言へなかつた。却て作中最も好評であつたのは、例の碁盤忠信の件であつて、先代左團次の當り藝の一と稱せられるに至つた。旗揃への教信尼の部分は新歌舞伎十八番の內「山伏攝待」と銘を打たれたものである。

書卸し當時の主なる役割は、市川團十郎（佐藤嗣信、靜御前、教信尼）、尾上菊五郎（畠山重忠）、市川左團次（佐藤忠信、武藏坊辨慶）、中村芝翫（横川禪司覺範、常陸坊海尊）、坂東家橘（內大臣宗盛卿、龜井の六郎）、市川海老藏（伊勢三郎、田島三郎）、坂東秀調（淺香）、澤村源之助（麻生、朝顏）、片岡我童（能登守教經、梶原景季、駿河次郎）、市川團右衛門（小柴入道浄雲）、尾上松助（熊井太郎、梶原景久）、市川八百藏（片岡八郎）等であつた。

挿繪にしたのは、法樂舞の靜に扮せる九世團十郎の舞臺寫眞及國周筆の山伏攝待である。

大正十四年十二月

校訂者



千歳曾我源氏礎（碁盤忠信、旗揃へ‖五幕）

序幕

讚州屋島假御所の場
同愛妾朝顔寢所の場
屋島浦繼信討死の場

〔役名‖佐藤三郎兵衞繼信、同四郎兵衞忠信、内大臣宗盛卿、佐藤の臣田島三郎、武藏左衞門有國、越中の次郎盛次、右衞門督清宗、小松侍從忠房、物見の兵二人、近習四人、兵卒大勢、能登守教經、源九郎義經。宗盛の妾朝顏、侍女松ヶ枝、菊王丸、其他。〕

（屋島假御所の場）‖本舞臺四間通し中足の二重、折廻し本椽附の屋體、此上垂木の小口を見せし板葺の軒先を取附け、此下狐格子の欄間、二方見附丸太の柱、正面奥深に誂への襖、上の方少し前へ出して白木金物附兩開きの折戸、此棲腰高障子を建てたる屋體、下手の棲御簾をおろし、本椽の蹴込み丸木の床下、眞中に一間足の附きし踏段、左右屋根の附きたるさゝら子のやうな下見を打ちし板塀、此の前諸所に松の立木、日覆より同じく釣枝、總て讚州屋島假御所の體よろしく。爰に清宗、忠房、烏帽子好みの裝束一本ざし、侍女松ヶ枝、同じく〇、官女緋の袴にて文臺を控へ、歌の詠草を控

へて居る、官士四人何れも鎧下折烏帽子一本ざしにて控へ、此見得よろしく、誂へ本行の神樂にて幕明く。

清宗　如何に方々、播州鵯越の逆落しに味方敗走なしてより、此の讚州屋島に移り、俄にしつらふ此の假御所。

忠房　板漏る月の片庇、黒木に均しき宮殿なれど、此程よりして神樂を奏し、我が君様に恙なきやう官人衆が日毎の祈念。

松枝　それに附き今日は月並の御歌合、假御所といひ敵味方火花を散らす合戰の、その有る中も敷島の、道を捨てさせたまはぬは、是れ我國の習はしにて、

○　則ち和歌の詠草をお調べ遊ばすお役をば、宗盛卿の御愛妾朝顔さまへ仰せ附られ、わらは達は此様に一門方より詠進のお歌を記す此のお役目。

十一　われ〱共は無骨にて和歌の道は知らざるゆゑ、申すではござらねど、此の合戰の其中で、

十二　否とかけりとか優長な、三十一文字を詠進あれど、明日にも源氏押寄せなば、

十三　鎬を削る戰場にては、御一門の方々でも、歌を詠んでは居られまじ、

十四　然し能因小町などは、歌で雨さへ降らせしとあれば、後學の爲われ〱にも、

近一　其お歌とやらを二ツ三ツ、讀んでお聞かせ、
四人　下さりませ。
松枝　それは何より易きこと、知盛卿を始めとして、御一門の御詠草大方は揃ひたれど、教經樣のみまだ參らず。
○　最早追附けおよみ歌が爰へ屆くでござりませう、左すれば揃ふお歌の數、何れも方へ御披露なし、お聞かせ申すでござりませう。
清宗　教經殿は弓矢取つて剛の者と聞きつるが、故薩摩守忠度殿を除けては、最早敷島の道に長けたる者はあるまじ。
忠房　如何にも都の俊成卿へ、木の下かげの一首を殘すは、古今に傳ふる名歌の功し。
松枝　何にいたせ、能登樣より、最早詠進あるべきに、
○　てもまあ、遲い事ではある。（ト此時下手にて、）
菊王　あいや、詠進の和歌、只今それへ。
松枝　あれぞ能登殿の童菊王殿。
ト鳴物きつばりとなり、下手より菊王丸好みのこしらへにて、短册を竹の先に挾みて持つて出來り、

菊王　主君教經軍慮に暇なく、遲刻の段は御容赦下され、則ち詠進の和歌、御受取り下さりませう。

ト出すを松ヶ枝受取り、

松枝　是れにて揃ふお歌の數。

清宗　菊王大儀。

菊王　はッ、お暇仕つりまする。（ト思入あつて下手へはひる。）

近一　能登殿のお歌參れば、それにて揃ふお歌の數。

近二　何卒二三首我々へ、

近三　お聞かせなされて、

四人　下さりませう。

清宗　宿直の兵士等望みとあれば、

忠房　それにて讀みて聞かされよ。

松枝　左様なれば、披講いたしませう。（ト誂への合方になり、松ヶ枝短册を取上げ、）「見まほしき君は外山の花櫻、隔つ霞や人目なるらん。」

清宗　して其の歌は。

松枝　中納言敎盛卿にござりまする。（ト又取上げ）「若葉さす山下河を行く水は、早くも夏の心なるらん。」

松枝　修理大夫經盛卿にござりまする。（ト短册を取上げ）「朝顔の花一時も千歳ふる、松にかはらぬ心にやある。」

忠房　して、其の讀人は。

清宗　あいや、それは誰人が詠進なせし歌なるぞ。

松枝　是れぞ則ち敎經樣より、今お遣はしになりたるお歌にござりまする。

ト是れを聞き清宗忠房不審の思入あつて、

清宗　此月並の御會に附き詠進なすべきお歌の御題は、「外山の霞」と「春の水」、此の二題と聞きつるが、

忠房　心得難きは敎經殿、御題に違ひし朝顔の、歌を詠進せられしは、

清宗　はて心得ぬ、

清宗 忠房　事どもぢやなァ。（ト不審の思入、此時花道の揚幕にて）

有國　あいや、其の詠進の歌の心、左衞門有國、

盛次　次郎盛次、それへ參つて、

兩人　言上せん。
　　　ト序の舞になり、花道より有國、盛次烏帽子直垂附太刀、好みのこしらへにて出來り、直ぐに二重へ
　　　住ひ、平伏なす。
淸宗　武藏左衞門有國、
忠房　越中の次郎盛次、
近一　教經卿の歌の心、疾く〳〵言上、
四人　いたされよ。
有國　如何にも只今言上せん。（ト謡への合方になり、）此程よりして能登殿には病と披露し引籠られ、屋島の御所の總大將宗盛卿よりお招きあれど、あの〻もの〻と言ひ延し一向に頓着なく、聞けば病氣は作り事にて、日夜多くの白拍子を集め、酒宴に現をぬかさる〻よし。
盛次　それのみならず宗盛卿が、御愛妾たる朝顏殿に、心があつてか菊王といふ、譜代の童に玉章を持たせて度々言寄るよし、さればこそ月並のお歌も題に構はずして、朝顏の花一時を讀まれしならん、之れが則ち朝顏殿が詠草調ぶるお役目ゆゑ、御馳走顏に認めて送りしものに違ひなし。
有國　我々如き地下人ならず、教經公は御一門斯かる女々しきお心では、所詮軍議を司どる、其大役は

盛次　覺束なし。
殊に大臣家の御愛妾へ、横戀慕を掛けられしは、打捨て置かれぬ身の大罪。
有國　御兩卿には此由を大臣家へ言上あつて、教經公へ嚴しきお咎めこれあるこそ然るべきかと、
兩人　存じまする。（ト淸宗忠房思入あつて、）
淸宗　すりや能登殿には病氣と言立て、引籠らるゝも、誠の事にあらざるか、殊にお歌の題に背き詠進ありしは違勅の罪人。
忠房　一門是れまで教經殿を力と賴み居つたるに、其甲斐もなきみだらな振舞、いよ〳〵以て平家の運命傾く時節と覺えたり。
淸宗　忠房の卿、是非もなき、
兩人　事でござる。（ト兩人じゆつなき思入。）
松枝　御兩卿の御述懷は御尤もにはござりまするが、教經樣は日頃より御酒をお好み遊ばせば、朝顏樣へ御戀慕も、ほんの當座のお戲れでがなござりませう。
〇　それはともあれ式部の官人、最早奉幣終りの時刻、わらは達は此の由を、お局樣へ申し上げん。
松枝　左樣なれば何れも樣、後程お目もじ、

女兩人　いたしませう。（ト管絃になり、松ヶ枝、〇件の文臺を片附け、短冊を持つて奥へはひる。）

清宗　官女方が申せし如く、今朝よりして神樂を奏し君の長久祈念なせば、我が神國の冥助あつて、必ず御加護あらんは必定。

忠房　それに附けても奉幣の祭式終ると聞き及べば、追附け爰へ官人達、奏問の爲參るでござらう。

ト鳴物きつぱりとなり、下手より官人二人白の直垂、烏帽子にて出來り、下手に住ひ、

官一　はッ、兩卿には是れに渡らせたまひしか、今朝よりして神樂を奏し我々一同丹精を抽んで、御祈念をなしたれば、

官二　よしや源氏が寄せ來るとも、神風吹きて追手に隨ひ、矢並を揃へて射掛けなば、寄附くことはよも叶はじ。

官一　必定神の冥助にて、味方の勝利疑ひなし、お心易く、

兩人　思召されよ。

有國　よいや、天照皇大神より、大小の神祇納受あつて、

盛次　神風吹いて源家の勢、吹拂ふといふ託宣ありしか。

清宗　然らば此由宗盛殿へ、

忠房　直ちに執達、

兩人　いたすべし。（ト立たうとする。此時奧にて、）

宗盛　知らせに及ばぬ、それへ參つて承はらん。

有國　あのお聲は、

皆々　宗盛卿。

ト管絃になり、正面より宗盛、大臣烏帽子好みの裝束、跡より朝顏下髮、緋の袴檜扇を持ち、以前の侍女松ヶ枝、○△□何れも官女にて宗盛の太刀を持ち附添ひ出で、二重よき所へ住ひ、

宗盛　委細はあれにて聞きつるが、今朝よりの奉幣祈念、大儀にこそ。

官一　はッ、御懇の上意を蒙り、大慶至極に、

官一
官二　ござりまする。（ト辭儀をなす。）

朝顏　お側に侍るわらはまで、神の託宣ありしよし承はつて、何より嬉しう存じまする。

宗盛　萬一敵が押寄せ來らば、神の託宣ありし如く、追手を受けて防ぎ矢なし、只一戰に追ひ退けん。

清宗　先づそれまでは祭主には、

忠房　猶も祈念を怠らず、

有國　丹精あつて、
皆々　然るべし。
官一　仰せなくとも猶も是れより、御勝利あるやう丹精凝し、
官二　御祈念いたすでござりませう。左樣なれば宗盛卿、
宗盛　大儀なりしぞ。
官一
官二　はツ、お暇仕つりまする。（ト兩人皆々へ一禮なし、下手へはひる。跡宗盛思入あつて。）
宗盛　君御幼稚にましますゆゑ、宗盛大臣の官を穢し、日夜軍慮を廻らせど、播州に於て敗北なし、斯かる邊土の讃岐まで御座を移せし身の甲斐なさ、思へば只の一日も安き心の暇なき、麿が心勞察しくりやれ。
朝顏　ほんに是れまで御寢所へ、お入りあれども御寢ならず、
清宗　三度のお食も君ゆゑに、忘れたまひし御心勞、
忠房　まことに以て此程よりの、大臣がお身こそ傷しく、
有國　數なりませぬ我々まで、左こそと推察、
皆々　仕つりまする。（ト此留り、どんちやんばた〳〵になり、花道より物見の兵士走り出で、）

兵士　はッ、御注進申し上げまする。
有國　なに、注進とは心許なし、
盛次　如何なる仔細か大臣家へ、
近一　疾く〳〵言上、
皆々　いたされよ。
兵士　はッ、唯今物見の見張より總門近くへ矢文を以て、敵の大將判官義經、風雨を冒し當國目指し、海路を出立なせし處、最早其勢阿波の國まで、押渡りしとの知らせにござりまする。
宗盛　すりや義經が阿波の國まで、早や押渡りしとの知らせなるか。
清宗　陸路は遠く隔つれど、
忠房　海路は近き阿波讃岐、
有國　暫く接戰あらざりしが、
盛次　容易ならざる敵軍が、
朝顏　鄰國までも押來れば、
近一　防ぎの手配り、

皆々　肝要ならん。
兵士　猶も樣子を承はり、又々御注進仕つらん、何れも御免。（ト引返してはひる。宗盛思入あつて、）
宗盛　名ある勇士は一の谷にて、過半討死なしたれば、最早殘るは僅の人數、其內賴む武士は、
朝顏　上總の五郎忠光殿、まつた七兵衞景淸殿、
有國　其外宗徒の剛の者、まだ三百餘騎はあるべけれど、
盛次　新手の援兵なき味方、敵兵來らぬ前方に、
淸盛　防ぐ手段を廻らさねば、
忠房　由々しき味方の手遲れならん。
宗盛　唯此上は一門にて、賴みとするは敎經のみ、有國盛次はや參つて、能登殿を召連れ參れ。
有國盛次　はツ、畏まつてござります。（ト兩人顏見合せ、思入あつて花道へはひる。）
宗盛　父入道が在世には、さても時めく平家の一門、都を落ちて間もなきに、又もや源氏攻來らば君を始め奉つり、我々供奉なし西海の、再び波に漂ひて、
朝顏　寄邊渚の捨小舟、波にゆられて又いつか、
松枝　歸る岸さへなく千鳥、

○ 御運傾く西の空、

△ 冥土の鳥も近づきて、

□ まだ如月にほとゝぎす、

清宗 雲の上なる御身をば、

忠房 青海原の果しなく、

宗盛 又もや御船へ移さねば相成らぬか。(ト是れより床の淨瑠璃になり)

〽案じ煩ふ宗盛卿、打萎れてぞおはします。(ト此時花道揚幕の内にて)

有國 いざ敎經公、

有國
盛次 お立ちなされい。

〽程もあらせず能登守、敎經卿は日頃より、好める酒に酩酊なし、足もしどろに正體なきを有國盛次兩人が、双の手を取り立出れば、

ト是れへ管絃を冠せ、花道より敎經烏帽子好みの直垂、附太刀酒に醉ひし思入にて、是れを以前の有國盛次引立て出來り、花道よき所へ留る、宗盛見て、

おゝ能登守、出仕召されしか。(ト敎經思入あつて)

教經　いや、これは〳〵宗盛大臣、是れにおはせしか、某斯く酩酊ないたせば、御酒下されうとなら、眞平御容赦下されい。(ト他愛なきこなし、朝顔思入あつて、)

朝顔　是れはしたり教經樣、我が君にはお待兼ね、少しも早く此のお席へ。

教經　すりや、御酒下されではござらぬかな。

有國　何をたはけな。

有國
盛次　お立ちなされい。(ト引立てる。教經兩人を見て、)

教經　いや是れは怪しからぬ、怖いお顏ぢやな。

〽足もひよろ〳〵兩人が、肩にやう〳〵助けられ、御前間近く教經は、禮儀を亂す膝胡坐、兩手を突けば宗盛卿見やりたまひ、

ト此内教經よろしくあつて二重へ上り、下手よき所へ住ふ、宗盛思入あつて、

宗盛　教經が體を見るに、酒にいたく熟醉なし、前後忘却なすのみか、是れまでとても病氣と披露し、御所へ參内召されぬが、聞くと見るとは大きな相違、ても健かな、(ト思入あつて氣を替へ、)いや、出仕大儀なるぞ。

〽上意あれども素知らぬ顏、有國盛次詰寄つて、

有國　あいや能登殿、いやさ教經殿、當時屋島の御所に於て、軍議を預かる御身を以て、斯くはしたなきこの大醉。

盛次　是れが地下の者なら知らず、御一門たる其許なるに、宗盛卿のお詞も素知らぬ顔で居らるゝは、近頃以て無禮なり。

清宗　如何にも、爰は屋島の假御所、君の玉座に咫尺の御場所、

忠房　天下の政事を司る、大臣が出仕のお席なるに、

近一　傍若無人の其の失禮、

近二　宗盛卿の、

皆々　御前でござるぞ。（ト是れにて教經思入あって）

教經　いや、是れは近頃以て、珍らしき事を聞くものかな、此教經性得の酒好きにて、英雄酒を好むの譬、一桝呑めば樊噲が勇を思ひ、二桝呑めば張良が謀を帷幕の内に廻らし、呑めば呑む程智勇を増し君のお役に立つ某、聞かずや各、故入道は酒は愚好色比類なき御振舞、佛御前を愛し祇王祇女をお側に引附け、日夜の御遊興、それでさへ終に太政官の極官に至りたまふ、ましてや子孫の此教經、酒を頂戴いたしたとて、君へ忠節忘れねば誰に遠慮もなき事なり、武藏越中兩人

とて、今日こそ怖い顔をいたすが、やはり大の好色家、大方酒もまゐるであらう、さて〱不粋な者共ぢやな。

宗盛　やあ過言なり能登守、そちを出仕なさしめしも、源氏の勢が阿波の國まで最早押寄せ來りしを、物見の兵が注進ゆゑ、君の御座所も他へ移さんと心を碎く此宗盛、それに何ぞや大醉なし、愚にも附かざる戲れ言、近頃以て無禮なり、それともまこと本性を亂さぬと申すなら、敵を未然に防ぐべき計策ありや、なゝ何と。

〽酒が言はすか大言に、宗盛卿怒らせたまひ、

〽詰寄りたまへば能登守、威儀を正して眞顔になり、

教經　御大將には左程まで、源氏の兵に恐れを抱き、是れを未然に防がんと、思召すは大きな僻事。

宗盛　なに、麿が詞を僻事とは。

教經　さればない宗盛卿、この教經が計略は、とさ、四角張つては申せども、實は此上敵を避くべき妙計更にござらねば、昔より言傳ふる則ち三略の奧儀、逃ぐるの外はござりませぬ。

宗盛　何と。（ト誂への合方になり、）

教經　寄手の大將義經は、そも牛若と言ひし頃鞍馬の奧にて僧正坊とか申す天狗に兵法學び、五條の橋

の月夜にも、武藏坊が大長刀にも、橋の欄干を飛び歩み勝を取つたと申すこと、左すれば彼に飛行自在の術を施すこともあらんなれば、翼のあればいざ知らず、波濤隔てし阿波の國より一足飛びには參られまじ。思ふに源氏が寄來るには、まだ四五日は掛るべし、然らば其内我が君はじめ御一門方、御座船にて海原廣き波の上へ、乘出したまへば大丈夫、跡に一人殘らねば則ち御所は蛻の殼、幾ら源氏が強くとも相手のなき戰は出來まじ。それぢやに依つて逃ぐるが專一、此教經が祕術の計策、よも御批判はござるまいがな。

ト始終醉ひたる思ひ入にていふ、皆々呆れし思ひ入にて、

有國 やあ默して居ればよいかと思ひ、子供欺しの兵法沙汰、よし又それが上策にせよ、數艘の船を大海へ乘出したる其上にて、再び陸へ上られずば、其時こそは如何めさるゝ。

教經 はて、それは知れた事、陸地に敵兵充滿なせば、御船の内を御所となし、風に任せて出沒自在、海は陸より四方とも皆水なれば安泰なり。

盛次 然らば問はんが、兵糧盡き、味方必死のことあらば、如何なして救ひたまふや。

教經 いや、御念の入つた其お尋ね、貯へ置きし兵糧が盡きれば海には鱗族多し、それを漁して食となせば、それらは入らぬ心配なり。

清宗　して〻御船の、

忠房　落着く先きは、

教經　それぞ鄰國漢土にして、幸ひなるは小松の大臣が、冥助を祈る其爲に、三千兩の黄金を贈りし因みを以て救ひを乞はん、それも先きにて不承知なら、龍宮城へ押寄せて、勇威を示し降參させ、君を秦山の安きに置く、手段はまだ〳〵澤山ござる。何と是れらは太公望も、及ばぬ程の妙計でござらうがな。

〽口から出任せ教經が、傍若無人の大言に、暫し呆れて人々は、顏見合するばかりなり、宗盛肯りと怒りたまひ、（ト宗盛立腹の思入にて）

宗盛　酒に性根を亂せし其方申すも無益なことながら、心あらばよつく聞け、二十餘年の平家の榮えも運命傾く時來り、不意に源氏に押寄せられ、破竹の如き勢ひに遂に防戰なし難く、播州須磨は山海の要害よき地に遷居なせしも、軍慮に賢しき義經が、鵯越の逆落し、前後の兵に敵し難く名ある勇士は討死なし、

〽是非なく再び讃州の、此屋島へ移れども、

僅か四國の放れ島、これとても安意ならず、今にもあれ源氏の兵が押寄せ來らば西海へ、遷居な

さずばなるまじと、心ならねば一夜たりとも、枕を安く寢しことなく、好める酒も呑みしことなし、こは我のみか一門皆、平家の浮沈を苦慮なして、寢食を忘れをるに、

〽其身軍議を司どる、重き役目にありながら、

大醉なして性根を亂し小兒に等しき戲れごと、再び申さば一門とて、其儘にはいたさぬぞ。

〽常に柔和の宗盛も、餘りの事に怒りを發し、詞も荒く立ちたまへば、始終を聞き居る教經は、あらうるさしと其儘に、肘を枕に高鼾、見るに忍びず聲あらゝげ、

ト此内宗盛思ひ入にていふ、教經生醉のこなしにて、うるさいといふ思ひ入にてばつたりと肱を枕に寐る、宗盛これを見てきつとなり、

やあ、無禮過言も酒ゆゑと、慈悲を以て許しおくに、我が面前も憚からず醉ひ臥すとは憎き教經、いで此上は宗盛が、手に掛け性根を附けてくれん。

〽性根を附けんと御佩刀に、手を掛けたまふ御大將、朝顔見るより縋り留め、

ト宗盛太刀を取つて柄に手を掛けるを、朝顏あわてゝ留め、

朝顔　まあ〳〵お待ち遊ばしませ、何を申すも此樣に御酒に他愛もない能登樣、御成敗は後の事、先づ先づお待ち遊ばされませう。（ト是れにて宗盛思ひ入あつて、）

宗盛　朝顔が留めざれば一門への見せしめに、麿が手に掛け軍神へ血祭りにせんと思へども、外ならぬそちが詞。

有國　すりや、此儘に無禮を咎めず、

盛次　捨て置きたまふ御所存なるか。

宗盛　憎き能登が振舞なれど、一門ゆゑに今一度、

朝顔　はゝ、冥加に餘る君のお情、

清宗　先づ大臣には、

忠房　奧殿へ。

宗盛　思へば憎き、（ト立掛るを隔てゝ、）

朝顔　先づお入り、

皆々　遊ばされませう。

〽留めるを機に宗盛卿、奧殿さして、

ト宗盛教經へ思ひ入あつて、朝顔有國盛次清宗忠房官女四人兵士四人附添ひ、皆々奥へはひる、跡教經矢張り二重に寐て居る。

〽如月の空は晴れても浦風の、板間を洩る〻假の御所、縁端近く教經が熟醉なして高鼾、樣子如何と窺ひ寄る、二人の兵士左右より振翳したる氷の刃、切つて掛れば教經は現ながらも刎起きて、空を打たする早速の早業、又もやむんずと引組むを體を躱して潛り拔け、突きのけ蹴のけずでんどう、醉に似合はぬ働きは、目覺しくも亦健氣なり。

ト此文句の內薄き風の音になり、上下より鎧下の兵士窺ひ出で、思入あつて教經へ切つて掛る、教經刎起きながら兩人を扇にてあしらひ、ツケなしの立廻り、文句いつぱいになつて、トヾ左右へ投げ退けひよろ〱とする、又一人切つて掛るを扇にてしやんと留め、

教經　醉覺めにひんやりと、下戸の知らざる氷の刃、こりやよくお心が、（ト其手を捻ぢ上げるを道具替りの知らせ、）附いたことぢやな。

ト生醉の思入、此見得よろしく誂への合方にて道具廻る。

（朝顏寢所の場）――本舞臺四間通し中足の二重、向う畫襖、左右腰高畫絹張りの障子、二重眞中踏段同じく床下の蹴下み、上下誂への柴垣諸所に紅白梅の立木、日覆より同じく釣枝、總て朝顏寢所の體、二重一面に御簾をおろしあり、此見得よろしく、かすめて風の音、琴の合方にて道具留る、と時

の鐘誂への獨吟になる。

ウタ〽玉垂の御簾の隙もる春風に、薫り床しき梅が香を、衣に移して空炷を、忍ぶ伏籠の松重ね、
來つゝ馴れにし鶯の、

ト此文句よき程に御簾を捲き揚げる、此内に以前の朝顔文臺を控へ短冊の歌を讀んで居る、此傍に誂への銀押低き二枚折の屏風、見物に中を見せぬやうに立てゝあること。よろしく思入あつて、

朝顔 思へば我が君宗盛卿、都を落ちさせたまひしより、今に合戰止む時なく物憂き月日を送りしが、又もや最前阿波の國まで既に敵勢押寄せしと、物見の兵の御注進、それに附けても御一門にて杖柱とも思召す教經樣があのやうに、御酒に性根を亂したまひ、それのみならずわらはが許へ度々艶書を送られしが、今松ケ枝の話しには、お歌合せに詠進の其歌さへも朝顔の一首を送りたまふと聞く、ても心得ぬ御心根、幸ひ爰にその短册、どりや拜見して見ようわいなあ。

〽人來と告ぐる一聲に、誰が音信と遠山の、（ト此内よろしく短册を取上げ見て、）

「朝顔の花一時も千歳ふる、」（ト此時奥にて、）

教經「松にかはらぬ心にやある。」

朝顔 おゝお聲よ。

教經　誰でもござらぬ、教經ぢや。

朝顏　えゝ。

〽殘んの雪もいつか解け、小川の流れ水溫み、野邊に萌出し早蕨の、拳に引くや八重霞、

ト此文句の内奧より以前の教經、やはり酒に醉ひたる思入にて出來り、ちよつと朝顏と入替り、袖を取つてよろしく思入あつて、

教經　酩酊いたせし能登守、斯く申したら酒興かと思召すかは知らざれど、ぞつこん惚れし此教經、思へば情ない、こなたはなあ。（ト謎への合方になり）忘れもいたさぬ、須磨の浦の御所に奉仕いたせし頃、小松曳の御遊ありしが、此教經も一門ゆゑお席に列なりそこ許を初めて見しが其折に、如何なる事か戀風が身にしみぐ\と慕はしく、大臣が深く御寵愛ある、御身ゆゑ及ばぬとは思へど何うも忘られず、又某も一旦斯うと思ひを掛けた上からは、いツかな引かぬ我等の氣質、それ故にこそ月並のお歌の御題を餘所になし、御身の名をば常磐の松に祝して送りしそれなる一首、何と憎うはござるまいがな。（トよろしくこなし、朝顏袖を振拂ひ、）

朝顏　足らはぬわらはをそれ程までに、思召し下さるは冥加に餘ることながら、勿體なくも宗盛卿の、お寢間の端を穢せし此身、どうまアあなたに御返事が。

教經　いや堅い〳〵、宗盛大臣がお側をば片時お放しなさらぬ御身を、元より承知で惚れたる某、默止
　いつても朝顔どの、是非聞いて貰はにやならぬ。（ト立たうとするを留め、）

朝顔　ても情ない無體の戀慕、こりやもういつぞ。

教經　いや、逃げようとて逃がさうぞ。

〽空は晴れても晴れやらぬ、昨夜の雨の潦、水に戯る蝶ならで追ひつ追はれつ、追はれつ追
ひつ、〽風にみだるゝ岸の青柳。

ト此文句の内教經朝顔を追廻し立廻りあつて、トゞ朝顔有合ふ二枚折の屏風を取つて教經を隔てきつ
と留める、是れにて獨吟いつぱいに切れ、トゞ教經は屏風に書きし歌をきつと見て、

今まで心附ざりしが、我を隔てし此の屏風へ、認めありし此の一首は。

朝顔　わらはがあなたへ御返事替り。

教經　何と。

朝顔　「萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草、」

教經　「いづれか秋に逢はではつべき。」まことに是れぞ祇王が歌。

朝顔　「いづれか秋に逢はではつべき。」（ト朝顔思ひ入あつて懐劍を出し、手早く喉へ突立る。教經びつくりなし、）

教經　やゝ、こりや何ゆゑに自殺せしぞ。

朝顏　あなたのお手に掛らうより、いつそ我が手に生害なし、君へ忠義を立てたい心。

教經　すりや朝顏には、我が心中を、早くも察して生害せしか。

朝顏　知らいで何といたしませう。（ト誂へ竹笛入りの合方になり、）そも我が君には御父君入道殿に似させたまひ、わらはの先きに熊野といふ白拍子を御寵愛、既に祇王が寵衰へ佛が替つて大相國のお枕穢せし例さへ、今目前のわらはが身の上、源氏の勢が追々に此御所近く攻寄するに附けても若しや我が君が、わらはの愛に引かされたまひ、御出陣の其折に御未練などの事あつては、味方の兵の物笑ひと思召してのあなたの戀慕、無理難題もわらはが一命取らんと思ふ爲めばかり、それを悟つてそれなる屏風へ、祇王が詠ぜし一首を認め、いづれか秋の果しなき冥土へ急ぐ覺悟の自殺、只此上は教經樣、願ふは君のお力になつて源氏を討滅し、再び平家の御代となし、又もや時めく榮えをば、此朝顏へ草葉の蔭から、お見せなされて下さりませ。

ト苦痛の思入にていふ、教經是れを聞き、愁ひのこなしあつて、

教經　ほゝお、男子も及ばぬ御身の忠死、かゝる節婦と知らずして心にもなき横戀慕、難題言ひ掛け手に掛けんと、一途に思ひ込んだるも、生け置く時は宗盛卿愛に溺れて御卑怯なる御振舞もあらん

かと、か丶るあざとき巧み事、今更そちに面目なし。

朝顔　いえ／＼死ぬるは元より覺悟、とはいへ末期に今一度我が君樣の御顔を、拜して死にたうござりまする。

教經　御寵愛さへ他に越えし御身が心左もあらん、なれども傾く平家の運命、慕ふ君にもお隱し冥府で。

朝顔　すりや我が君も。

教經　早や御運の末と思ふなり。

朝顔　さう聞く上は少しも早う、冥土へ急ぎてお待ち申さん。能登樣、早う御介錯を。

教經　いふにや及ぶ、いでや介錯。（ト教經太刀を拔き朝顔の後へ廻る、朝顔合掌なし、）

朝顔　南無阿彌陀佛。

教經　思へば不便な、（ト涙を拭ふを道具替りの知らせ、）最期ぢやなあ。

ト朝顔落入る。教經愁ひの思入、此見得よろしく誂への合方にて道具廻る。

（元の假御所の場）――本舞臺元の屋島の御所の道具に戻る、爰に以前の宗盛眞中に住ひ、有國盛次清宗景房此外兵士四人左右へ居並び、此見得管絃へ遠寄せをあしらひし鳴物にて道具留る。

宗盛　熟醉なせし教經が心の底意探り見んと、兵二人差向けしが未だ何等の沙汰なきは、それと悟つて退出せしか、有國盛次見て參れ。

有國盛次　はツ。（ト立たうとする、此時どんちやんばた〳〵になり、花道より物見の兵士一人走り出來り）

兵士　はツ、御注進申し上げまする。

宗盛　又もや注進、心許なし。

有國　如何なる仔細か。

皆々　言上せられよ。

兵士　はツ、先刻申し上げし如く、源氏の軍勢阿波の國を出立せしが、遙の沖に霞の如く白旗を飜したる兵船一艘、陸地を指して參るよし、見張りの兵より至急の知らせ。

宗盛　やゝ、すりや先刻の知らせに違はず、

清宗　寄手の兵船沖の方へ、

忠房　はや押寄せしと覺えたり。（ト皆々きつとなる。）

兵士　又もや御注進仕らん。何れも御免。（ト引返してはひる。宗盛思入あつて、）

宗盛　勝誇つたる源氏の勢、此屋島へ押寄せ參らば、それぞ由々しき一大事、それに附けても一門が頼

みに思ひし教經こそ、酒に性根を奪はれて物の役に立たざれば、餘人を以て將となし、防禦の手配り申し附けん。

清宗　如何にも能州に勝るとも、劣らぬ勇士は一門たる、

忠房　新中納言知盛殿か、或ひに修理大夫經盛殿。

有國　御兩卿の仰せの如く、知盛卿こそまことの英雄。

盛次　然らば我々御宿所へ馳附け、君の仰せをお傳へ申さん。

宗盛　いそふれ兩人。

有國 盛次　はツ。（ト立ち掛る、此時下手にて、）

教經　あいや兩人、暫く待たれよ。

宗盛　やゝ、あのお聲は能登守。

有國　又もや邪魔を、

皆々　せらるゝか。

トつッかけの樣な誂への鳴物になり、下手より以前の教經、揉烏帽子甲冑附太刀武者草鞋好みのこしらへにて出來り、よろしく下手に住ひ、

教經　知盛卿を召寄せらるゝまでもなし、此教經が必死を極め、敵兵直ちに防ぐべし。
宗盛　まことに酒に醉ひ伏せし、體に替りし天晴武者振。
清宗　さては御邊の熟醉は、
忠房　人を欺く、計略、
皆々　なりしか。
教經　如何にも、酒に他愛なき體をなせしも、一つの計策。
宗盛　何と。（ト大小の合方になり、教經こなしあつて、）
教經　我が一門は申すに及ばず、平家に屬する武士は一の谷の合戰に、敗走なせしに恐れを抱き、敵勢來らば我れ先きに進んで手柄をなさんとする、勇猛の者一人もなし、恐れ多くは候へども、大臣を始め一門方何れも詩歌管絃に耽り、弓矢取つては小兒に等しく、進むを恐れ退くを是とす。彼の富士川にて水鳥の羽音に恐怖なせしが如く、すは敵兵の上陸なせしと聞き及ばゝ、必ず狼狽周章なし、一時に敗走なさんこと、鏡に掛けて見るが如し、されば教經病に假託け日夜酒宴に現をぬかし、物に動ぜぬ體をなせしも、則ち味方の勇氣を勵まし人の心を引立てんと思ふが故の計略なり、それと言ねば醉狂人と、大臣を始め各に辱めを受けたりしも、是れ皆君の御爲なり、心

にもなき是れまでの、無禮過言は宗盛卿、御宥免なし下さりませう。

トよろしく思入あつていふ、此時有國盛次顔見合せ、後悔のこなし、宗盛も感心せし思入にて、

宗盛　さては汝が酒ゆゑに、前後忘却なしたるも、味方の勇を勵さんとの計略にてありつるか、さもあらん、さもありなん。それと察して兵に、内意を含め最前も、そちが底意を試せしなり。

教經　すりや大臣にも某が、心中狹くよりお見拔きありしか、斯くとは知らず最前も、二人の兵を懲らせし失禮、眞平御免下さりませう。（ト此内有國盛次思入あつて）

有國 盛次　我が君御免。（ト刀の柄へ手を掛ける、教經留め）

教經　こりや、何ゆゑに兩人は、

清宗　自殺なさんと、

忠房　いたせしぞ。

有國　過つたり〱、有國盛次兩人こそ、

盛次　切腹なして此身のお詫びいたさねば、

有國 盛次　相成りませぬ。

教經　何と。（ト合方きつぱりとなり）

有國　いつぞや播州一の谷の合戰の折、教經卿に我が先陣の拔がけされ、一番首を得られしゆゑ、其無念遣る方なく、何卒して此の遺恨晴らさんものと此の年月。

盛次　貴卿の越度を見附けんと、思ふ折柄此の屋島へ移りて間もなく病氣と披露し、酒に他愛も內證は君の寵愛淺からぬ朝顏殿に橫戀慕、是れぞ遺恨を晴らす時と、

有國　君へ讒言なしたりしが、今御本心を承はり、初めて夢の覺めたる如く、

盛次　遺恨も最早これまでと、後悔いたせば教經卿へ、申譯に一命捨て、

有國　お詫びをなさんと、

有國 盛次　我々兩人。（ト腹へ突立てようとするを留め、）

教經　やあ、血迷ひしか有國、盛次。

有國 盛次　なに、血迷ひしと仰せあるは、

教經　一の谷の拔懸けに、遺恨を含むは武士の意地、それに何ぞや私の宿意を以て一命を、捨つるは不忠にあらざるか。

有國 盛次　やッ

教經　死すべき命をながらへて、功名手柄をいたすべし。

有國　はゝ、寛仁大度の教經卿。

盛次　如何にも切腹止まるべし。

宗盛　して／＼教經、此上の勝利を得るの計策ありや。

教經　さゝ、其の計策こそ外ならず、豫て用意の御座船に君の御座を移しまゐらせ、海上へ出づるの外はなし。

宗盛　それぞかねて同意なるが、智勇兼備の義經が其鋒先を如何して、教經防ぐ心得なるぞ。

教經　それぞ覺えの弓勢にて。

宗盛　何と。（ト大小の合方になり、）

教經　義經如何なる勇ありとも、彼れは必ず上陸なし、濱手の方に陣を取るべし、左すれば我は山手に屯し、追手を受けて矢を放たん、敵は防ぎ矢なすとても、逆風なれば味方に屆かず。

清宗　して又目指す敵兵は。

教經　それぞ葉武者に目を掛けず、目指すは大將義經なれば、我が弓勢にて只一矢に、彼れを射落す所存なり。

忠房　して／＼後詰は。

教經　新中納言知盛殿。續くは上總の忠光に惡七兵衛景清あれば、瞬く内に味方の勝利、お心安く思召されよ。（ト教經思入あつていふ。）

宗盛　ほゝお、勇まし〲、此上は君を始め、三種の寶に供奉なして、いざ御座船へ乗移らん。

ト立ち上るを留め。

教經　あいや、大臣暫く、御乗船の前方に御覧に入るゝ一品あり。

宗盛　なに、麿に見する一品とは。

教經　やあ〲松ヶ枝、其品是れへ。

松枝　はあゝ。

ト下手より以前の松ヶ枝白の片袖へ包みし朝顔の切首を持つて出來り、二重よき所へ直し、思入あつて、

仰せ附けられし其一品、持參いたしてござりまする。（ト宗盛件の包みを見て、）

宗盛　見れば、白の小袖に包みしは、まさしく首級。

教經　是れぞ君の御愛妾、朝顔殿の則ち首級。（ト是れにて宗盛見てびつくりなし、）

宗盛　やゝゝゝ、まことに是れは朝顔が、でも忌はしき此の姿、何故あつて首級にせるぞ。

教經　御不審はさる事ながら、かねて昔には朝顔が御寵愛さへ他に越えて、御愛み深ければ、御出陣の折に隔み、御傍に侍りなば必ずや御不便殘り御卑怯の振舞あつては、あれ見よ平家の大將たる宗盛がめゝしくも、女に心惹かされて歎きたまふと言はれんこそ、返すぐ〳〵も無念なれば、教經わざと戀慕に事寄せ、彼れが命を申し受けしも、跡にお心殘らぬやう取計らはんが其爲なり。

松枝　朝顔さまも能登樣の、其のお心をお察しなされ、屏風に殘す祇王が歌、それは此世の形見にて、斷ずる健氣な御生害遊ばしましてござりまする。

宗盛　すりや朝顔は、自殺せしとか。

教經　盛り短き朝顔の、花は脆くも、天晴貞節。

有國　松によそへし詠み歌も。

盛次　千歳にあらで忽ちに。

清宗　其名傳ふる、

忠房　貞女の鑑。

教經　御名殘りは盡きざれど、時刻移らば味方の苦戰。

宗盛　然らば是れより乘船なさん。とはいへ不便な、（ト首級へ寄らうとするを、隔てるを木の頭。）

教經　御乘船遊ばされませう。

ト皆々引張りの見得よろしく、誂への船唄管絃をあしらひし薄き波の音にて、

幕

ト跡道具蔭廻しにて、直に引返す。

（屋島浦磯端の場）＝＝本舞臺一面の平舞臺、向う正面二段に銀張りの浪手摺、此上同じく沖合の遠見、上の方松の大樹、之れに續いて笹龍膽の紋附きし白地の幕を張り、舞臺諸所に磯馴の松、日覆より同じく釣枝、上下岩組の張物にて見切り、總て屋島浦磯端の體、爰に田島三郎達附大小好みの旅裝、是れを一、二、三、四、五、六の陣笠半具足の軍兵六人にて取卷き居る。此見得よろしく、波の音かすめて遠寄せにて幕明く。

三郎　こりや、何れもには、何となされます。

一　やあ、何とするとは横道至極。

二　最前よりうろ／＼と、

三　陣所を窺ふ怪しき奴。

四　正しく敵の間者ならん。
五　姓名名乘つて尋常に。
六　此場に於て、
六人　勝負なせ。(ト立ちかゝるを留めて、)
三郎　まあ〳〵お待ち下されませ。敵の間者とお疑ひは御尤もにはござりますが、決してそんな胡亂な者ではござりませぬ、私事は源氏方の此御陣所にお出でなさる、佐藤樣御兄弟にお目に掛りに遙遙と道を隔てし羽州より、參つたものでござりまする。
一　佐藤樣なら我々が、お組頭の方なれど、
二　詞は國の手形とやら、聞けば鼻へもかゝらぬ詞、
三　どうしても羽州から、出て來た者とは思はれぬ。
四　お組頭へ逢ひたいなどゝは、何とも以て不審千萬。
五　それとも達て通りたくば、往來切手の鑑札あるか。
六　無ければいよ〳〵平家の間者、鑑札あらば、
六人　見せられよ。

三郎　さゝ、其の鑑札も、敵と目指す平家の一門、此の屋島へ落ちましたゆゑ、道々は何處も彼處も源氏方通行さへも自由と聞き、つい持つて參りませぬが、達て胡亂と思召さば、此由どうぞ佐藤樣へお取次ぎ下さりませ。

一　やあ、鑑札さへも所持せぬ奴。

二　何で取次いたさうや。

三郎　すりやどうあつても各々には、

三　いでわれ〳〵が搦め取り、

四　御大將の陣所へ引き行き、

五　御恩賞に、

六人　與らん。

三郎　そりや情ない、是れ程に申しましても。

六人　覺悟なせ。（ト掛るを留めて、）

三郎　是非に及ばぬ。

ト六人一時に掛るを、三郎左右へ突き退け、無手の立廻りあつて、トヾよき時分上手幕張りの内にて、

忠信　やあ者共、聊爾いたすな。
一　や、あのお聲は、
六人　忠信樣。
　　　ト跳への合方になり、上手幕張りの内より、忠信好みの鎧附太刀、武者草鞋、兜を背負ひ、軍扇を持ち出來る、三郎見て、
三郎　や、まことにあなたは忠信樣。
忠信　珍らしや田島三郎、よくぞ尋ね參りしぞ。（ト是れにて軍兵びつくりなし。）
一　敵の間者と思ひしゆゑ、
二　われ〳〵手向ひいたせしが、
三　すりや此者の言ひし如く、
四　忠信樣の御在所より、
五　お出でになりしお使者なりしか。
六　さうとは知らぬ今の失禮、眞平御免、
六人　下さりませう。

三郎　いや、私とても今の失禮、御免なされて下さりませ。
忠信　何は然れ、其方共は、猶も見張りを怠るまじ。
一　左樣なれば濱手の方を、
忠信　見張りいたせ。
六人　はッ〳〵。〈ト六人は辭儀をなし下手へはひる。〉
忠信　して〳〵遙々國許より此屋島まで參りしは、何か火急の用事ならんが、何は然れそちも堅固で、目出度いな。〈ト三郎思ひ入あつて、〉
三郎　先づ以てあなた樣にも、斯くお健かな體を拜し、此のやうな悅ばしいことはござりませぬ、それに附てお國表より、ちと火急な御用あつて、夜を日についで御當所へ、お使者に參つてござります。
忠信　火急な用とは心許なし、して〳〵用事は何事なるぞ。
三郎　其御用は外ならず、お國表の御母公樣が、御大病ゆゑお知らせ申しに、遙々參つてござりまする。
忠信　なに、母上が御大病とな。〈トびつくり思ひ入、合方になり、〉
三郎　常にお達者な御母公樣、御兄弟が御出陣なされし當座は何事なく、まめでお暮しなされしが、何

を申すも果てから果て、四百里足らず離れて居れば、人の噂も取り〴〵にて、或ひは源氏が戰に勝ち、平家を讃岐へ追ひ遣つたの、又は平家が勝利にて源氏の勢は皆討死、殘るは僅か二十か三十多くの人が戰死したと、見て來たやうな話しをばお聞きなされて御母公様が、扨は兄も弟も定めし討死したであらうと、虚につけ眞につけ、其のお歎きの數重なり、それが元にて御大病、お切ない其中でも、どうぞ息ある其内に悴が安否を聞きたいと、お案じなさるいぢらしさ、それゆゑ御様子を私が見屆けて參りませうと、波濤を越えてやう〴〵に、お使者を勤めに參りました。

ト思入あつて言ふ。忠信愁ひのこなしにて、

忠信　すりやそれ程に母上には、兄弟が身をお案じあつて、それが元にて御大病を、お煩ひなされしとか。

三郎　常から御孝心なお二人様、申し上げたら御心配を、一倍お增させ申すやうな事であらうと存じましたが、何を申すも御老體、お氣は張つてお出でなされど、日にお疲れが增すばかり、如何にも危篤な御容體にござりまする。

忠信　それでは最早御危篤の、御容體にてましますか。（ト愁ひの思入、三郎氣を替へ）

三郎　いや、とんと忘れて居りましたが、繼信様は此處にお見えなされませぬが、矢張りお替りはござ

りませぬか。

忠信　おゝ、兄繼信も息災なり、幸ひ陣所にお出であれば、此の趣きを申し傳へん。

ト立たうとする。此時上手にて、

繼信　あいや、知らせに及ばぬ。聞いたく。

三郎　あゝいふお聲は、繼信樣。

ト誂への合方になり、上手幕張りの内より、繼信好みの烏帽子鎧附太刀武者草鞋にて出で來り、上手床几に掛り、

繼信　絶えて久しき田島三郎、よくぞ堅固で暮せしぞ。

忠信　兄上には三郎が、態々使者に參りたる、母の病氣の逐一を、幕の陰にてお聞きありしか

ト繼信思入あつて、

繼信　如何にも具に聞き及んだが、人は老少不定などゝ、申せど古稀を越したる母上、我が子に先立ちたまふのは是れ則ち順道なり、まして未だ生死さへ知れざる母の病氣をば、波濤隔てゝ當地まで知らせに參るは大きな白癡、三郎そちは繼信が申し置きたる家訓をば、忘却な致したな。

三郎　何とおつしやります。（ト合方きつばりとなり）

繼信　そも我々兄弟は、判官殿の催促に應じ、本國を出陣なせしからは、生きて再び故鄕へ歸るまじとはかねての覺悟、それ故出立なす折に如何なる事があるにせよ、戰場へは必ずとも音信すなと申し附けしに、我が詞を用ゐずして使者に參りし不屆き奴、家訓を忘却なせしかと、申し聞けたが誤りか。

三郎　さあ、それは。

繼信　えゝ、こゝな未練ものめが。(トきつといふ。忠信思入あつて、)

忠信　兄上のお詞御尤もにはござれども、世に車の兩輪に例へし忠孝全からざれば、まことの孝にあらずといふ。そりやはや其の御爲に命を捨つる戰場なりとて、母の病氣を遙々と知せに參りし三郎をば、未練者とは餘りの御無體、せめては大儀とお詞をたまはりしとて君に對し、不忠にも相成るまじ。母が病氣を案じるは子たるの道にて則ち孝なり。それを未練とお叱りあるは、こりやちと兄上にも、似合しからぬお詞かと、此の忠信は存じまする。(ト繼信思入あつて、)

繼信　すりや其方が言はいでも、忠孝二つの道理位は、よく存じて罷りあるが、我のみならず味方の勇士は、何れも本國には妻子もあらん。又父母もあらんが、それらの愛を忘れざれば、何ぞ一命を輕んじて鎬を削る戰場へ、出陣が出來ようぞ。今母上の御病氣を知らせてそちが參りしは、取り

も直さず兄弟が、勇氣をくぢく媒介なり。

忠信　なに、勇氣をくぢく、

忠信 三郎　媒介とは。（ト合方きつぱりとなり。）

繼信　我が父庄司殿、源氏に深き因みあるを以て、亡き後までもすは源家に義兵を擧ぐることあらば、莊園をも我が寶をも抛ちて馳せ參じ、お味方仕れと今際の遺言相守り、此度味方に屬せしなり、是れと申すも高名手柄に後の世までも美名を殘し、且つは母や妻子のもの、兄弟若しも討死なし相果つるとも、後々に至りて富貴たらん事を心掛くるが武士の常、殊には當時奥州は、平穩にして領土を爭ふ野心の者もなしと聞く。秀衡殿といふ後見さへあれば氣遣ふこと絕てなし。よし又母が病死なすとも、是れぞ命數盡くる所ぢや。斯く女々しき事を告げ知らす使者ありとて、他人が聞きなば物笑ひになるべきぞ、爰の道理を聞き分けて、疾く〳〵此場を立歸れ。

（ト思入あつてきつといふ、三郎情ないといふこなしにて、）

三郎　繼信樣の其のお詞お聞き申せば是非ない事ゆゑ、立歸りもいたしませうが、お國表を出立の時にも常のあなたの御氣質、參らばきつと未練な奴と、お叱りがございませうから、是れはお止めになされませと幾度かお諫め申せど、奥樣や坊さま方が、何でも行けと日々のおせがみ、是非なく

國許を出立なし、やう〳〵お目に掛りしに、御書狀さへも下されず、御不興受けて悄々と又立歸る三郎が、心の內を忠信樣、御推量なされて下さりませ。

忠信　短氣なる兄が氣質、定めてそちも本意なからうが、兄弟二人息災なるを土產となして立歸り、軈て目出度く勝利の後凱陣なすを待つて居よ。それに附けても留守中は、家內の守護を賴むぞよ。

三郎　それはお案じなされまするな、然し此上お二人樣へ、まだ〳〵申し上げたき事が、澤山ござりまするが、長居いたさば却て御不興、左樣なれば繼信樣忠信樣、御機嫌よろしう。

ト愁ひのこなしにて辭儀をなす。

繼信　すりや三郎には我が詞を、用ゐて最早立歸るか。

三郎　歸りたうはござりませぬが、長居をいたしましたなら、大きなお目にてお叱りを又受けませうかと存じまして。(トじゆつなき思ひ入。繼信も思ひ入あつて、)

繼信　戰は味方の十分勝利、軈て目出度く歸國なし、再び對面いたすであらうぞ。

忠信　返す〳〵も母上を、大切に看護いたせよ。

三郎　畏りましてござりまする。(ト下手へ來り、兩人の顏を見て、)どりや、お暇をいたしませうか。

ト辭儀をなし、立つて花道の附際へ行く、忠信呼び留め、

忠信　こりや、待て〱。

三郎　はッ、何ぞ御用にござりまするか。

忠信　事に紛れて問はざりしが、鶴若龜若兩人とも替りはないか。

三郎　へい、お坊樣でござりまするか、へい〱お替りはござりませぬ。

忠信　行け〱。

三郎　はッ。（ト立ち兼ねる思入、繼信始終顏を背け、愁ひを隱す思入、ト〻三郎思ひ切つて、）左樣なれば隨分御無事で。どりや、お暇をいたしませうか。

ト誂への合方になり、三郎心の殘る思入あつて花道へはひる、繼信跡を見送り、ほろりと思入あつて、

繼信　母の病氣を遙々と知らせに參りし三郎を態と情なく歸せしが、嘸や彼も情なしと、我れを恨みてまゐりしならん。

忠信　すりや兄上のお心も、此の忠信と同じにて、歎きを餘所に歸せしも、

繼信　弓矢取る身の、（ト軍扇を額へ當てるを道具替りの知らせ、）習ひなるぞ。

ト繼信忠信愁ひのこなし、此模樣よろしく、合方薄き波の音にて道具廻る。

（繼信討死の場）――本舞臺眞中に、前へ出し三間中足の二重、岩組の蹴込み、是れに續いて上の方一段高き岩臺、下手同じく花道の附際まで、一面常足位の岩臺の張物、諸所に磯馴の松。此後銀張りの浪を書割りし一面の遠見、此の沖合へ源平兵船の切出しの遠見を出し、日覆より松の釣枝、花道揚幕の所へ低き岩臺を出し、總て屋島浦濱手の體。爰に軍兵六人何れも鎧、兜、附太刀、弓矢を持ち、源氏方にて揚幕へ向ひ、矢を射掛けて居る、此の見得よろしく、どんちやんにて道具留る。と風の音になり、舞臺より射掛けし矢向うへ屆かぬ思入、皆々きつとなり、

兵一　やあ憎き平家の弱蟲めら、此の海岸に船なきゆゑ、
兵二　無念ながらも遠矢にかけ、射落しくれんとなす折柄、
兵三　殘念なるは逆風にて、矢種も盡きる程なるに、
兵四　たゞの一矢も屆かずして、矢返りなすは殘念至極、
兵五　假令この儘敵船へ、矢は立たずとも、見よ〳〵今に、
兵六　勝に乘じて總攻めなし、わいらが首を討取りくれん。
ト又散々に射る。此矢やはり屆かぬ思入、此時烈しき風の音になり、皆々思入あつて、
兵一　やゝ、又もや逆風吹き起り、

兵四 いよ〳〵敵へ屆かぬか。

兵六 思へば〳〵、

六人 殘念至極。

ト風の音、どんちやんになり花道の揚幕より、以前の教經烏帽子甲冑附太刀好みのこしらへ、矢を背負ひ弓を持ち、跡より菊王丸同じく鎧裝にて附添ひ出來り、岩臺の上にて、教經弓に矢を番ひ射る、是れにて舞臺の源氏方此の矢に當り、三人等しく倒れる。

兵一 やゝ、只一人の弓勢にて、忽ち味方三人まで、

兵五 射落されしか、殘念至極。

ト是れにて手負を肩に掛け、皆々下手へ逃げてはひる。揚幕の教經きつとなつて、

教經 やあ〳〵、遠からん者は音にも聞け、近くは寄つて目にも見よ。我こそは平家の一門、門脇中納言教盛が二男にて、弓勢衆に勝れ、人も鬼神と恐れをなす能登守教經なり、源氏の大將に矢一つまゐらせん。名を聞いて恐れざれば、判官殿出合 候へ〳〵。(トきつといふ、此時上手にて)

繼信 いしくも教經言はれたり、望みに任せ見參せん。(トツッかけになり、以前の繼信鐙兜、弓矢を持ち、馬に乘り出來り舞臺の眞中にて思入あつて)一院の勅宣蒙り、平家追討の大將從五位下左衛門尉判官

源の義經是れにあり。

教經　まことにおことは判官殿、待ち設けたる我が弓勢、いで一矢まゐらせん。受けらるゝなら受けて見よ。

繼信　何を小癪な。

ト教經えいと射掛ける。是れを繼信太刀を拔き切落す。教經又二の矢を射る。繼信同じく切落す。ト三度目にえいと射る矢繼信の胸板に當り、アツと言つて馬より落ちる。是れと一緒に左右より、鎧武者出で介抱する、揚幕の菊王丸是れを見て、

菊王　いで、義經が首を揚げん。

ト太刀を拔き花道へ來かゝるを、上手より以前の忠信出で、えいと矢を射る、菊王丸へ當り倒れる。教經見て、

教經　えゝ殘念なり、菊王丸後れを取りしか。

ト教經弓矢を捨て花道へ駈け來て、菊王丸を引抱へきつとなつて花道へはひる。此内始終どんちやん烈しく、忠信は繼信の矢を拔き介抱なし

忠信　こりや兄上は教經が、矢先に掛り後れを取りしか、思へば殘念口惜しやなあ。

ト無念の思入、此時上手にて、

義經　やあ〳〵繼信、今際に申す事こそあれ。

忠信　あのお聲は、

皆々　御大將。

ト大小入り誂への鳴物になり、上手より義經龍頭の兜、好みの鎧毛鞘の附太刀、同じく毛沓、麾を持ち、跡より近習四人、兵士六人、何れも甲冑にて附添ひ出來り、上手よき所へ床几に掛ける。忠信繼信を抱き起し、

忠信　兄上、疵は淺うござるぞ。

近習　心を慥に、

四人　お持ちなされ。(ト義經側に寄添ひ、)

義經　こりや繼信、義經なるぞ。(ト是れにて繼信眼を見開き見て、)

繼信　はゝはッ。(ト手負ひの思入にて平伏なす、義經思入あって、)

義經　能登守教經が廣言餘り憎きゆゑ、我れ自ら出馬なし、射て落さんと立掛りしを、大將として輕々しく馳せ向うはよろしからずと、我れに代らん達ての望みに、是非なく其意に任せしが、健き彼

れが弓勢に、可惜勇士を失ひ殘念なことをいたせしぞ。（ト繼信思入あつて、）

繼信　數ならぬ某を、御大將の左程まで勞りたまふ忝けなさ、死しても忘却いたさねど、深手を負ひし上からは最早存命思ひも寄らず、さるにても我が君の御先途、見屆け參らせんと思ひし我も今日限り、はや御供の出來ざるは、如何にも殘念至極でござる。

義經　我もまことに忠臣無二の、そちに長き別れを告ぐるは、胸も張裂く思ひなり。

繼信　有難き其の御諚、それに附けてもこりや忠信、汝は我に成替り、二人前の忠義を盡くせよ。

忠信　仰せなくとも兄上に、劣らぬ忠節盡すべし、さはさりながら疵は淺し、叶はぬまでも養生せられよ。

繼信　いや／＼敵は能登守、我が胸板を射拔きし上は、存命所詮覺束なし。

ト是れにて義經愁ひの思入にて、繼信の側へ寄つて、

義經　其方我れに先立つも、我れ又そちに先立つも、主從の果報盡きしならん、歎きは共に劣らぬぞ。

繼信　勿體なき其の仰せ、それを冥土へ土産となし、君へお暇申し上げん。

義經　こりや繼信、申し殘す事あらば、何なりと申し聞けよ。（ト繼信苦痛の思入にて、）

繼信　いや／＼、申し殘す事なし、斯くなり果つるも弓矢取る身の習ひ、敵の矢に中つて主君の命に代

るはかねての覺悟、更に恨みに候はず、只思ふ事は老いたる母をも捨て置き、親しき者共にも別れて、遙々遠き羽州より此戰場へ赴きしも、平家の大軍討亡し、日本國を奉行したまはんを、見奉らぬこそ恨みなれ。

義經　我れも天下を平定なし、そちが働き拔群なるゆゑ、やがて恩賞與へんと、思ひしことも今更に、

忠信　兄を先立て弟が、此の苦痛をば見る切なさ。

近習　息絶え〴〵の有樣は、

同　最早末期に近くあらん。

繼信　今一度我が君の御顏を見たく思へど、最早眼力衰へしか、四邊は闇く、見るに由なし。

義經　すりや、我が顏も見えざるか。

忠信　思へば是れが、

繼信　一世の別れ。

義經　不便なそちが、（ト顏を背けるを木の頭）身の果てぢやなあ。

ト繼信よろしく落入る、義經忠信別れを惜しむ、この見得双方よろしく、時の鐘かすめて波の音にて、

幕

二幕目

吉野山雪中の場

〔役名――源九郎義經、武藏坊辨慶、佐藤四郎兵衞忠信、龜井六郎重淸、伊勢三郎義盛、片岡八郎經俊、駿河次郎經淸、衆徒河倉法眼、同醫王禪司、同岩本法橋、同治部禪司、忠信家臣船田三郎、同黑川七郎、衆徒大勢、横川の禪司覺範等。〕

（講堂前の場）――本舞臺眞中三間、高足程の朱塗りの堂、瓦庇、本緣附上り段の階子、此下吹拔き、敷石の前面を見せ、正面の扉締切り後に出入りあり、此左右彫物形の唐戸、二重の上下杉の立木、日覆より同じく釣枝、後ろ奥深に雪山の遠見、舞臺前上下に杉の梢を見せ、諸所に腰を掛ける程の岩臺あり、總て此道具雪持ちにて、舞臺花道とも一面に雪布を敷詰め、吉野山講堂前の體。爰に河倉法眼、醫王禪司、岩本法橋、治部禪司何れも法師頭巾鎧姿の衆徒にて、蓑を纏ひ草鞋掛けにて、長刀を持ち立掛り居る、此の見得雪おろしにて幕明く。

河倉　如何に各々、御同然に慾得づくとは申しながら、此の雪中を徘徊なし、落武者詮議の見廻りは、寒風膚を冒しまする。

醫王　仰せの如く花の頃、雪と見まがふ櫻の下を徘徊いたすと事替り、此嚴冬を見廻るは餘程風情が違

ひますろ。

岩本　とあつて判官主從を此儘見脫し置くときは、我々共の越度と相成り、後日に鎌倉よりお祟りあるに相違なし。

治部　それゆゑ横川の覺範殿を大將となし、大衆の面々藏王堂へ會合なし、判官主從討取らんと決議なしたる上からは、

河倉　早鐘を撞き寺々より、一千餘人の募りたる人數を四方へ手分けなし、此山內を取り圍ませ、

醫王　判官主從討取つて鎌倉表へ差出し、恩賞褒美に與らんと、在所を詮議の我々共、

岩本　承れば鎌倉より、北條父子が討手を蒙り、都へ登り此地へも出張なすと申す事、

治部　又義經の愛妾靜とやらも附從ひ、此山內へ來たと申せど、其在所さへ定かならず、

河倉　然し平家を西海の水屑となせし義經も、鎌倉殿の御不審受け、堀河御所を追拂はれ、

醫王　夜半に紛れて此大和へ、落延び參るなんどゝは、虎も尻尾を卷く時は、犬に追はるゝ猫同然、

岩本　そこへ附入り法師武者の手並を顯はし討つて取り、彌陀の利劍の切味は斯樣なものと見せつけなば、

治部　向後天下に名を顯し、一來法師小密茶にも、劣らぬ武勇と稱されん、

河倉　然らば各々、雪道なれど必ず共に、おぬかりあるな。

三人　心得申した。

河倉　さゝ、ござれ〳〵。（ト右鳴物にて四人は上手へはひる。是れより床の淨瑠璃になり。）

〽抑々和州吉野山は、日本無雙の嶮岨にして、其奧測り知られざる、深山も雪の降積り、目指す方さへ白妙の、道踏み分けて判官主從、路次の疲れにイみて、

ト此内雪おろしをあしらひ、花道へ雪を降らし花道より義經鎧下のこしらへ蓑笠にて出る、續いて龜井、駿河・伊勢、鎧下四天王のこしらへ、片岡同じこしらへにて鎧櫃をかゝぎ、辨慶黑の直綴陣立のこしらへにて、棒を突き出來り、花道へ留りて、

義經　やよ者共、今嚴寒の砌りゆゑ雪は降るべきものなれども、斯く小止なく降りしきるは、よく〳〵我れ〳〵主從は、天の憎しみ受けしと見ゆる。

重清　されば主君の仰せの如く、一昨夜より降り續き、野も山も一面に、他の色もなき銀世界、

經清　世にある族は詩を作り歌を詠じて此雪を、面白妙とも申さんが、面白からぬわれ〳〵共、

義盛　殊更雪の風景によろしき勝地も名にし負ふ、歌の名所の吉野山、多しといへどそれとても、

經春　都の跡に落武者の、身は味氣なく人跡の、絶えしを便る山陰に、遠景とても見えわかず、

辨慶　我が君はじめ各々の、其の述懐もさる事ながら、此辨慶は左にあらず、跡より追手の掛る身も、降積む雪に足跡の側より消ゆるは是れ正に、天の冥助と存ずれば、歩行の難儀も苦にならず、君にも左樣思召されて、天をお恨みなさるゝな。

義經　何さま武藏の言へる如く、此の大雪なればこそ、是れまで參る大和路の、人家もあら方とざしあれば、落人の身に幸ひなり。

重淸　斯かる助けのある事も、道の嶮岨に倦み疲れ、

經淸　それと白雪降積る、天の惠みも横吹雪

義盛　憎しみ受けし身なるかと、手前勝手に歎きしは、

經俊　男子に恥づべき述懷の、女々しきことでござつたわえ。

辨慶　何は然れ、向うに見ゆる堂の許まで立越えて、小止みをお待ちなされませう。

義經　然らばあれへ立越えて、暫時の間憩ふであらう。

〽又降積る雪道を、踏分け〳〵歩み寄り、（ト皆々舞臺へ來り）

重淸　これなる堂こそわれ〳〵の、

經淸　吹雪を凌ぐ假の宿、

經盛 扉を開き堂内を、
經俊 改めし上我が君の、
辨慶 御座所を設け、
五人 休らはん。
〽他聞を恐れ堂中を篤と見澄し緣先きの、雪打ち拂ひ座を設け、
ト此内皆々にて正面の堂の扉を開き、中を改め、緣先きの雪を拂ひ、經俊件の鎧櫃をおろし、中より敷皮を出して敷くことよろしくあつて、
重清 いざ先づ、あれへ、
四人 お掛け遊ばされませう。
〽いざおなたへと禮をなし、面々席を設けゝる。
ト義經緣へ腰を掛け、皆々四邊の岩臺の雪を拂ひ、腰を掛ける事よろしく、是れより衍の入りし合方になり、
辨慶 大雪ゆゑに枯柴も、濕りて居れば焚く事ならず、凍る手先きを我が息で溫めるの外仕方なし、然し是れなる講堂は、我々共の身に取りては、賴む木陰と謂つべし。

義經　斯く雪中に、汝等に、思はぬ苦心をいたさするも、過ぎし屋島の戰ひに、逆櫓の論にて景時が恥辱を取りしを遺恨に思ひ、逆心ありと我が兄へ讒言を構へしゆゑ、遂によしなき疑ひ受け、此吉野へは落延びしが、頼みに思ひし一山の衆僧は敵へ味方なし、我れを討たんといたす由、思へば果敢なき我が身の上。

重清　あいや、其儀も景時が、如何程讒言なすとても、御聰明なる鎌倉殿、

經清　君に御野心なき事を、お悟りありて御不審晴れ、

義盛　軈て浮雲晴れ渡り、御免の御沙汰も遠からず、

經俊　先づそれまでは何事も、御無念お忍び、

四人　遊ばされませう。

義經　われ薄命の將たりしも、辨慶始め汝等の、忠臣一致なすゆゑに、暴威に募る義仲を、粟津に於て討ち亡し、まつた平家の一門を、鵯越より攻めおとし、屋島の浦へ追退け、僅な勢にて西海の水屑となして比類なき勝利を得しゆゑ鎌倉へ、歸陣の節は兄へ其勳功を言上なし、我も賞譽に與りて身命抛ち戰場にて、手柄をなせし汝等へ褒美の御沙汰と思ひしも、腰越よりして追歸され、再び歸る堀河の館は夜討を仕掛けられ、天下の主たる頼朝の弟と呼ばるゝ義經が、身の置所あらざ

るは、殘念至極な事どもぢや。

〽御無念面に顯れて、怒りたまへば武藏坊、（トよろしく思入あつて、）

辨慶　其御無念尤も至極、此辨慶に申させなば梶原如きが兄君へ假令讒言なすとても、お用ゐあつて我が君を討たんとまでの御立腹は、其の意を得ざる事共なり、是れは全く鎌倉殿斯かる智勇の御舍弟を、其儘お置きなされなば、天下を奪ふ事もやとお案じあつての謀略ならん、されども日月地に落ちず天道誠を照したまへば、軈て御武運輝きて開くる時節もござりませう、それなればこそ此程の大物浦の大難も、易々脫れ今日まで、存命いたす我々共、少しもお悔みなさるゝな。

〽流石豪氣に述懷も、いはで勇氣を勵ませば、（トよろしく思入。）

重淸　それに附けても堀川よりお跡を慕ひし靜どの、落人の身に人目立ち、君のお爲にならざると、辨慶殿がお諫めゆゑ、

經淸　主君も實にもと思召され、先刻お暇遣されしを、一命かけて何處までも、お供仕度しと再應の、お賴みなれど我々も、不爲の旨を諭せし所、

義盛　流石利發の靜御前、聞き分けられて是非なく〳〵、士卒二人に都まで送る役目を申し附け、荷物を持たせ遣はせしが、人目を忍ぶ御身ゆゑ、

經俊　間道傳ひに行かれしが、嘸今頃は山道にて、雪に惱みておはすでござらう。
義經　いや、それとても士卒の者が、同道なれば氣遣ひなし、元來し道へ歸るであらう。
重清　して御主君には、是れよりして、
經清　何れへお落ちなされまするか。
義盛　われ／＼共も心得の爲め、
經俊　御賢慮伺ひ、
四人　承つたい。
〽判官武藏を打ち見遣り、
義經　こりや辨慶、我奥州の秀衡方へ、一先づ便り身を寄せて、時節を待たんと存ずるが、此姿では行き難し、汝が所存は如何なるぞ。
〽のたまふ詞に進み出で。（ト合方きつぱりとなり、）
辨慶　されば拙者が存ずるには、各々鎧を脱捨て、兜巾篠掛笈を負ひ、山伏姿に出立ちて、羽黒山伏の體に見せ、今般大和の大峰へ登山なしたる歸るさと、僞り通行なす時は人も怪しむことなしと、愚慮を廻らし居ります。

義經　そは其の良策ながら、出立ばかり山伏の、姿に扮し居るとても、修驗の道を心得ねば、途中に於て怪しめられ、詮議を受けし其節に、答ふる事が相成るまじ。
辨慶　いや其節は某が、横川に於て修得せる修驗の道も心得居れば、お氣遣ひある事はなし、幸ひなるかな武藏坊は、羽黑山の大先達荒讃岐といへるものに、面體似たりとさいつ頃言はれし事の候へば、其名を借りて大峰の、歸りと申して通行なさん。
義經　何さま汝は其古へ、都横川で修得なし、金胎兩部の修驗の道、心得居ると申すこと、萬事よしなに任すであらう。
重清　武藏坊には勇猛の衆に勝れしばかりでなく、
經清　幼年よりして佛學に、心を委ね召されしゆゑ、
義盛　文武兩道兼備へ、こたびの役に相立つとは、
經俊　我々共の身に取りては、大元帥とも仰ぐべし。
辨慶　先づ此山の裏傳ひに多武の峰へ落延びられ、間道傳ひに都へ出で、山伏出立ちに姿を替へ、琵琶湖を渡り海津まで、御乘船こそ然るべしと、通路を計つてござりまする。
〽手に取る如く辨慶が、示す詞に主從は、實に賴もしく思ひける。（トよろしくあつて、）

義經　然らば裏手の山傳ひ、片時も早く落延びん。
辨慶　あいや其儀も一山の、惡僧輩が八方を取卷き居ると申す事、迂濶な道は參られねば、某一人裏手へ參り、樣子を窺ひ立歸らん。
重清　すりやお手前が、
四人　參られて、
辨慶　各々知らせを待つてござれ。
〽降積む雪を事ともせず、裏道指して急ぎ行く。
ト雪おろしになり、辨慶件の棒を突き、上手へはひる。
重清　はて勇ましき武藏殿、日頃我慢の我々すら、此の大雪に行き惱み、
〽跡見送りて賞美なし、
經清　小止みのなきを託ち合ひ、此講堂に休らひて、やう／＼息をつぎたるも。
義盛　武藏殿には潔く、我が君はじめわれ／＼に、力を附けて氣を勵ませ、
經俊　更に屈する樣子もなく、自ら望んで間道の、樣子を探りに參られしは、
重清　鬼と呼ばれし、

四人　勇士ぢやなあ。
〽面々武藏を褒めそやせば、御大將も打笑みて、
義經　まことや彼れは幼少より、涙をこぼせしことなしと、常に自讃をいたせしが、鬼若丸と呼ばれし
も仁こそと思ひ當りしなり、
〽教への古事を心附き、（ト思入あつて、）
彼れは又もや此處へ立歸るゆゑよろしけれど、汝等一統此隙に草鞋を逆にはき替へよ。
重清　その草鞋を逆さまに、
經清　履替へよとのお詞は、
義盛　如何なる仔細で、
四人　ござりまする。（ト合方きつぱりとなり、）
義經　されば古へ天竺にて、波羅那國と志羅那國合戰に及びし時、志羅那の軍勢敗北なし、國王僅か十
四人の從者を連れて落延びしが、折しも冬の半にて、山路の雪の降積むを、是れ幸ひと從者の智
臣王に勸めて皆一統、履きたる沓を逆になし、雪の山路を落延びしに、案に違はず波羅那の軍勢
追來りしが足跡の、逆さまなるに迷ひを生じ、敵は何れへ逃げしかと、跡追はずして歸りしゆゑ、

志羅那の國王測らずも、辛き命を助かりて恙なく自國へ歸り、其後智略を廻らして遂に波羅那を攻亡ぼし、太平謳ひし故事あれば、それに倣つて草鞋を逆さまに履き行く時は、跡より追手來るとも其行く方を疑はん、それゆゑ思ひ當りしぞ。

重清　それぞ法相三論の、經にありとか承はる、

經清　今に始めず我が君の、凡慮ならざる御諭し、

義盛　何さま是れは落人の、心得置くべき事共なり、

經俊　然らば仰せに從ひて、履きかへまするで、

四人　ござりまする。

義經　我れも是れにて履き替へん。

〽主從草鞋はき直し、君の御機嫌よき儘に、此處を計り願はんと、

ト皆々草鞋を履きかへる事あつて、四人顏見合せ前へ出で、

重清　さて奧州へ御下向と定る上はわれ〳〵一同、願ひたき儀がござりまする。

義經　なに、改めて願ひとは。（ト合方替つて、）

重清　餘の儀にもござりませぬが、大物浦の船出の節お別れ申せし卿の君さま、如何お渡りなされます

るか、陸奥下向と事極り、再び都を御通行と、承はれば彼の方へ、竊にお使りなされまして、男姿に取りこしらへ、君御同伴遊ばしなば、北の方にもお悦びと、かねて一同申し合せ、お案じ申し居りますれば、此儀お聞き濟み下さりませう。

義經　おゝ其願ひ神妙なれど、落人の身に婦女を伴ひ、はる〴〵遠き陸奥まで、下向いたすは足手纏ひ、左樣な心配無用にいたせ。

經清　あいや其御遠慮はさる事ながら、かねてより卿の君さま主君のお胤を宿したまひ、御懐姙と承はれば、若しも其事鎌倉へ漏れ聞えなば其儘に、よもお捨置きは是れあるまじ、左ある時には我が君のお胤を失ふそれのみか、無慚の御最期させねばならず、そこを御賢慮廻らせられ、是非に此度の御下向に、御同伴なし下さりませう。

義經　すりやそれ程に汝等は、彼れが事を案じくれるか。

義盛　御愛妾たる靜どのも、天晴賢女に候へども、元は都の白拍子殊に雄々しき性なれば、左のみお案じも仕らねど、御懐姙ある卿の君さま、此程船出のお別れすら泣きくづをれておいでありしを、見るも我れ〳〵お傷しく、相成るべくは御同伴をと、祈り居つたる此願ひ。

經俊　尤も女子のお姿ではなか〳〵御旅行覺束なし、男子に仕立て我々が如何やうとも御介抱申し上ぐ

るでござりますれば、武藏が是れへ歸りなば、其儀を篤と仰せ聞けられ、然るべしとの儀でござれば、幸ひ都を御通行の其の折お誘ひなされまして、御下向あるやう一統に、お願ひ申し、

四人 上げまする。

〽猛き勇士も忠臣の、まこと面に顯れて、願ふ心ぞ健氣なる。
ト皆々よろしく思入、義經もこなしあつて、

義經 懷胎なせし我が胤の空しくなるを打案じ、左程汝等一統に詞を揃へ勸めくれるは、默しがたく存ずれば、辨慶これへ歸りなば、意見を質し見るであらう。

重清 いえ、此の一儀は武藏坊が、發言にござりまする。

義經 なに、あの武藏が發言とな。

經清 それゆゑ君が御承引、下さりますれば我れ〱の、

義盛 願ひも叶ふ御同伴。

經俊 辨慶諸共有難く、

重清 御禮申し、

四人　上げまする。

義經　はて、武藏めは勇のみか、情を知つた奴ぢやなあ。

〽荒くれし身に斯くまでも、優美の心ありしかと、感じたまへる折しもあれ、俄に撞き立つ鐘の音に、人々不審の耳そばだて、

ト此内義經よろしくこなし、よき程に下座にて早鐘をつき出す、皆々きつとなり、

重清　俄に撞き出す早鐘は、正しく是れは常事ならず、

經清　はて心得ぬ、

四人　事なるぞ。

〽軍慮に敏き大將は、早くもそれと覺りたまひ、（トよろしくこなしあつて）

義經　あれぞ寺院で勤行に、打立つ鐘の音にあらず、正しく人數を集むる合圖。

重清　さては我々此處に、休らひ居るを早くも知り、

經清　人數を集め惡僧儕、押寄せ來ると覺えたり、

義盛　あれ／＼麓の方よりして、雪を蹴立てゝ兩三人。

經俊　こなたを望み馳せ來るは、惡僧儕に相違なし。

義經　是れへ參らば討つて取れ。

四人　心得ましてござりまする。

〽身構へなして主從が、今や遲しと待ちかくれば、めぐる吹雪を事ともせず、源氏車の名に轟く佐藤忠信逸散に、郎黨引き連れ馳せ來り。

ト雪おろしばた／＼にて、花道より忠信鎧裝蓑笠にて、船田三郎、黑川七郎家來にて、同じく鎧裝蓑笠にて出來り、花道にて、

忠信　御主君それに御座ありしか、四郎兵衛にござりまする。

義經　おゝ、忠信にてあつたるか。

重清　如何いたして、

四人　此處へ。

忠信　おゝ、四天王の各々方、仔細はそれにて申し述べん。兩人續け。

三郎
七郎　はツ。

〽急ぐとすれば雪道に、足の運びをいらちつゝ、御前へこそは進みける。

ト此内花道の三人舞臺へ來り、ハツと下手下に居ろ、是れより替つた合方になり、

義經　ム見れば從者を引率なし、馳せつけ來りし樣子なるが、堀川退去の其節に不意の夜討に其方の在所を尋ぬる暇なく、浪花へ落延びそれよりして、吉野山へ分け入りしに一山の惡僧儕我を討たんとなすよしゆゑ、敵と心得居つたる所如何いたして參りしぞ。

忠信　御諚の如く先達て、都の亂軍、不意を討たれ、防禦の難戰いたす折柄、はや御主君にはお立退きと聞きて御安危如何やと、郎黨二人引率なし御跡を慕ひ候へども何れの方へ落ちたまふか、其道さへも知れざれば、間道傳ひに浪花に出で、住吉浦にて聞きたゞせば大和の方へと知れしゆゑ、雪中ながら夜を日につぎ、此の麓まで參りし所、其の手配りのありしと見え、固めの人數に取圍まれ、危き場所を驅散らし、お在所尋ねやう〳〵と、馳せ附けましてござりまする。

重清　扨は只今撞き立てし、あの早鐘は其方を、取卷く合圖であつたるか。

經清　かゝる手配りある上は、驅け散らされし惡僧儕、又も人數を立直し、

義盛　忠信殿が此處へ、參られし事を早くも知り、

經俊　多勢を頼みに雪中を、押寄せ來るに相違なし。

義經　是れへ參らば目に物見せ、蹴散らしくれん、油斷すな。

重清　心得まして、

四人　ござります。

〽勇氣含んで見えければ、（ト皆々きつと思入。）

忠信　あいや、其儀はよしなき事、先づ〱お待ち下さりませう。

義經　そは何ゆゑのことなるぞ。

忠信　只今拙者當山の、麓の固めを爰かしこ駈け散らし參る前方に、巡見いたし候所、取るに足らざる衆徒といへども其勢凡そ千餘人、百分が一にも足らざる勢にて、それを引受け戰ひなば脱るゝことも難かるべし。其儀に附いて拙者めが、存じ寄つたる一つの計策、御聞届け賜り度し。

義經　して其方の計策とは、如何なる事ぞ。

〽忠信從者に打ち向ひ、

忠信　其方どもは取つて返し、討手の奴儕來りなば、注進なすやう見張りいたせ。

三郎
七郎　心得ましてござりまする。

〽家來を見張りに追立て遣り、（トこれにて船田三郎黑川七郎は花道へ引返してはひる。）

重清　して計策と、

四人　言はるゝは。（ト誂への合方になり）

忠信　君へ對して申し上げるも、拙き策にはござりますれど、兄繼信が御馬前にて、御名を名乘りし例により、御姓名を其儘に忠信に賜はらば、某こゝに踏止まり、御名を名乘り殿りなし。衆徒の奴儕討ち惱まし、一世の血戰仕つれば、其間に君を供奉なして、四天王の方々には、南都東大寺へ立退きたまへば山續き、何れの地へも落ちたまふに、よき御都合と愚慮なせば、あはれ拙者が寸忠を御許容あつて我が君の、御姓名を其儘に、何卒下し置かれませう。

ヘ思ひ入つてぞ忠信が、雪にひれ伏し願へども、判官頭を打振りて、

トよろしくこなしあつて、

義經　いや、天晴なる願ひなれど、誠忠無類の其方に討死いたさせ我が一命、いかで延はり居られんや、假令大軍此處へ押寄せ來り取卷くとも、物の數にて數ならず、只一戰に駈け散らし脱るゝ事は手裏にあり、萬一武運拙くして叶はぬ時はそれまでなり、主從諸共潔よく、降積む雪を一期となし清き屍を晒すであらう。

重清　仰せの如く我れ〳〵も、忠信殿を討死させ、

經清　何面目に我が君の、御供なして落ちられん。

忠信　いや、それにては千歳の、後まで源家の御恥辱を、殘す基と存じまする。

義經　いや、元より武運拙くして讒者の爲に兄の御不審受けし此の義經、源家の恥辱は覺悟なるぞ。

忠信　さゝ其恥辱を忍び、時節をお待ちなされなば、今降る雪と諸共に汚名を雪ぐ時至らん。山法師等の其爲に討死あらば千歳の、末の世までも物笑ひ、何卒御賢慮廻らせられ、此忠信に御姓名をお許し下したまはるやう、只管願ひ上げまする。

〽命を輕んじ源の姓を重んじ諫むれば、面々其理に一致なし、（ト皆々よろしくあつて、）

重淸　何さま是れは忠信殿の、言はるゝ所は實に理、

經淸　然らば某踏止り、殿りいたして討死なさん。

義盛　いや、某が引受けて、淸き最期を仕らん。

經俊　いや、其役目は某に、何卒お讓り下されい。

重淸　その儀は手前が、

四人　引受けん。

忠信　いや、各々は我が君の御供なして落ちられよ。

重淸　あいや、手前が引受けて、

經淸　手前が殿り、

四人 仕つらん。
忠信 すりや各々には某の、願ひの妨げ召さるゝか。
重清 何しに妨げ、
四人 仕つらう。
忠信 左樣でなくば、お控へあれ。
重清 いや、控へては、
四人 居り申さぬ。
忠信 やあ、妨げ召されず、お控へ下され。
〽爭ひ果しあらざれば、判官從者を押鎭め、（ト皆々よろしくこなしあつて、）
義經 あいや、双方控へてよからう。
忠信 すりや、お聞き濟み、
五人 下さりますか。
義經 許すはやはり忠信へ、我が姓名を讓るであらう。
重清 して、我々の、

四人　お願ひは。

義經　身命拋ち殿りを、願ふ忠義は一つにて、替りし事はあらざれど、初發に望みし其者へ許さば誰も否はなし、忠信汝が仕遂げてくれよ。

忠信　はゝッ、有難き其の御諚、冥加至極にござりまする。

〽依怙なき沙汰に一同も、是非なくハッと控うれば、

義經　我を思ふ汝が願ひ尤もなり。然らばこれにて甲冑を、（ト義經思入あつて）それ經俊、出して遣はせ。

經俊　委細承知仕りまする。

〽背負ひ來りし鎧櫃、明けて取出す緋縅の、鎧兜も雪中に、輝き渡り赫々と、四邊まばゆく見えにける。

ト此内經俊後の堂の椽にある鎧櫃を明け、中より誂への鎧兜を出し、忠信の前へ直す。

忠信　はゝッ、身に餘りたる御賜、有難く拜領仕つりまする。（ト辭儀をなす。）

〽御大將は忠信が、着せし鎧を見遣りたまひ、

義經　こりや忠信、汝が着せし其の鎧は、此の義經が所望いたすぞ。

忠信　斯く粗末なる此の鎧を、御所望下さるとな。
義經　厚き忠義に我が鎧着して殿りいたしくれるは、此上もなき忠臣ゆゑ、我又汝の鎧を着し、萬一此地で其方が、討死なせしと聞く時は、後の形見と致したし。
忠信　こは勿體なき其の御諚、聊か君へ忠節をつくしまするを、御着背長をたまはるのみか、御姓名を名乘りまするも恐れ多きに、我が鎧を御主君がお召しに相成り、形見との仰せは恐れ入つたる次第。
重清　又我々も我が君の、お供いたして陸奥へ、
經清　下向いたせば其許の、故鄕を何れ通行なせば、
義盛　御存命にてありと聞く、老母の方へ何なりと、
經俊　御身の傳言承はり、申し傳へてまゐらせん。
忠信　あいや、其儀は家來の者に言附け、故鄕へ遣しましたれば、心殘りは候はず。
〽健氣な體に判官も、又懷舊に堪へ兼ねて、（ト是れより笙の入りし床のめりやすになり、）
義經　あゝ、如何なる過去の緣なるか、兄繼信は屋島にて、我が名を名乘り馬前にて能登守の矢先きに掛かり、健氣な忠死をいたすといひ、今又汝も我に代り、討死なさん覺悟とは、揃ひも揃ふ兄弟の、

其の誠忠は臣たる身の、末世の龜鑑と謂つべし。それに反して義經はかゝる忠心義心ある家來を多く持ちながら、薄命にして此の有樣、兄を恨むは道ならねど、我範頼と二手に分れ、過ぎつる年に都へ登り木曾の一族平家の一門、悉く討滅し、鎌倉の世となすまでは、忠戰なして死せしもの、幾干なるか數知れず、

〽其勳功も西海の浪の泡より空しく消え、遙々下る東路も、腰越狀の反故となり、絕えて久しき兄弟と對面すらも許されず、直に都へ追返され鳥の羽翼をもがれし如く、武威衰へし虛を計り、堀河御所へ夜討せしも、皆鎌倉の指圖なり。それより都を落延びて、大物浦の難風に旣に主從死すべきを、武藏坊が行力にて危き一命助かれど、身の置所なきまゝに、野外に迷ふ口惜しさ。

〽昨日は、四國九州を分け與ふべき義經も、今日は討てよと鎌倉の嚴しき下知を聞く無念、今右幕下と兄が大小名に敬さるゝも、我が功に依る所、よしや義經聊の越度ありとも功に愛で慈悲の御沙汰もあるべきを、討てよとまでの嚴命は餘りと申せばお情なし、されば此程天王寺を立退く折は主從散り〴〵、五人三人落合ひて要害堅固の地を賴みに、此の吉野へは登りしかど、山法師等すら敵となり、誰を賴らん者もなし。凡そ日本六十餘州に、遙に遠き陸奥の秀衡の外義

經を匿ひくるゝ者あらじ、味方は僅の臣下のみ。

〽落人の身の悲しさは、晝は道なき山路に迷ひ、夜は守人もなき古廟に宿り、木の間の月を明りとなし、

片敷く袖は露よりも、涙に濡るゝ身の果敢なさ。推量いたせ、こりや忠信、無念、口惜しいわえ。

〽天地に勇名轟きし、御大將も世に落ちて、無念涙に暮れたまふ、並居る從者一同に、さしうつ向いて歎きしが、思へば無念と聲勵し、（ト此內皆々愁ひのこなし宜しくあつて、氣を替へ）

忠信　はゝッ御尤もなる其仰せ、我々共も此程より、鎌倉殿の道ならぬ無慈悲の御處置が無念ゆゑ、御前に於ては申さねど、蔭にては朝暮とも申し出さぬ日とてはなく。

重清　晝は終日胸に忘れず、夜は終夜夢に結び、憎きが儘に目覺むれば、又思ひ出す鎌倉殿

經清　正しき血筋の御舍弟を、斯くまで憎みたまふのは、逆櫓の遺恨に景時が、讒言なせしばかりでなく、

義經　四國九州一圓に、分け與ふるが惜しきゆゑ、討たんと計るに相違なし。

經俊　左あらば斯樣に御兄弟の、禮を重んじたまはずに、一先づ奥へ落延びたまひ、

忠信　再び君が御旗を擧ぐるとあらば忠信も、此地を切拔け馳せ參じ、お味方いたすでござりませう。

〽討死なすと覺悟せし、身にも主君を勵まして、勇氣を含めばこなたにも、

トよろしく思入あつて、

義經　お丶勇猛なる汝ゆゑ、此地の圍みを切拔けて落延びるには相違なけれど、運拙くして取圍まれ討死なさんも計れず、又我とても旅中にて、討手の爲に取圍まれ、無念の最期を遂げんも知れず、兎にも角にも此場にて惜しむ名殘りが今生の別れにならんも知れざれば、我が重代の此太刀と汝の太刀と替へ〴〵に、後の形見といたすぞよ。

忠信　はゝツ、御佩刀まで賜るとは、願うてもなき身の仕合せ、太刀は拙者の所持なれど、鎧は兄の繼信の形見の品にござりますれば、冥府に於て繼信めも、嘸悦ぶでござりませう。

義經　扨は鎧は屋島にて、我が矢表に、忠死せし、汝の兄の形見なりしか。

重清　それと御存じあらせられず、御所望ありしも是れ正に、

經俊　繼信殿の忠魂が、導く三世の奇緣にて、

義經　文字は替れど忠臣の、名に背かざる忠信殿、

經俊　末世の龜鑑と我々もお羨しく、

四人　存じ申す。

義經　然らば忠信鎧を脱ぎ、我に其儘讓りくれよ。

忠信　御免を蒙り御前にて、着替へまするでござりませう。

〽心勇みて忠信が、鎧着替へる暇なく、又も撞き立つ鐘の音、

ト下座の早鐘になる、皆々きつとなり、

重淸　又もや鐘を撞き立つるは、

經淸　在所を知つて此處へ、

義經　山法師等が人數を集め、

經俊　押寄せ來ると、

四人　覺えたり。

忠信　いや〱、左樣な儀でござれば、見張りの知らせがあるでござらう。

〽樣子如何と待つ所へ、以前の郎黨立歸り、

トばた〱になり、花道より以前の三郎、七郎出來り、直に舞臺へ來り、

三郎　はツ、麓の方より多人數を引連れましたる法師武者、是れへ望んで參る樣子、

七郎　取るに足らずと心得ますれど、注進せよとの仰せゆゑ、お知らせ申してござりまする。

ト此内忠信鎧を脱ぎながら、

忠信　よくぞ早速知らせしぞ、然らば各々我が君の、御守護召されて裏道より、南都の方へ落ちられよ。

義經　敵に後を見すること、本意ならねども其方の意見に附いて落延びん。

重淸　左樣ござれば、繼信殿の、

經重　鎧はあれなる櫃へ納め、

經俊　此の經俊が背負ひ行かん。

義經　忠信殿にもお支度あれ。

忠信　御所望なれば此の太刀は、我が君樣へ恐れながら、(ト太刀を取つて出す、義經も帶せし太刀を取つて)

義經　我が此の太刀と取交すぞ。(ト差出す。)

忠信　はツ。

〽と主從が取交したる二振の、太刀は三世の因みをも盡せぬ誓ひ義は金鐵、逆に履き居る草鞋を、忠信不審と心附き、

ト此内義經忠信互ひに太刀を取交し、義經其儘腰へ帶す、忠信は件の太刀を押戴き、皆々の足へ目を附け、

我が君はじめ各々には、何ゆゑあつて逆さまに、草鞋をお履きなされしか。

重清　これぞ法相三論の、

重清　故事に習ひし、

義盛　主君のお指圖、

經俊　跡より追手の掛らぬやう、雪中を行く心得なり。

忠信　はてあつぱれなる御計ひ、それは天竺これは又、會稽山の昔を忍び、

重清　今は枯木も同樣なる、

經清　花なき千本の櫻木も、

義經　心に春の時到り、

經俊　再び花咲く、

義經　武門の榮え。

忠信　左樣ござらば、我が君樣。

義經　忠信無難を祈り居るぞ。

〽惜しむ名殘りも早鐘の、合圖に猶豫成り兼て、武藏の跡を慕ひ行く。

ト此内始終かすめて早鐘の音、雪おろしにて双方よろしく名殘を惜しむこなしあつて、トヾ義經先きに、重淸、經淸、義盛、經俊件の鎧櫃を背負ひ、皆々上手へはひろ。

忠信　〽忠信君に賜りし、鎧兜と御太刀を、小脇に搔込み勇み立ち、(トよろしくあつて、)如何に兩人承はれ、恐れ多くも我が君の、御名を賜り此の如く、太刀甲冑まで拜領なせば、是れを着して切つて出で、寄せ來る奴儕微塵になし、天運盡きなば討死と、疾くより覺悟極めしが、我に從ひ死を遂ぐるや、此の場を早く落延びるや、命惜しくば退散せよ。

三郎　やあ、何ゆゑあつて兩人が、命を惜しみ申さんや。

七郎　御主人諸共死を遂ぐるは、かねて覺悟に、

兩人　ござりまする。

忠信　然らばそれなる堂内にて、支度をなさん、早參れ。

三郎　心得まして、

兩人　ござりまする。

〽家來引連れ堂内へ、勇んでこそは、

ト忠信先きに三郎、七郎附いて正面の堂の内へはひろ。是れにて雪おろし、早鐘の鳴物打上げ、

〽入りにける、花の吉野も山寒く、香もなき六つの花吹雪、峰のなだれに落人の、逃げ散る事のあらんかと、軍慮に油斷あら法師、横川の禪司覺範が、大薙刀の一騎掛け、

ト此留り誂への鳴物になり、花道より覺範、法師頭巾鎧附太刀、草鞋にて墨の法衣を纏ひ、大薙刀を掻込み、つか〳〵と出來り、花道にて舞臺をきつと見込み、

覺範　鞍馬育ちの稚兒上り、判官義經討取らんと軍議を牒し取圍めど、おろす木の葉のそれならで、天狗礫か山上より落來る雪に尻込みなし、先手に向ふ者なければ、一騎がけにて乘込みしに、入相告ぐる鐘の音に塒求むる小鳥の外、人影さへも見えざるは、落ちて行方も白妙の道踏み分けて逃げ去りしか、但しはあれなる講堂に、隱れ忍んで居ることか、傍へ參つて窺ひ見ん。

〽われに答へてわれに問ひ、講堂近く進み寄り、物音さすれど寂寞と、出で合ふものもあらざれば。

ト此内覺範舞臺へ來り、薙刀の石突にて正面の堂の扉を突けども、ひつそりとして居るゆゑ思入あつて、懷中より呼子の笛を出して吹く。是れにて花道より法師武者、河倉法眼、醫王禪司、岩本法橋、治部禪司、他二人鎧附太刀草鞋にて、松明を持ち出來り、直に舞臺へ來り、

河倉　何ぞ御用に、

六人　ござりまするか。

覺範　雪明りとは申しながら、夕暮ゆゑに堂内は、闇夜に等しく見えわかず、汝等中を改め見よ。

河倉　いえ、堂内に居るならば、是れへ出ますで、

六人　ござりませう。

覺範　やゝ尻込みなすは甲斐なき奴、其の松明これへ出せ。

醫王　よろしくお願ひ申しまする。

〽松明取つて覺範が、四邊をきつと打見遣り、（トよろしくあつて）

雪に殘りし足跡は、正しくこなたへ來りし樣子、さては是れなる堂中に忍び居るのに相違なし。

ト是れにて法師武者六人松明にて、あちこちを見廻し、

岩本　さうおつしやれば緣先きにも、草鞋の跡が、

六人　ござりまする。

覺範　いよ〳〵それに相違ない、汝等中へ切込み見よ。

六人　どうやら不氣味な。

覺範　や。

治部　いえ、討入りまするで、

六人　ござりまする。

〽多勢を頼みに扉を明け、中へ拔き連れ入らんとなす、折柄從者の兩人が、跳り出づるをおつ取り卷き、

ト此内六人正面の堂の内へ入らうとする、内より以前の三郎、七郎拔身を持ち出る、六人是れを取卷ききつとなり、

河倉　さては落武者。

六人　覺悟なせ。

三郎　やあ落武者などゝは無禮な奴、判官殿の身内に於て、四天王と呼ばれたる龜井の六郎重淸。

七郎　同じく片岡八郎經俊、先刻よりして汝等の、是れへ參るを待受けたり。いざ尋常の、

兩人　勝負せん。

疊範　左樣な奴なら疊範が、相手になすも大人氣なし、汝等寄つて討つて取れ。

河倉　心得ました。

六人　落武者觀念。

ト是れより雪おろし烈しく、双方ごつちやの立廻りあつて、上下へ切結びながらはひる。

覺範　かねて其名は聞き及ぶ龜井片岡居る上は、此の堂内に判官義經、隱れ居るに相違なし、いで引出して討取りくれん。

〽覺範跡に莞爾と笑み、

忠信　參るに及ばぬ此方より、それへ參つて勝負をなさん。

〽身構へなして入らんとなす、堂中にても聲あつて、

〽呼はる聲と諸共に、雲を起せし龍頭兜も晴と緋縅の、鎧まばゆく立出づれば、覺範得たりと打悦び、

ト此内堂の内より以前の忠信、鎧兜にて出で、太刀を拔き持ち、きつと見得、覺範此體を見て、

覺範　さてこそ汝は義經ならん、其名を名乘つて勝負なせ。

忠信　如何にも汝が推量の如く、清和源氏の末流たる、左馬頭義朝が九男源判官義經、此所に待受けたり、我と思はん奴儕は、名乘り合せてそれへ出よ。

覺範　おゝ、よくぞ其名を名乘りしぞ、斯くいふ我は横川の禪司覺範なり、御身の首級は申し受けしぞ。

忠信　やあ、汝如きの手に合ふべき某ならねど雪中を、尋ね參りし殊勝さに、報謝の爲の布施物に、覺

えの一太刀振舞ひくれん。

覺範　シャ、小賢しき其の雜言、世にある時は判官でも、落目となれば餌をあさり、塒に迷ふ鳥よりも脆き翅の日蔭武者、飛行の力もあるまいが。

忠信　その飛行より修行者へ、報謝の手の内受けて見よ。

覺範　言ふにや及ぶ。

忠信　いざ。

兩人　いざ〳〵。

〽只一薙と覺範が、すくひの薙刀飛び違へ、はッしと切込む早業に、心得たりと受け流し、まんじ巴とふりしきる雪にきらめく劍戟に、扱ひかねてたぢ〳〵、附入る此方も踏み辷り、双方尻邊にどうとなり、

此内兩人よろしく立廻り、双方へ別れどうとなる、日覆より雪を降らし兩人雪に手先きのこゞえる事などあつて、又立廻る。よき程に上下より、以前の法師武者六人出來り、此體を見て、

河倉　さてこそ判官、

六人　義經なるか。

覺範　汝等も加勢をいたせ。

六人　心得ました。

ト多勢に又も氣を引立て、縱横無盡に切廻る必死の働き烈しくも、肩口さつくと切下げたり、ト此内忠信六人を相手にごつちやの立廻りあつて、トゞ六人を切倒す、覺範薙刀を取つて立向ひ、兩人よろしく立廻り、忠信覺範の肩先きを切る、覺範どうとなる、忠信太刀を振上げ双方引張りの見得、烈しき鳴物にて、道具廻る。

(裏道谷間の場)――本舞臺一面前へ出して高足の二重、嶮岨なる岩組の蹴込み谷造り、舞臺前裾通りへ一面に雪幕を張り、此蔭へ人の落ちる誂へ、正面の後山又山を見たる切出しの遠見、上下岩組の張物にて見切り、諸所に杉の梢を見せ、二重へ一面に雪布を敷詰め、總て裏道谷間の體、爰に以前の重清、經清抜身を持ち立掛り、是れを法師武者四人同じく抜身を持ち取巻いて居る、此見得雪おろし、早鐘の音にて道具留る。

一　谷へ出るとも知らずして、浮々是れへ參りし兩人、

二　この行く先きは數丈なる、谷間へ落ちて死ぬより外。

三　逃げ道のなき谷造り、跡へ歸らば知らぬこと、
四　一方道を取仕切れば、最早わいらは袋の鼠、
一　叶はぬ所と、
四人　覺悟なせ。
重清　やあ、行先きなくんば汝等を、案内させて打ち通らん。
經清　命が惜しくば逃げ歸り、圍みを開いて通し居らう。
一　いや、引かれ者の小唄とやら、
二　袋の鼠となりながら、
三　まだ〱往生仕居らぬか。
四　いで、其儀なら、
四人　討取りくれん。
重清 經清　何を小癪な。

ト是れより大小の入りし烈しき鳴物になり、重清、經清四人の法師武者を相手によろしく立廻り、ト立廻りながら下手の山組の蔭へはひる。

〽追うて行く、道の嶮岨に谷間へ臨む谷とも白雪や、從者を案じ義經が、

ト誂への鳴物になり二重の上手より以前の義經太刀を拔き持ち出て來る、是れを幕明きの河倉法眼、醫王禪司、岩本法橋、治部禪司の法師武者薙刀を持ち、追掛け出來り、ちよつと立廻り、義經きつとなり、

義經　やあ、主君の御先途見屆けんと、此の裏山へ分け入つたる、佐藤四郎兵衛忠信に、刃向ひ立てをいたしなば、汝等殘らず撫切りなるぞ。

河倉　いや小賢しくも名乘りしよな、我々共は一山の衆徒の内でも一方の、固めを預かる河倉法眼。

醫王　又われこそは藥師堂の、大衆と呼ばれる醫王禪司。

岩本　かくいふ我は、北谷の麓を圍みし岩本法橋。

治部　我は南の登山口を守りし、大衆の治部禪司。

河倉　汝に連立つ奴儕は、是れなる谷へ追ひ詰められ、

醫王　數丈の谷へ轉げ落ち、五體は忽ち粉微塵、

岩本　もう今頃は血嘔吐をはき、相果てたるに相違ない。

治部　命が惜しくば我々に、三拜なして、

四人 縄に掛かれ。

〽家來が最期と聞くよりも、轟く胸を押隱し、（ト義經思入あつて氣を替へ、）

義經 やあ味方の面々果てしとて、恐怖いたして討たれんや。いで其儀なら汝等を、是れなる谷へ切込んで、戰死の者の手向にせん。

四人 小癪なことを。

〽双方一度に薙刀の手練は斯くと打掛くれば、其身をひらりと雲隱れ、いつか後處に有明の月かと見れば鼻先きへ、きらめく太刀の稲妻は、巴にめぐる雪よりも早き進退懸引に、人間業とは見えざりけり。

ト是れへ雪おろし誂への鳴物をあしらひ、日覆より雪を大分に降らせ、義經四人の中をかひ潜り、小手の利いたる面白き立廻よろしくあつて、トゞ河倉法眼を切倒し、跡三人を前なる谷へ切込み、谷へ足を踏み掛け、きつと見得、此時又早鐘を撞き立てる。

〽山野に響く早鐘の、四方をきつと打見遣り。

ト是れより上下打合せの合方になり、義經思入あつて、

義經 彼等を相手に餘程の間、是れにて挑み爭ふうち、臣下の者が一人も跡より馳せ附け參らぬは、惡

僧脩の言ひし如く、是れなる谷へ追ひ詰められ、最期を遂げたるものなるか、さるにても間道の樣子見定め歸らんと、先刻裏手へ立越えし、あの武藏坊は如何せしか、是れも多勢の法師等に、取圍まれて無念なる最期を遂げはいたさぬか。

〽案じる後へ河倉が、窺ひ寄つて組附けば、難なく足下に踏み敷きて、

ト此内以前の河倉法眼起上り、よろぼひながら義經に組附く、ちよつと立廻り足にて踏み敷き、

雪に埋もれ野も山も皆一面の白妙に、地の利乏しき吉野山、斯く八方を十重二十重取圍まれし上からは、假令如何程働くとも翅無ければ此圍み、脱るゝ事は難かるべし、最早絕體絕命なるわえ。（ト河倉法眼刎返して掛かるをよろしく引附け、）斯くなる事と存じたら、忠臣佐藤忠信を我が身代りには立てまじきに、源家の棟梁義朝が九男と生れし甲斐もなく、讒者の爲に疑ひ受け、此山中にて法師脩の刃に掛るは殘念なり。（ト是れを聞き河倉法眼びつくりして、）

河倉　さてこそ汝は、判官よな。（ト振解いて組附くをよろしく立廻り、同じく谷間へ切込み、）

義經　いで潔く自殺なし、是れなる崕より谷間へ落ち、最期の跡を隱すべし。

〽どつかと坐して肌寬げ、あわやと見えし其所へ、

ト義經よろしくこなし、此時下手山組の蔭にて、

重清　我が君、暫くお待ちなされませう。
義經　やゝ、何と。
〽遙あなたを打見れば、夜目にもそれと雪明り、四人の從者打連れ立ち、こなたを望み馳せ來り、（トばた／＼になり、下手より以前の重清、經清、義盛、經俊連立ち出來り。）
四人　暫くお待ち下さりませう。（トよろしく留める。）
義經　正しく死せしと思ひし汝等、さては無難であつたるか。
重清　山法師等に取圍まれ、是れなる谷へ追詰められ、
經清　既に危き其所へ、武藏坊が引返し、
義盛　助力いたしてくれしゆゑ、向ふ奴原追ひ散らし、
經俊　君の御在所こゝかしこ、尋ね捜してござりまする。
義經　して武藏坊は、何れに居るぞ。
重清　見る間に積る雪道ゆゑ、
經清　踏違へぬやう間道の、
義盛　裏手口にてお待ち申すと、

經俊　かしこに控へ居りまする。
義經　然らばそれへ立越えん。
重清　君には既に御自殺と、
經清　お覺悟ありし其所へ、
義盛　駈付けお止め申せしは、
經清　危き事でござりました。
〽折からぱつと飛去りし、鳥の羽音に打驚き、
ト二重の後より指金の白鳩一羽出て、下手の山蔭へ飛び去る、皆々びつくりなし、
重清　塒の鳥で、
四人　あつたるか。
義經　鳩は弓矢の守護神たる、正八幡の使はしめ、
重清　扨は主君へ、
四人　加護ありてか。
義經　はて、悦ばしき、（ト太刀を取つて、鞘へ納める木の頭）吉兆ぢやなあ。

へ勇み進んで。

ト皆々引ばりよろしく、雪おろし、カケリにて、

ひやうし幕

三幕目

都室町小柴宅の場
梶原景季旅館の場
堀川御所切腹の場

〔役名――江間の小四郎義時、佐藤四郎兵衛忠信、梶原源太景季、小柴入道淨雲、肝煎佐五兵衛、飛脚久助實は惡者久太。小柴の娘小車、佐五兵衛女房おため、同下女お賤、其他。〕

〔小柴入道宅の場〕――本舞臺四間の間常足の二重奥深に飾り、上手一間の附屋體、襖立切りあり、下手一間玄關の入口、本庇式臺、正面の鏡白地の襖、玄關の下手臺所口の心にて板塀の入口、眞中の二重正面上の方一間の床の間、續いて地袋違ひ棚、下の方二間の間襖立切り、出入りあり、平舞臺玄關と座敷の間柴垣にて見切り、總て四條通り小柴入道宅の體、上手の床の間に古代の注連を飾り、好みの掛物、此前に蓬萊の喰積、瓶子の三方、干肴の折など飾り、其外誂への碁盤を置き、下手玄關の

所にお賤の下女古風のこしらへにて住ひ、式臺の所にお爲やつし裝の女房にて腰を掛け、此下手に久助旅裝の飛脚にて立掛り居る、此見得通り神樂の鳴物、鳥追の唄にて幕明く。

お賤　どなたかと思つたら、佐五兵衛どのゝお内方、なんぞ御用でござりまするか。

お爲　外の事でもござりませぬが、今此お人がこちら様のお宅を搜して居りましたから、わたしが教へて上げようと、連立つてまゐりました。

お賤　見ればどうやら、旅がけのお飛脚さんでござんすが、どれからお出でゞござります。

久助　左様なればこちらのお宅が、小柴入道淨雲様のお屋敷でござりますか。

お賤　小柴は手前でござりますが、してどちらからお出でゞござりまする。

久助　わしは大和の吉野から、佐藤様といふお方に頼まれまして、遙々と使ひに來たのでござりまするが、こちらのお宅のお娘御にお目に掛つてお話しが、いたしたうござりますから、お取次をお頼み申します。

お賤　佐藤様とおつしやるは、若しや常からお孃さまが、お慕ひ遊ばすお方では、

お爲　わたしも今方此お方に、若しやさうではあるまいかと、お聞き申せば忠信様の、お使ひとやらいふことゆゑ、それで態々お宅まで一緒に附いて參りました。

お賤　それはよくぞ御親切に、御案内をして下さりました。暫くお待ち下さりませ。（ト座敷の方へ來り、）申しお孃さま。ちよッとお出で遊ばしませ。

ト呼ぶ、是れにて合方きつぱりとなり、奥より小車、古風なる娘、好みのこしらへにて出來り、

小車　テモあわたゞしうわしを呼ぶは、何ぞ急な用かいなう。

お賤　お悦び遊ばしませ、お案じ遊ばす忠信樣の、御安否が知れました。

小車　えゝまあ、そりやほんの事かいなう。

お賤　使ひのお方がお前さまに、御直談がいたしたいと、玄關へ參つて居りますれば、是れへお通し遊ばして、樣子をお尋ねなされませ。

小車　それは何より嬉しい便り、是れへ通してくりやいなう。

お賤　佐五兵衛どのゝお内儀が、お宅を教へてくれましたれば、一緒に是れへ通しましても、お差合ひはござりませぬか。

小車　お爲どのなら遠慮はない、一緒に是れへ通すがよい。

お賤　畏りましてござりまする。（ト玄關の方へ來り、）是れはお待遠でござりました、さあ／＼あちらへお二人とも、お通りなされて下さりませ。

お爲　左樣ならわたくしも、お孃さまにお目に掛り、御機嫌を伺ひませう。

久助　お臺所は何れだか、足を洗はせて下さりませ。

お賤　それから廻つて下さりませ。

ト是れにてお爲は玄關より上り、久助は玄關脇へはひる。お賤同じく正面の襖の内へはひる。お爲はこちらへ來り、下に居て、

お爲　大きに御無沙汰をいたしましたが、お孃さまにはいつもながら、御機嫌よろしうござりまするか。

ト辭儀をする。

小車　おゝお爲どの、こなたにも例ながらお達者で、聞けば此家を尋ぬる者を態々敎へて下されし由、御苦勞にござりまする。

お爲　いえ、どうせこちらのお宅樣へ、御無沙汰をいたしましたゆゑ、上りませうと思つた所、丁度よろしうござりました。

ト爰へ玄關の正面より、以前のお賤案内して久助出來り、兩人こちらへ來り、下手へ住ひ、

お賤　此お方が忠信樣の、お使ひの方でござりまする。

小車　見れば遙々遠方より、使ひにお出でのお人と見え、旅がけの此お使ひ。

久助　おつしやる通り私は、大和の國の吉野山で、木樵をいたして居りまする、久助と申しまする、正直者でござりまするが、佐藤樣から頼まれまして、遙々遠き此都へ參りましてござりまする。

お篶　さうして佐藤忠信樣から、頼まれてござつたとは、お手紙でもお孃さまへ、お屆け申しにお出でのかえ。

久助　いえ、手紙などを持つて居ては、惡僧儕の詮議に逢ひ、露顯の端だとおつしやつて、御傳言を承り、お孃さまへ直き〳〵に、申し上げに參りました。

小車　そんなら人の噂に違はず、忠信樣には世を忍ぶお身の上ゆゑお手紙も、容易に人に頼まれぬ御窮命をなさるゝとな。

お曉　してお前さんに御傳言を、なされましたは如何なる譯、早くお話しなされませ。

ト是れにて久助思入あつて、

久助　申しましてもお差合ひに、なることはござりませぬか。

お篶　わたしはこなたへお出入りの、人請人の女房ゆゑ、どんな大事を聞かうとも、決して他言はしませぬから、遠慮な者ではござりませぬ。

小車　丁度折よく下部達も使ひに出て居合さねば、外に障りは少しもない、早う話して下さりませ。

久助　それではお話し申しませう。(ト合方きつばりとなり)定めて此都でも、専ら噂がござりませうか、義經様主從が、吉野山にて一山の惡僧儕に取圍まれ、御難儀をなされし時、忠信様には私のおばら家へお立寄りにて、都四條の室町に小柴入道淨雲とて有徳に暮すお宅あり、其息女の小車とのとは、都在番の徒然に馴染を重ねし中であつたが、手前も今度の難戰に討死をする覺悟なれば、折を見合せ都へ行き、其の小車といふ者に直談をした其上で、言交したは是れまでの縁とあきらめくれるやうに、そちからよしなに傳へくれと、事を分けたるお頼みに、まだ殘黨の詮議にて嚴しい中をやう〳〵と、脱れて使ひに參りました、譯と申すは娘御さま、此通りでござりまする。

小車　そんなら人の噂に違はず、忠信さまには吉野にて、あのお討死をなされましたか。

　　トハア、と泣き伏す。

お爲　實は先頃その事を、人の噂に聞きましたが、慥な證據がござりませねば、よもやと思つて居りました。

お賤　さうお聞きなされましては、只何事も是れまでの、御縁とお思ひなされまして、おあきらめなされますより、外に仕樣はござりませぬ。

小車　慥な事を聞く上は。(ト立ち掛るゆゑ、お賤あわてゝ留め、)

お賤　こりやお孃さまには血相して、何れへお越しなされまする。

小車　父上樣へは濟まざれど、髮を下して尼となり、あなたの菩提を問ふ心。

お爲　いえ〳〵それはお氣が早い、まだ十六か十七の、花の盛りのお孃さま、髮を下すのなんのとは、そりや御短慮でござりまする。

小車　いえ〳〵留めて下さんすな。

お爲
お賤　まあ〳〵お待ちなされませ。

ト三人爭ひ居る、爰へ上手屋體の襖を明け、淨雲坊主鬘好みのこしらへにて出來り、

淨雲　あのこゝな、不孝者めが。（トきつと言ふ。）

お賤　それでは、お耳に、

お賤
お爲　入りましたか。

淨雲　よくぞ兩人止めくれしぞ。（ト下に居る、小車も是非なく下に居る。合方きつぱりとなり、）委細はあれにて聞いて居りしが、そりやわれとても親心、一旦娘が世話になり恩義を受けし忠信ゆゑ、假令國には然るべき妻子があるとも日陰の身になり、此世に生きて居る事なら、時節を待つて末始終は聟にも仕度くは思ひしが、かゝる慥な證人あつて、討死なせしと聞く上は、あきらめるより外は

ない、それを自儘に剃髪なし。尼にならうの何のとは、言はうやうなき不孝者めが。

ト是れにて久助思入あつて、

久助 それではあなたが此お宅の、御主人様でござりまするか、頼まれまして私も捨ては置かれず遙々と、お知らせ申しに參りましたが、此お歎きを見ましては、お氣の毒樣でござりまする。

淨雲 遠路の所大儀でござつた。(ト紙に包みし金を出し、)些少なれども旅中の手當て、あの仁へ遣つて下され。(トお爲へ渡す。)

お爲 旦那様よりお手當に、是れをお前に下されば、お禮を申して歸りなさんせ。

久助 それでは旅中のお手當に、お心附を下さりますとか、有難いことでござりまする。(ト金を請取る。)

淨雲 都の名所を見物なし、緩々歸國いたされよ。

久助 思ひ掛けない下され物で、都見物が出來まする。左樣なれば自由ながら、お暇いたすでござりませう。

お爲 何でも人は正直の道を守れば、善い事が其身に報ふとやらで、お前も都へ來たからは名所古蹟を見物して、國への土産にしなさんせ。

久助 左樣いたすでござりませう。是れはどなたも、おやかましうござりました。

お賤　どれ、送つて上げませう。

ト久助皆々へ辭儀なし、お賤附いて下手玄關の襖の内へはひる。

お爲　わたくしも自由ながら、お暇いたしませう。

浮雲　然らばそちは梶原氏へ、右の次第を傳へくれよと、夫佐五兵衛へ申してくりやれ。

お爲　梶原樣とおつしやりますは。

浮雲　はて、左樣申せば分ることぢや。

お爲　何事か存じませぬが、左樣申すでござりませう。

ト玄關の方へ來て下へおりる、此時玄關の脇より以前の久助出で、

久助　姉御、首尾よく。（ト言ふを冠せて、）

お爲　あこれ、（ト押へ、）默つて歸んな。

ト兩人思入あつて花道へはひる。是れを玄關の襖の内よりお賤窺ふ事よろしく、跡に小車顏を上げ案じることなしにて、合方になり、

小車　父上樣へ伺ひまする、今佐五兵衛に此事を梶原氏へとおつしやつたは、かねて仰せ聞けられました、再縁の事ぢやござりませぬか。

浄雲　いかにも、舊臘此都へ、鎌倉よりお上りありし景時殿の長男たる、梶原源太景季殿、そちへ疾くより懸想ありて、妾にほしいと言ひ入れしが、一旦世話になりたる佐藤忠信ある上は、左樣な儀は斷りくれと、我が子の詞もだし難く今日まで見合せ居つたるが、武運拙く忠信が討死せしと慥なる知せのありしを聞く上は、片時も早く再緣の取極めなして我も亦、老後の安心せねばならぬ。

小車　其儀ばかりは父上樣、どうぞお許し下さりませ、貞女兩夫に見えずと、申しますれば、私も、尼法師にはなられませいでも、一生女子の操を立て後の夫を迎へませず、あの世の緣を樂しみに父上樣の御介抱を、いたす心でござりますれば、景季どのゝお世話になる、其儀ばかりは幾重にも、お許しなされて下さりませ。

浄雲　いや、それにては忠信へ操の道は立つであらうが、大恩受けし此父へ不孝となると申すもの、是れが夫婦といふではなし、在番中の慰みに世話になりたる當座の花、國へ歸れば歴然とした妻子のあるを知りながら、操を立つるはたはけなり、其義理立より年老いし、父へ此世で孝道を立てずいたして大恩の、報いは何れでいたし居る、血筋を絶し此家名潰すをそちは厭はぬか。

小車　いえ、左樣ではござりませねど、人もあらうに忠信殿の御主君、判官義經樣を讒言せしと聞及ぶ梶原殿の御子息とは。

淨雲　はて、景時は伊豫殿を讒言せしかは知らされど、親子といへど心は別々、そちを懸想の景季は忠信といふ世話をせし、主のある身と聞き及び、殘念ながらなき緣とあきらめしとやら申すのは天晴見上げしまことの武士、殊更美男の人物にて、あの忠信に勝るとも劣らぬ器量のよき相手、そちに不足はない筈ぢや。

小車　いえ／＼何とおつしやつても、其儀ばかりは父上樣、お許しなされて下さりませ。

淨雲　すりや是れ程に申しても、そちは得心いたさぬとか。

小車　其替りには何事も、あなたの仰せは背きますまい、景季殿のお世話になる、其儀ばかりは父上樣どうぞお許し下さりませ。（ト是れにて淨雲思入あつて、）

淨雲　おゝ、其儀なら是非がない、我も先日佐五兵衛より申送りし事ありて、萬一世上の噂の如く忠信討死なせしなら、娘を妾に遣はさんと約せし詞は反故にはならぬ、景季への言譯に、切腹なして相果てん。

小車　左樣な譯なら私へなぜ仰しやつては下さりませぬ。御一存にてお約束をなされますとは父上樣、お胴慾でござりまする。

淨雲　おゝ、胴慾と言へばいへ、現在父を見殺しに、いたすを譽れと思ひ居るか。

ト諸肌を脱ぐゆゑ、小車びつくりして、

小車　それではあなたは、お覺悟にて。

淨雲　おゝ、切腹するから留め居るな。（ト刀の柄へ手を掛けるを、小車留めて）

小車　まあ〳〵お待ち下さりませ。

淨雲　留めるとは得心いたせしか。

小車　ぢやと申しまして。

淨雲　然らば留めずと退いて居よ。

小車　いえ〳〵、退いては居られませぬ。

淨雲　得心せしか。

小車　さあ、

淨雲　さあ。

兩人　さあ〳〵〳〵。

淨雲　えゝ不孝者めが、退き居らぬか。

ト兩人爭ひ居る、爰へ下手の襖を明け、以前のお賤出で、これを留め、

お賤　先づ〳〵お待ち遊ばしませ、委細はお次で伺ひましたが、旦那様の思召しに、少しも御無理はござりませぬ、又お孃さまの御再縁を兎角にお進みなされませぬも、御尤もではござりまするが、足らはぬながら私が御異見いたして御得心の、參るやうにいたしませう、暫時の間此賤にお任せなされて下さりませ。（トよろしく留める、是れにて淨雲思入あつて、）

淨雲　左樣にそちが頼むなら、任せてやるまいものでもないが、きつと得心いたさすか。

お賤　不束者の私ゆゑ其お請合は出來ませぬが、女子は女子同志とやら、よく御得心の參るやう、御異見いたすでござりませう。

淨雲　然らばそちに任せ遣はす。

お賤　すりや、お聞濟み下さりますとか、それにて安心いたしました。

小車　いえ〳〵そなたは安心でも、わしや安心がならぬわいなう。

お賤　はて、何事も私にお任せなされてあなたには、お奥へお出でなされませ。

小車　とはいへ、操を破りては。

お賤　はてまあ、お出でなされませ。

ト唄になり、小車を連れてお賤上手屋體の内へはひる。淨雲跡を見送りて、

浄雲　望む所のよき相手、斯くまで嫌ふ娘が片意地、どうか得心させたいものぢや。

ト刀を鞘へ納め肌を入れる。又通り神樂の鳴物になり、花道より景季、好みの鬘袴大小忍びのこしらへにて出る、跡より佐五兵衞袖なし羽織達附裝の肝煎の頭のこしらへにて供をして出來り花道にて、

景季　こりや佐五兵衞、然らばいよ〳〵忠信儀は、先頃よりの噂に違はず、吉野の奧にて取圍まれ、討死せしに相違ないか。

佐五　へい、私も慥なる證據を聞かぬ其內は、うつかりお世話も出來ませぬゆゑ、差控へて居りましたが、先刻あれなる小柴の宅へ忠信が今際の際に頼みしといふ飛脚が參り、慥な事を知らせましたを女房めが聞いて歸り、それから早速吉左右を申し上げてござりますれば、毛頭相違はござりませぬ。

景季　我も主ある娘と聞き、懸想の念は止みしかど、煩惱の犬追へども去らず、心を苦しめ居つたるによくぞ早速知らせてくれしぞ。

佐五　定めて左樣と存じまして、取るものも取りあへず、申し上げてござりまする。

景季　何は然れ、先方にても、忠信が討死と知れ娘も得心せしとあれば、我に於ても滿足ぢや。

佐五　善は急げと申しますれば、お給金よりもお預りの、金子を土産になされまして、先づお取極めな

なされませ。

景季　いや、是れまでは取急いだが、宅へ這入るは何とやら、初見參ゆゑ氣が咎める、其方先きへ這入つてくりやれ。

佐五　流石は御大身のお懷子、戰場萬馬の御先陣では、後れを取らぬ若殿様も、又この道の御先陣は、別なものでござりまする。

景季　今日ばかりは先陣を、そちに讓らにや相ならぬ。

佐五　左樣なら、御免下さりませ。（ト右の鳴物にて佐五兵衞玄關の前へ來り、）賴まう。

淨雲　どうか佐五兵衞の聲のやうぢや。（ト上手へ向ひ、）賤は居らぬか、案内があるぞ。

　　ト大きく言ふ。

　　ト呼ぶ。上手の屋體よりお賤出來り、

お賤　お客來でござりますか。（ト下手へ出て佐五兵衞を見て、）あれ、佐五兵衞どのではござんせぬか、なぜお勝手よりはひらしやんせぬ。

佐五　わしばかりなら例のやうに、御勝手口からずつとはひるが、お客様をお連れ申した。

お賤　ほんに、どなたかお連樣が。

佐五　梶原樣をお連れ申したと、旦那樣へ取次いで下さい。（ト是れにてお賤景季をよく〳〵見て、）

お賤　そんならあなたが。（ト思入あつて氣を替へ、）どれ、左樣申しませう。（トこちらへ來り下に居て、）旦那樣、佐五兵衞が參りまして、梶原樣をお連れ申したと、お玄關に控へ居りまする。

淨雲　なに、景季殿が入來とな。

お賤　只今お見受け申しましたが、それは〳〵お立派な、若殿樣でござりまする。

淨雲　それゆゑ娘に得心させ、是れへ通らばお湯なりと、あれに言附け運ばせよ。

お賤　どれ、左樣ならお孃さまへ。（ト上手へ行かうとするを、）

淨雲　あこれ、御案內をしてからのことぢや。

お賤　ほんに、左樣でござりました。（ト玄關の方へ來り下に居て、）あちらへお通り下さりませ。

佐五　左樣なら佐五兵衞が、御案內いたしませう。

景季　其方よきに計らひくりやれ。

ト佐五兵衞先きに座敷の方へはひる。お賤は景季へ目を附け好い男だといふこなしあつて、上手屋體の內へはひる、淨雲景季を出迎へ、

淨雲　先づ〳〵、あれへお通り下さい。

景季　それでは餘り上座ゆゑ。

佐五　はて、御遠慮なく、あれへ／＼。

ト是れにて景季上座へ住ふ、佐五兵衞は下手へ住ふ、淨雲よろしく住ひ、合方きつぱりとなり、

淨雲　御意得まするは初めてなれど、豫て是れなる佐五兵衞の、案内により其許のお面は存じ居る、手前は小柴淨雲でござる、よくぞ御入來下された。

景季　これは／＼御丁寧なる御挨拶にあづかり申す、手前は梶原源太景季、是れなる世話人佐五兵衞より申し入れたる、御息女の儀を御承引下されし由、此末共に幾久しく、緣者の因みをお結び下されい。

佐五　お取極めもいたさぬ内に、御先方の若殿樣をお連れ申すは何とやら、早まるやうにはござりまするが、此方樣でもあちら樣でも疾よりの御懇望の事なれば、故障のあらう筈なければ、先づ兎も角も若殿樣を、お連れ申してござりますれば、差越しました御對面は、初春だけにお目出度う御承知なされて下さりませ。

淨雲　おゝ、左樣とも／＼、善は急げと申すからは、斯樣な事は早いがよい。（ト上手へ向ひ）こりや／＼娘何れに居る、是れへ參つて景季樣へ、お持成しをいたすがよい。（ト呼ぶ、上手襖の内にて）

お賤　お嬢さま、是れをお持ち下さりませ。

ト聲して以前の小車　高茶臺へ茶椀を載せしを持ち、お賤に連れられて悄々として出來り、小車厭がるを無理に勸めて、景季の前へ茶を出させることよろしく、小車差し俯き居るゆゑ、景季こなしあつて、

景季　どうか心に叶はぬ樣子。（ト言ふを冠せて、）

佐五　いえ、耻かしがつて居られますのが、則ち直打でござりまする。

淨雲　こりや娘、御挨拶をいたさぬか。

小車　はい。（トやはり差俯き居る。）

お賤　かのお方樣でござりますれば、お耻かしい事はござりませぬ、ちやつと御挨拶を遊ばしませ。

小車　お初にお目もじいたしまする。（ト言ひにくさうに挨拶をする。）

景季　御身は初めて逢はれしならんが、我は祇園の社にて再度御身を見受け居れば、初對面とは思ひ申さぬ。

佐五　先づ御挨拶が濟みし上は、お預りのお土產を。もしお賤どの、どうかお盆を貸して下さい。

お賤　はい／＼畏りました。（ト床の間にある折敷を持つて出で、）是れでよろしうござりますか。

佐五　よいとも／＼、丁度よい。（ト懷中より紙に包みし目錄を出して載せ、）これは御先方樣のお土產、幾久

しく御受納下さりませう。（ト出す、浄雲これを見て、）

浄雲　御丁寧なるお贈物、幾久しく受納いたす、景季殿忝けなう存ずる。

景季　些少な手土產御受納下され、其お禮では痛み入ります。

ト此内小車始終欝いで居ることよろしく、佐五兵衛これを案じるこなしあつて、

佐五　先づお目出度くお取極めの、お杯をなされまして御安心をなさいまし。

浄雲　何さまそれが肝要ぢや、申さば婚儀も同樣なれば、銚子、屠蘇や蓬萊を、これへ直してお目出度く、どうか一獻お過し下され。（ト是れを聞き、小車怺えかねしこなしにて、）

小車　はあゝ。（ト泣き伏す。）

お賤　あゝもしお孃さま、お癪が起りましてござりまするか。

ト態と紛らすこなしにて、介抱して居る、景季此體を見て思入あつて、

景季　祝儀の杯いたすと聞き、歎きに沈む此の樣子。

浄雲　あいや、彼れのは嬉し涙、いやさ、嬉しいに附け悲しいに附け、兎角涙の先立つは、女子の常とは言ひながら、さて／＼不興な奴ではある。（ト言ひ紛らすこなし、佐五兵衛氣の毒なるこなしにて、）

佐五　何であらうとお取極めのお杯さへ濟んでしまへば、最う御安心と申すもの、少しも早くお杯事

をなされまするがよろしうござりまする。

景季　いや〳〵それは望ましからず、察する所小車どのが、只今落淚いたされしは、一旦情に預りし忠信殿が討死せしを、思ひ出してのことならん。

淨雲　いや、左樣ではござらねど。

景季　いや、某の手前を兼ねお隱しあるには及ばぬ事、操を守る婦女子の身は、こりやさうなくては叶はぬ事、かゝる心底見る上は、猶々以て賴もしゝ。

淨雲　すりや御不興なる落淚も、お氣にさへられませぬとな。

景季　いかで不興にござらうぞ、目見得をいたすを身の晴と、悅び勇む笑顏より、手前は賞美いたしてござる。

佐五　其お詞で佐五兵衞も、安心いたしてござりまする。

淨雲　然らば何かは取り置いて、先づ御一獻、お杯を。

景季　いや〳〵其儀も御息女の、心決せし其上にて、杯なすとも遲かるまじ、先づ今日は是れまでにて此座は開くと仕らう。

佐五　それでは極めのお杯も、なされませずにお開きに。

景季　はて、申さば祝言同樣なる、固めをなすに此體では。

淨雲　やあ。（トぎつくりなす。）

景季　いやさ、此の貞節も思ひ替へ、自ら進んで杯を、いたすとあるを相待つて、目出度く杯いたすでござらう。

淨雲　然らば暫時奥の間にて、御休息なし下されい。

景季　いや、今晩は大切なる、役目の用事これあれば、最早黄昏心急き、又の再會いたすでござる。

佐五　それでは何れ私が、よい吉左右を御旅館へ申し上げるといたしませう。

淨雲　とはいへ餘り風情なく、

景季　はて、其の御配慮には及び申さぬ。

淨雲　左樣ござれば景季殿。

景季　やがて御緣を結ぶでござらう。

お賤　どれ、お見送りをいたしませう。

佐五　是れは何だかお氣の毒だ。

ト双方辭儀をなし、景季先きに佐五兵衛附いてお賤見送り、玄關の方へ出る、お賤履物を直す、景季

佐五兵衛下へおりる。お賤は座敷へ返る。兩人は花道よき所まで行き、

景季　こりや佐五兵衛、あの樣子では當人は未だ得心いたさぬのぢやな。

佐五　いえ、得心をいたしましたと、申す事ゆゑ早速に、お知らせ申してござりまする。

景季　それぞ所謂媒人口、不得心ならそれまでぢや。

佐五　いえ、それにては私が、中へ入つて相濟みませぬ。

景季　堅固と呼ばれし景季も、戀の奴に使はれたわえ。

ト通り神樂になり、景季先きに佐五兵衛面目なきこなしにて供をして花道へはひる。跡に淨雲腹の立つこなしにて、

淨雲　こりや娘、それへ出い。(ト合方替つて、)何が悲しくて泣き居つたか、杯いたす際に臨み、そちが落涙せしゆゑに景季殿も興を醒し、そこ〳〵にして歸られしは、親に面皮をかゝせる娘、言はうやうなき不幸者めが、おのれは不足に思ふか知らぬが、ちよといたした手土産すら、過分な金子を持參と申し、優にやさしきあの詞、斯樣な相手は又となき緣口なるを落涙なし、不興な面をいたすなどとは、男冥利に盡きたる奴、篤と心を改めて得心したと申せばよし、左なくば最前言ひし如く、切腹なして不孝の罰、忽ち其身に當てゝくれん。(トきつと言ふ。)

お賤　其御得心をおさせ申すも、餘り火急な先方樣の御入來ゆゑにお孃さまへ、御異見いたす間もなく、お輿を催してござりますが、始めてお見上げ申しました梶原樣の御樣子に、成程あれなら旦那樣がお孃さまへ御再緣を、お勸め遊ばす筈なりと存じますゆゑ私も、共々お勸め申しまして、御得心をさせますれば、先づ〳〵暫く私にお任せなされて下されませ。

淨雲　奧へ參つて娘が挨拶、待つて居るから異見をいたし、よき吉左右を聞かしてくりやれ。

お賤　それはよろしうござりまする、先づ〳〵お奧へ旦那樣、お越しなされて下さりませ。

ト是れにて淨雲立上り、

淨雲　如何なる因果で斯樣なる、片意地者が我が娘に、出來たることか苦々しい、然らば吉左右待つて居るぞ。

ト唄になり、淨雲上手の屋體の內へはひる、跡時の鐘になり、東西の窓蓋をおろす。

お賤　春とはいへどまだ短日、つい今の間にとつぷりと、日が暮れてしまうたれば、どれお燈火を點してから、お孃さまへ私が、御相談がござりますから、暫くお待ち遊ばしませ。

ト正面奧へはひる。後に小車愁ひのこなし、床の淨瑠璃になり、

〽後には一人小車が廻る思案に吐息つき、

小車　今更言ふも愚癡ながら、御恩を受けし忠信樣、人の噂に違ひなく、吉野山にてお討死をなさるこ

となら今一度、何故に逢うては下さりませぬ、そりや聞えませぬ、忠信樣。

〽いかに忠義と言ひながら、操を立てし妹と背の緣は假のことならず、百歲千歲變らじと思

ふお方に死に別れ、尼にこそなれ餘所外へ、仕く心はないほどに、

父上樣へは濟まねども、心に誓ひし其中へ、思ひも寄らぬ御難題、假令お賤が異見でも、

〽どう得心がなるべきぞ。

とあつて得心せぬときは、

〽父上樣には御最期と、切つて放せしお詞は此身にかゝる不孝の罪、

こりやどうしたら、よからうぞいなア。

〽そのまゝどうと轉び臥し、思案途方も暮近き鐘も哀れや落人の、人目を忍び編笠に面を包

む忠信が、あたり見廻し立留り、

ト此内花道より、忠信着流し大小逹附草鞋裝にて編笠を冠り出で來り、花道に留り思入あつて、

忠信　まことや人の盛衰は、斯くまで替るものなるか、世にある折は堀川の、御所へ詰合ふ源氏の武士、

都の町を憚りなく、往來狹しと步みし身が、今は日陰の落武者に、天高けれど腰を屈め、厚き大

地も心なく踏み煩ひて身一つの、遣所さへなか〳〵に人目を厭ふ都の町、暮れるを待ちて入込みしも、過ぎし堀川夜討の砌り、本意なき留別いたしたる、彼の小車に面會なし、様子が尋ね遣はしたさ、どうか首尾よく逢ひたいものぢや。

〽玄關へ寄り庭口の、垣の外より差覗き、（ト舞臺へ來り、隔ての柴垣の外より内を覗き、）

それに居るは小車ならずや、但しは下女のお賤なるか。

〽呼ぶ聲さへも憚りて、幽に内へ通ずれば、

ト是れにて小車聞耳立て、びつくりせしこなしあつて、

小車　さういふお聲は、どなたなるか。

忠信　おゝ小車か、忠信ぢや。（ト笠を脫ぐ。）

小車　えゝ、忠信様がお出でとな。

〽焦れし餘り玄關へ、立ち出てぞつと怖氣立ち、

ト小車こちらへ走り出來り、平舞臺へ下り、忠信に取縋らうとして心附き、

えゝお懐しや忠信様、よくぞ此世へお姿を、お見せなされて下さりました。南無阿彌陀佛々〳〵。

〽頭へながらに伏し拜めば、（トよろしくこなし、）

忠信　こりや〳〵小車何をいたす、念佛唱へ合掌なすは、いと忌はしきことなるぞ。
小車　さあ無念の御最期なされしゆゑ、お念佛にて御成佛を、なさるゝお氣はございますまいが、せめてそちらの苦患とやらを、お脱れなさる其爲に御回向申し上げまする。
忠信　無念の最期をなせしとは、そりや誰が事を申すのぢや。
小車　あなたは吉野の山中にて、お討死をなされし由。
忠信　はて狼狽へて何を申す、討死いたして果てし者が、何で尋ねて參らうぞ。
小車　それでは迷うてお出でありし、幽靈ではございませぬか。
忠信　如何にも討死いたさんと、覺悟せしが辛うじて其場を切抜け生き延はり、主君の御先途見屆けんとお跡を尋ね世に潛み、やう〳〵此地へ參つたのぢや。
〽いふ聲音さへ替りなき、樣子に心落着きて、（トよろしくこなしあつて）
小車　さうおつしやればお足も、滿足な御樣子ゆゑ、こりや幽靈ではなかつたか。
忠信　何は格別そちとても、無事で居りしは我が滿足、して舅御にはお替りないか。
小車　其儀に附いていろ〳〵と、お話しがござりますれば、あちらへお通り下さりませ。
忠信　いや世を忍ぶ身の上に、さういたしても居られぬが、樣子を問ひたく思ふゆゑ、日暮を待つてお

となひしぞ。

小車　それなれば尚の事、玄關先きでは面伏、奥には父と賤ばかり、遠慮な者は居りませねば、どうぞお通り下さりませ。

忠信　然らば奥へ通らうが、相成るべくは勝手口より、目立たぬやうにいたしたい。

小車　私とても下へおり、足が汚れて居りますれば、勝手へ參つて御一緒に、足を洗ふでござりませう。

忠信　慥此家の勝手口は、是れから這入ると覺えしなり。

小車　よくお忘れなされませぬ。

〽いそ〳〵立てど疑ひの、晴れぬ思ひに探る足。（ト小車こなしあつて忠信の足を撫で見る。）

忠信　えゝ、何をいたす。

小車　いえ、斯うおいでなされませ。（ト兩人玄關の脇へはひる。）

〽斯くとも知らず燈臺を、點して下女が携へ出で、四邊見廻し打案じ、

ト正面の奥より以前のお賤、三ッ股の燈臺を持ち出來り、小車が見えぬゆゑびつくりして、

お賤　こりや今の間にお孃さまが、何れへやらお出での樣子、もしもの事でもある時は、それこそお家の一大事、お孃さま〳〵。

〽呼び立てられてせはしくも、洗足なして納戸を出で、
ト玄關正面の襖を明け、小車出來り、

小車　あゝこれ、靜にしやらぬか、思ひ掛けなく忠信樣が、此世に存へおいであつて、忍んでお便りなされたわいなう。

お賤　えゝ、それではあの、忠信樣が。

小車　今勝手にてお洗足を、なされておいでなさるわいなう。

お賤　そりやまア、まことでござりまするか。

小車　ほんの噓のと勝手へ行き、御介抱して上げやいなう。

お賤　夢のやうなる其お話し、御樣子を見て參りませう。

〽とかうする間に忠信も、襖押明け入り來り、（ト下手より以前の忠信出て座敷の方へ來て、）

忠信　おゝ、賤も無事にてあつたるか。（トお賤忠信を見て。）

お賤　ほんにあなたは旦那樣、ようまあ御無事でおいで遊ばし、お嬉しいことでござりまする。

ト辭儀をなす、是れにて忠信よろしく住ひ、

忠信　斯樣に生き延び此都へ、再び忍び參らるゝとは、思はざりしも辛うじて、虎口の難を脫れ出で、

山野に隠れ世に潜み、やう〳〵にして間道傳ひ此地へは參りしが、小車始め賤までが、無事で居るとは悅ばしい、して親御たる入道殿にも、御息災にて居らるゝかな。

ト尋ねに小車打萎れ、（ト是れより訛への合方になり、）

小車　父上樣にも御無事にて、一間にお出でなさるれど、再緣せよとのお勸めに、途方に暮れて居りまする。

忠信　すりや某が世に落ちて、賴みなき身となりしゆゑ、再緣せよとお勸めありしか。

小車　今日計らずもお前樣が、吉野の奧にて御最期の折柄お賴み受けし者が、尋ね參つてお討死の、樣子を慥に知らせしゆゑ、再緣せよとの御難題、否む時には先方へ言譯立たねば御切腹と、聞いて有るにもあられぬ思ひ、所詮命を捨てませねば、女子の道が立ちませねば、覺悟極めて居りました。（ト是れにて忠信思入あつて、）

忠信　吉野の奧にて最期の折、賴みを受けし者なりとは、心得難き事どもなり。

小車　そんならあなたは左樣の者を、御存じはござりませぬか。

忠信　佛に仕ゆる一山の衆徒儕すら敵となり、我が主從を取圍み虎穴に落入る吉野山、味方の外に誰一人、賴みといたす者なければ、いかで餘人を賴まんや。

お賤　それで分りしさつきの素振、佐五兵衛どのゝ御内儀と飛脚といひし使ひの者と、どうやら譯のある樣子で、お玄關口で歸る時、うなづき合うて行きましたが、もし佐五兵衛の慾心にて、拵へ事ではござりませぬか。

小車　さうとも知らず父上樣が、まことあなたがお討死を、なされし事と思召し、再縁せいとおつしやれど、景季殿に頼まれて媒介すれば佐五兵衛も、其身の益になる事ゆゑ、拵へ事にて父上まで、お欺し申して縁談を、整へんとせしものなるか。

忠信　何景季が縁談を、佐五兵衛とやらに頼みしとは、當時都に在番と聞く、梶原源太景季なるか。

小車　人もあらうに判官樣を、讒言せしと聞き及ぶ、梶原殿の子息ゆゑ、命を捨ても父上の、仰せを背く身の覺悟。

お賤　それもあなたがお討死を、なされし事と思召し、お勸めあつたでござりませうが、拵へ事と知れましては、又思召しも違ひませう。

小車　どうぞあなたも父上に、お逢ひなされて再縁などを。

お賤　遊ばさぬやう、お執成しを、お願ひ申し、

兩人　上げまする。

樣子を聞取り忠信も、よき相手ぞと打悦び。(ト思入あつて、)

忠信　いや、景季なら某も、共々勸めて遣らねばならぬ。

小車　えゝ、そりや何ゆゑで、

兩人　ござりまする。(ト合方替つて、)

忠信　父の梶原景時は、鎌倉殿へ讒を構へ侫奸邪智の曲者なれど、それに引替へ景季は、仁義を守る誠の武士、我もいつぞや戰場にて、其働きを見受けしが、勇あり義ある壯士なり、それゆゑ親御淨雲殿にも、御身に再緣すゝめしならん、父の詞に隨ひて今ぞ時めく鎌倉方、仁義を守る景季に其身を任せ一生涯、世を安泰に送るのが、父への孝と家の爲、篤と分別いたすがよいぞ。

小車　そんならあなたは私に、愛想をお盡しなされましたか。

忠信　いや〳〵決して左樣な譯にて、身を任せよと勸めはいたさぬ、元より斯くいふ忠信も本國には妻子ありて、在番中の徒然にそちと割なき中となり、遂には深く馴染みしが、所詮此世で妻と呼び、添ひ遂げるといふ譯には參らず、且は今般吉野にて虎口の難は脫れても、主君の御先途見屆けんと、諸國を廻る日陰者、今にも討手に取圍まれ敢なき最期を遂げんも知れず、甲斐なき者に義理立てなし、空しき別れをなさうより、武運に富みし景季に、其身を任せあはよくば、宿の妻とも

相成りて、父へ孝道盡すのが、よき分別といふものぢや、

小車　いえ、それにては父上へ、孝の道は立ちましても、女子の道が立ちませねば、假令命を捨てましても、餘人へ肌は任されませぬ。

忠信　はて片意地な其答へ、よしなき我へ操を立て、父への孝を捨てさせては、淨雲殿へ濟まざれば、是非に得心せねばならぬ。

小車　そんならやつぱり私に、愛想がお盡きなされましたか。

忠信　全く左樣な次第でない。

小車　左樣でなくば私を、お見捨てなされて下さりますな。

忠信　いや、其の片意地には困つたものぢや。

〽暫し詞もなき折柄、（トよろしくこなし、此時上手襖を明け以前の淨雲出來り、）

淨雲　これは〳〵忠信殿、よくぞ諭しく下されしぞ。（ト前へ出る、忠信見て、）

忠信　御親父にもお聞きありしか。（ト合方替つて、淨雲よろしく住ひ、）

淨雲　襖越しに承はつたが、敵なき最期を遂げられしと、聞いて無慚と歎息せし御身が存へ居られしとは、上もなき我が大慶、よくぞお便り下された。

忠信　入道殿にも御老後の、お障りもなく御勇健にて、春をお迎へなされしは、手前に於ても悦ばしく大慶至極にござります。

〽挨拶終れば浄雲が、傍の下女を見返りて、（よろしくあつて、）

浄雲　こりや賤、そちは次へ遠慮いたせ。

お賤　畏りましてござります。

〽次へ遠ざけ何事を、言ひ出づるかと案じられ、（ト此内お賤奥へはひる。小車こなしあつて、）

小車　どうぞお慈悲に父上様、再縁せよとおつしやるは、お許しなされて下さりませ。

浄雲　何かさて忠信殿の、斯く存命にておはすれば、いかで再縁勧めんや。

忠信　して父御親父入道殿の、御所存は如何でござる。

〽尋ねに浄雲聲ひそめ、

浄雲　他聞を避けてお手前へ、お談じ申すに外ならず、此家の内へ人知れず、お匿ひ申さん爲め。

忠信　何と言はるゝ。（ト合方きつぱりとなり、）

浄雲　媒介の者私慾に耽り、拵へ事とも存ぜずして、御身が討死ありしと聞き、娘を一生埋れ木にいたすも不便と思ふゆゑ、仁義を守る武士と、かねて噂に聞き及ぶ梶原景季、我が娘を望むとあるを

幸ひに、得心させせんと勸めしかど、虚實分りて其許が無事で此家へ便られしは、此上もなき我が悅び、一旦娘がお世話になり、御恩を受けし上からは、一命に替へ家に替へ、此家の內へ人知れず匿ひ置いてかほどまで、慕ふ娘の貞節を立てさせ遣りたき親の慈悲、是非に御承知下されい。

〽打つて替りし言の葉を、聞く小車は嬉しげに、

小車　ても有難い思召し、それで此身の望みも叶へば、どんな御無理があらうとも、決して背かぬ父上樣へ、孝行盡すでござりませう、忠信樣にも父上へ、孝行盡して下さりませ。

〽笑みを含みて差寄れど、忠信更に悅ばず、

忠信　いや折角のお詞ながら、此忠信は御主君の、御先途見屆け諸共に、討死いたす覺悟ゆゑ、此家へ隱れ居る事は望む所に候はず、又隱す事が漏れ易しと、露顯とならば御難儀を、掛けねばならぬ尋ね者、何卒御親父入道殿にも、再緣の儀を小車へお勸め下され御老後の、御無難お計り下されい。

淨雲　いやお手前が世になくば、再緣の儀も進めんが、かゝる立派な英雄に、一旦お世話になりし娘、再び緣を組むべきやうなし、然らばせめて當分の內、此家にお忍び下されて、兎にも角にも淨雲が惡しきやうにはいたさねば、娘不便と思されて、情を掛けて下されい。

〽慈愛に絡む老の身の、勸めに否と言ひ兼ねて、忠信答へあらざれば、娘は猶も進み寄り、

トよろしくこなしあつて、

小車　父上樣もあのやうに、おつしやりますれば忠信樣、どうぞ不便と思召し、此家にお忍び下さりませ。

忠信　入道殿まで其樣に、仰せ下さる御親切、否むも本意ならざれば、先づ兎も角も今宵一夜は、お世話になるでござりませう。

淨雲　すりや御逗留下さるとか、それにて娘の望みも叶ひ、我に於ても悅ばしい。

小車　是れと申すも父上樣のお情お慈悲のお詞ゆゑ、有難い事でござりまする。

忠信　さりながら餘人と違ひ、日陰者なる手前ゆゑ、御心配の程嘸かしと、お氣の毒に存じまする。

淨雲　何の〳〵此方より、お賴み申す程なれば、氣の毒な儀がござらうぞ、娘も今宵は久方振り、澤山馳走を、いやさ、積る話しをいたすがよい。

〽巧みと知らぬ娘氣の、今日はどうやら面はゆげ、入道心に目算なし、（ト宜しくこなしあつて）然し媒介いたしたる、佐五兵衛が參らぬやう、斷り言つて參らにやならぬ。

小車　それならば可內が、戻りましたら早速に、使ひにお遣りなされませ。

浄雲　いや使ひでは佐五兵衞めが、容易に承引いたすまい、拵へ事をいたせし事共、それと言はずに痛めつけ、再び當家へ足踏の出來ざるやうにせねばならぬ。

忠信　何事なるか御自身に、夜中を厭はずお出向きは、御苦勞至極にござりまする。

浄雲　いや是れとても一人の、娘が不便でござるゆゑ、兎角愛には溺れまする。

小車　それ程までに私を、お思ひ下さる父上樣、勿體なうてなりませぬ。

浄雲　然らば後刻久々で、例の圍碁でも圍みながら、今宵はゆる〳〵話さうから、心落ち着け待つてござれ。

忠信　何さま、あれに相替らず、碁盤が設けてござりまするは、まだお手並は下りませぬな。

浄雲　いや常節は老眼ゆゑ、兎角に手落ちがあつてならぬ。

忠信　など〻手前に侮らせ、

浄雲　やあ。(トぎつくりこなし。)

忠信　まだ〳〵油斷は出來ませぬ。

小車　左樣なればお燈火を、

浄雲　いや春の夜の宵の口、あかしなどには及ばぬぞ。

忠信　然らばお早く御歸宅を、
淨雲　必ず心配無用にさつしやれ。
〽情しい見せて慾の道、迷はゞ闇き門内や、探り足して出で行く。
ト此内淨雲玄關の方へ出る、小車附いて來り草履を直す、淨雲これを履き花道へ行き、につたりとこなし、是れを通り神樂の鳴物になり、足早に花道へはひる、奧より以前のお賤出來り、
お賤　お次で御樣子承はり、お孃さまのお悅びを、お察し申し上げまして、お嬉しう存じまする。
小車　聞きしとあらば改めて話すには及ばねど、父上樣までのやうに、おつしやつて下さるゆゑ、わしも安心したわいなう。
忠信　僞り多き世の中に、子を思ふこそまことなれと、老後のお身にて御一人、供をも連れず斷りにお出向きありしも子を思ふ、親の心の有難さ、徒おろそかには思はれませぬ。
お賤　此使ひが私で濟むことならばと存じますれど、次へ立てとの仰せゆゑ、出るに出られずお次の間に差控へて居りました。
小車　父上樣のお歸りまで、お待ち久しうございますれば、嘉儀を祝せしあの酒肴、お過しなされて此程の憂さをお忘れ下さりませ。

忠信　それは何より忝けない、そも堀川を立退きしより、御主君始め我々も、山野を宿といたせしゆゑ、好める酒も吞むことあたはず、とんと味をも忘れたやうぢやが、詞に任せ久方にて、今宵は一獻過さうか。

お賤　でもお目出度きお酒盛り、是れへ持參をいたしませう。

小車　屠蘇ではあれど父上の、お好みゆゑに辛い御酒、あなたのお口に合ひませう。

忠信　いや、辛い酒とは悦ばしい。

小車　早う是れへ持つておぢや。

お賤　畏りましてござりまする。（ト是れより下座の琴唄になり）

〽軒毎に色を飾るや三つの朝、すげなき松も笑顔と見えて、風に袖振る廓言葉。

ト此内お賤上手の床に飾りし瓶子の酒と、喰積の干肴、この外銚子土器など持つて出で、よろしく並べ、蓬萊の三方を有合ふ碁盤の上へ載せて眞中へ出し、忠信へ酒を進めることよろしく。

小車　ほんに斯うして蓬萊を、賤が氣轉で直せしゆゑ、婚禮のやうぢやわいなう。

忠信　丁度折よく隣家にて、調ぶる琴も時の興、そちも一獻過すがよい。

小車　はい、お目出度う頂戴いたしまする。

お賤　でも、お睦じいお仲ぢやなあ。

〽可愛らしやと花の香を、問うて見たいは八重櫻、（トお賤酌をして小車よろしく呑ます。）

忠信　こりや半年ほど逢はぬ内、仕込みしものがあると見え、大分そちは酒が上つた。

小車　いえ、あなたの外に酒事を、いたした覺えはござりませぬ。

お賤　そりや私がお側に居て、よい證人でござりまする。

忠信　いや、縁者の證據は當にならぬ。

小車　でも、あんまりなお疑ひ。（ト腹の立つこなし。）

忠信　其のすねるのが憎くないわい。

〽背中叩いて戲むれも、酒の機嫌の千代萬代、

トよろしくこなしあつて、お賤爰に居ては邪魔だといふ思入にて、

お賤　ほんに[illegible]としたことが、七草のお支度を、いたすをとんと忘れました、暫く御免下さりませ。

〽[illegible]の年越し末長かれと、いうて別るゝ宵惠比壽。（トお賤奥へはひる。）

小車　おゝこれ、そなたが行きやつては、お酌の者がないわいなう。（ト態と言つて忠信の側へ寄る。）

忠信　酌がなうては、悪いのか。

小車　いえ、左樣ではござりませねど。
忠信　左樣でなくば今一獻、過して身共に返杯しやれ。
小車　いえ、どうぞあなたのお呑みさしを、戴かして下さりませ。
忠信　それではなみ〳〵、注いでくりやれ。
〽猶奧深く契りける。（ト兩人よろしく、琴唄の上げにて、此道具廻る。）

（梶原旅館の場）――本舞臺五間通し中足の二重本庇式臺附き、正面白地大形の襖、軒口に矢筈の紋の幕を張り、いつもの所白木の冠木門、二重上下筋塀の張物、總て梶原旅館の體、平舞臺上下に篝を焚き、二重に○△の近臣二人小袴烏帽子裝にて詰め居る、よき所に書院火鉢を置き、此見得通り神樂の鳴物にて道具留る。

○　はや今日にて例年の、門飾りは取れましても、何となく正月は陽氣でよろしいものでござる。
△　言はるゝ如く旅館ながら、獅子舞などが門前を、通行いたす春の夜は、いとゞ心が浮き立ちまする。
○　いや、浮立つと申せば、若殿樣には祇園社内で御懸想ありし小柴の息女を、御愛妾にお迎へ取り

になるとの事。

△ 鎌倉表へお連れあらば、並ぶ者なき都の美女、我々なども獨身ゆゑ、都の美女を妻になし、歸國がしたいものでござる。

○ 手前も左樣存ずれど、小身者の我々は田作の齒ぎしり、仕樣がござらぬ。

△ 及ばぬ事を望まうより、いつもの田作でお目出度く、役目を首尾よく勤めませう。

○ 何さま、それがよくござる。

△ よくはなけれど、是非がござらぬ。

ト兩人番なして居る。やはり右の鳴物にて、花道より以前の淨雲先きに、佐五兵衞連立ち出來り、花道にて、

淨雲 あれへ見ゆるが聞き及ぶ、景季殿の旅館なるか。

佐五 まだ宵の口の事なれば、番士が詰合ひ居りませう。

淨雲 然らば案内してくりやれ。

佐五 かうお越しなされませ。（ト入替つて舞臺へ來り、佐五兵衞門の内へ入り、）御兩所樣、お夜詰でござりまするか。

○ 誰かと思へば肝入佐五兵衛何用あつて參りしぞ。
佐五 若殿樣へ御直談を、遂げたいといふお方樣の、御案内に賴まれまして、お連れ申してござります。
△ して御直談を遂げたいといふ、御仁は何れの者なるぞ。
佐五 四條通りにお住ひの小柴入道淨雲樣と、おつしやるお方でござりまする。
○ さては小柴の入道殿が、
△ 自身にお出向きあつたるか。（ト此時正面の襖を明け、景季出來り）
景季 其入來待兼ね居つた、早々是れへお通し申せ。（ト前へ出る佐五兵衛見て）
佐五 お待兼ねとござりますれば、是れへお通し申しませう。（ト門の外へ出て）あれへお通り下さりませう。
淨雲 旅館といへど早速に、お逢ひになるとは忝ない。（ト内へはひろ、景季見て）
景季 これは〳〵入道殿、よくぞお出向き下された。そこは端近、先づ〳〵是れへ。
淨雲 然らば御免下さりませう。（ト二重へ上りよろしく住ふ、佐五兵衛は式臺へ上り、下手に住ひ）
佐五 若殿樣へ申し上げまする、早速ながらお人拂ひの儀を、お願ひ申し上げまする。

景季　承知いたした。兩人次へ。

○△　はッ。（ト奥へはひる。跡合方になり、）

淨雲　さて先刻は、折角の御入來なりしを、娘めが不興にも落淚せしゆゑ、お心にさへられしか、お立歸りに相成りて、思はざる無禮の段々、偏に御容赦下さりませう。

景季　いや〳〵左樣なお詫びでは、景季却つて痛み入る、操を守る女子たる身は、斯くあるべきを察せしゆゑ、猶豫いたして此方より、一旦席を開きしが、何を申すも忠信が討死なせしと聞く上は、落淚せしとて返らぬ事、跡にて思ひあきらめられ、御得心が參られしか、又は操の捨て難く、御不得心でござるよな。

淨雲　其儀に附いて其許へ申し入れたき事あつて、今晚出向き參りし次第、篤とお聞き下さるべし。

景季　して御自身にお出向きありし、次第と申すは如何なる譯。

淨雲　何をか隱さん其許より、不束なるわが娘を御懇望に與りしは、願うてもなき次第ゆゑ、是れなる肝入り佐五兵衞と申し合せて忠信儀は、全く舊冬吉野山にて討死なせしと證人の、使ひの者を取拵へ、娘に疑念を晴らさせて、得心させんと存ぜし所、豈圖らんや今宵不意に、忠信めが便り參り、我が策なりとは心附かねど、佐五兵衞が拵へ事にて歎きしこと露顯なし、得心させんと思ひ

しも、鵙の嘴と喰違ひ、其許樣へ濟まざるゆゑ、如何はせんと愚案ながら、思ひ設けし一つの手段、よしなに御承知下されい。

景季　して又手段をお設けありしは、如何なる儀にてござるよな。（トよろしく思入。）

淨雲　されば、手前が佐五兵衞に申し附けたる計ひとも心附ぬを幸ひに、慈愛と見せて忠信を、今宵我が家へ泊め置けば、其許樣の御下知にて、是れより直に人夫を差向け、日蔭者なる忠信を易々召捕り鎌倉へ、お差送りに相成らば、其許樣の手柄と相成り、又忠信は縛り首、世になきものとなる上は、娘も未練の思ひを斷ち、再緣の儀を得心なし、日ならずいたして緣談も、整ひませうと愚案ながら、手段を設けてござりまする。（ト是れを聞き、景季立腹せしこなしあつて氣を替へ。）

景季　こりや佐五兵衞、して忠信が討死せしと、小車どのを欺くには、如何なる手段を構へしぞ。

佐五　それは斯樣でござりまする、淨雲樣が私へどうしたものとの御内談に、子分の内でもそんな事には物馴れて居る野郎を選み、吉野から來た山樵の、飛脚に仕立て女房に、案内させて小柴樣の、お宅を尋ねた體に見せ、忠信殿が吉野山で最期の際に遺言を、賴んで小柴の小車樣に、只何事も是れまでとあきらめろといふ傳言を、誠しやかに言はせたので、お年の行かぬお孃さまは、首尾よく欺きおふせましたが、思ひ掛けなく忠信が世上の噂と相違して、生き延びて居て此の都へ忍

んで來たので露顯となり、詰らぬことになりました。

景季　然らば矢張り身共まで、そちは欺き果せたのぢやな。

佐五　いえ、あなた樣を欺く氣は露聊かもござりませぬが、お頼みなされた御縁談を、少しも早く整へてお禮をたんまり頂きたく、いえなに、御安心をいたさせたく、やう／＼の事で御當人が、御得心とお知らせ申し、お供をいたして參りましたが、先刻あなたがお杯を、なされませぬのが今となり、疑ひ受けぬ御面晴れ、まだお仕合せでござりました。（ト是れにて景季むつとせしこなしにて）

景季　やあ仕合せなりとは何の戲言、慾に目が暮れ身共まで、欺き果せて我が方へ、世話をいたさんなんぞとは、言語に絶えし横道者めが。

淨雲　さゝ其お詫びの爲忠信を、無理に泊め置き訴人なし、其許樣のお手柄に、なしたる上に我が娘得心させてお望みを、遂げさせんといふ思ひ立ち。

佐五　お土産代の御散財を、なさいましても滿更に、お腹の立たぬ召捕者、虛言を申した其罪は、どうぞお許し下さりませ。

景季　いや、其の手柄は望みでないわえ。

淨雲　なに、お望みで、

兩人　ないとはなっ(ト合方きつぱりとなり、)

景季　鎌倉殿より判官の行方を詮議いたせとある嚴しき命は蒙れど、其の臣下たる忠信を、召捕れといふ命なければ、此景季は召捕らぬ、戀慕の情に心迷ひ、無道な事をせしなど〻、世上の惡說受ける時は、末代までの武門の恥、今往來で忠信に行違ふとも見ぬ顏して、助け置くのは武士の情。然るを是れまで忠信と娘の緣に恩義を受けし、間柄なる身を以て、落目を見捨て我が方へ、訴人に參るなんぞとは、不仁の至り此上なし、我も娘を妾となし、落目に及ばゞ見限られ、恥辱を受けんは必定なり、思へば先刻汝等の手段に陷り杯を、いたさゞりしが我が仕合せ、危き事でありしよな。(ト是れにて兩人びつくりなし、)

淨雲　然らば武門の道を立てられ、景季殿には忠信を、助けるお氣でござるよな。

佐五　それではあなたが御執心の、お望みとても叶ひませねば、もうおあきらめでござりますか。

景季　お〻、娘は勝れし器量なれど、親が人外なる上は、戀慕の念もはや是れまで、召抱への儀は望みでない、見るもなか〳〵汚らはしい、疾く〳〵此場を立去り居らう。

淨雲　いや人外とはお情ない、娘を望む御身ゆゑ、手柄をお讓り申さんと、態々參りし入道淨雲、鎌倉殿より忠信を、召捕る御沙汰がないとても、判官殿に附隨ひ天下を騷がす大罪人、訴人をなせば

一廉の恩賞あるに相違なし。

佐五　天下の爲には親兄弟、敵と味方に立別れ、命を取り合ふ例もあれば、娘の縁ある科人でも、お尋ね者となる時は訴へるのが誠の道、人外なりとおつしやるは憚りながら、若殿様、ちとお詞が違ひまする。

景季　やあ私慾に迷ひ眼くらみ、仁義を知らぬ汝等と、詞を交すは無益の至り。早く此場を立去り居らぬと、其分にはいたし置かぬ。（ト後に向ひ）やあ／＼兩人、はや參れ。

ト呼ぶ、是れにて以前の近臣二人出來り、

○△　はッ、何ぞ御用にござりまするか。

景季　それなる兩人追ひ拂へ。

○△　はッ、心得ましてござりまする。（ト立掛る、此内兩人平舞臺へ下り）

淨雲　えゝ歸らぬとは言ひ申さぬ、手柄をさせんと訴人に參り、追拂はれて堪るものか。

佐五　もう／＼何もおつしやらずに、早く表へお出掛けなさい。

ト氣味惡きこなしにて、淨雲をせり立て、門の外へ出る。

淨雲　はて／＼でも猛つたやうに、さて／＼奇怪千萬だ。

佐五　その癖あちらがげぢ〳〵の、本家の悴でござりまする。
淨雲　げぢの悴に下知もなく、こちらをげぢにしたからは、
佐五　是れから直に六波羅の、北條樣の下知を受け、
淨雲　向ふ捕手も多人數に、百足のやうな足を附け、
佐五　捕手は轉げて芋蟲でも、こつちは褒美の黄金蟲。
淨雲　いや、黄金より草鞋蟲の、大きな金を貰ふ氣だ。（ト通り神樂にて兩人連立ち花道へはひる。）
景季　さて〳〵浮薄な奴等ぢやわえ。
○　して御立腹なされましたは、
△　如何なる次第でござりまする。
景季　慾に目がくれ義を忘れ、無道を計る族ゆゑ、早々追出し遣つたのぢや。
○　それでは此度の、御相談も、
△　はや御破談にござりまするか。
景季　假令いかなる美女なりとも、父があれでは、（ト立上るを道具替りの知らせ、）望みでないわえ。
　　トよろしく思入、此模樣合方にて道具廻る。

(忠信召捕りの場)——本舞臺元の小柴宅の道具、よき所に燈臺、此脇へ碁盤を置き、其外の手道具は取片附けあり、床の送りにて道具留る。

〽更渡る夜も亥の刻に程近く、臥猪の床のそれならで、契り嬉しき小車が、結びし夢の覺めやらず大醉なせど忠信は、落人の身の油斷なく、そつと襖を立出で、、

ト上手の屋體より以前の忠信寢卷裝にて出で、四邊へ思入あつて床の合方になり、

忠信　堀川御所を退去の後は、半年餘りの其間、好める酒も呑まざりしが、久方振りにて呑みしゆゑか、熟醉なして小車まで、前後他愛もなき樣子、最早今宵も初夜を過ぎ、二更に程もあるまいが、未だ主人の淨雲殿歸宅のなきは如何せしか、早く戻りて終夜、圍碁をなさんと言はれしが、臥り居つては不興ならん、是れにて歸宅を相待たん。

〽碁盤に寄りて頰杖なし、主君の安危打ち案じ、(トよろしくあつて、)

さるにても御主君には、先頃お別れ申せし折、陸奥指して落ちたまふと、仰せありしが鎌倉の詮議嚴しく西國や、諸國に設けある上は、容易に御下向叶ふまじ、我はそれには引替へて、都へ易易忍び來て其の熟醉は勿體なし、主君の寵を蒙りて懷胎ありし靜御前お跡を慕ひ參られしを、落

人(一)身の連れ難しと飽かぬ別れをなしたまへば、我も此家に逗留なしては不忠不義なる腰抜武士
こりや小車に言ひ諭し、今宵を限りにせねばならぬ。
〽撓まぬ心いつとなく、睡るは過す酒の醉ひ、碁盤に凭れ高鼾、かくとも知らず浄雲は、捕
手の人數引連れて、我が門内も忍び足、垣の外より差覗き、仕すましたりと耳打ちなし、小
隠れなせば心得て、込入る大勢一時に、捕つた遣らぬと組附きたり。
ト此内忠信碁盤に凭れて睡ることよろしく、よき程に花道より、以前の浄雲先きに鎧下の捕手八人、
熊手の得物などを持ち附添ひ差足にて出來り、直に舞臺へ來り、浄雲柴垣の外より内を覗ひ、うまい
といふこなしあつて、捕手に囁き玄關の脇へはひる、是れにて捕手八人二重へ上り、こちらへ來り忠
信に組附く、忠信これを投げ退け、有合ふ碁笥を取つて目潰しに打ち附けることなどあつて、きつと
なり、
やあ、何ゆゑあつて汝等は、かゝる狼藉いたし居るぞ。
捕手 やあ、何ゆゑとは横道もの、源家の落人佐藤忠信、脱れぬ所と、
八人 覺悟なせ。
〽忠信さてはと打驚き、

忠信　さては訴人の者あつて、召捕りに向ひしよな。

捕手　此家の主人訴人により、召捕りに向うたり、いで尋常に、

八人　縄にかゝれ。

忠信　ちえゝ、娘を餌に止宿させ、情と見せしも小柴入道我を訴人の手段なりしか、さうとは知らず油断なし、此身の大事に及ぶとも、やはか縄目を受くべきや、ならば手柄に搦めて見よ。

捕手　言ふにや及ぶ、

八人　忠信遁らぬ。

〽遁らぬと又も組附くを、碁盤を取つて滅多打ち、見る間にそれへ二三人、血汐を吐いて死してんげり。

ト此内忠信件の碁盤を持つて、捕手八人を相手に立廻り、内兩人を左右へ打倒し、眞中にて碁盤を振上げ、きつと見得。是れより誂への鳴物になりよろしく立廻り、忠信碁盤を投げ附け、トゞ上手の床の間にある刀を取つて引抜く、是れにて捕手皆々びつくりして花道へ逃げてはひる。忠信これを追掛けはひる。

〽追うて行く、跡を慕うて小車が、行かんとなすを此方より、立出る父が押留め、

ト上手の居體より以前の小車出來り、床の間にある忠信の差添を持ち、行き掛ける、此時下手より淨雲出で、これを留め、

淨雲　こりや／＼、娘狼狽へるな、刄物を持つて何れへ行く。

〽娘は涙の聲曇らせ。（トよろしくあつて、）

小車　えゝお恨めしい父上樣、何で大事な忠信殿の、あなたは訴人をなされました。

淨雲　おゝ何でとは知れた事、訴人をすれば一廉の恩賞褒美に與るゆゑ、是れまで馴染の誼甲斐、北條殿へ訴人なし、後日の難を脱れるのだ。

小車　さう聞く上は猶の事、親子一つでないといふ、身の言譯を忠信殿に、逢うて言はねばなりませぬ。

淨雲　やあ、大事な娘を何ゆゑに、危い場所へ遣られんや。

小車　いえ／＼行かねばなりませぬ。

淨雲　いゝや行くには及ばぬことだ。

〽親子爭ふ其處へ、慾の道連佐五兵衞が險相變へて入來り、

佐五　小柴樣、大きに當が違ひました。

淨雲　なんだ、當が違つたとは。

佐五　訴人をしたら六波羅から褒美の金を下さると、思ひの外にしぶが出て、觸渡しもない訴人をして、都を騒がす不屆き者と、今町會所へ呼附けられ、あなたと私は都の内を追放の身になりましたが、大方あの忠信めも、今頃は召捕られ、憂目を見るでござりませう。

浄雲　なに、訴人をしたのがお咎めで、追放の身になつたとな、やゝゝゝ。

〽あきれしまゝに口あんぐり、廻る因果と小車が刃を喉へ突立つれば、

ト小車は懐劍を喉へ突立てる。

佐五　やゝ、お孃樣には何故に、

浄雲　えゝ、おのれは氣でも違ひをつたか。

小車　戀に迷ひし父上へ御異見の爲め、此の自害。

浄雲　何と。

〽小車苦しき息をつぎ。（ト小車浄雲の傍へ這ひ寄り）

小車　もし父上樣、今のお詞承り、初めて知りし僞りの事、假令日陰の御身なりとも、繋がる御縁あるものを訴人するとはお情ない。せめてわらはが御異見にて、御改心下さりませ。

〽お願ひ申し上げますと、苦痛を怺へ取りすがれど、入道更に見向きもせず、

ト小車苦痛を怺へ、淨雲に取りすがるを、

淨雲　折角仕組んだ目算も、現れし上おのれが此の態、今更心が改められうか。

小車　すりや、これほどに申しても。

淨雲　えゝ、聞く耳持たぬわえ。

ト怒り入つてぞ、

小車淨雲の袖に縋るを振拂ふ。佐五兵衛無念のこなし、此の模樣、床の三重にて道具廻る。

（堀川御所門外の場）――本舞臺眞中二間常足の二重、此上檜皮葺白木の門、前の蹴込み石垣此左右同じく石垣の裾を見せたる瓦屋根の筋塀、下の方に車寄の杭、上手に松の立木、日覆より同じく釣枝、總て堀川御所門外の體、正面の門の扉を締切り、此前に以前の忠信大童になり、拔身を持ち立掛り、是れを鎧下の捕手大勢、熊手の得物を持ち取卷き居る、此見得どん〳〵にて道具留る。と大まくしの立廻りあつて、忠信捕手大勢を切倒し、ほつとせしこなしあつて、

忠信　多人數を以て取圍み、夜中不意に討入るとは、いかにも卑怯未練なるぞ。

捕一　やアい、卑怯とはおのれがこと、落人の身を以て、此の都へ入込みしは。

捕二　命知らずの横道者。それ、おの〳〵。

ト上下にてはッと聲して兵士六人ばら〳〵と出來り、弓に矢を番へ、取卷き、

忠信　何をこしやくな。

トきつとなる、此の途端ばた〳〵になり、花道より江間小四郎義時、好みの甲冑にて、兵士二人附添ひ出來り、花道にて、

義時　いづれも控へい。

捕手　はッ。(ト控へる。忠信向うを見て、)

忠信　兵士をとゞめし、其許は。

義時　六波羅殿よりの御下知にて、江間の小四郎義時が、召捕りに向うたり、神妙にして縄目を受けよ。

ト忠信思入あつて、

忠信　やあ、縄打つなどゝは奇怪至極、景時なんぞが讒言により、鎌倉殿の御不審かゝり、世に落武者となりたまへど、御主君始め我々も、犯せる科のあらざれば、縄目を受くる謂なし。

義時　いや、それなれば猶以て、御不審晴るゝ時節を待ち、罪なき次第を訴へ出で、何故忠義を立てざるぞ、鎌倉殿の御不審蒙むる判官殿の身内にて、日影者なる身を以て都へはひり大膽にも、止宿

などをいたせばこそ、訴人をいたす者あつて、我も討手に向ひしなり、天下の法にもとりし上は、縄目を受くるは勿論にて、謂れなしとは申されまじ、此の返答は如何なるぞ。

忠信　いや、假令時節を待つとても、讒者の詞を用ゐたまふ、鎌倉殿のお疑ひ、晴るゝ時節のあるべきや。主君の御先途見し上に死生を共に致さんと、入込む都で訴人の爲に、八方を取圍まれし上からは、主君の御座所とお定めありし、此の門内へ切入つて、最期を遂げんといたすのを、妨げなさば小四郎殿とて、容赦いたさず切りまくり、一世の手並をお目にかけん。(トきつと思入。)

義時　判官殿の居られたる堀川御所故切入つて、最期の場所になさんとは、忠臣に似て忠臣ならず、後日にお祟りあることに、汝は心附かざるか。

忠信　何と。

義時　心附かずば申聞けん。(ト誂らへの合方になり、義時床几にかゝり、)そも今般の御不審は、讒者の爲とは申し乍ら、判官殿にも御あやまりのなきにしも候はず、如何となれば鎌倉より、使節に上りし土佐坊を此堀川にて討取られしが、是れ第一の箇條ならずや。其の臣として又候や、都を騷がすのみならず、鎌倉殿の命を受け、當地の守護なす我々の下知に隨ふ者共を多人數討つて相果てなば、其罪誰に及ぼさん、判官殿の身にかゝり、臣下の爲めに其罪を重ぬる時は汝こそ、不忠の汚

名は脱れまじ、そこへ心が附きしなら、神妙にして繩を請けるか、其の恥辱を厭ふとあらば猶豫を願ひ潔く、切腹なして相果てよ。但し不忠の名を取るを顧みずして手向ひなし、つひには數々所の深手を負ひ、兵卒共の手にかゝり、末期の恥辱を取る所存か。死しての後の名を惜しむ武門の譽れを思ひなば、猶豫を願ひ潔く切腹いたせ、義時是れにて檢分なさん。

ト思入にて言ふ、忠信こなしあつて、

忠信　はゝはッ、忝き御諭し、血氣に逸り飽くまでも、刀の目釘の續かんだけ、勇を揮つて相果てんと、思ひしは我淺智なり、壯年なれど義時殿、理非明白なる異見に附き、清き最期を仕れば、何卒御猶豫下さるべし。

義時　さすがは忠信、我が言ふ所を會得なせしは悦ばし、然らば義時身不肖ながら、介錯いたし取らするぞ。

忠信　すいや、御介錯下さるとな、北條殿の御子息に介錯受くれば末期の本懷、お禮の印は主君より先達賜はる此一刀、貴殿へお讓り申したし。

義時　扨はそれなる一刀は、判官どのより拜領とな。

忠信　弓矢の家に生れたる、其の甲斐ありて重籐の弓に表はす星の數、今年積つて二十八歳。

義時　その裏筈と元筈の日月未だ地に落ちねば、屍はこゝに終るとも、名はかんばしき佐藤忠信」

忠信　勇あり義ある武士の情

義時　勇士の切腹、立派にいたせ。

忠信　まこと勇士の、最期の樣を見置き、後代の語り草にせられよ。

ト忠信諸肌を脱ぎ、刃を腹へ突立て、引廻し、義時は舞臺下手へ來る、此內忠信咽へ突立てゐる木の頭、

義時　むゝ。

ト感心の思入、此の模樣太撥の時の太鼓にて、

ひやうし　幕

四幕目

鶴ヶ岡別當所の場
同社前法樂舞の場

〔役名――義經の妾靜御前、工藤左衞門祐經、長沼五郎致治、梶原三郎景久、安西源七、岩永左衞門、猪の股小平太、土肥彌太郎、畠山次郎重忠。工藤の奧方梛の葉、堀の奧方樹、侍女等〕

（鶴ヶ岡別當所の場）━━本舞臺一面の廣間、向う長押附き好みの襖、上下折廻し同じ襖、日覆より大襖間をおろし、よき所に鶴を畫きし極彩色金張りの大衝立、舞臺花道共高麗縁を敷詰め、揚幕の所杉戸の出はいり、總て鶴ヶ岡別當所の體、爰に一、二、三、四、五、六の侍女六人、何れも下髮模樣物の着附、古實、好みの侍女にて控へ居る、此見得管絃にて幕明く。

一　申し皆さん、此程遠き都よりお呼び下しになられたる、義經公の愛妾、靜御前とおつしやるは、都に於ても二人とないよい御器量の白拍子と鎌倉中の噂となり、是非今日は靜御前を見ねばならぬと谷七郷の、老若男女が見物に、此鶴ヶ岡の境内は往來さへも止まる程、群集いたすと申すこと、物見高いではござりませぬか。

二　そりや當然でござりませう、見目形ばかりでなく、才智勝れし女丈夫にて、男子も及ばぬ器量の由、然はれば義經公の、お胤を宿してお出でありしを、誰が申し上げたるか、朝頼公のお耳に入り、宿せし胤の女子なれば助命なせども男子なら、助けぬとある嚴命に、母御諸共鎌倉へお召しになりしと申すこと。

三　お目見え濟みし其後は、堀藤次殿へお預けに、なりし内に月も滿ち、此程出産ありし所、御運の拙い御男子の爲、強ての仰せに我が君の嚴命是非なくも、

四　安達三郎清經殿、早速檢分に參られて、出産ありし若君を、情なくも刺殺し、由井ケ濱へ流せしと承はつたその時は、掛構ひのない私共まで、

五　ほんに身の毛もよだつほど、恐しいのと怖いので、終日顫へて居りましたが、如何に覺悟といひながら、靜御前が其折の、心の内はどのやうぞ、譬へがたなうござりまする。

六　世の常の女子では、直に産所で血が上り、必ず正氣を失ふところ、早くも男子と悟られて、思ひ切つたは氣丈な事、それゆゑ跡の肥立も早く、此程にてはあら血も納まり、今日八幡宮の御神前にて法樂の舞を舞はるゝよし、靜御前の身に取りては、恨み重なる我が君の、御上覽をも厭はずに、よく舞を舞はるゝと、思へば不思議でなりませぬ。

一　それは當時我が君が、お覺え目出度き工藤左衛門祐經殿の御内室、椰の葉どのゝ才智にて、どう靜どのを言ひくるめしか、所詮あらはに頼朝公の、御上覽といふ事を、聞いてはよもや得心あるまじ。

二　深い樣子は存じませぬが、靜御前に法樂の、

三　舞を今日舞はさすは、祐經殿のお計ひと、

四　誰いふとなく噂とり〴〵、それ故今日は工藤殿が、

五　何かの事を内々にて、お指圖なさるゝと申すこと。

六　何にいたせ秩父殿や、お側去らずの梶原御親子、長沼殿はいふに及ばず、大小名の方々が、今朝よりして我が君の、警固に御出仕ありしゆゑ、流石に廣い鶴ヶ岡の、御別當所も殊の外、御混雜なことでござりませう。

一　兎かういふ内靜御前が、お見えなさるでござりませう。

二　今日こそは染々と、爰でお目もじ、

皆々　いたしませう。

トばた〳〵になり、花道より烏帽子狩衣の社家出來り、花道にて、

社家　はッ、申し上げまする。

一　何御用でござりまする。

社家　工藤様畑の御内室靜御前を伴はれ、只今是れへお越しにござりまする。（ト言捨てゝ引返す。）

二　お噂申す其うちに、はや御兩家御内室が、

三　靜御前を伴はれ、お越しなさるとあるからは、

四　是れにてお出迎ひ、

皆々　いたしませう。

ト皆々出迎ふ、誂へ出の唄になり、花道より椰の葉、下髮打掛け工藤の奥方、靜御前下髮好みの打掛け裝、柵同じく下髮打掛け堀の妻にて出來り、花道にて靜御前思入あつて、

靜　源家鎭護の御神たる、八幡宮の御別當に、妙なる聲に絲竹の、調べもさゆる音律は、

椰葉柵　え丶。（ト思入）

靜　ても奥床しう存じまする。

椰葉　あれぞ今日靜とのが、當御社にて法樂の、舞を舞ふ事聞き傳へ、大小名の御息女が、

柵　舞を見ばやと別當所へ、疾くに參られ待詫びて、座興を添ふる笛太鼓、ほんに優しい、

ト椰の葉と顏見合せ、

兩人　音色ぢやなあ。（ト思入にていふ、舞臺の皆々こなしあつて、）

一　是れは〳〵椰の葉さま、柵さまにも、今日はよく御參詣遊ばしました。

二　かね〴〵お噂に承はる、靜さまにお目もじを、お願ひ申したう存じまして、

三　お二方が靜さまを、

四　お伴ひ遊ばすを、

五　今朝よりして此處に、

六　お待ち申せし私共、

一　一同お出迎ひ、

六人　いたしましてござりまする。

梛葉　これは又恐れ入つたるお出迎ひ、お嬉しう存じまする。

柵　何にいたせ爰は端近、あれなるお席へ靜どの。

靜　左樣なればお二方、何卒よしなに御案内を、

梛葉　いざ、斯うお越し、

柵　なされませ。

ト右の唄にて三人舞臺へ來り、梛の葉案内して、上手へ靜御前を住はせ、次に梛の葉、柵住ひ、侍女は下手へ居並ぶ。

靜　して、是れにおいでの皆さまは、

梛葉　此方々は御臺所の、政子さまや大姫君の、お側に侍く女房達、

柵　梛の葉どのにもわらはにも、常より隔てぬ中なれば、必ず御遠慮はござりませぬ。

一　よき折からと存じまして、
二　お二方へお縋り申し、
三　お目もじ願ふ私共は、
四　数なりませぬ不束者、
五　お詞下したまはらば、
六　お嬉しう、
六人　存じまする。（ト辭儀をなし、替つた合方になり。）
靜　源二位殿源廷尉お睦じき御世なれば、わらはとても皆さまに、尊敬受くる身にしあれど、御兄弟に不和を生じ、今は雙方敵敵と、ならせたまへば身も闇き日陰の靜へ、改めて詞をたもれとおつしやつては、消えも入りたき思ひにて、お恥かしう存じまする。
梛葉　假令日陰の御身にせよ義經公の御愛妾、殊に一日半日でも、君のお胤の若君をお持ち申せし靜どのゝ、卑下なさるには及びませぬ。
柵　ほんにお胤とおつしやれば、靜どのにも御産の後、輿とはいへど久々ゆゑ、嘸お疲れにござりませう、是れにて御休息なされませ。（ト靜思ひ入あつて、）

靜　つかぬ事を伺ひますが、只今神前より見受けし所、神樂殿の正面に、笹龍膽の紋付けし幕打廻せしあの棧敷は、どなたの御見物にござりまするか。

椰葉　さあ、あの棧敷は、

靜　梛どのにも御覽ゆゑ、御存じでござりませう。

梛　さあ、それは、

靜　一入華美を盡せし棧敷に、笹龍膽の紋あるは、源二位殿と見受けしが、それに相違はござりますまい。

椰葉 梛　さあ、それは。

靜　源二位殿の上覽なれば、今日の舞は奏すまじ、此儘下向いたしませう。

椰葉　でも今日御神前にて、法樂の舞を舞ふことを、

梛　御所望ありしに今となり、何ゆゑあつて、

兩人　舞はれませぬ。

靜　愚な事をのたまふ人かな、今日靜が舞ひ侍るは、かねて御兩女も知らるゝ通り、義經公の御武運を八幡宮へ祈りの爲の法樂の舞なれば、源二位殿を初めとして大小名の見物あるは、靜が心に叶

はぬゆゑ、折角お作ひなされしが、折を見合せ又重ねて、奏でまするでござりませう。

椰葉　成程是れは御尤も、とさあ申したけれど舞はぬとは、靜どのとも存じませぬ。

靜　そりや又何ゆゑ。

椰葉　源二位公のお召しに隨ひ、鎌倉御所にて舞ふ時は、御身がお情蒙りし源廷尉殿へ濟まぬなれど、是れは左樣な譯ではなく、今日法樂の此の舞は八幡宮へ祈念の舞、諸見物は貴賤を論ぜず、只一樣の見物なれば、假令將軍家おはすとも、別に會釋も遠慮も入らず、それを舞はぬとのたまふは、才智勝れし靜どのに、似合しからぬと存じまする。

靜　神へ捧ぐる舞にもせよ、恨み重なる鎌倉殿、上覽あるは快からず、殊に數萬の見物に舞うて見せよとは何事ぞ、今は日陰の御身なれど、義經公は君の御連枝、其お胤まで宿せし靜、慰みものには得なるまじ、構へてお勸めなされまするか。

柵　男子も及ばぬ秀才と噂に聞きし靜どの、理のなきことはおつしやらねど、今椰の葉どのゝお詞通り二位公のお召にて此場で舞を舞ひたまはゞ、慰みものとなりしやうに申すまいものでもござりませぬが、鶴ヶ岡の神前にて、今舞ひたまふは靜御前が、則ち神へ捧ぐる法樂、その舞を見物いたすによも妨げはござりますまい。

椰葉　假令今日に限らずとも、神前に於き舞ひたまはゞ、貴賤を論ぜず見物は、山の如くに群集して、見物いたすに相違なし、玆の道理を思召さば、いつにても同じ事ゆゑ、思ひ立ちしが吉日と、お定めあつて、靜どの、是非に今日御舞ひ候へ。

柵　此儘御下向なされては、八幡宮の御神慮にも、叶ひませぬかと存じまする。

椰葉　只何事も義經公の、御武運祈る爲なりと、惡しき心を取直し、

柵　平に今日寶前にて、

椰葉　疾く〳〵一差、

兩人　御舞ひ候へ。（ト兩人思入にてよろしく勸める、靜御前斷り兼ねるこなしにて）

靜　成程この後舞ふとても、神前ゆゑに見物が、群集いたすは同じこと、左はさりながら今日は、ちと舞ひ難き事あれば、お勸めには應じ兼ねまする。

椰葉　して、舞ひ難いと言はるゝは、

柵　如何なる仔細に、

兩人　ございまする。

靜　さればとよ、其仔細は、舞の囃子が不足ゆゑ、

兩人 何とおつしやる。（ト合方きつぱりとなり、）

靜 義經公の御武運を八幡宮へ祈りの爲め、我が法樂と思ひしに、斯く歴々の方々が見物ありては後世までも人の話しに殘るゆゑ、されば靜が法樂は、一世の晴れの舞にして容易うは舞ひ難し、既に其上都にて忝くも内侍所へ召されし折は、内藏頭信光殿に囃されたり。又神泉苑の雨乞には、然も四條の木須原に囃されて舞ひさふらふぞや。今薄命に鎌倉の御不審蒙り、禪司諸共召下されて侍るゆゑ、笛鼓の役人を召し具せざるは知りたまはん。餘人は兎もあれ梛の葉どのは、幼い折より都にて小松殿に召仕はれ、和歌は更なり絲竹の道に委しいお方ゆゑ、申すまでもさむらはねど、謳ふも舞ふも其の矩の合ざれば見苦しゝ、聽て暇の出でし上都へ登りて常に舞ひし、業に勝れし囃子を伴ひ、再び東へ參りし折、源二位殿の上覽にて、靜が一世の晴れに舞ふべし、先づそれまでは今日の、舞を許してたまはれかし。（ト靜御前思入にていふ、梛の葉、柵こなしあつて）

梛葉 すりや、どうあつても靜どのには、

柵 八幡宮へ御祈誓を、

一 一旦お掛けなされたる、

二 義經公の御武運を、

三　祈りの爲の法樂も、
四　此鎌倉に其業の、
五　勝れし囃子がないゆゑに、
六　俄に舞を、
六人　舞はれぬとや。
靜　源二位殿初め大小名の、見物なくば兎も角も、今見る如く歷々の見物ありては名を得たる、妙手の囃子があらざれば、思ひ立ちたる法樂の舞は餘儀なう舞はぬゆゑ、よきに御披露下されかし。
椰葉　とはいへ折角の思し立ち、
棡　未熟ながらも囃子の者、
一　其身の晴れゆゑ一同に、
二　精神凝し勤めんと、
三　靜どのゝお越しあるを、
四　今朝よりして待受けしに、
五　かゝる事を御披露あらば、

六　嘸や本意なう、
六人　思はれませう。（ト皆々本意なき思入、）
梛葉　くどうお勸め申すのは、如何なれども靜どの、
柵　心に叶はぬ囃子をも、わらは二人にお免じあつて、
柵葉　是非に今日只一差、
柵　舞を舞うて、
兩人　たまはれかし。（ト是れにて靜氣の毒なる思入にて、）
靜　此程よりして一方ならぬ、介抱受けし御兩所ゆゑ、餘の儀なれば速に領承なせど是ればかりは靜が心に叶うたる囃子がなければ益なき事。
梛葉　すりや是れ程に兩人が、只管おすゝめ、
兩人　申しましても、
靜　蘇秦張儀が舌を假り、宰我子貢の辯を以て、お勸めあるとも舞ひ難し、再三再四のお勸めも、以後は無用になされよかし。（トきつと言ふ。侍女皆々是非なきこなし、梛の葉、柵困りし思入にて、）
梛葉　最前よりして詞を盡し、お勸め申せど遮つて舞はぬとあれば是非ない譯、とあつて此由ありの儘

披露に及び法樂の、舞を延せしことならば、此梛の葉の不念から夫左衞門祐經まで、雲霞の如き見物に後指をさゝれにやならぬ。

柵　夫々が恥辱はさておき、此事世上へ流布なさば鎌倉中の恥辱となり、源二位公にもお怒りあらん。

梛葉　さなきたに御兄弟、未だ御和順ならざれば、

柵　如何なる大事にならうも知れず、

梛葉　それも俄の事ゆゑに、

柵　まことに當惑、

兩人　いたしまする。（ト困る思入、此時上手襖の蔭にて）

重忠　あいや御兩女、その御配慮には及び申さぬ。

靜　あのお聲は、

一　あれぞ秩父の、

六人　重忠樣。

ト序の舞の合方になり、上手より重忠烏帽子好みの素袍、一本ざしにて出來り、眞中に住ふ。

梛葉　これは〳〵畠山殿、お役目とは申しながら、

栅　今日の御警衛、御苦勞千萬に、
兩人　存じまする。
重忠　工藤堀の御内室にも、靜御前を守護召され、參籠ありしは一の大役、御心勞の程お察し申す。（ト靜御前に向ひ）さて靜どの、御身には一別以來、先づは堅固で、次郎重忠大慶にさむらふなり。
靜　畠山殿にも御健勝にて、わらはに於ても何程かお嬉しう存じまする。（ト兩人挨拶宜しくあつて、）
梛葉　早速ながら重忠どの、今兩人が當惑せし、
栅　委細をお聞き、
兩人　なされましたか。
重忠　如何にも、只今次の間にて、某委細承はりしが、靜どのゝ仰せありしは、近頃尤も至極なり。
梛葉　して又、配慮いたすなと、
栅　仰せありしは如何なる譯。
重忠　其仔細は靜どのへ只今申すを、篤と聞かれよ。（ト誂への合方になり、）如何なる技藝も其業の合ひたる者があらざれば、必ず妙所へ到らぬもの、都よりして手馴れたる囃子の者を同道なし、舞はんといふは其業の、妙所を人に見せん爲、白拍子にて一天下へ名を知られたる靜どの、名を惜む

は尤もなり、某始終を承はり誠に感心いたしたり。然れど、今日法樂の舞を見んとて境内は、立錐の地もなき見物、此儘御身が舞はれずば、嘸や本意なき事ならん、將又只今御兩女が當惑召さるゝ趣きの、大變事に至らんも圖り難き次第ゆゑ、無事を思うて重忠が、是れへ出しは外ならず、拙き業に候へども其笛の役を勤め、又小鼓は鎌倉に並ぶものなき工藤殿、銅拍子は是れも得手なる長沼殿が勤め申さん、元より無雙の佳人に對し、堪能ならぬに舞へよとは、申し兼ねたることなれど、工藤長沼畠山の三士に囃子を勤めさせ、是非に一差舞ひ候へ。

ト思入あつて勸める、靜御前もこなしあつて、

靜　すりやこの靜が法樂の、舞の囃子を御三方が、お勤めなされて下さるとや。

重忠　如何にも。

靜　むゝ。（ト思入、此内梛の葉、柵嬉しき思入。）

梛葉　畠山殿も長沼殿も、一國一城の主人にして、武名天下に秀でし御方、取分け笛は重忠殿、世に知られたる堪能にて。しかも松風と呼びなせる、漢竹の葉調を御所持なさると申す事。

柵　工藤殿は其以前、都においでありし折、一年内裏の御神樂へ、召出されて叡感に預りたる、小鼓に名を得たる鎌倉一の風流人。

一　又長沼五郎殿が銅拍子と申すのは、南鐐を以て造りしよし。
二　慥金にて菊形が打つてあると承はる。
三　それに啄木の緒を入れて、
四　鼓に隨ひ打つ時は、
五　夫の鈴蟲の音に勝り、
六　妙なる手色の御三方が、相和しお勤めなさるとあれば、
梛葉　定めし神も、
八人　感應あらん。（ト此内靜御前ぢつと思入、重忠詰寄り、）
重忠　如何に靜どの、斯くまで重忠詞を盡し御身に舞を勸め申すは、御兄弟を御和順にいたさん爲の慮り。源廷尉殿の御身を思はゞ、八幡宮へ法樂に、今日舞を奏すこそ、貞操節義と謂つべし。手前の笛は兎も角も、聞かるゝ如く工藤、長沼、何れも名を得し堪能なり、それにても御身には、誓つて舞を舞はれぬか。
靜　さあ、それは。（ト返事に困り思入、）
重忠　よしや其業鈍くとも、此鎌倉の大名を、囃子になして舞はれなば、其身の恥にはよもなるまじ。

靜　さあ、それは、

重忠　但し、それでも不足なるか、

靜　さあ、それは、

重忠　領承なして舞はるゝか、

靜　さあ、

重忠　不足なるか。

靜　さあ、

重忠　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

重忠　篤と思慮して鎌倉の、大名三人囃子となし、快く御舞ひ候へ。（トこなしあつていふ、靜御前思入）

靜　拙き靜が法樂の、舞を斯くまで群集して、見物したまふ樣子ゆゑ、一期の晴と思ひ詰め、囃子選みをいたせしが、賢者と噂の重忠殿、又風流に隱れなき工藤殿や長沼殿が、囃子を勤めてたまはるとは、此身の面目これに過ぎず、さらば仰せに隨うて、拙き舞の一差を、法樂の爲神前にて、今日奏しさむらはん。

重忠　すりや、重忠が詞に附き、
梛葉　今日の舞を靜どの、
柵　お聞き濟み、
兩人　なさるゝとや。
靜　何しに是れを否みませうぞ。
重忠　むゝ、それにて我等も祝着せり。（ト安心の思入、皆々嬉しきこなしにて）
一　どうなる事かと最前より、心を痛め居りましたに、
二　御三方の囃子にて、
三　靜さまがお舞ひなさると、
四　承はつて又一入、
五　拜見事になりました。
六　是れと申すも重忠樣が、事を分けたるお諭しゆゑ、
梛葉　此梛の葉も今日の、役目が不念になりませず、
柵　首尾よく神へ法樂の、舞を捧ぐる事となり、

椰葉　何とお禮を申さうやら、
梛　有難う、
兩人　存じまする。（ト辭儀をなす。）
重忠　我等が笛を勤むるとも、祐經殿や長沼の、銅拍子小鼓なき時は、靜どのも舞はれまじ、左すれば役目は相口ひ、其のお禮には及び申さぬ。
靜　お二方が最前より、お勸めありしを承引ず、重忠殿のお詞に、隨ひましたも餘儀なき譯、構へて惡しう思されまじ。
椰葉　何しに惡しう思ひませうぞ、最早時刻も近附けば、
梛　靜どのには片時も早う、お支度あつて然るべし。
重忠　我等は工藤長沼に、用意あるやう告げ知らさん。
靜　左樣なれば重忠殿、
重忠　後刻樂屋で御意得申さん。
椰葉　何れも方にも、御一緒に、
梛　いざ御案内、

兩人　いたしませう。

ト出の唄になり、梛の葉先きに案内して、靜御前へ柵、侍女六人附いて、重忠に會釋して奥へはひる。

跡に重忠思入あつて、

重忠　豫て靜が勝れたる舞の上手と申す事、我が君はじめ政子の方御存じゆゑに是非舞を、見物したしと御所望ありしに、産後の惱みを申し立て、兎角御諚に應ぜぬは、鎌倉殿を怨敵と恨む仔細のあればなり、然るに左衛門祐經殿へ再應奏でさせよとある、命令下り止むを得ず、妻女と計らひ法樂の舞に事寄せ賺しこしらへ、既に今日伴はれ、十が九ツ整ひしは工藤夫婦の働きと、思ひの外に上覽の、棧敷に目を附け心に怒り、舞はぬと申すは尤もなれど、囃子を選みし詞を幸ひ、先づ得心はさせたなれど、女に稀なる丈夫な魂、實に天晴な賢女ぢやわえ。

ト感心の思入、合方きつばりとなり、奥より祐經致治、烏帽子素袍一本ざしにて出來り、重忠の左右へ住ひ、

祐經　重忠殿の、

致治　段々とのお骨折、

兩人　忝なう存ずる。

重忠　祐經殿にも致治殿にも、最早委細をお聞きありしか。

祐經　如何にも只今承はりしが、流石は智辯勝れたる畠山殿の扱ひにて靜女が得心なし、是れにて事なく相濟めば此上もなき無事の納り、したが貴殿の知らるゝ如く、內實手前が申し附けて梛の葉に計はせ、只法樂の舞と申し、これへ召連れ參りしなれば、定めし手前を怨みつらん。

致治　それゆゑ貴殿へ賴みしお諭し、既に先刻我が君が、殊の外御機嫌惡しく、我を忌みて舞を舞はずば、討つて捨てよと烈しき命令、梶原父子を除く外、皆手に汗を握りたり、畠山殿のお執成しにて其場も事なく納まりて、首尾よく舞を靜女が、舞ふ事と相成りしは、まことに以て大慶至極。

重忠　靜が舞を我が君はじめ政子の方も御所望ありしが、中々承引なき所、祐經殿の計ひにて、先は首尾よく參りしが、流石は廷尉の愛妾にて男子も及ばぬ天晴器量、上覽なれば舞はぬと申すも、一理なきにあらざれば、無下にとも言ひ難く、實は先刻當惑いたした。

祐經　其儀は祐經お察し申す、中々手前の計ひでは、爰まで首尾よく參らぬ所、

致治　辯才衆に勝れたる、偏に貴殿のお働き、

重忠　何として〳〵、首尾よく參るは左衞門殿が、地組をなされしゆゑでござる。

祐經　いや、其地組は崩れ掛り、既に危い所でござつた。

致治　然し囃子を望まれしは、時に取つてのよい手都合、

重忠　とはいふものゝ未熟な笛、中々舞には及ばぬ囃子。

祐經　鈍い鼓も何れもが、

致治　御承知なれば銅拍子も、

重忠　御免を蒙り、

三人　勤め申さん。（ト爰へ奥より近習の侍出來り）

侍　はゝ、申し上げます。

重忠　何事でござる。

侍　我が君には殊の外お待兼の折柄に、早や靜女のお支度も、整ひしとの事なれば、疾く〳〵御用意なさるゝやう、お急き遊ばしてござりまする。

重忠　委細承知いたしてござる、左樣ござらば祐經殿。

祐經　是れより直に三人共、

致治　いでや用意を、

三人　仕らん。

ト鳴物きつぱりとなり、互ひに先きを讓り合ひトヾ重忠先きに、祐經致治侍附いて奥へはひろ、合方彈き流しにて、衝立の蔭より景久烏帽子素袍一本ざしにてそつと出で、四邊へ思入あつて、

景久　豫て國色の聞え高き靜を身共が妻になさんと、疾くより思へど判官殿の、寵妾なれば心に任せず、それゆゑ君へ讒言なし、先づ源廷尉から攻亡し、しかして後に手に入れんと思ひの外に鎌倉へ、召し下されしは我が幸ひ、舞に事寄せ營中へ彼れを留め置き言ひ寄らんと、計れどそれも成就せず、今度は君へ申し上げ工藤をお先にやう／＼今日、此別當所まで引出せしが、是れから先きが肝腎要、扇ケ谷の我が屋敷へ、得心させて連行く手段を、廻らしたいものだわえ。

ト此時上手より安西彌七、岩永左衞門、猪股小平太、土肥彌太郎、何れも烏帽子素袍一本ざしにて出掛け、双方思入あつて、

彌七　その御手段は、景久どのゝ、

左衞　御邸宅まで連行くより、

小平　此場に於て手短に、

彌太　思ひを晴す、

四人　工夫がござる。（ト言ひながらよろしく住ふ。）

景久　誰かと思へば景久と、日頃同意の各々方、さては今の問はず語りを、
四人　承はつた。
景久　それは面なき次第でござる、して手短の御工夫とは。
彌七　別に深い策ならねど、
左衛　總て戀路は早いが勝ち、
小平　只今次にて我々が、
彌太　思ひ附きたる其手段は、
景久　その御手段は、
四人　申して見ようか。
景久　如何でござるな。
四人　いや、申すまいか。（トじらす思入。）
景久　はて、じらさずと、（ト彌七の肩を突くを道具替りの知せ。）お聞かせ下され。
ト此模様所作の切れにて、道具廻る。

（鶴ヶ岡神樂殿の場）＝本舞臺四間通し六枚飾り、常足の二重破風造り、向う一面鏡板の書割、三方高欄附き、ずつと前へ出して飾り、下手少し後へ下げて高欄附の橋懸りを押出し、是れを取附け、ずつと上下廻廊の張物にて見切り、舞臺前雨落より霞板を出し、總て鶴ヶ岡神樂殿の體、本行の大拍子にて道具留る。とこいやいになり、橋懸りより重忠、笛を持ち、祐經鼓を持ち、致治銅拍子を持ち出で、皆々順よく居並び、祐經床几に掛り、笛鼓のあしらひになり、橋懸りより、靜御前金烏帽子白の着附白き袴、扇を持ち出來り眞中へ留り、是より今樣になり、下座の唄にて鳴物を遣ひて舞になり、よろしく振あつて祐經責鼓を打つ、靜御前思入あつて、

〽しづやしづ、しづのをだ巻繰返し、昔を今になすよしもがな。

トよろしく舞終り、靜御前正面へ向ひ辭儀をなす、是れにて道具知らせなしに廻る。

（元の別當所の場）＝本舞臺元の別當所の座敷へ戻る。と合方しらべになり、奥より以前の彌七、左衞門、小平太、彌太郎出來り、

彌七　如何に各々、靜御前が法樂に奏でられたる今の一差、驚き入つた事でござる。

左衞　實以て、迦陵頻伽の花に囀る如くなる、一甲調あげて謳はれ、

小平　爪紅の扇を翳し、割菱縫ひたる水干の、袖飜し舞はれたは、

彌太　月にも花にも例へがたく、あれを見ては清盛を訪ひし佛も及びますまい。

彌七　承はれば去年の冬、四國の浪の高きに漂ひ、或ひは吉野の雪にさまよひ、殊に産後の疲れにて面瘦せたれど、どうして〳〵器量といひ舞といひ、先づ我が朝に靜女の右に出る者はあるまい、天晴無双の佳人でござるて。

左衛　それに又我が君のお覺え目出たき工藤殿が、常より祕藏にいたさるゝ紫檀胴に羊皮を張りたる鼓を携へ出で、廻廊の天井までも響けよと、手色の冴えし打方には、是れも感心いたしてござる。

小平　も一つ感心いたすのは、重忠殿の勤めし笛、まことに龍の吟ずる如く、好む道とは申すものゝ、賢者といはるゝ御身にて、妙手の嗜みあるといふは、これぞ其身に備はる業、武士は武さへ勵めばよいと申すは所謂負惜み。

彌太　左樣とも〳〵、假令遊藝なればとて嗜み置いて損はござらぬ、既に今日長沼殿が勤められたる銅拍子も、學ばずしては小鼓に、拍子を合せて面白く、あゝはなか〳〵打てませぬ、是れも勝れて妙手でござつた。

彌七　仰せの如く靜女の舞も勝れしことなれど、一つは頗ぶる堪能なる、

左衛　大名三人相和して、囃されたゆゑもござらう。さて〳〵保養な事でござつた。
小平　我々共は無器用ゆゑ、囃子が出來ぬ其替り、景久殿へお太鼓半分、
彌太　打合せたる先刻の、夫の一條にそろ〳〵と、取掛らねばなりますまい。
彌七　何さま、それも捨て置かれず、
左衛　無駄かは知らぬが相成るべくは、
小平　首尾よく執持ち、われ〳〵四人、
彌太　立身出世をしたいものだ。
彌七　然らば各々、
三人　さあ、お越しなされ。

ト四人調べにて上手へはひる。跡誂への合方になり、奥より靜御前以前の装に着替へ、柵、一、六、附いて出來り、皆々よろしく住ひ、

柵　靜どのには御産後ゆゑ、嘸お疲れにござりませう。
一　暫時是れにゆる〳〵と、
六　御休息をなされませ。

静 柵どのにも何から何まで、わらはに心をお盡し下され、其のお陰にて法樂の、舞を首尾よく奏でました。有難う存じまする。

柵 この柵はほんの差添、何のお役にも立ちませぬに、其のお詞は痛み入る、それに附けてもお棧敷にて差手引手の一差を、わらはも拜見いたしましたが、恐入つた事でござりまする。

一 我が君はじめ、御臺所樣にも其業の勝れしを、御感心遊ばしました。

六 賓に東には及ぶものはござりませぬと口々に、お噂いたし居りまする。

静 拙い業を其のやうに、御賞譽に預りてはお恥しうて總身に、汗を浸しまする。

ト合方きつばりとなり、奥より以前の梛の葉、臺に載せし紅白の羽二重を侍女四人に持たせ出來り、よき所へ住ひ、

梛葉 静どの、嘸お疲れにござりませう。

静 梛の葉どのには種々の、御配慮下されましたる段、お禮は詞に盡されませぬ。

梛葉 そのお禮は此方より言はねばならぬ今日の法樂、早速ながら静どのへ、御披露申すは外ならず、かねぐ噂に聞きしより遥に勝りし振舞りとて、御臺樣も大姫君も、殊の外御感心遊ばされ、即ち上より下されもの、いざ有難く御受納あれ。(ト件の臺を静御前の前へ出す。)

靜　これは恐れ多い事、拙き舞を御賞美あつて、結構なる下され物、よしなに御禮願ひ上げまする。

梛葉　委細承知いたしました、ほんにわらはも今日の舞が首尾よく濟むまでは、如何と案じ侍りしが、まことにお上の御機嫌よく、お執持をいたしたる、其の甲斐あつて如何ばかりか、お嬉しう存じまする。

柵　是れも偏に靜どのゝ、舞が勝れておはすゆゑ。

一　よき折柄にお目もじせし、

二　私共もとも〴〵に。

三　又と見られぬ靜どのゝ、

四　舞を拜見いたしまして、

五　冥加に餘る身の仕合せ、

六　よき樂みをいたしまして、有難う。

六人　存じまする。

ト皆々辭儀をなす。靜御前面目なき思入、奧より以前の景久出來り、

景久　靜女を初め、女房是れにありしか。（ト眞中へ住ふ。）

梛葉　景久殿も靜御前の、

柵　舞を御覧なされましたか。

景久　見た段〳〵、姿といひ舞といひ祕曲を盡す絕妙に、思はず見入りて我を忘れ、幾度となく手な
打ちたり、それは格別御臺所が、早や御歸館に候ゆゑ、何れもには片時も早く、お見送りをいた
されよ。

梛葉　すりや御臺樣には、御歸館とや。

柵　左樣なれば靜どの、暫く是れに、

靜　何卒よしなに御禮を、

梛葉　畏りました。

柵　いざ、お見送りを、

六人　いたしませう。

ト唄になり、梛の葉先きに柵其他女形みな〳〵奥へはひる。跡に景久繼穗なき思入にて、

景久　靜どの、嘸御退屈にござらう、何か用事あらば、遠慮なく手前に仰せなされたがよい。

靜　有難い其のお詞、必ずお構ひ下さりますな。

景久　然らば、何も用事はござらぬとか。

靜　左樣にござりまする。

景久　でござるかな。（ト困る思入、）したが定めてお疲れでござらう、ゆる〳〵御休息いたされよ。

ト景久早く四人が來ればよいといふ思入、此時上手より以前の大名四人、瓶子土器を三方に載せ持ち出來り、

彌七　景久殿、是れにありしか、今日八幡宮へ供へし神酒、

左衛　靜どのに頂戴あるやう、

小平　勸めてくれと我々へ、

彌太　神職方より賴みでござる。

景久　それは近頃御苦勞千萬。いざ靜どの、頂戴いたされよ。（ト三方に載せし土器を靜御前の前へ直す。）

靜　これは〳〵、有難う頂戴いたしまする。

ト土器を取り上げる、彌七酌して靜御前頂いて吞む、景久思入あつて、

景久　その土器は、手前が頂戴いたしたい。

彌七　はッ。

ト取次ぎ景久の前へ持ち來る、左衞門酌をする、景久土器を持ち思入あつて、

景久　靜どの、此土器忝けなく頂戴いたす。（よろしく呑干し、）これは靜どのへ返杯いたす。（トさす。）

靜　折角の仰せなれど、未だ病後に侍るゆゑ、最早御免を蒙りまする。

景久　御尤もなる其の御辭退、然あらば跡は兎も角も、此の土器は靜どの是非とも受けて貰ひたい。

靜　でも、常より過しませねば。

景久　はて、左樣でもござらうが、ひらに一獻。

ト無理に勸め、彌七酌をして靜御前餘儀なく呑干す。是れを皆々見て、

彌七　先づ是れにて大法の　杯事も相濟んだり、

左衞　是れからは景久殿が、お手に入れる腕前なりと、

小平　足入れなりとこし入れなり、そこが膝とも談合ゆゑ、

彌太　邪魔のないうちありやうは、假名でやは〱言はるゝとも。

彌七　四角な文字で堅く出て、

左衞　丸くお纏めなさるとも、

小平　そこは自作のお筆先き、

彌太　早く趣向が、

四人　拜見したいな。

ト早く言へと勸めるこなし、景久は言ひ出し兼ねる思入、此内靜御前も思入あつて、

靜　最早當社に用なきわらは、是れより下向いたしまする。何れも御免。(ト立ち上るを留めて、)

景久　先づ待たれよ、靜どの。

靜　何ぞ用ばしござりまするか。

景久　別に用事もござらぬが、今御身が立つ時は、此座の花を失ふ道理。何と各々左樣ではござらぬか。

彌七　如何さま、折角神職より神酒を賜り、まだ一順。

左衞　御相伴をいたさねば、せめて我々一獻づゝ、

小平　靜どのと同席にて、快く頂戴なし。

彌太　それにて納杯仕つれば、御迷惑でも今暫く、

景久　先づ〳〵お下においで下されい。(ト無理に靜御前を下に居させ、)いやなに靜どの、只今身共が差し申した其土器を、是れなる各々方へ順杯に、お差しなされては下さらぬか。

靜　ほんに此儘納杯に、いたしますも失禮ゆゑ、何卒よしなに。(ト三方を前へ押遣る。)

彌七　いや、とてもわれ〳〵へお流れを、
左衛　頂戴させて下さるなら、
小平　今一盞お手許を、
彌太　拜見の上いたゞきたい。
靜　何やうお勸めなされても、早や一滴も過されませぬ。
景久　是れはしたり各々、靜どのは早や過されぬと言はるれば、必ずお勸め御無用々々。いや、兎角上戶と申す者は、過せぬ者に無理强ひをいたすが癖でござれども、そこを救ふが粹といふもの、こりや斯樣いたさう、靜どのゝ名代に、景久相を仕り、それを各々へ獻じ申さう。憚りながらおつぎ下され。（ト土器を取り上げる。）
小平　然らば替つて、手前がお酌仕つらう。（ト小平太酌をなし景久思入あつて、）
景久　何と靜どの、せめて是れなる一獻の、半をお過し下さらぬか、殘りは手前が頂戴いたす。
靜　有難うはござりますが、平にお許し下さりませ。
景久　然らば殘らず手前が引受け、御身の名代仕らう、其代り景久が、靜どのへ賴みがござるが、それを聞いて貰ひたい。

靜　して靜へ、お賴みとは。

景久　其のお賴みは。（ト言兼れるを四人の大名早く言へといふ思入、景久餘儀なく、）其のお賴みは別儀でござらぬ、御身が自筆の三十一文字、戀歌を詠じて貰ひたい。

靜　わらはに戀歌の御所望とは、ふむ。（トちつとこなしある、景久少し酒に醉ひたる思入にて、）

景久　直に申すも面目ないが、何を隱さう某は、ぞつこん御身に惚れ申した。（ト思ひ切つていふ。）

靜　え〻。（ト呆れし思入。）

景久　主ある御身へ懸想なすは、言はずと知れし不義ゆゑに、驚き召さるも尤もながら、心を鎭めて景久が申すをとつくりお聞き下され。（ト媚きし合方になり、）義經公は落ちる途中で虜になり、辨慶始め四天王殘らず討たれたと申す事。

靜　え、、（トびつくりなし、）それは誠でござりまするか。

景久　何僞りを申さうぞ、されば御身は主なき身、我も幸ひ獨身ゆゑ、得心なれば我が君へ申し上げて貰ひ受け、今日直に手前が奧方、只今進め申したる神酒は固めの三々九度、是れに立つたる衝立の鶴を差詰め島臺替り、又御臺より拜領せし、白木の臺を結納の品と思うて幾久しく、受納の印に三十一文字、戀歌を所望いたしたい。

彌七　靜どのは名代の歌人戀と題を出されたら、百も承知で千秋萬歳、千箱の玉の祝言も、義經公さへ世になくば、得心あるに相違ない。

左衛　當時御親父景時殿は、上のお覺え目出度くして飛鳥落ちる勢ひあり、其御子息の景久殿、榮耀榮華は心の儘。

小平　靜どのが奥方にならるゝ時は其身の仕合せ、花の盛りを日陰にて萎ますよりは今の內、梶原殿の手活となり、

彌太　活計歡樂を盡さるゝのが其身の德、戰に掛けては並びなき勇士でござるが女には、至つて優しい情知り、

景久　弓弦の切れた源廷尉を、思ひ切つて梶原の、矢筈に組んでしつぽりと、抱れて寐ると今爰で、色よい返事をお聞かせ下され。（ト景久口說く、四人勸めるこなし、靜御前思ひ入あつて、）

靜　すりや、我が君には奥州にて、まことに討たれたまひしとか。

景久　如何にも。

靜　して奥州は、何れいづくで、君には討たれたまひしぞ。

景久　さあ、其の奥州は何れであつたか。（ト態と考へる思入、）

靜　定めて達しはありつらん、それを慥と御存じなきや。
景久　さあ、つい事多く失念いたした。（ト間の惡きこなし、靜御前思入あつてずつと立上るを景久留めて、）こりや、何れへござるぞ。
靜　我が身に取りては大切なる、義經公がいづれ何處で、討れたまひし事なるか、御身が失念せしとあれば、秩父殿か工藤殿に、お目に掛つて承はらん。
景久　いや、其儀は暫くお待ち下され。
靜　でも、聞き捨てになりませぬ。（ト景久困る思入にて、）
景久　實は街の風說なれど、義經公は叛逆の企てあつて我が君の、御不興うけし上からは、再び此世へ出られぬゆゑ假令存命なればとて、近きに落命あるは必定、それに義理立てめさるのは、益なき事ゆゑ景久に、其身を任すが上分別、それとも得心ござらぬか。
靜　何やう仰せられるとも、此の御返事はなりませぬ。（トきつといふ、景久むつとして、）
景久　此の景久に隨はねば、御身が命はあらざるぞ。
靜　それは何ゆゑあつてのこと。（ト下に居る、景久につたり思入あつて、）
景久　最前御身が舞ひし今樣、はや終らんとせし折に、夫の祝言の君が代を、唄ふ事かと思ひの外、し

づやしづ、しづのをだ巻繰返し、昔を今になすよしもがなと、申さば則ち我が君を、蔑にする其詠み歌、以ての外の御立腹、既に死刑の御沙汰あるを、我が父平三景時と、此景久が申し宥め、君のお怒り鎮めたり、斯くまで情を盡すのは、御身を奥にしたいゆゑ、さあ色よい返事が生死の境、（トいへど靜御前ぢつと俯向き居るゆゑ、景久詰寄り、）斯程に申すに默し召さるは、命を捨ても不承知か、さあ得心か、但しは否か、さあ〳〵〳〵、相成るべくは命の助かる、色よい返事を聞してくりやれ。（ト思入にていふ、靜御前きつとなり、）

靜　やあ、詞が過ぐる梶原景久、わらはに對して無禮なるぞ。

景久　なに、無禮とは。

四人　何ゆゑに。

靜　義經公を御身等は、何人なりと心得居るぞ。

景久
四人　何と。（ト誂への合方になり、）

靜　忝けなくも左馬頭義朝公の九男にして、源二位殿の御連枝なり。汝が父の景時始め、皆源家の臣下ならずや、廷尉の君も是れ正に御主人ならずや、殊更兄鎌倉に、今權勢を揮ひたまふは、誰が蔭と心得居る、蛭ケ小島に御旗を、揚げられしかども其折に、關八州の人心を、測り兼ねたま

ひしゆゑ、遂に平家を討つこと能はず、木曾義仲に先を越され拳を握らせたまふ事、聞くと等しく義經公、奥羽を跡に御出馬あつて、駿州浮島の陣に馳せ附き、一方の將として木曾の強敵を討亡し、續いて一の谷鵯越を逆落しに、十萬餘騎の堅城を一擧に破り、屋島を責め壇の浦の一戰に、平家の根を斷ち葉を枯らし、直に三種の神寶を都へ還幸し奉り、頓に四海の激浪を鎭めたまひしゆゑにこそ。其勳功をも賞せられず讒佞の詞を信じたまひ、現在骨肉の我が君を憎ませたまふは何事ぞ、假令わらはは妾にせよ、義經公の御胤を此身に宿せし靜なり、臣下の身にて御連枝の、お情受けしわらはへ對し、あられもない事を申すは、身の程知らぬ無禮者、無禮なりと申せしが、此の靜が誤りなるか。

景久　さあ、それは、

靜　汝等が無禮なるか。

四人　さあそれは、

靜　誤りなるか。

景久
四人　さあ、

靜　さあ、

皆々　さあ〳〵。
靜　以後をきつと愼まれよ。（ト靜御前思入あつてきつといふ、景久四人顏を見合せ忌々しきこなし）
景久　假令平家を滅すとも、源廷尉殿一人の、勳功にては候はず。
彌七　味方の勇士が一致なし、
左衛　奮激突戰せしゆゑに、
小平　源家の御勝利と相成りしは、
彌太　源二位公の、
四人　御武德なり。
景久　言はるゝ通り義經公も、以前なれば御連枝なれど、今は日蔭の天下の罪人、何遠慮あるべきや、御身も元は白拍子、粹にも似合ぬ事を言はずと、其身を我に任すがよい、それとも達て得心せずば、不便ながらも命がないぞ。（トわざときつといふ。）
靜　生きてつれなき玉の緒の恨み絕えなば一日をも、物思はじと覺悟せば、此世に望みなき靜、何しに命を惜まうぞ。
景久　さう聞く上は。

ト立上る、此時奥より以前の重忠つか〳〵と出で、此中へ入り、よろしく留めて、

重忠　景久殿、お待ちなされ。

景久　や、貴殿は次郎、

四人　重忠殿。

重忠　お暇出し靜女を、何とめさるゝ。

景久　火急に只今用事あつて、御前へ伴はんと存ぜし所。

重忠　して、御前へは何用あつて、

景久　先刻の詠み歌を、御立腹ゆゑ詮議の爲。

重忠　あの詠歌こそ夫を思ふ、女の情に叶へりと、政子の御方言上なし、君にも御機嫌直されしに、又改めて御詮議とは。

景久　や。

重忠　夫の一條に附き御詮議なら、囃子を勤めし工藤、長沼、此の重忠にも御沙汰がありしか。

景久　さあ、それは。

重忠　御身一人承はりしか。

景久　さあ、

重忠　但し親子の言附けか。

景久　さあ、

重忠　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

重忠　返答ならずば景久殿、暫くそれに。（ト景久を下に居させ、）お控へなされ。

ト景久惡い者が來たといふ思入にて、四人と顏見合せ控へる、重忠靜御前に向ひ、

靜どのには、まだ是れに居られしか。

靜　これは〳〵秩父殿、先刻は段々と、御苦勞にござりました。

重忠　拙き笛にて靜どのには、嘸舞ひにくき事ならんと、御心中お察し申した。

靜　いえ〳〵勝れし御笛ゆゑ、序破急の拍子よく、常より舞ひよう覺えました。

重忠　何は然れ舞も濟めば、靜どのには長居は恐れ、疾く〳〵下向いたされよ。

靜　有難う存じまする。（ト爰へ奧より梛の葉、柵出來る、景久始め四人見て、）

景久　追々邪魔が、

彌七　いや、お邪魔なれば賜はりし、
左衛　是れなる臺の品々は、
小平　われ〳〵四人が、
彌太　預かり申さん。
椰菜　いえ、それには及びませぬ。
柵　わらはが持參いたしまする。
椰菜　靜どの、嘸待ち久しう居たまはん。
柵　いざ、御同道いたしませう。
靜　左樣なれば此儘に、
重忠　障りなき内。（ト早く歸れといふ思入）
景久　でも此儘に歸しては。（ト立ち掛るを重忠留めて）
重忠　いや、御暇出でし上からは。
椰菜 柵　少しも早う。
靜　下向いたすで、（ト會釋する木の頭）ござりまする。

ト辭儀をする、景久立ち掛るを重忠是れを留める、此模樣皆々引張りよろしく、三味線入り亂れにて、

ひやうし幕

五幕目大詰　羽州佐藤接待の場

（新歌舞伎十八番の內、『山伏接待』）

〔役名――佐藤の後室敎信尼、武藏坊辨慶、龜井六郎重淸、增尾權頭兼房、鷲尾三郎經久、熊井太郎忠基、片岡八郎經俊、廢喜三太淸悅、杉目小太郎行信、伊勢三郎義盛、佐藤の家來四人、駿河次郎經淸、常陸坊海尊、源延尉義經、繼信妻淺香、忠信の妻信夫、稚兒金剛丸實は義經の北の方卿の君、嗣信の一子鶴若、忠信の一子龜若。〕

（佐藤屋敷門外の場）――本舞臺一面の平舞臺、上の方に扉を開きし冠木門、此向う網代塀、向う一面誂へ屋根附きの土塀、後淺黃幕、門の脇に「山伏接待」といふ高札を建て、總て出羽の國高畑佐藤邸宅門外の體。爰に〇△口の三人筒袖小袴一本ざし、家來のこしらへにて立掛り居る、管絃の合方へ礫を冠せ幕明く。

〇當家の後室敎信尼さまは、嗣信さま忠信さまの御追善の其爲に、山伏接待といふ札を建て、羽黑

△山へ參詣の、山伏をお泊めなされまするは、まことに大功德なことではないか。

□如何にも功德な事なれど、御追善の爲ならば、奥羽の靈場巡拜なす佛道修行の旅僧を、なぜお泊めなされぬか、山伏ばかりの接待は、何ぞ譯のある事か。

○これには深い譯があつて、繼信さま忠信さまが、主君と賴みし源廷尉義經公が、讒者の爲に山伏となり、奥州へ下りたまふと申す事、實はそれを御待受けなさるゝ事であるさうな。

△この接待を始めてより、毎日二人三人位札を目當に泊りに來るが、皆常體の山伏にて、判官殿主從と思ふ者は未だに參らぬ。

□定めてお供は武藏坊辨慶殿を始めとして、名ある勇士の方々ならん、人數は何人位でござるな。

○專ら街の風說には、人數は主從十二人、何れも山伏姿にて奥州下向あるよしゆゑ。斯うして日々待つて居れど、未だ十人といふ山伏の、泊りを求めし事がござらぬ。

△義經公は稀なる名將、それに附き添ふ人々も各々勝れし英雄なれば、一目見ても知れるは必定。

□一里塚まで嘉藤次が、先刻見張りに出張なせば、似寄りし山伏參りなば、早速注進いたすであらう。

△後室さまがお待兼ゆゑ、一日も早く御主從が、是れへおいでなさればよいが、はて待遠なことで

ござるな。

ト合方しらべにて、門の内より鶴若若衆鬘後茶筅、袴一本ざし、龜若同じ拵へにて出來る。

○　これは〳〵若さまには、最早劍術の御稽古を、遊はしましてござりまするか。

鶴若　おゝ先刻劍道の稽古はしまひ、今まで素讀をいたし居つた。

龜若　まだ今日は山伏衆が、一人もこれへ參られぬか。

△　仰せの如く今日は、一人も見えませねば、一里塚まで嘉藤次が遠見に參つてござりまする。

鶴若　人の噂に我が君には加賀の國の安宅にて、關守富樫に止められ、御難儀ありしと申す事。

龜若　まだ其外にも新關あれば、作り山伏と見咎められ、御難儀ありしも測られず。

鶴若　兎にも角にも此處へ、君の御着なき内は、

龜若　心ならざる、

兩人　事ぢやなあ。（トばた〳〵になり、花道より◎三人と同じこしらへにて走り出來り、直に舞臺へ來る。）

○　おゝ、嘉藤次殿、

三人　歸られしか。

◎　はツ、只今歸りましてござる。

鶴若　其方見張りに參りしと申すが、

龜若　未だ山伏衆は見えざるか。

◎　只今一里塚に居りし所、向うへ見えし山伏は、人數も丁度十二人、正しく源廷尉公の御同勢と存じられますゆゑ、御注進申し上げまする。

鶴若　おゝ、待侘びし其處へ、よくぞ注進いたせしぞ。

龜若　して其十二人の山伏衆は、世の常にあらざるか。

◎　大先達は法師にて、何れも勝れし骨柄なれば、豫て仰せござりましたる、御同勢と存じられます。

鶴若　然らば此山祖母さまへ、

龜若　お待兼ねゆゑ申し上げん。（ト合方しらべにて、鶴若龜若門の內へはひる。）

◎　さらば門內にて山伏の、

○　御入りあるを、

四人　相待ち申さん。

ト門の內へはひる、是れにて上手出語り臺の霞幕を切つて落す、爰に竹本連中居並び、淨瑠璃になる。

上ルリ〽如月の十日の夜半に入方の、月諸共に義經公、都を落ちて越路潟、散り行く梅の加賀の國

安宅の關も易々と、越えて出羽の佐藤の館、構へ間近く歩み來て、

ト此内法螺の音小鼓のあしらひにて、花道より義經撫下げ鬘、兜巾篠掛、水衣、小袴馬手差し、附太刀草鞋、山伏のこしらへにて出來る、海尊白髮鬘兜巾篠掛水衣達附草鞋、經清、重清同じこしらへにて出來る、跡より辨慶、坊主鬘兜巾篠掛水衣達附草鞋、誂への笈を背負ひ、金剛杖を突き出來る、皆々花道へ留り、

義經　如何に海尊、見ればあれなる門外に、嚴しき建札して山伏接待と記しあるは、汝等如何思ふぞよ。

海尊　總じて旅行の修行者へ接待とあるなれば、世になき人の追善に、施しなすと思ふべけれど、山伏のみに接待とは、心得がたき建札なり。

經清　海尊殿の言はるゝ如く、正しくこれは我が君を、止めん爲の接待にて、鎌倉よりの內命ならん。

重清　さすれば一泊なさずとも、御休息もいと危し、是れより跡へ取つて返し、道を違へて御出であるが、然るべきかと存じまする。

義經　方々の意見尤もなり、我も疑念を生ずれば、一存には決し難し、辨慶汝が所存は如何に。

辨慶　そも／＼湖水を船にて渡り、海津の浦へ着きてより、是れへ參る道々も、諸所に構へし新關にて判官殿かと怪しめられしも、詞を巧に言ひ解いて、出羽の國まで參りたり、今山伏接待と建札の

ある此家へ、斯く山伏の姿にて立寄らずして過ぎ行かば、怪しき者と疑はれ、如何なる變のあらんも知れず、先づ何氣なく羽黒山の山伏の體に言ひなして、一泊あつて然るべきかと、此辨慶は存じ申す。

義經　何さま、是れは辨慶の申す詞に隨はん、若し鎌倉の內命うけ、搦め取らん其爲に、是れへ設けし接待ならば、立寄らざれば追手を掛けん、兎にも角にもあれへ參りて其場の仕儀にいたすべし。

海尊　成程これも御尤も、然らば此家へ立寄りて、篤と家內の樣子を窺ひ、御止宿あつて然るべし。

義經　して跡の人數は如何せしぞ。

經淸　それは人目を憚りて、五人三人別れ〳〵に、連れにあらざる體になし、

重淸　北の方の御守護をなして、一二町後れたれば、程なく是れへ參られませう。

辨慶　只心遣ひは北の方、綠の黑髮襟にて切り、稚兒の姿になしまゐらせ、お名さへも金剛丸と、男の所作をなしたまへど、餘人は知らず我々には、未だ女性と見えまする。

義經　左りが先きへ歩むやう申し附けては置きたれど、兎角男になり難く、心苦しき事なるぞ。

經淸　然しながら此程は、餘程道に馴れさせたまひ、

重淸　都を立ちし時分とは、大きな相違にござりまする。

ト法螺の音になり、花道より卿の君、切髪水衣小袴一本ざし、稚兒のこしらへにて出來る、續いて義盛、經久、忠基、經俊、清悦、行信、兼房何れも同じ山伏のこしらへ、兼房笈を背負ひ出來り、花道へ並びて、

卿君　歩み馴れざる驛路に、殊に嶮しき山路ゆゑ、道に後れてござりまする。

義盛　北の方にはたゞならぬ、御身ゆゑにゆる〳〵と、お運びあるやうお厭ひ申し、

經久　それゆゑ四五町後れても、君と一つにあらざるやう、

忠基　態と間を隔てしは、旅の人目を憚る爲、

經俊　されども道行く人々が、心のせるか怪しむ樣子、

清悦　まこと羽黑の山伏が、

行信　東國修行の體に見せ、

兼房　やう〳〵是れへ參つてござる。

辨慶　北の方には嘸お疲れ、幸ひ向うの接待にて、御休息なされませ。

卿君　すりや、我が君には、

七人　接待所へ。

義經　仕儀によりなば宿る所存。
海尊　左樣ござれば、
皆々　片時も早く、
義經　方々來やれ。
皆々　はあゝ。
〽法螺の音高く吹き立てゝ、先達扉へ立掛り、（ト皆々本舞臺へ來り、辨慶門の外へ立ち、）
辨慶　これは羽黑山の山伏にて、東國修行に出し者、接待とある建札に、暫く緣を貸して下され。
〽訪ふ聲に門內より、以前の家來立出でゝ、（ト門の內より以前の四人出來り、）
◎　仰せまでも候はず、山伏衆にござるなら、
○　接待ゆゑに御遠慮なく、打ち通りて休息あれ。
△　日も西山へ傾きて、最早夕景近ければ、
□　何れへござるか知らねども、一泊あつて苦しからず。
辨慶　それは千萬忝けなし、事によりなば今宵の宿りを、當家へお願ひ申すでござらう。
◎　して山伏衆の御人數は。

○　何人でござりますな。
辨慶　斯くいふ先達を初め、以上十二人でござる。
△　すりや山伏衆は、
□　十二人とな。（ト四人思入、）
◎　先刻より御待兼ねゆゑ、
○　此山奥へ傳へられよ。
□△　心得てござる。（ト△□門の内へはひる。）
◎　いざ、山伏衆には、
○◎　疾く〳〵あれへ。（ト辨慶皆々へ向ひ、）
辨慶　然らば何れも、
義經　すりや接待の、
皆々　設けの席へ、
辨慶　心置きなく通りめされ。
〽大先達を初めとして、順序を直して門内へ、打ち連れてこそ、

と◎〇先きに立ち、辨慶先きに海尊、義經、卿の君、跡みな〲門の内へはひる。跡調べにてつなぎ、よき程に知せに附き、上手冠木門網代塀を引いて取り、釣枝を引上げ、土塀三つに疊み日覆へ引きあげる。

（接待所の場）＝本舞臺四間中足の二重八枚飾り、板葺本屋根樹木の枝を載せ、本椽附、厚板の踏段、向う松島を描きし襖、後に引拔く事、上の方手摺附の廊下、向う板羽目、廊下の留り二枚の開き戸出這入り、下の方網代塀松の立木、二重上手に誂への爐、あられ釜を掛け、傍に茶棚、これに誂への道具飾りあり、總て佐藤の館接待所の體、床の三重にて道具納る。

〽入りにける、爰に佐藤庄司が後室敎信老尼が、都より山伏となり陸奥へ、判官殿の下向と聞き、門に山伏接待と高札立てゝ御入りを、待設けたる一構へ、家來が知らせに一間より鶴若龜若立ち出でゝ、（ト此内下手より以前の〇△出來る、奥より鶴若龜若出で、）

鶴若　先刻より待設けし、

龜若　山伏衆が御入來とな。

〇　羽黑山の山伏衆が、參られましてござりまする。

鶴若　して、其の人數は。

龜若　何人なるぞ。

△　以上十二人でござりまする。

鶴若　それぞ正しく我が君ならん。

龜若　疾く〳〵是れへ、

兩人　お通し申せ。

○　はツ、（ト下手へ向ひ、）いざ山伏衆には、御遠慮なく、

△　これへお通り、

兩人　なされませ。（ト下手揚幕の內にて、）

辨慶　然らば御免、

皆々　下されい。

〽家來が案內に、先達の跡に附添ふ人々は、如何なる設けあらんかと、心を配る奧の間より繼信忠信兩人の、妻は立ち出で手をつかへ、

ト此內下手より◎口案內をなし、辨慶先きに海尊、義經、卿の君ずつと上手へ通る、經清、重淸、義盛あと皆々下手へ並ぶ、上手廊下より淺香、信夫下髮打掛けにて出來り、よき所に手をつかへ、

淺香　これは〳〵山伏衆には、ようこそ御入來なされました、出羽の國は山道多く、嘸かし御難儀にござりませう。

信夫　御覽の如く門前へ、接待所の建札をいたし、席を設けてお待ち申せば、草鞋を解き、疾く〳〵是れへ、

淺香　お通りなされて、

兩人　下さりませ。

辨慶　如何にも仰せに任すでござる、何れもにも草鞋を解き、是れにて休息いたされい。

皆々　心得てござる。

〽心ならねど先達の、詞に皆々草鞋解き、塵を拂ひて奥口を見廻し席に附きければ、子息は從者に打向ひ、

ト此内皆々草鞋を解き塵を拂ひ、二重へ上り、眞中に義經卿の君、上手に海尊、經清、下手に重清、義盛此前に辨慶、後に兼房、經久、忠基、經俊、清悦、行信居並ぶ。

淺香　こりや、其方共は山伏衆の、草鞋を取片附けい。

四人　はッ。

信夫　用事あらば呼ばん程に、部屋へ參りて控へ居や。

四人　畏つてございます。

〽從者は草鞋携へて、垣の小蔭に入りにける、

ト四人草鞋を持ち、下手垣の小蔭へはひる。淺香信夫辨慶に向ひ、

淺香　唯今從者へ仰せあるを、小蔭で伺ひましたるが、

信夫　何れも方には羽黑山の、山伏衆にござりまするか。

辨慶　如何にも當國羽黑の修驗者、斯く申す某は大先達荒讃岐。

海尊　又某は小先達常陸坊、

義經　我等ことは大和坊、

重清　席に列なる我々は河內坊、

義盛　和泉坊、

清經　山城坊、

兼房　近江坊、

經久　信濃坊、

忠條　但馬坊、
經清　攝津坊、
清悅　播磨坊、
行信　長門坊、
義經　其餘は是れなる稚兒一人、
御房　金剛丸と申します。
辨慶　何れも是れより東國を、修行いたす山伏にて、
海尊　人數は以上十二人。
經清　追福作善の爲なるか、
重清　接待とある建札に、
義盛　暫く是れにて憩ひまする。
兼房　御厚志の段。
皆々　忝けなし。
〽禮儀を厚く辭儀なせば、二人の子息は賢しくも、（ト皆々辭儀する。）



鶴若　母上達には客僧方へ、
龜若　お茶を參らせたまふべし。
淺香　これは三歲兒に淺瀨の譬。
信夫　お茶參らすを忘れしぞ。
〽言ひつゝ傍の爐端に寄り、心の花香汲み取りて、靜々君の御前へと北の方へと差出し、
ト淺香、信夫棚にある茶椀へ茶を汲み、信夫摺の袱紗へ載せ、是れを義經と卿の君の前へ出し、
淺香　粗末の茶にはござりまするが、
信夫　召し上つて下さりませ。（ト義經思入あつて、）
義經　先づ是れは拙僧より、大先達小先達兩僧へ出されよ。
淺香　仰せではござりますが、我が君樣と北の御方樣へ、お先きにお茶を參らせよと、
信夫　我母上の詞に任せ、先達殿を差置いて、捧げましてござりまする。（ト義經思入あつて、）
義經　こは心得ぬお詞かな、拙僧ことは大和坊、是れへ供せしは稚兒金剛、何と見違へられたるか、思ひ設けぬ事なるぞ。
淺香　世をば憚りたまふ御身に、お包み遊ばしまするは、御尤もにござりまするが、大和坊と仰せある

は正しく源家の義經公、

信夫　又金剛と仰せらるゝは、北の御方卿の君さま。

淺香　何卒お包み遊ばします、

信夫　御名をお名乘り、

兩人　下さりませ。

〽思ひ入りたる言の葉に、何と岩間の苔清水、其源を明し兼ね、ためらひたまへば辨慶が、

ト義經皆々と顏見合せ思入、辨慶うなづき、

辨慶　いや、是れへ參る道々も、諸所にて斯樣の事ありしが、中にも加賀の安宅の關にて、判官殿主從なりと關守富樫の左衞門に疑はれし事ありしが、又此家にても判官殿主從なりと見違へられしか。

義經　よしなき人に似たるとて、斯く疑はるゝは迷惑なり、我は判官義經ならず、是れより東國修行なす羽黑山の山伏なり。

淺香　左樣にお包み遊ばせど、判官殿御主從十二人の山伏となり、此陸奧へ下りたまふと、疾くより街に噂高く、誰存ぜざる者もなし。

信夫　それゆゑ是れへ設けの爲に、山伏接待といふ建札なし、當所へおいで遊ばすを、お待ち申してご

ざりまする。

辨慶　それは如何なる見違へなるか、元我々は主從ならず、羽黒山の山伏なり、事に紛れて問はざりしが、斯く接待の施しある、當家の主人は何人なるぞ。

〽話しを餘所に尋ぬれば、

淺香　此家は佐藤庄司が邸宅、當時は後家の敎信尼が、これに住ひ居りまする。

辨慶　すりや佐藤殿の邸宅なりしか。

義經　して是れなる二人の少年は、

淺香　佐藤三郎兵衞繼信の悴、

鶴若　鶴若と申しまする。

信夫　又是れなるは、四郎兵衞忠信の悴、

龜若　龜若と申しまする。

卿君　扨は二人の女性達は、

淺香　その繼信が妻淺香、

信夫　忠信が妻信夫と申す、

兩人　不束者にござりまする。
海尊　源家の臣にて勇士と呼ばれし、佐藤繼信忠信殿の妻女子息でありしよな。
經清　して繼信殿、忠信殿は、
重清　當家においでなさるゝか。
淺香　〽問はれて浮む涙を拭ひ。（ト淺香信夫愁ひの思入にて、）申し上げるも思ひ出で、涙の種にござりまするが、繼信ことは屋島にて、討死いたしてござりまする。
信夫　又忠信は都にて、自殺なせしと申す事にて、
淺香　兩人共に果敢なくも、
信夫　今は此世に、
兩人　ござりませぬ。
辨慶　さては世になき人なるとか、はて傷しきことでござる。
義經　只今女性が母上の、指圖なりと言はれしは、佐藤兄弟の母なるか。
淺香　仰せの如く庄司の妻にて、

信夫　二人の母にござりまする。

〽さては繼信忠信が、母の住家でありけるか、人々顏を見合せて、暫し詞もなき折柄。

ト皆々よろしく思入、此時上手にて、

敎信　お尋ねありし佐藤が母、只今お目見え仕らん。

〽一間の內より立出る、佐藤が母の敎信尼は、齡積りし頭の雪、額の波や打掛の、衣の薫りも奥床しく、靜々御前に手をつかへ、

ト此內上手屋體より、敎信尼白髮の切髮、打掛好みのこしらへにて、上手よき所に住ひ、

先達てより風說に、義經公には都より、主從山伏姿にて此陸奥へ十二人、御下向ありと承り、今日か明日かと御入りを御待ち申せし私は、繼信忠信の母にして敎信尼と申しまする、夫を初め兄弟の菩提の爲に髮を剃ぎ、今佛門の徒となりし憚りある身も顧みず、御前間近く立出でしも、世になき悴兩人がお仕へ申せし我が君と、思ひますれば只管に、御懷しく存じますゆゑ、斯くお目通りをいたしまする、無禮の段は幾重にも、お許しなされて下さりませ。

〽言ふを辨慶打消して、

辨慶　最前よりして判官殿主從なりと申さるゝは、それはそなたの思ひ違ひ、全く羽黑山の山伏にて、

五人三人東國へ別れ〳〵に修行なす者、接待ゆゑに此處へ丁度人數も十二人寄り集りしを、判官殿主從なりとは、何を證據に、餘りおろかな事でござる。

海尊　とはいへ、左樣に言はるゝには、斯く十二人並びし中にも、誰を判官殿と見らるゝか。

義盛　先づそなたより指して見られよ。

敎信　それは最前お入りの折、遣戶の隙より見上げしに、大和坊と仰せられしは、淸和源氏の御正統源廷尉義經公、又金剛丸と仰せありしも正しく北の御方と、見上げしゆゑ二人の子供に申附け、御湯を捧げし敎信尼、老眼なれどいさゝか相違はござりますまい。

〽名を指されて、廷尉を始め返す詞も荒讃岐、流石の辨慶海尊も、暫し默して居たりける。

　ト敎信きつと言ふ、義經、辨慶、海尊顏見合せ、ちつと思入。

斯く接待を設けしも、現世を祈りの爲にもあらねば、後世を願ひの爲にもあらず、賴みに思ひし二人の悴兄繼信は屋島にて能登守が矢先に討たれ、又弟の忠信は都に於て北條の討手の兵に取圍まれ自殺なせしと申す事、風の便りに聞きしのみにて、詳しき事を知らざれど、

〽一人身にしむ袖の雨、晴れぬ思ひを慰む爲、門の外へ建札なし、此接待を始めしより。

一人二人乃至三人、日每に爰へ山伏が尋ね來りて憇へども、皆常體の山伏にて、人數も僅か四五

人なるに、待設けたる十二人、今日是れへ入らせられしは、
〽此接待の利益にて、わらはが望みを達せしなり。
世の諺にも親子より、又主從の契りこそ、深きものと申しますれば定めて哀れに思召されん、殊更君の御爲に一命捨てし郎黨の一人の母に二人の妻、わすれ形見の二人の孫を不便とおぼしたまはらば、など我が君には御名をば、お名乘りなされて下さりませぬ。
〽あら恨めしの浮世やと、老の繰言敎信が、歎ちなげゝば共々に、二人の嫁も又孫も涙に暮れゝば人々も、思はぬ袖を濡らしける、辨慶さこそと察しやり、
ト敎信尼よろしく思入、皆々愁ひの思入、辨慶こなしあつて、

辨慶　忠義に厚く君に替り、一命捨てし兩人の母を初め妻子等が、斯くまで歎くを餘所になし、御名乘りなきは不仁なり、

經清　切なる心中御察しあつて、

重清　御名乘りなされて、

皆々　遣はされい。

義經　おゝ、我とても木石ならねば、彼等五人が不便ゆゑ、如何にも名乘りて遣はさん。

教信　すりや、御名乘りなされて下さりまするか。
五人　えゝ有難うございまする。
義經　今は何をか包み申さん、大和坊と申せし我は、教信尼が察せし如く、源九郎判官義經なるぞ。
卿君　又稚兒金剛と申せしわらはゝ、君の妻たる卿の君。
辨慶　大先達の荒讃岐は、武藏坊辨慶。
海尊　小先達の某は、常陸坊海尊。
重淸　又われ〳〵は四天王、龜井の六郎重淸、
經淸　駿河の次郎經淸、
義盛　伊勢の三郎義盛、
經俊　片岡八郎經俊、
經久　鷲ノ尾三郎經久、
忠基　熊井太郎忠基。
淸悅　鹽竈三太淸悅、
行信　杉目小太郎行信。

兼房　増尾權頭兼房、
海尊　何れも君の御供なし、是れより奥州秀衡殿を、賴みに下向いたすなり。
　〽義經公を初めとして、皆々本名打明せば、敎信尼は打悅び、（ト敎信尼嬉しき思入にて、）
敎信　よくぞお名乘り下されました、是れにて改め我が君へ、嫁女も孫も御目見得せよ。
淺香　かゝる邊土に生立てば、生涯君の御目見得は、
信夫　叶はぬ事と存じましたに、圖らず此家へ御入りあつて、
鶴若　斯樣に御目見得いたしまするは、
龜若　私どもの身の仕合せ、
敎信　冥加至極に、
五人　ござりまする。
　〽有難涙に暮れければ、義經公も御機嫌よく、（ト皆々ひれ伏して辭儀をなす。）
義經　我を設けの其爲に、斯く接待をなせしとあれば、疾くに姓名名乘るべきを、態と包み隱せしは、梶原父子が讒に依り兄賴朝の不興を受け、浮世を忍ぶ此義經、それゆゑ包み隱せしなり、情を知らぬ者なりと、必ず我を恨むまじ。

教信　恐れ多きそのお詞、何とてお恨み申しませう。我日の本の内なれど出羽の國は邊土にて、坐してゐてはお目見得も、生涯ならぬ私共が、斯様に御目見得いたしまするは、君の御身の御不幸にて平家の一門亡ぼしたまひし其大功も水となり、鎌倉殿の御連枝たる重き御身に輕々しき、わらんぢを召しそこはかと、物憂き旅の御艱難、取分けて又御傷しきは、是れにまします北の御方、都の内をも容易には御歩ひなされぬ御身の上を、男姿に出立ちて、山路をお歩ひなされまするは、嘸御難儀にござりませう。

卿君　よくぞ尋ねてくれたるぞ、君と諸共都をば出し折には物憂かりしも、附添ふものに慰められ、昨日と過ぎて此頃は、草鞋さへも履き馴れて、左のみ難儀にあらぬわいの。

淺香　これまで御苦勞遊ばせしも、是れから先きは奥州路、秀衡殿の館も近し、

信夫　日あらず御着になりますれば、最早お案じ遊ばしますな。

淺香　今更返らぬ事ながら、繼信殿か忠信殿が、お供をいたして居りますれば、

信夫　所の地理を存じますれば、御案内になりませうに、殘念な事でござりまする。

鶴若　御案内なら父上の、

龜若　替りに二人が參りませう。

淺香　いや、そち達にては足手纏ひ、
信夫　却つてお邪魔になるわいの。
教信　おゝ、嫁女達がいふ如く、此御同勢の其中に、繼信忠信兩人が、居つた事なら嬉しからうに、今は世になき二人の兄弟、
〽又も涙を目にうかめ、
是れに附けても繼信が、屋島の浦にて最期を遂げしも、正しく君の御身替りに、忠死なせしといふものあれば、不覺を取りて死したりといふ者ありて何れとも、世の風說に分ち難し、定めて其場の有樣を何れも方には御存じならん、母は素より二人の妻、血の餘りなる此孫へ、最期の折のあらましを、御聞かせなされて下さりませ。
〽老女が賴みも尤もと義經公はうなづきたまひ。（ト義經思入あつて、）
義經　屋島の浦にて繼信は、我に替つて死したるが、それが實の事なれば、老母を初め妻子の者へ、心ゆかしに其場のあらまし、辨慶これにて語り聞せよ。
辨慶　委細畏つてござりまする。
〽君命受けて辨慶は、威儀を改め座を進み、（ト辨慶腰に差したる扇を持ち、宜しく前へ出で、）

さても其日の合戰は、然も午の上刻に、平家方に名を知られし、門脇殿の二男なる、能登守教經が船端に立上り、

〽一院の御使、檢非違使五位の尉源九郎義經に、中指一筋參らせん、受けて御覽候へと、五人張りに十三束、打ち番ひてぞ待ち掛けたり。

聞き及びたる强弓に、

〽味方も心後れてか、躊躇ふ隙に繼信は、

心勝りし剛の者、

〽忽ち君の御馬前へ、駈塞がりて鞍がさに、鐙踏張り立上り、

源九郎義經これにありと、莞爾と笑みて控へしは、

〽天晴雄々しき有樣なり。

さて其時に教經が、

〽引き設けたる弓なれば、矢壺をさして射掛けしを、太刀拔き放して切り拂へば、

教經いらつて、三度目に、

〽ひやうと放てば過たず、

着せし鎧の胸板より、
〽後へすつぱと射通したり、（ト辨慶よろしく物語の思入、教信尼も思入あつて）
教信　すりや繼信は教經が、其矢に胸を射られしとか。
淺香　して〳〵其時我が夫には、如何なされましたるぞ。
辨慶　おゝ、其時に繼信は、急所も屈せず馬上にて、乗直さんとせしかども。
〽大事の痛手に怺へ兼ね、馬よりどうと落ちにけり、
教信　其折弟忠信は、君の御前にあらざりしか。
辨慶　おゝ、御前にありし教經が家臣童の菊王丸、繼信が首掻き取らんと、
〽駈寄る所を忠信が、敵の片破れ御參なれと、切つて放せし其矢にて、眞ツたゞ中より射通され、
かつぱと轉ぶ菊王が、首をば敵に討せじと、
〽教經船より飛んで下り、わだがみ摑んで船へ投げ入れ、終に空しくなつたりける。
折しも汐の引時に、次第々々に敵方の、
〽船は搖られて遠ざかり、其日の戰はそれまでなり。

兄繼信が敵をば、眼前取りしは大手柄と、

〽感ぜぬものこそなかりける。(卜辨慶よろしくこなしあつて納る。)

教信　能登守が家來なる、菊王丸を忠信が討ちしは兄への手向なり、繼信こと我が君の御身代りに立ちしとあれば、今世後世への面目なれば、更々悔む所なし、淺香も嬉しく思ふであらうな。

淺香　只討死をいたしてさへ、武士の身の譽れなるに、我が君樣のお身代りに立ちしとあれば天晴ゆゑ、決して歎きはいたしませぬ、出陣の後に母樣が、御不快ゆゑに其事を、家臣島田の三郎が遙々遠き屋島までお知らせ申しに參りし所、なぜ戰場へ知らせしとお叱り受けて歸りたれば、其場の樣子も分りませず、人の噂は取り〲に、不覺を取りて死したりと申す者もござりますれば、案じ煩ひ居りましたが、是れにて心が晴れました。

鶴若　父上御手柄なされしゆゑ、跡へ殘りし私も肩身が廣うござりまする。

淺香　そちも嬉しからうわいの。

〽流石は武士の育ちとて、妻子も共に討死を、悦ぶ心ぞ健氣なる、義經公は老母に向ひ、

トよろしく思入あつて、

義經　屋島の浦にて繼信が、今は斯うよと見えしゆゑ、言置く事のあるならば、心置きなく申せよと、

くれ〴〵尋ね問ひし時、
〽繼信痛手の苦痛を怺へ、
弓矢取る身は其君の御身代りに立つ事は、三世の御恩を報ずる事ゆゑ、露より輕き命をば、いかでか惜しき事あらん、心に掛るは故鄕に七旬に及ぶ我を母と、十に餘る一子あり、
只これのみが不便なりと、心にかゝる浮雲の、月を覆ひて光りをば、失ふ如くくれ〴〵と
終に空しく成り果つれば、並居るものも哀れを知り、鎧の袖を浸しける。
此義經が忠勤を盡す誠が曇らずば、晴れて治る世に出でゝ、繼信忠信兩人が、子孫の者を尋ね出し、命の恩を報ぜんと思ひし事も空しくなり、我れ人かゝる姿にて憂き世の中を忍ぶ身に、其名をだにも名乘り得ぬ、我が果敢なさを推量せよ。
〽臣下を憐む義經が、詞に母はひれ伏して、
敎信 はゝ、冥加に餘る其仰せ、泉下に於ても倅等が、悅び居るでござりませう。
〽有難涙にくれければ、淺香涙の留途もなく。（ト淺香涙を拭ひ、）
淺香 此有難き仰せをば蒙りますも亡き夫が、御身代りに立ちしゆゑ、申すも愚な事ながら存へ居ての手柄なら、一入嬉しうござりませう。

〽身の嬉しさも悲しさが、先立つ夫の戀しやと、流石女の堪兼ねてわつとばかりに泣き伏せば、

ト淺香愁ひの思入にて泣き伏す、敎信尼思入あつて、

敎信　こりや淺香には如何せしぞ、君の御供で戰場へ赴くからは武士は、生きて歸ると思ふまじ、これ今生の別れぞと水杯を汲交し、立派に出陣なす時に妻子に心引されず、手柄をなされて下されと、言ひしをそちは忘れしか、君の御前も憚らず、さりとは卑怯未練なり、是れにござる方々も、心でお笑ひなさるであらう、必ず泣くな泣くまいぞ。

〽泣くなと叱る母親が、先きへ泣きたき恩愛に、目には泣かねど胸に滿つ、涙堪へる敎信が心の内を察しやい、猛き勇士も一雫落つる涙に取分けて、卿の君は泣き入りたまひ、

ト此内敎信尼愁ひを隱す思入よろしく、皆々俯向き愁ひのこなし、卿の君は涙を拭ひ、

卿君　淺香が歎きは理りなり、母御も左樣叱りたまふな、女子は泣くが常なるゆゑ、わらはも都を立ちしより、泣かぬ日とてはあらざりし、

〽來る道々の新關に、支へ止められ今日限り、命を捨つる事なるかと、陸奥まで到らぬ内は

教信　今日は人の身明日は又、我が身の上も知れざれば、心の内を思ひ遣り、共に泪に暮れるわいなう。は〻、義經公の北の御方、卿の君さまより有難い、此お詞を賜りしは、親子の者の面目なり、淺香も必ず歎くまい、母は上なき悦びに、まことに嬉しく思ひます。

〽愁ひを隱し教信が、片頰に笑みを含みしは、泣くよりも猶哀れなり、（ト教信尼につこり笑ふ。）

辨慶　今教信どの〻申す如く、御身代りに立ちたるは、人も羨む手柄ゆゑ、

皆々　必ず歎くことなかれ。

〽皆繼信が手柄をば、褒むるに附けて忠信が、妻子はそれが羨ましく。

ト此内信夫よろしく思入あつて、

信夫　申し母上樣、繼信樣のお手柄を聞くに附けても我が夫の忠信殿は都にて、如何なる事で自殺ありしか、連添ふ妻の身に取りては、心も心なりませねば、忠信殿の最期の樣子、お尋ねなされて下さりませ。

教信　お〻尤もなるそなたの頼み、辨慶殿には忠信が、最期の樣子御存じならば、語りてお聞かせ下されい。

辨慶　忠信殿が最期を遂げしは、某其の場に有合さねば、語り申さん便なし。

義經 〽言ふに義經詞を繼ぎ、
忠信ことも繼信に劣らぬ忠義は吉野にて、大衆我を討たんと、横川の禪司覺範が大將となり、一山の惡僧ばらが取圍めば、容易に其場を脱れ難く、進退谷まり討死なさんと、既に覺悟をなしたる所へ、後ればせに忠信馳け附け、某これにて殿なせば、我が甲冑を賜りたしと、强ひての望みに止むを得ず、六具を彼に與へしぞ。
〽それを着して踏止まりと、語る傍から海尊が、
海尊 蹴拔けの塔の邊にて、寄せ來る大衆に打向ひ、
〽淸和源氏の嫡流たる、源九郎判官義經是れにありと、名乘を揚げ必死の鬪ひなせし上、大將横川の覺範を、事の見事に討取れば、
勇氣に恐れ大衆等は、
〽梢を落す夜嵐に、降積む雪の散る如く、散亂なして逃げたるゆゑ、
其間に我が君危急を脱れ、東大寺まで落延びたり。
義盛 忠信殿も敵なければ、落行く君の御跡慕ひ、
〽竊に都へ出でたれど、鎌倉殿の詮議嚴しく、互ひに忍ぶ身の上に、

遂に廻り逢はずして、
〽四條通りに由縁ある、小柴が許に年を越し、然も正月六日まで、暫く隱れ忍びしも、遂に露顯なしたる由。
〽語る詞の尾につきて、
經清 おゝ其事は聞き及ぶ、鎌倉殿の嚴命にて、都へ登りし北條父子へ、内通なせし者あつて、俄に寄せ來る討手の者、
〽忠信殿は日頃より、好める酒に熟醉なし、枕に着けど油斷なく、込入る人數に目を覺し、
〽傍に有合ふ碁盤を取り、萬夫不當の勇力にて、弓手馬手へ打ちなぐれば、四邊へ飛び散る碁石と共に、ばら〳〵〳〵と逃げ散つたり。
然れど味方のあらざれば、寡は衆に敵し難く、
重清 とても一命捨てるなら、一度君の御座所なる、堀川御所にて相果てんと、
〽追ひ來る討手を吉野にて、賜る源家の名刀にて、切つて廻れば電光の、光りに血汐の雨降りて寄附く者もあらざれば、

心靜に堀川へ至りて一息吐いたる所へ、江間の小四郎入り來り、
〽斯く敵となり味方となるも、主命なれば是非もなし、
多くの人命斷たんより、切腹あれとの一言に、實に尤もと忠信殿、
〽腹十文字に掻き切つて、雄々しき最期を遂げしゆゑ、
敵も忠義を感ぜしとぞ。
〽替る〲の物語に、敎信信夫は打ち悦び、

ト此內海尊、經淸、重淸物語りのこなしよろしく、敎信尼思入あつて、

敎信　さては忠信も吉野山にて、君の御名を我が身に名乘り、寄せ來る大衆を討ちし上、お跡を慕ひ都にて切腹せしとは天晴なりしぞ。

信夫　道隔たりし事ゆゑに、委しき事が知れざれば、心にかゝるは兄上が、屋島の浦にて我が君の、御身代りに立ちし大功、それに引替へ忠信殿が、卑怯な働きなされしかと、明暮案じ居りましたが、お物語りを承はり、まことに安心いたしました。

靏若　父上樣が伯父樣に、負けぬ手柄をなされしとは、嬉しい事でござりまする。

敎信　おゝ嬉しからう〲、淺香信夫兩人とも、優り劣らぬ孝心ゆゑ、二人が夫の其中に、何れ劣りが

あつたらば、斯うして一つに居る事なれば、心苦しき事ならんと、母も案じ居つたるが、二人が二人君に替り、臣下の忠義を盡せしは、天晴庄司が忰には、

〽生れ勝つた手柄者、斯ういふ忰を二人まで、持ちしは親の果報なり。

左はさりながら庄司殿、此世を去りて其後は、老の杖とも思うたる二人の忰に別れしは、

〽双の腕を一時に、捥がれし程の悲しみなれど、

人は一代名は末代、佐藤の家の譽れゆゑ、此上もない悦びぞよ。

〽愁ひを隠し悦ぶは、流石勇士を子に持ちし、佐藤庄司が妻なりし。（ト教信尼よろしく思入）

淺香　忠信殿の最期の樣子、委しい事が知れざるゆゑ、お案じ申して居りましたが、夫と同じお手柄にてお嬉しう存じまする。

信夫　最前お前のいふ通り、此世にあつての手柄なら、嘸や嬉しうござりませうに、今は世になき二人の夫

淺香　これにおいでの皆樣を、見るに附けても思ひ出され、

信夫　心の迷ひか此中に、居られますかと思はれます。

〽二人の母が歎くをば子は賢しくも勵まして、

鶴若　二人の母さま、お案じなされまするな、亡き父上の替りには、是れより二人が我が君樣へ、
龜若　お仕へ申して忠義を勵み、二代の家來といはるゝやう、御奉公を、
兩人　いたしまする。
敎信　おゝ、よう言うたく、それでこそ佐藤の嫡子、此の敎信が孫なるぞ。
〽孫は子よりも愛情の、深きものとて打悅べば、
義盛　蛇は寸にして其兆しありと、流石は勇士の胤ほどあつて、末賴もしき二人の少年、我が君お褒め下さりませ。
義經　こりや兩人共、是れへ來よ。
鶴若　はツ、
敎信　それ、我が君のお召しゆゑ、
淺香　粗相なきやう、
信夫　お側へ出よ。
龜若　はあゝ。
〽育ち正しくしとやかに、御前間近く控ふれば、義經二人の顏打ながめ、

ト鶴若龜若義經の前へ出る、義經兩人の顏を見て、

義經　はて親子とて兩人が、世に亡き繼信忠信に、斯くまでよくも似るものかなァ（ト誂への合方になり）未だ幼年の身を以て、親に劣らず忠義を勵み、仕へんといふ志し、我に於ても嬉しきゆゑ、そち達二人へ與ふる物あり、それなる鎧と太刀を是れへ。

兼房　はッ、畏つてござります。

ヘ傍の笈より取出す鎧、布に包みし太刀を添へ、君の御前へ差出せば、

ト兼房笈より二幕目の忠信の鎧と、布包みより太刀を出し、義經の前へ出す。

義經　今主從となる其記念に、此義經が義といふ一字を二人の者へ與へ、兄は佐藤三郎義信、弟は佐藤四郎義忠と名乘るべし。

敎信　はゝ、思ひ設けぬ二人の孫へ、御名を下したまはるとは、冥加に餘る身の仕合せ、有難う存じ、

五人　奉りまする。（ト五人辭儀をする。）

義經　又此の鎧此の太刀は、吉野山にて忠信へ、我が甲冑を與へし折、取替へたりし二品なるが、鎧は屋島で討死せし兄繼信が着せしよし、太刀は忠信が所持なれば、鎧は兄義信、太刀は弟義忠へ、今改めて與ふるぞ。

教信　はツ、お名を下し賜るのみか、親の形見の遺物まで、お讓り下さる御惠み、御禮は詞に、

五人　盡されませぬ。

〽仁愛厚き義經が、惠みを拜し人々が、有難涙に暮れにける。

ト教信尼をはじめ、皆々よろしく辭儀をなし、思入あつて、

淺香　幼年なれども我が君の、御名を賜はる上からは、

信夫　今日よりして二人とも、源家二代の御家來なるぞ。

鶴若　はゝ、有難き御賜物、今より我は三郎義信、

龜若　又私は四郎義忠、

教信　此の御恩をば忘れずに、君の仰せを肺腑に銘じ、若君樣の御代までも、忠義を勵みて後代の、青史に其身の美名を止めよ、萬一卑怯の振舞せば、父に劣りし臆病者よと、二人が竹馬の友どちに後指さゝれなば、佐藤の家の瑕瑾なるぞ。

鶴若　其祖母さまのお詞を。

〽肝に彫り附け成人なし、戰があらば御馬前にて、命限りに戰ひなし。

龜若　若しも大事と見るならば、

鶴若　〽向ふ敵をば引受けて、御身替りに討死なし、父に劣らぬ忠臣と、末世に譽れを、

兩人　殘しまする。（ト兩人よろしく振りあつて、）

辨慶　ほゝ、勇ましゝ〳〵、其身の器量は詞に顯れ、末々天晴勇士となり、君へ忠勤勵むは必定。

海尊　よき御家來が二人出來、君にも嘸かし、

皆々　御悅び。

義經　〽祝す詞に義經は、過ぎ越し方を思ひ出で、（ト義經思入あつて、）幼き者が行末を、賴む甲斐なき此義經、父の仇をば報ぜんと、鞍馬山を出でしより、〽或ひは野に伏し山に伏し、危き風波の難を凌ぎ、是れまで數度の合戰に、身命を抛つて、平家の大軍討滅せし其大功も水となり、讒者の爲に隔てられ、遂に浮沈の身となりて、多年粉骨碎身せし、臣下の者へ尺寸の采地を與へず諸共に、汚名を取らせし口惜しさ、恥辱を忍び惜しからぬ身を今日までも庇ひしは、一度讒者の言を正し、臣下の者へ聊かの賞祿を與へん爲、斯くは思へどそれさへも、達する時節の計られず。〽歎息あれば人々も、共に無念の色見えて、

辨慶　我々共もと〳〵に、艱難なして御供なすも、當時天下に頼むべき仁者は奥の秀衡殿、是れへ便りて身を落着け、鎌倉殿の御怒りを、申し宥めて貰はんと、遙々下る奥州路。
海尊　これ皆逆櫓の論よりして遺恨を含みし梶原景時、心ねぢけし、しれ者ゆゑ、君に阿り諂ひて、御謀叛ありと讒言せしゆゑ、
重清　御連枝なれども御腹が違へば、左ある事もあらんかと、頼朝公の御疑念深く。
經清　彼等親子が佞辯に、惑はせられて追討の嚴命出て人數を引き、
義盛　北條時政、江間義時都へ登り來りしゆゑ、まだ如月の餘寒を忍び、
經久　山伏姿に出立ちて、大津次郎が情により、矢走の岸より船に乘り、
忠基　追風は天の助けぞと、帆を十分に卷揚げて、琵琶湖を難なく打渡り、
經俊　海津の浦より陸路をば、來る道々に新關ありて、支へ留めしも言ひ拔けしが、
清悦　安宅の關にて富樫の左衛門、判官殿よと見咎めしも、辨慶殿の計ひにて、
行信　危き毒蛇の口を脱れ、出羽の國まで落延びる道は嶮岨の山路に、
卿君　履きも習はぬ草鞋に、わらはが難儀は如何ばかり、
兼房　間道ゆゑに旅店もなく、谷の清水にのんどを潤し、やうやくにして疲れを凌げり。

義經　そも〳〵都を落ちしより、枕を高く寢ねし事なく、
辨慶　我が君初め北の方、臣下の者が斯くまでに、
海尊　旅路に艱難辛苦なすも、是れ皆侫人梶原ゆゑ、
義盛　秀衡殿の扱ひにて、和睦にならぬ其時は、
重清　必定梶原親子の內、討手に來るに疑ひなし、
經清　望む所の敵なれば、彼れを討取り梟首に掛け、
兼房　日頃の恨みを、
皆々　晴らしくれん。

〽各々一騎當千に、勇み進みし有様は、鬼神も恐るゝ如くなり、老母はほく〳〵領きて、

ト皆々きつと思入、敎信尼思入あつて、

手信　左ある事もあらんかと、兼々君のお味方を語ひ置きし心盡し、出羽十二郡の佐藤の一類、これに奥州五十四郡の名ある者と心を合せ、御加勢なさん其爲に、あれなる奥の一間の內へ飾り立てたる旗印、淺香信夫は奥の間の、襖を開いて御覽に入れよ。
淺香
信夫　畏りました。

〽指圖にはツと兩人が、奥の襖を押開けば、飾り立てたる家々の、旗の印紋盡し、

ト小鼓のあしらひにて、淺香信夫正面の襖を左右へ明ける、正面の長押へ誂への旗幾筋となく掛けある、皆々是れを見て、

義經　ほゝお、見渡す向うに掛けたるは、味方と頼む人々の、其の家々の旗印。

辨慶　思ひ／＼の染色に、

海尊　何れも違ふ紋盡し、

經清　これこそ奥羽兩國に、

重清　名を知られたる勇者ならん、

義盛　其人々は誰なるか、

兼房　とてものことに姓名を、

經久　これにて語り、

皆々　聞かされよ。

教信　御披露の爲あらましを、こりや常々祖母が教へし通り、此處で合點か。（ト鶴若、龜若領く教信尼思入あつて。）語り申さん、聞きたまへ。

〽いざ語らんと座に直り、
あれ御覽ぜよ何れも方、あの中央に飾りたる、一際目立つ白旗は、信濃源氏の末葉たる、河邊氏部國時が、齡八十路の白髪に、
〽雪を戴くむら雀、竹に羽を伸す定紋は、申さずとても兄弟が、家の印と御覽ぜよ。
次に掛けたる四ツ目の紋は、最上山形平賀の七郎、

龜若　三ツ菱四ツ菱五本骨、
〽御運も開く扇の紋は、

鶴若　佐竹田川の一流にて、

教信　源氏車の紋所は、伯父の小太郎季平が、
〽家の印に候なり。
扨て其次に幾流れ、大旗小旗華かに、掛け並べたる人々は、

龜若　出羽奥州に名を得たる、

鶴若　宮城堀川安達の面々。

教信　南部內藤小泉三郎、宮津船岡柴田の五郎、

〽津輕會津外が濱、長田長岡鳥の海、信夫が兄弟松前四郎。

何れも一騎當千ゆゑ、此者どもが一手になり、

〽鎌倉殿の嚴命にて、東國勢が寄せ來らば、名も高館の本城を御座所となして秀衡殿へ、守護を頼みて軍勢は。

伊達の大木戸差し固め、

〽先陣後陣の其場の掛引、奥州黑の若駒にひらりと飛び乘り鞭打つて、龜割坂へ驅上り、遠く逃ぐるを遠矢にかけ、

〽向うて來らば一騎の勝負、爰を先途と戰はゞ、陸奥武士は手に合はず、引けや〳〵と鎌倉勢、秋の木の葉の散る如く、むら〳〵ぱつと、逃ぐるは必定、君御勝利に疑ひなし。

〽幸先き祝ふ物語り、實に賴もしき老女なり。

ト此内敎信尼物語の振りよろしくあつて納る。

義經　ほゝお、忝けなき老尼が忠節、我に於ても滿足なるぞ。

敎信　はツ。（ト辭儀をする。）

辨慶　忠臣繼信忠信の、二人の母とて感心いたす。
海尊　奥州下向の我が君を。
重清　御待受けに一類の、
經清　諸士を語らひおきたるは、
義盛　男子も及ばぬ大器量、
經久　かゝるお味方ある上は、
忠基　是れより先は奥州路、
經俊　秀衡殿の領地ゆゑ、
清悦　旅中に心置くに及ばず、
行信　高館城へ御入りも、
兼房　最早僅か一兩日、
鶴若　お心置きなく御ゆるりと、
龜若　御逗留を遊ばしませ。
教信　申し附けし品これへ。

淺香
信夫　はあゝ。

ト竹笛入りの合方になり、奥より以前の淺香、信夫土器を載せし三方、瓶子、干肴を持ち出來り、義經の前へ出す。

いざ、お取り上げ遊ばしませ。

義經　老尼が持成し、忝けなし。

ト義經土器を取上げる、淺香酌をする、義經思入あつて、

そも堀川を立ちてより、落人の身に日夜とも、物憂き旅中の艱難に安き心のあらざれば、遂に是れまで土器を取上げし事なかりしが、

辨慶　今日老尼の持成しに、

海尊　久方振りの此酒宴、

經清　千代も替らぬ土器に、

重清　萬代祝ふよろ昆布、

義盛　敵に勝栗卷鯣、

艸君　まことに目出度いことにこそ。

兼房　一同恐悅、

皆々　申し上げまする。（ト義經呑み干し、）

義經　此土器は二代の家臣へ。（ト土器を三方に載せ、）

教信　幾久しう頂戴いたしまする。（ト教信三方を戴く。）

〽黄金花咲く陸奥に、〽今に其名ぞ殘りける。

ト皆々引ばりよろしく、段切にて、

幕

千歳曾我源氏礎（終り）

元禄日記を抜萃なし討入る宵の
雪景色庭の清水も張り詰めし
氷の刃氷柱の槍先突出す鐘の
眞夜中に山鹿流の陣太鼓
さえる音色に内外の動搖敵も
味方も一時に手練を磨く大和魂

忠臣いろは実記

「清水一角」は明治六年十一月村山座に稿下された。作者五十八歳のことである。「忠臣いろは實記」といふ名題の下に、大石の山科閑居等と共に忠臣藏の銘々傳を脚色上場した中の、一部分であるが、清水一學（一角）の件のみが、特に好評を博し、五世菊五郎の當り役となつて以來、當代の市村羽左衞門、尾上菊五郎等の諸優によつて、繰返し上演されつゝあるもの。

稿下當時の役割は五世尾上菊五郎（清水一角）、關三十郎（牧山丈左衞門）、中村重藏（清水與一郎）、市川門之助　一角姉おまき）等であつた。扉に掲げた「語り」は、明治二十四年十二月新富座（當時深野座と稱した）に於て復演された時のもので、亞鉛版にした挿繪も、同じくその時の繪草紙から採つたものである。

大正十四年十二月

校　訂　者


吉良邸牧山宅の場
同藩一覚宅の場

忠臣いろは實記（清水一角＝一幕）

吉良家牧山宅の場
同家中清水宅の場

〔役名＝清水一角、牧山丈左衞門、一角弟與一郎、諸士四人、中間。一角姉お卷、牧山下女二人、毛坊主珍賀等。〕

〔牧山住居の場〕＝本舞臺三間の間常足の二重、上手一間の障子屋體、いつもの所雪の積りし屋根附の門口、此外一面雪の積りし黑塀、門の柱に牧山宅と記したる表札を掛け、二重正面襖の出はひり、上の方一間の床の間、舞臺花道とも一面に雪布を敷詰め總て吉良家の宅內牧山住居の體。よき所に燭臺を照し、爰に諸士四人着流し袴大小にて住ひ、前に酒肴を取散し、銘々吸物を控へ、是れを○△の下女二人酌をして居る、此模樣雪おろし、越後獅子の唄にて幕明く。

○お呼び立て申しまして、何も召上るものもござりませぬが、

△何れも樣にも今晩は、御ゆるりと召上るやうにと、

○主人の申し附けで、

兩人　ござりまする。

侍一　御配慮の段忝うござると、牧山氏へお傳へ下され。さて各々、今朝よりの大雪にて、別段寒氣が身にこたへ、一盞用ゐようと存じた所。

侍二　手前も左樣存じた所へ、當家よりのお使ひにて、年忘れのお催しとは、我々どもの胸中を、お見拔きあつたか、今宵の御趣向。

侍三　それゆゑ手前も先刻より、數獻の杯を傾けましたれば、寒さもとんと忘れてござる。

侍四　またお上には今晩は、寒梅のお茶の湯のお催しにて、宵の程より宗扁先生が詰掛けて居るとやら

此寒いのに寒梅とは、かんばいむごい胴慾なお催しではござらぬか。

侍一　新見氏の言はるゝ如く、此寒氣に冒されましては、下戸なものはいざ知らず、上戸は呑まずに居られませぬ。

侍二　このまた寒氣の烈しきに、お茶をお好み遊ばすとは、風雅な道とは申しながら、お上もお茶人過ぎまする。

侍三　いや、そりや我が君のお催しで、召上るのではござるまい、大方老女の由留見どのが、みんな呑むのでござらうわえ。

三人　そりや又なぜでござる。

侍三　はて、とぼけた婆さん高家（小桶）で茶を呑むと申せば。

三人　何を言はれる。

○　其お口合の輕いところで、

△　お一つお上りなされませ。

侍四　いや又、當家のお召使ひは、兩人ともに美しく、一家中での評判者ゆゑ、かやうにお酌をいたして貰ふが、何よりの馳走でござる。

○　また御樣子のよいことばかり、藝者と違うて私どもは、野暮な産れでござりますゆゑ、

△　お持成をいたしますにも、何うしてよいやら勝手が知れず、嘸御迷惑でござりませう。

侍一　いや〳〵假令野暮にもいたせ、酌を取るには婦女子に限るて。

侍四　何は格別、御主人は先刻よりお見えなされませぬが、何をなされてござるやら。

侍三　大方奧へござつて御新造と、お差向ひでお話しではござらぬか。

○　御新造さまには今朝ほどから、雪の寒さで御持病の、お血の道氣と見えまして、

△　奧のお居間でお炬燵へ、お臥つてお出でなされますゆゑ、此お席へもお出でなされず、

○　失禮御免、

兩人　下さりませ。

侍一　なに、御新造はお血の道氣とな、それは御心配なことでござる。

侍二　何にいたせ、御主人が是れへお出でなされいでは、座が締らぬと申すもの。

侍三　こりや／＼女中衆、大儀ながら御主人をお呼び申してはくれまいか。

△○　畏りましてござりまする。（ト立掛る、此時奧にて、）

丈左　いや、來るには及ばぬ、只今それへ參るであらう。

　ト合方になり、奧より牧山丈左衞門着流し袴にて出る、皆々丈左衞門を見て、

侍一　是れは先生。

四人　さゝ、こちらへ／＼。（ト丈左衞門よろしく住ひ、）

丈左　主用繁多に中座いたし、失禮の段御容赦下されえ。

侍一　其御挨拶では痛み入りまする、承はれば御家内さまお血の道氣と申す事、御容體は如何でござる。

丈左　さしてもない儀でござるが、御存じの病身者ゆゑ、兎角冷えますると、持病が起ると見えまする。

侍二　今日は別段に寒氣が強うござるゆゑ、お大事にいたされたがようござる。

丈左　御配慮の段忝けなう存じまする。

侍三　早速ながら持合せますれば、先生へ獻じまする。（ト杯洗にてすまし、杯を差す。）

丈左　頂戴のいたすでござらう。（ト〇の下女酌をして丈左衛門よろしく酒を呑みながら、）さて各々にも知らるゝ如く、去年三月殿中にて刃傷の事件より、相手は名におふ赤穂の城主五萬三千石の主人と申し、後立には本家たる藝州侯が控へ居れば、當家と違ひ家來も多く、定めて復讐の企てなさんと、御縁家たる上杉侯にも殊の外なる御心痛にて、萬一左樣な企てあらば、防ぎの者もなければならずと、御家老千坂兵部殿のお指圖に依つて我々ども、俄に當家へお抱へと相成り、何れ夜分の討入りならんと、碌々枕につかざりしが、今朝よりの大雪と申し、いよ〳〵明後十六日には、上杉侯のお下邸へお引移りと治定いたせば、最早安堵と申すもの、それゆゑ手前も今日は、年忘れの催しいたし、何れも方を招待なし、是れまで數日の心勞も一時に晴らす今宵の酒宴、召上ゑものはござらねども、何卒お過し下されえ。

侍一　有難き其仰せ、殊更先頃其許は京地へ登り內藏之助が、所業を篤と見極められ、御歸國ありしそれゆゑに、先は安堵と存ぜし所、

侍二　當今街巷の風說にては、赤穂の浪士が當地へ下り、最寄〳〵へ會合なし、竊に企ていたすなど、

承はつて疑惑を生じ、

侍三　若しや彼等が謀計にて、敵へ油斷をいたさす爲、あらぬ所業をいたせしかと、實は心痛いたしてござるが、

侍四　今日に至るまで手出しをいたさず、おめ〳〵と指を銜へて居るからは、全く左樣な風評も街巷の虛說と覺えたり。(ト此内皆々杯の遣り取りよろしくあつて)

丈左　いや手前も名に負ふ智者と呼ばれし、內藏之助の儀でござるゆゑ、遊里へ通ふも計略なるかと、始めの程は存ぜしが、段々彼れと入魂を結び篤と樣子を窺ひしに、赤穗開城の其砌りは、籠城の難を遁るゝ爲、復讐の儀を企つなどゝ同士の者も打語らひ、血判なども致せしさうなが、民家へ落入り下賤どもと交りをいたしては、魂までが腐ると相見え、遊里の酒に性根を失ひ、母女房を離別なし、遊女を身請けいたせし事まで、篤と見屆け參つてござれば、假令市中で如何やうなる風說をいたさうとも、お案じなさるゝことはござらぬ。

侍一　其お詞を承はり我々どもゝ一安堵、上杉侯より武藝者を多く選んで御當家へ、お附人には相成いますれど、

侍二　北條流の軍學は、申すに及ばず何一つ、武藝の道に暗からぬ先生のお腕前、

侍三 假令當家が白銀へ御移轉に相成りましても、長く御仕官下されて、

侍四 我々共へ軍學の、御指南なされて下さるやう、

侍一 偏に願ひ、

四人 上げまする。

丈左 拙き業にはござれども、及ばずながら各々へ、追々御指南いたすでござらう。

ト此内〇の下女德利を持ち見て、

〇 冷えますゆゑか今の間に、お燗が大分冷めましたれば、お熱くいたして參りませう。

丈左 何さま、冷めては相成らぬ、熱いのを持つて來やれ。

〇 畏りましてござりまする。(ト〇の下女奥へはひる。)

侍一 いや、先生などはお腕前が勝れてお出でなされても、御自慢氣などは少しもないが、同じ家中の清水一角、いさゝか嗜む劍道を、鼻に掛けたる彼が振舞、好かぬ奴ではござらぬか。

侍二 左樣々々、第一彼れは片意地者にて、酒興の上では人に逆ひ、年中酒に性根をも失ふ程に吞んで居るが、あれでは必ずまさかの時の、お役には相立ちますまい。

侍三 我々共も過す口ゆゑ、隨分酒は好みますが、一角程の醉漢は、一家中にござるまいて。

侍四　世俗にいへるぐづとやらにて、酒さへ見ると腰を抜かし、夜の明けるのを存ぜぬとは、癖の悪い酒でござる。
丈左　それゆゑ今宵の催しにも、彼ればかりには沙汰なしにて、年忘れをいたしてござる。
侍一　いや〳〵沙汰をなされえでも、悪くいたすと嗅ぎつけて、參らうも知れませぬ。
侍二　家では姉がやかましく、思ふやうには呑ませぬゆゑ、兎角家中を捜しあるき、附込みたがる様子と申し。
侍三　今朝よりの大雪では、定めて彼れも堪りかね、居酒屋へ這入りこみ、片足あげて居るでござらう。
侍四　左樣な奴が舞ひ込んで參らぬうちに今一獻、お熱い所を頂戴いたし、それにてお暇仕る。

ト爰へ奥より〇の下女徳利を持ち出來り、

〇　さあ、お熱いのが參りました。
丈左　何れもお過し下されえ。
四人　頂戴いたすでござりませう。（ト是れにて皆々酒盛よろしく、床の淨瑠璃になる。）

〽汲み交す酒は數獻につもらねど、外には積る雪の中、道踏分けて足許もしどろもどろにやう〳〵と步行を淸水一角が、くの字に步くかぎの手の、長屋續きに彳みて、

ト此内雪おろしを冠せ、花道より清水一角、好みの疊着流し袴大小下駄がけにて、白張の傘をさし、生酔のこなしにて出來り、花道にて、

一角　四五日あとから催して居つたが、降り出すとなると遠慮なしに、思ひ切つて降り居るわえ。いや催すといへば牧山の宅で、年忘れの催しをいたすと、朋友どもへ廻狀を廻し、大分馳走があるさうだが、身共ばかりへ沙汰をいたさず、省き者にいたしたは、日頃仲が悪いゆゑ、それで一人身共を嫌ひ、省き者にいたし居つたか。いや忌々しい小量な奴だ、ハックショ。（ト嚏をして）えゝ、誰か噂をすると見える。どれ、これから押掛けて參つて、暴れ呑みに呑んでやらう。

〽上戸の癖か白張の、傘にさせどもさし合の、席を構はぬ門口に、暫し樣子を窺ひ居る。

ト此内やはり雪おろしにて日覆より雪大分降る。一角舞臺へ來り、門口に窺ひ居る、此内皆々酒盛よろしくあつて、

侍一　先刻より數獻頂戴いたし、殊の外酩酊いたしました。

侍二　お家内さまも御病氣といひ、餘り夜も更けますれば、

侍三　何卒是れにて牧山氏、御納杯の儀をお願ひ申しまする。

丈左　いや／＼只今入江町の五つを打つたばかりでござれば、四つまではお附合ひ下されい。

○ 御新造さまには御病氣にて旦那さまには只お一人、
△ お相手いたす者もなく、お困りでござりますれば、
○ 御迷惑でござりませずば、
△ おいでなされて、
兩人 下さりませ。
侍一 然らば仰せに任せまして、今一盞頂戴いたさう。
△ お酌をいたしませう。
侍一 お市どのゝお酌では、こりや是非ともに、呑まずばなりますまい。
侍二 何にいたせ内藏之助めが、誠本心放埓と極り、我々共も一安堵。
侍三 かやうに御酒を過さうとも、心に掛る雲もなく、
侍四 心落着くこの大雪、今宵ばかりは樂々と、
侍一 枕を高く、
四人 寐られますわえ。
一角 いや、枕を高くは寐られますまい。

〽思ひがけなく門口より、入來る一角見てびつくり、

ト此内清水一角傘をつぼめ内へはひる、皆々一角を見て、

△○　や、あなたは清水一角さま。

四人　はて惡いところへ。（ト言ひかけるを丈左衞門目配せして、）

丈左　よくぞ御入來下された。

〽折惡るけれど丈左衞門、挨拶なせばどつかと坐し、（ト此内一角眞中へ住ひ、）

一角　これは何れも御免下され。いやなに丈左衞門殿、今日は御尊宅にてお年忘れのお催しとやら承はつて祝着に存ずる、お目出度い儀でござるな。

丈左　いや催しと申すほどでもござらぬが、各々方のお出でを幸ひ、只今一獻始めてござる。

一角　それはよい思召しだ、手前も此大雪ゆゑ、呑まずんばあるべからずと、前町の煮賣屋へ參り、今朝より呑み續けに呑みましたが、雪風が吹きこみましては、呑んだ酒もそばから醒め、又一銚子々々でたうとう囊中濁水いたして、餘儀なく酒屋は立出でましたが、宅へ歸れば堅藏の姉が小言を申しまして思ふ程には呑ませぬゆゑ、どこぞで酒でも始まつて居つたら、附込まうと存じた所、漸く匂ひを嗅ぎ當てましたが、流石は牧山丈左衞門、この雪中にお年忘れの御酒宴とは頼もしい、早

速ながら頂戴いたさう、どゞ、杯は何れにござるな。

〽さゝぬうちから杯の、催促罪はなかりける。（ト是れにて丈左衞門有合ふ杯を取上げ、）

丈左　然らば手前持合せたれば、一角殿へさし申さう。（ト丈左衞門杯を出す。）

一角　いや、是れは早速忝ない。さゝ、なみ〳〵とついでくりやれ。（ト此内一角杯を出す、下女○酌をするよろしく呑んで、）いや煮賣屋の酒と事替り、廻狀廻されたお催しにある御酒の味は、また格別な儀でござる。どゞ今一獻重ねませう、甘露々々、只今身共が通り合せ此處に參らずば、斯樣な御酒を呑みはぐれる所、隱し事は出來ぬもので、省きものにいたしたり、偸み喰ひを仕つたりすると、運の盡きと見附けられ、しくじる事はまゝある習ひ、また人間と申すものは、えて料簡がいいこぢなもので、惜しむものなら猶呑みたい、驅附け三杯と極つて居れば、今一獻頂戴いたさう。

〽いやみたら〳〵呑む酒も、小癪に障る續け呑み、

ト此内一角よろしく酒を呑む、皆々むつとせし思入にて、

侍一　いやなに一角殿、只今何か我々が、安堵の思ひで今晩は、枕を高く寐られると、悅び居つたる其ところへ。

侍二　存じがけなく門口より、詞の端を咎むるのみか、

侍二　枕を高く寐られぬと、話半の腰を折り、
侍四　推參召された其許の、御胸中のほど心得ず、
侍一　如何なる仔細か、
四人　承はりたい。

ト詰りかゝればにつこと笑み、

一角　これは／＼各々方、何事かと存ずれば、事々しき其お尋ね、如何にも只今門口より、枕を高く寐られぬと某が申したは、迂濶に寐られぬ世の中ゆゑ、御油斷なきやう申してござるが、何を目當に各々方は、枕を高く寐られまするな。
丈左　其儀は先頃千坂氏の、内意を受けて京地へ登り、内藏之助の底意を見拔き參りしゆゑ。
一角　して内藏之助の心中が、貴殿のお目に見えましたかな。
丈左　何と。
一角　いや／＼、なか／＼以て思慮深き内藏之助の胸中が貴殿のお目に見えませうぞ、誠と見せしは流石の大石、それでなくては淺野家で城代家老は勤まるまい、其反間の計略を誠と思ふ貴殿には、必ずお腹は立てられなだが、雲泥萬里の相違でござる。いや、こりや失敬でござつた、御免下さ

れ、むゝはゝゝゝゝ。

〽嘲り笑ふ一角が、酒興のくだも牧山が、耳にこらへずぐつと詰掛け、

ト是れにて丈左衛門むつとせし思入あつて、

丈左　默れ一角、身不肖ながら某も、千坂氏より見出しに預り、京地へ登り內藏之助が、誠本心放埒なら、お手前何とおしやるな。

一角　さればでござる、面白い、誠大石內藏之助が放埒者でござつたら、北條流の軍學者、貴殿へ粗言を申した言譯、此一角が二つとなき首を進上いたすでござらう。

侍一　これさ〳〵一角殿、いかに酒興の上だと申して、餘りと申さば過言でござる。

侍二　只今左樣言はれても、明日になつて醉もさめ、覺えがないと言はれるだらうが、

侍三　我々共も同席なし、承はつて居るからは、こりや知らぬとは言はせ申さぬ。

侍四　外の品とは事替り、首がなければ命があるまい、餘りずか〳〵大言を、

侍一　吐かれぬ方が、

四人　無事でござる。

一角　いらぬ心配無用に召され、此一角が心眼にて、篤より見拔いてあるからは、打ちし大地は外るゝ

とも、見抜きし眼に外れはござらぬ。

丈左　然らば萬一大石の放埒惰弱が僞りなら、手前の首も進上いたす。また年内の其内に、何事もなき其時は、貴殿の首級は申し受けるぞ。

一角　其念には及ばぬこと、然し手前の首級より、丈左衛門殿を始めとして、各々方の其首級が、やがてころりと落ちやうも。

皆々　や。

一角　迂濶に油斷は相成らぬ。

侍一　こりや面白い其首賭け、祇園町にて遊女を請出し、母や女房を追ひ拂ひ、

侍二　一家親類所業を見限り、音信不通となりし上、

侍三　同士の者へも血判を、一々切り抜き戻せし大石、

侍四　假令大事を企つとも、隨身いたす者もなく、敵の討てやう筈はなし、

侍一　それゆゑ本心放埒と、見極めたるが、

四人　誤りか。

一角　それを誠と思ふゆゑ、議論に及ぶ手前が金言、失禮ながら各々は目があつても節穴同然、耳はあ

つても木茸同然、柊なれば年越に用ゆることもござらうが、扨々不用な耳でござる。

ト詰める詞も底深き、器を取つて一德利、呑んで掛りし大言に、丈左衛門くわつと急き上げ、

ト此内一角有合ふ杯洗を打ちあけ、德利の酒を手酌にてついで呑むことよろしく、丈左衛門きつとなつて、

丈左　やあ酒興の上と勘辨なせば、よい事にして附上り、重ね〴〵の其雜言、今一言申して見よ、朋友たりとも手は見せぬぞ。

一角　お手前身共を切る氣でござるか、そりや御短慮だ、お待ちなされえ。(ト杯洗を持ち、こなしあつて、)時にお女中、もう一杯ついで下せえ。

○　はあゝ、はい。(ト顫へてゐるゆゑ、)

一角　えゝ、何をおど〳〵して居るのだ、つげと言ふに。(ト大きくいふ。)

○　はあゝ、はい——。(ト顫へながら○酌をする、一角ぐつと呑んで舌打ちなし頭を叩き、)

一角　大きなもので此やうに、ぐつと一杯引掛けた所は、何うもいへぬ心持ぢや。さて丈左衛門殿、只今何とか仰せられたかな。

丈左　むゝ。(ト意氣込むゆゑ、一角こなしあつて、)

一角 左様々々手は見せぬと言はしつたが、左様な愚な御料簡では、人の心は知れまいく。

丈左 やあ、言はれな雑言、最う此上は。(ト立ち掛るを見て、)

一角 さゝゝゝ、それがお手前愚でござる、なぜと仰せられえ、お手前始め斯くいふ身共も、赤穂浪士を防ぎの為、君の禄を頂戴なし仕官の身ではござらぬか、それに何ぞや今お手前が、某へ切つてお掛りなされたら、此方とても見ては居られぬ、是非合せてお相手いたせば、何其許の一人位熟酔なしても清水一角、切り伏せるは何でもござらぬ。さある時には是れに居合す、胡麻摺武士の各々もよもや見ては居られまい、助太刀すれば此處で、何人命を損じるか其程は計られぬ、そりや今日まで御扶持を貰ひ、まさかの時の御用に立つべき、命を僅かな私事で捨てるは愚ではござらぬか。

丈左 やあ。

一角 其たはけたる御所存では、大石などの本心が、何で貴殿に分りませうぞ、左様な野暮を仰せられず、お下にござつて今一盞、お過しなさるがようござらう。身共もこれにて頂戴いたさう。

ト有合ふ徳利を取つて、丼に酒をつぐ。

丈左 やあ、招きもせぬに推参なし、酒宴の妨げなすのみか、返すぐも憎き雑言、何れも彼れめを引

立て召され。
四人　心得ました。（ト諸士四人立上り、側へ行き）
侍一　一角、
四人　お立ちやれ。
〽双方寄つて引立つれば。（ト是れより四人の諸士一角を引立てに掛るゆゑ）
一角　こりや各々には何とさつしやる。
侍一　牧山氏のお宅へ參り、
侍二　お年忘れの妨げなし、
侍三　無禮を働く一角殿、
侍四　酒興の上ゆゑ命は助ける、
侍一　疾く〳〵爰を、
四人　お立ちなされえ。
一角　はて、さう荒々しく言はずと、異見をいたした禮だと思つて、最う二三杯お呑ませなされえ。
侍一　いや、呑ますことは、

四人　相成りませぬ。

一角　呑ますことがならぬと言へば、身共が手酌で呑んで見せるわ。

侍一　やあ、無法な振舞。

四人　いで、我々が。

〽手取り足取り四人して、組附く所をずでんどう。

ト此内四人一角に組附く、一角是れを雙方へ見事に投げ、生醉ひのこなしにてひよろ〳〵として、

一角　えゝい――

ト嚔をする、是れより下座の目出度々々の唄になり、此れへ桀はきの音を冠せ、一角四人を相手に、生醉ひにて手の利きたる立廻りよろしく、有合ふ皿小鉢を遣ひ、四人の諸士可笑味よろしくあつて手に餘る思入、丈左衞門見兼ねて、

丈左　もうこの上は。（ト刀の柄へ手を掛けるを、一角生醉ひのこなしにてきつと留めて、）

一角　またそんな短氣をさつしやるか、お主の爲を思ふなら、兎角命を大事にさつしやれ。

丈左　小癪なことを。

〽留めるを拂ひ抜きかくる、主人に縋る腰元が、足手まとひに牧山も、暫し躊躇ふその暇に、

四人は事を鎭めんと、淸水を外へ突き出し、中を立切る門口は扱ひとこそ見えにけれ。と此内左衞門拔き掛けるを下女二人縋つて留める、此内諸士四人は一角を無理やりに門口へ突出し、戸を立て切り、掛金を掛け、こちらへ來り、捨ぜりふにて丈左衞門を宥める、これにて丈左衞門下に居る。

一角　こりや、胡麻擂ども、よく身共をば突き出したな。主人の爲を思はずば、何汝等の五人や六人ぶつぱらすは造作もないが、命を取るは愚の至りと、勘辨いたせばよいかと思つて、よく身共をば、（トひよろ〳〵としてどうとなり、）投げたのではない、一人で轉んだのだ。こりや命を助けて遣る替り最う二三杯呑ませて貰はう。（ト門口を明けようとして明かぬゆゑ、）これ、爰を明けろ、え丶、明けぬと爰をぶち破るぞ。

〽一人呟く折柄に、兄の行方を爰かしこ尋ねて丁度與一郎、來か丶る門口それと見て。

ト此内下手より、一角の弟與一郎大小下駄がけにて出來り、一角を見て、

與一　そこにござるは、兄上ではござらぬか。

一角　何だ、兄上だと。（ト與一郎を見て、）そちは弟、何しに參つた。（ト與一郎一角の樣子を見て、）

與一　え丶又あなた、醉はつしやりましたな。

一角　何で身共が醉ふものか、是れから爰をぶち破つて、それから少々醉ふ積りだ。

與一　又そのやうな亂暴をおつしやるが、どこもかしこも雪まぶれ、小林氏のお目に掛らば、お身の上にも拘りませう、さあ御一緒にお出でなされえ。

一角　いや〳〵爰をぶち破つて、もう二三杯呑まぬうちは、腹の蟲が得心せぬ。

與一　また左樣な事をおつしやるか、まあ御一緒にござれといふに。

〽常に馴れたる生醉の、兄が介抱弟が、身に引かけて雪の道、伴ひ連れて、

ト此内與一郎一角の體の雪を拂ひ、手を取つて肩に引掛け、花道へ連れてはひる。此内皆々にて丈左衞門を宥めることよろしくあつて、此時侍の一門口を明け向うを見送り、元の所へ來り、

侍一　持つべきものは兄弟とて、あの醉漢の一角を、與一郎が肩へ掛け、宅へ連れて歸つた樣子。

侍二　先生の御立腹は、重々御尤もにはござれども、

侍三　相手にいたすも大人氣なき、あのやうなる亂暴者ゆゑ、

侍四　今日は此儘に、御勘辨いたされたがよくござる。

丈左　思はざる邪魔が參り、各々方にも御厄介に相成り、折角の興をさましてござる。

○　餘りこゝらを取散らしたれば、お席を替へて今一獻、

△　お呑み直しを遊ばして、お氣をお晴らしなされませ。
侍一　いや〳〵、最早深更なれば、是れにて御酒は、
四人　お納め下され。
丈左　それでは手前も氣掛りゆゑ、是非とも奥にて今一獻。
侍一　左樣ござらば、
四人　仰せに任せ。
○△　どれ、お支度をいたしませう。（ト○△の下女二人奥へはひる。丈左衞門思入あつて）
丈左　手前を初め各々方には、假令如何程過しませうとも、魂までは失ひませぬが、あゝも前後を忘却なすとは。
侍一　あれを思へば百藥の、長と賞する其酒も、
侍二　過せば却つて害と相成り、
侍三　我が一命にも拘はる儀をば、
侍四　發言いたして身を果すは、
丈左　實に呑む酒に呑まるゝとは、彼等が事で、（ト丈左衞門立上るを、道具替りの知らせ、）ござらうわえ。

ト皆々顔見合せて笑ふ。此模様雪おろし、時の鐘にて此道具廻る。

（清水一角宅の場）――本舞臺三間の間平舞臺、上手一間折廻し障子屋體、下手の棲同じく障子にて見切り、いつもの所門口、此外隣りの家の前面を見せたる雪の積りし屋根のある一間の張物、同三尺の竹格子の中窓、あと三尺の雨戸建切り、此前に誂への雪持の松の木、この枝後に切落す仕掛、舞臺正面更紗の暖簾口、上手一間の地袋戸棚、下手一間中形の襖、やはり舞臺花道とも雪布を敷詰め、總て吉良家長屋内清水一角宅の體。爰に一角の姉お巻、家中女房のこしらへにて、行燈の側に針箱を控へ、一角の肌着を縫つて居る、此模様火の廻りの聲、雪おろし時の鐘にて道具留る。と時の鐘を打上げ、床の淨瑠璃になる。

〽更け渡る夜風に連れて降る雪の、寒さに肌は凍ゆれど、姉は弟がたしなみの、肌着をつもるゆき丈や、急ぐ仕事に寐る間さへ、後家には惜しき賢女なり。

ト此間お巻肌着をさして居て合方になり、思入あつて、

お巻　與左衛門殿が弟の、身性を案じて寄越されし、手紙の文に籠りたる親身の情に涙がこぼれる、それに附けても弟一角、内に居てさへ此やうに手先が凍へてならぬのに、何處へ行つて居る事

か、困つた氣質に引替へて、末の弟の與一郎は兄を案じて寒さも厭はず、兄の在所を捜しに行たが、今に歸らぬ樣子では、居所が知れぬと見えるわいなう。

〽針には手者とさす絲も、細き雪道ふみ分けて、門おとづれる毛坊主が。

ト お卷件の肌着を刺してゐる、雪おろしになり下手より毛坊主珍賀、散切の坊主鬘、着流し袴裝にて傘をさし、一升樽を提げ出來り、門口にて、

珍賀　賴まう。

お卷　はい、どなたでござりまするえ。

珍賀　小林から參りました、一寸爰を明けて下されえ。

お卷　なに、小林さまから、

〽日頃恩義を着るものゝ、仕事取りのけ走り出で、（ト お卷門口を明け、）

是れは／＼お小僧さん、雪の降るのに御苦勞千萬。して何御用でござります。

珍賀　今日は大雪にて、嘸かしお寒うござりませうから、粗酒ではござるが一角樣へ、お上げなされて下されえと、申されてござりまする。（ト件の樽を差出す。）

お卷　是れは／＼何度ながら、御懇情に相成り、何とお禮を申さうやら。今日は又弟が好物な品を澤

山に有難う存じまする、嘸一角が戻りましたら、悦ぶでござりませう、姉もよろしう申しました
と、おつしやりついで下さりませ。

珍賀　御新造さまのお言傳には、お雑煮をこしらへましたから、お姉えさまに、お手隙なら、ちとお遊
びにいらつしやりませと、おつしやりましてござりまする。

お巻　有難う存じまする、何れ弟一角が歸宅いたせば早速に、お禮旁々出ますると、よろしうお願ひ
申しまする。

珍賀　左様なら一角様のお歸りがござりましたら、お早くお出で下さりませ。

お巻　戻り次第早速に、お禮に出るでござりませう。

珍賀　左様なればお姉えさま、お待ち申して居りまする。

〽年は行かねど武夫の、行儀たゞしく挨拶も、紙折の本を口ずさみ、

ト此うち珍賀門をしめ花道へ行き、

「大學朱熹章句、子程子の曰く、大學者孔子之遺書にして初學徳に入るの門なり、而して論孟これ
に次ぐ、學者必ずこれに依つて學べば、其違へざるに近からん。」

ト素讀をしながら花道へはひろ、お巻見送り思入あつて、

お卷　小林さまはお堅いゆゑ、お召使ひの子供衆までが、行儀正しい事ではある、それにつけても此やうにお手當を下さるのも、まさかの時に弟を賴みとお思ひ下さればこそ、繫がる姉のわしまでに御新造さまがお心附け、其思召しを汲みもせで、あの一角は夜更けまで、內を外に出步くとは、困つたものではあるわいなあ。

〽屆く手當に弟が屆かぬ心兎や角と、姉は戾りを松の色、直な操の一筋も二人連立つ兄弟が、曲りて步む雪道を、踏荒してぞ戾りける。

ト此內雪おろしを冠せ、花道より以前の與一郞一角の手を取り、肩へ掛け出來り、花道にて一角雪に辷つて轉ぶな、與一郞介抱して抱起し、門口へ連れて來り、

與一　姉者人、只今戾りましてござりまする。

お卷　おゝ與一郞戾りやつたか、して一角は知れたかいなう。

與一　やう〳〵の事で尋ね當て、連れて戾りましてござりまする。（ト一角與一郞の肩へもたれながら、）

一角　清水一角只今歸宅仕つた。（トお卷一角を見て、）

お卷　えゝ、また其やうに醉つたかいなう。

與一　さあ兄者人、下駄をお脫ぎなされませ。

一角　脱がうと脱ぐまいと身共が勝手だ、いらぬ指圖はよしてくりやれ。

〽酒の癖とて弟の、丸い詞に門口を、兄は咎めて内に入り、

ト此内一角内へはひりよろしく住ひ、お巻はまた醉つて歸つたかといふこなしよろしくあつて、

お巻　こりや與一郎、嘸寒かつたであらうのに、よう連れて戻りやつたなう。

與一　牧山氏の門口でやう〳〵お目に掛りましたゆゑ、直に連れて戻りました。もし兄上、雪だらけゆゑ其お袴、さあお取りなされませ。

〽醉うては居れど行ひの、正しき姉に氣も詰り、

ト此うち一角思入あつて、しかつめらしきこなしにて、

一角　いやなに姉者人、さて今日は近年にない大雪にて、御同然に誠に感じまする儀でござる。

お巻　此頃にない寒さぢやわいなう。（トお巻縫ひかけた肌着をさして居る。）

一角　さて今日は、近年にない大雪にて、御同然に感じまする儀でござる。さて今日は近年にない。

ト頻りにお巻に言ひ掛けるを、

與一　もし兄上、いつまで同じ事をおつしやりまする。

一角　えゝ何を申す、幾度身共が申すものか。

與一　それでもあなた、三度目でござりまする。（ト言ひかけるを、）

お卷　はて、捨てゝ置いたがよいわいなう。

〽例の癖とて逆はぬ、姉が夜なべの縫物を、細かき針の捗らず。

ト此内お卷上手行燈の際にて肌着を縫つて居る、誂への床の合方になり、一角これを見て、

一角　姉者人、感じまするに其やうな仕事はお仕舞なされませ、左樣な肌着がないからと申して、いで鎌倉と申す時は、丸裸にて飛出しましても、淺野浪士の百人位は撫切りにして御覽に入れる、左樣いたして敵方を返討にいたす時は、手前に於ては上杉侯より、莫大の御加增に與り、立身出世は目の當り、姉者人とて其やうな、粗末なお裝はおさせ申さぬ、また弟とて其如く、此一角が立身いたせば、それに續いて出世をいたし吉良代々の重役と相成れば、假令若年であらうとも、今日此頃上杉侯より附人と相成つたる、牧山如きが下に附き、腰を屈める謂れはない、何と悅ばしいか姉者人、お悅びでござらうな。さて其悅ばしい前祝ひに、一杯つけて戴きたい。こりやこりや弟、何をもぢ〳〵いたして居る、早く酒の支度をせぬか。

與一　あいや、若し兄者人、お賴みとござりまするなら、御酒の支度もいたしませうが、なぜ又日頃お仲の惡い、牧山などへ雪中に、あなたはお出でなされました。

一角　いやさう言はれると面目ないが、今日牧山めが朋友を集め、年忘れの催しをいたすに手前を省いて廻状を廻し、大分手を擴げるといふ事を、酒屋の丁稚から聞き出したゆゑ、押掛けて行つて呑んでゆかうと、酒宴半へ推參いたし、暴れ呑みに呑んでやつたら、それに居合す胡麻摺どもめが、身共を無理に門口へ突出しものに仕をつたゆゑ、立ち歸つてもう四五杯、呑み倒さうと思うた所へ、そちが丁度參り合せて、家へ連れて戻られたゆゑ、あつたら酒を呑み損うたが、さて殘念な事をいたした。

ト　お巻これを聞き、呆れしこなしよろしく、

與一　是れはしたり兄者人、それ程御酒が上りたくば、一桝でも二桝でも取つてお上げ申しませうから、日頃不和なる牧山などへ、お出でなされて御酒などを、呑まうとお思ひなされまするな。

一角　いや〱手前は左樣申すが、家へ歸つて呑んだ所が、姉者人が會計方ゆゑ、何時も二合か三合位で、五合とは買つてくれぬゆゑ、呑んだやうな心持がせぬわえ。

與一　そりやもうお好きな御酒ゆゑに、假令いかほど召上つてもお留め申しはいたしませぬが、僅かの御扶持で兄弟三人、やう〱立つる活計ゆゑ、衣類手道具賣代なし今は晴着の小袖さへ、餘所へ預ける位なれば、あなたのお氣に入るやうに。御酒は毎日上げられませぬ。

一角　何の晴着の小袖などが武士の家に入るものか、只侍は大小のよいのがあればそれでよいのだ。

與一　そりやはや武士は刀さへ、あればお役も勤まりませうが、それも御酒ばかり召上つては、まさかの時のお役には、立ちますまいと存じられます。

一角　えゝ、又其やうな事を申すか、まさかの役に立つか立たぬか、いで鎌倉と申す時は。

ト刀を持ち立上り、ひよろ〳〵として尻餅をつくゆゑ、

與一　あゝもし、お危うござります。

一角　えゝ打捨つて置け、今のは疊ですべつたのだ、いで鎌倉と申す時は。

ト又立上りよろ〳〵としてどうとなる、與一郎は腹の立つ思入にて、

與一　兄者人、それでお役に立ちまするか。

一角　立つ積りでも足が立たぬ。（ト是れにて與一郎一角の胸盡しを取り、）

與一　えゝ、お前さまはなあ。（ト是れより誂への合方になり、）御酒さへお上りなされねば、武道に掛けて何一つ後れを取らぬお身を以て、御酒ゆゑ人にも侮られ、日頃不和なる牧山などで、此雪中に門中へ突き出されてのあのしだらは、それでも武士でござりまするか、姉者人も此所にお出であるはよき幸ひ、何うぞ向後ふつゝりと御酒をば止めて下さりませ。此與一郎が一生のお願ひでござ

ります。もし兄者人、弟不便と思召すなら、禁酒をなされて下さりませ。

〽お情お慈悲と弟が、親身の異見側に聞く、姉も夜延の縫仕事、そでなきことゝ行燈へさすも異見の針の先き、胸にぎつくりこたゆれど、酒の機嫌に氣も留めず、

(ト此内お卷一角の顏をぢろりと見ることよろしく、一角はこれにて差しうつ向き居て、此時顏をあげ、)

一角 こりや弟出來した、よく申した、兄なればこそ其やうに、申してくれるは悦ばしいが、假令何と申さうとも此酒ばかりは止められぬ、姉者人も是れにござるが、何の御案じ下さるな、そりや最う如何程熟醉なすとも、いざ鎌倉と申す時は。

〽刀を杖に立上り、ふつと目に附く以前の樽。(ト一角此時以前の樽を見附け)

や、あそこにあるのは、酒ではござらぬか。

お卷 それは最前小林さまから、そなたの留守に下されたわいなう。

一角 なに、小林氏から、お送り下されしとか。いや、流石は隊長は隊長だけ、お氣のつかれたなされ方、清水一角恐縮仕つた。(トよろしく向うへ辭儀をして、)どゝ早速頂戴仕つらう。

〽酒に目もなく立ち掛けるを、(ト一角ひよろひよろと立上り、お卷の側にある樽を取りに行くを、)

お卷 こりや弟、そりやならぬ。

一角　何ゆゑお留めなされまする。
お卷　はて、さう足腰の立たぬほど、醉うて居ながら其上に、呑ませることはなりませぬ。
一角　假令足が立たぬと申して、目に掛つてはこたへられぬ、こちらへお出しなされませ。
　　ト無理に引き取る冷酒を、呑まんとなすを弟は押留め、
　　ト此内一角お卷を掻退け、件の樽を引取り、直に口から呑まうとするゆゑ、與一郎留めて、
與一　いや〳〵、此れは上げられませぬ。
一角　えゝ、そちまでが同じやうに、樽をこつちへ寄越さぬか。
與一　いえ〳〵これは。
一角　えゝ、寄越せといふに。
　　ト足もしどろに一角が、爭ふはずみ一升の、樽も粗相に打ちかへし、
　　ト此内一角與一郎と爭ひ、互に遣るまへと引張り合ひ、誤つて樽を取落し、酒のこぼれし思入にて、
　　南無三大事の酒樽も。
與一　粗相で口がぬけしゆゑ。
お卷　爰らあたりへ皆こぼし、

一角　疊に殘らず呑まれるわえ。

へ殘り惜しげに一角が、腹這ひなして染込まぬ内を吸ひこむ有樣を、見るも賤しく姉弟、目と目見合せ呆れ居る。こなたは酒に濡れ疊恨めしさうに打見やり、

ト一角腹んばひになり酒を吸ふことよろしく、お卷與一郎これを見て顏を見合せ、情ないといふこなし、一角こぼれし酒を呑んでしまひ、あとを額に附けなどして、樽を振つて見て跡なきこなしあつて、

やい弟、それへ出やれ、いやさ、ずゝずつとそれへ出やれ。（トきつと言つて氣を替へ）と申した所で始まらぬゆゑ、決して小言は申さぬが、そちが兎やかういたしたばかりで、可惜酒をこぼしてしまつた、小林氏へ譯を申して、もう一升貰つて參れ。

與一　いえ〳〵何で其やうな、分らぬ使ひに參りませうぞ。

一角　然らば酒をなぜ溢した。

與一　でも粗相ゆゑ、是非がござりませぬ。

一角　いや粗相では相濟まぬ、こぼれた酒を取つて參れ。

與一　でも其やうなお使ひには。

一角　えゝ兄が詞を用ゐ居らぬか。

〽酒に兄弟兄さかひも、なき名を附けて立掛るを、見るに忍びず姉お卷、袋戸棚の狀箱を手早く取つて目先へ突附け、

ト此内一角與一郎へ立ち掛るを、お卷こなしあつて立上り、上手の袋戸棚より狀箱を取り出し、一角を隔て、件の狀箱を目先へ差附け、

お卷　こりや弟、生醉木性違はずと、世の譬にもいふからは、此名宛をば存じて居らう。

ト是にて一角件の狀箱の上書を見て、

一角　お卷どのへ松山輿左衞門、はて、聞いたやうな名でござるな。

お卷　そちが爲には現在の、伯父の名前を忘却せしか。

一角　何さま伯父の名前でござつた、それが何とかいたしましたか。

お卷　えゝ、言はうやうなきおのれはなあ。

〽餘りの事に狀箱の、碎くるばかり荒折檻、姉の一字に手出しさへならぶ方なき弟が、不忠の廉を算へ立て、（ト此内お卷一角よろしく打ち据ゑて、）

此狀こそ一昨日伯父方より此姉へ、弟が風說よからぬゆゑ、身持惰弱の行ひを、篤と異見を加へるやう、若しそちの手に餘りなば伯父が自身に出向いて行き、冥土にござる父上に、成替つて

も仕置をすると、お情厚き数々を認め送りなされるも、お年寄られし伯父上様、そちをお案じなされ ばこそ、其御苦勞も顧みず夜る晝となく呑み歩き、酒に魂奪はれて、一家中での笑ひもの、其行跡は何事ぞ。そりやもう弟や此姉は、切つても切れぬ兄弟ゆゑ、胸を擦つてこらゆれど、若し淺野家の諸浪人、敵を討たんと當屋敷へ亂入せまいものでもない、其急變の防ぎもならず、君の大事に及びなば、お選み人に預かりし御家老千坂兵部樣のお目違ひとなりお恥辱にも、なるをそちは知らざるか、見下げ果てたる不忠者めが。

へまたも狀箱おつ取つて、打擲なせば其手を押へ、

一角　これ姉者人、假令いか程お前さまが、御異見をなされようとも、又御家老の兵部樣が、御恥辱にならうとも、此酒ばかりは止められませぬ、父角之進が亡き後は、弟なれども手前が主人、あなたは他家へ嫁にござつて先の夫に死別れ、又候實家へお歸りなされて、申さば手前が厄介人だ、居候の御身分で打擲なさる事はない、何で身共をお打ちなされた。

お巻　いや今打つたのはわしではない、伯父上さまの仰せを受け、姉が名代此狀箱、不仕合にて連合の夫に別れ里方へ戻りし故に、弟にまで、厄介人と邪魔にされ、姉の威光はなけれども、伯父が折檻。かう／＼、少しは骨身にこたへたか。（トお巻押へた手を拂ひ一角を續け打ちに打つ。）

〽愚癡の涙に打つ腕も、痺る丶程の折檻を、兄は熟醉こと丶もせず、側に弟ははら〳〵と姉が歎きの數々を、察し遣りたる折柄に、

ト此内お卷件の狀箱にて一角を散々に打ちすゑる、一角は打たれながら平氣の體にて差うつ向いて居る。與一郎氣を揉んでお卷を宥めるこなし。トゞばた〳〵になり、下手より紺看板の中間出來り、門口にて、

中間　與一郎樣、最早御番袴りでござりまする、御殿へ御出仕なされませ。

ト是れにて與一郎思入あつて、

與一　思はぬ儀にて遲刻いたした、只今出仕いたすでござると、御同役に申してくりやれ。

中間　承知いたした、左樣なら、お早くお願ひ申しまする。（ト中間引返してはひる、お卷思入あつて、）

お卷　そんなら今宵はお泊り番かや。

與一　明け番にござりますれば、最早御殿へ上らねばならぬ。

お卷　常とは違ひこの大雪、冷えぬやうにしたがよい。

與一　火は澤山にござりまするし、建込んでござりまするゆゑ、宅に居るより詰所の方が、結句暖かでござりまする。

お卷　どれ、衣服を出して遣りませう。

〽言ひつゝ立つて一間より、取り出す衣服大小も、流石勤の身嗜み、兄は前後の分ちなく酒が言はする減らず口、

ト此内お卷上手の障子屋體より、與一郎の羽織大小を持ち出で、着せる事よろしく、一角は是れまで打伏して居て、此時顏を上げ、

一角　さあ姉者人、もつとお打ちなされぬか、手前は此程陽氣の加減が、肩が張つて難儀いたす所、姉者人の御療治で、餘程凝つたのが解れて參つた、成るべく腰のあたりを、もそつときつうお叩き下され、どれ、手前は横になるでござらう。

〽樽を枕に長々と、ふんぞりかへる有樣を、見るも憎やと焦立つ姉、弟は始終押止め、

ト此内一角有合ふ酒樽を取つて枕にして大の字形に寐る、お卷これを見てむつとせしこなしにて立ち掛るを、與一郎よろしく隔てゝ、

與一　あいや、もし姉上さま、嘸御立腹でござりませうが、何を申すも酒興の上、醉うては性根がござりませぬゆゑ、此儘お置き下さりまして、あなたはお臥せりなされませ、又あと〳〵にて生醉が如何なる粗言を申しませうと、相手におなりなされまするな。

お卷　よしなき兄があるゆゑに、そちにまで苦勞を掛け、わしもじゆつなう思ふわいなう。
與一　左樣なれば姉上樣。
お卷　御前首尾よう勤めませうぞ。
與一　明朝歸宅いたすでござりませう。
〽姉の怒りも解けやらぬ、跡を案じて雪の道、御殿へこそは出でゝ行く。
ト是れへ雪おろしな冠せ、此内與一郎下駄をはき、傘をさし門口へ出て、跡を案じるこなしよろしくあつて、トヾ氣を更へ花道へはひる。
〽跡には一人かこち言。（ト床のめりやすになり、お卷こなしあつて、）
お卷　如何に好める道ゆゑに、酒に性根を失ふとて、斯うも樣子の替るものか、酒さへ呑まねば何一つ文武の道に暗からぬ、天晴一騎當千にも勝り劣らぬ弟ゆゑ、まさかの時の御用にも立つべきものが何として、斯かる所業になり居つたか、それに引替へ與一郎、年は遙かに下なれども、勤仕を大事二つには、不孝な兄や此姉に、心を置いて日毎の精勤、胤腹替らぬ兄弟でも、誰に似たるか此醉漢、程に過せば上もなき天の美祿と賞せども、弟のやうに呑む時は、却つて其身の害となり、氣違ひ水ではあるわいなう。

〽惡い者ほど不便さの、まさる親身の小搔卷かけしや袖に恩愛の、泪隱して姉お卷、一間へ
こそは。

ト此内お卷上手屋體より小搔卷を出し、寐て居る一角に掛け、件の狀箱と肌着を持ち愁ひのこなしにて暖簾口へはひる。

〽入りにける。早更渡る子の刻の、鐘も凍りて白雪を貫く響きかう〳〵と、外に音なき冬の夜も、長屋隣りへ一角が、鼾の嵐烈しくも、風が持て來る陣太鼓、

ト此内よき程に本釣鐘を打込み、一角足にて搔卷を踏みのけ、大鼾にて寐て居る。此内花道の揚幕にて、どんと太鼓の頭を打込む。是れにて一角寐たまゝ天窓をあげ、聞耳を立てるこなし。是れより段々かゝり太鼓をよろしく打ちおろす、一角段々天窓をあげ、是れを聞き分けるこなしにて、トゞ向うにて太鼓を打上げる。

清水はむつくり起直り、(ト一角起上り、刀を突いてきつとなり、)

一角 はて心得ぬ、今宵も最早三更過ぎ、雪に非常の憂ひもなく、家中一般寐靜まり、陰に閉ぢたる折も折、表御門の東に當り、陽を發する太鼓の音、殺氣を含むか常ならず、熟醉なせし我が肝を貫く響きはかねてより、故老の話しに聞き及ぶ山鹿流の太鼓の打ち方。今の世にあの太鼓を、熟練

なせし武夫は、松浦侯の御隱居、續いて赤穗の、（ト指を折りかけ心附いて、）やゝゝゝ。

〽さてこそ夜討と打驚き、突立ち上り大音あげ、（ト此内一角きつとなり立上り、）

やあ〳〵、姉上お起きなされい、今ぞ主君の一大事、用意の肌着早く〳〵。

〽詞も待たず一間より、姉はさかしく嗜みの肌着を持つて走り出で、

ト暖簾口よりお卷以前の肌着に袴を添へ、服臺へ載せて持ち出で、

お卷　轡の音に目を覺すは、勇士の覺悟と聞きつるが、扨は前後を失ひしと、思ひの外に今の太鼓を。

一角　お案じあるな姉者人、假令いか程大醉なすとも、まさかの時は我が一命、君に捧げて必死を極め、御家老千坂兵部殿より、見出しに預り君祿を、穢せしだけは働く心底。

お卷　出來した弟、それぞ天晴父の子ぢやわいなう。

一角　猶豫ならねば肌着を早う。

お卷　合點ぢやわいなう。

〽姉が手早く防戰の、支度を急ぐ表の方、門口窺ふ牧山が、槍引き扱き飛んで入り、

ト此内下手より以前の丈左衛門、袴股立襷にて出來り、内へ入り、

丈左　今宵の夜討を誰あつて知るものとてはあらざるに、汝一人存ぜしは、正しく浪士へ荷擔の一角、

不忠の成敗覺悟なせ。

〽突いてかゝるを身を開き、難なく足に踏敷いて、

ト此内丈左衛門槍にて突いて掛るを、一角ちよつと立廻り、件の槍を打落す、丈左衛門それを取りに掛るを、一角槍を足にて踏敷き、肌着を着ながら、

一角　やあ愚なり丈左衛門、假令荷擔はいたさずとも、最早明日一日を過せば當家は白銀へ、お引移りに相成れば、容易に討てざる敵と知り、最早大事も昨今に、迫りし事は此一角かねて覺悟の此夜討。

丈左　何を。

〽又も刎退け突きかくる、槍の鹽首しかと取り、

ト此内また兩人ちよつと立廻り、一角有合ふ袴を取つて丈左衛をよろしくあしらひて、トゞ袴をはきかけ丈左衛門の突出す槍をきつと押へる。是れをお卷後へ廻り、袴の紐をしめることよろしく、一角合點の行かぬこなしにて、

一角　北條流の軍學に秀でし手並に似もやらず、槍の穂先の亂れしは、宵の酒宴に熟醉なせしか。

丈左　いゝや身共は醉はざれども、熟醉なせし其許の、手並の程を試さん爲。

一角　何と。

丈左　日頃の不和も今となり、恐れ入つたる貴殿の先見、約定通り我が首級を、討つて門出をいたされよ。

〽首さし延ぶる牧山が、覺悟の體を感じ入り、

一角　流石は牧山丈左衛門、如何にも約定いたせしゆゑ、首級は申しうけたれども、今某が討つのは無益、其一命を我が君へ捧げて天晴手柄を召され。

丈左　手前も左樣存ずれども、約定なせし其許へ、無沙汰に討死なし難く、態と討れに參つてござる。

一角　かゝる場合に私の宿意を論ずる所にあらず。

丈左　今討つ首級を某へ、暫しお預け下さらば、

一角　天晴見事に討死を、

丈左　言ふにや及ぶ、

一角　いでや御殿へ、

兩人　馳せ附けん。

〽最期を急ぐ時しもあれ、雨か霰か屋の棟より、射かける矢先切拂ひ、手負ひながらも與一郎息が限りに馳來り、

ト此内日覆より舞臺へ夥しく矢を射落し、烈しき鳴物ドン〳〵になり、花道より以前の與一郎手負になり、拔身を持ち走り出で、直ぐに舞臺へ來り内へ入り、

與一　兄上お目が覺められしか、夜討でござるぞ〳〵。

お卷　おゝ待兼ねしぞ與一郎。

一角　して〳〵様子は、何と〳〵。

與一　はツ、（ト是れよりのりになり、）されば拙者は明番ゆゑ、君御寢所のお次にて宿直いたし居つたる所へ、

〽裏表より一時に打立つ太鼓諸共に、宵に積りし雪ならで、降つて湧いたる淺野の浪士、過ぎし亡主の怨敵と、目指す相手は一人ゆゑ、女童に目なかけそと、

〽呼はり〳〵討ち入る奥殿。

爰ぞ大事と某も、必死を極め渡り合ひ、

〽上段下段桐の間の、柱を小楯に虚々實々、暫しは挑み爭ひしが、

名に負ふ敵は豫ての企て、身體堅め不意の夜討に、我々は素肌の事ゆゑ敵し難く、數ケ所の手疵これまでと覺悟を極め候へども、熟醉召されし兄上の、御様子いかゞと存ずるゆゑ、お知せ申し

に參つてござる。

〽ありし次第の物語り、聞いて兩人氣をいらち、

丈左　すりやお夜詰の面々も、不意の夜討に敵し難く、數ヶ所の手疵を負ひしとな。

ト與一郎丈左衞門を見て、

與一　やゝ日頃不和なる牧山氏が。

一角　吳越の思ひ私の宿意を捨てゝ心を合せ、君の御安危伺ふ所存。してくく御前は、如何なるぞ。

與一　かねてしつらふ御寢所の、二重壁より雜部屋へお落し申してござりまする。

一角　おゝそれ聞いて先は安堵、いで此上は御殿へ立越え、夜討の奴儕皆殺しに、必死の働きいたしてくれん。こりやくく弟、そちも參つて防ぎをいたせ。

與一　心得ました、早おさらば。

〽數ヶ所の手疵を事ともせず、雪を蹴立てゝ引返す。

ト矢はり烈しき鳴物にて、與一郎花道へ引返してはひる。

丈左　いで一角殿、出張いたさう。

一角　如何にも同道いたすでござらう。

〽折柄姉が一間より、模様の小袖携へ出で、

ト此内お卷上手の障子屋體へはひり、袖模様の小袖を持つて出來り、

お卷　こりや弟、今與一郎が詞には、女童に目はかけぬと、淺野浪士が申すを幸ひ、姉が小袖を身に纏ひ、女姿で油斷を見濟まし。

一角　むゝ、流石は姉上、門出の賜物。

トよろしく取つて、一角件の小袖を上へ引つかけ、扱帶をしめることよろしく、丈左衛門見て、

丈左　それぞ御領の假屋にて、曾我の五郎を組留めし、五郎丸が例に習ひ、

一角　又お手前は十郎を、討つて手柄を顯はせし、仁田の四郎に異ならず、

お卷　其富士ヶ根の白雪は、

丈左　時に取つての會稽山、

一角　これは日頃の亂行を、

丈左　雪にそゝぐの此門出、

お卷　どうぞ不覺を取らぬやう。（ト此内一角先きに、丈左衛門門口へつか〳〵と出て。）

一角　お案じあるな、まツ此通り。（ト門口の松の枝を見事に切落す、是れにて積りし雪ぱつと散ること。）

丈左　見事。

お卷　早う行きや。

一角　おさらば。

〽勇む門出ぞ。

ト一角先きに花道へ行き、小袖の裾をからげきつと見得、續いて丈左衛門花道にて槍を突いて見得、お卷は是れを見送る。花道の兩人は逸散に走りはひる。此仕組、床の三重、カケりにてよろしく、

ひやうし　幕

清水一角（終り）

原書參考大三河志

大意を寫す發端は會津の謀叛に内府の進發伏見の城に彦右衛門が惜む名殘の昔語り玄蕃が上使は人質と聞に心も細川の男勝りの内室が中老霜野に遺言なし二人の愛子諸共に健氣な自害に正齋が介錯なして殉死の忠節敵地を退れて忠興の陣所と岩見が密事の注進裏の裏行く謀略も金吾が味方の裏切に名にし大谷刑部が切腹胸沸返る湯淺吾助が躑躅が岡に包み兼隱す首級を覘ひ寄り唯一突に仁右衛門が突し手柄に賜る鎌槍石田も今は落人に平十郎が進むる自殺を退れて忍ぶ與次郎太夫が家を詮議の九郎右衛門娘おしづが艱難を見るにしのびず三成が悔悟の自訴に田中兵部が繩目をゆるす寛仁大度

四海靡武徳白旗

関原神樂

「關ヶ原軍記」は明治二十年六月、新富座に稿下された、作者七十二歲の時である。此頃先代の守田勘彌が作劇にも興味を持ち、默阿彌の弟子格となり、古河默阿彌の古河を附けて古河新水と名乘つてゐた。此作も勘彌が、劇壇に對する一般社會の有力者の一人であつた軍醫總監松本順氏から「參考大三河志」なる寫本を採訪し、それによつて默阿彌に暗示を與へ、創作せられた活歷劇であつた。勘彌も新水として此の作の一部を助筆してゐる位である。二幕目の終りに、「勝つて兜の緒を締めろぢや」といふ所があるが、團十郎の家康をしてあのせりふを言はせたらばといふのが、そも／＼の思ひ立であつたとかいふ。然し舞臺的に成功したのは、細川の奧方敷波が自殺するの件で、後年も屢々上演された。敷波をガラシヤとして耶蘇信者として扱つてはないが、此時には好評であつた。

書卸しの時の役割は市川團十郎（徳川內府家康公、細川の奧方敷波、大谷刑部、井伊直政）、尾上菊五郎（藤堂高利、小西行長、石田三成）、市川左團次（鳥居元忠、小笠原正齋、細川忠興、湯淺吾助、獵人與次郎太夫）中村芝翫（奧平美作守、福島正則、伊達政宗）、坂東家橘（田中兵部少輔、島新吉郎、金吾中納言秀秋）、市川小團次（內藤家長、河喜多石見、藤堂高虎、島左近）、尾上松助（石田の臣磯部平十郎、穴熊の九郎右衞門、浮田秀家）、澤村源之助（內藤娘千代、與次郎太夫娘おしづ）、市川升若（細川の老女霜野、家長の母錦妙）、坂東秀調（細川の老女吳竹、平十郎姉浪路）、市川團右衞門（岩淵玄蕃、金貸銀兵衞）等であつた。挿繪にしたのは、稿下當時九世團十郎の扮した家康の舞臺寫眞である。

大正十四年十二月

校訂者



關原神葵葉（關ヶ原軍記――五幕）

序幕

伏見稻荷鳥居前の場
同　城中大廣間の場

〔役名――德川內府家康公、鳥居彥右衞門元忠、內藤彌次右衞門家長、松平主殿助家忠、松平五左衞門近正、茶見世の親仁作兵衞、足輕左五平、奧道者仙右衞門、同臺藏、同陸助。細川の侍女八代、同伏屋、同磯浦、同袖岡等。〕

（伏見稻荷鳥居前の場）――本舞臺一面の平舞臺上手朱塗の大鳥居、此の左右御影石の奉納の燈籠、下の方少し前へ出して九尺、茶見世の屋體。茅屋根の軒を取附け、見附柱折廻し常足の二重、左右三尺づゝの腰掛、此正面鼠壁、眞中暖簾口、土間入口に茶釜、茶棚茶椀など並べし臺、柱に御休所といふ行燈、床几二三脚並べ、鳥居の內畫心に山門廻廊を見たる遠見、是れに續いて松並木の書割、總て伏見稻荷鳥居前の體よろしく。爰に仙右衞門、臺藏、陸助何れも着流し脚絆草鞋菅笠を持ち、旅裝奧道者にて床几に掛り居る。作兵衞更けたる親仁前垂掛け茶屋の亭主、下駄にて皆々へ茶を出して居る、此見得よろしく大拍子にて幕明く。

作兵　さあ皆さま、お茶をお上りなされませ。

仙右　いや、構はつしやるなく。（ト皆々茶を呑み、）

作兵　あなた方は御遠方の御様子ぢやが、お國はどちらでござりまするな。

仙右　わしら三人は奥州仙臺の者でござるが、まだ伊勢へ參宮をしないので、今年は是非と思ひ立ち、三人連れで國を出掛けました。

臺藏　先づ太神宮樣へ參詣して、それから序に京大阪大和巡りをして行く積りで、今日は朝立ちにして來ました。

陸助　わしらが國とえらく違つて、京都は神社佛閣がみんな立派で魂消るばかり、それゆゑ何處でも手間を取り、今日で三日見物します。

作兵　それはまあ遠方の所、よくまあお登りでござりました。然し此頃奥州會津の上杉樣が謀叛を起し、近々都へ攻め登ると噂を世間でいたすので、江戸將軍の德川樣が逆寄せにこちらから奥州へ御出陣、當時御隱居同樣な内府樣までお出になると、取り〴〵の風說、定めて道中筋は、騷々しい事でござりませうな。

仙右　いやもう、それゆゑ三日のものは五日も掛る大混雜、殊にわしらが生國が奥州ゆゑに改められ、方々で肝をひしがれました。

臺藏　詞は國の手形とやらで、鼻にかゝるが奥州の、名物ゆゑに敵地から、若しや間者ではないかと吟

味され。

陸助　半日位留められた事が、度々ありましたッけが、私等は腹から土百姓ゆゑ、あか腹言はぬ明りが立ち、やう／＼爰までめえりました。

作兵　それは嘸お困りな事でござりましたらう。然し内府様の御進發で、諸侯方にもお供ゆゑ、京大阪は何となく人氣が立つて居りますから、此擧に乘じて道中筋の荷物兵糧何やかや、運送などをする者は、人の難儀の戰沙汰が却つて金の儲け時と、中には悦んで居るものがあるので、祇園や島原などは大層繁昌だと申します。

仙石　いやそれは何か變があると、迷惑な人が九分なれど、其内一分は金儲けをして、お釜を起す人もありませう。

臺藏　何にしろ上方から、二百里隔つ出羽奥州、假令戰が始まつても、爰らへは鐵砲の外玉などは、飛んで來まい。

陸助　わしらが在所は修羅の街、悠々と上方見物をしても居れまい、それでは早く稲荷さまへ參詣をして來るとしませう。

作兵　まあよろしいではござりませぬか、最う一つお茶を上げませうか。

仙右　いや〳〵參詣してから、又歸りに寄つて休みますべい。(ト皆々茶代を置く。)

作兵　左樣なら、お歸りにゆつくりしておいでなされませ。

仙右　大きに造作になりました。

幸藏　どれ、參詣を、

三人　して來ようか。(ト大拍子になり、三人は上手鳥居の内へはひる。跡を見送り、)

作兵　昔から奧道者は、米と玉味噌を叺に入れ、長の道中を脊負つて歩くと、何處へ行つても嫌はれたが、あの人達も五六杯、無闇に茶をば呑んで行つたが、茶腹も一時晝飯でも、大方蹴出す氣と見えるわえ。

ト作兵衞そこらを片附けて居る。三味線入り大拍子になり、上手鳥居の内より八代、伏屋、磯浦、袖岡、何れも好みの裝、模樣物奧女中草履にて、跡より左五平羽織袴股立大小、足輕にて白木の三方へ守札を載せたるを持ち、附添ひ出來る、作兵衞見て、

是れはお歸りでござりまするか、先づ一服召上つてお出でなされませ。

ト煙草盆茶など出す。

八代　おゝ、是れは茶店の主人、毎度當社へ參詣をいたす折にはいかいお世話。

伏屋　今日も奥樣より御代參を仰せ附られ、御千度を上げたゆゑ、
磯浦　八代さまも伏屋さまも、殊の外お草臥れしゆゑ、
袖岡　まだお刻限もお早うござれば、爰へお休みなされませ。
佐五　それがよろしうござりまする。
八代　左樣なれば、何れも樣、
伏屋　先づお掛け、
女四人　なされませ。(ト是れにて女形四人床几へ掛ける、左五平も同じく掛ける、作兵衞は皆々へ茶を出し、)
作兵　ほんの澁茶でござりまする。いや、それはさうと細川樣では、此お稻荷樣を御信仰にて、今の日には缺かされず御參詣でござりまするが、只今のお詞では奥樣の御代參とやら、それでは若しや殿樣は、内府樣と奥州へ御一緒に、御出陣でござりまするか。(ト合方きつぱりとなつて、)
八代　さればいな、今度奥州上杉家徳川樣へ叛きしゆゑ、俄に内府家康樣御老體をも厭はせられず、御自身の御出陣、それゆゑ殿樣にも御從軍にて、明日御出立との事。
伏屋　それゆゑ奥樣が日頃より御信仰の當社へ、御武運長久の爲千度の御願、只今別當所に於て御祈念の上、則ち御守札を頂戴して、私共が御代參の役目、

磯浦　是れといふのも、此伏見のお稲荷様はあらたかにて、其御利益か我が君様には、

袖岡　内府様とは水魚の交り、追々御加増の御沙汰あれば、お禮がてらの御参詣。

八代　此度の御出張にも、是非御勝利と思召せば、此お守を頂戴して、只今歸る所ぢやわいな。

作兵　いや、それはお勇ましい事でござりまする、さうして内府様に御加勢の御大名とは、誰々様にござりまするな。

佐五　其お使方は、先づ第一が福島正則、池田輝政様を始めとして、續いて御上人忠興様、加藤嘉明様に淺野、黒田、藤堂なんぞ、何れも數度の戰場を駈廻つた大名方、一粒選りの勇士ばかり。

八代　假令奥州會津城か、要害堅固であらうとも、味方はすぐつて名將の家柄なれば、

伏見　必ず敵は一戰にて、忽ち打負け落城なすか、然もなくば降參なし、平定なすは目の當り。

磯浦　案じる事は、

四人　あるまいわいな。

作兵　成程これはおつしやる通り、總大將が内府様なら、天下に二人とない御器量、それに随ふ福島池田、何れも名うてのお大名、如何に上杉景勝がえらいと言つても及ばぬ事、こりや一縮みに縮みあがつて、降參するに違ひござりませぬ。

ト此内鳥居の內より以前の仙右衞門、臺藏、陸助等出掛り居て、此時前へ出で、

仙右　いや、めつたに降參は、

三人　しませぬぞ。

作兵　や、こなた衆はさつきの奧道者、降參せぬとはそりや誰が。

臺藏　誰でもござらぬ上杉が。

左五　なに、上杉方とは。

仙右　最前から聞いて居れば、人もなげなるお前樣方、こりや聞き捨てには、

三人　なりませぬぞ。（ト床几へ掛ける。）

左五　なに、聞き捨てにならぬとは、して〳〵それは何ういふ譯ぢや。

仙右　何も別に譯はござらぬが、そりやもう當時日本で旭の昇る勢ひにて、將軍樣と仰がるゝ秀忠公の御父君家康公が御出陣、それに隨ふ大小名、會津勢より何分か人數の多いは當り前。

臺藏　わしらが方にも上杉に、隨ふ佐竹を始めとして、大小名は幾らもござる。其上會津は四方が山で、敵の攻入る道がなく、鐵壁城と昔から言ひ傳への名城なれば、

陸助　幾ら人數に新手を加へ、無闇に攻めても地の利を知らねば、無益に人を殺した上嶮岨な道に人馬

を疲らし、あぐみ果てたる其處へ會津の手勢が討つて出でなば、それこそ敵は總崩れ、どうして
どうして及びませぬ。

作兵　いや／＼さうは行きますまい、假令會津が名城でも、内府樣が御計略で陥れるに造作はない、殊に日本半國は皆御味方の關東勢、どうして／＼齒が立つものか、國最屓でもそいつはいけぬ、強情な言はつしやるな。

仙右　強情と米の出來るはわしらが國の名物ぢや、何といつても關東勢は會津どころか、とほ口の白河邊で兜をぬぎ、降參するに違ひござらぬ。

左五　いやこいつが／＼、明日奥羽へ御出陣の、其幸先を彼れ此れと、碎くなどゝは奇怪千萬、再び申さば許さぬぞ。（ト左五平刀の柄へ手を掛ける。）

臺藏　あゝこれ、そんなにえらく腹を立たつしやるな、無駄ぢやから無駄といふのぢや。

陸助　わしらだつて百姓でも、戰の中で生れたもの、何でお前方に引けを取るものか。

ト三人肌をぬぎ立ち掛る、作兵衞むつとして、

作兵　奥道者の命知らず、當時天下で徳川樣を神の如くに敬ふ中で、高が會津の小勢に負けるといふなら樂礼も釣り方、默つて聞いては居られぬぞ。

仙右 居られずば何うともさつしやれ、わしらが相手に、
三人 なりませう。(ト三人立ち掛る。)
左五 うぬ、不屆きな無禮者め。
ト雙方立ち掛り、左五平刀を拔かうとするを、三人きつと留め、大拍子になる。三人立廻りよろしく、ト此はずみ件の守り札落ちて二つに割れる、皆々見てびつくりなし、
仙右 やゝこいつはお札が二つに割れた。
臺藏 陸助 此間に早く逃げさつしやい。(トやはり大拍子にて三人は荷物を擔ぎ、逸散に花道へ逃げてはひる。)
左五 うぬ、逃げるとて逃すものか。
ト左五平續いて三人を追駈け、花道へはひる。跡八代件の二つに割れし守札を取上げ思入あつて、
八代 奧樣の御名代に、當社へ祈念の此お札、今の騷ぎに取落し二つに割れしは心掛り、
伏屋 祝ひに祝ふ御出陣の、其幸先に割れしとは、若しや凶事ある神のお告か。
磯浦 八代さま、
袖岡 伏屋さま、
八代 ほんに氣に掛る事で、

女形
四人　ござりまするなあ。（ト四人はじゆつなき思入、此内始終作兵衞思入あつて前へ出で、）

作兵　あゝもし、親仁が差出た事を申して、却つて御機嫌を損ねますか知りませぬが、其お守札が二つに割れるといふは、御出陣の門出を祝す吉事のお知せ。

八代　なに、割れたるお札が何ゆゑに、そちは吉事と、

四人　言やるのぢや。（ト合方になり、）

作兵　今三人の與道者が申した通り、奥州會津は要害堅固な名城にて、勝手を知らぬ者などが何萬騎で攻めようとも落ちぬといつた其城も、お稲荷様の御利益と、御殿様の武勇にて、堅固に守る城壁も其お札のやうに二つに割れ、それから寄手が亂入し、瞬くうちに景勝が、首をころりと二つ胴放れ〳〵になるといふ、こりや神様のよいお告かと、親仁がお祝ひ申しまする。

ト件の守札を取つて思入にて言ふ。

八代　成程作兵にも功の者とやら、流石年だけ敵城を二つに割ると祝せしは、實に天晴なそちが頓智。

代官　御札は何より祝ひがいと申せば、それもそんなものとはいへ、二つに割れた此お札、此儘にては奥にへ差上げられねば八代どの。

磯浦　再び別當所にて御祈禱遊ばし、

袖岡　お札を頂戴いたしませう。
八代　ほんに、左様いたしませうわいな。（トばた／＼になり、花道より以前の足輕左五平歸り來り、）
左五　はッ、是れにおいでなされましたか、お供先にて思はぬ失禮、御免下さりませ。
八代　して今の者共は、如何いたしました。
左五　默つて居ればよい事にいたして味方を蔑なす奴等、以後を懲らさん其爲に跡を追駈け申しましたが、雲を霞と何れへか逃げ失せましてござりまする。
作兵　そりや口程にもない、弱い奴でござりましたな。
八代　すりや逃げて參りしとか。（ト思入あつて、）會津御征伐の御出陣に農民なれども三人連。
伏屋　奥道者をば御家來の、お足輕が追ひまくり、
磯浦　取りも直さず敵勢を、
袖岡　追ひ散らした勝戰。（ト此時大太鼓の頭を打つ。）
作兵　丁度聞えるあの太鼓は、
八代　味方を集むる合圖の引揚げ。（ト件の守札を三方に載せた儘取上げるを道具替りの知らせ、）
作兵　お目出たうござりまする。（ト此仕組よろしく、本社の神樂にて此道具廻る。）

（伏見城内大廣間の場）――本舞臺後へ下げて常足の二重、金張附の蹴込み、正面金地襖繪の襖、上下折廻しに畫をかきたる杉戸の出這入り、日覆より同じく金張附の大襴間をおろし、花道の揚幕へ杉戸を取附け、二重上下とも高麗緣の薄緣を敷詰め、總て伏見城内大廣間の體よろしく。爰に一、二、三、四、五、六の近臣六人何れも上下裝近習にて、平舞臺に居並び、此見得時計の音にて道具留る。

一　此度上杉景勝こと、上洛せよとの御沙汰ありしに、彼我意に募り、上洛せざるは正しく叛逆のしるしなりと、

二　此程よりして軍議を開かれ、いよ〳〵江戸大納言樣御進發と事極り、三河守秀康卿、下野守忠吉卿、

三　其外松平の稱號を名乘る諸侯は申すに及ばず、御譜代席たる本多忠勝殿を先手として、

四　疾くに先日御出馬ありしが、猶引續き大御所樣には、明日當伏見を御進發遊ばすとの仰せ出され

五　さすれば如何なる強情我慢の、會津勢でも恐怖なし、日ならず一味の佐竹諸共、降參いたすに疑ひなし。

六　兎角治世と事替り、亂れし世には合戰の、あるが却てお互ひの出世の蔓と申すもの、何うかお供

の御人數へ、

一　加はりたう、

六人　ござりまするな。

ト中の舞になり、花道より鳥居彦右衞門元忠白髮鬘好みの上下一本差し、跡より内藤彌次右衞門、松平主殿助、松平五左衞門何れも上下一本差しにて出來り、よろしく花道へ居並び、舞臺の六人これな出迎へ、

一　これは〳〵鳥居氏を始めとして、内藤氏、松平氏、よくこそ御出仕召されしぞ。

二　何は然れ、是れなるお席へ、御遠慮召されずお通り、

六人　なされい。

元忠　然らば何れも、

四人　御免下され。

ト右の鳴物にて花道の四人舞臺へ來りよき所へ住ふ。六人は上下へ割つて同じく居並ぶ。元忠思入あつて、

元忠　今日彦右衞門を始めとして、是れに居らるゝ内藤氏、主殿殿、五左衞門殿打揃つて登城なせし

は、かねて各々にも知らるゝ如く、今般會津御征伐として我が君御出陣これあるよし、それに附き伺ひの儀ござつて、態々出仕いたしてござる。

彌次　其とてもそれゆゑに、鳥居氏と今日は、終日談合なせし上、君へ聊か願ひの筋がござつて同伴いたせしなり。

上殿　然し世人のいふ如く、聰明叡智に渡らせられ、凡ならざる我が君なれば、押して我々願ふとも甚だ以て心掛り。

左右　胸に思ひし事共は、溜めて置かれぬ三河の國風、何卒君へ是れなる四人が、登城いたせし趣きを、

元忠　御近習衆より我が君へお取次の儀を、

四人　お願ひ申す。

一　委細承知仕る、然らば此由、

二　我が君へ御披露申すで、

六人　ござりませう。

ト立たうとする、此時奥より津田左門、若衆鬘上下振袖一本差し小姓にて出來り、

左門　あいや、おいでに及びませぬ。只今我が君此處へ出御にござりまする。

元忠　すりや我が君には此處へ、

彌次　最早いらせ、

四人　らるゝとな。

下序の舞になり、正面の襖を左右に開き、奥より徳川家康白髪鬘好みの着附、小さ刀にて出る、跡より子役の小姓若衆鬘上下振袖にて、一人は太刀を持ち一人は褥脇息など持ち出で、よろしく二重眞中へ席を設け、家康褥の上へ住ひ、以前の左門下手へ控へ、皆々はツと平伏なし、

元忠　はツ、我が君には此程より、會津表御征伐の儀に附き、晝夜軍慮を廻らされ、

彌次　御高齡の御身にて、愈々彼の地へ御進發と承はつて我々も、

主殿　君の御尊慮伺ひし上、私共の願ひの筋、申し上げん心得にて、

五左　今日御目見得願ひし所、斯く麗はしき御尊顔を拜し、

元忠　恐悦至極に存じ、

四人　奉りまする。（ト辭儀をなす。家康思入あつて、）

家康　其方共も此程より、會津表出陣の儀に附き、只管苦慮を廻らす由、然るに、いよ／＼老朽ちし我れ自ら出馬なし、景勝をば征伐なさんと、明日は當地をば發足いたす心組ぢやが、汝等とても兄

れまでに、數度戰場を勤めし身なれば、心置きなく分別あらば、申し立つるが宜しいぞよ。

元忠　はッ、有難き其お詞、御懇の御意に甘えまして、我々一同我が君樣へ、聊かお願ひの儀が、

四人　ござりまする。

家康　予に其方共が願ひとは。（ト思入あつて、）如何なる事か遠慮なく、疾く〳〵申して見よ。

元忠　其願ひ餘の儀にあらず、何卒我々四人の者を、今般の御供にお召連れ下さりまするやう、此儀偏に願ひ上げ、

四人　奉りまする。（トこなしあつて言ふ。）

家康　何事の願ひかと存ぜしに、すりや其方共には、予が出陣の供がいたしたいと申すか。

元忠　仰せの通り我々は君御幼稚の其折より御側に於て人と成り、是れまで數度の御苦戰にも嘗てお側を放れし事なく、忠勤勵み居つたるに、如何に諸侯が數萬騎の御味方あるにせよ、三河以來の我我を、

彌次　今般お供に加へられぬは、誠に以て武門の瑕瑾、

主殿　恐れながら何ゆゑかと、竊に上をお恨み申し、

五左　四人の者は寢食を、忘れてそれのみ心に掛れば、

元忠　抑して此儀を願ひまするが、此度お供に召連れられぬ我が君様の御胸中、御明し下さりまするやう、此儀臣等が達てのお願ひ、
彌次　御聞き濟み下さるやう、偏に願ひ、
四人　奉りまする。（卜思入にて願ふ。家康思入あつて、）
家康　四人の者が出仕せしは、如何なる願ひかと存ぜしに、すりや此度の征軍に、召連れざるゆゑ予が胸中明しくれよと申すのぢやな。
元忠　御意の如く御尊慮を、伺ひし上私共が、胸に落ちなば謹んでお留守居を勤めませうが、萬に一君の御思慮が、我々に叶ひませねば、遮つてお供をいたす決心でござりまする。
家康　幼年よりして奥底なく、予に仕落ある其時は、異見をいたす彦右衛門、何條隔てあるべきぞ、汝等四人を供に連れぬは、深き仔細あつての事ぢや。
元忠　何と御意、
四人　遊ばしまする。（卜横笛の入りし誂への合方になり、）
家康　そもく此度會津なる上杉景勝上洛せず、江戸將軍に叛きしは、景勝のみが心にあらず、察する所京難波に心を通じ居るものあつて、予が彼の地へ出馬なさねば事平穏には至るまじと、態と進

發促すものゝ心の内に刃を含み、途中に於て挾み討になさんと、計略を回らすもの必定あらん、左すれば予も油斷なく、事を未發に防がんが、爰に一つの難儀といふは、予が留守中に當地に於て、必ず不慮の事あるべし、其時こそは當城を第一番に攻むる事、鏡に掛けて見るが如し、されば敵地の一孤城、守衛に差しおく大將が、卑怯未練の振舞なさば、當城のみか予が家名の、譽れを失ふ大事の場合、爰を思ひて其方共、四人を態と此地に殘し、城の守りを申し附くる所存ゆゑ、從軍の列を省きしなり、召連れ行かぬは此ゆゑなれば、必ず共に恨まぬがよいぞ。

ト是れを聞き四人顏見合せ、思入あつて、

元忠　はゝはツ、今に始めぬ君の御深慮、斯く老年に及びましても人に負けぬ心ゆゑ、只一概に御出馬のお供の列を省かれしと、一途に存じ我が君を、お恨み申せし拙者が愚さ。

彌次　それに引替へ我が君には、御進發の御留守中必ず野心の者あらんと、早くも其機を察したまひ、當城守衛の事にまで、御配慮ありしは天晴御明智。

主殿　御家臣多き其中にて、四人の者がお見出しに預かりしとは身の冥加、我れ〳〵粉骨碎身なし、御當家の御武名をば、穢さぬやうに心掛け、

五左　當城を堅く守り、假令野心の者共が、數百萬騎押寄せ來るとも、敵を惱まし勢盡きなば、其時

元忠　こそは討死なし、名を後世に止むべし。

元忠　我が君御心を惱ましたまふな、彦右衞門始め四人の者、一命賭けて此お役、勤めまするで、

四人　ござりませう。(トよろしく思入、家康も安堵せしこなしにて、)

家康　おゝ勇ましき其詞、それにて予も安堵いたした。(ト此時上手襖の内より近習一人出來り、)

近習　はッ申し上げます。

彌次　何事なるぞ。

近習　只今大谷吉隆殿より御使者として、喜多讃岐之介罷り越しましてござりまする。

彌次　上様お聞き遊ばされましたか。

家康　大谷よりの使者とあれば、元忠參つて應接いたせ。

元忠　畏つてござりまする。

家康　刑部は病氣と承はりしが、それゆゑ此度東征に、從軍仕難き使者なるか。

元忠　然らば拙者が、應接いたすでござりませう。

家康　病氣とあれば、(ト思入あるを木の頭。)出馬を止めよ。

ト彦右衞門辭儀をなし、此模樣よろしく時の太鼓にて道具廻る。

伏見城吹上御門内の場）——本舞臺一面の平舞臺、向う桝形を見たる石垣の書割、上下石垣の張物にて見切、舞臺に松の立木、總て伏見城吹上御門内の體。爰に疊を五六枚敷き、此上に德川の兵士十人、手桶を附にて住ひ、此傍に牡丹餅を積み、半切、擔ひの中へ茶をいれ、柄杓を附けある、此人數の内二三牡丹餅を喰つて居る見得よろしく、時の太鼓にて道具留る。

一　如何に何れも、明朝辰の上刻に、當城を御出發遊ばさるゝ、其御供の我々へ、

二　御城代より御馳走な、下さるゝと申す事の爲、扨ても立派な御馳走と、思ひの外なる此牡丹餅、

三　殊に擔ひに澁茶を入れ、茶椀も出ずに柄杓とは、餘り輕卒なお取り扱ひ。

四　然し拙者は下戸なれば、開いた口に何とやら、是れで三つめでござる。

五　いかにも貴殿の言はるゝ通り、思ひの外よい風味でござる。

六　風味は如何か存ぜねど、見たばかりで胸がやけ、賞翫いたす氣がござらぬ。

七　鳥居殿が下戸なれば、人も下戸だと思はれて、品もあらうに牡丹餅とは。

八　左様でござる。餘り馬鹿げた御馳走で、開いた口に牡丹餅どころか。

九　實に開いた口がふさがらんとは、爰らの事を申すのでござらう。

十　あまり見かけた御馳走ではござらぬか。

ト此内以前の彦右衛門元忠下手より杖を突き、跛を引きながら出來り、舞臺眞中に立ちどまる。

元忠　各々方には御大儀々々。明日よりは御東征のお供にて、結構な事でござる。牡丹餅がよろしくばたんと參られよ。

四　先刻より頂戴いたして、最早十分でござる。

五　此大きなる牡丹餅を、三つまで頂戴いたしました。

元忠　左樣でござるか、何れも如何でござるな。

一　折角の御馳走なれど、拙者は生得上戸ゆゑ、此御馳走は頂戴いたさぬ。

二　御城内の御馳走は、是れだけでござるかな。

元忠　なに、是れだけでござるとは、不足だと言はるゝか。

三　仰せではござれども、多人數の事なれば、下戸も上戸もござるゆゑ。

元忠　默らつせえ、泰平の御代ならば、下戸の上戸のと申せども、未だ天下は穩かならず、上樣を見よつせえ、質素儉約を元としたまひ、奢りといふは微塵もござらぬ御家の風儀を知らつしやらぬか。

六　左樣ではござれども、明日こそは東征の、お供に加はる我々ゆゑ、

元忠　それだから申すのぢや、戰場へ向つて見さつせえ、喰ふは元より水さへも呑めぬ事が度々ござる。御身達は知るまいが、此老仁は上樣のお供をいたし、喰はず呑まずに居つた事は、幾度とも知れぬ程ぢやわ。

七　それを思へは我々が、今やかう申すは勿體なし。

元忠　さう言やう〳〵、勿體ないと思ふなら悦んで喰つせえ、好まぬ人は參られな。なに馬鹿々々しい。

ト言ひながら元忠上手へはひる。

八　いつに替らぬ、御老體の頑固のあるやう、

九　年は取つても負けぬ氣でござるな。

十　あれでは誰が閉口いたすも、尤でござる。

一　誰も閉口いたさうが、此牡丹餅では味方も閉口。（ト皆々顏を見合せるを木の頭、いたしてござる

ト此模樣おかし味にて、よろしく道具廻る。

〔内府公居間の場〕――本舞臺好みの内府公居間、左右に燭臺を照し、家康褥の上に住ひ、眼鏡を掛け、會津の繪圖を見て居る。後に小姓二人控へ、下手に近習手を突いて居る、誂への合方にて道具

留る。

近習　御城代鳥居元忠殿、上樣へ御對顏願ひ度しと、お次に控へ居られまする。

家康　是れへと申せ。

近習　はツ。(卜下手へはひる。)

家康　元忠常に酒を好まず、予も酒を參らぬ事を存じ居つて、今宵に限り酒宴の饗應いたせし上、出仕せしとは、むゝ。(卜家康よろしく思ひ入、此内元忠下手より出で、よき所に住ひ辭儀なする、)元忠か、進め。

元忠　はツ。(卜誂への合方になり、元忠家康の側へ寄る。)

家康　事に紛れて問はざりしが、刑部の病氣如何なるぞ。

元忠　吉隆病氣甚だしく、一兩日醫療を加へ、後れて從軍仕り度くと、使者の趣きにござりまする。

家康　左樣であつたか。こりや彥右衞門、長生きは仕樣ものぢや、珍らしい事があるわえ。

元忠　何か珍らしい儀がござりまするか。

家康　彥右衞門より、予に酒宴を饗應とは、珍らしい事ではないか。

元忠　御意にござりまする、ちと思ひ立ちました儀がござりまして、それゆゑ獻上仕りました。

家康　深くは酒は參らねど、東征出發の祝ひ旁々、久し振りにて一獻汲まん。それ、酒肴を持て。

ト小姓兩人銚子土器を家康の前へ直す、家康土器を取上げ、小姓酌をなし、元忠家康の傍にあるお畫圖に心附き、

元忠　只今御覽の其畫圖は、何れよりお手に入りました、

家康　伊達政宗より送りたる、會津表の畫圖なるぞ。

元忠　拙者も左樣と存じましたが、中々嶮岨にござりますれば、兵士も左こそと存じられます。

家康　其方は此畫圖を、それより見て具に分るか。

元忠　御意にござりまする。

家康　壯健な事ぢやな、予は眼鏡を用ゐねば、委しくは分らぬわい、年老いては役に立たぬな。

元忠　上樣には似合しからぬ御意にござりまする、元忠などは上樣より、二つも年老い居りますれど、若侍には負けぬ氣にござりまする。

家康　成程、元忠は予に二つ上であつたな。

元忠　初めて上樣へ御目見得いたしましたるは、天文四年十月二十日と覺えまする。

家康　予も其折は竹千代と申して、駿州宮崎の城に居た時であつた。

元忠　其時君には御十一、また私も十三歳にござりましたが、父伊賀に召連れられ、未だ其名も久五郎と申し、御小姓役を仰せ附けられ、上樣も私も隨分惡戲をいたしました。

家康　其頃はよく爭論をいたしたが、今思ひ出すとをかしいやうであるわい。

元忠　御家臣の數に加はりてより、四十年になりまするが、いかい御苦勞をなされましたが、思ひ出しまするとぞつとする程、ひやひやいな事もござりましたな。

家康　思へば互に今日まで、よく無事に參つたものぢや。（ト家康思入よろしくあつて、）然し此先き何れで果てるか、人は死なねば分らぬものぢや。

元忠　それは私などの申す事にて、年老いて氣ばかり强くなりまして何うもなりませぬ、是れまで御奉公をいたしましたが、果てまする折には、どうかお役に立ちまして、死にたいものでござりまする。

ト元忠よろしく思入あつて、

家康　年老いて樂もいたさず、遙々遠き奧州へ出馬いたすも、當伏見城を守るのも萬民の爲、一つには子供の爲とは言ひながら、世はさまざまなたゝずまひぢやなあ。（ト此内始終兩人氣味合の思入よろしくあつて、）それに附けても元忠始め、四人の勇士を殘し置き、當城守る人數とても不足なりよ

存ずれど、會津景勝征伐なすに、日數かゝらば德川の威權に拘はる事ゆゑに、速かに會津を討ち、諸侯に武威を見せんものと、それゆゑ多人數引率いたせば、止むを得ずして當城へ殘す勇士の少しきは、心苦しう思ふぞよ。

元忠　仰せにはござりますれど、此元忠の愚案には、多人數過ぎるかと存じまする。

ト家康これを聞き思入あつて、

家康　多人數過ぎると申すのは、如何なる見込みあつて申す、（ト合方きつぱりとなり、）

元忠　上樣東征御出陣の機を測り、三成兼て賴み置きし諸侯を語らひ當城へ、攻來ること必定にて、其時防戰いたすには、假令城兵只今の五倍七倍あるとても、近國よりして當城へ應援いたす道なければ、兵糧たゝれ大軍にて、短兵急に攻められなば、いかでか籠城なし難く討死なすより外なからん。されば勇士を無慚にも、討死さするが無益ゆゑ、愚臣本丸を相守り、五左衞門近正外廓を固め、それにて防禦仕つれば、家長家忠兩人は東征從軍に加へたまふが、然るべきかと存じまするゆゑ、多人數なりと申しました。（ト此内始終家康默して居て、）

家康　我が心中を察し得て、死せる跡まで家康を思ひくれる元忠に、當城守らせ討死さするは、不便とも思へ、當城を、守護なすものは家康が家臣數多ある中に、汝ならで外になく、止むを得ずして此

役目申し附くる予の苦しさ、家の瑕瑾にならざるやう、守護なしくれよ鳥居元忠、

元忠　はツ。

家康　くれ〴〵汝に頼み置くぞ。

ト家康不便だといふ思入よろしくあつて、元忠思はず落涙なし、やう〳〵顔をあげ、

元忠　かほどまでに元忠を思召し下さりまするは、冥加に餘る御仁愛、有難涙がこぼれまする。三方ヶ原の戰ひに重傷を負ひし其以後は、五體不具にて上樣の御奉公も勤まらぬを朝な夕な悔み居りましたに、多く御家來ある中に當伏見城の大將を、仰せ附られ下さりまするは、元忠身に取り此上はござりませぬ。

家康　忠臣無二の彦右衞門、左樣申すと、家康胸を痛むるわい。

死忠　勿體なき其御詞、年取りまするとつい愚癡になりましてなりませぬ、定めて御氣鬱にござりましたらう、御氣鬱晴らしに今一獻召上つて元忠へ、お流れ頂戴いたしたうござりまする

家康　年を取つても、勇氣は少しも替らぬな。（ト言ひながら家康酒を呑み、元忠にさしながら、家康元忠の顔を見て、）然し大分皺が出來たな。

元忠　君にも大分御面へ、浪が寄せましたな。額の浪は御長壽のしるしでござりまする。

ト兩人氣味合よろしく、

家康　返杯いたせ。

元忠　はッ。（ト家康へ盃を差す、家康酒を呑干す。）最早亥の刻にござりませう、明朝は辰の刻の御出發、存じの外長座仕りました。御用なくば退出仕りまする。

家康　最早參るか。

元忠　是れにて御免を蒙りまする。

家康　左樣いたせ。

元忠　はッ。（ト辭儀をなし、立たうとして痺の切れし思入、家康是れを見て、）

家康　如何せしぞ。

元忠　何にもいたしませぬ。（トやうやく立上り、行かうとする。是れを見て家康ほろりとして、）

家康　これや元忠。

元忠　はッ。（トべつたり下に居る。）

家康　明朝未明に、（ト言ふを木の頭、）出仕いたせ。

元忠　はッ。（ト變て氣味合の思入、時計の音にてよろしく、）

ひやうし　幕

二幕目

大阪細川屋敷の場

〔役名〕――細川の奥方敷波、老臣小笠原正齋、家老河喜多石見、上使岩淵玄蕃、奥用人堅非金太夫、同二男時一郎。細川の老女霜野、同妹姫小浪、奥女中岸舟、同[illegible]、腰元二人〕

〔細川家奥殿の場〕――本舞臺一面の平舞臺、上下三方とも、銀地へ花を描きし御簾襖、下手の口と、花道の揚幕の所杉戸の出這入り、日覆より銀地の大欄間をおろし、舞臺花道とも高麗縁の薄縁を敷詰め、總て大阪城外細川奥殿の體。爰に奥女中二人腰元二人居並び、琴唄の合方にて幕明く。

○　何と皆さん、お上でも此程よりの御心配は、お大抵のことぢやござりませぬ。

△　ほんに左樣でござりまする、お客分にて御當家へ、いつぞやよりお越しになりし、武田家の御後室樣と、若殿樣の御内室梅園樣のお立退きは、如何なる事でござりませう。

□　それは大方此程より御城内から再度の御上使、奥樣始めお子樣方に入城せよとの御催促ゆゑ、昨夜俄にお隣り邸へ、お立退きになつたのでござりませう。

◎　若殿樣の奥樣には、お隣り邸の宇喜多樣の御臺樣とは御姉妹、其御縁ゆゑ御老年の後室宮川樣を

お伴ひにて、宇喜多家へお立退きと見えまする。

○　何れ近日奥様にも若様や姫様をお連れ遊ばし、御本國の田邊へお立退きでござりませうが、それに附ては、私共も、穩かならぬ此時節、うか／＼しては居られませぬ。

△　いざと申さば皆一統、お供を願つて御先途を、見屆けねばなりませぬ。

□　只今の内から衣類調度を取纏め、立退きませねばなりますまい。

◎　斯うした事と存じたら、晴の小袖を宿許から、取寄せねばよかつたに。

○　かやうな節には部屋方の、身輕な者が結句仕合せ。

△　噂お上でもそれこれと、

□　御心配な事で、

四人　ござりませうわいなあ。

ト合方きつぱりとなり、上手より霜野裲裝、老女のこしらへにて出來り、

霜野　又しても皆さんは、寄るとさはるとお上のお噂、ちとお嗜みなされませ。

○　お上を案じたお噂も、

△　御老女さまのお目に入り、

□　恐れ入りまして、

四人　ござりまする。(ト霜野又よろしく住ひ、)

霜野　お客分の御後室様や若殿様の奥様を、昨夜お立退かせ申せしも、御城内への聞えを憚り、御内分の事なれば、假にも左様なお噂を、口外してはなりませぬ。

○　以後はきつと愼みますれば、

△　此場の事はこれ限りに、

冂　お聞き流しに、

四人　願ひまする、

霜野　左はいへ日延も今日限り、御城内より御上使が程なうお入りに相違はない、此末如何に成行くか、案じられた事ではある。

○　左様なれば、

四人　又御上使が。(ト大きく言ふを、)

霜野　あゝこれ、其高聲がよろしくない。

○　心得まして、

四人　ござりまする。（ト此時揚幕の杉戸を明け、白髪鬘の奥用人袴裝にて出來り、下に居て、）
用人　はッ、御城内より御上使として、岩淵様がお入りになり、お奥へお通りにござりまする。
霜野　いや、奥様には御病氣と此程より御申しあれば、御對客の間へお通し申し、小笠原殿か河喜多殿へ、なぜお取次をなされませぬ。
用人　拙者も左樣申しましたが、今日こそは奥へ通り、是非奥様へ御直談がなされたいとの上使の權柄、つか／＼お通りにござりまする。
霜野　御城内へは御病氣とお屆けありし奥様ゆゑ、假令御上使此處へお通りあるとも奥様には、お逢ひのあらう筈はなし、これへお越しに相成らば、其斷りを申すのみ、小笠原殿か河喜多殿へ此由お知らせ下さりませ。
用人　委細承知仕つる。（ト下手の杉戸の内へはひる。）
霜野　おろそかならぬ御上使樣、女子ばかりの此お奥へ、押してお通りなさるゝとは、でも無作法な事ではある。
○　私共は此由を、
△　お奥へお知らせ、

四人　申しませう。

霜野　皆さんには、御大儀ながら。

○　畏りまして、

四人　ござりまする。

ト四人は上手の襖の入へはひる。跡誂への鳴物になり、花道より岩淵玄蕃、好みの鬘大小にて出來り、花道にて霜野を見て、

玄蕃　日延の豫猶も今日限り、秀頼公より上使として岩淵玄蕃罷り越した、して出迎はれしお手前はな。

霜野　不束ながら奥向きを、勤め居ります老女霜野、お見知り置かれ下さりませう。

玄蕃　はて、年若な身を以て、老女に惜しき其容貌。いやさ、よくぞ出迎ひいたせしぞ。

霜野　何は格別、御上使樣には、是れへお通り遊ばしませ。

玄蕃　役目の儀なれば、罷り通る。（ト舞臺上手へ來り、よろしく住ふ。）

霜野　して御上使の趣きは、如何なる次第にござりまするや、仰せ聞け下さりませう。

玄蕃　いや今日は奥方に、直き／＼逢うて我が君より、上使の次第を述べし上、否やの返事承はり、埒を明けんと存ずる某、病氣とあらば病床へ、いざ案內いたされよ。

霜野　いえ仰せではござりますれど、おろそかならぬ御上使様へ、それでは餘り失禮ゆゑ、取亂したる病床へ御案内はいたされませぬ。

女番　案内ならずば此席へ、介抱いたして奥方を、是非に誘ひ參らせられよ。

霜野　いえ昨今は重態にて枕も上らぬ程ゆゑに、假令介抱いたしましても、御上使様へ御面談は、成りかねまするでござりませう。

女番　すりや重態ゆゑ奥方に、面談なす事ならぬとな。

霜野　それゆゑ何卒私へ、仰せ聞けられ下さりませう。

女番　あいや當家の奥方は、豫て利發の聞えあれば、面談なさんと存ぜしが、逢へぬとあれば是非なき事、奥を預る老女たりとも、女儀は相手に相成らぬ。然らば老臣小笠原に、面會なして談じ申さん。

霜野　それぞ勿論御順道、女子ばかりの奥向へ押してお通り遊ばすは、いえ、御上使お入りは恐れあり、これにて御免を蒙りまする。

女番　敬して人を遠ざくると、はて、愛想なき事ではあるわえ。

ト立たうとする。此時下手の杉戸を明け、小笠原正齋、好みの鬘上下裝一本差しにて出來り、

正齋　あいや、お立ちに及ばぬ、御上使の趣き、それにて仰せ聞けられませう。（ト下手に住ひ、平伏する。）

玄蕃　小笠原正齋殿でありしよな。

正齋　御上使のお入りと承はり、お次に控へ居つてござる。

霜野　正齋樣のお出での上は、御遠慮いたすでござりませう。

正齋　如何にも退座いたされよ。

霜野　はッ。（ト辭儀をなして上手へはひる。）

玄蕃　此程より再度の上使、餘り埒が明かざるゆゑ、病氣とあらば奥向にて、直談なさんと存ぜしも、重態なりとの老女の斷り、然らば御身が主人に代り、今日こそは屹度した返答をいたす所存か。

正齋　その御返答延引せしも、只今霜野が申せし如く、此程よりして奥方には、更に人事も覺えぬ程重態にござりますれば、希くば關東へ出馬いたせし主人より、否やの返書到來まで、御返答の儀御猶豫あるやう、願ひ度う存じまする。

玄蕃　いや其猶豫罷りならぬ。我が君よりの上意。

正齋　はゝはッ。（ト平伏なす。誂への合方となり、）

玄蕃　太閤殿下御他界の後秀頼公御幼少たるに依つて、徳川内府には御遺言に隨ひ、前田、毛利、宇喜

多、上杉の四家と共に、天下の政事相談あつて取行はるべき誓詞の表、然るに内府は誓ひに背き萬事自儘の取捌き、既に此度津會追討の出陣甚だ以て其意を得ず、依て徳川は不義不忠、條々明白に御糺しあつて御征討にも相成る台慮、されば太閤殿下の御舊恩を蒙つたる忠臣無二の諸大名、秀頼公へ對し參らせ二心なき證據の爲、當大阪に止め置く妻子急ぎ入城致せとある上意、然るに當家の奥方は再度の上使を受けながら、病氣と言ひたて今日まで、入城なきは不都合至極、まこと病氣とあるなれば、乘物にて入場致せ。それを否むと是あれば、即時討手を差向けて、攻滅せと嚴しき御沙汰。上使の趣き斯の通り、臍を固めて返答しやれ。

トきつと言ふ、正齋思入あつて、

正齋　御尤なるお疑ひ、病氣に依て今日まで延引いたせば斯くまでに、御不審の段恐れ入れど、只今も申せし如く、更に人事も覺えぬほど重態にござりますれば、快氣を待つて拙者より、篤と其理を申し聞け御返答を仕つれば、今兩三日の御猶豫を、偏に願ひ奉つる。

玄蕃　いや其猶豫もべん／＼と、今日までも延引いたせば、最早一日一刻たりとも、猶豫なす事罷りならぬ。（トきつと言ふ、正齋思入あつて、）

正齋　此上は是非なき事、人事も覺えぬ奥方を、臣下の身として理不盡に御入城いたさせては、東の果

へ御出馬の主人へ對して相濟まねば、秀頼公への潔白に、切腹なすの外はなし。

玄蕃　なに、切腹をいたすとな。

正齋　主家を思ふ我々が忠義の道の立たずして、空しく死する御禮に、末期の手並を御覽に入れゝば、お覺悟あつて然るべし。

玄蕃　やあ。（トぎつくりこなし。）

正齋　いでや此座を去らずして、末期の手の内御覽に入れん。

ト正齋刀の柄に手を掛けきつとなる、これにて玄蕃びつくりして押止め、

玄蕃　いや其心底相分つた、短慮の切腹先づ待つた。

正齋　すりや、御猶豫御承知ありしか。

玄蕃　僞り多き世の中に、死するばかりは誠の決心、左程猶豫を願ふなら、今一刻は手前が情、申の下刻の參るまで、猶豫いたして遣はす間、其内篤と奥方を申し諭して入城を、いたさすやうに計ひ召され。

正齋　すりや一刻の御猶豫を、お取計らひ下さるとな。

玄蕃　御許しはなけれども、時刻延すは手前が情、再び是れへ參るまでに、有無の返答いたされよ。

正齋　左樣ござらば御上使には、一先御歸城なさるゝとな。

玄蕃　一旦歸るも討手の用意、いやさ、打切る時刻を合圖となし、有無の返答いたしてよからう。

正齋　委細承知いたしてござる。

玄蕃　きつと詞を番ひ申した。（ト立上る、正齋下手へ向ひ、）

正齋　それ、御上使のお立ちなるぞ。（ト呼ぶ、下手の杉戸を明け以前の奥用人出て來り、）

用人　いざ、お見送りいたしませう。

玄蕃　見送り大儀。

ト唄になり、玄蕃薄氣味惡きこなしにて、用人附いて花道へはひる。正齋跡を見送りぢつと思入。此時下手襖を明け、河喜多石見、上下一本差しにて出て、

石見　委細はお次で承はりしが、臆病武士の岩淵玄蕃、猶豫をなせしは笑止千萬。

正齋　然し彼れめの樣子では、所詮入城なすまじと、此度は軍勢引き具して、討手に參るに相違なし。

石見　こりや今の間に奥樣へ、お立退きをお勸め申し、我々跡を取固め、防戰なすの外はござらぬ。

正齋　さはいへ、時刻を今一時、猶豫いたさせ夜に入らねば、お忍びあるも都合惡し。

石見　何さま申の下刻では、暮るゝ間早き秋の日も、未だ黄昏ならざれば、

正齋　又も一時期を延し、承引なさぬ其時は、
石見　彼れが荒膽取りひしがん。
正齋　先づそれまでは何事も、
石見　奥へ參つて御密談。
正齋　心忙しき、（ト立上るを道具替りの知らせ、）時節でござる。
ト兩人よろしく思入、合方にて道具廻る。

（奥方居間の場）――本舞臺下手一間程を除け、一面に置舞臺程の一段高き座敷、正面上の方九尺の床の間、是れへ細川父子甲冑の畫像の軸を掛け、此前へ黑塗蒔繪の膳を二膳供へあり、續いて地袋違ひ棚、これへ好みの手道具を飾り、下の方銀地へ墨繪の襖、ずつと上の方繪心に塗骨の障子を建切り此外は緣側の心にて出はひりあり、平舞臺下の方同じく畫心に杉戸の出這入り、舞臺一面高麗緣の薄緣を敷詰め、爰に以前の老女霜野、奥女中腰元住ひ、合方にて道具留る。

霜野　最早御夕餉の支度もあれば、殿樣御親子へお供へ申せし、陰の御膳を下げられよ。
女形四人　はあゝ。（ト件の膳を持つて四人は下手へはひる、時これより床の淨瑠璃になり、）

〽日も西へ傾く申の上刻は、御運の末と打案じ、告る大事に重役の、二人は奥へ入り來り
隔ての席にそれと見て、
　　ト下手の杉戸を明け、以前の正齋、石見出來り、下手平舞臺の所にて霜野を見て、
正齋　それにござるは霜野どの、
石見　よい所にて逢ひ申した。
霜野　御兩所さまには御上使へ、御面談のお心遣ひ、御苦勞至極に存じまする。
正齋　其儀に附いて奧樣へ、お目通りいたしたく、
石見　兩人これへ參りし次第、
正齋　何卒お取次、
兩人　下されい。
霜野　委細承知いたしました。
〽廊下傳ひに御座の間へ、行かんとなせば聲あつて、（ト上手障子の内にて、）
敷波　いや、只今それへ參るぞよ。
〽障子引明け靜々と、立出でたまふ奧方が、物思ひ氣に座したまひ。

ト上手の障子を明け敷波、奥方好みのこしらへにて出てよろしく住ひ、

委細は霜野より聞きつるが、兩人には御上使に、面談なしての氣扱ひ、心勞の程大儀なりしぞ。

石見　恐れ入りまして、

正齋　はゝはツ、身に餘りたる其お詞、

兩人　ござりまする。

敷波　幸ひ逢ひたう思ひし折柄、苦しうない、近う〱。

正齋　御懇の御意にはござりますれど、

石見　憚り多うござりますれば。

敷波　いや、常とは違ふ家の大事、其斟酌には及ばぬぞ。

霜野　お許しなれば御兩所さま、是れへお進み遊ばしませ。

正齋　然らば御免、

兩人　下さりませう。

〽堅き掟も御許しに、禮儀正しく座に着けば、

ト兩人二重へ上り、よろしく住ふ、誂への合方になり。

數波　して今日も御上使へ日延の猶豫を願ひしが、定めて再度の事ゆゑに、嚴しき儀をも申せしならん。

正齋　仰せの如く今日は、一刻たりとも猶豫ならず、病氣とあらば乘物にて城内へ差送るか、これを否むは野心ある御當家なれば即刻に、討手を差向け攻立んと詞詰めなる上使の權威、弱身を見せなば御當家の御恥辱なりと存ぜしゆゑ、御疑念晴らす潔白に、其座を去らず兩人共、切腹なして御上使へ申譯の仕らん、然し我々主人より預りまつる奥方を、御不在中に上命待たず御城内へお送り申すは、忠義の道に缺けたる大罪、末期の際に御上使へ御禮申して相果てると、返す刀で刀に仕止めん氣振を見せ掛けしに、身慄ひなして死を止め、申の下刻を打切るまでと、時刻を延し歸りしは、再びこれへ參るまで、御重態なる奥方を諭し、是非共入城いたすやうにと申し殘して、立歸りましてござります。

數波　すりやそち達の氣振に恐れ、暫時の猶豫をいたせしとな。

石見　我々愚慮を回らしまするに、暫時の猶豫に期を延ばし一旦歸城をいたせしは、軍勢引き具し奥様を、否と言はさぬ權柄にて、迎ひに參るに相違なし、只今の内御用意こそ、御肝要かと存じまする。

霜野　いざ此上は嫁君様や御後室様御同様、御内縁ある宇喜多家へ、只今の内お遁れ遊ばし、夜半に紛

れて御本國へ、お立退きこそ肝要と、憚りながら存じまする。

〽騷立つ浪の難波潟、善惡ともに奧方は、心動かぬ御覺悟。（トよろしく思入あつて、）

敷波　いや、そち達は夜に紛れ立退きくりやれば、わらはも安堵、斯くあるべしと思ひしゆゑ、舅君のお妹御御後室の宮河樣と、嫁梅園を宇喜多家へ昨夜落しておいたれば、是れにて先は一安堵。二人の子供を刺殺し、自殺なすより外はない。

正齋　すりや、奧樣には御自殺の、

石見　早やお覺悟に、

兩人　ござりまするか。

〽見上ぐる二人をぢつと見て、（ト合方きつぱりとなり、）

敷波　忠義を守るそち達には、嘸本意なくも思はんが、そも我が夫には內府公へ無二の御味方なしたまひ、東へ御出馬ありし折、目出度う凱歌を謳ふまでそちに邸を預けしと、仰せ置かれし御一言、その命を捨て此邸を、立退くことのなるべきや、病氣と申し期を延し、野心ありとの疑ひが掛りし節は覺悟なし、二人の子供を刺殺し自殺なさんと豫てより、所存は決し居つたるぞ。

〽詞短く理を說きし、仰せに猶も正齋は、感淚流し打ち悅び、（トよろしくこなしあつて、）

正齋　はゝッ、恐れ入つたる御決心、其御覺悟にござりますれば、拙者とても我が君の御出馬の節は跡
跡を、賴むと仰せの御一言、いかで忘却なすべきや。

石見　約せし時刻來りなば、兵を引き具し城内より、討手の參るはこれ必定、刀の目釘續かんだけ、防
禦いたすでござりませう。

敷波　いや其防戰よろしからず、討手の兵が參らうとも、刃向ひ立ては相成らぬ。

正齋　すりや、をめ／＼と自殺なし、

石見　最期を遂げねば、

兩人　なりませぬか。

敷波　さ、此程よりも申す如く、大阪表に殘り居る諸侯の妻子を城内へ、人質になさんとあるは、是れ
皆石田三成が内府公の權威を嫉み、よしなき謀叛の謀略にて、秀賴公には何事も石田任せの御幼
年、假令賊徒の命なりとも、それに背いて城内の討手に刃を交へなば、秀賴公に敵對せし、謀叛
と呼ばれ暫しでも汚名を取るは殘念ゆゑ、唯主命を捨てずして、わらはは節義そち達は、忠義の
爲に一命を捨てしと呼ばれ相果なば、武門の道に叶ふであらう。

〽仰せに實にもと打ちうなづき、

正齋　はゝッ誠や男子も及ばざる、其御異見に拙者めも、天晴感心仕つる。斯かる凶變ある端か、先頃御主君御出馬の其節、斯くいふ正齋に仰せ置かれしお詞にも、若し不在中に變あらば、我が妻子等を補翼なし、世人の嘲り受けざるやう、いたしくれとのお頼みは、今此時にござりまする。

石見　然らば御門を堅く閉ぢ、賊兵來るを相待ちて、殉死いたすでござりませう。

霜野　〽流石勇士の潔く、死を輕んずる有樣に、老女は涙止め兼ね、奥樣諸共御兩所にも、其お覺悟と聞く上は、私風情が御異見を申し上げるも恐れながら、我が君さまのお詞をお守り遊ばすは、是非ない事ではござりますれど、せめて若君姫樣はまだ御幼稚の御身なれば、只今の内何れへかお落し遊ばしお命を、全う遊ばすお計らひが、お家のお爲と存じまする。

敷波　〽恐る〱諫むれば、奥方頭を打振りて、いや、それとてもよしなき事、生先き長き子供等を、殺さにやならぬ其譯も、わらはの筋目が惡しきゆゑ、斯くなり果つるも皆因緣、なまじ未練に子供等を殘し置いては我が夫の、却つてお恥になるわいなう。

霜野　惡しき筋目と仰せあれど、系圖正しき奥樣のおまうけ遊ばすお子樣方、それをお助けなされては

我が君樣のお恥とは、如何なる事でござりまする。

數波　正齋石見の兩人には其意味合を察し居らうが、そちは不審に思ふも尤も、情を知らぬ母なりと疑念を晴らす其爲に、語り聞すであらうぞや。（ト合方きつぱりとなり、）子として父の非を擧ぐるは心苦しき事ながら、父君明智光秀樣には忍び難き事ありて、御叛逆を企てられ、勿體なくも御主君たる信長公を弑したまふ、是れ御無念の餘りよりなせし事とは言ひながら、天に背けば今の世まで主を害せし謀叛人と、惡名殘したまふこと末代までの御恥辱、わらはもそれのみ傷しく常に忘れぬ此年月、旣に先年我が君がわらはを御離別ありし節、丹後の在所に世を忍びてありけれど、逆臣光秀の娘なりとて下民等に嘲けられたる恥かしさ、自殺せんとは思ひしが、まだ其節は長男が幼年ゆゑに成長させ、君にお返し申せし上、如何にもならんと存命へしが、幾程もなく召返され再び奥と呼ばれしかど、又其後に桃山の大政所へ列侯の夫人を召され拜謁の折を得たれど恥入りて、出仕を辭して控へしぞや。斯かる筋目を引き居れば、なまじ未練に殘し置き、夫の恥辱となる時は、操の道が立たざれば、不便ながらも刺殺し、冥府へ連れねばならぬのぢや。

〽遁れがたなき宿業と、語りたまへばお道理と、返す詞も泣くばかり、正齋石見も歎息なし、

ト雙方こなしあつて、

正齋　拙者も左樣と存ぜしゆゑ、未だ十歲御未滿のお姬樣や若樣を、共に御最期させまするは、御傷しやと存じながら、お止め申すに申されず。

石見　正しく石田が奸計に陷る事とて無念にも、手出しいたさず殉死なす武士の不本意、恐れながら御賢察なし下さりませう。

敷波　おゝ其無念尤もなれど、それも主君の爲なりと、手出しいたさず最期せよ。

正齋　與一郞樣小浪樣、御發明には居らせらるれど、何を申すも御幼年、よう御覺悟遊ばすやう、仰せ聞けられ然るべし。

敷波　如何にも申し聞する間、次へ參つて兩人を、是れへ寄越してくりやいなう。

正齋　委細承知仕つりまする。

石見　然らば拙者もお次にて、最期の用意仕つらん。

敷波　心置きなく、支度いたせ。

正齋　暫時御免を、

兩人　蒙りまする。

〽涙拂うて兩人は、次の一間へ立つて行く。(ト兩人後の襖の內へはひる。)

〽跡に泣き居るかしづきの、老女の心勵まして、（ト敷波思ひ入あつて、）

敷波　日頃の忠義見拔きしゆゑ、霜野そちには賴みあり、何と聞いてはたもらぬか。

〽仰せに嬉しく顏を上げ、

霜野　はい、何なりと其仰せ、決して背きはいたしませねば、仰せ聞けられ下さりませう。

敷波　今聞く通り老後の二人も殉死と覺悟をなし、わらはも子供を刺殺し自殺いたせば今日の、次第を君に告ぐるものそなたならでは外になし、討手來ると聞く時は、此邸内へ放火なし、煙の中に自害なし我が亡骸や子供等の死後の恥辱を押し隱せば、そなたは邸を落延びて姿を窶し東へ下り、最期の次第を我が夫に、具に傳へてくりやいなう。

霜野　數なりませぬ私をお見立て下され其大役、仰せ附けられ下さりまするは、此身の冥加にござりますれど、世に便りなき私が御恩を蒙るあなた樣や、お慕ひ下さる若樣やお姬樣のお最期を、跡に見捨てゝ落ちられませうか、東はおろか一足も、歩む力はござりませぬ。

〽跡言ひさして泣き沈めば、奧方わざと聲勵まし、

敷波　やあそなたも武士の娘ならずや、左樣な甲斐なき心にて、武家の勤めがならうと思ふか。

霜野　はい。

敷波　忠義の道を思ひなば、我が言附をうけがひくりやれ、死するばかりが忠義でないぞ。

霜野　はい。

敷波　是非に役目を仕果せくりやれ。

霜野　はい。

〽はいとはいへど恩愛に、張りも力も拔け果てし、樣子不便と打ち見やる、折から次の一間より、まだ幼き兄妹が、何心なく立出て、行儀正しく手をつかへ、

ト後の襖を明け、若君與一郎袴裝一本ざしにて出る、跡より同じく妹小浪、好みの鬘振袖裝にて出て、敷波の前へよろしく住ひ。

與一　二人をお召しと正齋より、承はつてござりまするが、

小浪　何御用で、

兩人　ござりまする。

〽今死ぬる身と白絲の、躾がらとて折目高、母は歎きを押隱し。（ト宜しく思入あつて）

敷波　そち達二人を呼びましたは、申し聞かする事こそあり、もそつとこちへ進みませうぞ。

與一
小浪　はあゝ。（ト前へ進む、誂への合方になり）

敷波　幼なうてもそち達は、武門の家に生れしゆゑ、此理辨へ諾かねばならぬが、凡そ四民の其内でも士は其上に立つゆゑに男女老幼の分ちなく、節に臨んでは潔く死するを以て本意とせり、されば只今此母は節に臨んで潔う自害いたして相果つれば、そち達二人も刺殺し、共に冥土へ連れ行きたし、それを得心させん爲二人を是れへ呼びしぞや。

〽無常の思ひ言諭せば、流石幼稚の悟りかね、

與一　武士の家に生れしからは、戰場へ出て手柄して死ぬるは厭ひござりませぬが、何の手柄もござりませいで、死ぬのは望みにござりませぬ。

小浪　母上樣には何ゆゑに、

與一　左樣な事を、

小浪與一　おつしやりまする。

敷波　さ、死なで叶はぬ其譯は、そち達二人の外祖父たる日向守光秀公には、よしなき御謀叛思ひ立たれ、勿體なくも御主君たる、信長公を弑したる天罰子孫に報い來て、母は勿論そち達も、未だ十歳未滿にて死に迫るのも是れ宿業、一命捨てねば城内の命に隨ひ人質に、行かねばならぬ母子三人、さすれば節義の道立たず、忠孝二道に缺けるゆゑ、是非なく最期を遂げるのぢや。

〽祖父の報いの廻り來て、死なで叶はぬ命ぞと、言ひ聞かすれば潔く。

與一　左樣な譯でござりますれば、戰場へ出て死にませいでも、父上樣に不孝者とお叱りを受けませぬか。

敷波　何のお叱りを受けようぞ、却つてお褒めにあづかるわいなう。

小浪　それでは早く母上樣、お殺しなされて下さりませ。

敷波　おゝよう合點が行きました。心靜かに支度せん。霜はあれなる文臺へ硯を添へて是れへ持ちや。

霜野　はあい。

敷波　せめて最期の一炷に辭世の一首、さうぢや〳〵。

〽暮近き秋の日脚の短きは、わが身の上と奥方が、心忙しくかき立てゝ、傍に直す文臺へ取出す香の一炷も、煙りと消える果敢なさや、千代と名に呼ぶ白菊の、散りて涙の露時雨、濕り勝ちなるする墨も、空に知られて書殘す、三十一文字ぞ哀れなる。

ト此内霜野後の違ひ棚にある文臺へ硯箱を載せ、持つて出で敷波の前へ直す、敷波厨子の内より香爐香包を取出し、香を炷くことよろしくあつて、短冊箱より短册を取出し、辭世の一首を書終る、與一郎小浪此體を見て、

輿一　母上樣にはお短册へ、

小浪　何をお認めで、

兩人　ござりまする。

敷波　『先立つと同じ限りの命にも、まさりて惜しき契りとぞ知れ。』

霜野　その御辭世をお形見に、お殘し遊ばすお覺悟なるか。

敷波　煙りの中に死する身の辭世はいらぬ事ながら、此短册はわが夫へ、後の形見に差上げたさ。霜野そなたに賴みしぞ。

霜野　すりや私は皆さまの、冥土のお供は叶ひませぬか。

敷波　殉死の願ひは叶はぬ事、きつと役目を申し附くるぞ。

霜野　すりや、何うあつてもお願ひは。

敷波　此短册を持參なし、次へ參つて支度せよ。

霜野　せめて是れにて、御先途を。

敷波　やあ、主の詞を用ゐ居らぬか。（トきつと言ふ。）

霜野　はあゝい。

敷波 〽是非なく次へ立つて行く。（ト霜野件の短冊を持ち愁ひのこなしにて奥へはひる。）
最早時刻に程近し、いざや最期の支度をなさん。

〽床に掛けたる我が夫の、畫像もこれが名殘りぞと、心靜に卷納め、用意の懷劍取出せば、

ト上手床の間の畫像の軸を二幅とも取つて卷納め、手箱の内より守刀を出しこちらへ來る。

與一 母上、どうぞ私は、お跡でお殺し下さりませ。

敷波 そなたは跡で死にたいとは、最期に心おくれしか。

與一 いえ左樣ではござりませぬが、妹が跡で死にましたら、歎くことでござりませうかと、跡で死にたうござりまする。

敷波 おゝよう心が附きました。望みに任せ小浪から、先きへ最期を遂げさせませう。

ト此内始終小浪は手遊びの人形を抱いて居る。

小浪 此人形も母上樣、一緒にお殺し下さりませ。

敷波 なに、人形も殺してくれとは。

小浪 冥土とやらへ人形も、連れて行きたうござりまする。

〽頑是ない程一倍に、不便の涙おしこらへ、

敷波　おゝ、人形も殺してやる。そんなら小浪、覺悟しや。

小浪　早うお殺し下さりませ。

〽死ぬを悦び膝許へ、差寄る娘を一突きに、突かんとなせど恩愛の、絆に引かれ突兼ねし、
たゆたふ未練恥かしと、圍ふ屛風の内もれて、魂消る聲の聞ゆれど、兄は覺悟の悪びれず、

ト此内敷波よろしくこなしあつて、トゞ有合ふ屛風を建廻し、此蔭にて小浪の聲聞える、與一郎屛風の側へ行き、

與一　母上、どうぞ私も、お早く御介錯下さりませ。

〽せき立つ様子母は猶、心弱くて叶はじと、（ト屛風の蔭より敷浪出で、）

敷波　おゝ天晴なる其覺悟、妹と共に最期を遂げよ。

〽立ち入る陰も恐しき、夢とやいはん蝶番ひ、果敢なく息は絶えにけり。

ト此内敷浪與一郎を屛風の蔭へ入れ、内にてわつと魂消る聲聞える。

〽始終の様子、次の間に、窺ふ雨にも感涙を止め兼ねて進み出で、

ト奥より以前の正齋石見出で、下手に平伏して、

正齋　はゝはつ、御子様方のお勇ましき、御最期の程お次にて、

石見　うかゞひまして愚臣等も、感服いたして、

兩人　ございまする。

〽臣下の悔み奥方も、涙隱して靜々と、（と屏風の内より敷波出て、）

敷波　すりや兩人にも聞いて居りしか。此期に及び何一つ心殘りはあらざれど、東の使ひを申し附けし霜野に恙ないやうに、只今の内落してくりやれ。

正齋　その霜野儀は我々に、東の使を相頼み、悲歎に迫りお次にて、自殺いたしてござりますれば、只今これなる河喜多へ、死を延はりて使ひの役目、申し附けてござりまする。

敷波　すりや霜野には自殺せしとな、惜しき忠義のものと思ひしゆゑ、死を助けんといたせしも相叶てたらば是非なきこと、然らば石見頼みしぞ。

石見　正齋殿の異見につき、惜しからねども死を止まり、東へ立ち越え我が君へ、送りたまひしお形見はきつとお屆け申しまする。

〽折から告ぐる申の刻。（ト時計の音になり、）

正齋　やゝ、あのお時計は、最早刻限。

敷波　討手の來らぬ其うちに、いでやわらはも最期を遂げん。

石見　左樣ならば拙者めは、只今のうち支度整へ。
正齋　片時も早く、落延び召され。
數馬　正齋、わらはの介錯せよ。
正齋　心得ましては候へども、假令お頼みなればとて、お側へ寄つて御介錯は死後の覺えも憚りあり。
石見　とあつて、お側へ立寄らねば、其御介錯はなり難し。
數馬　左程掟を守るとあらば、介錯には及ばぬぞ。
〽今は斯うよと奥方が、覺悟極むる表の方、俄に門外さわがしく、屋敷を取卷く其樣子、
扨こそ討手と心附き、
石見　中の下刻を合圖となし、俄に門外騷立つは。
數馬　疾くより討手の上使來り、時刻を待ちしと覺えたり。
正齋　手向ひなきやう石見殿、家中の者へお示し下され。
石見　委細承知仕つる。
〽馳行く向うへ岩淵が、身拵へなし入來り、それと見遣りて大音あげ、
ト石見花道の方へ行く、花道より以前の玄蕃陣立のこしらへになり出來り、花道にて舞臺を見てきつ

となり、

玄蕃　やあ上使を欺き今日まで、期を延したる其返報、片ッ端から首討取り、秀頼公へ土産になす、汝も冥土の魁せよ。

敷波　自殺の妨げいたすとあれば、是非に及ばぬ切捨てよ。

石見　心得ました。

玄蕃　小癪な事を。

〽許しを受けて勇み立つ、鋭き刃あしらひ兼ね、玄蕃は脆くも死んでけり。

ト此内石見玄蕃舞臺へ來りよろしく立廻り、石見玄蕃を切倒す。

正齋　天晴手の內、見事々々。

石見　拙者はこれより東の旅、

敷波　わらはは直に冥土の旅、

正齋　祝す首途はかねての合圖。

〽用意の彈丸庭先の、樹木の許へ打附くれば、上る焰に黑烟り。

ト此內正齋上手の障子を明け、懷中より彈丸を出して庭へ打附ける。これにて本鐵砲の音して、鉡

臺切穴より一面に煙あがる、敷波此體を見て、

敷波　おゝよくこそいたした、いで〳〵最期を。

ヘ屏風の内に男力が、清き自殺を打見やる、其介錯も兎や角と、思案なげしの長刀に、さつと目を附け取直し、

ト此内敷波屏風の蔭へはひる、正齋これにてこなしあつて、トゞ正面の長押に掛けし長刀を取つて下手下に居て、

正齋　憚りながら正齋が、長柄を以て隔て越しに、御介錯の仕らん。

敷波　おゝ、過分なるぞ。（ト辭する。）

正齋　御免。

ヘ手の内さゆる電光の、影は果敢なく消ゆるとも、美名は世々に。

ト此内正齋長刀にて敷波の介錯なする。石見は下手下に居て、合掌して拜む。此模様床の三重どんどんにて、

幕

小山細川陣所の場

三幕目

（役名――細川越中守忠興、家老河喜多石見、稲垣主馬之助、家臣四人、軍兵一人。）

（細川陣所の場）――本舞臺五間通し高足の二重、本庇、本縁附、眞中白洲階子、二重の正面大形白地の襖、上の方鎧櫃鐵砲などを立掛け、軒口に九曜の星の紋附きし白地の幕を張り、平舞臺上下柵矢來、諸所に松の立木、總て細川陣所の體。上手の松ヶ枝に烏大分群り、是れを鎧下の家臣〇△□◎の四人旗竿を持ち立掛り、烏を追つて居る、此見得烏笛在郷唄にて幕明く。

○ ◎ □ △ ○

勝利を祝ふ陣中へ忌はしき烏啼き、扨々氣になる事ではある。
言はるゝ通り四五日以來、此陣中の庭先きへ群れ來る烏が喧しく、啼き立てまするは心得ぬ。
烏は其性怜悧にて、よく吉凶を報ずと申せば、味方凶變ある事を、告げ知らすのにてはあらざるか。
初めの程は旅烏が、參りし事と存ぜしが、日毎に參つて啼き立つるはこりや常事ではござるまい。
われ人共に陣中へ出張いたして居るものは、家を忘れ妻子を忘れ、我が一命は御主君へ捧げしものと覺悟いたせど、斯く烏啼きのよからぬを、聞くに附けても國許に、若し凶變でもなければよいと、案じられるも世の人情。

△ 又御主君には大阪へ、奥方はじめ御子樣を、お殘しあつての御出陣。
□ 味方の英氣を挫かぬやう、お取上げなき御樣子なれど、
◎ 御心中では何程か、御苦慮遊ばし大阪にて、凶變でもなければよいと。
○ お案じあるに、
四人 相違ござらぬ。（ト此時ばた／＼になり、花道より軍兵一人走り出來り）
軍兵 はッ、申し上げます。只今我々陣門の固めをいたし居りし所、町人體の旅人一人陣門へ差掛り、火急の御用で大阪より、罷り下りし者なれば、我が君樣へお目通りをいたさせくれとの押しての願ひ、此儀如何計らひませう。
○ して其者の名前等を、承はつて參りしか。
軍兵 其名前の儀を尋ねし所、御主君樣にお目見得なせば、自然と分かる名前ゆゑ、名乘らぬと申し居ります。
○ 名を名乘らずして通らんとは、何とも以て胡散な奴。
△ 何は格別、これへ通し、我々共が取調べ、
□ 次第によらば御主君へ、言上いたす事もあらん。

◎　如何なる奴か門を入れ、此所へ通すがよい。

軍兵　委細承知いたしまする。（ト引返して花道へはひる。）

○　陣中にては間者などが、名前を僞り入込む事ども、昔も今もまゝある習ひ、何れも御油斷召さるるな。

△　如何にも遠路を抱へたる此長陣の徒然へ、附入る間者の奴ばらが、あらんも知れぬ敵の中。

□　此程よりして烏啼きの心に掛る折柄ゆゑ、味方に凶變出來なす、手段に乘つては恥辱の基。

◎　これへ參らば取糺し、如何なる奴か有體に、其名を名乘らせ調べをなさん。

○　はて、どのやうな奴なるか、

△　早くこれへ、

四人　參ればよいが。

ト爰へ花道より前幕の石見窶れし裝、手甲脚絆草鞋にて大小を絲立に入れしを抱へ、菅笠を持ちて出で來り、花道にて思入あつて舞臺へ來る、四人此體を見てびつくりなし、

○　やゝ貴殿は御家老、

四人　河喜多氏。

石見　各方には陣中のお障りもなく御勇健、先は拙者も祝着に存ずる。

○　如何いたして遙々と、此小山へは參られしか。

△　其處は端近、先づ〳〵あれへ。

□　いざ此山を、我が君へ。

◎　早速言上仕つらん。（此時後にて）

忠興　知らせに及ばぬ、聞いた〳〵。

石見　あのお聲は、

皆々　我が君には。

ト誂への鳴物になり、正面の襖を明け、細川忠興鎧直垂小さ刀にて出る、跡より鎧下の近習一人太刀を持ち、附添ひ出來り、二重の上手へ住ふ。是れにて石見草鞋を脱ぎ縁側へ上り、下手へ住ひ平伏する、跡皆々よろしく居並ぶ、

石見　いつに變らぬ我が君の、麗しき尊顏を拜し、恐悅至極に存じまする。

忠興　そちも堅固で重疊々々。見受けし所姿を窶し忍びの旅中を參りし樣子、定めて火急の用事にて、遙々遠路を來りしならん。他聞を憚る儀ならずば、それにて疾く〳〵申し聞けよ。

ト是れにて石見あたりへ思入あつて、

石見　はッ、見受けますれば此席には、皆御譜代の面々のみ、他聞の憚りござりませねば、今般拙者大阪より、夜を日に繼ぎて參りし次第、言上いたすでござりませう。（ト合方になり）豫て君にも御出馬の節、其兆しこれある儀は御賢察に候はんが、先頃會津御追討として德川御父子東國へ御出馬ありし其後は、石田三成大阪へ入城なして味方を語らひ、幼君の御下知なりと申しこしらへ、大阪へ殘りし諸侯の夫人方は、世界の穩かならぬゆゑ皆城内へ入るやうにと、上使を立てゝ入城させ、人質となす石田の謀略、既に再度の上使を以て、御當家へも催促來り、否むに於ては討手を差向け手籠めになしても連れ行かんと、傍若無人の申し條。

忠興　おゝ、左もあらんと存ぜしゆゑ、出馬の砌り正齋へ、若し跡々にて變あらば、家の恥辱にならざるやう取計らへと申し附け、奧にも内意を申し置き、此地へ出馬いたせしが、して理不盡な申し條に、是非なく入城いたせしか、又は飽くまで期を延ばし石田の命に應ぜざるか、如何返答いたせしぞ。

石見　御出馬の節我が君より、仰せ附りし嚴命あれば、假令再度の催促ありしも、其命には應じ難しと男子も及ばぬお覺悟にて、

忠興　自殺いたして相果てたか。（トきつと言ふ、是れにて石見はツとこなしあつて、）

石見　御賢察の如くに、御自殺を遊ばしましてござりまする。（トほつたりとして差俯向く、忠興思ひ入あつて、）

忠興　おゝ、さうあらう、愛い奴〳〵。（トやはり愁ひのこなしあつて氣を替へ笑ふ、近臣皆々思ひ入あつて、）

○　すりや、奧樣には君命を。

△　お守りあつて城内よりの、

□　無道の招きに應じたまはず、

◎　無慚の御自殺、

四人　遊ばせしとな。

忠興　そも内府公のお供にて、此地へ下向いたすに附き、石田の底意心許なく、大阪表に變あらば家の恥辱にならぬやう、取計らへと申し附けしが、よくぞ一命捨てたるぞ。（ト思ひ入あつて氣を替へ、）して子供等は如何にせしぞ。

石見　其お尋ねに預りて、申し上ぐるも胸迫り、涙のお種と存じますれど、止むべき事にござりませねば言上いたすでござりまする。（ト合方きつぱりとなり、）然も當月十三日、再度の上使に城内より、岩淵七番差向ひ、奧方所勞に候はゞ駕籠を許して連行かんと、退引きさせぬ手詰めの催促、重態な

れば夕刻まで、猶豫を願ふと期を延し、歸せし跡にて奥樣へ斯くと言上いたせし所、早や是れまでとの御覺悟にて、若樣姬樣お二方をお諭しあつて御手に掛けられ、御身も續いて御生害遊ばされんとなす所へ、岩淵立番人來り欺かれたる返報に、御母子の首級を城内へ持ち歸らんとの無法の振舞ひ、餘儀なく拙者彼を仕止め、共に殉死をなすべきを、奥樣よりのお賴みにて、其場の次第を我が君へお知らせ申す役目を蒙り、惜しからぬ命延はり、立退く折に正齋が豫ての合圖空しからず、早やお邸は焔の煙り、則ち君へお形見の辭世のお歌は拙者めが、しかと所持なし是れにあり、それへお納め下さりませう。

ト懷中より前幕の短册を出して忠興に渡す。皆々是れを聞き思入あつて、

○ すりや若樣にも姬樣にも、

△ 無慚の御最期なされしとな。

□ 承はるさへお傷しく、

◎ 感淚袖を浸しますれば、

○ 我が君樣の御愁傷、

△ 左こそとお察し、

四人　申し上げまする。(ト此内忠興件の短冊を開き見て、)

忠興『先だつと同じ限りの命にも、まさりて惜しき契りとぞ知れ。』

石見　斯かる無慚の御最期を、遊ばす際に望みても、其御手蹟に替りなく、

○　いとゞはしき、

四人　御水臺。

忠興　節に迫りて妻子等や惜しき老臣正齋に、斯かる非業の死をさするも、奸智に長けし三成ゆゑ、今にぞ思ひ知らしてくれん。(トきつといふ、此時花道揚幕の内にて、)

大勢　えつさッさく。(ト聲する。皆々是れを聞き、)

石見　やゝ、此陣外を早打の、通るは如何なる知らせなるか。

○　正しく當地の御本陣へ、

△　火急を告ぐるあの早打。

□　片時も早く其次第。

◎　此陣でも知りたいものぢや。

忠興　我が臣稻垣主馬之助を、君の御陣へ遣しあれば、只今次第が分るであらう。

ト此時ばた〳〵になり、花道より主馬之助陣立のこしらへにて出で、直ぐに舞臺へ來り、

主馬　はッ、味方に凶變出來なし、火急の早打御本陣へ到着いたしてござりまする。

忠興　おゝ待ち兼ねしぞ主馬之助、して〳〵如何なる凶變なるか、次第を疾く〳〵申し聞けよ。

主馬　豫ての噂に違ひなく、石田三成謀叛を發し、伏見のお城へ攻めかゝり、多分は鳥居彦右衛門殿討死召されて落城との、火急の知らせにござりまする。

石見　なに、伏見の御城が、

皆々　落城せしとな。（トびつくりなす、忠興思入あつて、）

忠興　此程よりして庭前へ、群れ來る烏に凶變を、告げしは我が上ばかりでなく、天下の亂を企つ三成、返す〴〵も憎き奴めが。

石見　こりや早速に御軍議を、

主馬　なされませずば、

皆々　なりますまい。

忠興　御前へ出仕の、（ト立上るを木の頭、）用意いたせ。（ト此模様勇ましき鳴物にて、）

幕

四幕目

石原峠大谷自殺の場
躑躅ヶ岡湯淺討死の場

返し

石山本陣首實檢の場

（役名――大谷刑部少輔吉隆、徳川内府、湯淺五助隆房、藤堂佐渡守高虎、平岩の家臣蔭山太郎、藤堂仁右衛門高利、其他。）

（石原峠半腹の場）――本舞臺一面の平舞臺、向う山々を見たる遠見、舞臺諸所に杉の立木、上下山の張物にて見切り、總て石原峠半腹の體。爰に○△□◎鎧武者草鞋にて立掛り居る、此見得遠寄せへ螺の音を冠せ幕明く。

○　如何に何れも、我々は今朝主君の仰せを受け、萬一味方破れなば、諸所に別れし伏勢が不意に起つて打つて出で、直に敵を討拂ふ御計策にて兵を分ち、諸所に潜伏なしたれど、大谷勢の勇氣に恐れ、此石原の峠まで、押寄せ來る敵勢なく、負色立ちし關東勢。

△　如何にも貴殿の言はるゝ如く、流石鋭き關東勢も、君の軍慮に惱まされ、鬼と呼ばれし伊井福島浮田の勢に攻め立てられ、七八町も引退き、

□田中兵部は伏勢のあるとも知らず深入りなし、敗を取りしと申す事、それゆゑにこそ我々は今朝よりして敵に出逢はず。

◎今は戰も半なるに、血を見ざるとは殘念至極。御大將の下知を受け疲れし味方と入替り、片時も早く討つて出で、

○各々手柄を仕たうござる。（ト此時花道の揚幕の内にて本鐵砲の音する、皆々聞耳立て）やゝ、麓に聞ゆるあの砲聲、敵勢寄すると覺えたり、各々油斷めさるゝな。

六人　心得申した。

〽勢ひこんで立ち掛る、折からこなたに聲あつて、（ト皆々きつとなる。此時上手揚幕の内にて、

吉隆　やあ〳〵者共、暫く乘輿をこれへ立てよ。

軍兵　はッ。

〽はッと答へて舁き出る、乘輿は四方吹拔きにて、内には副將大谷刑部、淺黄頭巾に面を覆ひ、兩眼見えねど心中に、機密を見拔く大元帥、

ト大谷刑部吉隆好みの拵へにて、四方吹拂ひの駕籠に乘り軍卒二人是れをかつぎ、鎧武者二人にて吉隆の槍、床几を持ち附添ひ出來り、舞臺眞中に留る。○是れを見て、

○　君には何ゆゑ此所へ、御出張遊ばされました。
吉隆　仔細あつて出張なせしが、麓に聞ゆる砲聲は、敵か味方か斥候いたせ。
○　畏まつてござりまする。
　　麓をさして急ぎ行く。（ト○思入あつて花道へはひる。）
吉隆　床几持て、
武一　はゝツ。
〽五體不具なる吉隆は、手槍を杖に床几に掛り、様子如何にと待つ折柄、
ト吉隆駕籠より下り床几に掛る。此時ばた〳〵になり、花道より山田七郎鎧武者草鞋拔身を持ち出來り、花道に留り、
七郎　我君これに御座ありしか。
△　御身は山田七郎殿。
吉隆　七郎か待兼ねた。味方に變事の注進なるか。
七郎　はゝツ。
吉隆　金吾秀秋裏切りなせしか。

七郎　御意の通りにござりまする。
吉隆　戸田平塚は如何せしぞ。
七郎　はッ、豫て君の御計策の如く、萬一秀秋裏切りなさば、味方不意に討つて出で、一時に勝負を決せんと戸田平塚の兩將は、金吾が陣の右手に向ひ、左手は御嫡子吉勝樣湯淺五助を引具して、敵陣目掛け無二無三、討つて出でたる勢ひに、金吾が陣は崩れ立ち、御味方勝利にござります。
吉隆　さもあらん、汝是れより取つて返し、猶も樣子を注進いたせ。
七郎　畏つてござります。
　＼勇み進んで走り行く。（ト七郎逸散に花道へ走りはひる。）
△　金吾秀秋裏切りなす事、君には豫てお察しあつて、御軍慮回らしたまひしか。
□　未前を察せし御胸中。然し味方に裏切りあつては、敵に力を增す道理。
◎　是れより麓へ馳せ附いて、敵に目に物見せてくれん。
　＼壯士はこゝぞと立ち掛るを、
吉隆　やれ待て、必ず早まるな。再度の注進來るまで、出陣すること相成らぬぞ。
△　ではござりますれど、一大事。

吉隆　えゝ、控へいと申すに。

〽制し留むる其所へ、立ち戻つたる池上次郎、
トばた〳〵になり、池上次郎走り出來り、直に舞臺へ來て、

次郎　はツ、池上次郎只今立歸りましてござりまする。

吉隆　戰の樣子如何なるぞ。

〽仰せに池上御前に進み、

次郎　關東勢は秀秋が裏切りなさば大阪方、狼狽なさんと思ひの外、少しも臆する色もなく、討つて出たる勢ひに恐れて敵勢崩れ立ち、右往左往になつたる所、

〽關東方に名を得たる、藤堂高虎津田高勝。

其勢凡そ五千餘り、金吾が勢に加はりて、總勢二萬五千餘騎、

〽取つて返して攻め戰ふ。

味方の勢は五千に足らず、小勢なれど必死を極め、烈しく防戰仕つり、戰ひ半にござりまする。

〽言上なせば大谷打笑み、

吉隆　勇しき味方の有樣、敵に新手の加はらば、我また味方の人數を增さん。こりや池上、諸所に選

△　伏なしたる兵士を、一時に纏め應援いたせ。

□　望む所の其御下知、是れより麓へ馳せ參じ、味方に加はり必死を極め、

◎　手いたく防戰仕らん。

○　然し御陣に兵なくては。

吉隆　駕籠の者のみ殘し置き、少しも早く討つて出でよ。

○　然らば、

皆々　御免。

〽下知に隨ひ壯士等は、勇氣烈しく走り行く。（ト次郎先に、軍卒二人を殘し皆々花道へはひる。）

〽跡に大谷盲目の。人の見る目は闇くとも、腸を練る軍略に未然を悟る吉隆が、心を勞す折こそあれ。

ト此時どんちやん烈しくなり、花道より湯淺五助、好みの拵へにて母衣を背負ひ、拔身にて出來り花道に留り、

五助　我が君には、是れに渡らせたまふや。

吉隆　左いふは湯淺五助ならずや、待兼ねた。

五助　はッ。（トつか〳〵と舞臺へ來る。）

吉隆　戰地を跡に當所まで、立歸りしは戰ひも、是れまでなりと見極めしか。

五助　仰せの如く今一時も保ち難き味方の苦戰、斯くいふ内も氣遣はしゝ。（ト言ひながら軍卒に心附き、）君は某守護いたせば、汝等是れより麓へ下り、敵寄せ來らば注進いたせ。

軍卒二人　はッ。（ト逸散に花道へはひる。）

吉隆　自由叶はぬ吉隆も、思はず前へ進み出で、味方の苦戰さる事ながら、何れの口より破れしぞ。

五助　敵は名に負ふ大軍なれど、臆する色なく味方の勢進退自在に血戰なし、互角の戰ひなしたる所、豫て期したる事ながら味方と思ひし脇坂安治、小川祐忠、栃木元綱、赤座直保裏切りなして五千餘騎、藤川を經て我が陣の左りの方より攻め立てられ、此擧に臨み金吾を始め、藤堂京極の大軍に、味方は殘らず取り圍まれし、早是れまでと存ぜしゆゑ、圍みを切抜け我が君の、御軍慮仰ぎ奉らんと、心ならず後を見せ、立歸つてござりまする。

聞くに吉隆[illegible]なし、

吉隆 卑怯なり中納言、おのれが變心なすのみか、脇坂始め諸侯等を、共に裏切りさするとは、武士の身にあるまじき振舞、憎みても猶餘りあり、そも此度の戰ひは德川内府を恨むにあらず、豐太閤の恩義を重んじ豐臣天下になさんずと誓紙神文致しながら、今德川の威に恐れ、斯かる振舞いたすとは、表裏極まる金吾秀秋、身體自在にあるならば、直に彼れを討たんもの、病の爲に此不覺、思へば無念至極なるぞ。

〽正義を守る吉隆が、無念の涙はら〱〱、五助は猶も怒り立ち、

五助 御尤もなる其御諚、今々思へば我が君が關東下向の其砌り、彼れ三成に出逢はずば、内府に從ひ奥州へ御出發あるべきに、石田が求めに應ぜしゆゑ、斯く艱難に逢ひたまふも、皆秀秋がなせる業、一騎がけにて金吾を討ち、君の御無念晴らさせませう。

〽言ふに吉隆莞爾と笑み、

吉隆 お〻勇ましや湯淺五助、我れは是れにて生害なし、豐太閤へ捧ぐる一命、只殘念なは病の爲、見苦しき我が首級、敵に見するは末世の恥辱、必ず敵に渡さぬやう、何れへなりと埋めくれよ。

五助 仰せまでも候はず、敵何萬騎にて取巻くとも、踏破つて戰地を離れ、御首級守護なし奉つれば、お心易く思召せ。

吉隆　是れにて思ひ置くことなし。

五助　はッ。

ト死する覺悟に槍投げ捨て、立ち上れども身體の自由ならねばたぢろぐを、勞はる五助、今生の、別れを惜しむ一挙、あはれ猿の腸を斷つも斯くやと。

ト吉隆手槍を捨て、思はず床几を放れ立たうとしてひよろ〳〵とする、五助駈け寄り手を取るを道具替りの知らせ、吉隆は直に自殺仕ようといふ思入、五助思はず吉隆の顏を見上げる事よろしく。烈しき遠寄せ、三重にて道具廻る。

（麓濱戰の場）――本舞臺一面の平舞臺、向う山又山を見たる遠見、諸所に樹木の植込み、爰に以前の○△□◎山田七郎等、手負にて金吾の勢と戰ひ居る、此見得遠寄せの鳴物にて道具留る。と皆々烈しき立廻りよろしくあつて、金吾勢下手へ逃げてはひる。

○　心は彌猛に逸れども、名に負ふ敵は大軍なれば、新手を入替へ討ち立てられ、敵は峠へ廻りし樣子、假令身體抜るゝとも、取つて返して我が君を、御守護いたすか肝要なり。

七郎　少しも早く峠へ登り、君の御先途見屆けん。それ、何れも。

△三人　心得申した。

ト上手へ行かうとする、是れと一時に、上手より金吾の兵追はれて出來り、五助馬上にて刀を拔き大勢を追ひながら出來り、ごつちやの立廻りよろしくあつて、△五助を見て、

△　御身は湯淺殿ならずや。

□　心逸れど峠まで、馳せ附かんことなり難く、

◎　君の御先途如何でござる。

五助　氣遣ひあるな、我が君は、某御守護奉つる。

○　すりや、我が君には。（ト言ひ掛けるを、五助冠せて、）

五助　やあ敵は殘らず知る人なり、末世へ美名を殘されよ。

七郎　戰死いたすは豫ての覺悟。

ト又ごつちやの立廻りになり、五助切り拔け逸散に花道へはひる。跡立廻りよろしくあつて此道具廻る。

（躑躅ヶ岡の場）――本舞臺常足の二重六枚飾り、岩組の蹴込み、後岩山に躑躅の枝、亂菊の中遠見、上手二間平舞臺菖蒲の茂り、此間に沼田の敷布を張り、後蘆原、二重の諸所に岩臺、此間より躑躅の

枝亂菊を出し、よき所に振りよき松の立木、總て濃州躑躅ヶ岡沼田の體。床の三重にて道具留る

〽名に高き躑躅ヶ岡は戰場の、街に遠き山間に、花の盛りを餘所になし、遁れて爰へおちこちの、散りて行く身の强將が、姿を覆ふ一むらの、茂みを押分け窺ひ出で、

トよき程に本釣鐘を打込み、薄く水の音になり、下手蘆原を押分け、以前の五助四邊を窺ひ、手疵に苦痛を堪へながら前へ出で、沼にて手を洗ひ岸の岩に腰を掛け、ほつと思ひ入あつて床のめりやすになり、

五助 斯く亂軍の中とはいへど、往來稀な屈竟な沼、君が今際の一言に心を籠めし菖蒲の根方、露顯いたす事はあるまじ。

〽花物言はぬ沼田の方、葉風に心置く露の、目指す彼方へ合掌なし、

ト四邊へ思ひ入あつて下手蘆原の方へ向ひ、

一念彌陀佛卽滅無量罪、南無阿彌陀佛々々。

〽主君を思ふ一心に、義は金鐵の武夫が、催す秋の空癖に胸も塞がるばかりなり。

ト此内合掌なして、よろしく拜をなし、ぢつと思ひ入あつて、

先は是れにて一安堵、早此上は一身の外賴みに思ふ味方なし、はて心涼しき事共なり。

〽覺悟を死出の山道に、主に別れし目なし鳥、寄邊定めぬ憂き思ひ。

ト此内よろしくあつて立上り、上手へ行かうとして手疵に歩み兼ねるこなしにてどうとなり、岩に取附き、

心の弛みか聊かなる手疵に身體この惱み、時刻遲れぬ其内に、取つて歸して討死なさん。

〽流石勇士の事ともせず、弓手の疵所補ひて、苦痛を怺ゆるこなたには、呼吸の息を松の蔭、窺ひ寄つたる一個の勇士、むゝと一突き突掛くれば、五助は不意にどうと座し、

ト此内五助鉢卷を解き、左の腕の疵を結び居る。文句よき程に上手岩組の間より、藤堂仁右衛門、後鉢卷陣立のこしらへにて槍を搔込み窺ひながら出來り、亂鎗の間より五助を目掛け槍を附け居て、トド左りの股を目掛け突込む、是れにて五助どうとなり、直起上つて槍の鹽首を押へ、

やあ、何奴なれば聲をも掛けず、手向ひなせしか無禮者めが。

〽はつたと睨め附け刎ね返すを、こなたもしれ者身構へなし、

ト此内五助太刀を取つて、打つて掛らうとするを、仁右衛門飛び退きつゝとなり、

仁右　我は徳川旗下に屬す、藤堂高虎の身内にて、同苗仁右衛門高利なり。

五助　さては藤堂仁右衛門なりしか、それにしても聲をも掛けず、卑怯未練に突き掛けしは。

仁右　其不審尤もなり。大谷刑部の臣下にて、强勇の聞えある湯淺五助と知つたるゆゑ、手柄になさん

と不意を討つたり。

五助　殊勝なる其詞、手柄にしたくば如何にも討たれん。さ、我が首討つて功名せよ。

〽言ふにこなたは打ち頷き、

太刀投げ捨て〻覺悟の體。（トどつかり下に居る。）

仁右　いや天晴なる其覺悟、さすれば我も御身が大事を、味方の者へ包むべし。

五助　なに、我が大事とは。

仁右　敵將大谷刑部が首級、此地へ隱し置きたるを。

五助　すりや御身が逐一に。（ト床のめりやす、蟲笛になり）

仁右　運も傾く躑躅ヶ岡、降る池中の沼田の內、刑部が首級を隱せしは、天晴武士のなす所、忠義に免じ他言はすまじ。

五助　忝けなき武士の情、戰地を離れし此山中、誰知るまいと思ひの外、義心ある御身に出逢ひ、此場の事を他言せまじと、仰せあるは悅ばし〻、左あらば何卒此事は。

仁右　如何にも他言はいたすまじ、是れに附けても大谷殿は敵ながらも、天晴よき家來を持たれしな。

五助　今際に臨んで情ある敵に出逢ふは什合なり、いざ我が首級をあげられよ。

仁右　いゝや、其死首は望みでない、尋常に立合うて、勝負の上にて受取らん。
五助　はて面白き其詞、然らば是れにて立合ひなし、
仁右　我れは手練の槍先きにて、
五助　又此方は太刀をもて、
仁右　互ひの運は天に任せ、
五助　散らす火花の此出合、
仁右　いでや決戰、
兩人　いたしくれん。

〽雙方見合す勇士と勇士、詰寄り〳〵立合ひしが、さながら猛虎の勢ひなり。

ト此内仁右衞門は槍、五助は太刀にて跛を引きながら立上り、ちよつと立廻つてきつと見得、文句の止り大小入り誂への鳴物になり、仁右衞門は槍の得手、五助は强力のこなしにて兩人好みの立廻り大分あつて、

〽腕も折れよと眞向に、湯淺が打込む太刀先きに、たぢ〳〵〳〵とたぢろげば、五助は是を打ち見遣り、

ト此内仁右衞門五助烈しく立廻りのうち、五助仁右衞門の槍を二つに切落す、是れにてたぢろぐ所を五助仁右衞門を目掛け一太刀切込む、是れにて仁右衞門額を押へどうとなる、五助ほつ〻となし仁右衞門を見遣り、

五助　お〻、向う疵は武士の譽れ。いざ、首討つて手柄にせよ。（トどつかり下に居る。）

仁右　お〻。（ト立上り、太刀を拔いて見構へする。）

〽勇ましかりける。

ト五助我が手に髪を掻上げながら首を延ばす、此見得どんちやん、三重にてよろしく、

　　幕

ト幕引附けると、えいと太刀音して、跡山おろしのつなぎにて引返す。

（徳川本陣の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面八幡宮の神殿を見たる遠見、諸所に誂への樹木澤山、上下植込の張物にて見切り、是れへ葵の紋附の幕を張り、總て關ヶ原八幡營内德川本陣の體、爰に德川の臣一、二、三、四、五、六の六人鎧附太刀にて床几に掛り居る。此見得時の太鼓にて幕明く。

只今打ちしは羊の刻。今朝よりの戰ひに敵は名に負ふ十有餘萬、其大軍に打向ひ、まる一日も掛

らずして賊徒悉く敗北なし。
二 御味方のうち大將分、誰れ一人も討死なく、關東方の勝利となりしは、誠に勇しき事でござる。
三 謀師と呼ばれし大谷刑部、平塚戸田を始めとして、名ある勇士は討死なし、
四 充滿なせし賊徒等も、敗を取つて度を失ひ、さながら木の葉の散る如く當所を殘らず散亂なし、
五 味方勝利となつたるも、日頃仁愛淺からぬ内府公の御武徳ゆゑ。
六 それゆゑにこそ黑田を始め、藤堂細川なんどゝいふ、名ある勇士が御身方なし、
一 賊徒亡ぶる上からは、是れにて四海穩かに、萬民鼓腹の思ひでござる。
ト此時ばたばたになり、花道より軍兵一人走り出來り、花道に留り、
軍兵 はッ、申し上げます。
五 何事だ。
軍兵 藤堂佐渡守高虎殿、君へ御對顏願ひたくと、只今お出でござりまする。
五 上にもそれをお待兼ね、少しも早くお通し申せ。
軍兵 はッ。（ト軍兵引返して花道へはひる。）
六 此よし上へ申上げん。（ト立ち掛る、爰へ上手より◎鎧附太刀にて床几を持ち出來り、）

◎其お知らせには及び申さぬ、只今お上のお出にござる。

ト小鼓の入りし誂への合方になり、上手より徳川内府、好みのこしらへにて出る、跡より○△□數輩を持ち、鎧附太刀にて附添ひ出來り、皆々はッと平伏する。内府床几にかゝる。此時花道より藤堂高虎、陣立、附太刀にて出る、跡より家臣直垂の袖に包みし首を持ち出來り、直に舞臺へ來て辭儀をなし、

高虎　今日の戰御勝利と相成り、是れ皆内府公の御軍慮ゆゑと、高虎恐悦申し上げまする。

家康　今朝よりの激戰に定めし身體疲れつらんに、いつに替らぬ勇氣の有樣、卯の刻よりして未の刻、僅か四時に大軍を打破りしは家康が、功のみならず御身は元より、黑田、細川、福島の、これ勳功に依つてなす所、實に滿足に存じ申す。

高虎　恐れ入つたる其御諚、高虎身に取り恐悦至極にござりまする。（ト高虎よろしくあつて皆々に向ひ、）何れも方にも御勳功の儀と存じられます。

二　藤堂殿の御勳功、お噂申し居つたる所、御持參ありし其首級は。

高虎　これぞ大谷刑部の臣にて、勇猛の聞えある湯淺五助の首級でござる。

四　世に強剛といはれたる、湯淺五助を討取られしは、常に替らぬ御手柄、誠に感心仕つる。

高虎　湯淺五助を討取りしは、高虎ならず、家臣仁右衞門高利討取つてござる。

家康　なに高利が討ちしとな、湯淺五助を討つべきものは、刑部が陣へ向ひしうちには、佐渡殿ならで外にあるまじ、殊に仁右衞門高利は、未だ壯年の事といひ、討ち止めしとは心得難し、具に問はん、仁右衞門これへ。

高虎　はツ。（ト高虎家臣に言ひつける事あつて、家臣花道へはひろ。家康思入あつて、）

家康　重手なりしか仁右衞門が討ち止めしとは手柄なり、五助が面體覺えあれば、實檢なさば相分らん。

高虎　其御實檢を願はんと、持參いたせし湯淺が首級、いざ御實檢下さりませう。

ト高虎五助の首を軍扇の上に載せ、家康の前へ出す、形の通り實檢なしよろしくあつて、

家康　如何にも、五助に相違ない。

一　すりや、湯淺に相違ござりませぬとな。

家康　誠に不審に存ずるが、仁愛厚き御身ゆゑ、功を高利に讓られしか。

高虎　全く以て左にあらず、拙者今日戰ひの儀は、黒田長政詳かに存じ居れば、何卒御問ひ下されたし。

ト是れにて家康よろしく思入、此時合方替つて、花道より仁右衞門高利、前幕の拵へにて出來り、花

道に留り、平伏する。

仁右　御召によつて藤堂高利、參上仕ッてござりまする。

家康　仁右衞門か、苦しうない、近う。

高虎　御直のお詞、進め。

仁右　はッ。（ト仁右衞門舞臺下手に住ふ。）

家康　只今實檢いたせしが、湯淺左助を討止めしは、拔群の働きなり。して、何れにて討止めしぞ。

高虎　湯淺左助を討止めたる次第、御直に逐一申し上げよ。

仁右　はッ、それご濃州不破郡、躑躅ヶ岡の麓にて、討取りましてござりまする。

家康　其折左助は手を負ひ居りしか。

仁右　御諚の如く手負には候へど、薄手ゆゑにか勇氣彌増し、猛威をふるふ勢ひにて、誠に苦戰にござりました。

家康　して又勝負は槍なるか、また太刀打の勝負なりしか。

仁右　突出す槍を二つに切られ、互ひに太刀にて渡り合ひしが、湯淺の太刀先き鋭くして、御覽の如く面部の疵所。

家康　斯くまで手疵を受けながら、如何いたして討取りしぞ。
仁右　はッ、討取り難き其首級は、湯淺五助に貰ひました。
三　なに、湯淺に首級を貰ひしとな。
家康　よくぞ申した仁右衞門高利、湯淺五助に此首級、貰ひし上は謀師たる刑部の首は知れまいな。
仁右　如何にも、存じ申しませぬ。
一　湯淺五助は大谷の首級を母衣にて打隱し、落失せたりと申す事、味方擧つて知る所、然るに五助を討取りながら刑部が首級を何ゆゑに、貴殿は詮議召されぬぞ。

ト此内仁右衞門よろしく思入あつて、

仁右　武士の身の義を重んじ、忠義に凝つたる心を察し、刑部が首級を取糺さず、歸陣なせしは拙者が誤り、お咎め受くる其時は、切腹いたす所存ゆゑ、君よりよしなに内府公へ、仰せ上げられ下さりませう。
高虎　壯年ゆゑに大谷の、首級を糺さず歸陣せし仁右衞門の粗忽、如何なるお咎め蒙るとも、高虎陪仕らず、直に成敗いたしますれば、何卒御賢慮仰ぎ奉つる。
家康　五體不具なる大谷の首級を敵に渡さじと、忠義一途の湯淺五助、刑部の首級を何れへか埋めし跡

に仁右衛門が、定めて出逢ひし事ならん、さすれば高利粗忽にあらず、よくぞ五助を討止めしぞ。
高虎　はッ、お咎めもなく其御賞美。
仁右　御仁惠の程有難く、感泣袖を浸しまする。
家康　誰そあるか、予が持槍を持て。
◎　はツ。（ト幕の内より槍を持ち出來る。）
家康　今日の功により、此品仁右衛門に遣はすぞ。
高虎　重ね〴〵の御仁恤。（ト此内◎件の槍を仁右衛門へ渡す、仁右衛門押し戴き、）
仁右　身に餘りたる御賜、有難く頂戴仕ッてござりまする。
一　今、上樣の御諚の如く、假令首級を見出さずとも、大阪方にて謀師と呼ばるゝ、大谷刑部を討ち取る上は、全く戰の勝利なり、いざ凱歌を內府樣。
家康　勝といへども初めて對ふが如し、軍の勝利と申せど、未だ敵將を討ちしにあらず、此度の軍の根元たる、三成はじめ秀家行長、三士の首級を見るまでは、全勝なりと言ひ難し、凱歌をあけるに及ばぬ。

ト是れを聞き、仁右衛門、高虎感心せし思入にて、

高虎　高利承はりしか、四海を治むる御方は。

仁右　申すも恐れ多けれど、斯くまでお心用ゐたまふか。

一　恐れ入つたる御胸中。

家康　實に諺に申す如く、勝つて兜の、（ト思入あるを木の頭、仁右衛門、高虎思はず平伏する事よろしくあつて、）緒を締めろぢや。（ト此引張りよろしく、太撥の時の太鼓にて、）

ひやうし　幕

五幕目

返し

近江國鳥上山の場
同善住院門前の場
同古橋村村家の場

〔役名――百姓與次郎太夫、石田の家臣磯野平十郎、惡者穴熊九郎右衛門、善住院の所化空月、穴熊の子分石臼の五郎藏、富田傳右衛門、石田の家臣渡邊七郎、同鹽野五郎、庄屋作右衛門、富田の郎黨四人、田中の臣篠原新吾照忠、石田治部少輔三成。與次郎太夫娘お賤等。〕

〔江州鳥上山麓の場〕――本舞臺一面の平舞臺、上下山の張物にて見切り、正面小高き山、後谷間

の遠見、諸所に杉の立木、日覆より同じく杉の釣枝、總て江州鳥上山麓の體。爰に石田の家來渡邊七郎、鹽田五郎鎧籠手臑當附太刀、草鞋落武者のこしらへ、是れも田中の郎黨四人、同じく鎧籠手臑當附太刀草鞋鎧武者のこしらへ、槍を持ち取卷き居る、此見得山おろし竹法螺の音にて幕明く。

四人　○やあ兩人とも、此處を通すこと、
　　罷りならぬ。
七郎　こりや何ゆゑに我々を、
五郎　各々方にはお止めあるぞ。
　　○見受けし所兩人とも、正しく石田の郎黨ならん。
　　へ落人ゆゑに、
四人　止めるのだ。（これにて兩人思入あつて、）
七郎　斯く推量の上からは、陳じ立ていたすとも、よも其儘には許すまじ。
五郎　如何にも我々兩人は、察しの如く石田の郎黨、佐和山からの落人だ。
　　○よく速に白狀した、關ケ原の一戰も關東方の勝利となり、既に副將大谷刑部は躑躅ケ岡にて自殺なし、

△ 首級は何れへ隱せしか、其あたりに見えざれど、衣服は覺えの村蝶を、墨にて畫きし鎧直垂。
□ 勇力勝れし湯淺五助は、藤堂の手に討取りて首實檢も濟みたれど、賊の大將石田三成、
◎ 何れへ遁れ逃失せしか、いまだに以て行方知れず、汝等家來とあるからは、其行先を存じ居らう。
○ 何れへ三成落ち失せしか、包み隱さず、
四人 白狀いたせ。
七郎 佐和山落城なせし後、亂軍の中なれば、主從共に別れ〳〵。
五郎 何れへ落延びたまひしか、主人の行方存じ申さぬ。
○ やあ、存ぜぬなど〻陳ずれば、
△ 其分にはいたさぬぞ。
七郎 元より存ぜぬ主人の行方、何やう御身が尋ぬるとも、知らぬと言ふより外はない。
五郎 詰りは一命捨てる我々、さあ存分に、
兩人 いたされよ。
○ 知らぬとあれば搦め取り、
△ 陣所へ引いて拷問なし、

□　逆賊石田三成が、

◎　在所を白状、

四人　いたさせくれん。

七郎　汝ら如きへろ〳〵武者に、

五郎　何で搦め取られうぞ。

四人　何を小癪な。

トどん〳〵になり、四人槍で突いて掛る。ちよつと立廻り、よき見得より鳴物になり、兩人太刀を抜き四人を相手に立廻りあつて、トゞ太刀を捨て、組打の立廻りあつて、兩人組伏せられ、繩を掛けられる。

七郎　此程よりの戰ひに、身體疲れやみ〳〵と、

五郎　汝等如きに搦められしか。

兩人　ちえゝ口惜しい。（ト無念の思入。）

○　いでや陣所へ兩人を、

△　引立て參つて、

四人　拷問なさん。(ト引立てにかゝる。此時上手にて、)

傳右　やれ待て者共、暫く待て。

ト竹法螺小鼓のあしらひにて、上手より原田傳右衛門、鎧籠手臑當附太刀草鞋にて、手槍を持ち、軍兵二人兜を持ち附添ひ出來り、

○　待てとお止めなされしは、

△　御組頭の、

四人　原田氏。

傳右　石田が殘黨兩人を、搦め取りしは手柄なり、是れより陣所へ引くに及ばぬ、某これにて詮議なさん。(ト軍兵床几を直す。傳右衛門これへ腰を掛け、)見れば勇氣も逞ましき、石田が家來二人の者、姓名は何と申す。

七郎　今は何をか包み申さん、我は石田が家臣にて、渡邊七郎友行、

五郎　鹽田五郎高重、詮議立てせず兩人の、首を早く刎ねられよ。

傳右　兩人共に死を決し覺悟なせしは天晴ながら、死するばかりが勇士にあらず、一命助け遣はすが、生きる所存はあらざるか。

兩人　何と。

傳右　石田は天下の逆賊にて、何れに隱れ忍ぶとも助かりがたき身の大罪、存じ居らば在所を申せ、其功により兩人が、一命助け遣はすべし。(ト兩人せゝら笑ひ、)

七郎　いや愚なことを言はるゝな、主人の行方は亂軍中、何れへ落延びたまひしか、兩人が、よし又存じ居るにせよ、誰が主人の訴人をしようぞ。

五郎　必死を極めし兩人ゆゑ、生きる所存は嘗てなし、我が一命が助かりたりとて、主人の在所をいふやうな卑怯未練な臆病者は、石田が家來の者にはござらぬ。

傳右　すりや、かほどにまで申しても、

七郎　存ぜぬゆゑに申さぬから、

五郎　早く命をとらつせえ。

傳右　在所を言はねば一命取らぬ。陣所へ引いて拷問なし、逆賊石田三成が在所を白狀いたさせん。

七郎　假令火水の拷問なすとも、一命捨つる覺悟の兩人、

五郎　如何なる責苦も苦にいたさぬ、心の儘に拷問いたせ。

傳右　言ふにや及ぶ、陣所へ引き、火水の拷問いたしくれん。

七郎 さあ、きり〳〵と、

兩人 引かッせえ。

傳右 それ、賊徒をば引立てい。

四人 きり〳〵立たう。

ト時の太鼓竹法螺の音にて四人、七郎、五郎を引立てる。兩人口惜しき思入よろしく。右鳴物にて此道具廻る。

（鳥上山の場）――本舞臺高二重の岩組、上り下りの足掛り、上下後一面岩の張物、諸所に杉の立木、日覆より同じく杉の釣枝、上手の岩組に瀧の流れ、總て鳥上山の體。時の鐘山おろしにて道具留る。と床の淨瑠璃になる。

〽峰おろす夜風烈しき木の音に、後見らるゝ落人の、胸に響くや山寺の、かねて知りたる間道を辿る三成主從が、落人の身に跡先へ、心置く霜露深き山路に悄し彳みて、

ト本釣鐘を打込み、かすめて下座にだまをあしらひ、よき程に花道より石田三成、好みの鎧直垂、馬手差し籠手臑當草鞋、上へ古き蓑を着、太刀を絲立に包み、これを持ち出來る、跡より磯野平十郎佩

れし髪を藁にて結へ、鎧下馬手差し、太刀を落し差しにさし、草鞋にて、筵を引掛け出來り、花道へ留り、跡先へ思入あつて、

三成　人跡稀なる山中も、落人の身に晝中は、木の間に隱れ夜に入つて、道なき山をよぢ登り、爰まで追手の兵に出逢ず、運よく遁れ來りしが、大阪までは程遠し、虎口を遁れ行きたいものぢや。

平十　嶮岨の山路にさぞお疲れ、夜るは往來途絶えし山中、生ひ茂りたる木の陰にて、御休息なされませ。

三成　此程よりの心勞に、如何にも疲れを覺えれば、あれにて暫時休息なさん。

〽月まだ遲く木の間もる、星をよすがに生ひ茂る、樹木の許へ辿り來て、

ト三成平十郎道の闇き思入にて本舞臺へ來り、三成誂への岩臺へ腰を掛ける、平十郎は四邊を窺ひ下に居る、床の合方、こだまをあしらひ、三成思入あつて、

前に上杉景勝と竊に大義を謀し合せ、景勝謀叛の兆しありと專ら世上で噂させ、江戸大納言が大將に德川内府が關東へ、出發なせし虛を計り、大谷刑部を軍師に賴み、西國諸侯を語らひて伏見の城を攻め落し、これを戰の手初めに德川内府を景勝と挾み討ちに討たんと計りし計略も、金吾中納言秀秋が卑怯未練の裏切に勝つべき戰も負けとなり、右翼と賴みし大谷刑部も石原峠で無念

の最期、我は一方の血路を開き、危急を遁れて落延びしは、未だ運命盡きざるか。

平十　全くこれは裏切に敵と味方の分ちなく、右往左往の亂軍に、其場をお遁れなされしなり。して我が君には大阪へ、落延びたまふ御所存なるか。

三成　間道傳ひに江州より山城へ出で攝州へ、竊に立越え大阪へ、入城なして同盟の、西國勢を催促なし、再び義兵の旗揚げなし、御幼君の害となる徳川内府を攻め亡し、豐臣天下になす所存。

平十　御幼君の御爲を思召すのは御尤、太閤殿下は申すに及ばず、御幼君への御忠節、臣は斯くこそありたきもの、なれども君の御望みは、必ず叶ひ申すまじ。

三成　幸先挫く其一言、我が望みが叶はぬとは。

平十　其お望みの叶はぬと、申しましたは大阪へ、翼があつて翔らば知らず、軍慮に敏き徳川内府、何安閑と見て居ませうや。落人詮議に新關を諸所へ立つるは必定なり、所詮無難に大阪へお立退きは覺束なし、江州路にて見咎められ、繩目の恥辱に逢ひたまはん、左ある時にはお名の穢れ、思し立ちを思ひ止まり、此場に於て潔く御生害を遊ばしませ。拙者御介錯仕り、御首級を土中に埋め、殉死いたして死出三途、冥土のお供仕らん。

〽主君を思ふ忠臣の諫めに實にもと三成が、思へど死する心なく、

ト平十郎思入あつていふ、三成死する心なき思入にて、

三成　主人を思ふ汝が諫言、忝けなくは思へども、行く先々に新關ありて、嚴しき詮議ある時は遁れ難なき事なれど、此三成が運あらば、圍みを遁れて大阪へ至られぬとも言難し、兎にも角にも其方を供に連れては人目に立ち、怪しまれんこと必定なり、今其方は我に別れ、何れへなりと落延びて大阪城へ參るべし、彼の地で再會いたすであらう。

平十　御詞返すは失禮ながら、君の御行方嚴重に、徳川方で詮議いたせば、遁るゝことは難かるべし、名もなき者の手にかゝる、末世の恥辱を思召し、御生害を遊ばしませ。

三成　かゝる時に死を急ぐは、先きを思はぬ短慮なり、死するはいつと限りもなし、先づ忍ぶだけ身を忍び、天運あらば大阪へ、至られんこともあるまじ、今死を急ぐ所にあらず、汝は是れより道を椿へ、敵の圍みを遁るべし。

平十　假令何やう仰せあるとも、主君の大事を餘所に見て、家來の身にて落ちられませう。何れいづくの果てまでも、御供なして御先途を、見屆けまするが家來の役。

三成　その忠節は忝けないが、連立ち參らば人目に立ち、忽ち敵に搦めとられん、汝はこれにて別れくれよ。

平十　かほどにお願ひ申しても、お供にお連れ下さりませぬか。

三成　我が爲ならねば連れられぬ。

〽詞もあらき山風に、木の葉ならねどはら〱と、落つる涙を押し拭ひ、

ト三成わざときつといふ。平十郎涙を拭ひ、

平十　君のお爲にならぬとあれば、最早お詞返しませぬ、是れにてお別れ申しまする。

三成　すりや、聞届けて別れくれるか。

平十　仰せに隨ひ道を替へ、大阪城へ立越えまするが、斯く八方へ新關出來、落人の詮議嚴なれば途中に於て搦め取られ、死刑に逢ふまいものにもあらず、左すれば是れが今生の、主從三世の御別れ、お名殘り惜しうござりまする。

〽名殘惜しとて直垂の、袖をしぼるや雨やさめ、是非も涙に暮れにける。

ト平十郎名殘を惜しみ、三成も愁ひの思入、

三成　我とても同じ事、運拙くして敵の手へ擒とならんも計られず、思へば果敢なき事なれど、假令梟首に掛けられて末世へ恥辱を殘すとも、此場で死する所存はない。形を變へて大阪へ、首尾よく至りて西國の諸侯と共に討つて出で、今日の恥辱を雪ぐ所存。汝も心取直し、死する心を思ひ留

まれ。

平十　君の仰せに死すことは、思ひ止るでござりまする。（ト涙を拭ふ。）

三成　とは申せども途中にて、望み達せず擒となり、敵の陣所へ引かれなば、再び汝に逢ふ事ならず。

平十　それを思へば今生の、

三成　汝が面の見納めなるか。

平十　我が君。

三成　平十郎。

平十　お名殘り惜しうござりまする。

〽互ひに惜しむ主從の、名殘りに空も打ち曇り、時雨を誘ふ秋の末、愁ひに沈む折も折、麓に響く法螺の音に、兩人きつと氣色を替へ、

ト三成平十郎名殘りを惜しむ愁ひの思入よろしくあつて、此時法螺の音になり、兩人きつと立別れ、

三成　麓の方に法螺の音の、谺に響くは此處へ、敵勢來ると覺えたり、猶豫はならぬ、早く落ちよ。

平十　先づ拙者より、我が君お早く。

三成　然らば汝が詞に從ひ、

平十　次第に法螺の音近附けば、

三成　敵勢これへ來らぬうち、

平十　疾く〳〵お落ちなされませ。

三成　平十郎、さらば。

〽心殘れど敵勢の、來るに是非なく三成は、山手をさして。

ト竹法螺山おろしにて、三成思入あつて上手へはひる、跡を見送りて、

平十　大阪城へ立越えて再び旗揚げなさるとて、日頃の勇氣に似氣もなく、そゞろに命を惜しみたまひ、山越なして落ちたまふが、德川內府の事なれば、關をしつらへ通路を止め、嚴しき詮議なすに於ては、所詮遁るゝ事難し、臣か諫めをお用るあつて、御生害あるならば、御介錯なし遺骸を、埋めて跡を隱さんもの。はて、殘念な事ぢやなあ。（ト平十郎ぢつと思入、此時藤明の四人出來り）

○　石田が殘黨、

四人　覺悟なせ。

平十　やあ拙者を石田が殘黨とは、各々方には何を言はるゝ、關東方へ御味方せる金吾中納言秀秋が家臣、中田三平と申す者。

○　やあ言ふなく、今汝が獨りごとを、小陰に隱れて殘らず聞いた。

△　覺悟いたして繩にかゝるか。

□　但しは首を刎ねようか。

◎　落人返事は、

四人　なゝ何と。

平十　それ聞かれた上からは、最早包むに詮なきこと、如何にも石田が身内にて磯野平十郎といふものなり、我が首取つて手柄にせよ。

四人　言ふにや及ぶ。

トどんちやんになり、四人切つてかゝる。平十郎太刀を拔き、これを相手に後の二重を遣ひ、鳴物替つて立廻りよろしく、一人後より組附く、平十郎これまでといふ思入にて、太刀を取直して腹へ突立てる、後の者あッといふ。平十郎立身にて苦しむ。此見得よろしく、どんちやんにて道具廻る。

（善住院門前の場）――本舞臺斜に一面の杉林、上下藪疊、後善住院の表門、練塀を見たる夜の遠見、日覆より同じく杉の釣枝、總て鳥上山善住院、大門通りの體。道具半程より床の三重、山おろ

しにて道具留る。

〽更渡る空も曇りて明星の、影さへ薄き世の中の、人の情に引替へて、流石僧侶の仁愛も、深き夜露の木の間より、寺僧は三成伴ひ出で、

ト時の鐘かすめて風の音になり、杉林の内より空月、坊主鬘鼠の齋附草履をはき、白木綿の風呂敷を抱へ出來る、跡より三成窺ひながら出來り、

空月　爰は寺院を放れました、大門通りの杉林、夜は往來もござりませねば、お氣遣ひはござりませぬ、これへお掛けなされませ。

〽傍の石の塵打ち拂へば、石田もうなづき腰打ち掛け、

ト空月捨石の塵を拂ふ、三成これへ腰を掛ける、淨瑠璃の切れ誂への合方、かすめて谺になり、三成思入あつて、

三成　今貴僧の語しに聞けば、師の坊には田中の手へ、召捕りになられしとか。

空月　以前の御縁にあなたをば、お匿ひ申せしとて、田中殿の御疑念受け情なや師の坊はお召捕りになりまして、繩目にお逢ひなされましたが、定めて嚴しい御詮議に、御難儀なされてゞござりませう。

三成　御老年の師の坊に、我れゆゑ斯かる御難儀かけ、申譯もあらざる次第、然し御存じなき事なれば、今に御身の明りが立ち、御歸院なされる事であらう。

傘月　右の譯ゆゑあなたをば、お頼みなれど善住院へ、お匿ひ申されませぬ。

三成　頼む陰なき今日の身に、實は四五日匿うて貰ふ心で參りしが、さある事では一時も、足を留むる所にあらず、是れより裏手の山を越え、夜半に紛れて立退かん、御歸院あらば師の坊へ、よろしく御詫びをなし下され。

傘月　畏りましてござりまする、何にいたせ其お裝では、人目に立てばむさくとも、是れをお召しなされませ。（ト風呂敷の内より鼠の袷と墨の衣を出す。）

三成　これは千萬忝ない、貴僧の御厚志忘れはせじ。
　〽逃げ行く身にはふさはしき、鼠木綿の古袷、墨の衣に人目をば、隱す姿の出家裝。
　ト三成鼠の袷を上ッ張りになし、墨の衣を着る。

傘月　せめて今宵一晩もお匿ひ申したけれど、詮議が嚴しうござりますから、それをお召しなされましたら、早くお立退きなされませ、今にも爰へ追手の者が、參りませうも知れませぬ。

三成　如何にも貴僧の言はるゝ如く、詮議の者に見咎められなば又もや難儀を掛けねばならぬ、是れよ

り裏手の山を越え、西の方へ赴かば、江州境へ出るであらう。

空月　杣狩人の通ひまする間道がござりますから、お教へ申して上げたけれど、師の坊の囚はれ中、寺院を明けます事ならねば、是れにてお別れ申しまする。

三成　地理も少々心得居れば、方位を目當に赴きませう、それに附けても師の坊へ、我ゆゑ縄目の難儀を掛け、お目に掛らばお詫びなさんに、心に任せぬ今日の身の上、再びお目に掛られゝばよいが。

ト愁ひの思入。

空月　あなたばかりか師の坊も、再び御歸院あればよいが。（トほろりと思入。）

三成　それも是れも天運次第。

空月　左様ござれば拙僧は、

三成　又も難儀の掛らぬうち、

空月　これにて御免を蒙ります。

〽寺院を案じ役僧は、心を殘して急ぎ行く。（ト空月辭儀をなし、思入あつて上手へはひる。）

〽跡見送りて三成が、一足二足行き掛けしが、教へを受けし師の坊の、縛に就きしを歎息なし。（ト風の音にて三成下手へ來る、此内舞臺は知らせなしに半廻しになる。）

（善住院裏手の場）――本舞臺一面の小高き藪疊、後黒幕、上手杉の立木、日覆より同じく釣枝、總て鳥上山善住院裏手の體。三成は下手廻しの外に佇み居る、風の音にてよろしく道具納る。と三成思入あつて、

三成　幼年の折學問の、教へを受けし善住院の、老師の疑惑を受けたるも、此三成に因みあるゆゑ、詫びをなしたく思へども、明日をも知れぬ落人の、頼む木蔭もなき身の上、間道傳ひに徳川の圍みを遁れて大阪へ、赴く志願を貫かば、再會の期もあるべけれど、運拙くば今生で最早逢ふ事ならぬ師の坊、御難儀掛けしは許して下され。（ト手を合せ拜みて、）最早今宵は初更過ぎ、地の理知つたる間道傳ひ、更けざる内に赴かん。

〽笠打ちかぶり行きかゝる、向うより來る里人も笠に面は知れざれど、互ひに道を避け合うて、やゝ行き過ぎしが振返り、差足しなして附來るは、必定曲者ごさんなれと、拔く手も見せず切掛くれば、その身を躱し聲を掛け、

ト三成笠を冠り花道へ行きかける、時の鐘かすめて風の音、山鳩の聲をかぶせ、花道より與次郎太夫脚絆尻端折り、菅笠を冠り出來り、花道にて行逢ひ左右へよけ、與次郎太夫舞臺へ來り、思入あつて三

成の跡を差足なし、額を見ようといふ思入。三成は曲者といふ思入あつて、側へ來る所を拔き打ちに切附ける。與次郎太夫身を躱し立廻りながら舞臺へ來り、

與次　石田樣ではございませぬか。

三成　何を。

〽又切り附けるを飛びしさり、（ト三成切附けるを、立廻つて與次郎太夫下手へ來り、）

與次　お急きなさるな、私は、與次郎太夫でございます。

三成　何と。

〽ためらふ折しも雲晴れて、木の間の月に影打ち見やり、

ト時の鐘日覆より灯入りの片破れ月をおろし、後の黑幕を切つて落し、向う善住院の門を見たる夜の遠見、三成月明りに與次郎太夫を見て、

誠に汝は與次郎太夫か。

與次　石田樣で。

三成　これ。（ト抑へろ、與次郎太夫四邊へ思入あつて、）

與次　嬉しやあなたの御行方を、お尋ね申して居りました。

三成　なに、我を尋ねて居りしとは。

〽四邊を窺ひ聲潛め、（ト與次郎太夫四邊へ思入あつて、誂への合方になり）

與次　關ヶ原の戰破れ、大谷樣を始めとして名ある勇將討死なし、それ〴〵首級の實驗も、濟んだとやら申す噂、いまだに大將石田樣を、討つたる者があらざるとて、草を分けての嚴しい詮議、何れにお忍びなさるゝか御行方知れなば古への、御恩送りに我が宅へお匿ひ申さうと、此間より諸所方々、お尋ね申して居りました。

三成　すりや舊恩を忘れずに、我を尋ね居つたるとか。

與次　專らあなたが江州路に隱れておいでなさるとて、田中樣が手分けして詮議いたして居りまする。さうない内と今朝からお尋ね申して居りましたが、今行違ひに物ごしの、似たるにお顏を見ようと思ひ、既にあなたに切られる所。

三成　跡を附けるは追手の者、切つて捨てんと切り掛けしが、心急かれて手が狂ひ汝に怪我をさせざりしは、神の加護にてあつたるか。

與次　何にもいたせ今爰で、お目に掛るは盡きせぬ御緣。

三成　して又汝が住居は何れぢや。

與次　ついこの山の半腹で、人家放れた一軒家、隣り知らずでござりますから、お匿ひ申すには屈竟な隠れ家ゆゑ、お心置きなくゆつくりと、御逗留なされませ。

三成　それは何より忝けない、これまで道なき山路を歩き、夜るも碌々まどろまねば、身體疲れて歩行も進まず、殊には二日食事もせず、我佐和山の城主にて珍膳美味に飽きし身が、木の實を拾ひ飢を凌ぎ、善住院は舊識ゆゑ一夜の宿りを頼まんと門を叩いて訪ひしに、我を匿ひあらんとて、疑ひうけて師の坊は、田中の陣所へ引かれしとて、所化空月が話しを聞き、是非なく去らんとせし折にこれにて姿を替へよとて、所化が惠みし法衣を着し、袖を別ちて出立し、折に計らず出會せし、昔馴染の與次郎太夫、下賤の者が譬にいふ、誠に地獄で佛なるぞ。

〽數萬の兵を戰場で、指揮なす程の大將も、今は世に落ち一人の、農夫を力に悦ぶは、側の見る目も哀れなり。

ト三成悦ぶ思入、與次郎太夫是れを見て、情ないといふ思入あつて、涙を拭ひ、

〽與次郎太夫は涙を拭ひ、

與次　いや、斯ういふ内も鵜の目鷹の目、油斷のならぬ世の中ゆゑ、少しも早く私の宅へお出でなされませ。

三成　如何にも、同道いたすであらう。(と此時日覆の月を引揚げ、舞臺闇くなる、)

與次　折角晴れし月影も、

三成　又もや雲に暫しの闇。

與次　どれ、御案内いたしませうか。

ト時の鐘きびしく、誂への合方、下手藪を押分け、穴熊九郎右衞門、逆熊の鬘、褞袍三尺帶尻端折にて半身出し窺ふ、兩人下手へ行かうとする、九郎右衞門出で前へ立塞がる、與次郎太夫突き退け行かうとするを引戻す、三成九郎右衞門襟上を取つて引退ける。これを振拂つて三人見得。誂への鳴物になり、闇闘模様の立廻り、此内九郎右衞門三成の懐より袱紗包の廻文狀を引出す、三成取らうとするを與次郎太夫割つてはひり、ちよつと立廻つて與次郎太夫三成の手を取り、つか／＼と花道へ行く、九郎右衞門起上る、三成跡へ返らうとするを入替つて留める。これを木の頭、九郎右衞門廻文狀を透して見る。山おろしカケリにて、

ひやうし　幕

幕の引附けと一緒に、ばた／＼右の鳴物にて、三成與次郎大夫花道へはひる。山おろしにてつなぎ、直に引返す。

（與次郎太夫住居の場）＝本舞臺三間の間常足の二重、四枚飾り、向う暖簾口、上手押入戸棚、下手鼠壁、上の方反故張りの附屋體、いつもの所丸太の門口、下の方葺おろしの下屋、三尺の縄暖簾、竹の打附格子、此前藪疊、後山の張物、二重に古びたる角行燈、總て與次郎太夫住居の體。爰にお賤世話娘のこしらへにて、圍爐裏の火を焚き居る、下手に石臼の五郎藏、袍褞三尺帶、惡漢のこしらへにて住ひ、此見得山おろし、臼挽唄にて幕明く。

五郎　これ、お賤ばう、とつさんは何處へ行つた。

お賤　暮合から買物に麓まで行きましたが、もう今に歸りませうわいな。

五郎　内に居ぬのは丁度幸ひ、おれが親分九郎右衛門どんが、おぬしに屬魂惚れて居て、どうか女房に貰ひたいから、口明けをしてくれと、疾うからおれが頼まれたが、何と親分の女房になつてくれる氣はないか。

お賤　足らはぬわたしを其やうに九郎右衛門さんが言はしやんすは、誠に嬉しうござんすが、知つての通りわたしは一人子、聟を取らねばならぬから、餘所へ女房に行かれぬゆゑ、九郎右衛門さんによいやうに、斷りいうて下さんせ。

五郎　それはおれも知つて居るから、おぬしさへ得心なら聟に來てもいゝ體、目はちつと引込んで居るが、萬事は人の先きへ出る、此近邊で名うての顏役、聟に取つて不足はあるまい、色よい返事を聞かしてくれ。

お賤　其相談は父さん次第、今に歸つてござんせうから、逢つて話しをしなさんせ、わたしの口から諾否の返事はお前に出來ぬゆゑ、さう思うて下さんせ。

五郎　そりやさうでもあらうけれど、緣談ばかりは當人が、不承知では出來ない話し、お前がうんと得心すれば、早く相談が出來るといふもの、いやか應か聞かしてくりやれ。

お賤　假令何と言はしやんしても、わたしや返事が出來ぬわいな。（ト五郎思入あつて、）

五郎　こんな凄味は言ひたくないが、一旦斯うと思つたら、邪が非でも通さねば、料簡しねえ九郎右衛門親分、それをお前が斷れば、どんな事をしようもしれねえ、命あつての物種だ。

お賤　わたしの口から返事はせぬから、どうなと勝手にしなさんせいな。

五郎　それぢやあどうでも、いやだといふのか。

お賤　まあ、そんなものでござんす。

五郎　さういふ氣なら最う頼まぬ、後で後悔しなさんな。（ト立上る。）

お賤　決て後悔しませぬわいな。
五郎　どれ、親分を焚きつけて、泣ッ面をさせてやらう。
ト在郷唄風の音にて、五郎藏下手へはひる。お賤跡を見送り、
お賤　爰ら近所で厄病神と人のいやがる九郎右衛門、誰が女房になるものか、とゝさんが歸つたら、二度と再び言はぬやう、きつと斷つて貰はうわいな。
ト時の鐘合方風の音にて、花道より以前の三成先きに、與次郎太夫出來り花道にて、
三成　そなたの宅は何れなるぞ。
與次　向うの小屋でござりまする。
三成　成程こゝは人家を放れ、閑靜な所ぢやな。
與次　お匿ひ申すには、四邊に遠慮がござりませぬ。(ト右鳴物にて舞臺へ來り、)先づお待ちなされませ。
(ト門の外から、)お賤、今歸つた。
お賤　おゝ、お歸りなさんしたか。
與次　誰ぞ家に來ては居ぬか。
お賤　いえ〳〵、誰も居りませぬわいな。(ト與次郎太夫、三成に向ひ、)

與次　さあ、おはひりなされませ。

三成　許しやれ。（ト合方きつぱりとなり、三成笠を取り内へはひる。お賤見て、）

お賤　もしとゝさん、あなた樣は。

與次　これ。（トお賤にさゝやく。）

お賤　そんならあなたが。（ト思入あつて、）かやうな穢い破ら家へ。

與次　これ、口をきかずとお洗足を、早く持つて來い。

お賤　あいく。

ト下手繩簾の内より盥へ水を汲み持來り、三成緣へ腰を掛ける。與次郎太夫草鞋を解き足を洗ふ、お賤手拭を持つて來て拭ふ、此内捨ぜりふにて三成二重へ上り、上手へ住ふ。

與次　嘸お疲れなされましたらう。

三成　一時に草臥を覺えしやうぢや。（トお賤鑵子の湯を汲み、）

お賤　お湯を召上りませ。（ト茶碗を取りて、）

三成　これはそちが娘なるか。

與次　へい、左樣にござりまする。

お賤　不束者にござりまするが、お目掛けられて下さりませ。
三成　今宵はそちの厄介なるぞ。
お賤　御不自由さへお厭ひなくば、幾日なりとも私方に、御逗留遊ばしませ。
三成　斯く落人の身となりて、何不自由を厭はうぞ。
與次　そちは委しい事を知らぬが、親仁は元よりおれまでも、一方ならぬ御恩になつたが、身分違ひに此年月、御出入りさへも碌々せず、いつ御恩送りが出來ようと思ふ折から今度の騒動、爰ぞ御恩の送り所と此間からお行方を、所々方々と尋ねたが、我が一心が屆いてか思ひ掛けなく善住院の裏手の森でお目に掛り、直にお供をいたして來たが、詮議嚴しいお身の上、氣取られぬやう氣を附けてくれ。
お賤　それは承知でござんすが、間所狹いこの破ら家、何處へお前はあなたをば、お匿ひ申す心ぢやぞいな。
與次　何處といつて三疊の、小間は人の目棲に掛れば、晝の内はしまりがないゆゑ、御窮屈でも緣の下へお忍ばせ申し上げ、しまりを嚴しくして、奥へお寐かし申す氣ぢや。
お賤　成程それはようござんす。

與次　奥といつても埃だらけ、よう掃除をして置いてくれ。

お賤　それは承知でござんすわいな。（トお賤三成の草鞋を見て、）とゝさん、此草鞋は何うしませう。

與次　それも爰らにない草鞋、納戸の隅へ隠して置け。

お賤　あい〳〵、隠して置きませうわいな。

ト合方にてお賤草鞋を持つて下手繩簾の内へはひる。三成思入あつて、

三成　今宵汝の厄介にならうとは思はざりし、今日かゝる艱難なすも徳川内府に一天下を奪はれんこと口惜しく、豐太閤が積年の御軍功を無になすまじと、御幼君のお爲を思ふ忠義の諸侯と相計り、既に會津景勝殿上洛なさず、領國に引籠り居りしゆゑ、是れを征伐なさんとて、江戸大納言を大將に徳川内府も諸侯を引き、關東へ進發なす其虚を計つて旗を揚げ、伏見の城を乘取つて徳川内府を滅さんと、上杉大谷兩將と計りし味方の謀略も事十分に至りしに、金吾が卑怯の裏切りに味方の者も度を失ひ、散々に敗走なし、右の腕と頼みたる刑部は遂に果敢なき討死、我にも自殺と臣下の者が再三異見をなしたれど、戰地を切拔け大阪へ、再び出でゝ西國の諸侯を集めて旗揚けなし、今日の恨みを返さんと、やう〳〵爰まで遁れしが、計らず汝に廻り逢ひ、かゝる助けを得るといふは、未だ天運盡きざるかと、いと悦ばしく思ふなり。

與次　只今仰せられます通り、是れまでお遁れなされたる御運があれば大阪へ、御入城がなりませう、然し順路はもとより嚴しく、所詮御通行は叶ひますまい、先づ兵糧の御用意なされ、路なき山を打ち越して、お出でなさらにやなりますまい。

三成　如何にも道なき山林を、越えねば容易く行かれまじ。（ト此内下手よりお賤出で、）

お賤　先づ兩三日お疲れを休め、お氣を安く私方に、御逗留なされませ。

與次　兩三日はおろかなこと、此餘熱の冷めるうち、お匿ひ申す氣でお迎ひに出た途中、折よくお出逢ひ申し、直にお伴ひ申したが、人里遠き山家の住居、何も上げるものとてもない。

お賤　何はなくとも有合せで、夕御飯を差上げませう。

與次　それまで奥で御ゆるりと。

三成　詞に隨ひ休息いたさん。

與次　どれ、御案内いたしませう。（ト唄になり、三成先に與次郎太夫附いて奥へはひる、お賤思入あつて、）

お賤　御飯を何であげたものか、玉子より外何もなき人里放れた山家の不自由、殊更家には麥飯のみ、所詮お口に合ふまいけれど、飢ゑたる時の何とやら、どれ拵へて上げませう。

ト在郷唄になり、お賤思入あつて奥へはひる、此唄にて花道より九郎右衛門先きに五郎藏附添出來り

門口で囁き合ひ、

九郎　内には誰も居ねえのか。與次郎どの〳〵。
與次　あい〳〵。（ト奥より與次郎太夫出で、）え〻、せはしない、呼ぶのは誰だ。
九郎　誰でもない、九郎右衛門だ。（ト下に居る。）
與次　けた〻ましくおれを呼ぶのは、何ぞ用でもあつての事か。
九郎　今日代官所へ呼び上げられ、目明し役を言附り、是れからお上の御用聞き、今までの九郎右衛門とは少し位が違ふから、其吹聴に出て來たのだ。
五郎　破落漢といはれた身が、一足飛びの御用聞き、大した出世さつしやつたな。
九郎　今も田中兵部様から、詮議の役を言附かつた。
與次　詮議の役とは、何の詮議を。
九郎　關ヶ原の戰場から、卑怯未練に影を隱し、行方の知れぬ賊徒の棟梁、石田治部少輔三成を。
與次　え。（トぎつくり思入。）
九郎　この鳥上山へ入込んだと、人の噂に一軒別、詮議するのがおれが役。
與次　む〻。

九郎　その三成を詮議なし、搦め捕つて差出せば、武士になるゝおれが體、先づ石取の旗本に、なるのは譯のねえ話しだ。

五郎　それに就ても九郎右衛門どのが、常から惚れてるこちの娘、お賤どのを女房に遣つたら、共々こなたも身の出世、此上もない縁談だ。

九郎　わしが口から言出すも、こッ恥かしい事だけれど、疾うから惚れてるお賤ばう、何と女房に下さらねえか。

與次　山家育ちのむくつけも、譬にもいふ鬼も十七、女房にくれと言ひなさるのは、親子の者の仕合せだが、知つての通りの一人娘、他へ女房には遣られない。

五郎　それも噂に聞いて居れば、他へ女房に遣られずば、九郎右衛門どのを聟にさつせえ。

與次　その又聟にも貰へぬは、小さい時から娘には、許嫁の男がある。

五郎　なに、許嫁の男がある。

九郎　して、其男は何れの者だ。

與次　さあ、それは。

九郎　そんな古い言譯で、そんならさうと此儘に指を銜へて引込むやうな、九郎右衛門だと思つて居る

か。

與次　さあ。

九郎　許嫁の約束があつて女房にくれられずば、强ひてくれとは最う言はねえ。

五郎　それぢやあ思ひ切んなさるか。

九郎　くれぬとあれば仕方がねえ、惚れては居るがすつぱりと、娘を思ひ切つたかはり、家搜しするからさう思へ。（トきつといふ。）

與次　なに、家搜しするとは。

九郎　田中樣から言附つた、逆賊石田の詮議をするのだ。

與次　や。

九郎　善住寺の裏手から、連立つて來た怪しい旅人、そいつが身許の詮議をするのだ。

ト與次郎太夫思入あつて、

與次　鳥上山から連立つて、歸つて來たは齋坊主、隣り村の西念だ。

九郎　齋坊主だと言ひ拔けても、目串は拔けねえ證據がある、名乘り合ふから匿ふ約束、森の小蔭で殘らず聞いた。

與次　え。（トぎつり思入。）

九郎　その時拾つた赤地の錦、經文めいた廻文狀、慥な證據があるからは、百萬遍の百年目、南無阿彌陀佛と覺悟しろ、片ツ端から珠數つなぎに、引いて行くから往生しろ。（ト懷より錦の袱紗に包みし廻文狀を出して見せ、）どれ、家捜しをしてやらうか。（ト立掛るを、與次郎太夫留めて、）

與次　いや匿うた覺えがなければ、家捜しするには及ばねえ。

五郎　覺えがなければ猶のこと、家捜しさせて改めさせろ。

與次　破れ障子のあばら家も、百姓なれども由緒ある與次郎太夫がいはゞ城廓、めつたに奥へは踏み込ませぬぞ。

五郎　隱すはいよ〳〵怪しい奥の間、

九郎　上の御川だ、構はず踏ん込め。

五郎　合點だ。

ト早き合方になり、五郎藏尻を端折り、奥へ踏込まうとするを、與次郎太夫留める立廻り、九郎右衞門行かうとする、此時奥よりお賤つか〳〵と出で、

お賤　まあ〳〵待つて下さいまし。

九郎　待てといふのは、娘のお賤か。

お賤　奥には誰も居ませぬゆゑ、わたしが頼みでござんすから、どうぞ改めずに下さいまし。

ト九郎右衞門思入あつて、

九郎　むゝ、おぬしが頼む事ならば、聞いて遣るめえものでもねえが、たゞではいやだ、おれの方にも頼みがあるが、聞いてくれるか。

お賤　あい、何なりと聞きませう。

五郎　聞くとあるなら、さつき頼んだ、此親分の女房になるか。

お賤　あい、成りませうわいな。

九郎　え、おれが女房なるといふのか。

お賤　足らはぬわたしにそれ程まで、思ひをかけて下さんす其志しが嬉しいゆゑ、お前の心に隨ひませう。

九郎　それぢやあ、眞實おれが女房に。

お賤　なるからどうぞ奥の間の、詮議は許して下さんせ。

トお賤九郎右衞門に寄添ふ、九郎右衞門ぞく〳〵嬉しき思入にて

九郎　おゝ、許さねえでどうするものだ。
五郎　こいつあおつに風が變つた。
與次　扨は娘は此場の手詰に、いや、手鍋提げても九郎右衛門どのゝ、おぬしは女房になる心か。
お賤　さあ、大恩うけたとゝ樣の、御難儀救ふが娘の役。
與次　おゝ、よく得心してくれた、そちが孝行忝けない。（ト與次郎太夫愁ひの思入。）
九郎　むゝ娘が得心するからは、遣らぬと言つた親仁も承知か。
與次　娘が望む戀聟ゆゑ、わしも得心しましたが、其替りには此儘に。
九郎　親子となれば何事も、見遁さねえでどうするものだ。
與次　その一言が聟引手。
九郎　きつと娘は貰ひましたぞ。
與次　如何にもこなたへ進ぜます。
五郎　斯うなるからは善は急げ。
九郎　直にお賤を連れて行かう。
お賤　そんならとゝさん、行きますぞえ。（ト心の殘る思入、與次郎太夫もこなしあつて、）

與次　跡氣遣はずと行つてくれ。

お賤　あい。（トほろりと思入、九郎右衛門手を取り、）

九郎　どれ、日頃の思ひを晴らさうか。

ト唄になり、九郎右衛門お賤の手を引き五郎藏附いて花道へはひる。與次郎太夫跡を見送り、

與次　石田樣を助けんと、心に染まぬ九郎右衛門の、女房になつた娘が忠孝、何にも言はぬ忝けない。

ト手を合せて跡を拜む、寺鐘を打込み、誂への合方になり、奥より以前の三成、法衣を脱ぎ前の鎧直垂の拵へにて刀を提げ出來り、

三成　樣子は一間で承はつたが、我を助ける其爲に、我が心にも染まぬものに、其身を任す娘が心底、流石は與次郎太夫が娘、三成感心いたせしぞ。

與次　あなたがお忍びなさるのを、あの九郎右衛門が知つたからは、爰に長居をなさるのは御身が危うござります、娘が訴人の九郎右衛門を連出しました此隙に、兵糧米を御持參なされ、早くお立退きなされませ。

三成　如何に其方がすゝめとて、今立退かば跡々にて、嚴しき詮議に逢ふは必定、思へば最前平十郎が我れに自殺を勸めしかど、異見を用ゐず死を止まり、姿を替へて落延びしは、間道傳ひに大阪へ

入城なして西國の味方を集め東國の、徳川勢と一戦なし、今度の恥辱を雪がんと思ふ志願に世の人に、卑怯未練と言はるゝを、堪へ忍びたる甲斐もなく、此江州路へ忍び來るを、早くも告ぐる者あつて、敵に八方取巻かれ、嚴しき詮議に逢ふ上は、遁るゝ事は難かるべし、名もなき者の手に掛り、恥辱を末世に殘さんより、自殺なさんと思へども、左ある時には匿ひし汝に重き罪を着せん、假令一日半日でも匿ひくれし恩ある者に、罪を着するは本意にあらず、是れより我を訴へて、其身の罪を遁れくれよ。

トよろしく思入にていふ、與次郎太夫腹の立つ思入にて、

與次　訴へ出て匿ひし其罪科を遁れよとは、手前の心を御存じないか、お情餘つて情なく、あなたをお恨み申しまする。以前受けたる御恩報じに、お匿ひ申せしからは、露顯なした其時は、此身に罪を受ける覺悟、百姓なれど魂は武士の心で居りまする與次郎太夫が卑怯にも、あなたの訴人が出來ませうか、如何なる重き嚴刑に、逢ふのも更々厭ひませぬ、殊には娘が九郎右衛門に、其身を任しまするのも、あなたをお助け申さう爲、親子が心お察しあつて、早くお立退き下さりませ。

三成　志しは忝けないが、爰に忍ぶを知られし上は、鳥上山の八方を取巻き居るに疑ひなし、遁れ難なく覺悟の上は、最早落つる所存はなし。疾く〳〵我を訴へ出でよ。

與次　いや／＼、何とおつしやつても、與次郎太夫は訴へませぬ。
三成　すりや、是れ程に申しても。
與次　恩にかへて命をば、捨てる覺悟でござりまする。
　　　トきつと言ふ、三成感心の思入。ばた／＼になり、花道より作右衞門羽織袴庄屋のこしらへにて走り出來り、門口より、
作右　與次郎太夫どの、内にござるか。
與次　はい／＼、内に居りまする。（ト言ひながら三成を上手屋體へ入れる。）
作右　これ／＼、早く明けてくれぬか。
與次　えゝせはしない、今明けます。（ト門口を明け、）何ぞ御用でござりますか。
作右　御用とも／＼急御用、代官所からこなたをば、たつた今連れて來いと、此庄屋へ嚴しい言附、さあ、わしと一緒にござらつしやい。
與次　只今直ぐに參りますから、お先きへお出で下さりませ。
作右　そんならきつと來て下さい。
與次　二度とお迎ひは受けませぬ。

作右　一足先きへ行きますぞや。

ト作右衛門跫音して行きかけ、跡へ返り門口に竊ひ居る。與次郎太夫は門口へ掛金をかける。上手より三成出て、

三成　代官所より其方を、只今呼びに參りしは、必定この身の詮議ならん。

與次　仰せの如くあなたをば、御詮議と存じまする、其詮議のない内に、少しも早く山越しに、お立退きなされませ。（ト三成與次郎太夫に難儀を掛けず、山路へ行つて死なうといふ思入あつて、）

三成　むゝ、遁れ難なく思へども、死生を天の運に任せて。

與次　すりや、御得心なされまして。

三成　汝の難儀に、いや、難所を越えて落延びん。

ト此時花道の揚幕にて竹法螺を吹く、作右衛門注進する思入にて、花道へ急ぎはひろ。

與次　向うに聞ゆる竹法螺は湯の知らせとは思はれず、正しく人數を集むる様子、御猶豫なされず少しも早く、裏からお落ちなされませ。

三成　詞に任せて。（ト三成太刀をさし上手へ行きかけ、）汝が義心忘れは置かぬ。

ト早き合方寺鐘にて三成上手へはひろ。與次郎太夫道を指圖する思入あつて、

與次　石田樣をお落し申し、是れでおれも安堵した。

ト此内花道より作右衞門先きに捕手四人出來り、門口にて囁き合ひ、

作右　これ〳〵與次郎太夫どの、代官所にて貴樣をば、なぜ一緒に連れて來ぬと、大目玉を喰ひました、さあ〳〵一緒に來て下され。（ト門口を叩く。）

與次　はい〳〵、只今御一緒に參りまする。（ト門口を明ける。捕手ばら〳〵とはひり、）

捕手　御上意。（ト與次郎太夫に掛るを、ちよつと立廻つて、）

與次　こりや、何となされまする。

作右　逆賊石田三成を、此家へ匿ふ科あるゆゑ。

與次　何を證據に。

作右　今三成を裏手から、落すところを聞いて居た。

與次　え、そんなら門で聞いて居たか。

作右　直に追手を掛けたから、もう今頃は三成も、搦められたに違ひない。

與次　さう聞く上は、もうこれまで、（ト捕手を突退け、きつとなり、）どうぞ首尾よく。

ト與次郎太夫三成を案じる思入にて花道をきつと見る、捕手烈しく與次郎太夫に掛る。山おろし、早き

合方にて、此道具廻る。

（鳥上山絶頂の場）――本舞臺上寄りに誂への高き岩山、上の方岩の張物にて見切り、下手低き山の張物、杉の梢を見せ、後杉の梢谷間の心、總て鳥上山絶頂の體。山おろしにて道具留る。ト本釣鐘を打込み、誂への合方、こだまかすめて山おろしになり、上手より以前の三成出來り、思入あつて、

三成　昔が今に叛逆の榮えし例しなき事を、知りつゝ我も企てなし、今日こゝに至りしは前車の戒め守らぬゆゑ、悔ゆるは愚なことなるぞ。我は人の知るまじと此江州路へ落延びしが、早くも敵に探知され、斯く八方を取り圍まれ、最早遁るゝ道なければ生害なさんと覺悟なせしも、與次郎太夫が許さねば止むを得ずして詞に隨ひ、山越なして落延びしは、爰にて淸く死す心。（ト此時上下、向うにて竹法螺を吹く。三成思入あつて、）又もや諸所に法螺の音の、かまびすしく聞ゆるは、正しく我を圍む知せ、猶豫いたして期を延し、名もなき者の手に掛り、末世に恥辱を殘さんより、片時も早く死を遂げん。（ト又本釣鐘を打込み山の下谷間へ誂への月を出し、竹笛になる。）宵の雨氣も雲晴れて、月朗かにさし昇り、心耳を澄す笛の音は、家路に歸る牧童なるか。いでや追手の來らぬ内、心靜に最期を遂げん。

本釣鐘誂への合方、笛の音にて三成山の上にて肌を脱ぎ、短刀を抜き、腹を切らうとする。此時後へ達附鉢卷襷の捕手二人窺ひ出で、

○　三成、

兩人　覺悟。（ト組附くを振拂つて、ちよつと立廻り、きつとなつて、）

三成　やあ覺悟呼はりかたはら痛い、手向ひなさば命がないぞ。

ト きつとなる。此時上下より、四人同じく捕手にて出で、

六人　何を小癪な。

ト 六人三成を生捕らうといふ立廻り、三成腹を切らうといふ心にて山を遣ひ、捕物の立廻りよろしく、よき程にどんどんになり、花道より藤原新吾鎧下凜々しきこしらへにて出來り、直に舞臺へ來り、

新吾　やあ天下を騷がす石田三成、何とて自殺致さゝうぞ、搦め捕つて逆賊の所刑に行ふ、覺悟なせ。

三成　左いふ汝は何者なるぞ。

新吾　我は田中兵部が家臣、篠原新吾照忠なり、搦め捕つて手柄になさん。

三成　壯年ながらよい所存、汝が手柄にいたして見よ。

新吾　言ふにや及ぶ。

ト誂への鳴物になり、これより三成組討の立廻りよろしくあつて、よき程より六人加勢なし、三成を組伏せ、皆々折重なり繩を掛ける。ばた〳〵にて、花道より與次郎太夫捕手二人と立廻りながら出て來る。三成引立てられる。與次郎太夫見て、

與次　やゝ、こりや石田樣には。

三成　數日の疲れに力量拔け。

新吾　我が手に搦め捕つたるぞ。

與次　嘸御無念に、（ト捕手を投げ、）ござりませう。

三成　これみな此身の積惡ゆゑ。

與次　とは云へ無慚な。

三成　繩目に逢ふも、（ト三成口惜しき思入。與次郎太夫寄らうとするを捕手左右より手を取り引き据ゑ、これを見合つて木のかしら。）天命なるぞ。

ト氣を替へて愁ひの思入、引張りよろしく、時の太鼓カケリにて、

ひやうし　幕

關ケ原軍記（終り）

新皿屋舗月雨暈

愛宕おろしの風もまだ寒き木の間の辨天堂燈火消て言譯も闇き浦戸が濡衣にお蔦も共に無實の拷問梅治がすがり歎くのも聞ぬ吾太夫典藏が巧みと白刃に主計之介が井筒へ切込む妾殺し血汐の紅葉に散る花の鐘も哀れなお渚の噺しに賴みし甲斐も泣親の心を察して宗五郎が今は禁酒も破れかぶれ酒の力で玄關へ振込む荒氣を十左衞門が厚き說諭に醉も醒め妻のお濱と粗忽の詫言汚名を恥ぢし紋三郎が自殺を止る亡靈の告に讒者の謀叛顯れ左市の手引に殺害なす折納殿も逆意を悟り詰腹切らす結局迄昔語りと言ひながら寐鳥に淒きどろ〳〵は時世に合ぬ怪談狂言

「新皿屋敷」は明治十六年五月、市村座に稿下された、作者六十八歳のことである。作者晩年の世話物中出色の物として定評がある。五世菊五郎がお蔦と魚屋宗五郎とに扮して、好評を博し、特に魚屋宗五郎の酔態に至つては、藝壇の珍として喧傳された。往年依田學海居士が三木竹二氏に告げて、「筋はあのやうに立たぬことはないが、あの宗五郎が段々生酔になる所は、あゝは書けない、やつばりそれでは天才か」と言つたのは、卽ち此の作に就いてゞあつた。（雜誌歌舞伎第九號所藏）。本來は「新屋敷」のお菊に對する、この作中のお蔦であるから、お蔦が主役であつたのであるが、上演後は却て宗五郎の方が著明になつたのである。

書卸し當時の役割は、尾上菊五郎（愛妻お蔦、お蔦の亡靈、魚屋宗五郎）、片岡我童（磯部主計之介浦戸紋三郎）、嵐璃寛（浦戸十左衞門）、尾上松助（岩上典藏）、河原崎國太郎（宗五郎女房お濱）、岩井松之助（部屋方おなぎ）、市川壽美藏（岩上吾太夫、魚屋太兵衞）、中村相藏（醫師濱田道庵）、澤村訥子（浦戸の若黨左市）、坂東竹次郎（荒浪伴藏）、中村翫太郎（潮田傳六）等であつた。

挿繪にしてたのは國周筆の錦繪と、五世菊五郎の魚屋宗五郎の寫眞とである。

大正十四年十二月　　　　　校訂者





新皿屋敷月雨暈（新皿屋敷――三幕九場）

序幕

芝神明菊茶屋の場
愛宕下磯部邸の場
同奥庭辨天堂の場
同妾於蔦部屋の場
同庭前古井戸の場
藩中紋三郎宅の場

返し

〔役名――浦戸紋三郎、磯部主計之助、家老浦戸十左衞門、用人岩上吾太夫、同典藏、醫者濱田道庵
荒浪伴藏、潮田傳平、磯部の妾お蔦、お蔦召使おなぎ、菊茶屋の女房おみつ、其他。〕

（菊茶屋の場）――本舞臺三間の間平舞臺、本庇付菊の花の軒提灯、上手に銅壺付の竈、茶釜、藥罐茶道具宜しく飾り、向う打拔菊の花壇、庭の模樣、上の方一間格子造り、下の方九尺障子の立ちし楊弓場、總て神明境内の體。爰に長床几を置き、仕出し三人○△□腰を掛け茶を呑み居る、側に茶屋女前垂裝にて盆を持ち立掛り居る、大拍子へ見世物の鳴物を冠せ、賑やかに幕明く。

○いつもながら神明樣の祭り時分は、時候がいゝから大層人が出るぢやァねえか。

△それに今年はどうしたはずみか、氏子中が乘氣になつて町内每に山車が出來、

□踊屋臺が四五本に、地走りや俄が出來、山王祭も同じ樣だ。

女通町から神明前は殘らず棧敷が掛りまして、賑やかでござります。

○十五十六兩日は往來幅が狹いから、神明前は通られまい。

△勢揃ひは大門の廣ッぱでするさうだが、何處が一番よく出來たな。

□みんないゝといふことだが、片門前の惣踊が、一番だらうといふ噂だ。

女殘らず揃ひの衣裳を着て、三十人も出ますさうだが、嘸綺麗なことでござりませう。

○いや片門前で思ひ出したが、魚賣の太兵衛の娘は思はぬ世出をしたぢやァねえか。

△去年祭の手傳に爰の内へ賴まれて、助けて居たのが緣となり、

□磯部樣のお目に留り、二百兩の支度金で妾になつたは大仕合だ。

女昨日神明樣へお參りながら、内へおいでゞござりましたが、立派な裝でござりました。

○おめえも早くお目に留り、何處ぞへ妾に行くがいゝ。

△出世をするのは女のこと、野郎はどんないゝ男でも、

□男妾になつた所が、相手が後家故澤山は出さねえ。
女さうばかりも言はれませぬ、七軒町から三百兩で受出された子がございます。
○もう二十年若けりやあ、蔭間にでもなるけれど、
△女は極の行留りが、野玉に出りやあ賣れもするが、
□まさか野郎で切通しへ、廿四文で出られもしめえ。
女御常談ばかり仰しやいます、お前さん方がお出なされば女の客が買ひませう。
○いや朱に交はれば赤くなると、見やう見眞似に此頃は、姐も世辭が出來て來た。
△何にしろ見世物でも、是からぶら〳〵ひやかして、
□何處ぞでちよつと一杯やり、三角へでも押上らうか。
女まあ宜しいではございませぬか。
○又明日遊びに來よう。
△茶代は姐爰へ置くよ。（卜錢を置く。）
女有難うございます。
□さあ、行きやせう。

ト右の鳴物にて三人下手へはひる、女は茶碗を片付る、此鳴物にて花道よりおなぎ部屋方者の拵へ、小さな風呂敷包を持出で來り、花道にて、

なぎ　今日はお天氣のよいせゐか、昨日にまさるお參り故、花の露屋が込合うて大層遲くなつたれば、ちよつと門から菊茶屋へ寄つて直に歸りませう。（ト右の鳴物にて舞臺へ來り、）お秋どん、お忙しいね。

女　おやおなぎさん、おいでなされませ。モシおかみさん、お屋敷のおなぎさんがおいでなされました。（ト奥にて、）

みつ　あい〳〵。（ト流行唄の合方見世物の鳴物を冠せ、おみつ前垂掛茶屋女房のこしらへにて出て來り、）これはおなぎさん、よくおいでなされました。

なぎ　昨日は大勢上り、おやかましうございました。

みつ　其節は有難うございました。今日はどちらへおいでなされました。

なぎ　花の露屋に買物があつて、此方へ參りましたから、ちよつとお寄り申しました。

みつ　よい所へ來て下さいました、昨日お歸りなすつた跡に、簪が落ちて居りましたから、大方お前さんのであらうと思つて、今日か明日はお屋敷へお聞き申しに上りませうと、存じた所でございま

した。

なぎ　それは有難うございます、途中へ出まして氣が付きましたが、人込の中故に何處へ落しましたことかと存じましてございます。

みつ　奥へしまつて置きましたから、只今お返し申しまする。

なぎ　跡で宜しうございまする。

みつ　昨日は又私へ結構な品を下さりまして、有難うございます。おつた樣へよくお禮をおつしやつて下さりませ。

なぎ　はい、歸りまして左樣申しませう。

みつ　それはさうとおなぎさん、花壇の菊が盛り故、よいのを切つて上げませうから、お持ちなされませ。

なぎ　それは有難うございます。まだお前さんに上げたいものがあるとおつしやつてゞございます。

みつ　それは何でございますか、樂しみに致して居りませう。

なぎ　どういふことか四五日此方、つむりの物や持物を朋輩衆や知つたお方へ、みんなお上げなさいまして、是は私の形見だと、いやな事をおつしやいます。

みつ　商賣柄に似合ない小さい時から内氣故、そんな事をおつしやるとも、死なぬ役者が追善の發句抔を賣られると必ず長生をする物故、決して氣にお掛けなさんな。

なぎ　不斷から何やかや苦勞になさる性分故、お案じ申しますわいな。

みつ　さうお氣になさいますなら、菊は長壽の藥とやら、よいのを切つて上げますから、お土産にお持ち下さりませ。

なぎ　それは有難うございます。

ト流行唄大拍子になり、花道より典藏羽織着流し大小、道庵坊主鬘羽織着流し大小醫者の打扮にて出て來り、花道にて、

典藏　餘所と違つて神明は、年々の祭なればよく人が出るではないか。

道庵　實に嘗筆の見世などは涎をたらす侍客で、中々容易に買付けられぬ。

典藏　それでは貴殿は嘗筆で、筆をお買ひなすつたか。

道庵　つまらぬことだが白い毛に紅の付くのが命ぢやて。

典藏　其處を跡で嘗められるか。

道庵　いかにも、それが當でござる。

典藏　手前も矢張同樣でござる。（ト矢張右の鳴物にて本舞臺へ來り、）や、其處に居るのはお妾の、おつた殿の召仕。
道庵　おなぎ殿でござつたか。
なぎ　これは〳〵典藏樣に道庵樣、お參りでござりますか。
典藏　手前は少し處用あつて參詣旁參つたが、是なる醫者の道庵老は、彼美婦人の嘗筆を、態々買ひにござつたのだ。
道庵　愚老ばかりか典藏殿も、嘗筆の顏に見とれ、涎をたらしてござつたのだ。
典藏　手前は外に思ひを掛ける戀焦れた婦人があれば、嘗筆如きに目は掛けぬ。
みつ　戀焦れたとおつしやるのは、此神明でござりますか。
女　それとも貴方の御近所の、愛宕下でござりますか。
典藏　いや楊弓場や茶屋などの、そんなはすはな者ではない。
みつ　それでは大方藝者衆か、圍ひ者でゞもござりますか。
典藏　當らず共遠からず、それに付いてコレお內儀、少し爰に內談あれば、暫く奧へ行つてくりやれ。
みつ　畏りましてござります。

女　私も奥へ參りませう。

なぎ　左樣なれば私も、（ト立上るを、）

典藏　いや、おぬしは爰に居てくりやれ、少し賴みたいことがある。

なぎ　何御用か存じませぬが、急ぎの用事がござりますれば。

典藏　いや、決して長く手間はとらせぬ。

みつ　どれ、私共は仰せに任せ、

典藏　暫時退座致してくりやれ。（ト流行唄の合方にておみつ女付いて奥へはひる。）

なぎ　して、私へお賴みとは。

典藏　ハテ忙しない、靜に致せ。（ト合方楊弓の音になり、）おぬしに身共が賴みといふは、チト素面では言ひ難いが、何を隱さうおつた殿が去年屋敷へ上つてより、一月毎に容貌が上り、今日此頃は楊貴妃か小町も及ばぬ美しさに、恥かしながらぞつこん惚込み、折がなあらば口說かうと日々心を惱せど、扨よい首尾のあらざるに、爰でおぬしに逢つたのは神明兩社の引合せ、手前が斯程に思ふ事を、おつた殿によく話し、どうかおぬしの働で取持つてくれまいか。

道庵　典藏殿も此戀で　顏に似合はぬぶら〳〵病ひ、是が外の病氣なら耆婆遍鵲も三舍をさける名醫の

愚老が配劑で、忽快氣に致せども、是ばかりは藥でいかぬ、先づ出來ようか出來まいか、此の診察はおぬしに限る。

典藏　首尾よく是が整へば、禮はおぬしの望み次第、何なりと致さうから、何分共に宜しく頼む。

なぎ　折角のお頼みながら、外の事と違ひましてよく芝居でも申しますが、不義はお家の堅い御法度、左樣な事のお取持は、私には出來ませぬから、お斷り申しまする。

典藏　それは所謂昔堅氣、堅い屋敷の奥勤も御佛參をだしにして、代地邊りの出合茶屋で色に逢ふのが身の樂しみ、明けても暮れても殿樣ばかり、定めて鼻に付かうから又たまさかには口直しに保養をせぬのは體の毒、よくおぬしから此事をおつた殿へ勸めてくりやれ。

なぎ　假令何程お頼みでも、猥らなことのお取持は、お斷り申しまする。

道庵　操正しきおつた殿に、仕へる事故尤もだが、そんな野暮を言はないで、典藏殿から過分のお禮でも貰ふ方が當世だ。

典藏　是非共おぬしに此戀の、執持を頼みたい。

なぎ　其お頼みはどうあつても、お斷り申しまする。

典藏　すりや、是程に頼んでも、

なぎ　お執持は出來ませぬ。（トきつと言つて立上る。）

典藏　さつ沒義道にいはずとも、（ト典藏立上る。是にて床几ひつくり返り、端に掛けし道庵どうと下に居て、）

道庵　あいた――、

典藏　や、こりや床几が刎ねたか、（ト道庵起上り、）

道庵　龜の尾をひどく打つた。

ト此内おなぎは下手へ逃げてはひる、典藏四邊を見て、

典藏　今の騷ぎにおなぎめが、何處へか逃げて行きをつた。

道庵　全體貴殿が此事を、あのおなぎに賴むなら、幾らか先へ鼻藥を盛つたら承知もしませうに、只では誰でも執持ませぬ。

典藏　遣つてもよいが我身でも、十が九ツ出來まいと思つて居る故やらぬのだ、素手で賴んだばかりに斷られても損がゆかぬ。

道庵　貴殿は損が行くまいが、愚老は床几がひつくり返り、尻餅を搗いたので、小袖へだいなし泥がつき、餘程の損を致したわえ。

典藏　それは近頃氣の毒千萬、洗ひ張の賃錢位は、身共が進上致すでござらう。

道庵　實はだいぶ汚れし故、洗ひ張を致さうと存じ居つた所でござれば、何よりそれは忝い。
典藏　いや、昨日同意の人々へ申合せの義があつて、廻狀を出したが、貴殿方へ屆きましたか。
道庵　いかにも、愚老が止りにて昨日廻つて參つた故、御返上致さうと、則懷中致し居る。
典藏　人目を厭ふ廻狀故、手前へお渡し下されい。
道庵　承知致した。（ト紙入より廻狀を出し、典藏へ渡す。）
典藏　道庵老には神明前で、測らずお出合ひ申したが、今日は何れへござられしぞ。
道庵　豫々貴殿の御親父よりお賴みありし毒藥を、
典藏　アコレ、（ト抑へる。大拍子になり四邊へ思入あつて）扨は貴殿へ賴み置いたる、かの砒霜斑猫を。
道庵　容易なことでは賣らぬ故、懇意に致す藥店より今日求めて參つてござる。
典藏　それがお手に入る上は、大望成就遠からず、よくもそれが手に入りましたな。
道庵　貴殿と違つて御親父は、先へお禮を下さる故、働き方が違ひますて。
典藏　其仰せでは閉口致す、申し譯に車屋で、ちよつと一杯やりませう。
道庵　いや御親父がお待兼故、愚老は直に歸りませう。
典藏　然らば手前も貴殿と一緒に。

道庵　屋敷へお歸りなさるゝか。
典藏　申し談ずる密事もあれば。
道庵　ときに、茶代は如何なさる。
典藏　今日は借りて參ると致さう。

ト大拍子になり、典藏先に道庵付き花道へはひる。おみつ出て來り、

みつ　言ひたいことを勝手に言つて、茶代も置かずに歸るとは、呆れた山さんだ、あれでお蔦さんを執持てとは、お國に鏡がないか知らぬ。（ト下手より以前のおなぎ出て來り、）
なぎ　おみつさん、先程は、
みつ　典藏さんの無理なお賴み、嘸お困りでござりましたらう。
なぎ　まことに困り切りました、なんぼ御用人の御子息でも、此執持が出來ますものか。
みつ　ほんに男といふものは、顏にも恥ぢずあのやうな事が言はれたことでござんす。
なぎ　此後案じられるのは、己が惡いことを思はず、取持たぬのを遺恨に思ひ、旦那樣のお身の上に拘はることでもせねばよいが、（ト思入あつて、）物案じをするせゐか、胸騷ぎがしてなりませぬ。
みつ　典藏樣も御身分のあるお方。そんなにお案じなされますな。

なぎ　はい、有難うござります。左様なら、モウ私はお暇致します。

みつ　そんなら昨日お忘れなされました簪を上げませう。（ト懐より紙に包みし鼈甲の簪を出すおなぎ請取り）

なぎ　是は有難うござりまする。此簪も旦那様から、此間お貰ひ申しました。

みつ　よい簪でござりますな。（トおなぎ過つて件の簪を落す。）

なぎ　是はしたり、簪を。

みつ　え、お落しなされましたか。（トおなぎ簪を拾ひ、）

なぎ　こりや石へでも當りしか。

みつ　惜しいことに折れましたな。（トおなぎ簪を持ち思入あつて、）

なぎ　折も折とて旦那様から、お貰ひ申した簪が、物の見事に二ツに折れしは。

みつ　え、（ト思入。）

なぎ　あ、心に掛る、（ト紙に包みて懐へ入れるを、道具替りの知せ、）事ぢやなあ。

ト唄になり、心に掛る思入、是にて宜しく道具廻る。

（磯部邸の場）――本舞臺三間の間平舞臺、正面九尺の大床の間、續いて袋戸棚違ひ棚、上下銀

襖、日覆より大欄間を下し、花道の揚幕杉戸の出入り、舞臺花道共一面に薄緣をしき、すべて磯部屋敷書院の體、茲に吾太夫繼上下一本差し、更けたるこしらへ、作藏、傳平、權七、勘六何れも袴一本差しにて佇ひ、此時得合方調べにて道具留る。

吾太　何れも、四邊に誰も居らざるか。

四人　はッ、（ト上下の襖の内を見て）

作藏　誰もお次に、

四人　居りませぬ。

吾太　然らば、是へ、

四人　はッ、（ト前へ出る、誂への合方になり、）

吾太　豫て各々と密談せし我大望成就なし、家老職に立身なし、一家の支配をなすに至らば、同意めされし恩賞に、役儀は元より扶持も又倍增になす所存故、時の到るを相待たれよ。

作藏　いや、立身出世致すとは、何より以て忝い。

傳平　我々共は身分もなく、御扶持も纔な三人扶持。

權七　非番の折に內職を、出精なして致さねば、

勘六　三人扶持で五人の家族、妻子を養ふことがならぬ。
吾太　小身者の難儀致すを、存じながら取立てぬは、御家の補佐なす家老職が、只自己のみ大祿取り、纔な扶持を取る者を哀れまざる大慾故、是を打捨て置く時は、終には家中の其内に遺恨を含む者あつて、一家の亂になるは必定、是迄諸侯に騒動のありしが前車のいましめなり。
伴藏　仰せの如く家老職、浦戸殿が馬鹿賢く、
傳平　近頃お家も引續きお物入が多い故、
權七　立身出世は三ヶ年一切ないとの言渡し。
勘六　三年立てば又三年、果てしのござらぬことでござる。
吾太　其のお物入の多いといふのは、殿が驕奢にふけり給ひ、妾狂ひをなさる故、磯部のお家永續なすには恐れ多いが先づ殿をお下屋敷へ御隱居させ、斉喬家の家老職浦戸兄弟を片付けて、御幼稚の若殿にて御家督相續なす時は、お物入が過半の違ひ、爰を目當に某が密に企つ隱謀は決して我身の欲にあらず、先づ第一が御家の榮え、第二に小まへの人々が加増をなして妻子の育みなす樣に、致したいが我望み、然し是とて一人にて成就なさゞることなれば、志しある人々を味方にお頼み申してござる。

仲藏　其儀は豫てお賴みゆゑ、より〳〵家中の者共の心を引いて見たるところ、

傳平　我人共に小身者は難儀致す折柄故、追々增せし同意の者、

權七　旣に今日出仕の內にも、同意致せし者あれば、

勘六　只今是へ同道なし、お引合せ申すでござる。

吾太　爰は他聞の恐れあり、若し此事を悟られなば、身分に拘る一大事、其儀は後してのことに致さん。

仲藏　何樣それが上分別。して、又殿を御隱居さすには、

傳平　定めて貴殿の御計略が、ござることでござらうな。

吾太　性來殿は大酒にて、一徹短慮のお生れ故、常にお怒り絕えざるやう、家中の者の讒言なさばお手討などのあるは必定、それを越度に發狂と上へ言ひ立て御隱居させ、御幼年の若殿にて御家督相續なす所存。

權七　して又家老の浦戸兄弟、

勘六　此の兩人を片付けるには。

吾太　兄弟共に才智勝れ、容易な事で片付けられねば、是には手前に密計あり、

仲藏　して、其の密計と、

四人　仰しやるは。
吾太　口外ならねば、（ト伴藏傳平へ囁く、兩人又權七勘六へ囁き、）
四人　すりや、毒藥にて、
吾太　これ、（ト押へる、合方調べになり下手より以前の典藏、道庵出て來る。）そちは忰。
四人　道庵老。
典藏　これ、めつたなことをおつしやるな、譬にもいふ壁に耳、
道庵　油斷のならぬことでござる。
吾太　誰ぞ聞いて居つたるか。
典藏　襖の蔭にお妾の、おつた殿が聞いて居ました。
吾太　おつた殿が聞いて居つたか。
典藏　今宵殿へ御寢所で、
道庵　訴へられゝば一大事。
吾太　さう聞く上は差當り、おつた殿より先づ先へ。
道庵　其儀は氣遣ひめさるゝな、手前が胸に手段がござる。

吾太　して道庵老へ頼みたる、彼の一藥は整ひましたか。
道庵　今日整へ參つてござる。（ト袱紗包の器を見せる。）
吾太　一藥整ふ上からは、短兵急に事をなし、日頃の望みを叶へにや置かぬ。
典藏　はて、面白く、
兩人　なつて參つた。（ト花道の揚幕にて、）
呼ビ　お歸り、
吾太　最早殿のお歸りなるか。
典藏　手前は思ふ仔細あれば、
吾太　お出迎ひを致さずに、
典藏　是よりお次へ參るでござる。
ト典藏下手へはひる、吾太夫初め皆々出迎ふ、花道より主計介上下一本差、近習の侍上下にて、殿の刀を持出て來る、花道でちよつと思入あつて直に舞臺へ來る、皆々ハツと平伏なす、主計介上手へ住ひ、近習二人後に控へる。
吾太　はツ、只今お下りにござりまするか、見上げますれば御機嫌宜しう、恐悦申し、

皆々　上げまする。（ト主計介思入あつて）

主計　予が面機嫌よう見ゆるか。

皆々　はッ。

道庵　替らせたまふ御様子なきが、

主計　いや、主計介心悪い。

道庵　お心悪しくば御診察を、（ト側へ寄るを、癇の起りし思入にて）

主計　それには及ばぬ、（トきつと言ふ）

道庵　はッ、（ト控へる。）

吾太　して又何故御前には、お心悪うござりまする。

主計　今日殿中にて面皮をかきしぞ。

吾太　そりや如何なる事にて。

主計　本家でなくば其儘に、堪忍ならぬことなれど、血で血を洗ふ一家故、無念を怺へし立歸つた。

吾太　スリヤ御本家様が又例の、御酒興故でござりますか。

道庵　才智勝れしお方なれど、

作藏　兎角に御酒を召上ると、
傳平　常に替りてお詞荒く、
權七　定めてお氣に障ることを、
勘六　仰せられたで、
五人　ござりませう。（ト誂の合方になり主計介思入あつて、）
主計　今日心惡いのは、予が妾つたを、先達茶會に招きし土井殿や水野殿が褒められしが、本家の心に障りしか、つたを惡ざまに申せし上、世界に女子もなき樣に其日稼ぎの魚賣裏家住居の者の娘をいかに茶事を好めばとて餘り物好過ぎるなど〻、予を誹謗致せし故、假令下賤の者たりとて同じ天下の人にして、乞食非人の娘ならず、殊に蔦が性質は貴人の娘にまさりし故、予が妾に致せしと申しては歸りたれど、本家といへど養子にて當家よりは劣りし分家、其身の以前も顧ず人を人とも思はぬ雜言、今日は蟲を怺へ齒を嚙んで歸りしが、此後かやうなことがあらば、本家とは言はさぬ所存、返す〴〵も殘念なりしぞ。（ト口惜しき思入。）
吾太　よく御堪忍遊ばしました、殿なればこそ御本家故、其儘お歸りなされたれど、夫の元祿の淺野殿なら刃傷に及ばれませう、まあ何は然れお奧へ入らせられ、お蔦殿をお相手に酒宴をお開き遊ば

しませ。

主計　いや、蔦より起りしことなれば、今宵は奥へ參らずに、小姓を相手に一獻汲まん。

吾太　左樣なれば、

皆々　是よりお居間へ、

主計　酒宴の用意申付けい。

近習　畏つてござります。

主計　どりや、一獻過さうか。

　　ト唄になり、主計介思入あつて、近習附き奥へはひる、皆々跡を見送り、

吾人　岩上氏。

吾太　これ、（と合方になり、）次第に募る殿の癇癖、殊には本家に勝るとも劣らぬ酒の惡いが取柄、此樣子では遠からず上より隱居の御內意あらん。

道庵　其の虚に乘じて大望の、

作藏　妨げになる者どもを、

傳平　道庵老が配劑ありし、

権七　此の一藥を竊に用ゐ、
勘六　浦戸兄弟片付ければ、
吾太　當家の權を取るは某、
道庵　其時こそは我々も、
作藏　一足飛の、
五人　立身出世、
吾太　はて悦はしい、（ト立上るを道具替りの知せ）事ぢやなあ。

ト時の鐘早めたる合方にて、此の道具廻る。

（奥庭辨天堂の場）——本舞臺正面上寄りに二間常足の二重破風造りの屋根、本縁付軒口に辨財天といふ額を掛け、誂の銅燈籠、向う跡へ下げて二枚開きの唐戸、左右小窓のある板羽目、屋體の左右石燈籠上の方屋根付の石の手水鉢、上下樹木の張物にて見切り、諸所に松楓の立木、日覆より同じく釣枝、樹木の後池を見たる奥庭夜るの遠見、日覆より霞付灯入の月を下し、すべて奥庭辨天堂の體、時の鐘合方にて道具留る。と矢張時の鐘合方にて、花道より以前の奥藏袱紗包の茶碗の箱を持出て來り

花道にて跡を振返り、思入あつて舞臺へ來り、

典藏　先達よりおつた殿が、茶道に上達なしたるを、殿には鼻毛を伸ばされて御先祖よりして傳來の御家の寶の井戸の茶碗、惜し氣もなく貸されしが、上方へでもやる時は大した金になる代物、どうかしてちよろまかしたいと、疾から心を掛けて居つたが、祕藏の猫が居らぬとて部屋に誰も居らぬを幸ひ、まんまと奪ひ取つたるが、所持して居るは險難故、此の床下へ隱して置き、我がいふことを聞く時は、そつと是を返して遣り、聞かぬ時は是を越度に、叶はぬ戀の意趣晴し、兩天秤し旨い手段。何にもせよ、氣がせいて中を見ずに持つて來たが、よもや茶碗に相違はあるまい。（ト箱を明け中より茶碗を出して燈籠の灯で是を見て、）紛ふ方なき井戸の茶碗、

ト此時さしがれの三毛を赤猫追掛け來て、典藏の足を潛り三毛猫上手へ逃げ入る、赤猫典藏の足へじやれる、是にてびつくりして茶碗を落し、二ツに割り、此時以前の廻狀を落す、三毛猫出て廻狀を銜へ、上手へはひる、赤猫追掛け入る。

えゝ、びつくりしたが、今のは猫か。大事の茶碗を落したが、（ト取上げ見て、）南無三二ツに割れてしまつた、是はつまらぬことをしたが、割れたが何ぞ役に立つ、いゝ手段がありさうなものだわえ。

ト四邊を見やりうなづき、箱の中へ茶碗を入れ、袱紗に包み緣の下へ隱し、ほつと思入、此時向うにて人音する故思入あつて、上の方へ忍び入る、時の鐘打上げ、誂へ兩吟の唄になる。

〽月もまだ雲に隱れて影暗く、靜けき庭の泉水に、秋の蛙の聲さびて、過にし春をしのぶ草

ト よき程に花道よりおつた好の鬘着流し、庭下駄にて出て來り花道にて、

つた 月日の立つは早いもの、此お屋敷へ參つたも昨日今日のやうなれど、算へて見ればもう二歲、夏の暑も涼風に忘れて秋の末となり、小春に近くのどやかに月も朧に霞む空、春と思うて飼猫の三毛が二夜さ歸らぬが、辨天樣の邊りにて慥に聲がした樣子、そこらを尋ねて見ようわいな。

〽荻の上風そよ〳〵と、結びし露のこぼれ萩、（ト此内舞臺へ來り、四邊を尋ねる思入あつて、）

三毛や〳〵、こりや外の猫であつたか知らぬ。

〽時雨も近く木々は染み、夜目にもそれと見るや椛葉、

ト上手より典藏出て旨いといふ思入あつて、

典藏 にやア、（ト猫の眞似をする、びつくりして、）

つた や、今鳴いたのは。

典藏 猫の戀より猶一倍、戀焦れたどら猫だ。（ト前へ出る、おつた見て、）

つた　さう仰しやるは典藏殿、思ひがけない此處に。
典藏　おまへが三毛の行方をば、捜しに出たる影を見て、跡から爰へ付けて來たのだ。
つた　そりや何故に、跡を慕うて。
典藏　何故とは情ない、（ト誂への合方になり、）疾よりおぬしに心を通はすは我目遣ひでもしれた事、さつきも折能く神明で召仕のおなぎに逢ひ、取持ちくれと頼んだを、定めて歸つて言つたであらう、疾から折があつたらばと待ちに待つて居た此の典藏、今宵はからず爰で逢つたは辨天樣の引合せ殿から見れば男振は餘程下落致して居れば、所詮氣には入るまいが、二年此方惚込んで目の窪む程こがれた身共、心を察してお蔦殿、色よい返事を聞かして下さい。
　　トいやらしき思入、お蔦こなしあつて、
つた　生れも賤しい私へ、心を掛けしとおつしやるのは、そりや僞でござりませう。
典藏　僞どころか眞實眞から、ぞつこんおぬしに惚れこんだ。
つた　それ程思うて下さりますとは、有難うござりますが、此御返事はなりませぬ。
典藏　なに、ならぬとは、
つた　私から申さずとも、あなたのお胸へ手を置いて、能う考へて御覽じませ。

典藏　ウム、考へて見よとは。

つた　御縁あつて殿様のお寐間の端をけがす私、冥加に餘る事故に、男猫さへ飼はぬ程身を愼んで居りまする、お前様も御用人の吾太夫様の御子息にて、大事のお身ではござりませぬか、人が左様なことをなさば、御異見なさる御重役、申す迄もござりませぬが、お役柄を思召して、チトお愼みなされませ。

典藏　お主に左様言はれては、一言半句典藏が返す詞はなけれども、道にかけるも不忠になるも、元より覺悟の上なれば、よしんば事が露顯なし、如何なる咎を蒙るともおぬしゆゑなら厭ひはせぬ、一度思ひを晴しなば、以後はきつと愼むから、是非とも得心してくりやれ。

つた　お前様は思ひを晴し、それで宜しうござりませうが、操を守るわたくしが不義の科を着る時は、生れが賤しい者故に、道に背きしことせしと、人に言はれまするのが口惜しうござります、假令なんと仰しやつても、此の御返事は致しませぬ。（トきつと言ふ、典藏袖をとらへて、）

典藏　スリヤ是程に申しても、身共が心に從はぬか。

つた　仰しやるまでもござりませぬ、何でお心に從ひませう。（ト袖を振拂ひ行かうとするを留めて、）

典藏　得心せねばもう是迄、一旦口外なせし上は、手籠めになして思ひを晴す。

つた　さう聞く上は少しも早う。

典藏　めつたに爰を逃すものか。

ト捉へるを振り拂ひ、ちよつと立廻りて典藏後から羽がひじめにする、お蔦身をもがき、

つた　狼藉者でござります、誰ぞ來て下さりませ。

典藏　人に來られてなるものか。

つた　誰ぞ來て下さりませ。

ト典藏口を押へようとするを拂ひのけ、逃げるを典藏帶をとらへ引く、是にて帶解け向うへ行く、典藏引戻すはずみにお蔦脇腹を突き、ウンといつて倒れる。典藏びつくりして帶を上手へはふり、抱起さうとする途端、ばた／＼にて花道より紋三郎袴大小庭下駄にて出て來る、典藏是を見て、上手へ逃げてはひる、紋三郎花道へ留り、

紋三　庭の隅なる辨天堂で、女の叫ぶ聲なすは唯事とは思はれず、あれへ參つて樣子を見ん。（ト合方にてツカ／＼と舞臺へ來り、お蔦の倒れ居るを見て、）扨こそ爰に倒れし女、正しく氣絶なしたる樣子、（ト此時月へ霞をかけ、）折も折とて雨雲にて、月の光を隱せし暗がり。（ト軒の釣燈籠を下しお蔦を見てびつくりなし、）や、こりやお妾のおつた殿、如何致せしことなるか。（ト燈籠を下へ置き抱起し、）

おつた殿〱。

ト呼び生け、氣が付ぬゆゑ上手の手水鉢を見て柄杓へ水を汲み口を割つて呑せ呼生ける、是にてウンと息を吹返す。

心が付きしか、おつた殿。

つた　さう仰しやるは。

紋三　浦戸紋三郎でござるぞ。(トお蔦顏を見て嬉しき思入にて、)

つた　それではあなたは私を、お助けなされて下さりましたか。

紋三　只今小用に參らんと、廊下へ出れば庭前の辨天堂の邊りにて、女の叫ぶ聲なすは常事ならずと存ぜし故、直に是へ駈付參り、見れば御身が氣絶の體に、手前が介抱致せしが、是には定めし仔細ぞあらん、如何なることでござりしぞ。

つた　昨夜よりして飼猫が遊びに出て歸りませねば、何れへ行きしと尋ねる内、辨天堂の邊りにて鳴聲が致します故呼びに參りし其處へ、典藏殿が忍び參り、我身をとらへて無理口說き、手籠になさんと致せし故、聲を立てゝ呼びましたので、貴方が是へお出で下され、危ふい難儀を脫れまして、有難うござりまする。

紋三　扨は典藏が御身をとらへ、手籠になさんと致せしとか、何にもせよ某が是へ駈付け參つたので
此場の危急を脱れられしぞ。
つた　此のお禮にはお前樣へ、お家を覘ふ佞人の、密事をお知らせ申しませう。
紋三　お家をねらふ密事とは、それは容易ならぬこと、シテ其の密事と言はれるのは。
つた　只今お話し申しまする。(ト此時仕掛にて風の音になり、燈籠の灯り消ゆる、)
紋三　愛宕颪しの風烈しく、
つた　此の燈籠を吹消せば、
紋三　思ひがけない暗やみに、
つた　長居致さば、身の疑ひ、
紋三　密事を早く告げられよ。(ト時の鐘後へ以前の典藏出て、お蔦の帶を取り、是を抱へて、)
典藏　不義者見付けた。
兩人　え、(トびつくりなす、)
典藏　動くまいぞ。
ト時の鐘忍び三重模樣の合方になり、お蔦帶を繰れる、是を典藏とらへる、紋三郎透し見て典藏を引

退け、お蔦に逃げろといふ、お蔦は帶に心引かれ逃兼ねる立廻り、おつた帶へ手を掛ける、典藏拂ひ退ける、此内花道より十左衛門繼上下、大小草履にて出て來り、花道にて舞臺を窺ひ、袴を引上げきつと思入、舞臺は紋三郎眞中に三人引張りの見得、是にて誂へお家だんまりの鳴物になり、十左衛門舞臺へ來り、此中へはひり、四人だんまり模樣の立廻り宜しく、トヾ紋三郎お蔦は花道、典藏は帶を抱へ、是を證據に訴へるといふ思入にて、東のあゆみへ行く、十左衛門は花道の方へ思入あつて、

十左　扨は、今のは。

ト典藏エイと礫を打つ、身をかはして向うを見込むを木の頭、時の鐘早き合方にて双方花道へはひる。月出て十左衛門跡を見送る、此の模樣宜しく、

ひやうし幕

ト時の鐘にてつなぎ、道具廻しにて、直に引返す

（お蔦部屋の場）――本舞臺三間の間平舞臺、正面上手一間床の間、續いて一間袋戸棚、此下違棚、茶道具を並べ、下手一間中形の襖、上の方一間折廻し障子屋體、下の方板羽目廊下の心、すべてお蔦部屋の體、よき所に丸行燈、此そばに前幕のおなぎ火鉢へ藥鍋を掛け、藥を煎じ居る、下手に腰元千種早分兩人住ひ、此見得合方にて幕明く。

千種　これおなぎ、そなたの旦那のおつた樣は。
野分　まだお歸りなさらぬか。
なぎ　いま、猫を搜しにお庭の方へ、先刻お出でなされましたが、未だにお歸りなされませねば、大方何處ぞへお寄りなされ、お話しでもなされまして、おいでなされると見えまする。
ト兩人思入あつて、
千種　それではそなたは、今夜の話しを、
野分　何も聞かぬと見えるわいの。
なぎ　何も私は聞きませぬが、變つたことでもござりましたか。
千種　今宵辨天堂の暗がりに、お蔦殿がお屋敷内で、能い男と評判の、紋三郎樣とたゞ二人、
野分　おいでなされましたのを、不義者なりと意地惡の、典藏殿が見咎めて今お調べがあつたわいの。
なぎ　えゝ、そりやほんまの事でござりますか。（トびつくりする。）
千種　全く猫を奧庭へ搜しにお出でなされたなれど、人もあらうに典藏殿に、見咎められたが御災難。
野分　それに相手が紋三郎樣、男がよいゆゑ蔭言に、大方さうであらうなどゝ、いふ者があるわいの。
なぎ　それはまあ、思ひも寄らぬ御災難、どうしたらようござりませう。

千種　然し覺えのないことなら、自然に詞にまことが知れ、

野分　申し譯が立たうから、さう氣を揉むには及ばぬわいの。

なぎ　何ういふ事か御樣子を承り度く存じますが、又者の身に其お席へ參る事がなりませねば、お前樣方が御樣子を、お聞きなされましたらば、お知せなされて下さりませ。

千種　是から參つて立聞なし、

野分　又々知らしてやらうわいの。

なぎ　どうぞお願ひ申しまする。

腰元兩人　どれ、立聞をしませうか。（ト合方にて兩人下手廊下口へはひる、おなぎ心に掛る思入にて、）

なぎ　どういふ事で旦那樣は、辨天堂に紋三郎樣と二人でおいでなされまして、思はぬ不義のお疑ひをお受けなされましたるか、さつき折れた簪も何ぞのしらせであらうかと、思ふ所へ今のお話しお目にかゝつて御樣子を、承らぬ其内は心も心ならぬわいな。

ト此時火鉢の藥鍋吹きこぼれ、ぱつと煙り立つ、おなぎ藥鍋を下し蓋をあけ見て、

おゝこりや、お藥が詰つたわいな。

ト茶碗へついで見る、時の鐘床の淨瑠璃になる。

淨るり へ唯さへも秋は物憂きものなるに、お蔦は不義の疑ひうけ、胸もふさがる雨催ひ、晴れぬ思ひにしを〳〵と、歩む廊下は直なれど心曲りし佞人に、圍まれ歸る部屋の口、おなぎはそれと見るよりも、

ト此内おなぎ藥へ湯をさし、火鉢へ掛ける、よき程に下手より以前のお蔦しごきにてしを〳〵と出て來り、跡に伴藏、傳平付添ひ出る、お蔦立留り我裝を見てぢつと思入、おなぎお蔦を見てツカ〳〵と出迎ひ、

旦那樣、お歸りなされましたか。

つた おゝ、なぎか、嘸待つて居つたであらうの。

なぎ おゝ、お案じ申して居りました。

つた 御兩所樣にはお見送り、御苦勞に存じまする。（ト辭儀をする。）

伴藏 何れ不義のお調べは、殿の仰せを承つて、

傳平 後刻嚴しき御詮議あらん、ぢつと蟄して、

兩人 待つてござれ。

つた 畏りましてござりまする。

仲藏　不義を見留めた典藏殿が、定めて強い詮議をなさん。
傳平　見物なすが今より樂しみ、詰所へ參つて、
兩人　相待ち申さう。
〽心よからぬ兩人が尻目に掛けて入りにける。
ト兩人思入あつて下手へはひる、おなぎお蔦の側へ來て、
なぎ　もし旦那樣、こりやどうなされたのでござりまする。
つた　そなたは話しを、まだ聞かぬか。
なぎ　千種樣や野分樣が、今し方おいでなされ辨天堂のあらましを、おしらせなされて下さりました。
つた　思はぬ不義の疑ひ受け、言譯さへもならぬ仕儀、是も此身の災難と諦めては居るけれど、無實の罪に陷いるが口惜しうてならぬわいの。
〽身を震はしてさめ〴〵と、悔し淚にくれければ、（ト お蔦悔しき思入にて泣く。）
なぎ　昨日からお血の道でお心持がお惡いと仰しやります故、お藥を煎じ上げて置きました。其の御樣子もあなたから委しうお聞き申したいが、お逆上なされておいでの御樣子、お血のをさまります樣、是をおあがりなされませ。

へ丁度加減も吉野畫の、盆に載せたる皿の道の、藥もあつき親切に、

トおなぎ茶碗へ藥をつぎ、盆へ載せて出す、お蔦思入あつて、

つた　折角煎じて呉れたけれど、藥はよしに仕ようわいの。

なぎ　不斷お皿の納る樣、持藥の樣に召上るに、なぜお上りなされませぬ。

つた　此身に覺えはないけれど、不義は御家の御法度なれば、言譯立たねば罪に落ち、お手討になる私ゆゑ、藥を呑むには及ばぬわいの。

なぎ　そりや左樣でもござりませうが、元よりお覺えのなき事なれば、神や佛のお惠みで申し譯が立ちませうから、どうぞ召上つて下さりませ。

つた　神や佛のお惠みでも、申分の立たぬのは、不義の證據に解捨てし帶を持つて行かれたれば、覺えないとばかりでは、申譯が立つまいわいの。

なぎ　どうしてあなたおみ帶を、其場へお解きなされました。

つた　是にも深い譯あつて、（ト誂の合方になり、）三毛を尋ねに辨天堂へ行つた姿を典藏殿か、何れで見たか忍び來て、私をとらへ無理口說、果ては手籠に仕ようとせし故、袖を拂つて逃出せば、しめたる帶の端を取り引かれて解けしも其儘に、逃げるをとらへて迫る折、聲を立てしを怪しみて紋

三郎様がお出なされし影を見るより典藏殿が、逃げるはずみに脾腹を打たれ、私が氣絶なしたるを、紋三郎様の御介抱で再び息を吹返し、危い命の助りしお禮に、岩上吾太夫殿の企みをお知らせ申さうと、思ふ折柄夜嵐に銅燈籠の灯りを消され、跡は暫しの暗がりに、二人居りしを不義なりと帶を證據に典藏殿に、訴へられしが身の災難、是といふのも吾太夫殿の密事を私が聞いたが誤り、それを人に言はうかと不義の科にて殺す所存、此身は是非もないけれど難儀を助けて下されし、紋三郎様が覺えもない不義の相手と言はるゝが、お氣の毒でならぬわいの。

なぎ　さういふ事なら吾太夫殿の密事の企みを御家老の、十左衛門様へ申上げたら惡い人がお咎め着てあなたの明りが立ちませうに、何故其事をおつしやりませぬ。

つた　辨天堂で典藏殿が迫りし事をいうたれば、不義の科を脱れん爲めの拵へ事と言張られ、佞人共より御前様へ讒言がしてある故、何を言うても通らねば、所詮命は助からぬ、不思議な縁でそなたにもお竹からして一方ならず、世話になつたも今宵限り、明日はお咎め蒙れば顔見ることもならぬわいの　そなたに私が頼みがあるが、どうぞそれを聞いてくりや。

なぎ　どんな事でもお頼みなら、聞かいで何と致しませう。して其お頼みとおつしやりますは。

つた　さあ、其の頼みといふは。

なぎ　どの樣なことでござりまする。

〽問はれてはツと胸迫り、先立つ涙呑込みて、（トお蔦思入あつて、）

つた　頼みといふは外でもない、不義の科にて御前樣のお手討になり死んだらば、そなたは私の宿へ行き、斯ういふ無實の災難ではかなく死んだと其場の樣子を、父さんや兄さん夫婦へ、委しう話してくりやいの。

なぎ　お主大事に今日迄も、お勤めなされし旦那樣、さういふ事はござりますまいが、

〽もし神佛のお助けなく、はかない御最期なされたら、

其場の樣子を承り、お宿へ參つて皆樣へお話し申すでござりまする、然しお覺えのない事なれば、さういふ事にはなりますまいと存じますれど、はかない死をばなされましたら、誰を力に致しませう。

〽常々お話し申せし通り兩親とても今はなく、頼りは伯母があるのみゆゑ、

天にも地にも私が力と思ふはあなたばかり、何ヶ年でもお側に居て、お仕へ申す心で居りしに、さういふ事になりましたら、どう致したらようござりませう。

〽どう致さうと行く先を、思ひ迫りて泣伏せば、（トおなぎ宜しく思入あつて泣きふす。）

つた　其時こそはお暇願ひ、宿へ歸つて何れへか、よい主取をしたがよい。

なぎ　いえ／＼あなたにお別れ申せば、モウ御奉公は致しませぬ。

つた　何處へ行つてもそなたなら、立派に勤められる故、よい奉公をしたがよい。

〽言ひつゝかたへの小箱より、櫛笄を取出し、（ト違ひ棚にある簪箱より鼈甲の櫛笄を出し、）日外そなたがほしいと言つた櫛笄は置土産、形見に是を遣はすから、思ひ出す日があらば、私と思うて櫛笄へどうぞ回向をしてくりやれ。（トおなぎの前へ櫛笄を出す。）

なぎ　有難うはござりますが、是がお形見になりましたら、悲しいことでござりませう。

〽形見の櫛や笄に、憂きはなけれど悲しさに、身も浮くばかり打歎けば、外にも同じ思ひにてわつと一聲泣入る聲、

トおなぎ櫛笄を持ち宜しく愁ひの思入、此時下手障子の外へ梅次島田髷振袖小姓の拵へにて、伺ひ居て、此時わつと泣く。

つた　其處で泣くのは、誰ぢやぞいの。

梅次　はい、私でござりまする。

〽涙の雨の振袖に顏を押へて出る小姓、（ト梅次泣く／＼下手へ出る。）

つた　お〻お小姓の梅次殿か。

なぎ　それではお泣なされたは、お前樣でござりましたか。

梅次　只今是へ參りまして、障子の蔭で思はずも、悲しい事を承り、あなたにお別れ申したら、どう致さうかと私も、つい泣きましてござります。

つた　お前の樣な妹が、常々ほしいと思ふ所へ、どういふ緣か私をば慕ひなさるが可愛くて、妹の樣に思うたが、お前に逢ふのも今宵限り、もう明日からは逢はれぬわいの。

梅次　其のお詞を承り、一倍悲しうござりますのは、おなぎ殿と同じこと、私迚も兩親なく兒の世話でお小姓に上りましてござりまするが、年の行かぬを不便と思ひ、是は斯うしてかうする物と、優しう敎へて下さいますお方もあれば又中には、敎へもせずに不器用なと明暮おつしやるお方もあり、つらい事だと思ひしも去年からして何事も、あなたが敎へて下さる故、自然とお上のお首尾もよく、頂戴物を致すのでそねむお方がござりますも、後楯がござりますので、心丈夫でござりましたが、あなたにお別れ申したら跡でどのよに私が、いじめられるでござりませうと、思へば悲しうござりまする。

〽縋り歎かれいとゞ猶、身の悲しさに吐息をつき、（ト梅次お蔦に縋り泣く）

つた　何の力にならぬ者を、頼りに思ふお前やなぎに別れて行くのが何よりか私も悲しう思ひます、なぎは町より上つた者故、宿へ下つて又外へ奉公住をするであらうが、お前はお屋敷内故に成人する迄此御殿に御奉公をせねばならぬ、年が行かねば年上の者には誰にも負けて居て、例へばいぢめられようとも、蟲を怺へて逆らはず、お前の方から隨へば、

〽杖の下を潜る子は打たれぬといふ譬の通り、

再びいぢめる者はない、就いては是から一年増し段々大きくなるお前、屋敷勤めは第一に身を愼まねばならぬぞえ、あの典藏が既の事手籠になさうとした所を、折よく助けて下されし紋三郎樣と暗がりに、居たのが此身の越度となり、密通せしと訴へられ、

〽口惜うは思へども言譯ならぬ我過り、無實の罪に陷りて、

命を捨てる私の身が、お前方へはよい手本、掟嚴しいお屋敷の御奉公を致すには、男女の道を愼しまねば、此身の出世がならぬぞえ。

〽我身を手本に言ひ諭せば、

梅次　親も及ばぬ有難い、お蔦樣の其のお詞、

〽なぜにあなたが此樣な難儀にお逢ひなされますか、祈らずとても心さへ誠の道に叶ひなば

守るとおつしやる神様は、
今の此世にないことか。
〽悔しいわいのと泣きければ、お蔦は覺悟の思ひにて、(ト時の鐘に成り、思入あつて、)

つた　おゝ今打つのは四ツの鐘、

なぎ　常には長い秋の夜も、

つた　明日とつゞまる命故、

梅次　今宵は時も短うて、

なぎ　いつの間にやら月影も、

つた　西に傾く身の上ぢやなあ。
〽主從面打守り、是が此世の別れぞと、うるむ涙の雨催ひ、不便いや增すばかりなり、か、
る所へあわたゞしく以前の兩人立出て、
ト お蔦おなぎの手を取り二人別れを惜しむ思入、ばた／＼になり、下手より以前の兩人出て來り、

權七　お蔦殿へ申します、只今殿の急お召し、

勘六　則ち奥のお圍ひへ、直においでなされませ。

つた　すりや殿様のお召とな、
惣七　大酒の上の御癇癖、
助六　同道せよとの御意なれば、
つた　直に參りますでござりまする。
惣七　是にてお待ち、
兩人　申すでござる。
つた　なぎは着替を持ちや。
なぎ　はい、（トもぢ〳〵して居る。）
つた　持ちやといふに、
なぎ　はい。

〽はッとばかりに簞笥より取出す帯を見るにつけ、是が證據に言譯も長き別れに結びたる縁も今宵限りぞと、又も涙にくれながら、

〽おなぎ襖を明け、簞笥より誂への着附と帯を添へ、服紗に載せお蔦の前へ出す、梅次おなぎ心遣ひのこなしにて、

権次　思ひがけなく殿さまより、
なぎ　今宵俄のお召といふは、
つた　問はずと不義の御詮議ならん。
権上　察しの如くお圍ひにて、
勘六　御前が直の御詮議なり。
なぎ　それでは若しや旦那様には、
つた　是が別れに、
なぎ　え、（トお蔦氣をかへ、）
つた　いや、ちよつと着替へて參りまする。
〽是非も泣く〳〵立上れば、惜しむ名殘に右左縋る二人は恩愛の涙の雨にしめりがち、顏を背けて、
ト お蔦愁ひの思入にて、着附を着替る、此模様三重にて、
ト 調にてつなぎ、引返す、

幕

（庭前の場）——本舞臺三間の間常足の二重本庇正面一間の床の間、下手銀張の地袋戸棚、眞中瓦燈口、太鼓張の襖、腰張の茶壁、上の方後へ下げて障子屋體の前側、下の方屋根附の枝折門、左右屋根附の土塀、上の方前へ出して苔むしたる石の井筒、柳の立木日覆より同じく釣枝、所々に常磐木の樹木を置き、總て奥庭別亭の體。茲に前幕の吾太夫、典藏繼上下一本差にて佇み、左右に菊燈臺を置き、時の鐘、合方にて幕明く、

吾太　何と典藏、悦ばしいことではないか、我が謀計圖に當り、お蔦紋三兩人を首尾よく不義の科に落した。

典藏　同じ科ではあるけれど、紋三が詮議は跡へ廻し、毒害致す謀計を襖の陰で立聞きしたる、お蔦を先へ片付けねば、枕を高く夜が寐られぬ。

吾太　それ故娘へ酒を勸め、日頃の癇癖十倍せし折を計つて其方が掠め取つたる帯を證據に、辨天堂でお蔦紋三が密通せしと讒言なし、今宵是にてお手討になさるゝ樣にはからひ置いた。

典藏　世にも稀なる美婦人を、惜しいものではあるけれど、

吾太　味方の大事を知つたる上は、生かして置かば後日の妨げ、

典藏　お蔦が今宵お手討に、なれば紋三も脱れぬ同罪、

吾太　是から家老の十左衞門を、
典藏　彼の一藥で片付ければ
五太　さし詰跡は此の吾太夫、
典藏　追々大望成就の小口、
吾太　はて悅ばしいことではある。
〽親子は庭の井筒より深き巧みを示し合ふ、折柄爰へ主計介酒氣十分に氣も荒く、設けの席へ立出て、

ト吾太夫典藏宜しく思入、時計の音になり、奧より以前の主計介羽織袴一本差し伴藏袴一本差し、殿の刀を袱紗で持ち、傳平同じ拵へにて褥を持出て來る。吾太夫、典藏ハツト平伏なす、傳平褥を敷き殿此上へ住ひ、此時下手より權七出て來り、

權七　はツ仰せ付けられましたる、お蔦殿をば、召連れましてござりまする。
吾太　先刻よりお待兼ね、
典藏　急いで是へ連れられよ。
權七　はツ。

〽はツとばかりに引返し作ふ蔦は覺えなき、身の濡衣を干しあへず、袂重げに立出れば、殿は見るよりせき立ちて、

ト權七引返してはひり、直に以前のお蔦に權七勘六付添ひ出て來り、お蔦二重のずつと下手へ住ひ辭儀をする、主計介見て、

主計　こりや蔦、其方に問ふことあり、ずつと予が前へ進め。

つた　はツ。

吾太　御前のお召し、

典藏　進みめされ。

つた　はい、（ト出兼ねる思入。）

主計　えゝ、進めと申すに、（きつと言ふ。）

つた　はゝあ、（ト誂への合方になり、お蔦しほ〳〵前へ出る。）

主計　今其方に尋ぬるは、今宵奥庭の辨天堂へ、なに用あつて參りしぞ。

つた　豫て御前も御存じの飼猫三毛が昨夜より、何れへ遊びに參りしか、部屋へ歸りて參りませねば、所々を尋ね搜す内、辨天堂の邊りにて啼聲が致せし故、三毛を尋ねに辨天堂へ參りましてござり

まする。

主計　其の飼猫は辨天堂で男猫と交はり致せしならん。

つた　え、（トぎつくり思入。）

吾太　猫は春秋時ありて、猥りに交はりなさぬもの、それに引かへ人間は、

典藏　四季の時をば嫌はずに、人目を忍んで密會なすとは、猫に劣つたことでござる。

主計　其の折其の方一人か、但しは誰ぞ供に連れしか。

つた　私一人にござります。

主計　猫を尋ねに參りし者が、何故あつて辨天堂へ、帶を解き捨て置きたるぞ。

つた　え丶、（トはツと思入。）

主計　則ち訴への者あつて、予が手に入りしそちが帶、

へおつたははツとさし俯けば、してやつたりと典藏が差出す帶を目先へ突付け、

トお蔦さし俯く、典藏かたへにある前幕の帶を出す、主計介お蔦の前へ突付け、

解捨置きし仔細を申せ。

つた　さあ、其儀は、（ト言ひ兼ねる。）

主計　予が目を盜み密通せし故、あらはにそれと申されぬか。
つた　さあ、それは、
主計　疾く〳〵仔細を申さぬか。
　　へ問はれて今は是非なくも、
つた　御前のお耳へ入れまして恐入りしは、解くまじき女子の帶を解きました仔細は是なる典藏殿へ、お尋ねなされて下さりませ。
主計　なに、典藏に尋ねよとは。
典藏　いかにも手前が申上げん、今宵御殿を離れたる辨天堂に人影の見ゆるは合點行かざる故、必定是は曲者と駈付來る姿を見て、あわてゝ逃出る男女の二人、引捕らへんと思ふ內、月を覆ひし雨雲に昔さへ暗き木蔭の闇、見失ひたる堂內に解捨てありしこなたの帶、それ故直に事柄をお訴申せしぞ。（トお蔦是を聞き悔しき思入にて、）
つた　よくもまざ〳〵其樣な事をお上へ申されしぞ、こなたの恥辱を思ふ故、申上げずに置きたるが、今は何をか包みませう、辨天堂へ飼猫を尋ねに參りし其時に、跡を付けたる典藏殿が、我身を捉へて無理口說、袖を振切り逃出せば、帶際取つて引戻され、遂にしめたる帶を解き、手籠になさ

んと致せし故、聲を立てしに驚いて手を放せしを幸ひに、解かれし帶を其儘に逃歸りてござりまする。

典藏　これ〳〵おつた殿、辨天堂で紋三郎と帶紐解いてちゝくり合つた、いかに不義が顯はれて其身に火が付き苦しいとて身に覺えもない典藏が帶を解いたの口說いたのと、よくも其樣な僞りが言はれたことだ、ほツそりとした顏に似ず、さりとは太い料簡だ、忠義一途に精勤なす、我に罪を塗らうとは呆れ返つたことでござる。

つた　此方に證據がないといつて、よくも〳〵其樣な僞が言はれたことぢや。

典藏　まだ〳〵左樣なことを言ふか、此典藏覺えもない、口說いたの迫つたのと、人の事よりこなたこそ、よくも〳〵其樣な、僞が言はれたことだ。

〽疊み掛けて言ひ伏せられ、こなたは女子の言甲斐なく、只口惜しと泣くばかり、

トお蔦悔しき思入にて泣く、

吾太　いか程こなたが言譯なしても、最早相手の紋三郎は、白狀に及びしぞ。

つた　え、(トびつくりしながら、)それはまことでござりますか、

吾太　只今手前が宅へ呼び、段々尋ね問ひし所、初めは覺えなきよしを申張りしが、脫れぬことゝ覺悟

なせしか有體に、密通せしと白狀なせば、知らぬと言つても許されぬ。

典藏　相手が白狀せし上は、是迄なれば帶紐解き、密通せしと言はつせえ。（トお蔦合點の行ぬ思入にて、）

つた　すりや覺えもないことを、不義をせしと云はれしとか、さりとは男に似合はぬこと、其身ばかりか私へ、難儀をお掛けなさるとは、でも情ないお心ぢや。

典藏　いくらこなたが悔んでも、相手が白狀したからは、叶はぬことだ、白狀さつせえ。

つた　紋三郎殿は兎も角も、女なれども私は身に覺えもないことを、不義をしたと申しませうか。假令命を取られても、不義の罪には落ちませぬ。

典藏　いや、言はぬといつて此儘に、打捨置きては掟が立たぬ、是より手酷い拷問なし、不義の白狀致させん。

ト勢ひこんで立掛れば、

主計　典藏待ちやれ。

典藏　はツ、

主計　予が申し聞かすことあれば、そちは控へ居よ。

典藏　はツ畏ッてござりまする。（ト控へる。）

主計　こりや蔦、前へ出い。

つた　はい。

主計　出ろと申すに、（トきつと言ふ）

つた　はゝい、（ト誂の合方になり、）

主計　事新らしく申さずとも、そちが胸に覺えがあらうが、去年九月神明の祭禮の折菊茶屋に給仕をなして居つたるを、予が目に留り出入の者に身許を尋ねさせたるに、其日稼の魚賣と聞いたる故に、二百兩支度金に遣はして、直に妾になしたるが下賤の者に似合はぬしとやか、殊には柔和な心立に、奥との間も睦じく、よくまめ〳〵しく仕ふる故、よき妾を置いたりと思ふ故にそちが父、又兄弟が衣類は元より多分の金子も惠み遣し、裏家に居りしも表へ出で、今相應の暮しをなすは誰が蔭だと思ひ居る、恩に着するといふにはあらねど、それを忘れは致すまいな。

つた　何しにそれを忘れませう、此程宿へ參りし折、父を初め兄夫婦も以前の貧苦に引かへて、樂な身分になりましたも、そなたの縁で磯部樣の厚いお惠み受けし故、御恩を忘れぬ其爲に、寐ても足を向けませぬと、申しましてござりまする。

主計　親子の者は兎も角も、そちも忘れは致すまいな。

つた　私事は猶更に、御恩を何で忘れませう。
主計　そりや、どの口で申せしぞ。
つた　え、（トびつくりする。）
主計　口と心と裏表に、大恩受けし予が面へ、よくも泥を塗つたるぞ。
つた　何であなたのお面へ、
主計　辨天堂で紋三郎と、密通なせし人でなしめが。

〽酒氣に乘じて怒を發し、襟上取つて疊へ摺りつけ、

ト主計介腹の立つ思入にて、お蔦の襟がみを取つて疊へぐつと摺付け、誂の合方になり、

人は氏より育とて、去年よりして纔に一年當家へ仕へて下ざまの賤しき以前の姿なく、立振舞から言葉迄武家の娘と申すとも、恥しからぬ行ひにて、奥が相手に香茶の湯、手馴れぬ琴も彈覺え取分け學びの文を好み、五常を守るそち故に、斯樣なことはあるまじと思つてをつたが予が油斷、先祖よりして庭中へ勸請なせし辨財天、靈驗尊き尊前を密通なして汚せし罰に、解捨たりし其帶が是なる井上典膳に拾はれたるは脫れぬ所、返す〴〵も殘念なは、今日殿中詰所に於て諸侯がそちを褒むるのが、本家の勸に障りしか、世界に女も無いやうに下賤の者を妾になすは、物好きな

りと誹謗され、思はぬ恥辱を取りし故、下賤の者の娘なれど心は貴人の娘にも勝りし者にて妾にせしと、申返して歸りしが、此事世間に流布なさば主計介は愚にて、妾に鼻毛をよまれしと、笑はるゝのみなるか本家へ面も合はされぬぞ、思へば憎くき奴だな。

へはつたと傍へ突退くれば、お蔦はおろ〳〵泣きくづをれ、

ト主計介お蔦を突退け腹の立つ思入、お蔦宜しく思入あつて、

つた　猥りに解くべきものでない、帶を其場へ解捨しが言譯ならぬ身の越度、何樣申しませうともお疑ひは解けますまいが、不義を致すか致さぬか蔦が心を御存じは、御前より外ござりませぬ。日頃を思召しまして、どうぞ此身のお疑ひを、お晴しなされて下さりませ。

吾太　言葉巧みに御前をば欺かうと致しても、それは昨日迄のことにて、御恩になりしを忘却なし、密通をせし上からは、誰が實と思はうぞ。

典藏　脫れぬ所と覺悟して、武家一統の掟通り、早くお手討になるがよい。

つた　お疑ひにて私をお手討になされまするは、是非もないことなれど、身に覺えもない密通の科には死んでも落ちませぬ。

主計　やあ其身主の目を掠め、密通なして居りながら死んでも罪に落ちぬとは、さりとはしぶとき心な

り、言はぬというて此儘に、言はせずに置くべきか。

〽襟がみ取つて縁端より庭へはつたと突落し。（トお蔦の襟がみを取り平舞臺へ突落し。）

こりや典藏、彼れを打ちすゑ、白狀させい。

典藏　畏つてござりまする。

主計　かれを肴に一獻汲まん。

吾太　それ、御酒宴の用意めされ。

伴藏　はッ、

〽はッと答へて奧の間へ、近習が入れば典藏は庭へおり立ち袴を端折り、邊り見廻し中間が忘れし箒　幸ひと、柄を拔きとりてりう／＼打振り、

ト伴藏、傳平奧へ入る、典藏庭へ下り、庭下駄を履き前へ出て、下手にある竹箒を取り、此柄を引拔き振つて見て、

典藏　いや、可愛さ餘つて憎さが百倍、いやさ百杖打つて紋三郎と密通せしを白狀させん。（ト誂の合方になりお蔦俯伏し居るを引起して）さあ辨天堂で密通せしを、包み隱さず白狀せぬか。

ト竹でお蔦の額を突く。

つた　身に覺えもなき疑ひ受け、かゝる憂目に我逢ふも、典藏殿こなた故、思へば〳〵口惜しい。

典藏　まだ〳〵我に罪をぬるか、所詮脱れぬことなれば、早く白狀してしまへ。

〽持つたる竹にて打すゑる折柄運ぶ酒宴の道具、殿は杯取上げて、好める酒に氣も荒く、

ト此内典藏竹にて打つ、お蔦逃げようとするを、權七勘六引すゑる、奧より伴藏、傳平杯銚子足付の硯蓋を持出で來り、殿の前へ置く、主計介杯を取る、伴藏酌をなし、ぐつと呑み、續けて重ね呑んで、

主計　やあ手ぬるい〳〵、もつと烈しく打ちすゑい。

典藏　はッ、殿の御意だぞ。

〽情容赦もあらけなく、左右へ手を取り引すゑれば、叶はぬ戀の意趣晴し、目鼻も厭はず打すゑれば、お蔦は悔しさ悲しさに、齒噛をなして身を震はし、邪險のしもとを怺へる苦しさ、小蔭に樣子を窺ひ居る、おなぎ梅次は案じわび、御前も恐れず走りいで、

トお蔦を責めるを、以前のお渚、梅次下手より出て來るを、兩人隔てる。

權七　やあ、御前も恐れず、

兩人　無禮者めが。

梅次　どうぞお慈悲にお蔦様を、お許しなされて下さりませ。

なぎ　其替りには私を、存分お打ち下さりませ。

〽両手を合して伏拝めば、

典藏　やお、誰かと思へば小姓の梅次に、一人は部屋の召仕ひ、こいつも大方一つ穴、定めて文の使などを致したに相違ない。

吾太　幸ひそれなる両人を、拷問なさば口が明き、お蔦殿も白状なさん。

作藏　いかさま是はよき御手段。

典藏　おゝ、どれ痛いめをさしてくれう。

〽しもとを持つて立掛れば、お蔦は其手に縋り付き、（と典藏立掛けるをお蔦留めて、）

つた　おなぎは何も存じませぬ、打つのはお許し下さりませ。

なぎ　打たでならずば私を、お打ちなされて下さりませ。

主計　益なき彼等を打つに及ばぬ、不義の當人蔦を打て。

典藏　はッ、

〽はッとばかりに立掛る、折柄爰へ小箱を持ち近習の侍走り出で、

ト典藏竹を持ち立掛る、ばた／＼になり、下手より袴一本差の侍以前の小箱を抱へ走り出て來り、

侍　其の御詮議、暫くお待ち下さりませ。

作藏　貴殿は眞水清藏殿。

傳平　あわたゞしく何事でござる。

侍　吾太夫殿のお指圖に辨天堂を見廻りしに、緣の下に一つの小箱隱しありしは心得ず、是へ持參致してござる。

吾太　それはいかなる品なるか。

侍　いざ、御覽下さりませ。

〽差出す小箱の蓋を見て、（ト侍緣側へ小箱を出す、吾太夫取り上げ見て、）

吾太　こりやお家の重寶たる、御祕藏の井戸茶碗、如何致して辨天堂の緣の下にあつたるか。

主計　それは先頃是なる蔦が、茶會の亭主をなせし折、借遣はせし井戸茶碗、（お蔦驚き思入にて、）

つた　大事の品故袋戸棚へ、しまひ置きしに、どうしてそれが。

典藏　辨天堂にあつたのは、密會の折持參して紋三に遣はす所存でござらう。

つた　何故それを私が。

典藏　えゝ口出しせずと、控へさつせえ。（トお蔦を竹で突きのけ、）先づ其中に茶碗がござるか、中を御覽なされませ。

吾太　言ふにや及ぶ、

〽小箱の紐をとく〳〵と、蓋取退けて打驚き。（ト吾太夫蓋を明けて見てびつくりなし、）

やゝ、こりや井戸茶碗は眞ッ二つに、斯様に割れて居りまする。

ト箱の中より二つに割れし以前の茶碗を出して見せる、皆々びつくりなす。

主計　すりや先祖より傳來の、重器の茶碗が割れしとか、是皆蔦がなせし事思へば憎くき女よな。

〽常より一徹短慮の上、茶碗の割れしに癇癖起り、怒の聲を振立つて、

ト主計介腹の立てし思入にて、椽端へいできつとなり、

こりや蔦、如何致して此茶碗を辨天堂の床下へ、そちは隱し置きたるぞ。

つた　それとても私は、更に覺えはござりませぬ。

主計　やあ言ふな〳〵、察する所茶碗を割り、予が祕藏故言譯なく、密會の折持參なし人の心の付かざる様、隱し置いたに違ひない。

吾太　今一と拷問打ちするゐい。

典藏 心得ました。それ、動けぬ樣に引すゑ下され。

權七
勘六 はッ。

ト兩手を取つて捻伏せれば、典藏後へ立掛り、息をもつかせぬ續け打ち見るにたまらず兩人が支へ留めるを刎退け蹴のけ、果は三人めつた打ち、

ト文句の通り權七勘六お蔦を引すゑる、典藏件の竹にて手強く打ち、おなぎ梅次是を留める、文句の切れ誂へ合方にて、典藏三人を打ち立廻り宜しくトヾお蔦を手ひどく打ち、お蔦ばつたり倒れる、此内吾太夫毒藥を出し、有合ふ茶碗へ入れ、手水鉢の水を入れ、

吾太 こりや典藏、見ればだいぶ勞れし樣子、氣付に是を呑ませたがよい。（ト出すを受取り）

典藏 すりや、此水を。

吾太 おゝ、其の一藥で。

典藏 えゝ。

吾太 いや、早く一杯呑ませてやりやれ。（ト思入。）

典藏 むゝ、心得ました。（とお蔦を引起し、）さあ氣付に下さるぞ。

つた 有難うござります。

打たれし其身の苦しさに、毒とも知らで呑みほせば、してやつたりとうなづく親子、殿は益益酒氣に乘じ、

ト典藏茶碗を出す、お蔦呑みたき思入にて、是を呑み、吾太夫典藏顏見合せ思入、主計介きつとなつて、

主計　さあ、疾く〳〵と白狀せぬか。

つた　何樣仰せられましても、覺えがなければ申されませぬ。

主計　やあ覺えないと申すとも脫れぬ證據は堂內へ、解捨て置きしそちが帶、予が大恩を打忘れ、よくも恥辱をあたへたな、本家を初め他家の誹り此茶碗と同じ事斯二つに割れし上は、再び繼ぐとも最早疵物、元の名器と言はれぬぞ、密通なして主計介にそちが與へし此恥辱、生涯雪ぐ時なきぞ、茶碗は殊に父が祕藏、白狀なしてもなさいでも助け置かれぬそちが一命、手討に致す覺悟致せ。

ト言葉するどく言放せば、お蔦は是非もなく〳〵に、

つた　かほどにお詫を申しても、お疑ひが晴れませずば、致方がござりませぬ。

吾太　白狀なしてもなさいでも取らるゝ命と高をくゝり、死する覺悟と見えますれば、所詮白狀致しますまい。

典藏　不義の證據は解いたる帶、密會なせし辨天堂に茶碗があれば脱れぬ科、少しも早くお手討になさるが宜しうござりませう。

〽敵と思ふ典藏が、勸めにお蔦は口惜しく、

つた　辨天堂で迫りし折、恥しめたるを遺恨に思ひ、己が解きし其帶を不義の證據と殿樣へ、跡形もない事を訴へ、まだ其上に大切の茶碗を割つて此蔦に、罪を重ねてお手討に、さゝうといふは深い巧み、それを爰で言ひたけれど、所詮お取上げがあらざれば、言はずに死ぬる我悔しさ、頓て恨みを返す程に、覺悟致して待つてござれ。

〽面打振り無念なる思ひの增すや忽ちに、毒の廻りて血を吐きて虚空を摑む苦しさに、目も血走りて髮の毛も立つかと思ふ恨みの面色、典藏は見てせゝら笑ひ、

トお蔦毒の廻りし思入あつて血を吐き、是にて顏へ糊紅付き典藏をきつと見る、典藏思入あつて、

典藏　おゝ恨みに思はゞ化けて出ろ、芝居の外で幽靈にいまだ出合つたことがない、肚胸定めに見たいから、今夜からでも出るがいゝ。

主計　どれ、手討に致しくれん。

ト刀を提げ、庭下駄をはき、平舞臺へ下りる、是にて皆々下へおり、主計介お蔦の前へ立て、きつと

思入あつて、

我に恥辱をあたへし上、家の重器を失ふ大罪、今ぞ手討に致してくれるぞ。

つた　さあ、御存分に遊ばしませ。

主計　おゝ、よい覺悟だ。

ト床二挺の合方へ竹笛を冠せ、主計介刀を拔きてお蔦の目先へ突出す、是を見て梅次ツカ〳〵と行き

梅次　もうし御前樣、お助けなされて下さりませ。

なぎ　主人の代りに私を、お手討にして下さりませ。

兩人　お願ひ申しあげまする。

主計　えゝ、聞く耳持たぬ。

典藏　邪魔な二人を、引立てさつせへ。

四人　はツ、（ト行かうとするおなぎ梅次を引きすゑる。）

〽折柄吹來る小夜風に、散來る柳の物凄く苔むす井筒の中よりして、怪しの鬼火立登り、主計介は相好變り、死靈の祟りかむら〳〵と、お蔦が肩先切付ければ、苦痛を怺へ這ひ寄りて、

トどろ〳〵の樣な風の音になり、井筒の中より誂の陰火立登り、主計介むら〳〵とせし思入にて、

お蔦を一刀切ろ、お蔦アッと倒れる。

つた 殿樣ばかりは私が、直なる心を御存じと思ひの外に覺えもない、お疑ひにて此樣にお手にお掛けなさるとは、お主樣へ勿體ないが、お恨み申しまするぞえ。

ト恨めしき思入にて見上げる、主計介きつとなつて、

主計 恨まば勝手に予を恨め、恥辱をあたへしのみなるか、重器を失ふ憎くい奴、なぶり殺しに致さねば、主計介が腹がいぬ。

へ又も肩先切下げれば、（ト主計介又お蔦を切下げろ。）

なぎ こりや旦那樣を、

梅次 なぎ むごたらしう、

典藏 えゝ邪魔せずと、退いて居れ。（ト竹で打ちすゑろ、主計介お蔦を又切ろ。）

伴藏 常に替りし御樣子は、

傳平 御酒狂なるか、但しは、

四人 死靈の、

吾太 これ、邪魔な二人を引立てゝ、

典藏　何れも次へ、

四人　心得ました。

〽泣入る二人を引立てゝ、外の方へぞ、

ト　おなぎ梅次を四人引立て、近習付いて下手へ入る、お蔦又血を吐き苦しき思入にて、

つた　深手を負ひしといひながら、此苦しさは心得ぬ。

吾太　これぞ祕法の、

つた　え、

典藏　いや、非業に死ぬも心柄、

主計　返す〴〵も憎くいやつめ。

つた　左程憎しと思召すなら、なぶり殺しになされませ。

主計　言ふ迄もない、覺悟致せ。

〽刀振上げ立掛る、怒に心亂れ燒、刃金曇らぬ眞心に、縋る千筋の蔦葛、這ひ寄り〳〵立掛るを、えゝ憎くしと切付くれば、無慚や息も絶々に、風に散行く風情なり。

ト　誂への合方にて、お蔦をなぶり切りにする、宜しく苦しみばつたり倒れる、吾太夫典藏旨いといふ

思入

典藏　是で枕か、

吾太　これ、息は絕えたか。

典藏　どれ。

ヘ襟がみ取つて引起せば、

ト時の鐘床の合方にて、典藏お蔦を引起す、お蔦下より典藏の顏をぢつと見る、典藏ぞつとして後へ倒れ、お蔦ひよろ〳〵と立上る、典藏逃出す、お蔦典藏の方へ行くを主計介髮の毛を持ちて引戻す、ちよつと立廻つて、

ヘ其儘井筒へ切込んだり、

ト又お蔦主計介の傍へ來るを、手早く切倒す、是にてお蔦井筒の內へ落ちる、どろ〳〵止みて本釣鐘を打込み、主計介醉の醒め心付し思入にて、井筒の內を見て、

主計　心柄とはいひながら、思へば不便な、（ト思入あつて氣を替へ）憎くいやつめが、

トきつと思入あつて刀を出す、典藏井筒の許にある手桶の水を刀へ掛け手拭で拭ふ、本釣鐘雨車になる。

吾太　宵より雨を催せしが、吹晴れるかと思ひの外、今の間に降つて參つた。
典藏　雨具を持參致す迄、暫時お待ちなされませ。
主計　おゝ、是にて休息致すであらう。
　　へ梢をおとす小夜風に、燈火消えてしんの闇、
　　ト此内主計介二重へ上る、風の音になり、燈臺の灯り一度に消える。
吾太　烈しき夜風に燈しの消えしは、
典藏　何だか不氣味なことでござる。
　　へ怖氣立ちたる折こそあれ、
　　ト氣味の惡き思入、雨車にて下手より饅頭笠を冠りし中間箱提灯を持ち先に立ち、伴藏菅笠股立にて合羽を入れし風呂敷包みを持ち、他の中間蛇の目の傘下駄を持出て來り、提灯を持ちし中間上手へ行き、伴藏と他の中間下手へ控へ、
伴藏　はッ、お合羽を持參致しました。
典藏　是は御苦勞千萬でござる。
主計　おゝ、雨具を是へ。

典藏　はツ、（ト典藏合羽を出し、殿に着せる、中間下駄を直す、殿是を履き前へ出て、中間傘を出すを受取り）

主計　雲切れなして雨も止みしか。

吾太　ちらほら星が見えまする。

典藏　殿には是より奥御殿へ。

主計　おゝ、

〽二足三足行きかけしが、いづこともなく後髪、

ト誂への合方かすめて、どろ〳〵主計介二足程行き、思入あつて、

主計　袖を引くは誰だ。

吾太　誰も是には、

典藏　居りませぬが。

ト此時上手にある箱提灯仕掛にてぱつと燃える、中より誂の煙出で四邊を覆ふ、どろ〳〵にて煙の中へお蔦好みの拵へにて出る、煙消え主計介見て、

主計　や、お蔦か。（ト両人びつくりして）

吾太　なに、お蔦どのが。

典藏　在所になります。

主計　そちが後に、

典藏　えゝ、

ト ぞつとして尻餅をつく、どろ〳〵にてお蔦柳の木へ消える、是にてどろ〳〵止み、霞付の月を下し、主計介はホッとせし思入、吾太夫典藏は不審のこなしにて、

吾太　心得難き殿の御樣子、

典藏　もしや蔦めが、（ト言ふを主計介思入あつて、）

主計　心の迷ひで、（ト傘を持替るを木の頭。）あつたよなあ。

ト 井筒の内へ思入、典藏は後の見らるゝこなし、此見得カヽリにて、

ひやうし幕

（返し、紋三郎宅の場）——本舞臺三間の間常足の二重正面上手一間の床の間好みの掛物、此の脇三尺の地袋戸棚、此上に誂の硯箱、花瓶に白菊を活け、此下月蔭の襖、上の方一間障子屋體、下の方一間玄關口、下手黒塀いつもの所枝折戸、四つ目垣にて見切り、總て家中長屋玄關口の體。よき

所に角行燈を點し、爰に左市一本差し若黨の拵へにて控へ、上手に隣家の佐藤、酒田の兩人狩衣着流し一本ざし、刀を傍へ置き住ひ、此見得合方にて幕明く。

左市　これは／＼御隣家の佐藤樣、酒田樣、ようこそおいで下さりました。

佐藤　最早今宵も九つ過ぎ深更に及びし故明朝に致さうと存じたなれど、御隣家にて日頃御懇意に致す我々。

酒田　承れば辨天堂にてお蔦殿と密通せしと、無實の疑ひ受けられて、上よりお咎蒙られしと申すことでござる故、取敢ず參つてござる。

左市　それは夜中のお厭ひなく、御親切にお見舞下され、有難うぞんじまする。

佐藤　高い聲では言はれぬが、此のお疑ひも其元は岩上親子が仕業にて、殿へ讒言せしことゝ、手前などは推察致す。

酒田　何か深き巧みあつてか、忠臣無二の浦戸氏御兄弟を、目の敵に彼等が致すは心得ず、權威を揮ふ所存と見ゆる。

佐藤　我々共は隨はねど、名は申さぬが家中には、同氣求むる佞人共、

酒田　岩上宅へ晝夜入込み、常におもねり諂ふは、片はら痛いことでござる。

佐市　手前主人と同じ樣に、不義の疑ひ受けられし、お蔦さまを井筒のお茶屋で、殿樣が御詮議をなされますと申すことでござりますが、まことのことでござりますか。

佐藤　いかにも左樣申すことだ、それに就いてあの井筒は御先代がお妾を切込まれしことあつて、其の一念が彼處に止まり、年囘毎に怪しみがあるといふ申傳へ。

酒田　今年は慥二十三年、祟りの來る年なれば氣の毒ながらお蔦殿は、多分お手討になるでござらう、丁度さういふ廻り合せに、なるといふも不思議なこと。

左市　よくお屋敷には昔から、斯ういふことがござります。

佐藤　ときにお取込でござらうが、紋三郎殿に兩人が、

酒田　ちよつとお目に掛りたい、奧へ左樣申してくりやれ。

左市　畏りましてござります、只今お取次致しますれば、暫くお待ち下さりませ。（と立掛ると奧にて、）

紋三　イヤ其の取次には及ばぬぞ。（ト合方になり、奧より紋三郎肴流し一本差にて出て來り、眞中へ住ひ、）是はく御兩所には、よくお尋ね下された。

佐藤　扨此度は不慮の儀で、殿より不義のお疑ひにて御詮議中出仕を止められ、御禁足と申すこと、まことにお氣の毒なことでござる。

酒田　是皆佞人岩上親子が讒言せしに相違ござらぬ、何故あつて御發明なる、殿には彼等が申すことをまことゝ思召しますか。

佐藤　かの良薬口に苦しと、お爲めなことを申すより、

酒田　お髭の塵で諂ふ方が、矢張用ゐがよいと見えます。

紋三　身に覺えなき疑ひ受け、殘念にはござれども、四邊に人なき辨天堂に、二人居りしが我過ち、殊には同じ疑ひ受けしお蔦殿が典藏に解かれし帶を證據にされ、言譯なせど訴へを殿にはまことゝ仕給へば、今宵井筒のお茶屋にて不義の御詮議なさる由、お蔦殿にも女には勝りし氣性に覺えなき不義の罪には服すまじ、我も相手のことなれば今にも御詮議あるかもしれねど、如何なる拷問受けるとも、罪には服さぬ所存でござる。

佐藤　何やう讒者がないことを有る樣に申すとも、神明まことを照し給へば、今に貴殿の明りが立ち、お許しあるに相違ない。

酒田　何に致せ岩上親子が、お側に付添ひ居る上は、忠臣追々遠ざけられ、末には御家の騷動が必ず起ることでござらう。

紋三　此の一條も兄弟に兄十左衞門が執成し難く、口をつぐんでござる故、岩上父子がよいことゝ、種

種讒言を致すと聞けば、多分我も無實の罪に死刑の御沙汰を蒙むらんと、疾より覺悟致してござる。

佐藤　それとても相手なるお蔦殿の落着次第、今に何とか御沙汰がござらう。

酒田　愚癡なことだがかゝる時には、神の助けを願ふが專一、篤と御祈念致されよ。

左市　其の儀は手前が信心なす、清正公に水垢離とり、お願ひ申すでござります。

佐藤　何ぞ我々相應の、御用があらば御遠慮なく、

酒田　隣家の事故何なりと、仰付られ下されい。

紋三　それは千萬忝い、仕儀によりなば御隣家故、お願ひ申すことがござらう。

佐藤　最早深更に及びますれば、

酒田　今宵はお暇仕る。

佐藤　又もや明朝、

兩人　お尋ね申さん。

紋三　左樣ござらば御兩所樣、(ト唄になり、兩人下手へはひる。)

左市　只今仰せの趣では、お蔦樣も殿樣の、お手討におなりなされませうか。

紋三　己が戀の叶はぬ遺恨に、帶を證據に密通せしと、まことしやかに典藏が仏謀をもつて訴たへたれば、お蔦殿が言譯なすとも、殿のお心解けざれば、理が非に落ちて言譯立たず、不義の科にてお手討に、明日を過さずなるであらう。

左市　かういふ事で死にますも、約束事でござりませうが、病ひで死ぬと違ひまして、諦めにくうござります。それに付けても旦那樣へ何の御沙汰もござりませぬは、あなたは不義の明りが立ち、殿樣のお疑ひが晴れましたのでござりませうか。

紋三　御疑念晴れゝば兄方より早速吉事の知らせあらん、何の沙汰もあらざれば御疑念晴れぬに疑ひなし、殿は短慮の御性質に近頃大酒を遊ばして益々御心荒々しく、不興を蒙る者多く、御本家より沙汰なき内と兄十左衛門と此紋三時折お諫め申す故、お氣に逆らふことあれば、遂にはお覺え宜しからず、此身の助命は思ひも寄らず、今に死刑の御沙汰があらう。

左市　其の殿樣の御短慮もお側に讒者が付添ふ故、旦那樣のお諫めをお用ゐなさらぬことならば、御本家樣へ申上げ、何とか御沙汰がござりましたら、お用ゐなさるでござりませう。

紋三　御本家樣も大酒にて、矢張短慮の御性質、日頃御中睦ましからねば假令お諫めあらうとも、必ずお用ゐなされぬぞ。

左市　そりやさうでもござりませうが、科なき者を罪に落し、それをお手討になされましては、誰いふとなく人の口、

紋三　隱すことほど顯れ易く、世上の噂となる時は、

左市　御家の瑕瑾になりませう。

紋三　どうか左樣ならぬ內、

左市　餘り大酒をなさらぬやう、

紋三　お愼しみがあればよいが。

ト紋三左市案じる思入誂への合方になり、花道より十左衞門羽織袴大小手丸の弓張提灯を持出て來り、花道にて、

十左　幼き折より聖賢の道も心得居る紋三、よもや道にかけたることを致すまじとは思へども肉身分けし兄弟なれど、計り難きは人心、是より參つて問ひ糺さん。(ト思入あつて本舞臺へ來り玄關にて)こりや誰そあるか、十左衞門參りしぞ。(ト是にて左市下手へ來り)

左市　これは旦那樣には、夜中と申し何御用ござりまして。

十左　紋三に火急の用事があつて。

左市　先づあれへお通り遊ばしませ。（ト先へこちらへ來り、）一の側の旦那樣が、御入來にござりまする。

紋三　兄上のお入りとか、（ト平舞臺へ下りる、此の内十左衞門玄關より二重へ出る。）いざ、兄上には先づ先づ是へ。

ト合方きつぱりとなり、十左衞門平舞臺上手へ住ふ、左市煙草盆を出す。

紋三　こりや左市、茶を入れて參れ。

左市　畏りました。

十左　いや、構やるな〳〵。（ト此の内左市燭臺へ灯りを付け、奥へはひる。）扨計らざる事出來致し、手前も心配致せしぞ。

紋三　兄上のお耳へ入り、恐れ入つてござりまする。

十左　好事門を出でず惡事千里を走るの譬、早くも家中の噂となり、中間小者に至る迄誰知らぬ者もなく、遂には隣家の者も知り、種々な取沙汰致せども大海を手で防ぐが如く、所詮街の風聞は防ぐことが相成らぬ、明日は必ず御本家より嚴しき御沙汰あるは必定、よしなき事を引出せしぞ。

紋三　かゝる大事に及びしも、燈火消えし辨天堂に、お蔦殿と居りしがあやまり、遂に不義の汚名を受け、家名へ疵を付けたるは、申譯無きことでござる。

十左　不便や相手のお蔦殿は、井筒のお茶屋で岩上親子に、嚴しき拷問受けし上、遂に殿のお手討に、はかない最期を致せしぞ。

紋三　え、（トびつくりなし、）すりやお蔦殿には不義の科にて、お手討になりしとか。

十左　それに付き其方に、兄が尋ね問ひたいは、我も其折辨天堂に狼藉者がありしと聞き、取敢ず馳付けしに逃行く男女は覺えある、お蔦殿と紋三郎、今一人は典藏にて帶を證據に不義の訴へ、一應詮議ありし所、覺えなき由申せども證據なければ再應の調べと一先づ許されしが、お蔦殿には奥庭にて、申譯立たずして殿のお手に掛りたり、まこと不義を致せしならば包み隱さず此兄に、有體に申聞けよ。

紋三　其の疑ひは尤もながら、まこと不義を致せしならば、卑怯に包み隱しませうや、毛頭此身に覺えなければ、不義の罪には服されませぬ。

十左　然らば御殿を離れたる、辨天堂にたゞ二人、何を致して居りたるぞ。

紋三　これには仔細あつてのこと、兄上一通りお聞き下され。（ト合方替つて、）昨夜は拙者泊番にて、宵より詰所に居つたるところ、小用をなさんと廊下傳ひに厠へ參る其折柄、樹木茂りし辨天堂に女の叫ぶ聲なすは常事ならずと燈籠の、灯影を便に駈行見れば、岩上吾太夫が悴典藏お蔦殿を引と

らへ手籠になさんとなす折にて、我を見ると跡をも見ずに樹木の茂みへ逃げし故、引とらへんと存ぜしが、左ある時には面目を失ふことゝ其儘に見脫して遣はせしが、跡にて手籠に逢はんとせしお蔦殿が禮を述べ、幸ひ四邊に聞者なければ御家の大事を申上げんと、詞正しく言はるゝ故聞捨て難く差寄つて、して又それは何事なるかと、尋ぬる折しも一吹の烈しき夜風に燈籠の燈火消えて暗となり、はツと思へど氣も忙しく大事といふは何事なるかと、尋ぬる所へ思はずも不義者なりと典藏が、再び彼處へ立出でゝ帶を奪ひて不義との訴へ、毛頭此身に覺えなけれど、燈火消えし辨天堂に差向ひにて居つたがあやまり、遂に不義との汚名を受け殘念至極にござりまする。

　ト口惜しき思入。

十左　して又御家の大事とは、如何なる事であつたるぞ。

紋三　それを聞かんとなす所へ、前申す典藏が再びそれへ出し故、聞洩らしてござりまするが、疑ひ受けてお蔦殿も引立てられて聞くことならず、無念を重ぬる此の胸中御推察下さりませ。

　トこなしあつて言ふ。十左衞門思入あつて、

十左　すりや其方の言譯は、それ迄のことなるか。

紋三　只今申すが有體なれば、お疑ひはお晴らし下され。

十左　確と左樣か。

紋三　はッ。

十三　然らばそちは不義者なるぞ。

紋三　え。

十左　よもや〳〵と思へども、今の言譯まことしからず、そちは不義を致せしならん。

紋三　全く以て、左樣なことは。

十左　いや、假令何樣申すとも御殿を離れし辨天堂の、燈火のなき暗がりに男女二人で居つたからは、不義の汚名は遁れぬところ、道ならぬとは申せども世間にはなきことでもなければ、不圖した心の迷ひより、斯樣な譯と有體に、なぜ兄に申聞けぬ、今更隱すは未練なるぞ。

紋三　こは怪しからぬ其のお詞、すりや兄上迄私を、お疑ひなされまするか。

十左　おゝ、手前は不義をなせしと思ふぞ。

紋三　こはお情なきお疑ひ、拙者に於ては覺えござらぬ。

十左　然らば不義をせぬといふ、確と致した證據あるか。

紋三　さ、其の儀は。

十左　證據はないか。

紋三　むゝ、（ト拳を握り口惜しき思入、十左衛門きつとなり、）

十左　こりや紋三郎、そちや見そこなひし者なるぞ。（ト合方きつぱりとなり、）當藩中に數多ある壯年の者共が、身の行ひを豫てより心を付けて窺ふに、十に八九は武を好まず衣服持物に美を盡し、益なき遊藝に凝りかたまり、淫酒に耽る族のみ以ての外とは思へども上を學ぶ下なれば歎息なして見脱し置けど、行ひ正しき人々は爪彈きして親しまず、かゝる鼠輩の多き中に其方ばかりは幼年より弓馬槍劍はいふに及ばす、和漢の學も衆に勝れ、殊更色情の道に溺れず今の世には珍らしき若者なりと、心ある一家中の褒ものなりしが、如何なる天魔が見いりしか、人もあらうに殿樣のお召仕と密通なすは、彼の千日に苅つた萱、不義の科にて今にもあれお手討になる時は、家中一統の物笑ひ。抑總角の頃よりして一つ所に成人なす骨肉わけし兄弟は、天地の間にたつた二人、其の一人の弟を不義者にして失ふ兄の、心の內は何うあらう、そちはなした罪なれば自業自得で是非なけれど、跡に殘つた十左衛門人に面が合はされぬ、此兄ばかりか親に迄恥辱を與へる不孝者、首討落して亡父へ、お詫をなさんと思へども、部屋住ならねば私に成敗なすこと叶はぬ悔しさ、せめて此場で兄が折檻、（ト俯いてゐる紋三郎を引付け、）こう／＼、（ト扇にて打つこと宜

しくあつて、）言はうやうなき、人非人めが。

トきつと言つて突放す、茲へ奥より以前の左市盆へ急須と茶碗を載せ持つて出て來り此の中へ入り、

左市　暫く〳〵、今お次にて一伍一什承りましてござりますが、紋三郎様に限り不義などをなかなか遊ばす氣遣ひは、ござりませぬと遮ぎつて申すは則ち左市が證人、御案内の通り御獨身の旦那様ではござりますが、遂に是迄女などを振向いても御覽なさらず、たまに御同役のお誘ひにて遊びをお勸めなされても、體よく其場をお脱れなされ、遊所場などへ一足でもお踏込みなされたこともなく、色には堅い御氣質故、思案の外と人は申せど、紋三郎様は思案のみにて、外といふ字の付かぬが請合ひ、どうぞお疑ひ晴れますやう、あなた様から殿様へお願ひなされて下さりませ、偏にお願ひ申しまする。

十左　やあ、己迄が同じ様に、趣意の立たざる其言譯、全く弟紋三郎が不義をせぬと申すには、他人が聞いて尤もと、いふべき證據のあらざれば其身の潔白相立たぬぞ。

左市　すりや斯程迄私が、證人となり申しても、

十左　又者の其方等が、申す詞は上へは通らぬ、控へて居らうぞ。

左市　あゝ、こりや何としたらよからうなあ。（トぢつと思入。）

十左　さあ紋三郎、默して居るはいよ〳〵以てそちは不義を致せしか。

紋三　何十度お尋ねなさるとも、存ぜぬと申すより外に、申上げやうはござりませぬ。

十左　然らば不義をせぬといふ、何ぞ確な證據があるか。

紋三　さあ、それは、

十左　全く不義を致せしか。

紋三　さあ、

十左　證據を見ようか。

紋三　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

十左　覺えないとばかりにて、證據がなければ脫れぬ科、是らの事は辨へ居らうに、見下げ果てたる不屆奴めが。（トきつと言ふ、紋三郎ちつとこなしあつて、）

紋三　かゝる事にならうとは、神ならぬ身に露知らず、辨天堂でお蔦殿の難儀を救ひ現在の兄上迄に不義者と、御疑念受けるも吾太夫典藏、彼等が巧みに相違なし、とあつて證據あらざれば無實と知つて汚名を受け、やみ〳〵成敗受くるのか。思へば〳〵口惜しい。

　トきつとなる、左市も無念のこなしにて、

左市　明るい御身も暗夜に、二人でおいでなされたが、旦那の越度といひながら、元を糺せば殿様の御不行跡より起りし事、上と下とで是非なけれど、いま〳〵しいことだなあ。

十左　まだしも御家の一大事を、聞得しことなら時宜により申開きの廉にもならんが、何一つとして言譯なければ、そちが明りは立たざるぞ。

紋三　すりやどうあつても不義の科に、

左市　お落ちなさらにやなりませぬか。

十左　證據なければ是非に及ばぬ。（ト紋三郎左市顔見合せ、）

紋三　ふむ、（ト當惑のこなし、十左衛門思入あつて、）

十左　お蔦殿が奥庭にて、お手討になつたのも岩上が讒言故、是皆彼等が奸計にて、某初め忠義の者をなき物にせん豫ての企み、不義をなせしと其方も今に御前へ引立てられ、再び詮議をなすは必定武士たる者の恥辱となす、拷問受けぬ其前に、潔よく覺悟、いやさ、覺悟致して此兄に、包ます白状致せ。

　ト十左衛門紋三郎に切腹なせといふ思入あつて、立ち掛る。

紋三　然らば兄上、御猶豫なく、又もや後刻參る迄に、篤と思案を致して置きやれ。

十左　おゝ、又もや後刻參る迄に、篤と思案を致して置きやれ。

左市　すりやどうあつても旦那樣の、御身に覺えのないことを。

紋三　白狀なさねば拷問受け、武士の恥辱を重ねにやならぬ。

十左　其處へ心が付きしなら、必ず未練を殘すまいぞ。（ト十左衞門玄關へ出る、紋三郞左市送つて出で）

紋三　左樣ござらば、

左市　旦那樣、

十左　紋三郞。（ト十左衞門紋三郞顏見合せ）

紋三　これが此の世の、

左市　え、

紋三　いや、今宵も最早、

十左　むゝ、八つでもあらうか。

ト唄になり、十左衞門是が別れといふ思入、左市提灯へ灯を點けて出す、十左衞門氣を替へ、提灯を持ち花道へはひる、紋三郞跡を見送り、思入あつて、

紋三　宵に一降り村雨の、降りしも風に吹晴れしが、又もや空の曇りしは時雨に近き秋の末、後には雨になるであらう。

ト思入左市は燭臺を消し十左衛門が忘れし扇を見付け、

左市　此のお扇子は旦那様が、お忘れなされましたのか。（ト紋三郎に見する。）

紋三　おゝ、是は兄上御祕藏の鵬齋老人が書きし扇子、直に參つてお返し申せ。

左市　畏つてござりますが、最早夜更にござりますれば、明朝お返し申しませう。

紋三　いや、物を忘れしと申すものは、誰しも心にかゝるもの、早くお返し申して參れ。

左市　一の側迄參りましても、今宵も八つでござりますれば、もうお寐みでござりませう。

紋三　後刻おいでと仰しやれば、お寐みなさることではない。

左市　左樣なれば、お返し申して參りませう。

紋三　大儀ながら行つてくりやれ。

左市　畏りましてござりまする。（ト玄關へ來り、）明日でもよいものを、是非直に持つて行けとは、何だか、心に掛ることだ。

紋三　まだ參らぬか。

左市　へい、只今參ります。(ト時の鐘合方にて左市花道へはひる。)

紋三　左市、落さぬ樣に氣を付けて參れ、左市もう參つたか、左市々々、もう行つたと見ゆる。(ト誂へ合方になり、紋三郎思入あつて、)昨夜不義の疑ひ受けしお蔦殿は日頃より御意に叶ひしお妾なるに怒りに乘じて古井戸へ切込み給ふ御癇癖、是も正しくお側にて佞奸邪智の典藏が叶はぬ戀の遺恨より、斯計らひしことならん、日頃よりして典藏とは心合はざる身共故、薪に油を添る如く讒を構へるに相違なし、只さへ癇癖募らせ給ふに、彼が佞辯揮ふ時は、今に御前のお手討にならうも知れぬ此の紋三、只今兄の意見にも所詮一命助らねば、覺悟致せと言はれしは切腹せよとの詞の謎、我も疾より其の覺悟、云はず語らず兄弟が此世の名殘を致せし上は、身に覺えなき潔白の書置認め潔よく、御沙汰のなき内切腹なし、家名の汚れを雪ぐであらう、遂に詞を背かぬ左市が使を明日にせんと言ひしは、蟲が知らせしものなるか輕い者には珍らしい忠義一途な生れ故、切腹なせしを見たなれば、嘸や悲歎に迫るであらう。どれ戻らぬ内に書置なし、清き最期をとぐるであらう。

ト是をきつかけに、獨吟になる。

獨吟　〽摺る墨の薄き浮世の別れ路に、書置く筆の命毛もけふを限りに袖に置く露も雫のしめりが

ち、哀れを添へる蟲の音もすがれし秋の夜は更けて、身に染む風や鐘の音、

ト獨吟の内紋三郎硯箱と紙を出し、行燈を引寄せ書置を書きかける、獨吟の内どろ〳〵になり、よき程にお蔦の亡靈薄色の衣裳好みの拵へにて、下手にある花瓶の蔭にすつぽんにて出で、紋三郎を見て宜しく思入、此の内紋三郎書置を書きしまひ、肌を脱ぎ思入あつて、

切腹なして相果つるは、武士の習ひといひながら身に覺えなき不義の汚名を、殘して死するがいかにも殘念、さはさりながら我故に、非業に果てしお蔦殿が嘸や此身を恨みつらん、片時も早く切腹なし、泉下に於て言譯なさん。

〽月はあれども雨雲に木影小ぐらき庭もせに、誰を招くか枯尾花、

ト獨吟の内紋三郎差添を抜き、脇腹へ突立てようとする、お蔦の靈下手にて留めるこなし、紋三郎切らうとして留めらるゝ思入、始終薄くどろ〳〵をあしらひ、宜しくあつて、

はて心得ぬ、今切腹なさうとせしに我腕のしびるゝは、正しく誰やら止むる心地、むゝ、(ト合點の行かぬこなしあつて氣を替へ、又切らうとして切れぬ思入)さるにても不思議千萬、止むる者もあらざるに、此腕のしびるゝは、如何致せしことなるか。

〽夫におくれて鳴く鴈の、聲も幽に星の影、

ト心得ぬ思入にて、四邊を見廻し、下手に居るお蔦の靈を見てびつくりなし、

蔦靈　や、其處に居るは何者なるぞ。

紋三　紋三郎樣、わたくしでござりまする。（ト顏を上げる、紋三郎をよく〳〵見て、）

紋三　や、さういふはお蔦殿か。

靈　はい、左樣にござりまする。

紋三　えゝ、（ト驚き氣を替へてきつとなり、）扨は身共が愁ひを付入り、狐狸の類ひが切腹の妨げ致すと覺えたり、末期の際に殺生なすも益なき事故助け遣はす、早く其座を立ち去りをらう。

ト是にてお蔦の靈思入あつて、

靈　今は此世に亡き身にて、お目にかゝりし事故に、そのお疑ひは無理ならねど、御家の大事を申さんと、これへ參つてござりまする。

〽落ちてきもじの袖袂、晴れぬ思ひにしよんぼりと、

ト紋三郎扨はといふ思入あつて、

紋三　扨は御身は非業の死をなし、迷つて爰へ出でたるか、して〳〵御家の大事とは。

靈　只今申し上げまする。

ト又獨吟になり、お蔦の靈立上り四邊を見るこなし、紋三郎はぎよつとなし、白刃を持ちしまゝ油斷をせぬ思入、お蔦の靈紋三郎の側へすり寄り、こなしあつて、

紋三　して、お家の大事とは、

靈　御家の大事と申しますは、岩上吾太夫典藏親子が竊に謀叛を企つて忠義なお方を退けんと、一味に加はる道庵が調合なせし毒藥にて、御本家樣を初めとして十左衞門さま貴方をば、亡きものにして殿樣へ淫酒を勸め御放埒、それを言ひ立御隱居を、おさせ申して御幼年の、若殿樣をお跡へ立て、心の儘に吾太夫が押領なさん深き企み、一味の者と牒し合すを襖の蔭で私が立聞をなせし故、人にそれを語らうかと、身に覺えもなき不義を言ひ立て貴方も共になきものに致さん彼等が仕拵へ、此の惡人を退けねば、御家のお爲になりませぬ。今御切腹なされまするは、お止まり下さりませ。（ト思入にて言ふ。）

紋三　かゝる企みのあると聞いては、今切腹なすところに非ず、よしや一命捨つればとて、只此の儘に犬死せず謀叛を企つ惡人共を、打果して切腹なさんが、それに付けてもお蔦殿は、いまだ迷うてござるからは、定めてお上を恨みつらん。

靈　何のお上を恨みませう、一度御恩を受けし上は、魂魄此土に止まつて御殿をお守り申す心、何卒

貴方も御切腹をお止まり下さりませ。

紋三 いかにも御身が異見に付き、切腹思ひ止まりて、御家の守護を致すであらう。

靈 すりやあなたには御切腹を、お止まり下さりまするか、えゝ、有難うござりまする。

〽いつしか空も晴れる小夜風、

ト獨吟のあげ、どろ〳〵になりお蔦の靈嬉しき思入にてよき所へ消える、紋三郎思入あつて、

紋三 お蔦殿の亡靈が、知せによつて密計の様子は委しく知れたれど、岩上親子に荷擔なす醫師道庵を初めとして、あら方人數も誰かれと推察なせど確とした、何ぞ證據をほしきものぢや。

ト風の音になり、下手より序幕の三毛猫手紙を銜へ出て來る、紋三郎見て、

是は何れの飼猫なるか、手紙を銜へ來りしは、はて心得ぬことではある。(ト猫紋三郎の前へ手紙を置く紋三郎取上げ見て、)「廻章、」(ト開き見て、)「廻章を以て申入れ候、然者豫ての一條にて御密談申し度く明夜暮六つ時より私宅へ御入來可被下候、岩上吾太夫、」初筆は醫師の濱田道庵、荒浪、潮田、砂川、中州、其外一味荷擔の者の、姓名記せし密事の廻章、(ト思入、猫側へ來る、襟の守札を見て、)「磯部奧つた飼猫三毛、」すりやお蔦殿の飼猫なるか、扨は是も亡靈の、われに證據を送りしか、はてよき物が手に入つたり。

ト嬉しき思入、ばた〳〵にて花道より以前の左市歸り來り、花道にて、

左市　お馬場の隅の稻荷の宮に、狐がゐるといふことだが、つまゝれでもしたことか、僅な道を幾かへり、何うして道に迷つたか、嘸旦那樣がお待兼であらう。（ト舞臺へ來り、枝折戸を明け旦那樣、只今歸りましてござりまする。（ト内へはひろ、是にて紋三郎心付き、）

紋三　おゝ左市、戻りしか、して兄上はお宅でありしか。

左市　へい、お宅においでゞござりました、（ト言ひながら紋三郎の樣子を見てびつくりなし、）や、こりや旦那樣には、御切腹をなされますか。

紋三　氣遣ひ致すな、コリヤ左市、汚名を受けしが殘念故、切腹なさんとせし折柄、不思議にも此處へお蔦殿の亡靈出で、御家の大事を告げし故、死するを思ひ止まりしぞ。

左市　え、すりやお蔦殿の幽靈が、どゞ何處へ出ました。（ト驚きながら四邊を見ろ。）

紋三　いや、最早退散致せしぞ。

左市　何に致せ御切腹を、よくお止まり下さりました、ちえゝ忝い。（ト悦ぶ、紋三郎白刃を鞘へ納め、）

紋三　此の悅びに引かへて、思へば不便なお蔦殿、其の身は無慚に殺害されても、一旦受けし御恩を忘れず、お家を守る忠義な心底、あたら貞女を失ひしは、返す〴〵も殘念ぢやわえ。

左市　して又御家の大事とは、如何なることでござりまする。
紋三　仔細は追つて申聞けんが、岩上親子が謀叛の企て、
左市　扨こそ貴方の鑑定通り、圖星違はぬ昨夜の始末、
紋三　彼等が企みの罠にかゝり、書置迄も認めて、
左市　既に御切腹をなさる所、
紋三　思へば憎くき御家の惡人、
左市　片ッぱしから取ひしぎ、
紋三　善惡邪正を、（ト書置を引裂き舞臺へ打付けるを、木の頭。）糺しくれん。

ト花道へきつと思入、左市紋三郎の後へ廻り、肌を入れさせる、此の模様早めたる合方にて、

ひやうし幕

中幕

芝片門前魚屋の場

磯部屋敷玄關の場

〔役名——魚屋宗五郎、浦戸十左衞門、お蔦の親太兵衞、岩上典藏、魚賣三吉、荒浪作藏、潮田傳平、

宗五郎女房おはま、召使おなぎ、女房おみつ、其他。〕

（魚屋内の場）――本舞臺三間の間平舞臺上手一間間平戸の押入戸棚、眞中障子出入り、下手鼠壁、神棚、此前へ紙を下げ、上の方折廻し一間障子屋體、いつもの所門口、下の方腰障子魚宗といふ印あり、門口に神明宮と書きし提灯を掛けし枠を立て、すべて芝片門前魚屋宗五郎内の體。爰におはまやつし裝魚屋女房のこしらへ、おみつ菊茶屋女房にて住ひ下手に三吉派手な着付け、揃ひの單衣を重れ、若い者のこしらへにて住ひ、此見得合方へ祭の屋臺雛子を冠せ幕明く。

三吉　人の心も知らねえで、いけ騷々しい囃子だな。

はま　不幸のあつたは此方ばかり、世間へ聞えると惡いから、そんなことを言ひなさんな。

三吉　それだといつて町内でも、お蔦さんの死んだことを知つて居ながら、どん〳〵と叩き立てずともいゝことだ。

みつ　ほんにこちらのお内でも、飛んだことがござりまして、申さう樣もござりませぬ。

はま　お前さんにも一方ならず、あの子がお世話になりましたが、御恩も送らずはかない最期、死ぬる子は眉目よしと容貌は元より氣立迄、人に勝れし生れ故惜しいことを致しました。

三吉　一昨々日神明のお宮の前で逢つたのが、あれが別れにならうとは、ほんに夢を見たやうだ。

みつ　さうして內へお蔦さんを、引取つておいでなさいましたか。

はま　お屋敷でも御本家や、世間の聞えを憚つて、御内分故まだ内へ亡骸は參りませぬ。
みつ　嘸お父さんが御祕藏故、お歎きなさいましたらうが、お障りもござりませぬか。
はま　今朝其事を聞きますと、何たる因果で逆さまな、こんなことを見ることかと、泣の涙で人樣にお目に掛るも面目ないと、線香上げて奥の間に一人歎いてをりまする。
みつ　そりや御尤もでござります。宗五郎さんが稼ぐ故内に案じはないけれど、たつた一人の女の子、嘸本意ないことでござりませう。
三吉　話を聞けば御家中の紋三郎といふ人と辨天堂の闇夜に、二人居たのが科になり、お手討になつたといふが、それがほんのことかね。
はま　虚か實かお屋敷故、慥なことは知れぬわいな。
三吉　さうして内の親分は、屋敷へでも行きなすつたか。
はま　いえお屋敷へは行かないが、今にも死骸の引取を言付つた其の時に、一にお寺へ此事を知らせねばならぬから、今の内話して來ると、さつき出掛けて行きなすつた。
三吉　お寺へ知せに行くのなら、わつちも一緒に行かうものを。
はま　表向の知せでなく、内々の話ゆゑ二人で行くにも及ばぬと、一人で行つたが近い所故、今に歸つ

て來なさるだらう。

みつ　お寺はどちらでございますか。

はま　三田寺町でございますから、爰から近うございます。

みつ　モウお歸りに間もなければ、お目に掛つて參りませう。

はま　折角おいでなさつたに、今朝からの取込で、お茶さへも上げませぬ。

みつ　必ずお構ひ下さりますな。

三吉　どれお茶でも上げようか、いや、お茶屋のおかみさんに、お茶を出すは無駄なことだ。

ト合方屋臺囃子になり、花道より宗五郎縞の半纏尻端折り、草履にて出て來り、花道にて、

宗五　年に一度のお祭も、妹が非業に死んだので、内で騷ぐことも出來ねえ、然し酒の上が惡いので、金毘羅樣へ斷つて居るから、内に酒のねえがいゝ。（ト右の鳴物にて舞臺へ來り、直に内へはひり、）お濱、今歸つた。

はま　だいぶ遲うござんしたな。

宗五　和尚さまに仔細を聞かれ、それで大きに遲くなつた。

はま　菊茶屋のおかみさんが、悔みにおいでなさいました。

宗五　是はおかみさん、よく來て下さいました。（ト眞中へ住ふ。）

みつ　今朝此事を承り、內中びつくり致しました、どういふ事でお蔦さんが、斯ういふ事におなりだか、申さう樣もないことで、お氣の毒でござりまする。

宗五　一昨々日神明樣へお參りに來た歸り掛け、ちよつと內へ寄りましたので、いまだに姿が目先に見え、夢の樣でござります。

みつ　何ぞ御用がござりますなら、外ならぬ私共にも、何なりと言うて下さりませ。

宗五　何れ世間の御厄介、又お願ひに上ります。

みつ　どうぞさうして下さりませ。

三吉　親分何處へか知らせならば、わつちが知らせに行きませう。

宗五　まだお屋敷も內分故、世間へ知れねえ方がいゝから、知せに行くにやァ及ばねえ。

ト　おみつ思入あつて、

みつ　宗五郎さんにお目にかゝれば、私はお暇致しませう。

はま　常ならお留め申せども、今日はお留め申しませぬ。

みつ　左樣なれば、お濱さん。

はま　お内へ宜しく、（ト立掛るを、）

宗五　今日は送るものではねえ。（ト合方屋臺囃子になり、おみつ花道へはひる。）ちつとの内でもお蔦をば賴んだ緣で親類同樣、よく世話をしてくんなさる。

ト右の合方にて、奧より太兵衞白髮鬘魚屋の親仁のこしらへにて出て來り、

太兵　宗五郎、歸つたか。

宗五　おゝ父さん、今歸りました。

太兵　菊茶屋のおかみさんが來たのも、奧で知つて居るが、人に悔みを言はれると一倍胸が一ぱいに、淚の止度がない故に、知りつゝ奧に隱れて居た。

宗五　己と違つて女だけ萬事の事に氣が付いて、お前に優しくしましたから、嘸本意なく悲しからうが斯ういふ事に成行くも、皆前生の約束事、仕方がないと諦めて、煩はぬ樣にして下さい。

太兵　成程手前の言ふ通り、前生からの約束で斯ういふ目にも逢ふのだらうが、どうも己は諦められぬ。

ト淚を拭ふ。

宗五　そりやさうでもあらうけれど、淚が佛の爲にもならねば、氣を取直して下さいまし。

太兵　是が病ひで死んだのなら、其の身に備はる定業と、諦めも仕ようけれど、切殺されて死んだ故ど

うも己はあきらめられぬ。(ト手拭を額へ當てゝ泣く。)

はま　父さんお前のお歎きは、そりや御尤もでござります、義理ある中の姉妹も親身に勝る親切に、頼りに思ふお蔦さん、涙が爲にならずとも泣かずには居られませぬ。(トお濱泣く、三吉思入あつて、)

三吉　密通とやら不義とやらいふのは此方の間男だが、そんな事をする樣なお蔦さんでねえものを、殺すといふは無法な仕方、何ぼ上と下だつて、默つて居るのは馬鹿々々しい、何とか向うへ掛合つて、其處に話しがつけばよし、分からねえことでも言ふなら、鮪庖刀を擔ぎ出して表門でも敲きこはし、恥をかゝして遣りてえものだ。

太兵　おゝ三吉、手前が言ふ通り己が二十年若けりやア、雜魚場を頼んで押して行き、言ひてえことを言つてやるが、悲しいことに取る年で、負けねえ氣でも身體が利かず、こんな悔しいことはねえ。

三吉　親分お前がをぢさんの代りに屋敷へ行きなせえ、若え奴等を呼集め、尻へ付いて押掛けよう。

ト宗五郎思入あつて、

宗五　いかに明いてゐる口だつて、いゝ加減に馬鹿を言へ、跡先見ずにべらべらと、餘計に内の父さんに氣を持たしてつまらねえ。

三吉　それだと言つてお蔦さんに、どういふ科があつてのことか、委しいことは知らねえが、殺すとい

ふはあんまりだ。

太兵　此方で好んでお蔦をば、妾奉公にやりやァしねえ、末々身分の出世になり、惡い樣にしねえから是非共屋敷へ上げてくれと、用人めが頼むから仕方なしに出したのだ、殺す程のことならば、何で一應親に言はねえ。あんまり向うが分からねえから、たゞ此儘ぢやァ濟まされねえ。

ト悔しき思入にていふ。

はま　父さんがあの樣に腹を立つてござんすから、お前が是から屋敷へ行き、思入言つてやんなさい。

三吉　おゝ、それがいゝ〳〵、わつちも一緒に行きやせう。

宗五　えゝ又四文と出やァがるか。無駄な口を利きやァがるな。（トきつと言ふ。）

三吉　言つて惡けりやァいひますめえ。（ト跡へ下る。）

宗五　お濱も餘計なことを言ふな、人は知らず此の己が、磯部樣のお屋敷へそんな事を言つて行かれるものか。

太兵　なに、屋敷へ言つて行けぬとは。

宗五　娘が非業に死んだので取逆せてござるから　そんなことを言ひなさるが、まあとつくりと氣を落着けて、よく考へて御覽じませ。（ト太兵衞むつとせし思入にて）

太兵　取のぼせても己は正直間違つたことを言やあしねえ、何で是が言へねえのだ。

宗五　わつちが屋敷へ言はれねえのは、一方ならず殿樣の、厚い御恩になつた故。

太兵　何と。（ト誂への合方になり、）

宗五　去年の九月菊茶屋へ祭の助に妹をやつたも長の時化續きに、板流しより内證が干上り、實は其日に困るから小遣ひ取りにやつたのだが、折よく其の折磯部樣のお目に留つて達ての御所望、行末其身の出世にもならうと思つて得心させ、支度金にと下すつた金は小判で二包、棒手振の身分では、初めて手取つた二百兩、先づ一通りの身裝をこしらへ、殘りの金で借金を綺麗に諸方へ返してしまひ、それからこつちへ引續き月々下るお前の手當、實に妹のお蔭にて浮み上つた親兄弟、ほんのことだが磯部樣の邸の方へ轉寐にも足を向けて寐ねえ位、厚い御恩になつた殿樣、是といふのも妹がお氣に入て居ればこそ、それを手討になすつたのは堅い者でも思案の外、掟を破つて辨天堂で不義をしたに違ひない、氣違ひではなし大金を出して抱へた妾をば、何で手討になさるものか、其處へ此方が理窟らしく分らぬことを言つたらば、不義をした故武士の掟手討にしたと言はれゝば、指を銜へにやなりませぬ。今更言つても返らぬことだが、一季半季の飯炊に、町家へやつて置いたらば、こんなこともありますまいに、其時金に目がくれて一時の苦勞を脱れ

る爲め屋敷へ妾にやつたが過り、それ故わつちは何にも言はず、蟲を怺へてをりまする。

ト宗五郎思入にていふ、太兵衞も尤もだといふ思入あつて、

太兵　成程手めえにさう言はれると、あの時貰つた支度金で親子の者が助つた。恩を思ふと言はれぬ義理だが、たつた一人の娘故、どうも己は諦められねえ。（ト太兵衞悔しき思入、お濱こなしあつて、）

はま　斯ういふ時には憂さ晴し、日頃好な酒でもあがり、胸をお晴しなされませ。

三吉　こりや姉さんの言ふ通り、斯ういふ時には何より酒だ、わつちが買つて來ませうか。

宗五　又餘計な口を出すか。

三吉　うつかり心付なんだが、親分お前が禁酒だから、酒を買つたら氣が惡からう。

太兵　不斷魚屋風情には珍らしく理窟を言ひ、道を道と立てる悴が、酒を呑むと打つて替り、藪に馬鍬の不理窟のみ恩も義理も忘れてしまひ、度々無法なことをするので、世間へ對して濟まぬから、金毘羅樣へ額をあげ、酒を斷たした上からは、共々己も酒は呑まぬ。

はま　そりやさうでもござりませうが、常とは替る今日の事、少し上つて其胸を晴した方がようござりませう。

太兵　志しは忝いが、酒も喉へは通らぬわい。

ト太兵衛愁ひの思入、屋臺囃子になり、花道より酒屋の御用聞き二升樽を下げて出來り門口へ來て、

御用　ハイ、御免なさいまし、お客様からお遣ひものでござります、（ト樽を出す。）

三吉　なに、お客から遣ひ物だ。

御用　今爰へおいでなさいます。

三吉　どんな人か知らないが、氣の利いた所へ遣ひものだ。

はま　お客といふのは、どんな人でござんす。

御用　美しい女中衆でござります。（ト言ひ捨て花道へはひろ、三吉樽を傍へ遣りながら）

三吉　澤山もおいらは吞めねえが、匂ひを嗅ぐと怺えられねえ。

ト宗五郎樽を見て吞み度き思入あつて、脇を向く、

はま　美くしい女中衆とは、心當りがござんせぬが、

三吉　もし親分の馴染でも、

はま　又お前口をお出しか。

三吉　モウ口は出しませぬ。

ト口を押へろ、合方かすめて大拍子になり、前幕のおなぎしな〳〵と出て來り花道にて、

なぎ　お蔦樣のお内へ參り、樣子をお話し申したらば、嘸お歎きなさるであらう、思ひの種でござんすなア。（ト思入あつて舞臺へ來り門口にて、）はい、御免なされませ。

三吉　今の女が來たと見える。アイ、何方からおいでなさいました。

なぎ　愛宕下の磯部樣から參りましてござりまする。

はま　誰かと思へばおなぎどの、遠慮はない、さあ〳〵是れへ。

なぎ　御免なされて下さりませ。（ト合方きつぱりとなりおなぎ内へはひる。）

宗五　おゝ、おなぎさん、お前に逢ひたく思つて居たのだ、よく出て來てくんなすつた。

なぎ　昨日上りませうと存じましたが、取込で大きに遲うなりました。

三吉　今度へ來た二升樽の酒は、お前のお土產か。

なぎ　左樣にござりまする、お油かお線香でも取つて參らうと存じましたが、御愁傷の其中のお氣晴しにもと存じまして、宗五郎樣がお好と聞き、少々お目に掛けまする。

三吉　折角お持ちなすつたが、此の親分は疾から酒は、

宗五　これ、餘計な口は利くなといふに、

三吉　えゝ又叱られたか。（ト口をつれる。）

はま　内の人より父さんに、今上げたいと思つたところ、ようお土産に下さいました。

太兵　いや早速ながら聞きたいは、娘のお蔦は辨天堂で、紋三郎樣とやらと密通したとは、實でござるか。

なぎ　いえ實のことではござりませぬ、ひよんなことからお疑ひをお受けなされてゞござります。

太兵　實のことでないといふは、

宗五　どういふ譯か、おなぎどの、

はま　譯を聞かして、

三人　下さりませ。

なぎ　さあ、お話し申すも淚の種。

宗五　何と言はるゝ。（ト誂への合方なり、おなぎ思入あつて、）

なぎ　お蔦樣が御祕藏の三毛といふ飼猫が、二日程遊びに出てそれ限り歸りませぬので、諸所を搜して居ります內、辨天堂で鳴聲が致します故御自身に尋ねにおいでなされたを、いつしか知つて御用人の岩上殿の御子息で典藏殿といふお人が、常から深くお蔦樣に心を掛けて居つたれば、忍び寄りて無理口說引れる袖を振拂ひ逃げるを止むる其はずみ、解けし帶をば幸ひに手籠に仕ようとな

した故、聲をお立てなされたので、御殿のお夜詰なされたる御家老樣の弟御、紋三郎樣が何事かと其處へおいでなされたので、影を隱して逃退く折、脾腹を打たれてお蔦樣は暫く氣絶なされたを、紋三郎樣の御介抱に危ふい命を助りしお禮に御家の一大事を、お話しなさるお心にて、お止め申せし折も折、烈しき夜風に燈籠の灯りが消えて暗がりに、思ひがけなく後より不義者なりと典藏に、聲を掛けられ解かれたる帶を證據に訴へられ、身に覺えなき疑ひも言譯くらき辨天堂においでなされしばッかりに、其夜不義の御詮議も一徹短慮の殿樣に、豫て祟りのあるといふお庭の古き井筒の許で、情を知らぬ典藏が戀の叶はぬ意趣返し、口說しことは言ひ掛と目も當てられぬ非道の拷問、身體に數ヶ所の疵を負ひ吐く息さへも絶々に、弱り果てしを殿樣が髻を持つて引ずり廻し、果は井筒の其中へ只一ト打に切落され、はかない御最期なされましたは、おいとしい事でござりまする。（トおなぎ泣伏す。皆々是を聞き宜しく思入。）

太兵　それでは娘が不義をした譯でもないのを名を付けて、無理殺しに殺したか。

はま　お慈悲深い殿樣と、思ひの外に科もない、妹を手討になされしか。

三吉　又叱られるか知らねえが、情を知らぬ邪險な仕方だ。

なぎ　これといふのもお蔦樣が、惡人共の密談を竊にお聞きなされしを、ひよつと外へ洩れようかと、

太兵　それ故ありもせぬ事をある樣に讒言して、遂にお庭でお手討にさせたことゝ思はれます。嘘か實を糺さずに、不義の科にて殺すとは、善惡知らぬ無慈悲な殿、己が身體が達者なら、行つて言分言ひたいが、

はま　私が行つて言ひたいにも、女のこと故、行くことならず、

三吉　おれが行つたら出過ぎると、又親分に叱られよう。

太兵　思へば悔しいことだなあ。

ト太兵衞拳を握り悔しき思入、おはま三吉も宜しくこなし、此内宗五郎はぢつと思入あつて有合ふ茶碗を取り、

宗五　これお濱、是へ一杯ついでくれ。

はま　つけとは何を。

宗五　おなぎ殿が持つて來た、其の酒をついでくれ。

太兵　それぢやあ手前は禁酒を破つて、

宗五　とつさん堪忍しておくんなせえ、今の話しを聞いちやあ、酒でも吞まにやァ居られねえ。

太兵　オヽ尤もだ、一ぱい吞め。

三吉　お許しが出た上からは、今燗をして上げやせう。（ト有合ふ片口へ樽から酒をあける。）

宗五　燗をするにやあ及ばねえ、冷でいゝからついでくれ。

はま　それではついで上げませう。（ト合方替つてお濱口からつぐ、宗五郎待兼れてぐつと呑み、）

宗五　こりやァめつぽふいゝ酒だ。（ト茶碗を出す。）

はま　澤山呑んではいけぬぞえ。

宗五　先づお定まりの駈付三杯、ぐづ〳〵せずと早くつげ、（ト是にてお濱又つぐ、宗五郎ぐつと呑み、）久しく禁酒で呑まねえか、五臓六腑へ染み渡る。

はま　もう是限りでござんすぞえ。（トつぐ、宗五郎呑み、）

宗五　小せえものぢやあ面倒だ、其片口を此方へよこせ。（トお濱が持つて居る片口を引ッたくり、息も付かずに呑む、）やうやく酒を呑んだやうだ、（ト少し酒に酔ひし思入、太兵衞案じるこなしにて、）

太兵　もう其位でよすがいゝ、是が只止めて居るならいくら呑んでも構はねえが、神樣へ斷つた酒だから、實は呑んぢやあ勿體ねえ。

はま　斯ういふ矢先で氣も塞ぎ、少しは胸も晴れようと、ほんの一ッと思ひの外、なぎ二ッが三ッと重なりて、餘程おあがりなさんしたから、私も心配して居りまする。

ト心遣ひのこなし、宗五郎顔を上げ、

宗五　お濱、もう一杯つげ。

はま　もう澤山でござんせうに、

宗五　手めえがつがざあ、三吉つげ。

三吉　姉さん、跡をついでいゝかえ。

宗五　いゝも惡いもあるものか、つがざあ樽をこつちへよこせ。

ト樽を引たくり樽の口から呑むを、お濱留めて、

はま　そんなにお前呑ましやんしたら、例の病が出ようぞえ。

宗五　モウ斯うなつたらありツたけ、呑まにやあ蟲が承知しねえ。

はま　お前が何と言はしやんしても、もう跡は上げられない。（ト樽を引取る。）

なぎ　あの樣にお內樣がお留めなさいまするから、それ限りになされませ。（ト宗五郎目をすゑ生醉の思入。）

宗五　それ限りにしろとは何のことだ、呑めと言つて持つて來た酒を呑んぢやあ惡いのか。

トきつといふ、おなぎびつくりして、

なぎ　いえ、惡いことはござりませぬが。

宗五　悪くなけりやあ黙つて居ねえ。やい、三吉の間抜野郎、何を見て居る、つがねえか。

三吉　あい、今つぎやす。

宗五　何をぐづ〱しやあがる。（トひよろ〱として立掛るを、お濱留めて、）

はま　今ついで上げるから、まあ下に居て下さんせ。（ト無理に宗五郎を下に引すゑる。）

太兵　是だから禁酒をさせたに、又呑んであばれるのか。

宗五　えゝやかましい、狸親仁め、うぬが呑めといつたぢやあねえか。（トお濱仕方なく樽の酒を片口へついでやる、宗五郎是を又息をつかずに呑む、）あゝ、やつと酒に酔つたやうだ。（ト生酔のこなしにて、鉢巻をなし、）むゝ、さうだ。

ト屋臺囃子誂への合方になり、樽を提げて立上り、外へ出ようとする故、お濱あわてゝ留め、

はま　これ、お前何處へ行きなさんす。

宗五　何所へ行かうと己が勝手だ。

はま　常ならよいが酔つてだから、先を言つて下さんせ。

宗五　是から磯部の邸へ行き、非道な殿に言分を、言はにやあ己が腹が癒えねえ。

はま　大方そんなことだらうと、思つてわたしが留めたのだ。

宗五　えゝ、留めるにやあ及ばねえ。（トお濱を突倒す故、三吉宗五郎を留め、）

三吉　行くのはいゝがこれ親分、醉を醒まして行きなせえ。

宗五　餘計なことを言やあがるな。

ト三吉を蹴倒し、ひよろ〳〵としてどうとなり、起上つて行かうとするを、おなぎ留めて、

なぎ　どうぞおいでなさるのを、お待ちなされて下さりませ。

宗五　えゝ是が待つて居られるものか。

ト樽を振上げ打たうとしておなぎを見て樽で拂ひ退け、門口へ出る、お濱三吉留めて、

はま　もし、後生だから、お邸へ、

三吉　行かずに内に居て下せえ。

宗五　まだうぬらア留めやあがるか。（ト樽で兩人を打つ、太兵衞見兼て門口へ出）

太兵　これ程みんなが留めるのに、まだ手前はあばれるのか。

宗五　邪でも非でも斯うなつたら、誰が留めても留まりやあしねえ。

太兵　それが手前の惡い蟲だ。

宗五　今それを知つたのか。（ト太兵衞を突倒す。）

太兵　うぬ、親に手向ひをしやあがるか。

宗五　親もへちまもあるものか、（ト立掛るをお濱留めて、）

はま　父さん、お前に怪我でもあつては、世間へ對して濟まぬから、

なぎ　こちらへおいでなされませ。

ト　おなぎ太兵衛を留める、宗五郎は花道へ行かうとするを、三吉留めて、

三吉　これ親分、行くのを待つてくんなせえ。

宗五　留めやあがると、血祭りだぞ。（ト樽で擲る、是にて三吉天窗へ糊紅を付けどうとなる。）どれ、言分を言つて來ようか。（ト屋臺囃子合方にて、樽を提げ、よろ〳〵と花道へはひる。）

三吉　此の僞邸へ行つた日には、（ト行かうとするをお濱留めて、）

はま　所詮お前が行つたとて、もうかうなつては止りはしない。

太兵　やつぱり不斷勝手を知つてる、お濱後から行つてくれ。

はま　あい、私が參つてお詫をするから、父さんお案じなさいますな。

なぎ　そんならどうぞ、少しも早く。

はま　三さん、跡を頼んだぞえ。（ト裾を端折り、ばた〳〵にて花道へ走りはひる。）

太兵　酒の上が惡いから、金毘羅樣へお願ひ申し、禁酒させたを破つたので、それで罰が當つたのだ。

なぎ　斯ういふ事とは存じませず、お好きと聞いてお土産に持つて參つたお酒を上り、ひよんなことになりまして、申し譯がござりませぬ。

三吉　お前が持つて來ないでも、呑まうと思へば酒屋へ行つて、自由に呑まれる酒だから、其心配には及ばねえ。

太兵　三吉、手前の疵はどうだ。

三吉　なに、少しばかりのかすり疵、痛くも何ともありやあしねえ。

太兵　手前に疵を付けたのも、元はといへば邸の殿が、無慈悲に娘を殺したから、

なぎ　其のお恨みがある故に、

三吉　不斷は物の道を立て、

太兵　曲つたことをせぬ奴だが、

なぎ　御酒を上つたところより、

三吉　屋敷へ喧嘩に行つたのは、

太兵　譬にもいふ氣違ひ水、

なぎ　どうぞことなく、

三吉　濟めばいゝが。

太兵　あゝ案じられる。（ト花道の方へ思入あつて、腕組をするを道具替りのしらせ、）事ぢやなあ。

ト三人案じる思入、屋臺囃子にて、此道具廻る。

（磯部屋敷玄關前の場）——本舞臺三間の間式臺本庇付、後ろ常足の二重左右間平棧の杉戸、二重の正面大形の襖、上の方一間中窓のある屋體の前側、此上下板羽目、下の方一間白壁、腰羽目の塀、此下黒塀總て磯部屋敷玄關前の體、爰に紺看板尻端折りの中間四人○△□◎、竹箒手桶を持ち掃除をしてゐる、調べにて道具留る。

○　今朝は早く御登城で、掃除をせずにしまつたが、

△　お長屋に子が多いので、お玄關前迄芥だらけだ。

□　早く掃除をしてしまひ、前町へいつて湯にはひり、

◎　歸りに角の山掛で、一合づゝ奢らうか。

○　又山掛へ行つたらば、井戸の話しを聞かれるだらう。

△決して世間へ沙汰をするなと、御用人から言付けだが、
□誰が話すか知らねえが、委しく世間で知つてゐる。
◎昨夜から一件が出るといふのは、ほんたうだらうか。
○番町の皿屋敷といふ、
△手本があるから、出るかも知れねえ。
□是から雨の降る晩などは、
◎夜廻りは眞平だ。（トばた〳〵になる。）
○何だか御門が騒々しいぜ。
△晝からお化が出やあしめえ。

トばた〳〵合方飴賣の鉦太鼓を冠せ、花道より以前の宗五郎樽を振廻し出て來る、是を門番の足輕六藏、七兵衞菖蒲皮の袴にて留ながら出て來り、花道にて、

六藏　やあ、御門内へあばれ込む、おのれを誰かと思つたら、
七兵　お蔦殿の宿の兄、魚賣の宗五郎だな。
宗五　無慈悲な殿に言分を、言ひに來たのだ、留めやあがるな。

六藏　門番人の留めるも聞かず、
七兵　無禮をすると許さぬぞ。
宗五　許すも許さねえもあるものか。（ト樽を振廻し、舞臺へ來る。）
○　こりや門番衆には、
三人　どうしたのだ。
六藏　留めるも聞かずあばれ込む、
七兵　狼藉者だ、捉へて下せえ。
四人　合點だ。

ト右の鳴物にて六人宗五郎を捕へようとする立廻り、宗五郎樽を振廻し生醉の立廻り宜しくあつて、ばた〳〵になり、奥より前幕の典藏伴藏傳平出て來り、

典藏　やあ騒がしい、何事なるぞ、
六藏　お妾のお蔦殿の兄が、酒に醉つて參り、
七兵　亂暴致しますから、取押へますのでござります。
典藏　妾の兄が當家へ對し、亂暴なすとは不屆奴。

伴藏　仔細に構はず取つて押へ、
傳平　繩を掛けて引据ゑい。
○　馬鹿力のある奴で、
△　なか〲手には、
四人　合ひませぬ。
典藏　中間共の手に合はずば、御兩所彼めを搦め取られよ。
兩人　心得ました。

ト此内宗五郎奥へ行かうとするを、足輕支へ留める、合方小鼓のあしらひにて、伴藏、傳平、宗五郎を取押へようとする、樽を振廻して手に合はぬ立廻り、典藏見て、

典藏　え丶、いひ甲斐のないことではある。いで、某が搦めてくれん。

ト典藏袴を引上げ、宗五郎と立廻り、鳴物早めて典藏宗五郎を捻伏せる、伴藏傳平繩を持て來り、宗五郎を縛る。

宗五　何で己を縛りやあがつた。
典藏　御恩になりし御當家へ、亂暴致す不屆奴、動けぬ樣に縛しめたのだ。

作藏　見れば大醉なした樣子。
傳平　酒興の上の亂暴なるか。
典藏　動けぬ樣に引きすゑい。
中間四人　はツ、（ト四人繩を捕へる。）
典藏　やい宗五郎、おのれは何の恨みあつて、斯く亂暴を致しをるぞ。
宗五　何も亂暴しやあしねえ、無慈悲な殿に逢ひに來たのだ、己に逢はしてくんなせえ。
典藏　やあ、おのれが身分も顧みず殿に逢ひに來たなどゝは、言はう樣ない不屆者め。
作藏　して又、殿に逢ひたいとは。
傳平　いかなる用があつてのことだ。
宗五　用といふのは外ぢやあねえ、達て所望に妾に出した己が妹のお蔦をば、無理無體に不義をしたと名もねえものに名を付けて、よくも酷く殺したな、支度金は貰つたが命迄は賣りやあしねえ、さあ妹を活して返せ。
典藏　やあおのれが妹は人でなし、貧乏暮しに其日に困り、神明内の菊茶屋へ茶汲女に出て居たを、殿のお目に留つたは氏なくて乘る玉の輿、支度金をお貰ひ申し召仕になつたのは、この上もない立

身出世、それを有難いことゝも思はず、榮耀は餅の皮とやら密通して掟を破り、殿のお面へ泥を塗りし、不屈者故お庭にて、お手討になつたのは其身に罪があつての事、所謂自業自得なるぞ。

宗五 そりやアほんとに不義をしたのなら、殺されても仕方がねえが、名もねえものに名を付けて無理殺しにしたからは、妹の敵を取らにやあならねえ。

ト縛られし儘立上り、奥へ行かうとするを、伴藏、傳平支へる宗五郎兩人を蹴退け、典藏へ立掛るを皆々取押へる、ばた／＼になり、以前のお濱走り出て來り、

はま あゝもうし、何れも樣酒興の上でござりますれば、お許しなされて下さりませ。

ト此中へはひり、宗五郎をかばひ皆々を留める。

典藏 さう言ふそちは女房なるか。

作藏 留立て致さず、

傳平 すさりをらう。

はま 憚りながら私が參ります上からは、亂暴は致させませぬ。どうぞおゆるし下さりませ。

宗五 かゝアか、來ねえでもいゝ所へ、何で爰へ來やあがつた。

はま 是が來ずに居られませうか。

宗五　さあ、妹の敵だ、覺悟しろ。

トツカ〳〵と立上つて典藏を蹴る、是にて繩を引張る。宗五郎ひよろ〳〵としてばつたり倒れる。

典藏　武士たる者を足蹴にせし無禮者め、覺悟しろ。（ト刀を提げて立掛るをお濱留め。）

はま　御尤もでござりますが、何を申すも酒興の上、お許しなされて下さりませ、今お手討になりますれば、宿にをります父親が、たつた二人の兄弟が非業な最期をしましたら、歎きに沈んで共々に身でも投げて死にませう、其處を不便に思召し、どうぞお許し下さりませ。

典藏　何樣そちが頼むとも、無禮をなせば許されぬ。

はま　スリヤ、どうあつても宗五郎を、

典藏　手討にせねば武士が立たぬ。

宗五　おゝ面白い、殺せ〳〵、鮪庖刀なら知らねえこと、汝らが腐つた鈍くらで、負けぬきはだの胴骨が切れるものなら切つて見ろ。

はま　えゝもう、默つて居なさんせ。

典藏　どれ、刀の切味見せてくれう。（ト刀の柄に手を掛ける、此時奥にて、）

十左　いや典藏殿、暫くお待ち下されい。（ト合方鼓のあしらひにて、奥より浦戸十左衛門上下大小にて出來る）

典藏　無禮者を手討に致すを、浦戸氏には何故に、手前をお止めなされしぞ。
十左　貴殿のお爲めを存ずる故、手前お止め申してござる。
典藏　なに、拙者が爲めとは。
十左　彼を手討にめさるのは、殿より仰せ附られしか。
典藏　いや、仰せではござりませぬ。
十左　然らば貴殿一存で、彼を手討にめさるのか。
典藏　いかにも無禮を致せし故、刀の手前手討に致す。
伴藏　無禮者を手討に致すは、
傳平　武家一統の習ひなるを、
典藏　何故お止めなされしぞ。
十左　そりや無禮過言を致せし者を、手討に致すは苦しからねど、爰を何處と思はれるぞ。
典藏　やゝ
十左　殿御登城他の客來、家來の者の私に通行成らざる此御玄關、上意ならば知らぬこと、私事にて手討になし、血汐を以て御玄關を汚しては濟みますまい。（ト典藏ぎつくりなし、）

典藏　む〻、是は心付きませなんだ。

十左　是にて彼れを手討になさば、貴殿の越度にならうと存じ、手前がお止め申してござる。

典藏　よくぞお止め下すつた。

作藏　是より裏の空地へ引立て、

傳平　彼を手討になさるがよい。

典藏　いかにも左樣致すでござる。

十左　いや、其の儀もお待ち下されい。

典藏　又お止めなさるゝか。

十左　さあ見受けし所大醉なし、前後忘却せし樣子、申せば性根のあらざる者、何樣過言申すとも酒興の上は取るに足らず、醉の醒めし其上にて過言を申さば其時は、有無を論ぜず刀の手前、彼を手討に致されい、今此場にて手討になさば、情を知らぬ者なりと隣家の誹を受ける時は、貴殿ばかりか殿の御恥辱、爰の所を思しめされ、再び彼の醉が醒め性根の附く迄暫時の内、手前へお預け下されい。（ト典藏思入あつて、）

典藏　事を分けたる貴殿のお頼み、宜しうござる、暫時の内彼が命をお預け申す。

十左　それは千萬忝い、確と手前預り申す。
典藏　然らば醉の醒めし上にて、過言をせめて手討になさん。
十左　其時こそは隨意にめされ。
作藏　浦戸氏のおいでがなくば、
傳平　今頃は首のない身體、
典藏　命冥加な奴だな。
ト唄になり、典藏先に伴藏傳平思入あつて奥へはひる、此内宗五郎奥へ行かうとするを、お濱留める、宗五郎十左衞門を見て、
宗五　やあ、こいつア吹矢の化物の樣に、又役人が變つて出た。（ト言ふをお濱留めて、）
はま　これ、貴方のお蔭でお前の命が、今助かつたのでござんすから、よくお禮を言はしやんせ。
宗五　えゝ、べらぼうめ、妹を殺され、禮をいつてたまるものか。（ト生醉の思入。）
はま　えゝも、貴方にそんなことを言つては、
宗五　濟むも濟まねえもあるものか、是から奥へあばれ込み、殿の野郎を引ずり出し、叩き擲つて腹をいるのだ。

はま　まだそんな事を言ひなさんすか。（ト濟まぬといふ思入にて、胸づくしをとる。）
宗五　えゝ、何をしやあがる。（ト肩で振拂ふ、お濱ばつたり倒れる、十左衞門思入あつて、）
十左　こりや、繩を解いて遣はせ。
六藏　はツ、仰せではござりますが、
七兵　解いたら又々、
兩人　あばれませう。
十左　いや苦しうない、解いて遣はせ。
兩人　はツ、（ト宗五郎の繩を解く、宗五郎合點の行かぬ思入にて）
宗五　何で繩を解いたのだ。
十左　無躰屈であらうと思ひ、身共が繩を解かせたのだ。（ト宗五郎十左衞門を見て）
宗五　さういふ貴方は、御家老様か、こりやァ有難うござります。
はま　醉が醒めたらお詫をして、早く内へ歸りなさんせ。
宗五　いや、此儘ぢやァ歸られねえ、もし、わつちの言ふのが無理か無理でねえか聞いておくんなせえ。（ト誂の合方、猩々の笛をあしらひ、生醉の思入にて、）呑んで言ふのぢやあござりませんが、妹が殿様

のお目にとまり、支度金に二百兩下すつた時の有難さ、實は内の雜物を殘らず質に置いてしまひ其日に困つた所故ほんの事だが親子四人、磯部樣のお蔭だと有難涙にくれました。（ト目をこすり泣くことあつて氣を替へ、）はゝゝ、妹の支度をした殘りで、質も出せば借も返し、先づ盤臺から天秤棒迄そつくり新規に拵へて、魚は芝の活物を安く賣るので直に賣れ、毎日錢の儲るので好な酒をたらふく呑み何だか心面白くッて、はゝゝゝ親父も笑やあこいつも笑ひ、わつちも笑つて暮らしやした、はゝゝゝはゝゝゝゝ、（ト宜しく笑ふことあつて、）悅びあれば悲しみありと、此方の邸の殿樣が、何科もねえ妹をなぶり殺しにしたといふから、腹が立つて堪えられねえ。（ト腕まくりをしながら、）それ故斷つた酒を破り、酒の力を借りるといふ譯ぢやアねえが、醉つたから妹の敵を取りに來たのだ、爰でわつちに殿樣をどうぞ逢はしてくんなせえ。

ト此内宜しく思入で言ふ、お濱側で氣の揉める思入、

はま　これ、もうよい加減に言ひなさんせいな。

宗五　御家老樣は分つて居るから、譯を聞いて貰ふのだ。

ト宜しく生醉の思入、十左衞門も思入あつて前へ出、

十左　こりや、宗五郎、

宗五　えゝ、何でござります。（ト膝へ手を突き居る、十左衞門思入あつて誂の合方になり）

十左　一ツ血筋の妹が非業なる死をとげし故、そちが申すも尤もなれど、爰をよく辨へよ、武家奉公をなす者は不義を致せば手討になるは、武家一統の掟なれば、是非なきことゝ諦らめよ、是にも深き仔細あれど今打明けて申し難し、殊には熟醉なせし樣子、醉が醒めなば某が會得なす樣申し聞けん、就いては父も老人と豫て噂に聞及ぶ、賴みに思ふ子を失ひ、便り少なく思ふであらう、ちつとも其身の困らぬ樣、必ず惡しくは計らふまじ、先づ熟醉の醒める迄それにて一睡致すがよい。

ト十左衞門物柔らかに言ふ、宗五郎理に落ちし思入にて、俯向き居て、トゞこく／＼居睡りをなし、

トゞばつたりと倒れたまゝ寐る、お濱氣をもみ、

はまこれ、貴方があんなにおつしやるのに、寐るといふがあるものかいな。

宗五　あゝ、いゝ心持に醉つたなア。（ト足を伸ばし踏反り返り寐る。）

はまこれ、こゝは大事のお玄關前、お前寐ては濟まぬわいな。（ト起さうとするを）

十左　あゝ、眠りにつかば起すに及ばぬ。

六藏　ではござりますが、

兩人　お玄關前に、

十左　然らば庭へ連参れ。

兩人　畏つてござります。

ト後から宗五郎を抱上げる、ぐつたりとなりし儘手をたゝきながら都々一を唄ふ。

宗五　まゝよ三度笠横たに冠り、旅は道連世は情、こりや〳〵。（ト又寐る。）

はま　あ、これ、そんなことを言つて。（トゆり起すを、）

十左　いや苦しうない。こりや、いたはり遣はせ。

六藏　さあ、御家老樣のお詞だ、

七兵　お庭先へ引立て行くぞ。（ト中間宗五郎の兩手を取るを、）

宗五　一足も歩けねえから、何處へでも寐かして置いてくれ。

はま　てもまあ、呆れた。

六藏　さあ、しつかりと、

兩人　しねえかえ。

ト合方になり、足輕兩人宗五郎の兩手を取り、無理に肩へ掛け引立てお濱付いて上手へ入る。十左衞門跡見送り、

十左　酒興の上で此處へ、妹の敵と言ひ來りし、宗五郎が心の内、嘸殘念に思ひつらん、こりや典藏が裏を行き、上へ執成し宗五郎が一命助け遣はさば、自然と恨みも消ゆる道理。（ト思入あつて）あ性は善なる人心、醉が醒めなば、（ト立上り、刀の下緒捌きをするを木の頭。）諭し遣らん。

ト思入合方にて

ひやうし幕

ト調べにてつなぎ、引返す。

大切　磯部屋敷庭先の場　大門神明祭禮の場

〔役名――魚賣宗五郎、磯部主計介、浦戸紋三郎、岩上典藏、魚賣三吉、浦戸十左衛門。宗五郎女房おはま。足輕六藏、同七兵衛、其他。〕

〔道具の場〕――本舞臺四間高足の二重本庇本緣付、金地の襖平舞臺の上下網代塀の張物にて見切、此前石燈籠四ツ目垣、楓の立木、本緣の眞中御影の大沓脱、總て磯部邸庭先の體。平舞臺に筵を敷き、此上に宗五郎着流し三尺にて、酒に酔倒れ寝て居る、此側に女房お濱前垂掛け世話女房にて附添ひ上手に草履取の足輕六藏、七兵衛の兩人控へ、下手に番手桶を置き、此の模樣合方にて幕明く。

はま　まことにあなた方へ御厄介を掛け、お氣の毒でござりまする。
六藏　何の〳〵、こちとらも覺ヱがあるが、酒を呑むと誰彼の見さかひがなくなるのは、
七兵　こりやア、世間有打ち故、そんなに心配、
兩人　しねえがいゝ。
はま　有難うござりまする。（ト宗五郎をゆり起しながら、）もし宗五郎さん、もう目を覺しなさんせいな、
もし〳〵、（トゆり起す。是にてやう〳〵に頭を上げ、）
宗五　まだ夜が明けやあしめえ、もうちつと寐かして置け。
はま　あれまあ呆れたものでござんす、夜明どころか、もう今に日が暮れるわいな。
宗五　なに、もう日暮前だ、べらぼうめ、晝間かゝあと二人して床の上などに居たことはねえ。
はま　えゝ、床の上ではない、是は筵でござんすわいな。
宗五　なに、筵だ。（トよく〳〵見て、）いよ筵でも結構、此上で水を一杯呑みたいな。
はま　えゝも、そんな贅澤が出來るものかいな。（ト突放す、）
六藏　いや、醉醒の水の味は、下戸は知らぬが覺えがあるから、
七兵　遠慮なく呑ましてやるがいゝ。（ト有合ふ番手桶を出す。）

はま　左樣なら、是をお貰ひ申しまする。（ト柄杓へ汲取り、）さ、水を呑みなさんせ。
宗五　いよゥ、見ず知らずでは魚賣が此贅澤は出來ないが、女房は有難いものだ。
はま　えゝも、よい加減に正氣になりなさんせ。（ト此内宗五郎柄杓で水を呑み、）
宗五　あゝ、いゝ心持になつた。
はま　ちつとは氣が付きましたかえ。（ト是にて宗五郎伸をしながら、）
宗五　いつてへ此處は何處だ。
はま　何處だどころぢやござんせぬ、お邸樣のお庭内ぢやぞえ。
宗五　え、お邸へどうして來たのだ。（ト合方きつぱりとなり、）
はま　お前は死んで居なさんすか、不斷お酒が惡い故禁酒して居る其くせに、妹御のお蔦さんが此のお邸でお手討になつた事を聞いた時、おなぎさんが持つて來た土產のお酒を其場で開き、留めるを聞かず茶碗で呑み段々廻る其内に、金毘羅樣へ禁酒した其罰故に又元の酒亂となつて内を飛出しお屋敷樣のお玄關先で、妹の敵殿樣の首を渡せと惡口雜言、既にお前はお手討にならうとしたを御家老の浦戸樣がお情にて其場を助り此處で、今迄寐たのでござんすが、醉が醒めなばどの樣なお咎めがあらうかと、わたしや泣いても追ッ付ず、氣を揉んで居ますのに、お前は何も白川夜舟

少しは私の心を察し、正氣になつて下さんせいなあ。

ト宗五郎にすがり愁ひの思入、宗五郎は少し正氣になりし思入にて、

宗五　そんならおれは惡口した、其科故に此命を、取られるところであつたとか。

はま　あい、御家老樣のおいでがなくば、首がころりと落ちるところ、生きて居るそらはなかつたわいな。

宗五　えゝ、此の首が、(トびつくりして身震ひをなし、)聞いてもぞつとする話しだ。(ト是にて正氣になりしこなしあつて、)あぶねえところで、よく助かつた。

はま　まだ其上に此處へ、足輕衆をお付け下され、醉が醒めるそれ迄は、そつと寐かしておくがよいと實に涙のこぼれるほど、有難いお慈悲のお詞、ほんにお前は御家老樣を神佛とも思はぬと、天道樣へ濟まぬぞえ。

宗五　さうか、そいつあ濟まねえことをしたな。

トお濱宜しく思入、宗五郎腕組をなし、ちつと思入、合方きつぱりとなり、奧より十左衞門上下大小にて出て來り、二重眞中へ住ふ。宗五郎お濱は是を見やりびつくりなし、下手へ下り平伏する、十左衞門兩人へ思入あつて、

十左 こりや宗五郎、醉は覺めしか。

　ト宗五郎は、ハッと俯向き居る、お濱心遣ひの思入あつて、

はま はい、漸々正氣になりましてござりまする。

十左 むゝ、正氣になりしとか。（ト宗五郎矢張默つて居る故、お濱氣をもみ）

はま はい／＼、正氣になりまして濟まぬことを致しましたと、只今になり宗五郎は後悔致して居りまする。（ト宗五郎へ思入あつて）もし／＼こちの人、御家老樣のお詞があるに、なぜ默つて居なさんすぞいなア。（ト是にて宗五郎は面目なき思入にて、）

宗五 どの面下げて御家老樣へ、御挨拶が出來るものか、よく考へても見るがいゝ。

　ト面目なきこなしにて、又俯向く、

はま さゝ、それぢややによつて私から御挨拶はして居れど、これもみんな心から、何故に酒を飮みなさんしたぞいな。

宗五 さう手前に言はれると、己は穴へでも入りてえが、向後酒は呑めえと、心に錠をおろした上に額を金毘羅樣へは濟まねえが、妹が切られて癪に障り、（ト言掛けるをお濱十左衞門へ氣を兼ね、宗五郎に默つて〳〵、）いやさ、妹が死んだことを聞き、何だか胸がもや〳〵と、一旦節した當前の酒を飮ん

て此の始末、長らく妹が御恩になつた御主人の玄關へあばれ込み、亂暴した上からは、正氣になつて考へると、生きて居ては濟まねえ譯、己はもう覺悟して、殺されるのを待つて居るのだ。

ト覺悟の思入、十左衞門此の體を見て

十左　下賤といへど其性は、一なるものに相違なし、一旦酒興に前後を忘れ、無禮過言を致すとも、正氣になりてそれを謝さば、佛說に言へる懺悔滅罪、町人ながら其方は武士にもまさるよい覺悟、某感心致せしぞ。（ト是にて宗五郎もぢ／＼と前へ進み、）

宗五　貴方がお助け下さりましたを、女房から聞きまして濟まねえことゝ氣が付けば、決して命は惜しみませぬから、亂暴をした此身の科は、どうぞお邸の御法通に、御存分になされて下さりませ。

十左　いや、其心底は適れなれど、身共が上へ執成して、一旦そちを助けし上は、別に咎めは申付けぬ最早安心致すがよいぞ。

宗五　え、それぢやあ酒亂で無禮をした、罪をお許し下さりますのか。

十左　酒興の罪を許しやるも、當家に於て手討になりし、そちが妹蔦が爲めぢや。

宗五　何とおつしやりまする。（ト　誂の合方になり、）

十左　佞人讒者が舌頭に、君の御心荒々しく、無慚や蔦は敢ない最期、此事自然と噂となり、下ざまへ

流布なさば、遂には御家の爲にならず、現在そちは彼が兄及ばぬながらも妹の敵と、殿を恨み奉ればこそ酒興の上で口外もなす、それ故某一命に替へ汝が無禮の執成致すも、蔦が恨みを除かん爲め、此儘助け遣はす時は彼が冥府で悦ばん。それぢやによつて今日の科は許し遣はす間、向後酒に魂を奪はれぬ樣に身を愼み、夫婦睦じう致すがよいぞ、

ト十左衞門宜しく諭す、兩人手を突き。

宗五　流石は大家の御家老樣、事を分けたる其お詞、すつぱり譯が分かりました、それには引替へ小さな氣で、妹の敵を取らうなどゝ、酒の威勢であばれ込んだは、實に面目ござりませぬ。

はま　決して二人におきましては、妹の事は恨みませぬ、是に付けてもお蔦さんがあの世で是を聞かれたら、嘸悦ぶことでござんせうわいな。（ト兩人宜しく思入。爰へ奥より袴侍一人出て來り、）

侍　はツ、只今殿樣是へ入らせられまする。（ト最にて宗五郎兩人びつくりなし、）

宗五　えゝ、殿樣が爰へおいでなされますか、それぢやあ先刻のお咎めを喰ふのぢやあござりませぬか。

ト兩人氣味の惡きこなし、

十左　それは執成し致しおれば、安心致してそれに控へよ。

宗五
はま　へい。

ト宗五郎お濱ずつと下手へ下りて俯向居る、此内近習褥煙草盆をよき所へ直す、誂への合方になり、正面の襖を左右へ開き、奥より主計之介羽織袴一本ざしにて、近習刀を持附添ひ出て來り、眞中褥の上へ住ふ、十左衞門下手にハツと平伏なし、

十左 はツ、只今は御前におき下賤が無禮のお詫せしに、早速御聞濟み下さりまして、拙者身に取り如何ばかりか大慶至極にござりまする。(ト主計之介思入あつて、)

主計 假令下賤の者たりとも、其身に引受け助け遣りしに、予も感心致せし故、聞濟みて遣はせしが、流石は當家の礎たるそちは天晴なる者ぢやぞ。

十左 恐入りましてござりまする。

主計 して酒興の上なる其の者は。

十左 恐れ多うござりますれど、あれに控へ居りまする。(ト下手の宗五郎へ思入、主計之介見やり、)

主計 おゝ、左様か。こりやそな者、是れへ。

十左 はツ、こりや、君の仰せそれへ出い。

宗五
はま へい、(トおど／＼する故、)

十左 えゝ、出いと申すに。

兩人　へえい。（ト是にて餘儀なく前へ出る、主計之介兩人を見やり。）

主計　こりや、もそつと進め。

宗五　へい、（ト汗を拭きながらもぢ／＼して又後へ下る。）

主計　いや、左樣に恐るゝことはない。

宗五　いえ、是でわたくしは澤山でござります。

主計　いや、此方より兩人へ詫をせねばならぬのぢや。

宗五
はま　えゝ、何とおつしやりまする。（ト本調子の合方になり。）

主計　予が一徹短慮より不便や蔦を手討になし、嘸や我を恨み居らんが、是にも種々の事故ありて我過より生ぜし事、今更となり後悔せり、酒興の上で當屋敷へ其方今日來りしも元はと云へば妹が事より、恨重なり來りしならん、そは此方迚も同じ事、好める酒の醉に乘じ、蔦を手討になしたるを後悔なせど返らぬ事、其替り當家に於ても彼が亡跡懇に弔ひ遣はすのみならず、必ず其方親子の者は惡しき樣に計らはねば重なる恨みはゆるしくれ、これ、此通り詫びるぞよ。

ト主計之介手を突き詫びる、十左衛門は感心せしこなしにて、ぢつと俯向き、宗五郎兩人はびつくりなし、

宗五 あゝもうしお手をお上げなすつて下さいまし〳〵、勿體ない殿樣が魚屋風情の私共へ、お手をお下げなすつては、實に罰が當りまする。（ト二重の下より宜しく賴む。）

主計 まこと面に顯はるゝ正直律義な二人の者、其方共を見るに付けても、予は猶々面目ないわえ。

ト、ちつと思入、宗五郎思入あつて、

宗五 御家老樣のお詞で、有難涙にくれましたに、又候あなたが御自身にお詫び下さる勿體なさ

はま 却つてそれではあの子迄か、草葉の蔭で恥ち入りまする。（ト宗五郎前を向き思入あつて、）

宗五 こう妹、手前は此頃地獄に居るか、又極樂かは知らねえが、己の言ふのをよく聞けよ。（ト合方になり、）手前が殿樣に切られたのは、紋三郎樣と怪しいことが、よしんば無いにした所が、眞ッ暗闇に辨天堂に只二人で居たのが過り。何と言はれても仕方がねえ、それには引替勿體ねえ、妹を切つて濟まねえと、こちとら風情へ殿樣や御家老樣が御自身に詫をなさるといふ事は、實に己あ涙が出て、居ても立つても居られねえのだ。惡く思ふな、惡く思ふとうかばれねえぞよ、よ、（ト宗五郎向うへ思入あつて手拭で涙を隱し妹に呑込せるこなしあつて、）己も手前が可愛さうだから、悔し泣きに泣いたけれど、今殿樣のお詞で嬉し涙が出て來やあがつた。（ト涙を拭きながら、）なァかかあ、さうぢやあねえか。（トちつと俯向く、お濱も愁ひの思入にて、）

はま　今殿様のお詞が千部萬部の御經より、はるかに勝る有難さ、どうぞお前もあの世に居て悦んで下さんせ。（ト思入あつて、）然し其身の汚名も晴れ、無事に此世に居たことなら、又悦びも一倍なれど、可愛や露と消えて行く身は空蟬の旅立に、言うて返らぬ憂き思ひ、惜しいことをしましたなあ。（ト愁ひのこなし、宗五郎二重へ氣を兼る思入あつて、）

宗五　そりやあ愚癡といふものだ、假令妹は死んだつても、今のお詞で澤山だ、慾もいゝ加減にかわいておけ。

はま　それでも達者で居たことなら、一倍嬉しいことぢやと思うて。

宗五　えゝ、いゝ加減にしやあがれ。

はま　それでもそれに違ひないから。

宗五　まだ言やがるか。（ト我を忘れて立掛るな、）

十左　これ／＼、御前なるぞ、控へ居らぬか。（トきつといふ、兩人心付き、）

宗五　へい、御免下さいまし、ついいつもの夫婦喧嘩で、毎度お長屋の御厄介に、いえなに貴方様のお叱り受け、眞平御免、

はま　下さりませ。

ト後へ下ろ。此内主計之介近習に言付け、手箱を取寄せ、中より金包を出し、十左衞門に渡す、十左衞門思入あつて、

十左　妹蔦が死を遂げし跡を弔ふお惠み金、有難く頂戴致せ。（ト足輕取次ぎ、宗五郎の前へ置く。）

宗五　いえどう致しまして、私の命が助りましたから、此お金は受けられませぬ。（ト戻すを、）

十左　其辭退には及ばぬ故、お請致して置くがいゝ。

宗五　それでもどうも、

はま　是れを受けては、

宗五　はて、頂戴致せと申すに。（トきつといふ。）

十左　左樣なら、妹が弔ひ料に下さりますとか。

宗五　冥加にあまる此のお惠み、

はま　えゝ有難うござりまする。（ト押戴き。）

宗五　此上は蔦が父太兵衞一代、當家より二人扶持遣はすぞ。

主計　はツ、有難き其の仰せ、兩人お請致せ。

十左　すりや、此上に親太兵衞へ。

宗五

はま　御扶持を下さりまするとか。

宗五　何とお禮を申さうやら、

はま　實に涙が、

兩人　こぼれまする。

　　ト辭儀をなす。ばた／＼になり、花道より侍走り出て來り、直舞臺へ來りて、

侍　はッ仰せ付けられました岩上親子を取調べましてござりまする。

主計　むゝ、して典藏は如何せしぞ。

侍　典藏儀は他出の由故、手分致して尋ねしところ全く彼は逐電せしと、申すことにござりまする。

主計　彼は何か不義せしと、詐へ出でし者なるゆゑ、惡事露顯と推察なし、逐電せしと相見ゆる。

　　ト思入、是を宗五郎聞耳立て、

宗五　むゝ、そんなら妹が不義せしと、詐へたのはさつき逢つた典藏といふ人か、こいつあ一番突留めて、敵を討たにやあならぬわえ。（トきつとなるを、お濱袖をひかへ、）

はま　おもし、又お前お酒を呑んで、あばれると困るぞえ。

宗五　案じるな、酒なら今度すつぱりとやめた。（ト十左衞門思入あつて、）

十左　禁酒と聞いて身も悦び、無禮なき內少しも早く御前をお暇致すがよいぞ。

宗五　へい、もうお暇致しまする。

十左　それ、門迄彼を送り遣はせ。

足輕　はツ、（ト宗五郎お濱下手へ手を突き）

宗五　左樣なればお殿樣、

はま　お暇致すで、

兩人　ござりまする。

主計　おゝ、堅固で居やれ。

兩人　はツ、

ト是を誂の合方になり、足輕兩人案內して、宗五郎お濱花道へはひる、主計之介近習へ思入あつて

主計　其方共は、暫く遠慮致せ。

近習　はツ。

ト近習會釋して奧へはひる、主計之介十左衞門へ思入、是にて十左衞門四邊を窺ふことあつて、元の所へ來り、

十左　最早差合はございませぬ。

主計　こりや十左衛門、そちにも詫をせねばならぬぞ。

十左　何と御意遊ばしまする。(ト笛の入りし合方になり、)

主計　一人淫酒にふける時は、一家に亂の起ること昔より今に其例まゝあることをかへりみず、佞臣岩上親子が讒言なすを實と思ひ、忠臣無二の其方等を遠ざけしは我愚、今玄關口にて宗五郎が前後を失ふ酒亂の惡口、實に尤もなる申分に、篤と是を考ふれば、我過りにありしぞと、過ぎ去りし非を後悔なし、佞人共に覆はれたる雲霧晴れし我心中、是に就いても典藏が詞を用ゐて召仕ひの蔦を手討になしたると、不義の科にて紋三郎へ禁足申し附けたるが、今となりては面目なし、嘸殘念に思うであらうが、其方よしなに詫びてくりやれ。

十左　過つて改むるに憚る事なしと、君御心が付給ひ佞臣共が申し上げしを、僞言と思召す上は、まことに御家は安泰なり、又蔦が横死も兄宗五郎へお詞下し置れまして、有難涙に眞心顯れ、戻りし上は是迚も聊恨む氣遣ひなし、それらは御安堵遊ばしまして、只此上は御身を堅固に、御家全うあそばされますやう、臣等が願上げまする。

主計　我胸中の愚より、忠臣たる紋三郎を、讒者の爲に遠ざけしが、再び彼が訴訟に出せし蔦が祕藏の

飼猫が衛へ來りし惡事の廻狀、一味の惡人殘る方なく、姓名知れたる上からは、是より佞人讒者を退け、忠臣再び顯はるゝも武運に盡きざる我仕合せ、紋三郎が罪を許せば、以前に變らず精勤なす樣、其方より傳へくれよ。

十左　すりや紋三郎がお咎も、今日御赦免下さりまするか、有難う存じ奉りまする。(ト横笛の合方になり)

主計　岩上吾太夫が詞を用ゐ、假にも本家を恨みしは天理に缺けしことなるを、只今となり心付けば、此儘居るは濟まざるわけ、早今日限り隱居なし幼年たる嫡子にて家督相續の願ひを出せば、汝等兩人此後は羽翼となつて忠義を盡し、嫡子の保護いたしくりやれ。

ト是を聞き十左衞門ぢつと思入あつて、

十左　すりや、それ程迄に御君には御身の潔白立てさせられ、御家大事と思し召しまするか。

主計　おゝ、我潔白の證據を見せん。(ト後ろへ思入あつて、)誰そあるか、申付けし品是へ。

侍　はあゝ、(ト奧より以前の侍首桶を持出て來り、主計之介の前へ置きすぐ入る。)

主計　十左衞門、是を見よ。

十左　はッ、(ト十左衞門首桶を引寄せ蓋を取る、内に吾太夫の切首ある。)や、こりや岩上吾太夫が首級。すりや、我君には此者の。

主計　首級を上げしは惡事の棟梁、幹を枯らさば其枝も自と枯るゝは必定なり。

十左　はッ、恐入りたる御計らひ、吾太夫首級と相成る上は、彼に一味の醫師道庵、荒波、潮田其餘の者罪を糺してそれ〴〵に、死刑追放申付けなば、跡は忠臣義臣のみ御家に風波の愁ひなし、たゞ此中に不便なは、お蔦殿の召仕忠心厚きなぎが身の上、よしなに願ひ上げまする。

主計　彼は主人を思ふ心底適れなる者故に、此後取立て使ふであらう。

十左　すりや、お取立下さりますとか、えゝ有難う存じ奉つりまする。

ト時計の音になり主計之介思入あつて、

主計　忠義の鏡照渡り、幼き若へ世を譲る榮えを松の島臺に、

十左　千歳を祝ふ鶴龜の、齢は御家の萬代不易、

主計　磯部の眞砂盡きずして、名も高砂の浦戸兄弟、

十左　二代の勤役致しなば、頓てつむりも白妙に、

主計　尉どのならぬ竹の杖、

十左　弓は袋に刀は鞘、

主計　浪靜なる、

十左　御家の納り、（ト主計之介悦ばしき思入あつて、）

主計　おゝ、目出たい。

十左　はツ、（ト平伏する。主計之介は扇を開く、是を道具替りの知せ。）

主計　目出たい〳〵。

ト兩人悦ばしき思入、高砂の謠の切にて、此道具廻る。

（神明祭禮の場）――本舞臺一面の平舞臺、向う裾通り草土手、此後神明の本社を見たる遠見、上手練塀の張物、下手朱塗大門の袖を見たる書割、草土手の間、祭の山車、萬燈など澤山行違ふこと、よき所に柳の立木、此道具總體灯入にて、總て大門より神明祭禮を見たる體、祇園囃子にて道具納まると矢張右の鳴物にて上手より祭りの人數大勢、揃ひの着附思ひ〳〵のこしらへにて萬燈長提灯などを持出て來り、皆々舞臺に居並び、

一　先町内を繰出して、源助町から柴井町と、

二　渡りを付けて練込んだが、此宮元を廻つたら、

三　片門前から濱の方へ、氣を揃へて押掛けようぜ。

四　今年はみんなが濱へ行つても、互ひに喧嘩をしねえ樣に、
五　睦み合ふのが氏子のよしみ、手打をしたら門々へ、
六　挨拶をして威勢よく、又宮元へ歸つて來て、
七　參詣したら其擧句、車屋へでも上り込み、
八　わつさり一ぺい御神酒をあげ、
九　崩れはいづれ品川か、
十　又深川へ、
皆々　乘込まうぜ。

ト皆々下手へゆかうとする、此時花道よりばた〳〵になり、前幕の典藏頰冠り尻端折大小にて走り出て來る、是を以前の宗五郎出刄庖刀を持ち、追掛け出て來り、花道にて典藏をとらへ、

宗五　妹の敵覺悟しろ。
典藏　何をこしやくな。

ト矢張右の鳴物にて、ちよつと立廻り、宗五郎を突退け典藏祭の人數へ紛れ込み、宗五郎も後追掛け此中へはひろ、此内典藏のがれて下手へ逃げてはひろ、宗五郎典藏を見失ひ、あちこち大勢の中を搜

す、皆々宗五郎を見て、

一　や、こいつは刃物を持つて居るぞ。

二　それ、つかめえろ。

皆々　合點だ。

ト渡拍子になり、皆々宗五郎を押へようとする、宗五郎むやみに出刃庖刀を振廻しながら拔けつ潜りつ典藏を尋ねるこなしにて、ごつちやの立廻りあつて、トゞばた〳〵下手より以前の典藏を三吉鉢巻尻端折にて、六尺棒を持ち追掛出て來り、直舞臺へ來り、此中へはひり、ちよつと立廻りて、

宗五　おゝ典藏か、捜して居たのだ。

三吉　親分、加勢に來ました。

宗五　それ、やッ付けろ。

三吉　合點だ。

典藏　もう此上は、

ト典藏刀を拔く、是にて祭の人數は、それ拔いたと皆々上下へ逃げて入ろ、宗五郎、三吉、典藏とちよつと立廻つてきつと見得、是より三味線入の祭の鳴物になり、兩人立廻りの中へ三吉六尺棒にて

典藏の邪魔に入る立廻り、トヾ典藏に切立てられ、宗五郎危ふくなる、ばた〳〵になり花道より紋三郎着付袴大小にて走り出て來り、花道にて、

紋三　や、其處に居るのは、典藏なるか。

典藏　南無三。

ト逃げにかゝるを宗五郎支へる、紋三郎ツカ〳〵と來り、典藏と立廻り宜しくあつて、典藏の刀を落し手早く膝に引敷き、宗五郎兩人きつとなつて、

宗五　さ、妹の敵覺悟しろ。（ト出刃庖刀を振上げるを、紋三郎押とめ）

紋三　いや、此場でこやつを打果さば、互ひに其身の越度となれば、くゝし上げて邸へ引立て、上の處刑に行はん。

宗五　すりや、此處で妹の敵を討つことはなりませぬか。

紋三　そちが敵ばかりでなく、御家を覗ひし大惡人、重き罪科に行ふ奴。

宗五　さすればこいつはお仕置もの。

三吉　親分、いゝざまだなあ。

典藏　何を。

ト起上らうとするを、紋三郎押へ付け、下緒にて縛ろ、宗五郎思入あつて、

宗五　あぶねえ白刃の叩き合に、すんでに命を捨てるところ、

三吉　紋三郎様の加勢が來て、親分もおれも無事に助かり、

紋三　惡人亡び善人榮え、

宗五　こんな目出度い、

宗五 三吉　ことはない。

ト以前の人數上下へ出て取卷き、引張りの見得、頭取出て、

頭取　先づ今日は是ぎり。

ト目出度打出し

新皿屋敷（終り）

戀闇鵜飼燎

前に歌舞伎新報で角田川の身投より小佛峠で忠藏が戀慕に迫るくだり迄出版なして御存じ故容を變て小田原宿お手代が部屋に居續けの船木といふも化地藏其三五郎と連立てゆすりに來たる熊藏を酒匂川原で討て捨て逃行く袖へ縋られて旅に重荷のお夏を連れ忍ぶ笹子の安泊りお六が居爐裏焚附る嫉妬の責を七兵衛が見兼て送る山坂道幼兒杖に行惱む盲目のお崎が貞節を聞て涙の村時雨雪と替りて文三の爲切殺されし一睡の夢を破りて古宮へはひる數疋の狼に喰殺されし小松が最期首はながれて鵜遣ひの鵜繩にかゝる因果同士主從親子兄弟が玆に落合ふ石和川緣の淺瀬と同胞の横死をなげく甲作に身さびの鮎と強盜の賢三が自殺は悔悟の結局

「戀闇鵜飼燎」が初めて上演されたのは、明治十九年五月千歳座で、作者七十一歳の時のことであるが、此作が最初に發表されたのは、雜誌歌舞伎新報の誌上に於てゞあつた。その事は語りの中にも明示されてゐるが、嘗て「霜夜の鐘」が同誌上に發表されて好評であつた所から、明治十五年の三月(第二百六號)から連載されたものであつた、が其際には現在の二幕目が序幕になつてゐて、中途までで中止されてゐた。それを上演するに際して、序幕及び後半を書足し完結せしめたものであつた。然し、舞臺上の成績はあまり好結果ではなかつた。けれども向島身投の件は評判であつた。小松が笹子峠で三疋の狼に取圍まれて喰殺されるの場は、あまりに無慚なために、却て觀客に不快の感を與へたといふ。尚此作は書卸し以來殆ど大劇場に上演せられなかつたから、興行年表は附さなかつた。

書卸しの時の役割は尾上菊五郎(小松實は甲作妹お千代、鵜遣ひ甲作)、市川九藏(船木賢三郎實は栗原太之助、網船六右衞門)、坂東家橘(米屋穗積文三)、河原崎國太郎(穗積の嫁お崎、相模屋の女房おでん)、市川壽美藏(穗積手代忠藏、巡査茂木守)、尾上松助(月の輪の熊藏、笹子下の七兵衞)、尾上菊之助(渥美の娘お夏、甲作悴乙松)、岩井粂松(穗積の姑お峰、甲作母おいさ)、中村傳五郎(化地藏の三五郎、七兵衞女房おろく、鵜遣ひ玉川の藤六)、坂東八藏(差配人藥罐の長兵衞)等であつた。

挿繪にしたのは、小松の最期で、國周筆の錦繪である。

大正十四年十二月

校訂者



戀闇鵜飼燎（鵜飼の燎――八幕十五場）

序幕

枕橋邸外雨宿の場
下谷茅町米屋の場
押上田甫離家の場

【役名――穗積文三、雇人忠藏、月の輪の熊藏、化地藏の三五郎、家主長兵衛、道具屋吾市、古着屋十兵衛、人力車夫勘次。文三女房お崎、渥美の娘お夏、穗積の姑お峯等。】

（枕橋邸外雨宿の場）――本舞臺眞中欅の大樹、上手忍び返し附一面の板塀、下手斜に横川通りの向河岸を見たる片遠見、よき所に柳の立木、日覆より同じく釣枝、總て枕橋手前佐竹邸塀外の體。上手に渥美の娘お夏、文金島田着流し駒下駄、町家娘の拵らへ、同丁稚左吉、散髮尻端折、風呂敷包を背負、眞中に月の輪の熊藏、着流し三尺帶駒下駄、此脇に山ぜげん化地藏の三五郎、半合羽着流し判人の拵らへ、下手に穗積の雇人忠藏羽織着流し麻裏草履、古道具屋吾市同じく羽織着流し、此次に向島の若い者長次、同じく丑藏、着流し三尺帶遊び人の拵らへ、聾坊主圓通坊主鬘和し裝脚絆草鞋胸につんぼと記せし木札をかけ、鉦と撞木を持ち皆々大樹の許に雨宿をなして居る、此模樣八百松の流行唄、雨の音にて幕明く。

圓通　雨宿りのお方樣、何卒御報謝をお願ひ申します。（ト鉦を叩く。）

長次　騷々しい坊主だぜ、雨を附目に鉦を叩き、足許を見るとは拔目のねえ奴だ。

丑藏　柳畑迄歸る内、此雨を止ましてくれゝば五厘位えはずんで遣るが、

長次　唯雨宿りでは遣られねえ。

圓山　なに五重の塔は、當分昇ることは出來ませぬ。

丑藏　いや、飛んだ聾話しだ。

熊藏　俄降の雨宿りで、三五郎に逢はうとは思はなんだ。

三五　いつかおめえに別れた後は四方八方借だらけで、此東京に住居も出來ず據なく少しの知邊で大磯へ行つて居たが、生業用で昨日の朝、馬車で此方へやつて來たのだ。

熊藏　生業用と言ひなさるのは、やつぱり以前の判人か。

三五　此所に居る程口もなく、大磯の棒鼻で飴菓子草鞋を見世へ置きほんの女衒は片手業で、やう／＼其日を送つて居るが、今度箱根の湖水際へ離宮の出來るので、東海道は大磯小田原峠を掛けて不景氣知ずの大陽氣に、奉公人が足りねえから、二三人買出しに來たのだ。

熊藏　不景氣々々と言ふ中で奉公人が足りねえ位ゐ箱根手前は景氣がいゝとは、天朝の勢ひは違つたものだ、己もあゝいふ玉でもあつたら、世話をして遣りてえものだ。

ト お夏へ思入、お夏は氣味の惡きこなしにて脇を向く、吾市は忠藏へ思入あつて、

吾市　忠藏さんは、掛取に出なすつたのかえ。

忠藏　いゝえ、私しは此邊に少したづねる者があつて、今日で二三日歩いて居ります。

吾市　二三日尋ねて歩くとは、ハヽァそれでは又主人公の病ひが起つたと見えるね。

忠藏　お察しの通り、内を外に四五日後から出たつきり、家では例の囂しい老母さんがお上さんを捉まへて、其方の執成が惡いと言つて、がみ／＼小言を言はれるのを聞いて居るのが氣の毒故、どうかして捜し出さうと、今日は向島邊を尋ねました。

吾市　何にしろ相手の女が、當時下谷で名うての藝妓、噂を聞けばお互ひに、惚合つて居るといふから、夢中になるのは尤もだが、斯ういふ私も餘所には聞かれぬ、今夜は豫々約定の日限故、十兵衞さんと同道して貸を取りに行く筈だが、何にしても惡い噂だ。

忠藏　縁あつてあの家へ長年勤めて居ましたから、不人情に今となり暇を取るにも取兼ねますが、此頃の樣に左り前では、奥の紛々見世の借財、何や彼やで實は身體が粉になりますから、所詮長くは勤まりませぬ。

吾市　どうで始終は身代限り、貧乏人の婚禮で、もう長持はあるまいから、嚴しく掛合はねばならぬわ

え。(ト此内雨車をあしらひ、)

お夏　段々雨が強くなるが、宅から迎ひが來さうなものぢや。

左吉　長命寺へお參りの外、何處へもおいでなさらぬのに、迎ひの者が三圍の渡船でも渡りはせぬか。

お夏　もう日が暮れさうになつたから、早う戻り度いものぢや。

左吉　何時迄居ても止みませぬなら、廣小路の東橋亭へいつて、傘を借りて參りませう。

お夏　道々氣を附けながら行つて來てたもや。

左吉　左樣なら直行つて參ります。

ト矢張流行唄の合方雨車にて、左吉前垂を冠つて上手へ走り入る。お夏跡を見送り宜しく思入、此内熊藏三四郎顏見合せこなしあつて、

熊藏　先刻から御一緒に雨宿りをしながら考へて居りましたが、お嬢樣は何方かでお目にかゝつたことがございますね。(トお夏氣味惡きこなしにて、)

お夏　いゝえ、私は。

熊藏　何でもお目にかゝつたに違えねえ、何方でございましたね。

お夏　はい。(トもぢ／＼して居る、此時下手の圓通お夏を見て、)

圓通　少しも氣が附きませなんだが、渥見様のお孃様でござりましたか。

三五　此お孃さんを知つて居るのは、毎日貰ひに行くと見えるな。

圓通　なに小村井ではない、東仲町で渥見様といふ丸のあるお家だ。（トお夏心遣ひのこなしにて、）

お夏　あゝもし、其樣な事を。

圓通　なによく存じて居ります。然も旦那は巳之右衛門様というて毎度お惠みを蒙りまして、難有うござります。（ト辭儀をする。）

三五　いや、聾噺しとはよく言つたものだ。

熊藏　そんなら金貸の渥美様のお孃様であつたか。（ト宜しくこなし忠藏是を聞き、）

忠藏　それはちつとも知らなかつた、渥美様なら毎度私しの主人が出ますお家、どうぞお歸りになりましたら、茅町の穗積の忠藏が宜しく申したと仰しやつて下さりませ。

お夏　はい、申しまするでござりませう。

ト矢張右の合方にて下手より牛島の九郎藏、着流し三尺帯尻端折り銀杏齒の下駄を履き番傘をさして出て來り、上手へ行かうとするを熊藏見附け、

熊藏　おい〳〵、九郎公ぢやあねえか。

九郎　おゝ、熊兄いか。（ト皆々を見遣り、）
おゝ、丑も長次も雨宿りか。
熊藏　先刻から降こめられて、一河の流れ一樹の陰と、芝居の臺詞にある通りに、此木の下で雨宿りだ。
長次　向島の土地ッ子が、枕橋際から車に乘るも餘り近くて忌えましいから、
丑藏　よもやに掛つて爰にゐるうち、七つ下りの上汐先で、
長次　とう／＼本降になりさうだ。
九郎　手前達は爰に居ずと、橋を越えて八百松で、傘を借りるがいゝぢやあねえか。
長次　そりや俺も知つて居るが、お世辭を言ふのが面倒だから。
丑藏　止むのを爰で待つて居るのだ。
熊藏　手前橋向うへ行くのなら、道迄傘へ入れて行つてくれねえか。
九郎　飯の都合が惡いから、松田へ夜食を食ひに行くのだ、風が無えから吹掛けやあしねえ、一緒に這入つて行くがいゝ。
三五　吾妻橋へ行けば車に乘るが、其處迄己も一緒に入れてくんねえ。
九郎　番傘一本へ三人では、身體が濡れるだらう。

熊藏　おまけにお前の天窓ぢやあ、中の郷へ行つて飴屋の傘でも借りて來ざあ這入れめえ。

三五　もう天窓の事を言出したのか。（ト是にて熊藏三五郎傘の中へはひり、）

熊藏　皆さんお先へ出掛けます。（ト流行唄、以前の合方にて三人相々傘で上手へはひる。）

長次　こりやァ所詮止みさうもねえから、九郎公の御說諭に從がつて、

丑藏　八百松へ驅込むとしよう。（ト兩人半纏を天窓から冠り、）

長次　さあ、出掛けようぜ。

長次
丑藏　お日和々々。（ト下手へ走りはひる。）

吾市　生憎蝙蝠傘も持つて來ず、一足も出られぬが、こんな困つたことはない。

忠藏　花見時分と事替り、降出したせゐか人通りもなく、所詮吾妻橋向うへ行かねば、人力は居りますまい。

ト爰へ下手より車夫拳固の五助、桐油を掛けし一人乘の車を曳出て來り、皆々を見遣り、

五助　歸り車は如何でござります。

吾市　おゝ丁度いゝ、下谷の茅町迄何錢で行くの。

忠藏　それぢやあ貴方は是から直に、私共へおいでなさいますか。

吾市　約定は晩だから、留守でも行つて坐り込まねばならぬ。

忠藏　御一緒にお伴したいが、一人乘りでは同車も出來ず、是は困つたもんだな。

吾市　あの姉さんなら、二つ返辭で膝の上へ載せて行くが、忠藏どんでは眞平だ。

忠藏　いや、是は御挨拶だ。

五助　もし旦那、降りますから、十錢遣つて下さいまし。

吾市　十錢とは途方もない、五錢でやれ。

五助　緣日の植木屋ではなし、半分直では行かれませんが、それぢやア八百おくんなさい。

吾市　仕方がない、六錢遣らう。

五助　えゝ宜しうございます。（ト車を下す。）

忠藏　直が出來たら一つ道故、吾妻橋迄前母衣を私に貸して下さい。

五助　なに、前母衣を貸せえ。

忠藏　二人乘なら此お客と相乘で行くが、一人乘で仕方がないから、車のある所迄後へ附いて駈けて行くから、其處迄貸して貰ひたい。

吾市　つい其處迄で車が居よう、己はいゝから貸して遣んねえ。

五助　追風で吹掛けませんから、それではお貸し申しませう。
　ト是にて前母衣を取り忠藏に渡す、此内吾市車へ乘る、忠藏は尻を端折り跣足になりながら、
忠藏　お孃さん、未だお迎ひが參りませぬか。
お夏　何を致して居りますか、もう傘を持つて參りませう。
忠藏　もし道で逢つたら、小僧さんを急いで此處へよこしませう。
お夏　何卒お願ひ申します。
五助　旦那、宜しうございますか。
吾市　急いでやつてくれ。
忠藏　降るせゐか、大層闇くなつて來た。
　ト流行唄雨の音にて、忠藏母衣を冠り車に附いて上手へはひる、お夏四邊へ思入あつて、
お夏　段々人が行つてしまふが、もう左吉は來さうなものぢやな。
圓通　お孃樣お呼びなさいましたか。（トお夏の傍へ來る、是にてお夏跡へ下り）
お夏　いえ／＼、呼びはせぬわいな。
圓通　はい、もう五時過ぎになりますから、春と違つて雨が降つては夜は玆處は淋しうございます。

ト濟して居る、お夏氣味の惡きこなしにて四邊へ思入、合方きつばりとなり、上手より車夫病犬の勘次、二人乘の車を曳出て來り、

勘次　渥美樣のお孃樣は、貴方でござりますか。

お夏　はい、私でざいます。

勘次　今向川岸の東橋亭の前で、小僧さんに頼まれましたが、貴方のお迎ひに參りました。

お夏　それなら左吉は參りませぬか。

勘次　寄席の前に居りまして、お前お孃樣のお迎ひに行つて東仲町までやつてくれと頼まれて參りましたが、段々大降になりますから、直是へお召しなさいまし。

お夏　さういふ事なら乘つて行きますが、代は何程上げますえ。

勘次　何錢でも宜しうござりますから早く是へお乘りなさいまし。（ト上下へ思入あつて急く。）

お夏　そんなら、宅であげませう。

勘次　さ、お召しなさいまし。（ト勘次お夏の手を取つて車へ乘せ、母衣を懸けながら、四邊へ思入あつて、）おい、誰が來ても默つて居ねえよ。（ト言へども一向答へをせぬ故、木札に心附いて）あゝ、聾と書いてある、此奴はうめえ。（ト思入あつて、）いや、默つてゐると思つたら、お孃さん、こりやお聾でご

ざります。

ト言紛らす、是にて流行唄になり、勘次樫棒を上げ上手へ曳いて行き掛けこなしあつて、勘次大廻りに下手へ引返しはひる、圓通空を見上げ、

圓通　向うの方が晴れて來たから、大分雨が小降になつた、是ぢやあ今の間に上るだらう。（ト尻を端折眞中へ出て、）八百松さんの臺所で、常得意の骨を貰ひ、吉田町へ歸ると仕よう。おゝすつかりと止んでしまつた、あゝ急がずば濡れざらましを旅人の跡より晴るゝ野路の村雨、太田道灌よく讀んだなあ。

ト矢張右の合方にて鉦を叩きながら下手へはひる、此合方にて上手より熊藏番傘をつぼめて持ち、三五郎と出て來り、

熊藏　爰に娘が居ねえから、勘次が玉を上げたと見える。

三五　雷で色に成るのは隨分芝居にある筋だが、夕立で娘をさらふのは、こりやあ近頃の新發明だ。

熊藏　隨分專賣特許を受けてもいゝの。

三五　何にしろ心憎きだ、勘次の所迄引上げよう。（ト下手へ行懸るを、）

熊藏　おい／＼待ちねえ、行く前に五圓計り貸してくんねえ。

三五　勘次の所へ行つてゞもいゝぢやあねえか。

熊藏　彼奴の見る前では都合が悪い、爰で前錢を貸してくんねえ。

三五　どうせ玉をこかしやお渡す金、今遣つても構はねえが、豪氣にお前急ぐぢやあねえか。

熊藏　今夜向島の或寮に、いゝのが出來て居る事をたしかに己が突留めたから、其處へ飛込む目的だが、一文無しでは不味いから、それで手前に借りるのだ。

三五　そいつは氣の悪い話した、さういふ旨え口があるなら、あの娘と其口とズリを懸けて五圓乘らう。

熊藏　狡猾極まつた事をいふぜ。（ト此内三五郎紙入より一圓札を五枚出し熊藏に渡す。）

三五　さあ、たしかに渡したが、乘りを忘れなさんな。

熊藏　まだ刻限が早いから、兎も角も勘次の所で寸法のいゝ時分迄、祝酒を上げて待つとしよう。

三五　祝酒を上るはいゝが、つい目と鼻の川一つ、若逃げられると玉無だ。

熊藏　強情でも言やあがりやあ、其處は一番音羽屋の髪結新三の狂言で、刃物で威しやあ旨く行くの

三五　萬々都合のいゝ所だから、此狂言も覗ひはそれず。

熊藏　威し文句の柳島に、ぞつと素肌へ身に染みる。

三五　名代の應擧が閻魔になる、怪談掛りで怖がらせ、
熊藏　今夜の中に東京を、どろんと消える燒酎火、
三五　その幽靈が笑ひの幕切。
熊藏　跡は樂屋で二人して、
三五　紙幣の顏でも、
二人　見るとしよう。

ト合方波の音にて、兩人下手へはひる、ばた〳〵になり上手より以前の左吉、蛇の目の傘と番傘を擔ぎ出て來り、

左吉　此先で人力屋がおいらを通さぬと邪魔をして、手間取つたので遲くなつた。（ト四邊を見やり）や、お孃さんは何處へおいでなすつたか。（ト爰へ下手より圓通出て來るを左吉見遣り、）お丶先刻の人だ。お孃さんを知らぬか。
圓通　私しは傘は入らない。
左吉　傘を貸さうと言やあしねえ、お孃さんは知らぬかえ。
圓通　分らねえ小僧どんだ、傘は入らぬといふに。（ト是にて、左吉心附圓通の耳へ口を寄せ、）

左吉　お孃樣はどうしたえ。（ト大きく言ふ）

圓通　あゝ、先刻車へ乘つて彼方へ行つた。

左吉　え、彼方へ行つたえ。（ト悔くりなすを圓通落着）

圓通　なあに、平らな道だから。（ト左吉の肩を叩き、）案じねえがいゝ〳〵。

ト左吉心遣ひのこなし圓通一人して呑込み、流行唄波の音にて此道具廻る。

（米屋の場）――本舞臺三間の間常足の二重、向う紺の暖簾口、上手まひら戸の押入、下手鼠壁諸縣來狀と記せし狀差、諸帳面を掛け、上の方一間障子屋體、いつもの所門口、下の方一間大格子米搗場の前側、荒き簾を掛け平舞臺下手に大米櫃、此上に一斗桶一升枡を置き、二重よき所にランプを懸け總て下谷茅町米屋店先の體。爰に以前の吾市、古着屋十兵衛、羽折着流しにて上手に住ひ下手に文三女房お崎丸髷世話女房の拵らへ、傍に悴德太郎和し裝にて手遊びを持ち、ずつと下手に以前の忠藏住ひ、此見得合方題目太鼓にて道具留る。

吾市　文三殿が相變らず藝者狂ひに内を外、二三日歸つてござらぬ事は忠藏さんから聞きましたが、

十兵　延び〳〵になつた今夜の約定、假令主人がお留守でも、金が出來ずば證書の通り抵當物を引締め、

吾市　是非とも渡して、

十兵　貰ひ度いのだ。
お崎　御尤もではござりまするが、何を申すも留守のこと今晩若も戻りませずば、親類共と相談致し金子の都合を致しまして、早速埒を明けまする。若し又都合が出來ませずば、其時こそは抵當の品をお渡し申しませうから、長うとは申しませぬ、モウ四五日の所をば、お待ちなされて下さりませ。
吾市　その四五日も是迄に、幾度待つたか知れませぬ、上り相場は半時も待たぬ此方が米屋故、
十兵　四五日どころか一時も、今日は私が待たれないから、金の代りに抵當物是非受取つて、
兩人　行かねばならぬ。
忠藏　そりや御尤もでござりますが、是が主人の居るものを留守を遣ふ譯でもなし、現在枕橋で吾市さまにお目に懸つたが何より證據、どうぞお慈悲に今晩はお待ちなすつて下さりませ。
ト　お崎と共に賴む。
十兵　表向は古着屋とか、古道具屋の名目だが、其内實は高利貸の口入をして手數を取り、もぐり代言兼帶の私等二人の事だから、
吾市　元より自分の金でもなし、無慈悲合點取立てるが、是が理道で行く時は藝者を買つて蕩散す金があるなら借りた物を、返しなさるのが當然だ。

十兵　こりやお當人へ見せしめだから、何でも今夜は抵當を吾市さんと二人して、

吾市　持つて行くから、

兩人　さう思ひなせへ。

お崎　さうおつしやられて見ますると、一言もございませぬが、四五日のお聞濟みがないことなら、なう忠藏、

忠藏　せめて二日も日延の儀を、どうぞお聞濟み、

お崎
忠藏　下さりませ。

吾市　いゝや、もう斯うなつたら、一時間も、

十兵　待つことは出來ませぬ。（トきつと言ふ。）

お崎　こりやどうしたら、

お崎
忠藏　よからうなあ。

ト兩人途方に暮れし思入れ、此以前下手より家主長兵衞、散髮兀げたる鬘、半纏着流し中下駄にて門口に伺ひ居て、此時聞兼ねしこなしにて、

長兵　はい御免なさい。（ト門口を明ける。）

徳太　お母ちやん、藥罐の伯父さんがおいでだよ。
長兵　おゝ徳坊にも藥罐と見えるか。
お崎　よい所へ大屋樣。
忠藏　さあ、此方へお通りなされませ。
長兵　皆樣眞平御免下さい。（ト合方きつぱりとなり眞中へ住ひ、）樣子は門で殘らず聞いたが、お二人の衆へ長兵衞が、日延の口添に上りました。
吾市　はゝあ、それぢやあ貴方が此家の大屋樣でござりますか。樣子を門で御存じなら、別に子細も申しませぬが、抵當の品を約定通り、金の形に持つて參るに、
十兵　御差配人がおいでに成つても、何も否やは、
吾市
十兵　ござりますまいな。
長兵　決して否やはござらぬが、其處を私が口添で、何卒一日待つて下さい。
吾市　おまへさんのお詞だが、是まで延々になりました、結局の詰りが今夜の切羽。
十兵　最うちつとも待たれませぬな。
長兵　さゝ、其處を待つて貰ひたいのは、道樂者でも主人が留守、女房や見世の者ばかりでは、待つ事

も出來ますまいが、主人と思つて長兵衛に、どうぞ一日待つて下さい。
吾市　主人と思つて待つてくれとは、事の解つたお口添、ようござります待ちませう。ねえ十兵衛さん。
十兵　それは承知致しますが、定めし地代も溜つて居ように、何でそんなに大屋様が肩をお入れ、
兩人　なさいますな。（ト合方きつぱりとなり、）
長兵　肩を入れるは外でもない、私から言ふのも口幅つたいが、此下谷區でも茅町で、親父の代から三代勤めた天窓は光る藥罐だが、へこんだ事のない長兵衛、昔で言やお幡隨院其男達の料簡で、人の難儀を引受けちやあ、救つて遣るので顏も賣れ、先づ東京府から警視廳詰裁判所の受附でも、顏を知られた私の扱ひ、地先の者の困るのをどうも見ては居られぬから、そこで私が引受けました。
忠诚　大屋様にはお二人共、初めてゞござりますから御存じもござりますまいが、此下谷の區役所でお聞きなされても知れますが、世間の差配と事替り、極代芥鐘釣瓶錢、餘計な物は少しも取らず、上野の山を鳴いて出る夜明烏に路地を明け芥溜雪隱井戸端や下水の掃除は幾度となく、水の流れのいゝ樣に御注意が屆くので、衛生掛でも評判の長兵衛様でござります。
吾市　人の難儀をそれ程迄引受けなさるといふ事なら、こりや間違ひもござりますまい。
十兵　それでは明日は長兵衛様、必らず御挨拶を、

兩人　お賴み申します。

長兵　ぐつと呑み込みました、是を御緣に此後は、引越者でもあつたらば、どうぞお世話をして下せえ。

吾市　それはお世話を致しませうが、轉代はお取りなさるまいね。

長兵　さあそりやあ取らぬが、手數料位は。

十兵　男達の長兵衞樣なら、そんな事はありますまい。

長兵　それは其時の場合にしよう。

吾市　こいつは餘程當にならない。（ト兩人煙草入をしまひながら、）それでは明日。

兩人　上りませう。

長兵　ようございます、呑込みました。

十兵　文三殿が今夜にも、もし歸つて來なすつたら、

吾市　どうぞよろしく、

兩人　言つて下さい。

お崎　申聞すでござりまする。（ト吾市十兵衞下手へ行きながら、）

吾市　左樣ならば長兵衞樣、

十兵　何れ明日、
長兵　はて、ぐつと呑込んで居ります。
吾市　何だか當に、
長兵　え、
吾市　いえ當にして、
兩人　待つて居りますよ。（ト合方題目太鼓にて兩人下手へ這入る。忠藏跡を見送り此方へ來り、）
忠藏　既に諸道具衣類まで、持つて行かれる所をば、貴方樣のお扱ひで、
お崎　日延を聞き濟みくれまして、こんな有難い事は、
兩人　ござりませぬ。
長兵　女と相場の兩道に、文三殿が血道を上げ、あんな奴から金を借りたが、二人共に賭品買で、なかなか喰へる代物でない、所詮理道で行かぬから、大風呂敷を廣げて遣つたが、己に卷かれてとうとう歸つた。
お崎　唯心配に思ひますのは、今晩の內文三殿が、若も歸らぬ其時は、
忠藏　明日は二人に押込まれ、何と言譯致しませうやら。

お崎　實に途方に、

兩人　くれまする。（ト お崎胸を押へ忠藏腕組をなしぢつと思入。）

長兵　善は急げ惡は延べろと、今夜一晩延ばしたら、思ひがけないい、風が、明日は吹くまいものでも無い、さうきなく思はぬがよい。（ト力を附ける。）

德太　おつかちやん睡たくなつた、例のやうにお話をしておくれ。（ト お崎に縋る。）

お崎　睡たくなつたら膝を枕に、爰に寐るがよい、お話し所ではないわいの。

忠藏　御尤もでござります、今に私がお話をしますから、まアねんねしてお待ちなされませ。

ト忠藏介抱してお崎の傍へ小蒲團と小搔卷を出し寐かす、合方きつぱりとなり奧より姑お峯、胡麻鹽鬘半纏着流しにて出て來り、

お峯　例年ながら長兵衛樣の御厄介に成りまして、有難うござりまする。

長兵　おゝお袋は内にござつたか。

お峯　爰へ出るにも出られませず、障子越しに一部始終を、奧で聞いて居りました。

長兵　お袋其方も年寄られ、息子殿の不所存で、嘸心配でござらうな。（ト お峯思入あつて、）

お峯　お崎の前では言い憎いが、悴が心の逸れたのは、嫁が心一つでござる。

お崎　え、私の心一つとは、

長兵　そりやどういふ譯でござるな。（ト合方になり）

お峯　お崎故と申すのは、子供は早く持つたれど、未三十に成らぬ文三、若い者の事なれば連添ふ女房が朝夕の取扱ひが面白くない所から心が外れ呑まぬ酒を呑習ひ、新常磐屋の小松に陷り、今日で四日も歸らぬとは、こりや嫁の取扱ひが惡い故。言ひたい小言も言兼ねるは、今の文三が十の年母御が死んで其跡へ、お針に來たる緣により、此家の後妻となつた私、草葉の蔭の旦那殿に褒められようと守育て、相續させしあの文三、薄々遊びをすると聞いても、賤しい此身を顧りみて、餘所ながらに異見する內、私が實家の親の病氣に暫らく止宿に行つて居る內、地面家作も殘らず賣り今有る物は皆抵當、昔氣質の私から見ると、お崎が樹の取樣で此樣には成るまいと、只年寄の愚癡が先立ち、無理かは知らねど嫁いぢりに、悔んでばかり居ります。

ト お峯宜しく思入、お崎愁ひのこなしあつて、

お崎　母樣の其お恨み、御尤もでござりますが、悋氣は女子の愼みゆゑ、竟に一度文三殿へ恨みがましき事は言はねど、藝者狂ひは世間の聞え、家業の障りになりますれば、此子を可愛く思召すなら、三度の所は一度にして內に居て下されと、德太郞を枷にして、度々異見も致しましたが、何を言

つても上の空、四五日跡はもう是切り決して遊びに行かぬから、どうぞ今夜遣てくれと手を下げてお頼み故、否とも言はれず據なく、遅くも歸つて下さりませと出して上げればそれなりに、今日迄お歸りなさらぬ故、此兒を抱寐によく〳〵と枕の紙の濕る程秋の夜長を泣明し、心細く思ひまするも、生れは遠い甲斐國田舎育ちの不束に、母樣といひ良人に迄、お氣に入らぬは何たる事か、實に情なうござりまする。

忠藏　其お心をお察し申し、旦那の居所を突留めてお連れ申さうと方々を、尋ね捜せどお行方知れず、すご〳〵歸る枕橋際で、吾市どのに出つ會し、今夜迄の約束と同道されての矢の催促、お堅いあなたの御氣質では、お上さんが惡いからと思召しもござりませうが、どんな頑固な產れでも此近邊で松源か鳥八十あたりへ藝妓をつれて、這入る人を見まするると、心の變るはまゝある事、さう片落しになされますと、お可愛相でござります。（ト宜しくこなし、長兵衞是迄ぢつと聞いて居て、）

長兵　はあゝゝ。（ト大聲を上げて泣く、みな〳〵びつくりなし、）

忠藏　何をお泣きなされまする。

長兵　段々樣子を聞いて見ると、昔氣質のお袋が理窟を言ふのも尤もだが、又お崎殿が貞女を立て荒々しく文三殿に異見を言はぬも是も尤も、忠藏殿もどうかして、内を丸く納めようと諸所を搜して

歩くも尤も、斯う突合して聞いて見ると、誰が惡いといふ者なく、何方も此方も尤も〳〵只尤もで無いのは文三計りぢや、今にも爰へ歸つたら知らしてくれゝば直に來て、何で內を外にして、道樂をして步き廻るか一番談判して遣るから、まあそれ迄は俺に任して、互ひに愚癡は言はぬがよい。

お峯　斯ういふ事をお聞せ申すも、穗積の家を大事と思ひ、つい愚癡が出てなりませぬ。

お崎　長兵衛樣を力にして、お歸りなされば共々に、とつくり異見を申しませう。

長兵　そんなら私はお暇するから、さあ構はずに寐さつしやるがよい。

お峯　左樣ならば長兵衛樣、眞平御免下さりませ。（ト合方にてお峯會釋して奥へはひる。）

長兵　扨々內のお袋は、まだ頑固で嫁いぢりをする樣子だ。これお崎殿、私が是から及ばずながら影に付いて居ますから、決して心得違ひ抔必らずしてはならぬぞよ。これ忠藏殿、何か事が始まつたら、どうぞ迎に來て下され。

お崎　此上共にお見捨てなう。

忠藏　何分お願ひ。

兩人　申しまする。（ト長兵衛立上り下手へ行きながら、）

長兵　明日は二人の道具屋が揃つて來たら面會して、出た所勝負のちやらつぽこで、又追返して遣りませう。（ト お崎忠藏を送り出て、）

お崎　どうぞ宿が歸りましたら、

忠藏　あなたからとつくりと、

お崎　御異見なされて、

兩人　下さりませ。

長兵　案じなさんな、ぐつと呑込んで居ります。

ト合方題目太鼓になり下手へはひる。忠藏跡を見送り、お崎は德太郎の傍へ來り寐顏をぢつと見やり、はおつと泣伏す、是にて顏へ涙の掛りしこなしにて德太郎目をこすりながら、

德太　おつかちやん、冷たいね。

お崎　思はず其方の寐顏を見て、胸がいつぱいになつた故、それで涙がこぼれたのぢや。

德太　何でそんなに泣くのだえ。

お崎　お父さんがおいでがない故、定めし其方が淋しからうと、それで私が泣いたのぢや。

ト忠藏門口にて是を聞き下手へ來り涙を拭ふ、德太郎思はず忠藏を見て、

德太　おまへも泣いて居るのか。
忠藏　へい。
德太　何で泣くのだえ。
忠藏　お村樣と同じ樣に、矢張貴方が可愛さに、思はず淚をこぼしました。
德太　お父ちやんが歸つたら、內に居ておくれの樣に、坊が留めて上げるから、そんなにお泣きでないよ。（ト是を聞き兩人ぢつとなつて）
忠藏　おゝよく仰しやりました、決して泣きは致しませぬ、まだ頑是ない坊ちやんが、旦那の內に居る樣に止めるといふを聞くに附け、
お崎　子に對しても此後は、よもやおいではあるまいと、思へど今のお心故、
忠藏　こりやとつくりと御異見を申さにやならぬ。
ト腕組をなし宜しく思入、しんみりとした合方になり花道より穗積文三、散髮羽織着流し日和下駄思案の思入にて出て來り、
文三　夕方に降掛つたゆゑか、思ひの外往來が淋しい、人目を厭ふに丁度幸ひ、ちよつと音信れて行かう。（ト矢張右の合方にて四邊へ思入あつて舞臺へ來り、門口を明け、）

文三　今歸つた。（ト皆々文三を見て、）
忠藏　お、、旦那がお歸りだ。
お崎　ようかへつて來てくださりました。
德太　お父ちやん待つて居たよ。（ト文三に縋る、此内よき所に住ふ。）
忠藏　お袋樣と大屋樣へお知らせ申しませう。（ト忠藏立懸るを、）
文三　あゝこれ〳〵、何も其樣に騷ぐ事はない、なるたけ人に知せてくれるな。（ト忠藏餘儀なく下に居る。）
お崎　何處へ貴方はいらつしやつたか、今日で丁度四日目、どんなにか案じて居りました。
忠藏　心當りは落も無く、今日も向島を灯りの附く迄尋ねました。
お崎　まあ何にしろお歸りで、こんな嬉しい事はない。
忠藏　坊ちやん、お父樣はモウ何處へもおいではございませぬ。
文三　いや〳〵何處へも行かぬ事はない、是から直に出懸けるのぢや。
忠藏
お崎　え。（トびつくりなす、合方きつばりとなり、）
文三　これ、二人ともよく物を考へて見ろ、お崎は甲州の山國育ち、又忠藏は律義眞法、生業の外交際知らぬ井の中の蛙故、藝妓抔の味は知るまいが、此下谷區でも名の高い小松と深い中になり、當

時は向うへ買はれる體、既に寓居の屆けを出し、泊りきりにしてくれと、片時放さぬ位故、何で内に居られるものか、然し義理あるお袋が井の内の蛙仲間、さう引取られきりでもならぬと、小松に少しの暇を貰ひ、ちよつと内へ歸つて來たが、最早跡口の掛つた文三、長く爰には居られぬのぢや。(ト宜しく思入)

忠藏 いや呆れ返つた其お詞、今晩も道具屋の吾市と十兵衞が參りまして、お約束の日延の金期日が切れると矢の催促、地獄で佛の大屋樣がお口添で明日迄と、日延はすれど當も無く、途方に暮れて居りまする。

お崎 母樣が仰しやるには、其方が亭主の扱ひが惡いから起つた事と、居ても立つても居られぬ程、わたしや苦しうござりまする。

忠藏 孃ちやんがお可愛くば、今晩からお内に居て、家業大事にお稼ぎなされば、どうかお店も行き立ちませう。

お崎 わたしを不便と思召すなら、どうぞ此儘内に居て、安心させて下さりませ。

ト兩人宜しく頼む、文三思入あつて、

文三 今夜是から内へ來て、翌日の朝から稼がうとも、一旦傾きかゝつた内が、立直るといふ譯でもな

し、久しく續いた穗積の家も。（ト思入あつて氣を替へ）俺が代で潰すのだ。

お崎　そんなら貴方は此家を、みす〳〵潰すも厭はぬほど、

忠藏　藝妓に心を奪はれましたか。

文三　香の物で酒を呑んでも、亂れた髮で子供のある糠ッ臭ひお崎の酌より、内に居るにも縮緬づくめの、小松の酌で呑む方がどんなに旨えと思つて居るのだ、跡は言はずとお察し下さい。

ト煙草を呑み宜しくこなし、忠藏思入あつて、

忠藏　もし旦那、（ト文三の胸ぐらを取る）

文三　何をするのだ。

忠藏　えゝお前さまはなあ。（トきつとなつて氣を換へ）こりやあ異見も無駄だわえ。（トちつとこなし。）

文三　お袋は奧に居るか、跡は爰に家内三人、いや誠に御無事でお目出度い、先づ是でお暇致さう。

ト立上る、德太郎文三に縋り、

德太　お父ちやんお内に居ておくれよ。（ト文三德太郎を引寄せ、）

文三　内に居て遣り度いが、所詮此儘居る時は、（ト思入あつて氣を替へ）此儘内に居る時は、小松が直に迎ひによこせば、行つて遣らねばならぬのだ。

お崎　こんな可愛い德太郎が、止めても貴方はおいでなさるか。

文三　可愛い子供が止めるとも。（ト是も別れといふこなしあつて氣を替へ、）いや可愛い小松には、替られぬわえ。（ト下手へ行くを、）

お崎　そんならどうでも、

忠藏　お前さまは。

文三　大きにおやかましうござりました。（ト門口へ出て、）嘸待兼ねて居るであらう。

トつか／＼と花道へ行き跡を振返り、兩手を合せ詫びろこなしあつて早き合方になり、氣を替逸散に花道へ這入る、德太郎は門口へ出て、

德太　お父ちやん、何卒歸つておくれよ。

お崎　こりやもういつそ、跡から行つて。（トお崎きつとなつて出ようとするを忠藏留めて、）

忠藏　まあお待ちなされませ、今貴方がお出なすつては、是迄貞女を立通した、女の操も水の泡、世間の聞え二つには、お袋さまへも知れますれば、急かずとお氣を落着けて、まあとつくりとお考へなされませ。

お崎　それでもどうも此儘では。

忠藏　さあ、そこが女の一の愼み、まあ〱お待ちなされませ。（トお崎を鎭める此内德太郎下手へ拔出し、）

德太　お父ちやん〱。（ト花道へ行掛る、忠藏悧りしてつか〱と行つて德太郎を留める。此時お崎思入あつて、）

お崎　どうも行かねば。（ト又行掛つた、忠藏德太郎を抱へた儘お崎を留めて、）

忠藏　まあお待ち。（ト隔てるを道具替りの知らせ、）なされませ。

ト此模樣よろしく、合方題目太鼓にて道具廻る。

（押上田圃放家の場）——本舞臺二間常足の二重、藁屋根竹の本緣附、向う上手一間押入戸棚、下手鼠の破壁、上手の棲一段下つて一間葺卸のし臺所一つ竈、下手三尺の下屋、此内以前の人力車を置き、軒口に繩簾を掛け例の所破れし四つ目垣の見切り、上下在體の遠見、總て本所押上村一軒屋の體、二重に角行燈を置き以前の熊藏、三五郎住ひ、八寸の膳の上に酒肴の道具を載せ、傍にお夏震へながら酌をなし、後ろに勘次蚊いぶしの火鉢にて火燗をして居る、此見得木魚入りの合方にて道具留る。

三五　少し位ぬるくてもいひ、早く爰へ出してくんねえ。

勘次　蚊いぶしと兼帶だから、燗番は大骨折だ。

熊藏　本所に蚊が無くなれば大晦日で、舊曆でせえ秋の末ぢやあまだ大びらで蚊の居る時分、本所の名物は貧乏人には禁物だ。

勘次　蚊がなくなれば大晦日ならいゝが、年中蚊と大晦日と合併で居るには恐れます。

三五　旨く言つていやあがる、鍋焼饂飩の夜商人で、公債證書を買ふ奴が世間にはあるといふから、勘次のこぼすも當にならねえ。(ト此内三五兩邊へ思入あつて。)

お夏　まだ内へ歸ります事は、出來ぬのでございますか。

熊藏　さう歸る〳〵と言ひなすつても、車夫の腹が出來ねえ内は、半町でも引けませぬから、もう少しお待ちなさいまし。

勘次　さあ燗が出來ました。(ト徳利を出す。)

熊藏　勘さん、一つ注いでおくんなせえ。

お夏　はい。(トもぢ〳〵して居る。)

熊藏　おい注がねえのか。(トきつと言ふ、お夏びつくりして。)

お夏　はい、只今つぎまする。(ト震へながら熊藏の酌をする。)

三五　滅法いゝ別嬪だ、勘次も爰へ來て呑まねえか。

熊藏　此方の前で、新しい別嬪と來りやあ本物だ。

勘次　此奴あ所にやあ過ぎものだね。

熊藏　これ。（ト制す、勘次心附）

勘次　なに、本所ぢやあねえ、本當に過物だ。（ト言紛らす。）

お夏　もう今晩は何時でございませうな。

勘次　今淺草の十時を打ちました、

熊藏　これし、何で淺草の鐘が聞えるものか、ありやあ大方此在の山寺の鐘だらう。

お夏　十時を打ちましては遅くなると怖うございまする。何卒早くお歸しなすつて下さりませ。

三五　もう今から出ると、道で二時にもなつてしまふが、夜更は巡査が咎めるから、いつそ爰へ泊るとしよう。

お夏　え丶、（トびつくりなし、）さうして爰は何處でござりまする。

熊藏　嬢さん、お前知らねえかえ。

お夏　はい、一向に知れませぬ。（ト熊藏四邊へ思入あつて、）

熊藏　爰は千住の橋向うを、左りへ曲つた川続き、

三五　宿から遙か在に當る、中仙道の熊谷へ。

熊藏　續く堤の川下で、人通りのねえ、

兩人　原中だ。

お夏　えゝ、（トびつくりしてどうとなる、時の鐘替つた合方になり、）

熊藏　そんなに驚く事はねえ、お前を引いた此車夫は、人並よりも足が長く、人が十里歩く處も、二十里步ける車曳よ、天狗々々と仇名に取つた引手が腕によりを掛け、角田堤の川岸を、千住へのした一足飛、人間業とは思はれねえのさ。

三五　さういふ名代の若い衆にさらはしたのも有樣は、お前を見染めた枕橋、佐竹の橫手の雨宿に、しんみり濡れて見度くなり、乘つた車の母衣の內、人目を忍ぶ綾瀨から二股川の川上へ、登るも戀の活づくり、賞翫してえばつかりだ。

勘次　いくら泣いても喚いても、人里放れた一軒屋、斯う見込まれては俎板へ乘た鯉だとあきらめて、今夜は泊つて自由になり、ゆつくり翌日歸つた方が、お前の爲によからうぜ。

お夏　いえ〳〵、其樣な事は存じませぬ、早く內へ戾りませぬと、兩親が案じますれば、どうぞお送り下さりませ。

三五　いゝや今夜は歸されねえ、一旦枕橋で斯うと思つた娘だから、何でも爰へ泊めにやあならねえ。

お夏　いえ、假令何と仰しやつても、此處には居られませぬ。

三五 むゝ、それぢやあどうでも居ねえとか、いけ強情な女ッちよだ、己の自由にならねえなら、もう生しちやあ置ねえぞ。どうするか見やあがれ。（ト後ろから勘次鰹節小刀を出す、三五郎受取り、）さあ此短刀で突殺すぞ。（ト刃の見えぬ樣に、お夏の頰へ押附け叩く、是にてお夏悑りして、）

お夏 どうぞ助けて下さりませ、誰ぞ來て下さりませいなあ。（トうろ／＼する。熊藏留めて、）

熊藏 これ／＼、大きな聲をした所が人通りのねえ横道だ、巡査さんの來る氣遣ひなし、村の人も何にもねえから、それよりまあ靜にして、譯の解るやうに言ひなさるがいゝ。

お夏 別に譯もござりませぬ、貴方方さへ送つて下されば宜しいのでござりまする、それもならずば是より直に、私一人で參りまする。

熊藏 そんなに内へ歸り度ければ何でも泊めようと言やあしねえ、まあお待ちなせえ。（ト此方へ來り、）おい、何でもお孃さんは今夜の内に歸りてえと言ひなさるから、又無理に爰へ泊めてもひよつと巡査でも通ると面倒だから、もつと近所ののんきな所へ、いやなに、野中ばかり通らなけりやあ、千住の通りへ出ねえから、お前が是から一緒に附いて、爰の車で送つて上げねえ。

三五 むゝ、それぢやあどうでも言ふ事を、聞かれねえと言ひなさるのか。

熊藏 よく物を考へて見ろ、手めえが瘦ぎすで男がいゝなら、そりやあ相談も纏まらうが、柄は大

し憑みはおろし、女の好かねえ質だから、所詮いけねえとあきらめて、罪亡しに道を氣を附け、東仲町迄送つて上げろ。（ト何處へかこかせといふこなし、三五郎呑込み。）

三五　口說いた娘に嫌はれて、其擧句に淺草迄何のつけに送られるものか、何ぼ己の本役でも、あんまり役が惡過ぎらあ。

熊藏　それでも相手が不承知ぢやあ、所詮相談は行屆かねえから、戀の車は一人乘り跡押しをして行くがいゝ。

三五　何だ跡押をして行け、短刀で威したのとは、あんまり野郎が違ひ過ぎるなあ。

熊藏　そりやあお惡婆を威す仕事だ、こんなおとなしいお孃さんなら。

ト三五郎へ思入あつて、欺して行けば大丈夫だと宜しく思入。

お夏　早く歸り度うござります。

熊藏　お案じなさるな、今歸して上げますよ。（ト勘次へ思入あつて、）勘次、支度をして送つて上げろ。

勘次　それぢやあいよ／＼直が出來ず、仲町へ送つて行くのかね。

熊藏　三五郎、爰へ來てお孃さんに、今口說いた詫をしろ。

三五　人を馬鹿にしなさるな、何のつけにあやまられるものか。

熊藏　手めえ爰で誤まらねえと、是から跡押で送つて行くのに、お嬢さんが安心が出來ねえ

三五　それでもあんまり役が惡い。

熊藏　いゝから誤まれと言ふに。（ト是にて熊藏と顏見合せ、思入あつて、）

三五　誠に只今は失禮を致しまして、申譯がござりませぬ、其お詫がてら、跡を押してお送り申します
る。（トお夏の前へ辭儀をする。）

お夏　其お詫には及びませぬ、どうぞお送り下さりませ。

三五　畏まりましてござりまする。（ト又辭儀をする。）

熊藏　此奴あ根が正直者ゆゑ、斯うあやまりやあ御安心でござります、先迄お供にお連れなされませ。

ト此内勘次は下手へ下り、車を出し蒲團を敷き提灯を附けてゐる。

三五　支度が出來たら宿へ出るまで、己も共々跡押だ。

勘次　いや、色男御苦勞さまでござりまする。

三五　人を馬鹿にしやあがるな。（ト熊藏思入あつて、）

熊藏　何にしろ仲町迄は、よつ程の道だから、道で兎や角言つちやあならねえ。

三五　男は當つて碎けろと、一旦此子が厭だと言つたら、もうあきらめを附けたから、決して何も言いや

あしねえ。
熊藏　今お聞きなさる通り故、淋しくつても二人居ますから、決してお案じなさいますな。
三五　己計りでお前は行かねえのか。
熊藏　己は今夜向島へ出掛けるから、一緒には行かれねえが、若しも樣子が分つたら。(ト　お夏へ思入)
三五　郵便で知らせるが、何處へ出さうの。
熊藏　神田川の兄貴の所がいゝ。
三五　おゝ合點だ。(ト　勘次草鞋を履き車を拵へ、)
勘次　さあお乘んなせへ。
熊藏　さあお孃さん、安心してお乘りなせえ。(ト　お夏ほつと思入あつて、)
お夏　左樣なればわたくしを、お連れなすつて下さりませ。
三五　斯う事が極つたら、是から先は立役で、親切に送つて上げます。
お夏　有難うござりまする。(ト　立上り、二重より下りる、此内三五郎一圓札を二枚出し、)
三五　先へ行けばどうにかするが、まあ是を取つて置いてくんねえ。
勘次　それは有難うござりまする。(ト　受取り見て、)兄い仕事の錢を貰ひました。(ト　熊藏に見せる。)

熊藏　此不景氣の御時節に、一圓とはいゝ仕事だ。
三五　看板が點いたら、內の火の用心の始末をしねえ。
勘次　違えねえ、夜明し仕事だつた。（ト草鞋の儘這上り、行燈を吹消し蚊いぶしへ水を懸ける、熊藏思入あつて、）
熊藏　幸ひ今夜の雨空に、先刻の降で水氣のせゐか。
三五　今の世界に珍らしい、獲物の魚の二才もの。
勘次　親方しつかり呑めますね。（トお夏空を見やり、）
お夏　何だか氣味の惡い晩、
熊藏　なに、大丈夫だから、
兩人　お乘んなせえ。（ト門口の外へ出て勘次車を前へ引出し、介抱してお夏車へ乘らうとする此時下手にて、）
皆々　泥坊々々。（ト鳴子の音してばた〳〵になり、頰冠りやつし裝の仕出し一人橋掛りより逃げ出て、逸散に花道へはひる。お夏びつくりして、）
お夏　あれえ。（ト熊藏に縋る、熊藏お夏を圍ひ向うをちつと見て、）
熊藏　あゝ柿泥坊だ。（ト三五郎と顏見合せるを木のかしら、）
三五　びつくりさせやがつた。
熊藏

ト お夏車へ乘る、熊藏三五郎氣味合よろしく、時の鐘、合方にて、

ひやうし幕

二幕目

隅田川身投の場

（淨瑠璃）　虚と實は二瀨の水色　隅田川月雨雲　清元連中

〔役名 ― 船木賢三郎、穗積文三、月の輪の熊藏、巡査峯木守、藝妓小松等。〕

（隅田川の場）＝本舞臺向う一面五尺程の高二重、下手より斜に貫を打附けし上り下りの道、上の方柳の立木、日覆より同じく釣枝、下の方板屋根の渡し場、小屋正面板羽目、横手跡へ下げて板戸二枚立切りあり、土手下揚り場の大棧橋、左右に除杭、舞臺花道共波布を敷き、雨落より波手摺を出し、土手の向う葉櫻の立木、後ろ黑幕、總て隅田川三圍下渡し場夜るの體。太鼓ばかりの稽古囃子木遠寄、幽めて波の音を冠せ幕明く。と右の鳴物にて、花道より小船へ向島の若い者長次丑藏、着流し三尺帶突掛の駒下駄にて、胴の間に腰を掛居る、船頭三八長半纏三尺帶、上へ紺の印半纏を着、上草履にて櫓を押して出て來り、花道にて、

三八　もし、今夜も廓へ素見かえ。

長次　此頃は悪い癖が附いて、一廻り廓を廻つて來にやお内へ歸つて寐られねえ。

丑藏　吸附煙草が飲み度えばつかり、向島から渡しを越え、實に毎晩御苦勞な譯さ。
三八　さうして毎晩行く內には、色が出來て立引かれ、おつな夢を見るのが儲けだ。
長次　そんな株はこつちにはねえ。(ト此內話しながら船は舞臺へ來り、)
三八　當りますよ。
兩人　合點だ。(と三八艪を置いて棹にて船を着け、)
三八　此頃毎晩向島で、木遣の聲が聞えますが、お祭りの支度かね。
長次　あれは洲崎の石川さんが發起人で、向島へ今に火消が出來るさうだ。
丑藏　そこで若い者が出來ねえ內から、毎晩木遣の稽古をするのだ。
三八　以前と違つて段々開け、大層家が出來たから、火消も出來にやあ成らねえ譯だ。
長次　己達も遣つて見たが、中々唄や淨瑠璃と違つて、木遣は餘程むづかしい。
三八　いや、むづかしいと言やあ、今夜も又後には雨降に成りさうだ。(ト此時どんと水音する。)
長次　や、あの水音は。
丑藏　身投ぢやあねえか。
三八　なに、ありやあ投網を打つた音だ。(ト此內三八船を杭へ繋ひ、棧橋へ上るを見て、

長次　三公、お前何處へか行くのか。

三八　あゝ、柏屋に用がありますから、其處迄一緒に行きませう。

丑藏　又明日の晩遲くも賴むぜ。

三八　そりやあ承知だ。

ト稽古囃子波の音にて、三人土手を上り後へ下りてはひる。時の鐘合方にて、土手の上手より序幕の丁稚左吉凋れし思入にて出て來り、

左吉　さつき傘を借りに行かずば、お孃さんを連れて行かれぬもの。なぜ待つて居て下さらなんだか、こんな悲しい事はない。（ト思入あつて、）晝間內を出る時に、向島へ二人では案じられるとお上樣が仰しやつたのを口功者に、私しがお供致しますれば大丈夫でござりますと、お請合ひ申したゞけお孃樣がかういふ譯でお行方が知れませぬと、お內へ歸つて言譯が無い。どうしたものと考へても、子供の事故仕方なく、只うろ〳〵步いて居る許り、餘處の子なれば家へ歸つて、親に話しもなるけれど、お父さんが死んでしまひお母さんが違つて居るから、話せば手前が間拔だからと叱られるばかり故、旦那さまへも又內へも歸る事がならぬから、いつその事身を投げて死んでしまはうと思へども材木町で育つた故、小さい時から游ぎを習ひ、よく游ぐから飛込んでも、體が浮

いて死なれまい、首を縊つて死ぬと仕よう。

ト是にて左吉帯を解き上手の立木へ掛けようとする、此時上手より巡査繁木守洋服帽子靴にて角燈を持ち、出て來り、此體を見てびつくりして、

守　こりや少年、何を致す。

左吉　只今爰で首を縊つて、死にますのでござります。

守　え、死ぬとは何事、先待ちやれ。

左吉　いえ〳〵死なねばならぬ故、何卒お見遁し下さりませ。

守　未だ年も行かぬ様子、何か迫りし事あつて一途に死なうと思ひ詰めしは甚だ以て不料簡、如何なる故か存ぜぬが、所持せし金子でも取られしか。

左吉　金なら宜しうござりますが、大事のお孃樣を取られましてござりまする。

守　お孃樣と申すのは、其方が主人の娘なるか。

左吉　へえ、左樣でござりまする。

守　それ容易ならぬ事ぢやが、其方が主人は何處に居つて、姓名は何と申す。

左吉　淺草東仲町百十三番地、渥美巳之右衞門と申しまする。（ト守手帳を出し書留める。）

守　何商を致し居る。
左吉　金貸でござります。
守　其方が名は何と申す。
左吉　左吉と申しまする。
守　何年になるぞ。
左吉　當年十五歳になります。
守　主人の娘は何と申す。
左吉　お夏と申します。
守　是は何年ぢや。
左吉　十六年でござりまする。
守　して其娘を取られしとは、何れに於ての事なるか、其實際を委しく申せ。
左吉　先刻降りました俄雨に、佐竹樣のお邸外椎の木の下に雨宿りをして居りましたが、止みさうもござりませぬから、傘を借りに向う河岸迄參りまして元の所へ歸つて見ますと、お孃樣が見えませぬから、傍に居た物貰ひに聞きましたが、聾故に譯は知れず、只車屋が來て乘せて行つたと申しま

守　す故、内に歸つて承はれば、それは怪しいとの事ゆゑ、取て返して其處此處を尋ねましたが知れませねば、それ故申譯に、首を縊りますのでござりまする。

主人へ言譯あらざる故、死なうといふは跡先の考へも無い料簡違ひ、娘も誠惡者に奪はれし事なるか、又知人にでも連れられて參りし事か相分らず、若しも左樣な事であつたら、主人方にて其方が親に申譯の無いことぢや、決して命を捨てよう抔と惡い料簡を出さぬがよい、凡三千七百萬人の其方も一人の人員なり、今に徵兵適齡になればお上のお役を勤むる體、此誠心を盡すのが是人民の義務なれば、容易に死すべき事でない、又親達が其方を奉公に出せしは、行儀作法は言ふも更なり、生業の道を覺えさせ、ゆく／＼家督を讓らん爲め、其方も又滄海より深き恩ある親達に厚く孝養盡すのが、是子たる者の義務なるぞ。此道理を辨へて決して死なう抔と思ふな。

ト守和らかに言諭す。

左吉　段々とのお詞を承はつて私が、背きましては濟みませぬが、何うも生きて居りましては、主人へ申譯がござりませぬ。

守　それは此方より主人方へ、其方が死なうと致せし事情を、申遣はさん。

左吉　宜しくお願ひ申しまする。（ト守思入あつて、）

守　今其方が申すを聞けば、先刻巡行中、中の郷より押上の方へ娘を乘せし人力車夫が、いたく急いで參つたが、若しやあれにては無かりしか、車夫の面を存じ居れば是よりあの邊を探索なし、娘が行方を捜して遣らん、其方は少しも早く主人方へ歸るがよい。

左吉　歸り度うはござりますれど、どうも私一人では。

守　おゝ歸り惡くば分署に參れ、主人方なり親許なり、呼び出して引渡さん。

左吉　お手數を掛けまして、お氣の毒樣でござりまする。

守　人民保護は巡査の職掌、唯今計らず其方が、一命を助けしは、今日僕が手柄なり、足勞位るは厭はぬぞ。

左吉　有難うござりまする。

守　今一足遲くんば、此少年を失なはんに、

左吉　貴方さまのお蔭にて、

守　危ふい命の助かりしは、

左吉　いかなる神のお助けなるか。

守　全く天の惠みであらう。

ト時の鐘合方波の音になり、守左吉附いて上手へはひる。これにて波の音打上げ、本釣鐘を打込み、清元の淨瑠璃になる。

〽宵の間に降りし小雨もいつか止みそよ吹く東風に川添の、柳の雫はら〳〵と、落ちて行方も白露や、無分別なる置所、

ト本釣鐘合方になり、土手の上々手より、序幕の穂積文三、無地の羽織縞の着附駒下駄にて、蛇の目の傘を持出る、跡より藝妓小松黒紋附の羽織縞の着附、東下駄にて出て來り、土手の上へ留り、

〽堤に殘る穂芒の、戰ぐ音さへ追手かと、今來し道を三圍や、胸に時打つ淺草の鐘も沈みし雨催ひ、（ト此内跡先を見廻し、土手の上より棧橋の上へ來て、）

文三　小松、

小松　文三さん。

文三　どう考へ直しても、死ぬより外に思案はない。

小松　私も死ぬ氣でござります。（ト袖を顔へ當て泣く、）

〽袖に涙の乾く間も、中洲へ下りし水鳥の翼も濡れてしよんぼりと、世を牛島の身を託ち、暫しは何も庵崎や洲崎の里に鳴く蟲の、聲もすがれし秋の末。

ト此唄の内文三は腕を組み我身を託ち吐息を突き、ぢつと思入、小松は是も我故とわつと泣かうとして口を押へ、文三の顔を見て情ないといふこなし、幽めて本釣鐘、合方、蟲の音になり、

文三 いかなる前世の悪縁か、女房子のある身の上を添はれぬ事を知りながら、來世を掛けて言ひかはし終には夫が身の詰り、死なねばならぬ不甲斐ない己を見捨てず共々に、死なうといふは嬉しいが、どうも一緒に殺されない。

小松 そりや何故でござります。

文三 さあ、殺されぬといふ其譯は、お前を抱へた數奇屋町の新常磐屋の親方は、浮いた稼業に似合はない極親切な料簡故、己が尋ねて行く度に、御内の障りにならぬ樣、遊びは程よくなさいましと異見はすれど是迄に、たゞまる玉の催促は、遂に一度した事なく、以前に變る今の身を矢張同じ取扱ひは、實に外には無い事だ、其親方に大金の損を掛けるのみならず、難儀を掛けては義理が濟まぬ、親を初め女房子を捨てる程な不所存でも、此義理ばかりは捨てられぬ。

小松 それは私も同じ事、小さい時に親仁に別れ、跡に殘つた母さんが長煩ひに當人より傍で私が痩る程苦しむ中で死なれた故、取片附に差迫り仕樣もやうも泣く計り、少の縁で以前から店請をする其人が、新常磐屋と懇意にて、私を當に百圓借り取片附から七七日四十九日の蒸物迄、心の儘に弔

ふたも、新常磐屋のお蔭故、日柄も立つて抱へとなり、初めて座敷へ出る時も着類は元より櫛簪迄、五分も透ない拵へに肩身も廣くあの土地で、押しも押されもせぬ樣になつたも皆内の恩、それも送らず今茲で死んでは濟まぬ義理なれど、今松源や鳥八十で五本の指に折らるゝも、一つは文さんお前といふ、後立があつた故、義理を缺いても今此處で、一緒に死なねば言交せし女の情が立たぬから、私や死ぬ氣でござります。

文三　其身の業で名の賣れたも、己がお蔭と言つてくれるは、涙の出る程嬉しいが、お前は生きて居られる體、己はどうでも此儘に生きて此世に居られぬ體。

小松　え、それは如何なる譯あつて。

〽縋る袂も川霧に濕りて重き眼瞼には、秋の朧に來世を待乳の山も見えわかで、

ト小松は文三の袂に縋り涙を拭ひて顏を見上げる、文三もぢつと思入あつて、

文三　今更言ふも愚癡な事だが、己の親仁は堅い人故、若い者を獨身で置くのは爲めにならぬから、道樂をせぬ足留に、早く女房を持たせろと、然も二十一の時近所の世話で十九になる、甲州産れの女房を貰ひ、其翌る年家督を嗣ぎ生業大事に精出して惡い耳を聞せぬ故、世間の人の目に留り、褒められたのも二十五の厄に負けてか親仁に死なれ、上ると見込んで買込んだ米が下つて思はぬ

損、鬱いで居るを懇意にする、仲間の者が氣を慰さめ、惡い跡は宜きもの故、緣起直しに一杯と連れて行かれた玉松で、初めてお前に逢つたのが言はゞ互ひの身の惡緣、女房子のある身の上で夫婦になられる譯でも無ければ、思ひ切らうと幾度か、我と我身に異見をしたれど、唯の一日逢はずに居られず、毎日河岸へ行くのを名として遊び歩いた其果が、相場に掛つて先祖から持傳へて居た地所も賣り、實に話すも恥かしいが、簞笥火鉢も抵當に、最う是からは身代限りをするより外に仕樣がない、今となりては親類初め懇意な者も愛想を盡かし、金の貸人が無い故に、今夜身を投け死ぬ覺悟だ。

小松　御親類を初めとして、懇意な方迄愛想を盡し、お金の貸人の無いほどに世間の人に疎まれるのも皆な私しがした事故、お前が死ぬなら共々に、私しも一緒に死にまする。

文三　其義理立よりお前に賴みは、親には不孝女房には不實な己が死んだらば跡を弔ふ者もなからう、愚癡な事だが跡へ殘り、七日々々に線香でもお前に手向けて貰ひ度いから死なずと是から內へ歸り、一方ならず世話になつた、新常磐屋の親方へ恩返しをするがいゝ。

小松　いえ〳〵何とお言ひでも、私しゆゑに命迄捨てる程になつたお前を、どうまあ見捨て歸られませう、浮氣な稼業はして居れど、心迄藝者はしませぬ。達て歸れとお言ひなら此處から歸りに東橋

から、直に私も身を投げて、一緒に冥土へ行きまする。

文三　すりや、どうあつても死ぬと言ふか。

小松　あい、お内儀さんがある故に、所詮此世で添はれねば、來世へいつて憚りなく、夫婦に成るを樂しみに、私や嬉しう死にまする。

文三　ォ、其程迄に思ひ詰め、死ぬと覺悟をせし上は、最早止めても止まるまいから、是非に及ばぬ一緒に死なう。

小松　そんなら殺して下さいますか。

〽手に手を取りて顏と顏、惜む名殘にいとゞ猶哀れを添へる小夜砧、

ト兩人手を取かはし顏を見て名殘を惜しむ思入あつて、

小松　私やお前と冥土へ行き、夫婦に成るのが嬉しいけれど、お氣の毒なはお内儀さん、一人身ならず德さんを、抱へて二人跡へ殘り、悲しい事でございませう。

文三　實にあれには氣の毒だ、女房に取つては何一つ言分のないあのお崎、是迄己が夜泊り日向になり、親の手前を繕らうて今日が日迄も唯一言、悋氣らしい事も言はず、腹が立たうが遂に一度顏へ出した事のない、愼み深い女房を捨て、我命迄捨てるのも皆前生の約束事、とはいへ婦

人は愚痴な者故、死んだと聞いたら恨むであらう。

小松　そりやお前さんより私しをば、嘸やお恨みなさいませう、濟まぬ事とは疾からして心に思つて居ります故、お内儀さんに御苦勞を掛けない樣にいつその事、思ひ切らうと思つても、何の因果か思ひ切られず、斯ういふ事に成りしたは、お免しなすつて下さりませ。

文三　いや女房ばかりか濟まないのは、新常磐屋の夫婦の衆が、親身も及ばぬ親切な情を仇で返す不所存。

小松　便り無い身に此年月、お世話になりし御恩も送らず、翌日は御苦勞掛けねばならず、

文三　あゝ、言譯のない事だなあ。

〽更けて往來の人もなく、音なふ者は差潮に、岸へ打來る浪の音、

ト兩人向うへ向ひ濟まぬ事だといふ思入宜しくあつて、

文三　今宵も最早十一時、此處で兎や角暇取つて、若し巡査の目に掛らば、

小松　怪しい者と捕へられ、仔細を聞かれた事ならば、此儘一緒に死なれぬ二人、

文三　斯く迄思ひ詰めた上は、障りの無い内少しも早く、

小松　此世の縁は淺くとも、水の深みへ身を投げて、

文三　死なば世間の噂と成り、
小松　浮名を流す隅田川、
文三　更行く月も雨氣故、
小松　晴れぬ雲間に薄き影、
文三　幽かに聞ゆる長命寺の、
小松　通夜の念佛を便となし、
文三　手に手を取つて冥土の旅、
小松　是が此世の、
兩人　顏の見納め。

〽汐と眞水の別れ路に放れ片葉の片葉の蘆の、亂れて水に散りて行く憂身の果は石濱の、堅き誓ひも今日限り、翌日は今戸の朝煙、

ト此内兩人手を取りかはし、涙にくれて名殘を惜しむ思入宜しくあつて、

文三　いつ迄言つても名殘は盡きぬ。
小松　人目に掛らぬ其内に、

文三　二人共に、

兩人　南無阿彌陀佛。

〽きえ行く空の西をさし、羽音烈しく立つや水鳥。

ト兩人羽織を脱ぎ浪除杭へ打掛け素足になつて向うへ向ひ手を合せ、念佛を唱へ、文三前なる川へ飛込めば、どんと水音、水の花ぱつと散り、小松も續いて飛込まうとする折、浪の音水鳥四五羽藍引て、覆へ引いて取る、是にて小松たぢ〳〵と跡へ下り、ホツト吐息をつく、本釣鐘が打込み、鬢の亂れを搔上げながら、心の變りし思入あつて、

小松　今迄死なうと思つたも、鳥の羽音に驚いて、一足跡へ遲れたら、さつぱり夢の覺めた樣に、死ぬのがいやになつたのは、こりや死神が放れたのか。

ト又本釣鐘幽めて浪の音凄みの合方になり、小松、川の中へ思入あつて、

最前お前に親の爲藝者になつたといふは僞り、實は私は身性が惡く、子供の折から旅稼ぎ五年跡迄八王子に茶屋奉公をして居たが、藝者僞ひに三絃を彈いて座敷の調子を合せ、客の機嫌を取る内に酒が取持つ轉び寐から、遂には夫婦約束して、此東京へ逃げて來て、情夫の爲になつた藝者、抱へ[illegible]表向に話しもならず待合や、小料理茶屋の逢引に此處や彼處に借が出來、金の都合に

奥州の知邊へ情夫は行つた限り、二年此方便りの無いは大方死んだ事であらうと、別れた其日を命日に、訪弔ひはする物の、若しやと思ひ占者に、生死の程を見て貰へば決して死なぬといふのを力に、厭な座敷を勤めて居る内、文さんお前に最屓にされ、切放れの宜い氣に惚れて、色になつたも有様は、此身の借を返さう爲、夫も思つた半分も返さぬ内にお前の身が、段々詰つて死ぬ程になつたも元は私故、義理にせまつて共々に、死なうといふも是迄の借に責められ苦しい故、寧のことに心中して浮名儲を幸ひと、お約束の向島へ出掛けて來たも死後れ、跡へ獨殘つて見ると、借故命を捨てるのは、開化の世界に開けぬから、此處へ羽織と履物を此儘置いたら身を投げて誰も死んだと思ふは必定、追手の掛る氣遣なければ、生死の知れぬ情夫の行方を、尋ねに一先立退かう。是に附ても文さんには、お氣の毒だが其替り、最前お前がお頼みの七日々々の香花は、私がきつと手向けるから、迷はず冥土へ行つておくれ。（ト川の中へ思入、此時薄く風の音、小松そつとせしこなしにて、）未水底に文さんが居るかと思へば襟許へ、夜寒の風がぞつと染、何だか後が見られるから、更けない内に此處を立退き、今夜は何處か安泊へ、夜の明ける迄影を隠し少し東が白んだら、東雲告げる烏と共に、此東京を高飛してそれから宿場へ塒を取り旅から旅を稼がうか。

ト浪の音になり、小松裾を端折り身拵へする。此時下手渡し小屋の戸を明け序幕の博徒月の輪の熊蔵、

手に藁草履を持出て窺ふ、小松尻目に是を見てぎつくり思入あつて、河岸を上手へ行かうとするを、

熊藏　おい姐さん、ちよつと待ちねえ。

小松　え、今呼んだのは、私かえ。

熊藏　外に通る者もなけりやあ、お前を己が呼んだのさ。

小松　さうして私をお呼びのは。

熊藏　素足ぢやあおぶねえから、是を履いて行きなせえ。

ト小松の前へ草履を出す、小松思入あつて木遣崩しの合方になり。

小松　是はどなたか存じませぬが、有難うございます。

熊藏　何處へ歸りなさるのか、水戸樣前が淋しいから、わつちが一緒に送つて上げよう。

小松　見ず知らずの私をば送つて遣らうと仰しやいます、御親切なお詞を、無にする樣でございますがつい堤下へ參りますから、水戸樣前は通りませぬ。

熊藏　つい堤下でも十二時前、春と違つて秋の末、狐狸の其外は、往來のねえ向島、夜目にもぞつとする程な勝れた器量のお前だから、どんな馬鹿者が出やうも知れねえ。おせつけえだが行先迄、私ちが一緒に行つて上げよう。

小松　有難うはござりますが、牛の御前の向う故、決してそれには及びませぬ

熊藏　轉ぶといふも禁句だが、お前が道で轉んだつて、送つて行つた此己が、狼ぢやあなし喰やあしねえ、唯怖からうと思ふから、それで送つて遣らうといふのだ。

小松　いえ二三年跡土手下に、半年ばかり居りましたから、人通りのない向島も、怖い事はござりませぬ。（ト是にて熊藏思入あつて、）

熊藏　むゝ、夜の明ける迄安泊りで影を穩して東雲から、夜明烏と諸共に、高飛をする料簡ぢやあ、怖い事も無からうが、お前が今夜塒を取る先迄己が送りてえのだ。（ト小松びつくりして、）

小松　それでは今の問はず語りを、お前は聞いて居なすつたのか。

熊藏　おゝ此近邊の別莊へ、立派な衆が寄合つて、いゝ內會が出來ると聞き、其處を突當飛込んで一商法に仕ようと思ひ、宵から堤をまごまごと飛んだ狐に化されて、尿器の酒を見る樣な水つぽい酒を呑み、待に待つてた甲斐もなく、思つた壺が外れたから渡しを渡つて歸らうと、此處へ來たらば船は無し、向う越をする人が若しあらうかと小屋へ這入り、待內酒の醉が出て、船の端唄を聞きながら肱を枕に寐入端、どんぶり水へ飛込んだ音にびつくり目が覺めて、戶の隙間から覗いて見れば、心中に出た男は身を投げ、一足後れて跡へ殘つた、お前が素性の問はず語り、果が羽織

と履物を心中をした證據に殘し、死んだ積りで逃げようとは、なか〱見上げた狂言師、實に男も跣足故、小耳に殘つた講釋の黃石公へ張良が、沓を捧げた料簡で、渡し小屋の上草履を、お前に己が遣つたのだ。(ト是を聞いて南無三といふ思入あつて、)

小松　四邊に人のゐるとも知らず、うつかり言つたは私の誤り、飛んだことを聞かれたね。

熊藏　顏のいゝのと度胸のいゝのに、眞に己あ感心して、一部始終を聞いてゐた。

小松　左樣知られた上からは、最う隱しても仕方が無い、お聞の通り死んだ積りで、是から旅へ出掛ける私、身投の證據に下駄を殘せば、足が痛くも淺草まで跣足で行かうと思つた處、お志ざしの此草履、それぢやあお貰ひ申します。

熊藏　履きつけねえ藁草履、お前の足にやあ痛からうが、跣足よりやあましだらう。

ト此内小松は紙入より五圓札を紙に包み、

小松　誠に少しばかりだが。(ト紙包みを出す、熊藏取つて、)

熊藏　是を己に呉れたのは。

小松　心ばかりの私の御禮。(ト熊藏は探り見て、)

熊藏　高の知れた藁草履、それも己の物ぢやあなし、何の禮に及ぶものか、是はお前に返します。

小松　お禮といふのも恥かしい、ほんの一杯上げるだけ、どうぞそれを受取つて、其替りには今夜のことを、人に言つて下さいますな。

熊藏　それぢやあ草履の禮ではなく、今呉れたのは口塞げかえ。

小松　少なからうが、どうぞそれで。

熊藏　言ふなといふなら言ふめえが、今口止に呉れた金が、よもや百圓の札でもあるめえ、僅か五圓か十圓の端た金は貰ひ度くねえ。（ト札の包みを投出す、小松取上げて、）

小松　是を私へ返すのは、禮が不足と言ひなさるのか。

熊藏　そりやあ言はずと知れたことだ、草履の禮ならそれでもいゝが、相手が死んだを餘所に見て、其に心中した積りで、高飛をする口止なら、纏めた金を貰ひてえ。

小松　有さへすれば何程でも、お前に金を上げたいが、實は私も借金で既に死なうとした體、是から旅で一稼したらば跡から上げようから、それで不承しておくれな。

熊藏　其借金はお前より瘡毒と高利の骨がらみで、首の廻らぬ貧乏人、今夜大きな得物を仕様と、睨を附けた内會へ一網打に來た所、寄らねえ魚にすご〳〵と、空手で歸つた渡場で、お前に逢つたは思はぬ獲物、悪い網に掛つたが、其身の不運と諦らめて俎板へ乘る鯉同樣、仕方がねえと覺悟し

て、器用に金をくんなせえ」。

小松　いくらお前が呉れろと言つても、是より外に小札も無ければ、お氣の毒だが上げられない。

熊藏　今懐中にねえことなら、此處で取らうとは言はねえから、何處へ塒を取る氣だか、高飛をする其先まで、送り届けて遣らうから、藝者になる共娼妓になる共心任せに身を沈め、前借をして口止に、百圓己にくんなせへ。(ト是を聞き小松きつと思入あつて、)

小松　いゝおつなことをお言ひだが、私やお前の其の爲に、宿場挊をする氣はないよ。

熊藏　なに、する氣がねえと。

小松　かう見たところが一癖あり氣な惡徒と見たゆゑ刻まずに、纏めて五圓上げたのさ、不足ならば上げますまい。お前は私を女と思ひ、威して取る氣か知らないが、初心な顏はしてゐれど、未だ肩上のある時から情夫を拵えて故郷を逃げ、夫婦の積りで宿帳へ名前を附けるを樂しみに、うかれ烏の旅歩きも、僅少な路用に身の詰り、仕方なく／＼情夫に別れ曖昧茶屋から旅の者、宿場娼妓の出挊もして來た果のおばずれ藝者、手に取る撥より親の罰で艱難苦勞に死なうとまで跡先見ずの無分別も、惚れた男に別れたゆゑ、今にも玆へ其人が歸つて來てのことならば、旅の挊も仕樣けれど高の知れた遊び人、お前達に威されて誰が勸めをするものだ。今上げた其金も達て上げよ

うとは言はないから、是でいやならよしにおしな。

ト簪で髪を掻乍ら脇を向いてゐるを、熊藏尻目に掛け、

熊藏 背の小雨に手を取り相々傘の道行も、南無阿彌陀佛の聲諸共男を川へ突落し、共に心中した積りで、主人の借を踏倒し高飛をする女だから、唯の藝者でねえことは言はずと己も知てゐるが、曖昧茶屋から旅藝者宿場女郎をした程の、喰詰者に似合ねえ、己を五圓で追拂はうとは客を取つた樣にもねえ、男の目利が出來ねえな。

小松 どうしたとえ。（ト時の鐘凄みの合方になり、）

熊藏 こんな臺詞は芝居めき、己が口にやあ言ひにくいが、盗みをするも緣のある産れは甲州猿橋在、餓鬼の折から手が長く、庚申塚の賽錢を飴へ附けて取つたのが抑盗みの初りで、袂錢からちよつくら持、明巣覘も竊盗と、一年増に功を積、人の物は我物と友達中の女房を盗み、寐て居た所を見附られ、ぞつと素肌に出刃庖刀、突いて掛るを振拂ふはずみに受けた咽の疵三日月形に月の輪と、異名を取つた此熊藏、犬も歩けば棒に當ると、牛の御前の堤下で三圍稻荷の使しめ、以前狐の宿場玉、下ツ腹に毛のねえお前を獸物仲間の熊藏が、思ひがけなく生捕たも、惡い尻尾を見付けたから旅を稼いだ山猫でも、最う斯うなつたら爪も利くめえ。（トきつと思入、）

小松　所詮女と男だから、力づくでは叶はぬ故、手出しはしないが熊藏さん、遣る遣らないは私の料簡、五圓の外は十錢でも上げられないと言つたれば、お前はどうする心だえ。

熊藏　金にならざあどうするものだ、夜更を幸ひ縛り上げ、手前を存分なぐさんで、猫といふ名に皮剝同樣、身ぐるみ剝いでどんぶりと、最前川へ飛込んだ野郎と一緒に殺して遣る。

小松　え。

熊藏　と言ふのは古い紋切形だが、そんな手荒い事はしねえ、是から最寄の交番所へ、手前を己がそびいて行き、心中仕ようと僞つて男を川へ突落し、逃去らうといふ太い女を、尾に尾を付けて訴へたら直に分署へ拘引され、翌日にも男の死骸が浮べば言はずと知れた人殺し、然し元が心中仕樣と得心づくの事なれば、處刑は減じて何年と佃島へ出拵に、苦界にまさる苦役をして、赤い仕着を着にやあならねえ。

小松　むう。（トぎつくり思入）

熊藏　手前も行つたか知らねえが惡事を懲らす懲役場、よく生利に直の知れねえ米を喰つて樂でいゝといふのは眞の負惜しみ、手職が無けりやあ力業、油をしめるの麥を舂くの、又外役に出されりやお、我身の罪より重い土や砂利を擔がにやあならねえから、馴れた所でも行度くねえ、女は少し

は樂も仕樣が、佃へ行つて苦役をするより、是から旅へ出稼に其身を沈めた事ならば、何處へ行つても前借は二百圓の金は虧ねえ代物、半分貸してくれるなら、籍を拵へて宿に成り己が判で遣つて遣らう、同じ事なら懲役で苦勞をするより娼妓になり、赤い仕掛を着た方が、お仕着よりやお増だらう、それとも是から交番所へ連れて行つて訴へようか。

小松　さあそれは。

熊藏　旅へ行つて娼妓になるか。

小松　さあ。

熊藏　訴へようか。

小松　さあ。

兩人　さあ〳〵。

熊藏　どつちなりとも宜い方に、度胸を定めて返事を仕ねえ。(ト尻をまくりさつと見得)えゝ、未藪蚊が居やあがる。(ト足を叩く、此内小松は是非がないといふ思入あつて、)

小松　成程お前の言ふ通り、赤い仕着は着度くないから、お前の判で何處へでも私を旅へ遣つておくれな。

熊藏　これでは己が爰に就いて、旅の娼妓に身を沈め、今夜身投の口止に、百圓金を貸してくれるか

小松　どうで是から旅へ出て、曖昧稼ぎの請宿へ判を頼めば何圓と、禮を取られる體ゆゑ、萬事お前に任せるから宜いやうにしておくれな。（ト熊藏に寄添ふ、熊藏につこり思入あつて、）

熊藏　人は當つて砕けろと、打明話しに頼むなら、ぞつこん己が引受けて、お前の世話をして遣らう。

ト時の鐘、薄く風の音。

小松　おゝあの鐘は十二時か、夜更のせえか寒くなつた。

熊藏　寒けりやあ是を着ねえ。（ト杭へ掛けし羽織を取つて出す。）

小松　是を置かずば死んだ證據が。（ト熊藏傘を取つて、）

熊藏　小松と記した此傘と、下駄で證據は澤山だ。

小松　ほんにそれもさうだねえ。（ト小松羽織を着る、熊藏は傘を置いて文三の羽織を取り、）

熊藏　是は己にやあ似合ねえが、捨て行くのも勿體ねえ。（ト羽織を着る、小松は渡し船を見て、）

小松　今は此處に船があるが、向う越を仕度いものだね。

熊藏　田舎船は漕ぐけれど、向う迄は乘切れねえ。

小松　それぢやあ是から氣味の悪い、水戸樣前を通るのかね。

熊藏　己が送つて行くからは、怖い事はありやあしねえ。（ト此時堤の向うにて、）

三八　なに、提灯には及ばない。（ト是を聞いて、）

小松　や、誰か此處へ來る樣子。

熊藏　見咎められては後日の障り。

小松　暫く何處ぞで。

熊藏　むゝ、小屋へ這入つて影を隱さう。

ト時の鐘、合方波の音にて熊藏小松の手を取り小屋の内へはひり堤の上を窺ひ戸をしめる。と堤の上より、以前の船頭三八酒に醉ひたるこなしにて出で來り、

三八　下戸と違つて酒呑は、一杯呑めと言はれると、夜の更けるのも忘れてしまひ、今柏家で二德利鯛の荒煮で馳走になつたが、空腹のせゐか大層醉つた。（ト言ながら揚場へ來て脫捨ある履物を傘と見て、）や、茲に女と男の下駄に、傘が一本捨ててあるのは、相々傘の道行で此處からどんぶり遣つたのか、最前向島の若衆が、夜網を打つた水音を身投と言つたは前表だつた。最う一足早かつたら、己が助けて遣らうもの。何にしろ、嘸内で己の歸りの遲いのを、小言をいつてゐるだらう　ちつとも早く乘出さう。（ト船へ飛乘り纜を解きながら、）何處の人だか知らねえが、生先長い體をば可愛さう

なことだなあ。

ト合方波の音にて棹を差し花道の方へ船を押出す。とばた〳〵になり堤の上より船木賢三郎絲織縞の着附、白の兵兒帶白フランネルの股引、半套臘虎の帽子、黑の達磨合羽を着て走り出て來り、

賢三　おい〳〵若いしゆ、向うへ越すなら其船へ、己を一緒に乘せてくんねえ。

三八　ちつと急ぎの用があるから、跡へ歸ることは出來ねえ。

賢三　どうでもあらうが此方も又、急な用で越したい故、一杯買ふから御苦勞でも、ちよつと跡へ歸してくんねえ。

三八　なに一杯買ひなさるとか、酒と聞いては聞退せねえ。

ト波の音にて船を跡へ戻す、此内賢三郎は下駄と傘へ目を附け、

賢三　もし若い衆、此處に男女の履物と、蛇の目の傘の捨てゝあるのは。

三八　それは大方此河岸から、どんぶり身でも投げた者が、ありましたと思はれます。

ト賢三郎は傘の印を見て、

賢三　傘に小松としるしてあるは、苗字か但しは名前なるか。

三八　小松といふが名前なら、何處のか藝者でございませう。

賢三　む、、藝者といへば、若しや下谷の

三八　え。

賢三　いや、似た名は幾らもあるものだ。

三八　さあ、旦那、お乘んなせえ。

賢三　お、、今乘るよ。(ト紙入より一圓札を出す、此時手紙を棧橋へ落し船へ乘り、)若い衆、是は渡し錢だ。

ト一圓札を出す、船頭取つて、

三八　お氣の毒だか釣がない、どうか錢でおくんなせえ。

賢三　なに、釣には及ばねえ。

三八　え、(トびつくりして、)それぢやあわつちに、一圓札を。

賢三　小札がないから取つて置きねえ。

三八　それは有難うござります。若い時から渡しを漕ぎ、二朱や一分は貰ひましたが、一圓貰ふは初めてだ。(ト此内棹で船を下手へ遣る。)

賢三　假令一圓が二圓でも、お前に逢はずば追手の者に。

三八　え。

賢三　いや、追剝にでも出會つた日には、衣類ばかりか命迄取られまいとも言はれない、一圓ならば安いものだ。

三八　思ひがけない今夜の幸ひ、酒はたらふく馳走になるし、こんな間のいゝ事はねえ。

ト波の音謡への合方にて三八棹を上げて艪を押し船は段々花道の方へ行く、此時小屋の戸を明け以前の熊藏三尺帶をしめながら出る、跡より小松も出て鬢の亂れを櫛で搔上げ居る、船の内の賢三郎は下に居て、腰に差して居る短刀を拔き川へ突込んで洗ふ、三八振返り見る。賢三郎はひらりと短刀を後へ隱す。

三八　もし旦那、今光つたのは。

賢三　ありやお大方稻光だらう。

三八　いえ、船の中で光りましたぜ。

賢三　お、其光つたは是だ。（ト短刀を突出して見せる。）

三八　えゝ、（トびつくりして下に居る。）

賢三　そんなにびつくりするには及ばぬ。

トきつと思入、三八は震へゐる。此内小松熊藏は身支度をなし行かうとして、落散りある手紙を拾ひ、

熊藏　玆に手紙が落ちてゐる。

小松　どれ、（ト手紙の名宛を見て、）「賢三郎樣、德松」（ト讀む聲を聞いて、）

賢三　なに、賢三郎とは。（ト振返り、）あゝ呼んだのではなかつたか。（ト小松は向うを見て、）

小松　若しや今のは。

熊藏　これ、（ト小松を引廻す、賢三郎は短刀へ手拭を當てる、是をチヨンと木の頭、）

賢三　急いでくんねえ。

ト波の音佃の合方にて、三八艪を押し賢三郎は短刀を拭ひながら船は花道の揚幕へはひる、小松熊藏は跡を見送る、此模樣宜しく。

ひやうし　幕

三幕目

下谷茅町米屋の場
神田川網船屋の場

〔役名――網船屋六右衞門、穗積文三、雇人根津の忠藏、月の輪の熊藏、差配人長兵衞、甲府の飛脚差助。文三女房お嶋、お峯、六右衞門女房お波等。〕

（下谷茅町米屋の場）――本舞臺三間の間序幕の米屋の道具、爰に前幕の女房お崎子役の德太郎を引寄

せ泣いて居る、是を手代忠藏慰めて居る、上手に姑お峯泣いて居る。眞中に差配人長兵衞煙草を呑んで居る、よき所に見世行燈しあり、すべて下谷茅町穗積の宅、見世先夜の體、合方時の鐘にて幕明く。

長兵　是まで近所で評判の親孝行な文三殿、思案の外とはいひながら、藝者の小松に惚込んで、地面家作を賣つてしまひ、着類道具を抵當に入れた擧句に親女房、可愛盛りの德坊を捨て情死するといふ、斯んな無分別な事はない。

お峯　是といふのも此母が、義理ある中故遠慮して、強く異見もしませぬのが却つておれの不爲となり、斯樣な事になりました。

お崎　いえ、そればかりでおござりませぬ、此身が足らはぬ田舍者故、小松とやらに見代られ、母樣へお歎き掛け、大事な良人を先立てまして、此末何と致さうかと、途方にくれて居ります。

忠藏　いえ〳〵、あなたやお老母樣に、少しも越度はござりませぬ、只憎いのは小松といふ藝者めでござりまする。

德太　これ、おつかちやん、何でおまへは泣くのだえ。

お崎　是が泣かずに居られるかいなあ。

長兵　これお崎殿、嘸悔しからう悲しからうが、お前の惡い事はない、内を外に遊び歩く、文三殿の放

埒を影になり日向になり人に執成す見上た心、並大體の者ならば犬も喰はない夫婦喧嘩で、長屋中の厄介になるのが世間の當然、内の女房と噂をして何時でもお前を褒めて居る、實に女房の鑑になる、天下一のお崎殿、惡い事の芥子程も、無いのは私が證人だ。

忠藏 差配人樣の仰しやる通り、惡く言つては濟まないが、義理ある中の老母樣や可愛坊ちやんお内儀さんを、捨て情死なさつたは、旦那樣が惡いから、お内儀の惡い事は實に少しもござりません。

お峯 其身は好いて仕た事ゆゑ、仕方がないと思へども、お崎へ對して此母が氣の毒でならぬわいなう。

お崎 其御斟酌は入らぬこと、斯ういふ事になるといふのも、みんなわたしが足らはぬ故、貴方に迄も苦勞をさせ、濟まない事でござりまする。

お峯 いえ〳〵其方に露程も、惡い事の無いといふは、今差配人樣の仰しやる通り、他人樣が何よの證據、よい年をして苦勞をするも皆悴から起つた事、實に親身の我ながら嚴しくするは知つて居れど、義理ある中故今迄も、捨て丶置いたが私のあやまり、其方に迄も苦勞を掛け、世間へ私が濟まぬわいなう。

忠藏 お二人共に義理を立て、餘りきなく〳〵思召し、若しお煩らひでもなされたら徳ちやんが可愛さう、幾等言つてもなくなつた旦那が戻りはしませぬから。

長兵　跡の者の體が大事、膝とも談合しませうから、まあ落着いてござらつしやれ。

お峯　段々との貴方の御異見、有難う。

お崎　ござりまする。

ト兩人辭儀なする。忠藏長兵衞宜しく思入、合方題目太鼓になり花道より、飛脚義助脚絆草鞋、旅裝菅笠を持來て直に舞臺へ來り、

義助　へい、御免下さいまし、穗積文三樣は此方でござりますか。（ト是を聞き忠藏門口を開け、）

忠藏　はい、手前でござりますが、何方からおいでなさいました。

義助　私しは甲府八日町の、穀屋から參りましてござりまする。

忠藏　はあ、それではお内儀さんのお實家からござつたのか。

義助　へい、左樣でござりまする。

忠藏　それはようこそ。暫らくお待ち下さりませ。（ト忠藏お崎の傍へ來て、）もしお内儀さん、お實家からお使ひでござりまする。

お崎　甲府から遠い道を、わざ／＼飛脚を立てるとは、何ぞ急な用でもあつてか。

義助　へい、火急な御用でござりまする。

忠藏　それは大きに御苦勞さま、先づ此方へお這入りなされませ。
義助　左樣なら、眞平御免下さりませ。（ト合方にて内へはひる。）
忠藏　して、火急な御用とおつしやるのは。
お崎　何ぞ案じる事ではないか。
義助　外の事でもござりませぬが、わざ〳〵手前が甲府から、お使ひに參りましたは、お親父樣が此間上り物が惡かつたか、物中りから引續き九死一生の御大病、お醫者方が全快は所詮むづか敷と仰しやるので、御當人も助からぬとお覺悟をなされましたが、今生の暇乞に娘に一と目逢度いから、呼んでくれと仰しやるので、御親類から頼まれて、お迎ひに上りました。
お崎　え、お父さんが御大病とは。
忠藏　それはとんだ事でござりますな。（トお崎思入あつて、）
お崎　常なら直に行きますが、委細の事は此間知らせて上げたが良夫がなくなり、一方ならぬ取込故所詮隙に行かれねば、御苦勞ながら直に歸り、其趣きを言つて下され。
義助　畏まりましてござりますが、娘に逢つて死にたいと仰しやつてゞござりますれば、どうか御都合は出來ますまいか。

お時　是が近い所なら、ちよつと行つて來られるけれど、何をいふにも三十六里、容易に行かれぬ山坂道。

忠藏　御尤もではござりますが、御總領はあつたれど、家出なされてお行方知れず、今では一人の貴女さま故、御出なさらぬ事ならば、黄泉の障りになりませう。

義助　何か貴女へ御病人が、仰しやる事でもあります御樣子。

長兵　さういふ事ならお崎どの、行かぬは親へ不孝故、思ひ切つていつたがよい。

お崎　有難うはござりますが、どうも只今私しは。（ト思案の思入）

長兵　今行かれぬと言はれるは、それは内への氣兼であらう。（トお峯に向ひ）これ老母、今爰で聞れる通り、遁れぬ親の九死一生、お崎殿を甲府へ遣り、死目に逢はして遣つたがよい。

ト是にてお峯思入あつて、

お峯　何の〳〵お崎の心配、其方が行つた其跡は、どうぞ斯うぞ言延して、諸方の借を言譯すれば、私氣遣ひは入らぬ程に、ちつとも早く行つたがよい。

お崎　思ひ込みある其中故、參るまいとは思へども、夫程迄に仰しやつて下さる貴方のお詞ゆゑ、行つて參るでござりませう。（トお峯思入あつて、）

お峯　これ忠藏、其方は何と氣の毒だが、お崎が親の大病故、子供を連れて甲府へ行けば、見送りがてら供をして、行つて遣つて下されい。
忠藏　それでは貴女お一人故、跡で何かと御不自由勝。
お峯　いや、其斟酌は入らぬ事、商ひせねば一人でも別に用事は無い程に、子供の面倒頼みまする。
長兵　老母殿があれ程に言ふのを聞かぬは却て不忠、跡は私が必ず共又相談もしませうから、お崎殿と子供をば、これ忠藏殿頼みます。
忠藏　貴方もそれ程仰しやる故、お内儀さんと德ちやんの、お供を致して參りませう。
お峯　それなら何分頼みまする。
義助　左樣なれば私しは、おいでなさる趣きを、早くお知せ申しませう。
お崎　大きに御苦勞でござりました。
忠藏　それではおまへさんは是から直に。
義助　翌日の都合に高井戸迄、今夜の中に參ります。
ト時の鐘、合方にて飛脚義助思入あつて花道へはひる、お峯思入あつて、
お峯　あゝよくない時はよくない事が重なるもので、嫁の實家の親の大病、是に附ても年寄は、何日何

時の事をも知れず。

長兵　誠に聞くも氣の毒だが、さうわるい事もあるまいから、氣を落さずに居たがよい。

お峯　差配人樣のお詞を、力に心を取直し、せめて寐た間も樂々と善い夢でも見ませうか。左樣ならば差配人樣、御免なされて下さりませ。（ト唄になり、お峯思入あつて奥へはひる、長兵衞思入あつて）

長兵　翌日と言つても今夜一夜、荷物の支度をさつしやらぬか。

お崎　いえ、御存じの通り故、別に荷物もござりませぬ。

長兵　何は無く共女子の旅、髮の道具や何や彼や。

忠藏　差配人樣の仰しやる通り、よくお支度をなさりませ。（ト是にて長兵衞門口へ來り）

長兵　お崎殿、跡を必ず案じずと、ゆつくり行つて來さつしやれ。

お崎　有難うござります。

長兵　又翌日逢ひませう。（ト合方にて長兵衞下手へはひる、忠藏思入あつて）

忠藏　惡い事のあつた跡は、又よい事があるといふから、甲府へ行つて御父樣へ、貴女がお顏を見せたなら、御病人も力がつき、却つて御全快になるかも知れませぬ。

お崎　力を付けてくれる故、私は少しは引立てど、お年寄られた姑御樣の、お心の内が思ひ遣られ、お

氣の毒でなりませぬ、それに付けても私の實家が、以前と違ひ零落して、今は
力に思ふ兄さんが、家出をなされて行方知れず、頼少ない私の身の上、推量して下されいなう。

忠藏　御尤もでござりまする。…御心配をした甲斐もなく、最早明日か明後日は仕舞はにやならぬ此方の御內。

お崎　此間から夢見も惡く、若しお別れに成らうも知れねば、一先實家へ行つた上緣家の衆と相談して、身の振方を附けようわいの。

忠藏　それが宜しうござります。

お崎　何もなけれど手道具を、取纏めて置きませう。

ト唄になるお崎德太郎の手を取り奥へはひろ。忠藏跡を見送り、

忠藏　あゝ御器量といひ御心立といひ、言分のないお內儀さんを、どういふことで內の旦那は、小松に見替て死なしつたか、持ちたいと言つてあの樣な、お內儀さんは持たれぬに、色は思案の外だなあ。（ト思入あつて、）いや、翌日お供をするからは、旅の支度をして置かうか。

ト合方にて忠藏奥へはひろ、跡時の鐘誂へ獨吟の唄になり、

〽唯でさへ物憂き秋の末枯に、池の蓮の色あせて、夜風に戰ぐ音凄く哀れを添へる折も折、

無常を告げる鐘の聲、

ト時の鐘風の音獨吟の合方にて花道より前幕の文三同じ拵へにて、しを〳〵と出て來り、花道にて、

文三 今宵は宵から雨氣つき、空には星の影もなく、目差すも知れぬ闇の夜を、幸ひにして茲迄來たも、女房に逢ふは面目ないが、悴に一目逢度いゆゑ。

〽月なき空に唯一羽鳴き行くかりは妻や子に、なれも別れて慕ふかと我身の上にとつおひつ、

ト此内花道にて思入宜しく、舞臺へ來り門口より内を覗き、

十の年から養育受けし、義理ある母はいふに及ばず、八年此方連添ひし女房お崎が取分けて己を恨んでをるであらう、今更詫の仕樣もないが、色に迷つたばつかりに苦勞を掛けし身の不埒、お免し下され、免してくれ。

〽たゞずむ門にむすぼれし晴れぬ思ひも吹晴れて、雲間に出し一つ星。

ト此内門口にて手を合して拜む、奥より德太郎出て來るを見て、

文三 おゝ、そこへ來たは德太郎か。

德太 や、おとつさんか、(トつか〳〵と門口へ出て縋るを押へて、)

文三 これ靜にしや。(ト四邊へ思入あつて、)お母さんは内にゐるか。

徳太　あい、お母さんは奥だから、呼んで來ませう。
文三　いや呼んで來るには及ばぬ。お婆さんも奥においでか。
徳太　お婆さんはお道具を出して、翌日賣つてしまふと言つて片附けて居なさいます。
文三　それでは道具を賣ると言つて片附けてござるとか、恩を受けた一人の老母、又女房のお崎にも、ちよつと一目逢度いが、逢ふことならぬ今の身の上、お婆さんにもお母さんにも、今お父さんが詫に來たと、よく其方から言つてくれ。
徳太　あい〳〵。
文三　どうで是から散々放々、母と一緒に他人の手で人にならねばならぬ其方、産れ立からおとなしいが取分是から素直にして、學校へ行き出精なし、教師の教を能く守り、天晴立派な學者になり世間の人に褒められて、おれの恥を雪いでくれ、それぱつかりが其方へ頼み。
徳太　あい、お母さんも學校へ上つたらば勉強して、學者になれとお言ひだから、此先の福地さんの樣な、坊も學者になりますよ。
文三　おゝ、三つ子の魂百迄と、今天下に幾人といふ福地先生の樣になるとは頼もしい其詞、して學者になつたら何をするぞ。

德太　學者になつたら毎日毎晩。

文三　むゝ、毎日毎晩勉强なすか。

德太　いえ、藝者を買つて遊びます。

文三　えゝ、何處でそんなことを聞いたか、藝者を買ふと己の樣に、仕舞は身でも投げねばならぬ、決して藝者は買ふまいぞ。

德太　あい〳〵、

文三　して、お母さんは何をして居るぞ。

德太　お母ちやんは奥に泣いて居るよ。

文三　なに、泣いて居るとは。

德太　お婆さんや坊の事を憫然だとお母ちやんが、泣くので坊も悲しくなり、今迄奥で泣いて居ました。

ト德太郎泣きながら言ふ、文三引寄せて背中を撫り、

文三　それは嘸や悲しからう、義理ある母や女房は元より、頑是ない年端も行かぬ其方に迄、此悲みをさせるのも皆己が心から、かういふ惡い亭主を持つたは、お崎が不運夫に附け、生先長い其方が行末、思へば不便な事だなあ。

〽又も曇りし胸の闇、子故に迷ふ父親の袖に涙の露時雨、

ト文三德太郎を抱きしめ愁ひの思入宜しく此時奥にて、

お崎 德太郎や〳〵。（ト呼ぶ、）

德太 あれ、お母ちやんが呼ぶから、坊が玆へ呼んで來よう。

文三 いや〳〵呼んで來るには及ばぬ。

德太 いえ、呼んで來るから待つておいで。（トつか〳〵と奥へはひる。）

文三 お崎に逢ふのは面目ない、こりや斯うしては居られぬわえ。

〽餘所の人目を忍ぶが岡の、山も夜霧に消ゆる森影。

ト獨吟の切、風の音になり、文三名殘を惜む思入あつて、下手へはひる。と合方ばた〳〵にて、奥より女房お崎德太郎の手を引出て來り、

お崎 これ、おとつさんは何處においでだ。

德太 表に立つておいでだよ。

お崎 そりやまあほんの事かいの。（トつか〳〵と門口の外を彼方此方と見て、）これ、何處にお父さんかおいでだつた。

德太　此處に今迄お出だつた。

ト合方きつぱりとなり德太郞表を尋ねる、お崎は幽靈が來たかといふ思入あつて、

お崎　それでは迷つてござんしたか。

德太　お父ちやん〳〵、お母ちやんがお出だよ、お父ちやん〳〵。

お崎　これ〳〵德太郞、もうよい加減にしたがよい、幾ら呼んでもお父さんは、再び歸つておいでぢやない、悴の愛に引されて、迷つて此處へござんしたのぢや。

德太　それでも此處にお出だものね。

お崎　今此處へお出のは、ありやお父さんの幽靈ぢやぞ。

德太　え、（ト お崎に縋る。）

お崎　七日跡に隅田川に身を投げて死なしやんしたれば、生きてお出の筈はない たつた一人の悴にて、常から祕藏の德太郞、血筋の絲に冥土からそなたに逢度くござんしたのぢや。

德太　そんならお父さんは死んだのかえ。

お崎　おゝ、もう此世にはおいでゞない。（ト 德太郞しく〳〵泣きながら、）

德太　お父さんなら幽靈でも、坊は怖い事はない、もう一遍此處へ來ておくれよう。

ト德太郎の泣くを見て、

お崎　幽靈でもよい逢度いと、是程慕ふ此子を捨、其身を投げて死ぬるのは、定めて是にはよく〳〵な譯が有つてゞござんせうが、役に立たねど八年此方連添ふ私に打明けて、譯を話して下さんしたら、譬にもいふ膝とも談合、どうか仕樣もあらうのに、譯を話して下さんせぬは、恨むまいとは思へども女子の愚癡に恨みます。未其上に今此處へ倅に逢ひにござんしたら、なぜわたしにも唯一目顔を見せて下さんせぬ。八年跡に縁有つて嫁に來てより此年月、遂に一度口論を仕た事もなく睦じく子迄設けし女夫中、何ほ足らはぬ私ぢやとて、不便と思うて下さんせぬは、さりとはつれない心ぢやなあ。

德太　これお母ちやん、そんなに泣いておくれでないよ。

お崎　泣き度事はないけれど、共白髪迄連添はうと頼みに思ふ夫に死なれ、かてゝ加へて親の病氣、九死一生とあるからは、此から國へ行つた上又父さんに死なれたら、誰を便りに此子をば、わたしが育てゝ行かれませう、思へば悲しいことぢやなあ。

ト顔へ袖を當て忍び泣きに泣く、德太郎門口へ出で、

德太　お父ちやん、お母ちやんがこんなに泣くから、もう一遍來ておくれよ。

お崎　いくらそなたが呼んだとて、情ない心の文三殿故、最う爰へはお出ぢやない。
德太　坊が呼ぶのにお父ちやんは、なぜ玆へ來ておくれでない。
お崎　もう〳〵呼ぶには及ばぬわいの。（ト德太郎の手を取り内へはひろ、此時奥より忠藏出て）
忠藏　もしお内儀さん、旦那がお出なさいましたか。
お崎　これに迷つて今しがた、此處へおいでなすつたわいの。
忠藏　それでは玆へ幽靈で。（ト此とたん銅鑼鐃鉢の入りし葬式の鳴物を打込む）
德太　あれえ。（トびつくりしてお崎に縋る。）
お崎　何も怖い事はない。
忠藏　あの鳴物は向うの寺へ、夜葬式が來ましたのだ。
お崎　折も折とて葬式の、あの鳴物を便にて、
忠藏　迷うて玆へおいでありしは、
お崎　愛に引る、子故の闇、
忠藏　闇き冥土の旅ならで、
お崎　翌日は赴く西の空、

忠藏　彌陀の御國の小佛越、
お崎　尋ねる父が逢はぬ間に。
忠藏　憂世の中を猿橋や、
お崎　無常を告げる犬目宿。
忠藏　笹子峠の露霜と、
お崎　果敢なく消えしことならば。
忠藏　はる〴〵おいでなされても、
お崎　其甲斐もない、
忠藏　甲斐の國、
お崎　行くも物憂き此旅立。（トお崎の泣くを見て、）
忠藏　てもおいとしう。

ト此時下手より以前の義助伺ひ出で、門口から覗く、忠藏つか〳〵と行き門口をぴつしやりしめる。
是を道具替りの知らせ、

ござります。

ト涙を拭ふ、お崎は德太郎を抱き泣く、門口の義助は舌を出し窺ひ居る、此模樣合方寺鐘にて道具廻る。

（神田川網船屋の場）――本舞臺一面の平舞臺、向う三尺の暖簾口上手一間押入戸棚此内に三尺の佛檀阿彌陀の掛物佛具宜しく、燈明點しあり、下手鼠壁是へ玉の襷、竹の子笠掛有り、上の方一間障子屋體、例の所常の門口、下の方路地口、總て神田川網船屋の體、よき所に踏臺の上へランプを置き、上手に綱打六右衞門袷の上へ縞の半纏を引掛け座蒲團の上に住ひ、下手に三次千吉紺の腹掛、長半纏三尺帶眞中へ刺身と燒肴の皿を載せし廣蓋を置き、酒を吞みゐる。此後ろに女房お浪和し裝前掛にて、箱火鉢へ鐵瓶を掛け酒の燗をしてゐる。此見得角力甚九にて賑やかに道具留る。

三次　もし姉さん、最前からいけ騷々しい、角力甚九でどし〳〵騷ぐが。

千吉　此長屋には珍しい、何處の内で騷ぐのだね。

お浪　あの騷ぎは町先へ、此間越して來た馬喰町の矢場へ出る、意氣な娘のある内だよ。

三次　そりやあさつぱり知らなんだが、女と聞いちやあ聞退せねえ。

千吉　どんな娘か見てえものだが、何歳位な新造だね。

お浪　髮は島田に結つてゐるが、三十近い女だよ。

三次　其年增の新造なら、此間河岸で見たが、

千吉 色はちつと淺黑いが、小股の切れたいゝ女だ。
六右 女の話しで夢中になり、何時迄猪口を持つてゐるのだ、早く此方へ廻さねえか。
三次 もう一杯呑んで上げます。(ト猪口を出す、)
千吉 いや、轉んでも唯は起きねえ奴だ。(ト酌をする、三次ぐつと呑んで、)
三次 あい、親方。(ト猪口を差す、千吉酌をする。六右衛門呑んで、)
六右 おつかあ、燗がぬるいぜ。
お浪 玆へ熱いのが出來たよ。(ト鐵瓶の中より燗徳利を出す、)
三次 今日は親分、おめえさんのお母さんの祥月かえ。
六右 おゝ、今年で丁度十年跡、年の上でめでたくなつたが、餓鬼の折からお袋にやあよく厄介を掛けたから、年に一度の祥月には生業づくでも殺生をするのは爲にならねえから、一日休んで菜似を炊き何はなくとも近所へ遣り、日が暮れてから精進を落ちて肴で一杯遣るのだ。
三次 千僧萬僧の供養より、呑倒れの私等に斯うして呑まして下さるのが、何より功徳になりますぜ。
千吉 よく親方はお母さんの、問弔ひをしなさるが、達者で居なさる時分には、熊さんばかり可愛がつて親方には構はなんだね。

六右　不具な子程可愛いと、酒と博奕と女郎買三拍子揃つた上、生れ立から根性が曲つて居るので盗を働き、佃島へも二三度行き差入物から引取迄、己にやあ度々難儀を掛けたが、お袋は可愛がつた。

三次　此頃久しく見えなさらねえが、何處か近在へでも行きなすつたか。

千吉　聞けば此頃葛西の方へ、いゝのが出來るといふ事だ。

お浪　大方そんな事でもあつてか、此方の内へも十日程來なすつた事がない。

六右　彼奴の顔は幾日でも見ねえ方が己の仕合、どうか半年と一年も顔を見たくねえものだ。

ト此以前下手より、月の輪の熊藏前幕の拵へ、頬冠りにて出て來り門口に窺ひ居て、此時門口を明け、

熊藏　見度くねえ此顔を、今夜兄貴に見せに來たのだ。

三次 千吉　おゝ、噂をすれば影とやら。

六右　來ねえでもいゝに、又來たか。

お浪　まあ熊さん、爰へおいで。

熊藏　姉さん、大きに無沙汰をしました。（ト足の埃塵をはらひ、能きところへ住ふ。）

お浪　よく今夜お出だね。

熊藏　餘りよくも來ねえのさ。

六右　這入り早々是だから、己あ手前に逢ひ度くねえ。

熊藏　又兄貴の愛想づかしか、何と言つても血筋の兄弟、切つても切れねえ中だから、厭がられても度度來るのだ、然も今夜はお袋の命日だから佛檀の、位牌へ回向をしに來たのだ。

六右　よく命日を覺えて居たな。

熊藏　そりやあ決して忘れやしねえ、一方ならずお袋にやあ、世話になつた體だから、今日も寺へ參つて來た。

お浪　お寺へお參りをしておいでか。嘸お母さんが墓場の下で、悦んでおいでだつたらう。

三次　まあ其話しは跡へ廻して。

千吉　ちよつと一杯息つぎに、（ト猪口を差す。）

熊藏　酒は何より有難いが、今日も小十里歩いたので、砂ツ埃になつたから、湯へ這入つて來て馳走にならう。

六右　今日も小十里歩いたとは、何方の方へ行つたのだ。

熊藏　それにも色々話しがあるが、湯から上つて呑みながら、ゆつくりと話しやせう。

六右　それぢやあ早く行つて來い。

熊藏　姉さん、湯錢をくんねえ。

お浪　あい。(ト火鉢の引出しから錢を出して遣る。)

六右　何だ、手前は湯錢もねえのか。

熊藏　百の錢もねえのさ。

六右　それで己が所へ來たのか。

熊藏　察しの通り、借に來たのだ。(ト角力甚九で熊藏下手へはひる。)

六右　いや、飛んだ者が舞込んだ。

お浪　お前方の言ふ通り、何處か田舍の賭場へ行き、其處で取られて來たのだね。

三次　もう熊さんもいゝ加減に、堅氣になつて女房でも、持つて稼いだ事ならば、親分お前の相談相手、一廉力になりませうに。

千吉　己等達の愚鈍と違つて、盆の上の明るいのが、其身の疵で闇い所へも、度々行つた苦勞人。

六右　一つ腹から出た己と、斯うも心の違ふものか。とんだ弟を拵えられて、今日の佛と親父が恨みだ。

お浪　角力甚九もいつの間にか、こつそりと靜になつた。

ト時の鐘しんみりとした合方になり、花道より以前の文三風呂敷包みを持出て來り、花道にて、

文三　七日跡に隅田川へ小松と共に身を投げたが、丁度其時下汐に流れ〳〵て八百松の河岸で夜網を打に出た向うの主人に助けられ、厚い世話になつたれど、世間へ知れるを憚りて、町所から名前を僞り、送ると言ふを斷つて、夜明前に歸つたきり其後禮にも行かなんだが、今日は是から尋ねて行き素性を明して救はれし禮を言つて立退ん。（ト右の合方にて門口へ來り）はい、御免下さりませ。

お浪　あい、どなたでござります。（ト文三門口を明け）

文三　此間隅田川で、命をお助け下さりました、新三郎でござります。

六右　おゝ、身を投げた新三さんか、よく尋ねて來なすつた。

三次
千吉　まあ此方へお這入りなさい。

文三　どなたも御免下さりませ。（ト合方きつぱりとなり内へはひり下手へ住ふ。）

六右　あの折翌日禮に來ると、言つて歸つたそれ限に、お前が此方へ來なさらないから、又もや迫つてどんぶりと身でも投げはしなさらねえかと、實に今日迄案じて居ました。

文三　直にもお禮に上りませねばなりませぬのをあの晩に、水を吞んだ其せいか、煩ゐまして上りませず、申譯がござりませぬ。

お浪　變る事さへござりませずば、何よりでござります。

文三　今更申迄もなけれど、其砌は御夫婦初め、皆樣方のお世話になり何とお禮を申しませうか、詞に申し盡されませぬ。

三次　あの儘お前が來なさらないので、此親方が取越苦勞に、どうぞなすつたか尋ねてくれと、私等二人が頼まれて、

千吉　あの晩お前が言ひなすつた小日向の水道町へ、態々尋ねて行つた所、そんな名前の人はなく、如何した事かと思つて居たのさ。

文三　實はあの晩小日向の、水道町で炭薪を、渡世に致す小商人、古田新三郎と申しましたは、僞りでござります。

六右　なに、僞りとは。

文三　何をお隱し申しませう。誠は下谷の茅町で、米を渡世に致します穗積文三と申します者。

ト皆々びつくりして、

六右　あゝ、お前が穗積文三さんか。

文三　名を御存じでござりますか。

六右　おゝ、其名を知つて居りますは、しかも繪入新聞へ、晝まで出て居る續き物、下谷で名高い藝者

の小松と、向島で心中した其事柄が委しくあるので、誰知らねえ者はない。

文三　それでは仔細が新聞へ、委しく記してございますか。

三次　諸新聞に出て居るのは、身代限りをする迄に、金に詰つて二人共女房子のある身の上に、此世で添はれぬ事ならばと、お約束の向島へ、

千吉　相々傘で道行と出掛けてどんぶり隅田川へ、身を投げたといふ事は、新聞を見て私等も委しく譯を知つて居ります。

お浪　それでは小松が惚込んだ、色男の文三といふのは、お前さんでございましたか。

文三　其様に仰しやられては、面目次第もござりませぬ。（ト天窓へ手を當て面目なき思入）

六右　してあの時に本名を、お前が明しなさらぬのは、どういふ譯でござります。（ト介方になり、）

文三　唯今お話し申しますが、不圖した意の迷ひから、妻子のある身を顧みず、藝妓の小松と言交し、此所の會席彼處の待合、遊び歩いた身の果が、諸所へ多くの借が出來樂しみ盡きて黒札へ、名前を記す身代限り、義理ある母は言ふに及ばず、連添ふ女房に言譯なく、生きて居られぬ譯となり無分別にも隅田川へ、小松と共に身を投げたも未命の盡きざるか、お前様の網に掛り、助かりました其時に、住所名前を僞りましたは、跡に殘つた女房が借りた金の言譯も、死んだとあれば貸方

で勘辨をしてくれませうと、存じまして誠の名前を、隠しましたは此譯故、おゆるしなされて下さりませ。

六右　さういふ譯でござりましたか、さうしてあれからお前さんは、何處においでなされました。

文三　お内を出てから寄邊も無く又死うかと存じましたが、時が後れて遂には死兼ね今日迄人の氣の附ぬ安泊りに身を忍び、過越方や行末を考へますれば母親や、又女房に濟まぬ事のみ、後悔先に立たずといふ譬の通り今となり、詫の仕様もござりませねば、私し故に命迄捨てた小松の菩提を兼ね剃髪なして出家となり、諸國を修行致さうと心を定めて此如く、衣を調へ餘所ながら最前宅の表にて、倅に逢つて別れを告げ命を助けて下すつたお前様へ此程のお禮を申して明日は、出家致して雲水の行方定めぬ身と成りて袖に露置く秋の末、心細くも唯獨り、旅路に果てる心にて、靈場參りに參ります。

六右　それではあの時身を投げた、小松殿の菩提の爲、お前は出家にならつしやるとか。

お浪　さうして上げた事ならば、嘸小松さんが草葉の蔭で、嬉しい事でございませう。

二六　それでは髮も今夜ぎり、

千吉　明日は坊主に剃んなさるのか。

文三　はい、寺へ參つて身の罪を懺悔致して剃髪なし、墨の衣に此身をば、替る意でござります。

ト風呂敷包みより墨の衣を出し見せる、皆々氣の毒だといふ思入、此以前下手より熊藏濡手拭を提出て來り、門口に佇み窺ひ居る、此時熊藏扨はといふ思入あつて、

熊藏　いや、小松故に坊主になるのは、そりやあ止しになさいまし。(ト言ひ乍門口を明け内へはひる。)

六右　おゝ、誰かと思へば熊藏か。

お浪　何であなたの剃髪を、

三次
千吉　兄貴お前は留めるのだ。

熊藏　門で樣子は聞いて居たが、菩提の爲に天窓を剃るのは、あんまり馬鹿げて居ますから。

文三　剃髪なすを馬鹿げて居るとは。

熊藏　死んだと思ふ藝妓の小松が、生きて此世に居りますからさ。

文三　えゝ、(トびつくりなし、)それは誠でござりますか。

熊藏　何で嘘をつくものか。

お浪　どういふ譯で其事を、お前が知つて居なさるのだ。

熊藏　知つて居るのは其晩に、わつちが渡しの小屋に居て、一部始終を見て居やした。

文三　して又さう言ふお前さんは。

六右　こりやあ我が實の弟熊藏といふ破落戸。

文三　すりや、弟御でござりますか。

熊藏　とんだ藝者に引掛つてあぶねえ事でござりましたが、どうしてお前は助かりなすつた。

六右　あの晩己が夜網に出たが、三圍下へ打込んだ網に掛つて助かんなすつた。

熊藏　そりやあ仕合せな事だつた。

文三　私はお蔭で助かりましたが、小松は共々川へ飛込み、死んだとばかり思ひましたが、それでは生きてをりますか、

三次　是にも何か子細があらう。

丁次　兄貴話して聞せなせえ。

熊藏　文三さんの念晴しに、今話して聞かせよう。

文三　どうぞ聞して下さりませ。（トしんみりとした端唄の合方になる。）

熊藏　あの晩わつちは向島にいゝ内會が出來ると聞き、それを突當に行つた所、空を踏んで忌々しく、土手の酒屋で一杯吞み、渡しを渡つて歸らうと船場へ來たら船頭が、何處へ行つたか居ねえ故、

小屋へ這入つて待つ内に空腹故に酒が利き睡氣が附いて一寐入り、居爐裏の傍へ寢ましたが、戸の透間から吹込んだ筑波颪が身に沁みて目が覺めた時棧橋に、女と男の密々話し、意氣な節だと思ふ中南無阿彌陀佛の聲諸共、どんぶりといふ水音に扨は身投と戸を明けて、見れば藝者が跡へ殘り、問はず語りの獨語に、死ぬといふのは僞はりで素より仕組んだ拵へ情死、お前が馬鹿を見なすつたのだ。

文三　え、。(ト是を聞き悔しき思入あつて、)それでは小松は初めから、死なぬ心でござりましたか。

ト思はず熊藏に詰寄る。

熊藏　元八王子の曖昧茶屋に、藝者紛ひをして居た時、女房に仕樣成らうといふ約束をした男の爲に、種々な苦勞を下谷へ來て、藝者になつたあの小松、お前が川へ飛込んだを篤くりと見て棧橋へ傘と下駄とを證據に殘し、死んだと見せて男の所へこつそり逃げて行く料簡、あんまり憎い仕方故、小屋から私ちが呼留めて月の明りによく見れば、慄とする程い、女だが、膽のい、のに愛想が盡き色氣を捨て慾氣と出掛け、惡事をかせに宿場へ賣り金にする氣で本所の安泊りへ泊り込み夜明を待つて人車へ乘せ、追手の來ぬ間に新橋から一番汽車で神奈川へ着いて漸々飯を喰ひ、それから直に又人車で、程ケ谷戸塚藤澤と大急で乘越す其内に、昨夜から苦勞をしたので、持病の癪が

起つたから、何處ぞへ早く泊つてくれと言はれて是非なく宿外れの、泊人のねえ宿屋へ泊り、差込む癪を押へて遣る內短けえ日足に午時も過ぎ藥を呑せ按摩を呼び、厭がる鍼を無理にさせ、兎や角する間に日暮に成り湯が沸きましたと下女が知らせに、草臥休めにうつかりと按摩に賴んで湯へ這入つた其間に小松は庭口から、何處へ逃げたか行方知れず、欺されたのが悔しいから占ひ者に見て貰つたら、濱に居るといふ敎に、取つてかへして五六日、諸所方々たづねたが、少しも足が附ねえのに、路用の金がつきたから、すごく此方へ歸りました、お前さん同樣に、私もあいつで馬鹿を見ました。

文三　それでは小松は藤澤から、何處へ行つたか知れませぬか。

熊藏　何でも何處にか知邊があつて、隱れて居るに違えねえ。

二次　何にしろ、生馬の眼を拔く樣な熊兄いの、

千吉　其眼を拔いて逃げるとは、藝者にしちやあいゝ度胸だ。

熊藏　そりやあ文三さんを出しに遣ひ、情死したと見せ掛けて逃げる程な女だから、中々膽の太え奴だ。

六右　あの時已が網に掛り、助かつたからいゝけれど、

お浪　其儘流れて死なさんしたら、詰らぬ事でござんした。

熊藏　それを知らずに死んだと思ひ、小松が菩提の其爲に、坊主になると聞いた故、見[illegible]留めたのだ。

お浪　お前が内へ今日來ずば、斯ういふ事も知れまいに。

六右　それは天から言はせる所だ。

三次　斯うして見ると文三さんは、小松にすつかり欺されたから、

千吉　今の話を聞きなすつては、嘸悔しうござりませう。

熊藏　そりやあ言はねえでもどの位え悔しい事か知れやあしねえ。取る丈金を吸取つて今更捨てるに捨てられず、荷になるとこから情死と引張出してお前を殺し、情夫になつてる男の所へ、逃げて行たあの小松、私でせえも悔しいから、嘸悔しうござりませう。

ト熊藏手拭を握り、悔しき思入。此内文三ははら〳〵と悔し涙をこぼし、是を拭ひながら、

文三　さういふ意の女と知らず、來世を掛けて云ひ交し欺されるのを誠と思ひ、迷ふ心に貞節な子迄なした女房につらく當つて内を外、此處の會席彼處の待合遊び暮して持傳へた、地面家作は云ふに及ばず、衣類道具も賣盡し、憂き艱難をさせたのも、我放埓と言ひながら元の起りはあの小松、是迄隨分それ相應爲になつたを忘れてしまひ、恩を仇で返すとは、返す〴〵も憎い奴。

ト向うを見込み悔しき思入、

熊藏　其悔しいのは無理ぢやねえ、私も覺えのある事だが、凡そ女に欺された位悔しい物はござりませぬ。尋ね捜して存分に、小松の面へ疵でも附け、恨みをお晴らしなせえまし。

三次　居所が知れゝば私等も。

千吉　お前さんの加勢をします。（ト三人文三に焚附ける、六右衞門思入あつて、）

六右　これ〳〵手前達は何を言ふのだ、唯せえ女に欺されて悔しくつてならねえ所だ、薪に油を添へる樣に、焚附ける樣な事をいふな。

三次　それでもあんまりそでねえ仕方。

千吉　腹が立つてなりませぬ。

熊藏　是が己なら見え掛り、半殺しにして遣りてえのに。

お浪　お前達が同じ樣に、氣の立つて居る文三さんに、餘計な事をお言ひでない。

文三　今も熊藏さんの言ふ通り、あれを殺したことならば悔しい胸が晴れませう。

ト悔し涙を零し、きつとなる、六右衞門思入あつて、

六右　これ文三さん、嘸腹が立ちませうが、跡先の考へも無い此奴等が言ふ樣に無分別な事をしなされば

言はずと知れたお前は科人、直に其身へ繩が掛り、警察署から箱馬車で監獄署へ行かれ[illegible]、と
さうなる日には恥の恥、親御を初めお内儀さんに餘計な歎きを掛けねばならぬ、既に一旦捨てた
命を私の綱で助かつたは、神や佛の見捨てぬ所、必ず惠みがありませうから、腹も立たうが此儘
に小松の事を思ひ切り、家へ歸つて生業を一三昧に精出して、誠の人になつた上、以前はこんな事
があつたと、昔語になさいまし。

お浪　さういふ事になりますれば、お内儀さんのお悦びはどの樣でござりませう、お愛子のを可愛いと
思召すなら文三さん、親仁が今の詞に就いて、お内へお歸りなされませ。

ト兩人親切にいふ、文三も忝ないといふ思入あつて、

文三　親身も及ばぬ其御異見、決して仇には聞きませぬ、是から意を入替へて小松の事を思ひ切り、再
び家へ歸りまして、母や妻子に安堵させ、生業大事に致しまする。

六右　おゝ、それぢやあ私の言ふ事を、お聞きなすつて下さりますか。

文三　涙の出る程有難い此御異見を私が、何で聞かずに居られませう。

お浪　其お詞を承り、誠に嬉しうござります。（ト此時長屋で唄ふ唄になる。）

〽惚れて通ふに何怖からう。

三次　又矢場の女が彈出したか。

千吉　いけ騷々しい。止せばいゝに。（ト熊藏文三に向ひ、）

熊藏　それぢやあお前はすつぱりと、小松を思ひ切んなさるか。

文三　はい、御異見に就て思ひ切ります。

熊藏　思ひ切るとは感心だが、是迄お前を欺し込み、取る丈金を取つた上、無理情死でどんぶりと川の中へ突出すとは、あんまりふてえ奴だから、己なら殺してしまふけれど。

六右　これ、折角思ひ切りなすつたに、手前が餘計な事をいふな。

熊藏　それだといつて悔しいから。

六右　えゝ、言ふなといつたら、默つて居ろ。

ト六右衞門きつと云ふ、熊藏天窓を押へて跡へ下る。文三思入あつて、

文三　左樣なれば私は、最うお暇致しまする。

六右　譬にも云ふ善は急げ。

お浪　早うお内へ、お歸りなされて、

文三　妻子に安堵致させませう。（ト風呂敷包を持ち立上る。）

三次
千吉　又遊びにお出でなさい。

文三　何れお禮に上りまする。（ト文三門口へ出て戸をしめる、六右衛門氣を替て、）

六右　お浪、最う一本附けてくれ。

お浪　あい。（トお濵燗德利を鐵瓶へ入れる、門口の文三ぢつと思入、又以前の唄になり、）

〽闇の夜道を唯一人、先や左程にも思やせぬのに、こちや登り詰、（ト此內文三行掛立留り、）

文三　斯程不實な女と知らず、菩提の爲に出家となり、跡を弔ふ心にて、拵へて來た此衣。（ト風呂敷包みより墨の衣を出し、）妻子へ歎きを掛けるのが、不便なれども欺されたと思へば胸が裂ける程。（ト悔しき思入にて衣を引裂き、）恨を返さにや腹がいえぬ。（トきつとなる、此內熊藏伺ひ居て門口を明け、）

熊藏　まだ行きなさらねえか。

文三　はい。（ト衣を後へ隱すを木の頭、）只今參ります。

ト辭儀をする、熊藏うなづく、六右衛門は三次千吉を相手に酒を呑み居る。

〽山を越えて逢に行く、

ト此唄にて宜しく

ひやうし　幕

四幕目

小佛峠地藏堂の場

【役名━━鵜飼甲作、屑人忠藏、飛脚義助、駕籠舁金八、同丈六千ヶ寺參り喜三藏、同小巳七等。】

(地藏堂の場)━━本舞臺一面の平舞臺、上の方に九尺常足の辻堂、茅葺屋根、本緣附石の踏段、正面狐格子の開き戸、軒口に地藏尊と記せし額を掛け下手に古びたる因果車、後ろ上手より斜に下りる坂道、杉の梢を見せ、上下岩の張物にて見切、諸所に杉の立木日覆より同じく杉の釣枝、總て甲州海道小佛峠の體、爰に千ヶ寺參りの喜三藏、小巳七、白の手甲脚絆草鞋千ヶ寺參りの拵へ、小葛籠へ菅笠を附け是を背負ひ團扇太鼓を持ち辻堂の緣へ腰を掛け居る、此見得山颪し題目太鼓にて幕明く。

喜三　千ヶ寺參りが念佛の地藏堂へ休んでは、宗旨へ對して濟まぬ譯だ。

小巳　爰が所謂夕立や法華駈込む阿彌陀堂で、草臥れたれば仕方がない。

喜三　明るい內に八王子迄、下り度いと思つたが、何をいふにも秋の末。

小巳　五時を打つと闇くなるので、是では餘程夜道をせねば、八王子迄は行かれない。

喜三　峠を下ると直下に、安泊が一軒あるから、彼處へ行つて泊るとせう。

小巳　八王子へ行けば湯があるが、峠下には湯屋はなし、風呂でも焚いてくれゝばいゝが。

喜三　それはさうと猿橋から、道連になつた鵜遣ひは、鵜飼石の話を聞いて跡へ歸る氣になりはせぬか。

小巳　猿山峠を打越して、一の宮の柚木村に居る、鵜飼仲間の所へ行くと聞くも殺生な渡世だと思ひ、

喜三　甲州石和の勘作が、日蓮樣のお經の功力で、成佛をした話を聞かせ。

小巳　世に鵜遣程殺生な、家業はないと說法を、道々二人で話したので、吉野の立場へ休んだ時、一と足後へ殘つたが、

善三　あれで家業を替てくれゝば、此方も異見の甲斐がある。

小巳　それといふのも有難い、日蓮樣への御奉公だ。

喜三　兎角いふ間に暗くなつた。

小巳　暮れない内に出掛けよう。（ト兩人立上り、）

兩人　南無妙法蓮華經々。

ト山颪になり太鼓を叩き兩人花道へはひる。引違へて花道より駕籠舁金八、丈六、脚絆草鞋旅駕籠の拵へにて、山駕籠を擔ぎ出て來る、此駕籠に文三の女房お崎浴衣を上へ着たる旅裝にて、德太郎を抱き相乘りに乘り居る、駕籠舁花道にて杖をする、お崎跡を見返り、

お崎　もし、供の男は如何しました、大分後れたではござりませぬか。

金八　平地と違ふ小佛峠、不斷歩きつけねえ者は、なか〳〵急いで歩かれませぬ。

丈六　先向うの地藏堂へ行つて、一服やつて待ちませう。
お崎　どうぞさうして下さりませ。（ト右の鳴物にて本舞臺へ來り駕籠を下し、）
金八　今摺火打で附けますから、
丈六　あなたも一服お上りなさい。
ト金八かます煙草入より摺火打を出し、火を打つて煙草を呑む、山颪にて花道より手代忠藏、尻端折三尺の上帯紺の脚絆草鞋柳行李と風呂敷包みを、細き天秤棒にて擔ぎ、是れへ菅笠を附け早足に出て來り。
忠藏　駕籠屋は向うに立つて居るか、やれ嬉しや追ひついた。（ト舞臺へ來り、）おゝ若い衆、待つてゝ下すつたか。
金八　お前さんのおいでなさるを、此處に待つて居りました。
お崎　そなたの來樣の遲いので、大抵案じた事ではない。
忠藏　此夏脚氣を煩つたので、いまだに膝ががくつきますから、急ぐ事が出來ませず、遂一二町後れました。徳ちやんはお寐つておいでなされますか。
お崎　親の苦勞をするのも知らず、今し方から寐ましたわいの。

忠藏　山風が身に染みますから、風邪をお引きなさらぬ樣御用心なされませ。(ト駕籠舁兩人思入あつて、)
金八　もしお供さん、お氣の毒でござりますが、此處で二人共お暇をお貰ひ申したうござります。
忠藏　峠を打越す約束で、八王子から乘つた駕籠、まだ半分道も來ぬ内に、此處で暇をくれと言ふのは。
金六　外の事でもござりませぬが、わつちが足を痛めまして、擔ぐ事が出來ませぬ。
丈六　車と違つて駕籠の方は、獨で擔げませぬから、無據わつち迄、此處で御免を蒙むります。
忠藏　宿なら直に代りを賴むが、四邊に家もない山中、どうぞ峠を打越す迄。
金八　久しい跡に轉んだ打身が、昨日から起りまして、どうも峠は越されませぬ。
忠藏　それ程打身で歩けぬなら、先に斷つてくれゝばよいに。
金八　最前は左のみ痛くも無いから、峠を越す氣で來ましたが、歩けぬからは仕方がねえ。
丈六　御不承ながら二人共、此處でお暇をくださいまし。
忠藏　歩けぬとあれば仕方がないが、こんなに困つた事はない。(ト當惑の思入。)
金八　もし御新造さん、今お聞きなさる通り、足が痛んで歩けませぬから、
丈六　此處から下りて下さいまし。
お崎　それでは是から歩くのかいの。

忠藏　戻り駕籠が參りましたら、峠を越して貰ひますから、先づお下りなされませ。

ト合方山颪にて忠藏草履を直す、お崎是非なく德太郎を抱いた儘駕籠より出て辻堂の緣へ腰を掛ける。

金八　お供さん、駕籠賃を下さいまし。

忠藏　峠を越えて酒手とも七十五錢で極めた內、支度をするから五十錢貸してくれと賴む故、言ふなり次第に貸して遣つたが、まだ半分道も來ぬからは、五十錢で澤山だ。

金八　これ常談をいつちやあいけねえ、小い子でも人一人、七十五錢は一人前、二人で一圓五十錢だ。

丈六　此處迄來りやあ半分道より、四五町道が餘計だから、もう五十錢おくんなせえ。

忠藏　二人乘で酒手共、七十五錢で極めたのだ。

金八　かう見た所が末年も、二十代の若え衆だが、

丈六　若老耄で忘れたのか。

忠藏　いや、極めた値段は七十五錢、それより外に覺えはない。

金八　覺えがねえといふからは、出る所へ出て分けるから、

丈六　おいら達と一緒に來い。（ト山颪になり、丈六忠藏の胸ぐらを取り引立てる。）

忠藏　こりや、何處へ連れて行くのだ。

金八　何處へ連れて行くものか。
丈六　交番所へそびいて行くのだ。(ト手ひどく忠藏を引立てる、お崎案じるこなしにて、)
お崎　これ忠藏、縱令約束せぬとても、今更言つても水掛論、言ふなり次第に五十錢、二人の衆へ上げたがよい。
忠藏　ではござりますが五十錢、みす〳〵餘計に取られますから。
お崎　そりやさうでもあらうけれど、足弱連故仕方がない、早う上げてしまやいの。
金八　さあ御新造樣があの通り、遣れとおつしやる上からは。
丈六　約束通り五十錢、早く二人にくんなせえ。
忠藏　足弱連へ附込まれ、約束もせぬ言掛を。
兩人　なに、言掛とは。(ト又立掛るを、)
お崎　あこれ、早う遣つてしまやいの。
忠藏　えゝ仕方がない、持つて行け。(ト五十錢札を遣る。)
金八　約束通りの駕籠賃だ、仕方がねえもねえものだ。(ト札を取り財布へ入れる。)
丈六　さあ棒組、金せえ取りやあ用はねえ、暮れねえ内に早く行かう。

金八　暮れると直に狼が、山から出て來る小佛峠、それが怖さに打越せねえ。
お崎　それでは此處へ狼が。
金八　おゝ出るとも／＼、人臭え匂ひがすると。
丈六　直に山から出て來ます。
　　山颪になり駕籠を擔ぎ金八丈六花道へはひる、忠藏跡を見送り悔しき思入あつて、
忠藏　足弱連と侮つて半分道も來ぬ内に、打越す丈の錢を取られ、旅でなければあの儘にして置く奴ではないけれど。
お崎　腹も立たうが仕方がない、外の駕籠屋を雇つたがよい。
忠藏　駕籠屋があれば頼みますが、戻り駕籠でも來れば知らず、こゝらに駕籠屋はございませぬ。
お崎　それでは是から歩くのかいの。
忠藏　徳ちやんを脊負ひますから、緩々お歩きなされませ。
　　ト時の鐘、凄みの合方になり、兩窓を下し舞臺薄暗くなる。
お崎　秋の常とて暮易い、最う今の間に暗うなつた。
忠藏　今夜は月がございますから、暮れてもお案じなされますな。

お崎　所詮峠は越されまいから、跡へ戻つてくりやいの。

忠藏　此處迄登つた山道を、跡へ歸るも駕籠屋故、思へば憎い奴ぢやなあ。

ト殘念なる思入、此時德太郎目を覺し、

德太　お母ちやん、此處は暗いから早く内へ行きたいわいの。

お崎　おゝ、今に宿屋へ連れて行くぞよ。

德太　あい〳〵。

忠藏　それでは跡へ歸りませうか。（ト荷を擔ぎ立上り、苦痛の思入にて）あいたゝゝ。（ト荷を下し下に居る。）

お崎　これ忠藏どうかしたのか。

忠藏　此山霧の深いのと、夜寒で體が冷えましたか、俄に癪が差込みまして。（ト胸を押へ居る。）

お崎　それは困つた事ではある、切なからうが我慢して、峠下迄行つてくりや。

忠藏　必ずお案じなされますな、倒る迄もお供して、峠下迄參ります。

お崎　どうぞさうしてくりやいの。

忠藏　さあ、おいでなされませ。（ト荷を擔ぎ、二足三足行掛け苦しきこなしにて）心は彌猛に思ひますかどうも病に勝たれませぬ。（ト苦しき思入。）

お崎　杖とも思ふ其方の病氣、心細うてならぬ故、何ぞ藥を呑ませ度いにも、内を出る時急いだので、何も藥を持つて居ぬ、そなた用意はないかいの。

忠藏　不斷丈夫でござりますから、藥は持つて居りませぬ。

お崎　これ德太郎、忠藏を介抱するから、少しの間待つて居や。

德太　あい〳〵。（ト辻堂へ德太郎を坐らせ。）

お崎　其處では土間で冷えるから、此辻堂へ來たがよい。

忠藏　有難うござります。（ト緣へ腰を掛ける。）

お崎　何處が痛いか押して遣らうか。（ト傍へ寄る。）

忠藏　憚りながら鳩尾を、少し押して下さりませ。

お崎　力が無いゆゑ利けばよいが。（トなまめきし合方になり、此時灯入の月をおろし、お崎忠藏の懷へ手を入れ胸を押す、忠藏月明りにお崎の顏をぢつと見とれ居る。）

お崎　どうだ、少しは落着いたか。

忠藏　はい、大きに宜しうござります。

ト言ひながら懷へ入れしお崎の手を取り引寄せる、お崎びつくりして振拂ひ、

お崎　これ忠藏、何をするのだ。
忠藏　左樣につれなく仰しやらずと、優しい詞を忠藏に、お掛けなされて下さりませ。
お崎　何と言やる。
忠藏　何を隱さう私は、あなたに眞底惚れました。
お崎　え丶。（ト驚く）
德太　お母ちやん、抱いておくれ。（トすがる德太郎を抱寄せる。忠藏思入あつて）
忠藏　不思議な御緣で三年跡御奉公に參つた時から、御慈悲深く私へ、お目を掛けて下さいますので、末々小さな米屋でも始める時は此樣な女房をどうか持ち度いと思つた迄でござりましたが、旦那が藝者の小松と共に向島で情死なされ、今は主なき若後家に、いとゞ思ひの增すに附け寐ても覺めても忘られず、菊五郎がした淸玄も、無理ではないと小櫻にまさる姿のあなたに惚れ、末々斯うと思ひしも、迷ふ心に破れ笠、破れ衣の肩を裾、結ぶ緣しを樂しみに、お供をして來た此忠藏、珠數は切る共一念は、いつかな思ひ切りませねば、願ひをかなへて下さりませ。
トお崎の袖をとらへきつと思入、お崎はあきれし思入にて、
お崎　これ忠藏、其方は氣でも違つたか。（ト合方替つて）中年なれど正直に、家業を大事に精出すのみ

か、文三殿が内を外藝者狂ひの放埒を、若いに似合ず異見なし、米の買出し得意廻り、何から何迄一人で引受け骨を惜しまず働くので、其日に困らず生業を昨日迄もしてきた故、奉公人と思はずに、我同胞とも思へばこそ、其方を力に甲府迄子供を連れて行くお崎、思ひも寄らず今此處で、そんな事を言はれると、實に途方に暮れるから、浮いた心を入替へて、以前に替らず主從の道を捨てずに力となり、果迄送つてくりやいの。

忠藏 そりや仰しやる迄もない、望みを叶へて下さりますれば、命を掛けて甲府迄、お供を致して參りますから、願ひを聞いて下さりませ。

お崎 未々そんな事を言やるか。

忠藏 あゝ言ひますとも／＼、丁度足掛三年の、今日迄堪へて居つた忠藏、言ひ出すからは男の意地、思ひを晴らさにや置きませぬ。（トすがるを振り拂ひ、）

お崎 日頃に似合はず其樣な、どうして心になつたのか、えゝ見下げ果てた事ぢやなあ。

忠藏 斯ういふ心になりましたも、眞底あなたに惚れたゆゑ、不便と思つて私の、思ひを晴らさせ下さりませ。もしお内儀さま／＼。（ト言へどお崎は默つて居る故、）有無の返事のござりませぬは、どうでも聞いて下さりませぬか。（ト傍へ寄りお崎の手を取り引きよせるを突退けて、）

お崎　道に缺けた其方の賴み、何でそれを聞かれようぞ。（トきつと言ふ、忠藏是迄といふ思入あつて、）

忠藏　さう仰しやれば是非がない、是程思ふ忠藏の願ひを叶へて下さりませずば、お崎樣、覺悟をなされませ。（ト懷中から短刀を出し、是を拔いてお崎の目前へ差附ける、德太郎びつくりして、）

德太　あれ怖いわいの。（トお崎に縋るを抱しめ震へながら、）

お崎　こりや刃物を拔いて如何しやるのぢや。

忠藏　あなたを殺して忠藏も、此處で一緒に死にまする。

お崎　えゝ。（トびつくりなし、時の鐘、凄みの合方になり、）

忠藏　さうした日には狼が、死骸を喰に山から出て、二人のみか坊ちやんも、共に喰れてしまひませう、茲が一つの考へ所、たつた一度私の言ふ事を聞いて下さりますれば、一人ならず三人の命の助かります事故、決して二度とは言ひませぬから、願ひを叶へて下さりませぬか。

お崎　さあそれは。

忠藏　それとも一緒に死にませうか。（ト短刀を差附ける。）

お崎　さあ。（ト震へ居る。）

忠藏　是程想ふ忠藏の心を察して下さりませずは、此處であなたを差殺し、死ぬより外はござりませぬ

が、それでも叶へて下さりませぬか。（ト思ひ詰めしこなし、お崎是非なき思入にて、）

お崎　十人並に足らぬ我身を、それ程迄に思ひ詰めしは、是も互ひの因縁故其心根を思ひやり、望みを叶へて遣らうわいの。

忠藏　え、それではあなたは私の、願ひを叶へて下さりますか。

お崎　さあ、叶へる替り父樣に逢ふ迄どうぞ待つてくりや、九死一生とあるからは、半時後れて若し死目に逢はれぬ事のあらうも知れねば、此處に斯うして居るさへも心が急かれてならぬ故、早う連れて行つてくりや、息のある内父樣に逢うたら直に約束通り、其方に此身を任さうわいの。

ト是を聞き忠藏思入あつて、

忠藏　其お心を聞く上は、山坂越えて甲府迄、お供をするには及びませぬ。

お崎　なに、及ばぬとは。

忠藏　親御樣はお達者故。

お崎　え、何と言やる。

忠藏　九死一生の大病と、言つて此處迄連出したのは、否應言はさず忠藏が、思ひを晴す拵へごと。

お崎　すりや父樣の御病氣といふのは其方の拵へ事か。（ト此時辻堂の内より前幕の飛脚出て來り、）

義助　忠藏さんに賴まれて、甲府からの飛脚と言つて、お内へ行つた此私は、こんな事には拔目のねえ、山蟻の義助といふ、苦役をして來た破落戸だ。

お崎　さういふ巧みと知らずして、親の病氣と聞いた故一途に逢ひ度く思ふので、巧みの罠に掛りしか。

ト口惜しき思入、忠藏以前と替りし思入にて、

忠藏　斯いふ巧みをする心は、素より少しもねえ忠藏、最前も申します通り、奉公に來た其時から、惚れては居たが主人の女房、迚も及ばぬ事と思ひ、我と我身に異見をして、ぢつと怺へて居りましたが、今は主なき若後家に、思ひ切られず今日翌日と、言ひ出し兼ねて居りましたが、操正しい心故、所詮只ではいかねえが、どうした物と思ふ内、悪い智慧の附き易く、親御の病氣と僞つて親切ごかしに内を連出し、府中泊りも女の足、短い日あしに八王子から暮れるがこつちの山駕籠へ、道を知らねえお前を乘せ込み、夜るは往來のないを幸ひ小佛峠で口說落し、此辻堂で存分に日頃の思ひを晴らす氣で、義助を賴んで飛脚となし、古い趣向の狂言も夜露に濡れの一幕物、役不足をば言はねえで、しんみり相手になる氣なら、鳴物凄い木枯の音を寢耳に聞きながら、寒さも知らずしつぽりと、汗をかいて貰ひてえ。（ト忠藏尻をまくり悪者の思入）

お崎　扨は是迄親切に言つたは皆んな僞りにて、内を連出す巧みであつたか、今更いうても返らねど、

欺されたのが口惜しい。（ト悔しき思入。）

忠藏　やさしく己が言ふ内に、素直に得心すればよし、厭だと言へば仕方がねえ、憎まれ役だが手足を縛り、今夜夜通し弄さむぞ。

お崎　えゝ、主を手籠に仕ようとは、言はう樣ない人でなし、何で汝の自由にならうぞ。

德太　お母ちやん、早う内へ行きたいわいの。

お崎　それ所ではないわいの。（ト德太郎を抱く、義助思入あつて、）

義助　所詮こりやあ素直には、お前の自由にならねえから、少しも早く手籠にして、日頃の思ひを晴らしなせえ。

忠藏　暮れては旅人も通らねえ、不氣味な小佛峠だが、歸り駕籠でも來られては、巧んだ仕組も水の泡。

義助　お前が存分弄さんだら、跡を義助に讓つてくんねえ。

忠藏　そりやあ言はずと知れたことだ。

義助　さう聞く上は少しも早く。

忠藏　どれ、辻堂へ連れて行かうか。

お崎　えゝ、情ない汝らに、今此身をば穢されるを、助ける神もない事か。（ト泣く。）

義助　いくら泣いてもわめいても、何處へ聞える所もねえ、人里離れた此山中、早く往生すりやあよし、いやだと言やあ此餓鬼を、崖から谷へ投り込むぞ。（ト德太郎の襟がみを取て引立てる。）

德太　あれ、痛いわいの。（トお崎止めようとするを忠藏抱きすくめる、お崎もがき乍ら）

お崎　これ、其子は助けて下さいまし。

德太　痛いわいの〳〵。

義助　えゝやかましい。（ト德太郎をこづく。）

お崎　餘りと言へば情ない。

忠藏　其子を不便に思ふなら、素直に此處で抱かれて寐るか。

お崎　さあ、それは。

義助　餓鬼を谷へ投り込まうか。

お崎　さあ、

忠藏　抱かれて寐るか。

お崎　はあゝ。（ト泣伏す。）

忠藏　えゝぐづ〳〵と面倒臭い。

ト お崎に抱附くを振拂ふ、山颪し早き合方になり、お崎德太郎を引取り逃げようとするを義助さゝへる、忠藏又抱附く、此立廻りの内お崎髮も形も亂れ、德太郎は泣き哀れなる仕組、能程に上手の二重の上坂道より鵜飼の甲作、筒袖、半纒股引腹掛、三尺帶草鞋履にて竹の子笠を冠り、木の枝を折りしを杖に突き舞臺へ下りて來る、此內お崎逃廻るを、忠藏追廻す。お崎甲作を見て傍へ駈寄り縋り、

お崎　どうぞ助けて下さりませ。（ト甲作は此體を見て、）

甲作　見れば子供を連れた女中、こりやどうしたのでござります。

お崎　これなる二人の惡者が、此身を手籠に仕ますから、お助けなされて下さりませ。

甲作　爰許近所の者とも見えぬ、何處のお方でござります。

お崎　はい、私は東京の、下谷茅町二丁目で、穗積文三と申します、米屋の女房でござります。

甲作　それぢやあ東京のお方であつたか、何にしろ此奴等に、決して手籠にさせませぬから、落着いておいでなさい。（ト此內忠藏義助領き合つて前へ出て、）

忠藏　何處の奴かは知らねえが、入らざる所へ通り掛り、親切振つた支障だて、餘計な口を利かねえで、見ぬ顏をして早く行け。

義助　入費を掛けて東京から爰迄連れて來た女、譯も知らずに留立すりや、汝も只ぢやあ置かねえぞ。

甲作　いゝや、見ねえ顔は出來ねえ、折よく茲を通り掛り、助けてくれと頼まれりやあ、何處がどこ迄身に引受け、助けて遣らにやあならぬから、手籠な事は止しにしろ。

忠藏　さうして一體何處の奴だか、

義助　それから先へ言つてしまへ。

甲作　己あ甲州石和から、生業用で玉川の仲間の所へ行く者だが、草鞋が切れて吉野から連れにおくれて只一人、跡から爰へ來合せたは女中を助けて世渡りの、殺生をする鵜遣ひの、罪亡しをしろといふお祖師樣の引合せだ。

忠藏　それぢやあ汝は甲州の、石和近所の鵜遣ひか、生業用で玉川へ行くとあるなら早く行け、小癪な邪魔をしやあがると、生命がねえからさう思へ。

ト件の短刀を差附ける、甲作じろりと見遣り思入あつて、

甲作　東京邊りに住む者なら、そんな威しを恐れようが、此山國に住む者は夜路をすりやあ追ひ落しや、山犬位えは出樣と思ひ、用心棒の兼帶に折ぺしよつて來た此杖が、一本ありやあ盜人の一人や二人出樣とも怖れぬ度胸の甲州猿、梢を傳ふ早業が見たくば斬つて掛つて見ろ、己の體へ其刃が當らぬ内に二人共、手足の骨が叩き折れるぞ。

忠藏　いや御大層な事を言ふが、喰ふに困つて鵜を遣ひ、取らせた魚を引奪り、生業にするしがねえ奴、鳥の咽ならしほれ樣が、爰迄送つて喰頃と、覘つた女を手前達に、横取されて詰るものか。

義助　川の中から山中へ、塒に迷つて舞込んだ、鵜の眞似をする旅烏、早く何處ぞへ飛んで行け。

甲作　そんなら汝等は東京から、子供を連れた此女中を、送ると言つて山中へ引張り込だ護摩の灰、道中筋をぐれ歩き、人の難儀になる奴と知れちやお助けて置れねえ、打殺すから覺悟しろ。

忠藏　えゝ面倒だ、たゝんでしまへ。

義助　合點だ。

ト山颪凄みの合方へ山鳩をあしらひ、義助有合ふ天秤棒を取て打つてかゝる、甲作杖にて立廻り義助の腦天を打つ、是に恐れて義助下手へ逃げてはひる、忠藏短刀にて切つてかゝるを甲作杖にて受留め右の鳴物にて兩人立廻り宜しく、此内お崎徳太郎を圍ひ彼方是方と逃廻る、甲作忠藏の足を拂ふ、是にて忠藏たぢ〳〵と跡へ下り、上手の谷間の切穴へ落ちる。山颪烈しく甲作谷を見込み莞爾と思入、時の鐘、合方替り。

甲作　遙の谷へ落ちたからは、二人は此處へは登られめえ、はていゝ氣味であつたな。

お崎　思ひがけないお前樣のお陰で難儀を免れました、何とお禮を申しませうか、有難うござりまする。

徳太　坊も有難うございます。（ト辭儀をする。）

甲作　嚥怖かつたでございませう、然し大きな怪我をしたら、事によつたらそれ限に、死んだかも知れませねば、最う氣遣ひはござりませぬ。

お崎　男二人にかよわい女、どうする事も出來ませず、生きた心はござりませなんだ。

甲作　其御難儀はお察し申しまする。實は猿橋の立場から、千ケ寺參と連になり、鵜遣などゝいふ者は殺生な世渡故止めるがよいと異見をされ、生業用で行先の道も進まず峠まで、夜道を登つて來ましたが、お前さんの御難儀を救ふは此方のよい功德、是で少しは生業の罪亡しにもなりませうと、心嬉しく思ひます。

お崎　私とてもお前さまに、思ひがけなくお出逢ひ申し、危ない難儀を遁れたも、信心をする神々樣の、皆御利益でござりませう。

甲作　もう一足私が遲いと、今の奴等に手籠に逢ひ、危い事でござりました。

お崎　只今谷へ落ちましたは、私方に居りました、中年者の奉公人、斯いふ巧を致しましたも、實家の親父が甲府にて、九死一生の大病と僞飛脚にて知らせまして、送つて參る途中にて、手籠に仕ようと致しました。

甲作　そんなら今のはこなたの内の、奉公人でござりましたか。然し是から夜道をして、女の足で此峠

は、所詮向うへ越されませぬ。
お崎　親の病氣も僞りと、知れては遠い甲府迄、もう參るにも及びませねば、とてもの事に私共を參らし路の麓迄、お連れなされて下さりませ。
甲作　私は是から夜通しに、猿山峠を打越して一の宮迄行く者だが、さういふ譯なら八王子の、宿迄送つて進ぜませう。
お崎　左樣なされて下されば、親子二人が助かりまする。（ト此時本鐵砲の音する。）
徳太　あれえ。（ト徳太郎お崎に縋る、お崎もびつくりなし、）
お崎　え、氣味の惡い、今の音は。
甲作　あれは此處等の獵人が、鹿や猪を打つ鐵砲、怖い事はござりませぬ。
ト時の鐘、山颪し、日覆の月を引上げ舞臺暗くなる。
お崎　今迄有りし月影も。
甲作　霧に隱れて薄黑闇。
お崎　唯さへ怖い山の中。
甲作　名は小佛といふけれど。

お崎　地獄の樣な此の峠。
甲作　又もや鬼の、
お崎　來ぬ内に。
甲作　どれ、出掛けませうか。（ト立上る、此時後へ以前の義助出て、）
義助　先刻の返報。（ト組附を振りほどいて、）
甲作　目先の見えぬ。（ト杖で打据るを木のかしら、）山霧だなあ。
ト上を見る、義助は天窓を押へ下に居る、お崎は德太郎を圍ふ。此引張宜しく、時の鐘、山颪し早き合方にて、

ひやうし　幕

五幕目

大磯三五郎内の場
小田原相模屋の場
酒匂川熊藏殺の場

【役名━━船木賢三郎、月の輪の熊藏、化地藏の三五郎、船頭三八、探索方丹作、同島藏、藝者小松、三五郎女房おかく、其他。】

（三五郎内の場）━━本舞臺三間の間常足の二重、藁葺の庇、正面上の方一間の押入戸棚、眞中一間反

古襖障子、出這入あり、下の方鼠壁、ずつと上手一間の障子屋體、いつもの所竹簀戸の門口、此外正面葺下しの下屋、此前に生垣、二重の下の方軒口へ草履草鞋を釣し、駄菓子の箱を並べ、總て大磯宿女街内の體、門口に山駕籠を下し、下手の椽先きに駕籠舁箱根の八、同田丸の十、單衣脚絆草鞋掛にて腰をかけ居る、此見得馬士唄にて幕明く。

八　なんぼ取られる物がねえといつて、先刻から己ッちが斯うして見世へ來て居るのに、出て來ねえとは無用心な事だ。

十　受賣物を見世へ竝べて、商賣をするのはほんのぼく除、乞食がマッチやたはしを賣るのと、同じ理窟の山女街だ。

八　草鞋や駄菓子を盜まれても、僅二錢か一錢の賣物だから氣安からうが、此間から此方の内へ來て居る玉は素敵な代物、彼女を盜まれたら大變だらう。

十　東京から來て居るといふが、此大磯への里數と同じで、年も丁度十六七、人柄のいゝ新造ッ子は、何處から連れて來たのだか、何れ女街の喰物に賣られる娘に違えねえ。

八　そりやあ年中そんな事で、世を渡つて居る三五郎だ、高え聲ぢやあ言はれねえが、勾引して來た玉かも知れねえ。

十　何にしろ己達に、駕籠を持つて來てくれろと、先刻頼みによこしながら、見世に居ねえとは氣樂な人だ。

八　奥に居るだらう、呼んで見ろ。

十　おい、三五郎さん〳〵。（ト呼ぶ、正面の障子を明け女衒三五郎和裝にて出て來り、）

三五　おゝ八公か、未だ早へから出直して來て貰ひてえ。

八　いえどうせ今日は車流行で、駕籠屋は閑でござえますから、早くば見世で待ちませう、ゆつくり支度をなせえまし。

三五　いや日暮にならねえぢやあ、己の方の都合が悪い、見世で待つのも退屈だらうから、棒鼻へでも行つて來ねえ。

十　日暮方がいゝといふのは、葬式でもお出しなさるのか。

三五　えゝ、縁起の悪い事は言はねえものだ。

十　さうして何處へ暮方から、駕籠を遣るのでござえます。

三五　小田原の相模屋迄、送つて貰ひてえ物があるのだ。

八　それぢやあいよ〳〵あの玉を。

三五　何だと。
八　いえなに、急ぎでないなら棒鼻へ行き、時刻を計つて出直さう。
十　それぢやお駕籠は此儘に、此方の見世へ置いて行きます。
三五　邪魔なら其處へ置いて行きねえ。
八　とう〳〵今夜賣られるのか。
三五　えゝ。（ト聞き咎める。）
八　いえ、今夜の仕事を引當に、
十　立場で一杯飲んで來ます。（ト兩人下手へはひる。跡を見送つて）
三五　何でも當時は東京も上方者が流行ので、吉原はじめ根津品川何處の内でも西京や大阪廻りへ買出しに、出掛ける世界に山女衒も、旨え仕事にあがつたり、そこを一番氣を替へて東京種の上玉を、今景氣のいゝ小田原へはめる積りで出掛たが、面が良ければ直が高く、所詮生業した奴は此方の手には乘らねえと、生な地物を引攫ひ、此間から說付けれど、いやと頭を竪に振り相模女と事替り、東京育の箱入は、さて〳〵開けぬものだなあ。
ト忙しく思入、合方キッパリとなり、正面の障子を明け、三五郎女房お角結髪、和裝、序幕のお夏な

連て出る、三五郎此體を見て氣を替へ、態と腹の立つこなしにて、

三五　え丶義理も恩も知らねえ奴の、面を見るのも癪に障る、己の方にも仕樣があるから、奥の戸棚へ押込んで置け。

お角　あれさ、お前の樣にさうおこつては、纏まる話しも纏らないから、まあ私に任せてお置きっ（ト宜しく下に居て、）もしお夏さん、そんなに泣いてばつかりおいでゞは、良人やわたし迄が無理な事でも言ふ樣で、世間の手前もよく無いわけ、私は其場に居ないから委しい事は知らないが、お前が賴んで東京から旅へ出度いとお言ゆゑ、此大磯迄連れて來て、此間から内へ置けば、其入用の出所を、奉公にゆき償ふのは、こりや當然でござんすぞ。

お夏　いえ〳〵私や旅抔へ出度いとは申しませぬ、それを無理に連れて來たのでござりまする。

三五　なに、言はねえ事があるものか、犬ツころぢやアあるめえし、否だと言ふのを首ツ玉へ繩をつけて引張つてつれて來られるものぢやあねえ、賴む時にやあ手を合せ己に縋つて置ながら、此方の賴みが聞かれぬたあ、此樣分らぬ奴はねえ、それだから打捨らかして戸棚へ打込んで置けといふのだ。

お角　成程お前の言ふ通り、通し車で東京から此大磯迄連れて來るのは安い金では出來ない事、賴まれ

もせず醉狂に誰が連れて來ませうぞ。こりやお夏さん、今となり、頼まないとお言でも、其言譯は立つまいぞえ。

お夏　さあ頼んだと仰しやれば、頼みましたに致しても、それは宜しうござりますが、勤め奉公に出ますのは、何卒お免し下さいまし、通し車で東京からお連れなすつて入用の懸りましたは私も、心得て居りますれば、内へさへ歸りますれば、其お禮は致しまする、お世話序に東京の、内へお送り下さる樣、三五郎さんへお内儀さんから、お執成下さりませ。

お角　執成してくれとお言でも、どういふ譯で内の人へお前が頼んだ事だやら、委しい事を知らぬから、執成すといふ譯には行かぬ、内の人へ頼んで御覽。

お夏　もし三五郎さん、宅へさへ戻りますれば、どの樣にもきつとお禮は致しますから、何卒お慈悲に東京の内へ送つて下さいまし。

三五　そりやお近え所なら、お前の内へ連れて行つて禮を貰つて入費を埋め己も難場を防ぐけれど、何を言ふにも急場の事、そんな手のろい事は出來ねえ。

お夏　それではどうでも私しは、勤めに行かねばなりませぬか。（ト合方替つて、）

三五　昔と違つて此節は便利な汽車が出來て居れば、神奈川迄は鐵道の下等へ乘れば手輕だが、それも

お前が眩暈がして、否だと言ふから人力で、廿里足らずを急がせたから、なか〳〵安い金ぢやあねえ。其上斯うして据膳で此間から内へ置き、藥の世話や何や彼や、雜用雜費の金高は、ざつと積つて四五十圓、無駄な入費の懸損で、只さへ苦しい此暮しも、お前のお蔭で火の車廻り兼ねりやあ噂ァに迄、二本棒だと輕蔑れ、女に癡い己だから、年の行かねえ娘に迄、欺されたかと言はれるのが、實の所は悔しいから、ちつとの間小田原の樂な所へ奉公させ、それで凌ぎを付けるのだ、いやだと言あ仕方がねえ、逆さに釣して振つても鼻血の外は出めえから、五十圓といふ大金の穴は所詮埋らねえ、此間中東京へ出て居る内に讀んで見た、とんだ今日新聞だが、活膽を取り金にして入費の穴を埋るから、其氣で覺悟を仕やあがれ。（トきつとなつて立懸るを止め、）

お角　あれまあ短氣な待ちなさんせ、それでは此子が慨然ゆゑ、まあ〳〵私に任せておくれ。（ト宜しく下に居させ、思入あつて、）もしお夏さん、任俠強い内の人が、むきになつて腹を立つと無闇な事も仕兼ないから、強情張らずと少しの内、奉公に出ると極ておしまひ、そりやもう誰でも始めには、女郎の勤めに遣られるのは、身を切られるより辛いなど、思ひ違ひをして居れど、其又道へ這入つて見ると、いつそ氣樂な勤めの身、殊に今では何處にも、檢査場といふ物があれば惡い病を引受ける氣遣ひの無いのが安心、惡い事は言はないから、奉公に出ると極めておしまひ。」

ト言へどもお夏默つて泣いて居る。

三五　え丶、それ程に譯を言つても返事をしねえ強情女、ぐる〱巻にふん縛つて腹を裂くから覺悟しろ。（ト又立掛るを止めて、）

お角　あれまあ、私に任せなさんせ。

三五　出刃庖刀を研いで來るから、それ迄手前押へて居ろ。

ト お角に呑込せ、三五郎奥へはひる、お角跡を見送り思入あつて、

お角　鬼の女房に鬼神とやら、嘸私迄同じ様に、邪險な者と怖しく、お前思つてござんせうなあ。

お夏　さあ、それは。（ト思入、合方替つて、）

お角　私の亭主で言ふではないが、年中こんな事をして、世渡をする邪險な人、そんな心と知らずして、夫婦になつたが身の誤り、今更となり別れたいと此方の口から切出せば、殺し兼ねない悪黨故、餘儀なく私も斯して居れど、お前を傍から執成して助ける様にした所が、却て私しも倶々に難儀をせねばならぬから、今の様には言ふもの丶心の内のいとしさは、女子同士の世の人情、悪いと知つて連添ふも退に退れぬ夫婦中、爰の所を酌分けて否でもあらうが勤めに行き、直と先から郵便で内へ居所を知せて遣り迎を待つて戻るとも、先から逃げて戻るとも、そこはお前の勝手なれ

ど、所詮爰から逃しては私も難儀をする事故、見逃す譯にはならぬわいな。

ト奥を憚るこなし宜しく、お夏も思入あつて、

お夏　よう教へて下さりました、さういふ譯でございますなら、得心をして奉公に、參ると極るでござりませう。

お角　そんなら得心しておくれか、それでわたしも安心しました。

ト此時馬士唄になり、花道より前幕の熊藏、着流し三尺帶白足袋、尻端折草履にて菅笠を持出て來り、花道にて、

熊藏　何でも軒に草履草鞋が、釣してあると棒鼻の休んだ茶屋で教へたから、向うの内に違えはねえ、三五郎が居て呉れりやあいゝが。（下舞臺へ來り、門口より内を覗いて、）はい、御免なさい。

ト内へはひる。

お角　御道中のお客さん、お買物でございますか。

熊藏　いえ、買物ぢやあごぜえませんが、三五郎さんのお住居は、此方の内でごぜえますか。

お角　はい、此方でございますが、何方からおいでゞございます。

熊藏　私ちやア東京の熊藏といふ者だが、三五郎さんがお内なら、ちよつと逢はせて下せえまし。

トお夏是を聞き顏を上げ、

お夏　なに、東京のお方とな。（ト此方を見ろ、熊藏お夏を見て）

熊藏　おゝお前は日外のお孃さん、まだ此方の内に居なすつたか。

お角　そんなら此子を知つておいでのか。

熊藏　はい、枕橋の雨宿で、折よく此子に出合つた者さ。（ト爰へ奥より以前の三五郎出て來り熊藏を見て）

三五　聞いた聲だと思つたが、熊さん、よく出て來なすつた。

熊藏　おゝ三五郎さん、内に居たか、やつとのことで尋ねて來た。

三五　さあ〳〵此方へ上んなせえ。

熊藏　それぢやあ眞平御免なせえ。（ト二重へ上り、宜しく住ふ、お夏は始終氣味の惡きこなし）

お角　もし安心をしなさんせ、此子が得心したわいな。

三五　何だ得心をした、そいつは有難え、早く奥へ連れていつて、髮でも撫付けて遣るがいゝ。

熊藏　そんなら何處ぞに口があつて。

三五　何さ、小田原の樂な所へ、客分同樣安給金で、ちつとの間遣る積りだ。

熊藏　そりやあ何にしろ仕合せだ、賣物には花とやら、なりたけ直をよく賣れる樣に。

三五　えへん〳〵。（ト紛らすこなし、）

熊藏　なにさ、成丈見よくして、向うの氣に入る樣にしなせえ。

お角　そんならお夏さん、奥へおいで。

お夏　どうぞ此身も東京へ。

お角　はてまあ、私に任せてお置き、熊さんとやら、お話しなさい。

ト唄に成りお夏を無理に連れてお角奥へはひる、跡見送つて、

三五　何の川で出て來たか、今見る通りあの女子が、毎日〳〵泣いて居るので、己あ大きに持餘した。

熊藏　鶯かかじかならよく啼くのが直になるが、娘のメソ〳〵泣蟲には、持餘したのも尤もだ。然し是から女郎になり床へ廻つてあの玉が、すゝり泣でもした日にやあ、是等も隨分直打ものだ。

ト是よりまた合方替つて、

三五　いや、是から直打が出るかは知らぬが、あれから直に旅行の通し車で夜道を掛け、やつとの思ひで連込むと、其晩からの泣ツ面、擧句の果が血の道で飯も喰はずに寐て居るのを、欺し賺して藥を呑ませ、二三日跡にやう〳〵と餌付て枕が上つたから、それからそろ〳〵勸め出し、得心したのもたつた今、そこへお前が來るといふは始終の樣子を門口で、立聞でもして居た樣だ。

熊藏　實は己もあの娘を、お前が疾に何處ぞへはめ、旨え汁でも吸つてるだらうと、割を貰ひに出て來たが、今當人が得心してはめ込む所へ來合すとは、誂へ向のいゝ都合だ、さうして何處へはめ込むのか、其賣先の内が聞きてえ。

三五　箱根へ離宮が建つたので、錢廻りがよくいそがしく、小田原宿で流行見世の相模屋といふ貸座敷で、東京玉がほしいと言ふ所へ持込みはめるのだ。其家の内の内儀は、女に似合ぬ大ッ腹で、面せえよけりやあ親許の怪しい者でも構はずに、前借を貸し抱へるから、成丈直をよくはめる氣だ。

熊藏　小田原の相模屋とは、己の方にも當りがあるが、若し其家の内に東京から、稼ぎに來て居る女郎はねえか。

三五　外と違つて彼處の内は、東京者が七分だから、只東京とばかりでは、どれがお前の搜す女か、知れねえ程に玉揃ひだ。

熊藏　そういふ内なら己も行つて、どんな樣子か見度えものだ。

三五　幸ひ今の一件物を、其家へはめるにした所が、己獨ぢやあ親判に成人が無くつて不都合だ、兄の積りにごまかして、一緒に行つちやあくれめえか。

熊藏　どうせ此方も東京から、割を貰ひに來るからは、親判ぐれえは易い事、己で宜けりやあ行つて遣

らう。

三五　そいつあ何より有難え、ときに判を持つちやあ居めえの。

熊藏　察しの通り判などは、有所勝負の間に合せだ。（卜三五郎上手の戸棚より三文判を大分出して）

三五　どれでもいゝのを持つて行きねえ。

熊藏　よし〳〵、さすがは手前の内だ、三文判の貯へが澤山あるとは感心だ。

卜判を選り取り懐へ入れる、三五郎跡の判を戸棚へしまひ。

三五　それぢやあ己も支度を仕よう。

熊藏　そりやあいゝが分前を、幾等くれるか極めておかう。

三五　さうさ、只なら一割だが、判迄押させる事だから、張込んで二割遣らう。

熊藏　いや、二割とはあんまり少ねえ、二つ山とも言度えが、入費を掛けて居るだけに、四分六にして負けて置かう。

三五　いや、四分六ぢやあ己が合はねえ、それぢやあずつと張込んで、三割遣るから手を打ちねえ。

熊藏　さうして幾等にはめる積りだ。

三五　先東京の吉原なら、三本位のものはあるが、何を言つても宿場の事、一本半の見積りだ。

熊藏　一本半と見積れば、三割貰つて四十五圓、まあ其邊で負けて置かう。

三五　そりやあさうと肝腎の、玉がぐづ／＼仕ねえやうに、よく言聞せて置かにやあならぬ。

ト爰へ奥より以前のお角お夏に化粧をさせ連れて出て來り、

お角　得心しておとなしく、綺麗に化粧が出來ました。

熊藏　いや、素的滅法、綺麗々々、こいつあ三本が物はある。

三五　えへん／＼。（ト紛らすこなし、）

熊藏　なにさ、簪しの三本も立派に差させて遣りてえものだ。

三五　熊さん、お前も知つての通り、彼家の内の主人位え慈悲深え人はねえから、奉公人は仕合せだ。

熊藏　さうとも／＼、大仕合せだ、此子なんぞが行つた日にやお娘の様に可愛がり、勤め杯をさせるより、寧そ内の養女にすると、あの内儀さんが言ふかも知れぬ。

お角　身を捨てこそ浮む瀬と、さうなる時はお夏さんも、大仕合せでござんせう。

お夏　ほんに此方のお内儀さんにも、いかいお世話になりました、何れお禮は私が、内へ戻つた其上で、きつと致すでござりまう。

三五　いや、内へ戻るといふ事を向うの主人へ聞せると、氣まづくするから居る内は一生涯も居る積り

で、氣に入る樣に仕にやあならねえ。
熊藏　それ故お前は身許を隱し、此熊藏の妹だと、向うの主人へ言ふがいゝ。
お夏　えゝ、そんならあのお前さんの。（トびつくりこなし。）
三五　はあ、それが主人の氣に入る傳授だ。
お夏　はあゝゝ。（ト思はず泣出す。お角此體を見て）
お角　ても、可愛さうな。
熊藏
三五　やあ。
お角　いえ、可愛がられて奉公中は、樂をするのが其身の德。
熊藏　それが世にいふ、長え者には卷かれろだ。（ト下手より幕明の駕籠舁、八、十出て來り）
八　もう日暮方でごぜえますから。
十　時刻を計つて參りました。
三五　おゝ、丁度いゝ所だ、直に此子を遣つてくんねえ。
八
十　こいつあ愈々鑑定通りだ。
三五　なに、鑑定通りだとは。

八　いえ、大方出掛の時分だと。
十　鑑定を付けて參りました。
熊藏　さあ〳〵、早く駕籠へ乘んねえ。（トお夏を急立る。）
お夏　ても心細いことぢやなあ。
　ト此内駕籠舁二人門口の山駕籠を内へ入れる、お夏憂ひのこなしにて、駕籠へ乘る事宜しく。お角は奧より鎌と燧石を持つて出て、
お角　體を清めて上げるぞえ。（トお夏へ切火を打掛ける。）
三五　不斷に似合はず、よく氣が付いた。
熊藏　さすがは姉御だ、さあ駕籠を遣んねえ。
　ト駕籠舁兩人駕籠を舁上げる。此模樣馬士唄、時の鐘にて道具廻る。

（相模屋の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面跡へ下げて千本格子、女郎屋の前面、上の方九尺の入口、柱へ貸座敷の札を掛け、相模屋と記せし長暖簾を懸け、日覆より瓦庇二階家の張物を下し、下の方板羽目、塀の内より見越の松、此前に箱の用水桶、ずつと上下同じく板塀にて見切り、總て小田原宿女

郎屋表掛りの體、爰に床几を二脚並べ、上手に蘆原丹作、名和鳥藏羽折袴帽子を冠り、靴を穿き探索方のこしらへ、腰を掛け居る、下手の床几に若い者九介着流し下駄掛にて、腰をかけ、此見得宿場、騒ぎ唄にて道具留る。

九介　東京からのお掛りを、御同道でお出になつたは、何ぞお調べでござりまするか。

鳥藏　外ぢやあねえが此方の内に、此間から流連をして、遊んで居るものがあるさうだが、種はたしかに知れて居るか。

九介　いえ、此節では御承知の通り、書上の帳面が嚴重でござりますから、ちやんと身許を書記して、先日差出してござりまする。それに相違はござりません。（ト鳥藏懷中より手帳を出して見て、）

鳥藏　署へ書出してあるのには、山梨縣の郡内で織元の商人船木賢三郎としてあるが、十日も流して居るといひ、年齢から衣類の様子が、東京からの調べ者にどうか似寄つて居る様子だ。さうして金の遣ッ振は如何だ。

九介　へい、商人ではござりますが、何でも繭や米相場へ、手を出すお人と見えまして、金遣ひが綺麗でござります。

丹作　金遣ひがあらければ、いよ／＼それに違ひはねえが、さうして何ぞ話しの内に、東京からでも來

たといふ話しでもしやあしねえか。

九介　いえ、東京から來たといふ話は、別に致しませんが、藝者を上げて騷ぐ時、よく東京の芝居の話をしなさる樣子でござります。

丹作　して、其客へ出て居るのは、何といふ女郎だか、それを聞かせて置いてくれ。

九介　此方の内の一枚看板、お千代さんといふお職でござります。

丹作　初會で出たのか、以前からの馴染とでもいふ譯か。

九介　何でも以前は知合つた中でゞもござりましたか、初會の晩から大もてゞ、外の客へは出ないなどと、其お千代さんも大浮れで、勤め放れた持成が、屛風の内である樣子、あの手取者に掛つては、誰でも大概吸ひ取られます。

鳥藏　お千代といふのは此宿で、一二を爭ふ客取だが、たしか產れは東京だな。

九介　東京の下谷邊の元藝者だと申す事。（ト此内丹作は手帳を出して鉛筆にて宜しく書留め、）

丹作　それであらまし當りが付いた、二階に居るならそつくりして、僕等が調べに來た事は、本人始め相方にも知らさぬ樣にしてくれろ。

九介　いえ其お客は夕方から、海水の湯へ這入つて來ると、お部屋の女を連まして、海邊の溫泉へ行き

ました。

鳥藏　どうか此方へ歸ればよいが、逃られた日には不都合だ。

九介　いえ海水の溫泉同樣、首つ丈の熱い〳〵、歸るに違ひはございません。

ト此時騷唄キッパリとなり、上手より二幕目の船頭三八旅裝腹掛股引、草履にて竹の子笠を持出て來り、花道の方へ行懸けるを丹作見て、

丹作　おい〳〵、其處へ行くのは三八ぢやあねえか。（ト是にて三八振返り見て、）

三八　何方かと思ひましたら、蘆原さんでございましたか、變つた所で遇ひましたは、御用筋で此方の方へ、御出張でございましたか。

丹作　東京からの調べ者で、此方の方へ出て來たが、おめえは何處へ行つたのだ。

三八　道了樣から山越に湯場へ廻つて來ましたが、長く湯治も出來ませんから、塔の澤へ連を殘し、山から下つて參りました。

丹作　ときに、丁度いゝ所だ、おめえに日外聞いて置いた、强盜の一件で、實は此方へ出て來たが、見知人がほしい所、一晚位ゐの旅籠錢は、僕が持つから一緒に行き、目利をしてはくれまいか。

三八　さうして何處迄御一緒に、參りますのでございます。

鳥藏　直此海邊の溫泉まで、一緒に行つて貰ひたい。

三八　是から直に酒匂を越し、乘合馬車で大磯まで延します積りでござりますが、旅籠を奢つて下さるなら、何處へでも行きませう。（ト此内九介向ふを見て）

九介　いえ溫泉迄おいでゞなくとも、あれ〱向うへ其お客が、湯から歸つて參りました。

鳥藏　それは丁度幸ひだ、暖簾の内に隱れて居て、見て貰ふのが早手廻しだ。

丹作　それなら三八、御苦勞ながら、

三八　どれ、見知人になつて上げませう。

ト九介先に鳥藏、丹作、三八付いて暖簾の内へはひる。跡宿場の流行唄になり花道より二幕目の賢三郎、着流し白縮緬の兵兒帶下駄掛にて出る、跡より下女おとめ着流し前垂懸にて、浴衣を抱へ濡れた手拭を持付添ひ出て來り、花道にて、

賢三　開けた世とは言ひながら、小田原の宿の緣日へ、植木屋などが出て居るとは、東京まさりで感心だ。

お留　觀音樣へ御緣日は、此宿でも夜見世が出て、毎月賑かでございますから、古着市などが立ちまして、よい商ひを致します。

賢三　いや觀音の緣日に古着市は感心しねえ。

お留　そりやまたなぜでござります。

賢三　上這なぞは眞平だ。

お留　あれ旦那、御常談ばつかり。（ト右の唄にて舞臺へ來る、暖簾口より以前の九介出て、）

九介　旦那お歸りなさいまし、お湯は如何でござりました。

賢三　さすがは箱根の湯治場や、熱海へ近い土地だけあつて、湯の立派には驚いた。

お留　お千代さんが内の風呂へ、旦那と這入るをお樂みになすつておいでゞござりますのを、わざ〳〵外へお出になるとは、ちつと御邪險かと思はれます。

賢三　いや女抔と一緒に入ると、氣が詰つていかねえものだ。

お留　いえ旦那と御一緒では、お千代さんの其外は、女の方で氣が詰ります。

九介　はてな、そりやあなぜだ。

お留　居敷が大きうござりますから、極りが惡うござります。

九介　こいつあ一番女の地金だ。（ト爰へ上手の暖簾口より以前の三八出て、態と賢三郎の傍へ來て、）

三八　思ひ掛ない旦那樣、其節は有難うござりました。

賢三　や、お前は、(トびつくりして氣を替へ)終に見た事のない知らぬ人だが、何の禮を言ひなさるのだ。
三八　お忘れかは知りませんが、日外東京の三圍堤で、渡し場から向うへお越しなさる時、一圓札をお貰ひ申した、船頭でござります。
賢三　これ〳〵そりやあ何を言ふのだ、わしやあそんな法外の渡し錢などを、こなたに遣つた覺えは毛頭ござらぬから、それは大方人間違ひ、こなたの思ひ違ひであらう。
三八　いえ、夜目故大方旦那の方ではお見違へかは知りませんが、わたくしの方にはしつかりと見覺えがござります。
賢三　何處に覺えがあるかは知らぬが、廣い世界に似た者は、いくらもあるから氣の狹い、思ひ違ひはせぬものだ。
三八　此方に覺えがありましても、旦那の方で思ひ違ひと、お言ひなさればそれ迄だ。
お留　是が旦那にお貸しでもあるといふ譯ではなし、貰はぬ物を貰つたと、申しますならそれにして、お早く二階へいらつしやいまし。
賢三　遣らぬ物を遣つた顏で、いゝ氣になつて居る時は、もし本人が出た時に、腹を見られて恥入るから、正直にして置かねばならぬ。

九介　まあ兎も角も、二階へおいでなさいまし。
賢三　暖簾の内から出なすつたは、此方の内で知つた人か。
九介　いえ、左樣ではございません。
賢三　そんなら知らぬ船頭殿、よく又跡で考へなさい。
三八　どう考へてもお前さんに。
賢三　まだそんな事を言つて居るか。
九介　さあおいでなさいまし。
ト九介先に賢三郎お留上手暖簾の内へはひる、引違へて以前の鳥藏、丹作、出て來る。
三八　もし蘆原さん、あれに違ひはございません。
丹作　いくら向うで隱しても、其職掌の目から見れば、白い黑いは直に分る。
鳥藏　いよ〳〵あれと極つたからは、直に是から手當をして、今夜の内に召捕りませう。
三八　是で御用が濟みましたら、只今申した急ぎの道、お別れ申すと致しませう。
丹作　それぢやあ爰で手間取らせた、代りに馬車を急がせるから、馬車會社まで一緒に行かッし。
三八　それは何より有難い。

鳥藏　僕は是から署へ行つて、召捕る手筈をせねばならぬ。

丹作　それなら道まで御一緒に。

鳥藏　三八とやら、早く來さッし。

三八　どれ、お供を致しませう。（ト流行唄になり、三人花道へはひる、暖簾口より九介出て、）

九介　さあ〳〵、一つ心配が出來た、どんな客でも此節は、十錢宛の割花が通り相場の祝儀だが、五十錢宛くれたのは、織屋の主人に似合ねえ、器用な金の遣ひつぷりと、思つて居たが案の定、東京からの追込み者。こいつお今夜捕つたら、貰つた祝儀は禮の言損、吐出す事になるかも知れねえ。

ト此もやう騷ぎ唄にて道具廻る。

（相模屋部屋の場）――本舞臺三間の間跡へ下げて置舞臺程の二重を敷き詰め、此前を廊下の心、正面上の方一間中仕切のまゝ戸棚、上は二枚の鏡戸下ははめ込の簞笥、四引出、是に續いて眞中四尺の緣起棚、金具一式燈明を大分に照し、此下二枚引の襖下の方板羽目、是へ女郎の玉數を記せし名前の張出し、裾通りに菰冠の酒樽前に呑口受の桶あり、此脇に帳場格子、後に玉帳其外帳面を釣し、すつと上手廊下の片遠見、同じく下の方畫心に跡尻の心にて、一段高く襖の裏を見せ、總て相模屋部屋の

體。二重よき所に大ぶりの行燈を灯し、桐の大火鉢の脇に二階廻しのお繁、好の鬘着流しにて住ひ、下手に以前のお留住ひ、此見得矢張宿場の流行唄にて道具留る。

お留　お繁さん、何ぞ用でござんすか。

お繁　お前を呼んだは外ぢやあないが、あのお千代さんが出て居るお客は、甲州郡内で物持の織屋さんだと言つて居るが、泥坊かも知れないよ。

お留　あれお繁さん、氣味の惡い、そりやまあなぜでござんすえ。

お繁　あのお客には知らされないが、今方茲へ此宿の探索掛の鳥藏さんと、東京から來た探索方が調べにお出で、遣ひ方の樣子を聞いて歸つたが、お内儀さんがお留守故私が萬事を聞込んで、若しあのお客が泥坊だと、大騷ぎが始まるから、お前御苦勞だがお内儀さんを、迎へに行つて來ておくれ。

お留　道理で今方這入口で、見掛けた二人はお役向のお方の樣だと思ひました。それでは早速お内儀さんを、迎へに行つて呼んで來ませう。

お繁　さうして今夜もあのお客は、歸る樣子は無かつたかえ。

お留　どうして／＼歸ると言つても、お千代さんが放しませんから、聖天樣の煮凝で、放れつ子はありません。

お繁　聖天様だと思ふ内、不動様の金縛りに引縛られて行かうも知れぬ。

お留　どれ、わたしは觀音様へお迎へに行つて來よう。

トお留は下手へはひる、引違へて下手より以前の九介先に三五郎、熊藏お夏を連れて出て來り、

九介　もう程なくお内儀さんが、お歸りなさるであらうから、一服呑んで待つて居なさい。

三五　それではお歸りを待ちませう。お繁どん、お留守番かね。

お繁　三五郎さん、此間は久しく内へお見えでなかつた。

三五　東京から歸つて來てから、引續いて貧的に、つい當家へも御無沙汰をしました。おい熊さん、其子を連れて此方へ上り、一服やつて待ちなさい。

熊藏　左様なら、御免下さい。（ト恥しがるお夏を連れて二重へ上り下手へ住ひ、）これ〳〵妹、爰においでなさるお二人さんにも、今夜からお世話にならにやあならぬから、お近付になるがいゝ。

お夏　はい。（ト差俯向いて泣いて居る。）

九介　もし三五郎さん、此子はえ。

三五　昨日仲間の源六から、此方の内のお内儀さんへ、お話し申して置きました、是が東京から參りました、奉公人でござります。

九介　源六さんから話しのあつた、そんならこれが目見得の子か。
熊藏　さあ〳〵妹、爰へ出てお二人さんへ何分共に、お頼み申すとお願ひ申せ。
お夏　はい。（ト矢張默つて泣いて居る。）
お繁　おや〳〵、それではお前さんの妹ッ子でござりますか、失禮ながら兄さんには、少も似ないいゝ子だねえ。
九介　おい〳〵お繁どん、程の惡い、少しも似ないでいゝ子だとは、お前は惡いと言はぬばかり、そんなすつぱぬきは言はねえものだ。
お繁　おやまあ、わたしとした事が、兄さん堪忍して下さい。
三八　いえ惡いから惡いといふのは、噓で固めた家業柄の、是が樂屋の正直だ。
熊藏　えゝ、おめえまで惡い太鼓だ。（ト此時騷ぎ唄キッパリとなり、上手の廊下の口より娼妓お千代好みの島田髷仕掛裝にて上草履にて出て來り上手に立つて居ながら、）
千代　お繁どん、お內儀さんわえ。
お繁　觀音樣の御緣日へ、先刻お出でござりますが、何ぞ御用でござりますか。
千代　ちつとお話し申し度い事があつて。（ト宜しくこなし、熊藏お千代をよく〳〵見て、）

熊藏　おゝ違えねえ、爰に居たか。（ト此聲を聞きお千代思はず熊藏を見て、）

千代　や、お前は。（トびつくりして氣を替へ、）お歸りならば知せておくれ。

ト言捨て、ついと上手へはひる。熊藏いゝ所で逢つたといふ思入にて、

熊藏　今爰へ來た女郎衆は、何といふ名でごぜえますえ。

お繁　お千代さんと言ひまして、東京から來た流行ッ子、よく賣れるので玉高では、續く者はありません。（ト熊藏後の張出しを見て、）

熊藏　成程一番筆頭で、三束近くの玉を賣るとは、いや大層な流行方だ。

ト宜しく思入、三五郎是へ目を付ける。

九介　何にしろお上さんは、もうお歸りになりさうなものだ。

お繁　今お留どんをお迎へに遣つたから、程なく歸つてお出でおらう、ほんにお內儀さんが居ないと思つて、お客も取らずに寄部屋で、馬鹿ッ騷ぎをして居る樣子、憎まれ口を利いて來るから、三五郎さん御免なさい。（トお繁は草履を穿き上手へはひる。）

九介　どれ、此方も見世へ行かう。（ト下手へはひる、跡に三五郎思入あつて、）

三五　おい熊さん、おめえの先刻尋ねたのは、今爰へ來た女だらう。

熊藏　察しの通り爰へ來た、今の女郎は東京の、數寄屋町で新常磐屋の小松といつた藝者上り、あの女にやあ己もちつと因緣のある色男だ。

三五　これさ、いゝ加減に垂れねえか、二階廻しが聞いたなら、又すつぱぬきを言ふだらう。

熊藏　いや、是ればかりは噓ぢやあねえ、今に二階へ押上り、己の貫目を見せるから其時悔りしなさんな。

三五　そんな事より爰に居る、妹の判が肝腎だ。

お夏　どうぞお慈悲でございますから、妹の積になる事は、おゆるしなすつて下さいまし。

熊藏　何でそんなに厭がるか、爰のお職のあの女郎と因緣のある熊藏の、妹になりやあ仕合せだ。

お夏　いえ〳〵、どうぞそればかりは。

三五　えゝ、内で得心して來乍ら、否應言ふと聞かねえぞ。（トきつといふ。）

お夏　はあゝ。（ト泣伏す。）

熊藏　まあ兎も角もあの小松に。（ト立掛るを止めて、）

三八　これさ、そんなに。（ト下に居させるを道具替りの知らせ）急きなさんな。

ト此もやう宜しく騷ぎ唄にて道具廻る。

（奥座敷の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面上手一間の床の間、續いて地袋違ひ棚、下の方彩色畫の扇の地紙を散したる張壁、上の方畫心に九尺の櫺子窓、下の方折廻し塗骨の障子を建切り、ずつと下手一面の板羽目、爰に蒲鉾形の掛行燈總て相模屋二階奥座敷の體。上の方に屏風を建廻し、此内に夜具蒲團宜しく、よき所に燭臺を灯し、獅嚙火鉢の脇に、以前の賢三郎座蒲團を敷き住ひ、此傍にお千代住ひ前に臺の物、酒肴を並べ、下の方に藝者お汐、三味線を前へ置き、お磯、お浪兩人とも揚女郎にて住ひ、此見得さわぎ唄にて道具留る。

お磯　何だか今夜はお座敷が、陰氣になつて居りますから。

お浪　外の座敷に負けない樣に、陽氣に騷がうぢやござんせぬか。

お汐　角力甚句やかつぽれも、あんまり古うございますから、何ぞ旦那とお千代さんに、教へてお貰ひ申しながら、粹な端唄でも彈きませう。

賢三　さう又下駄を預けられちやお端唄の一つも遣る所だが、湯から上つて一杯遣り、睡氣がさしてならぬから、一寢入り遣つてから、後に陽氣に騷ぐとしよう。

千代　私も今夜は宵つから、頭痛がしてならないから、一旦爰を引にして、後に皆なで遊ぶと仕よう。

お磯　それではお酒やお肴は、此儘そつくりして置いて、後に上るとしなさんせ。

お浪　ほんにあんなに悪騒ぎに、一つ二階で騒がれては、頭痛持には難儀でござんすゝ

お汐　丁度其内御縁日へ、お參りをして來ますから、お目が覺めたらお千代さん、お呼びなすつて下さいまし。

千代　後に呼ぶからさうしておくれ。

賢三　そこで縁日を假託けて、いゝ人に逢ひに行くのか。

お汐　あれ旦那、いゝ人などはありませんよ。

お磯　いえ、お汐さんのいゝ人は、蛸に似て居る臺屋の息子の、新助さんでありますよ。

お汐　誰があんなひよつとこに、構ふ者がありますものか。

お浪　それでもあの新助さんの、鹽辛聲が粋だと言つて、此間褒めた癖に。

千代　小田原丈に鹽辛聲に、思ひ付いたのでござんせう。

お汐　お千代さん迄同じ樣に、たんとおいぢめなさいまし。

賢三　鹽辛聲なら蛸に似ねえで、烏賊に似て居さうなものだ。

お汐　あれ、旦那迄一緒になつて。

お磯　いぢめられても嬉しさうに。

お浪　莞爾笑つて居るくせに、

お汐　どれ〳〵早く逃げませう。(ト四邊を片付け三味線を持ち、) お千代さん、お大事になさい、旦那後程參りますよ。(ト騷ぎ唄にて三人下手の障子の内へはひる、跡見送つて賢三郎思入あつて、)

賢三　睡くもねえに宵ッから、睡いといつて彼奴等を、下へ遣つたは他ぢやあねえ、最浮々と此二階に、流連しては居られねえ。

千代　私もお前の鬱いで居るのは、譯ある事だと察したから、同じ樣に頭痛がすると、皆を下へ遣つたのだが、浮々として居られないとは、どういふ譯でありますえ。(ト是より替つた合方になり、)

賢三　此間から流連し、二階に計りかうして居るのも、體の爲に惡からうとお留を連れて海水の風呂へ這入つて戻つた時、此方の内の見世の前で、氣障な奴に出逢つたから、もう浮々としちやあ居られぬ。

千代　よく似た事もあるもので、私も今方下へ行き、思はず出合つた氣障な奴、それ故實は鬱いで居るが、さうしてお前が氣障な奴に見世の前で出逢つたとは、何者でござんすえ。

賢三　豫てお前に話した通り、己が小梅で仕事をして追手の懸るを遁れようと、心急しく別仕立の渡し船へ乘込んだが、生憎其の晩船賃の錢に小札を持合はさず、一圓札を船頭に氣張つて遣つたが身

の鑄で、其渡し場の船頭に見世の前で出會し、知らねえ面で別れたが、樣子を聞いて居たと見え、暖簾の陰から出た二人は顔を見知つた探索掛り、てつきり下の部屋へ來て己の身許や遣ひ方を調べて行つたに違えはねえ。

千代 そんならお前もあの晩に、渡を越して遁れたる其船頭にお出合ひか、わたしも丁度あの晩に、文三が川へ飛込んだを跡に見捨てゝ逃げる時、惡い尻尾を押へられた、熊藏といふごろん坊に、今方下で出合つたが、起りもしない空癪が差込むふりで藤澤で、私にまかれて悔しがり、居所を捜して此内へ文句を言ひに出て來たと、心付いては今の內どうか彼奴を言ひくるめる、工風を付けて追返し、巢替を仕ようと思ふのだが、さうしてお前は爰を逃げ何處へ高飛する氣だか、落着く先を言つてお聞かせ。

賢三 廿里隔つた小田原迄早くもヅキが廻つちやあ、街道筋はそれからそれ、もう手が廻つて居ようから是から相模の山越に間道傳ひで甲州の笹子峠の下へ出て、安泊りをして居ると聞く、髭の七兵衞といふ者は福松と云つた仕事仲間、それを便つて餘熱が冷める間は山の中に、當分隱れて居る積りだ。

千代 成程お前の言ふ通り、街道筋を行く時はヅキが廻つて危ないもの、間道傳ひに山を越し高飛するの

外は無い、さういふ事なら足弱でも、お前に苦勞は掛けないから、私も連れて逃げておくれな。

賢三　連れて逃げるは易い事だが、前借のある流行ッ子を、此儘攫つて逃げるのは、爰の内へ氣の毒だ。

千代　其氣遣ひのない樣に、自前同樣前借も仕込む時に輕くして、爰へ來てから主人方へ儲けさせて遣つてあるから、お部屋に損はありやあしない。

賢三　さういふ譯なら今の内、髮でも結んで置くがいゝ。

千代　お前と寐るので根が拔けて、毀れた積りで結んで置かう。

賢三　拔けると言へば山越に、馴れた夜旅の拔道も、

千代　女夫に差した簪の足柄山を横に見て、

賢三　下る難所の坂道は、がつくり島田のつゞら折、

千代　それも解いて搔上ぐる、箱根の山の玉櫛笥、

賢三　結ぶ清水も谷川へ、

千代　落ゆく流れを便宜となし、

賢三　富士の根方を廻りなば、

千代　甲州道の下街道、

賢三　茂る笹子へ身を隠し、
千代　互に苦勞をして見ようか。
賢三　それぢやあ早く支度をしろ。
千代　お前も其氣で待つておいで。（トお千代立上り下手へ行、此時下手より以前の熊藏出て來り、お千代に行合ふ、お千代顔を背けて行かうとするを、熊藏きつと捕へ）
熊藏　うぬ逃げようとて逃すものか、己と下迄うしやあがれ。（トお千代是を振拂ひ）
千代　逃隠れでもしやあしまいし、いけ騒々しい靜におし。何の用で下へ來たのか、私やあ今夜はお客があるから、お前に出ちやあ上げられない。
熊藏　いや己の樣な恩知ずを、態々買に來やあしねえ、文句があつて出て來たのだ、一緒に下へうしやあがれ。
千代　一緒に下迄行かないでも、わたしの出て居る座敷へ來て、何の用だか言ふがいゝ、お前に文句を言はれる樣な、此方に覺えは無い筈だ。
熊藏　何處の座敷か案内しろ。
千代　お客が居るから靜におし。

ト こちらへ歸つて下に居る。此内賢三郎は思入あつて上手の屏風の蔭へはひる、熊藏宜しく住ひ、誂への合方になり、

熊藏 それぢやお爰で打明けても、構はねえと言ふのだな。

千代 何をお前が言出すか、わだかまりの無い私だから、誰が聞かうと構やあしない。

熊藏 構はなけりやあ言つて聞かすが、よくも己を藤澤で癪の起つた振をして、疾からまく氣で居たと見え、わりやあ其侭逃げやあがつたな。

千代 そりやあ言はないでも知れた事、お前の樣な碌でなしに、こびり付いて歩かれては、私のうだつが揚らないから、體能く言つてまいたのは、厄介拂ひをした積りさ。

熊藏 さう又手前が色氣なしに、愛想盡しを言やあがりやあ、己が方でも愚癡らしく、氣障な文句は言はねえから、手前の惡事の口塞げに、たんまりとした禮をしろ、それで器用に別れて遣らう。

千代 おい／＼熊さん、寐惚けなさんな、私の惡事の口塞げに禮をしろとお言ひだが、お前の方からあの晩に、釣を出してもいゝ程な禮は十分してある筈、まだ其上に跡ねだりを仕ようなどゝは蟲がいい。お前も餘程押が強い。

熊藏 押が強いか知らねえが、惡い尻尾を押へられ、其口塞げに一晩でも、抱寐をさせりやあ己の持物

言はゞ手前の悪足に、千歳座でした死神同樣、何處がどこ迄付纏ひ、野郎を川へ飛込ませ指を差して笑つた樣に、其方が深みへはまる迄は、小遣錢でもいたぶつて取るのが此方の持前だ。それを夏蠅思ふなら纏めた金をあの晩に、口塞げに出しすつぱりと、手切話しにするがいゝ。さもねえうちは己の女、何奴の判で此内の抱へになつて居るのだか、それから先へ言つてしまへ。

千代　おやまあ大層情人ぶつて、臆面もなく明るい所で其樣聲色が遣へたものだ、銅鑼を鳴らして窓下を流して歩く聲色でも、月夜の晩には手拭で顏を隱して居る樣子、わたしも隨分東京で代り目毎に芝居は見たが、まだ松助の聲色で、そんな臺詞は聞かなんだ。

熊藏　えゝ大概にしやあがれ、女郎になつて不貞腐れ、抱寐をされた此己を、突出し者にしやあがりあ、汝の悪事を言立て鎖繋ぎの土器色、赤い仕着を着せて遣るから、樂みにして待つて居ろ。

千代　盗み泥坊でもしやあしめえし、人聞の悪い事を言ひなさんな、悪事々々と大業に凄みな事をお言ひだが、わたしやあ佃で土を擔ぐ、そんな科はしやあしない。

熊藏　なにしねえ事があるものか、オウライ藝者で商人の鼻毛の延びた客を引懸け、腹さん〴〵吸取つてもう取る金のねえ所から心中仕樣とだまくらかし、三圍堤へ連出して、文三を川へ突落し舌出三番の烏飛び、羽根を伸ばした人殺しは舌の劒の劒烏帽子、悪事の數も鈴成に振れば振る程音が出る

から、ぢだんだ踏まして遣らにやあならねえ。

千代　口上茶番を見る様な、そんな盡しも聞倦きた。然し私が默つて居ると、お前の様なわからずやは自分の體へ火の付くとも、知らずに頓馬を働くから、其譯道を聞かせて上げよう。

熊藏　己が體へ火が付くとは、可笑な事を言やあがる、何で頓馬を働くものか。

千代　頓馬で無けりやあ何で又、あの晩の事を言立るを、自分の科と知らないのだ。

熊藏　此方の惡事を言立てるに、己に科があるものか。

千代　そりやアあの時私に構はず、お前が直に訴へたら、其方に科はあるまいが、自由になつてくれたなら、口を拭いて默つて居様と、私に迫つて安泊りで、抱寐をすれば惡事の同類。

熊藏　やあ。(トぎつくり思入。)

千代　まだ耄碌をする程の、年でもないが熊藏さん、お前は蛙の頬冠で向うの見えない人だねえ。(ト是より合方きつばりとなり、)オウライ藝者の嚴しい風の吹く夜を横道に、曖昧茶屋の逢引は男も女も罰金の、律は元より覺悟の前、それも此方は勤めの身、轉んで只は起きぬといふ目當を付けて金滿の客を引掛け三味線の、枕も低い忍び駒、乙な音じめで浮氣にさせ、鼻毛を算で算段の出來る程だけ吸取るのは、三の絲より細胸でも、よりの掛つた娼法づく、擧句の果が義理詰で死んでくれ

ろと頼まれゝば、いやとも言はれず心中と出掛けた場所も向島、雪見に轉ぶ所までと古蹟に殘る石碑の、長命寺をも知りながら、死ぬといふのも馬鹿らしく、相手を先へ飛込ませ、大事な命を捨てないのは、世間でよく言ふ自由の權、そこへ付込み横合から氣障にからんだ無心物、一晩位ゐ貸したとて跡の減らない代物と死んだ積りで抱寐をさせ、口を塞げばあの時の、惡事は同じ兇狀持、相手によれば一晩で五十圓取る腕前で、二の膳までを振舞へば禮は餘つて歸るから、小遣錢でも持つて居るなら、其方で置いて行くがいゝ。（ト宜しくこなし、熊藏呆れし思入にて、）

熊藏　いや、どう言へば斯う言ふと、惡垂女の本音を吹き、素的な御託を吐きやあがりやあ、己も色氣と欲を捨て、是から下で掛合込み、元の主人の常磐屋へそびいて行くから覺悟しろ。

千代　連れて行くなら行くがいゝ、數寄屋町の新常磐屋に抱になつて居た時分、鼻毛の延びた宿六が口說を幸ひ前借を、踏む氣で自由にさせたから、旅から旅を喰詰めたら、此方で無心に行く積りさ。

熊藏　そんなら彼處の抱へ主にも、一目押せて置きやあがつたか。

千代　藝者になる前それからそれ、旅を遊んで歩いても錢に困れば旅人の、女に懸つてのろさうな、相手を見立て連になり、枕捜しや護摩の灰小盜みゆすり奪掠りと、さんざ惡さを仕拔いて來たおいらに向つてお前達が、凄みな文句は無駄な事、高が惡事の提灯持、小田原だけに相談は纏まる筈はあ

りやあしない。

熊藏　えゝ仕様のねえ尼女だ、まだ此外に聞込んだ悪事の種は屏風の内、今に泣面かわかせる仕様があるから待つて居ろ。（ト立上つて下手へ行掛る、此時上手の屏風の蔭より賢三郎出て、）

賢三　おゝ、熊さんとやら、ちよつと待ちねえ。（ト前へ出て住ふ、熊藏元の所へ住ひ、）

熊藏　旦那、真平御免なせえ、お聞の通り不貞腐れの悪垂女の言草に、お客の居るのを知りながら、つい聲高になりました。

賢三　私もうと／＼寐て居たから、委い事は知らないが、それぢやあお前は東京から態々尋ねてござつたのか。

熊藏　へい東京の淺草邊を、ごろ付いて歩きます、月の輪の熊といふ遊人でござえます。

千代　奥山の花屋敷で、よく見世物に買はなんだね。

熊藏　えゝ人を馬鹿にしやあがるな。（ト賢三郎紙に包みし札を出し、）

賢三　今言ふ通り夢幻で、委い譯は知らないが、旅費を遣つて東京から態々尋ねて來た者を、此儘歸すも氣の毒だ。わしもお千代の客になり、爰に居たのが身の不祥、車の錢を上げようから、苦笑つて歸んなせえ。

熊藏　車の鍵を下さるとは、そりやあ有難うございます。
賢三　お千代、是を遣つてくれ。(ト札を出す。)
千代　飛だ御散財を掛けまして、お氣の毒でなりません。是を持つて早く歸んな。

ト投げて遣る、熊藏開き見て、

熊藏　旦那、こりやあ五圓ござりますね。
賢三　五圓あつたら東京迄、通し車で行かれるだらう。
熊藏　仰しやる通り五圓あれば、一杯呑んで歸られますが、それに就てお前さんのお名前が聞き度えものだ。
千代　遊びの場所で野暮らしい、名前は何うでもいゝぢやあないか。
賢三　いや／＼名前が聞き度くば、何も隱すに及ばぬ事だ、私やあ船木賢三郎といふ甲州郡内の織屋の主人だ。
熊藏　此間から十日程、流連をしておいでなさる客といふのはお前さんか。
賢三　何でそれを尋ねなさるか、商法上の都合により、長逗留をしてゐるのだ。
熊藏　それぢやあ五圓の車賃は、其方へお返し申します。(ト投返す。)

千代　何が不足で返すのか、入らない札なら一圓でも、誰が無理に遣るものか。

熊藏　是が眞面目な客ならば、假令五圓が一圓でも禮を言つて貰つて行くが、向う越の船賃に、一圓遣つたといふ旦那。

賢三　やあ。（トぎつくり思入。）

熊藏　然も其晩小梅の土橋で、人も知つたる金満家、淺草東仲町の渥美巳之右衞門といふ金貸が抵當に取つた寮が賣れ、五百圓といふ金圓を請取り歸る途中に待つて、手疵を負はせて威しかけ、金をそつくり捲上げた賊があつたといふ事は、さつき此家へ來る道で、三八といふ船頭に出合つて話に聞いて來た、此相模屋に十日程流連をして居る客が、一圓といふ船賃をくれた旦那に違えねえと、私に敎へて行きましたが、何と大きな仕事をする、賊もあるぢやあごぜえませんか。

賢三　それぢやあ己が船頭から、聞いた賊だといふのだな。

熊藏　途中で今方聞いた話しを證據に賊だと言ひますのも、捕め所のねえ譯で、慥にそれとは言はれねえが、枕さがしや護摩の灰小盜みゆすり掠奪り、惡い事なら仕拔いたといふ惡垂者の此小松を、相方にして流連し、惡婆の本音を聞きながら愛想の盡きた樣子もねえ、切放れのいゝ扱ひは、堅氣な者には出來ねえ事、旦那も唯の鼠でねえと早くも悟つた熊藏の、白眼だ眼におたちはねえ、

渡しを越した船賃に一圓遣つた相場ぢやあ、東京迄の車賃に五圓はあんまり相場違えだ。

千代　おい熊さん、何をいふのだ、背負はうと言へば抱からうと、旦那のお慈悲で車賃を恵んで遣ると仰しやれば、甘い詞に付上り、強請る事にも品を替へ〳〵おつに蔓んだ言懸り、大事なお客に難癖を付けると知つては旦那より、私が料簡ならないから、一緒に下へ行くがいゝ。

熊藏　これさ、其樣に白張ッくれるな、旦那もお前も知るめえが、下は疾くに手が廻り、探索掛が部屋へ來て調べを付けて行つたとやら、聞いて二階へ上つたは、己も一番金の蔓五圓の金を十倍増し五十圓にもしてくれたら、下の奴等を誤魔かして、爰を逃して遣る氣だが、さもねえ時は己が先立ち、爰の二階は逃さねえから、其氣で覺悟をさせて置け。

千代　覺えもないに何で又、そんな馬鹿げた大金を、旦那がお前に遣られるものか。

熊藏　それぢやあ旦那下へ行つて、饒舌り立てもよからうか。

賢三　むゝ。（ト思入。）

千代　ほんに旦那も氣の弱い、心配するには及びません。（ト爰へ下手より以前の三五郎出て來り熊藏を見て、）

三五　おゝ熊さん、其處に居たか、ちよつと顔を貸してくんねえ。

熊藏　おい〳〵、何ぞ急な用か。（ト下手へ來る。）

三五　今内儀さんが歸つて來て、直に話しが極つたから、ちよつと下へ來てくんねえ

熊藏　さうして幾等と相場が極つた。

三五　年は五年で前借は、百五十圓と相場が極つた。

熊藏　そいつあいゝ、直に極つたが、今此方にも相談があつて、極りを付けて居る所だ、ちつとの間待つてくんねえ。

三五　どんな相談か知らねえが、お前も三割わりが取れ、四十五圓になる事だ、善は急げだ一緒に行きねえ。

熊藏　そりやあ己も承知だが、別に手間取る譯ぢやあねえから、ちつとの間待つてくれ。

三五　えゝ、極りでビリにこだはつて、愚圖々々されちやあ己が困る。

熊藏　誰がビリにこだはるものか。

三五　そんなら早く、來てくんねえ。

熊藏　直に行くから待ちなといふに。　ト兩人爭ひ居る、此内賢三郎お千代に囁やく事宜しく、ばた〱になり、下手より以前のお繁出て、

お繁　もし〱三五郎さん、大變が出來ました。

三五　なに、大變が出來たとは。

お繁　あの子が手水にいつたぎり歸つて來ぬから變だと思ひ、尋ねて見たら庭口の門が明いて刎橋が、內から下してあるからは、何でも逃げたに違ひない。

熊藏　何だ、娘が逃出した。

三五　成程そいつア大變だ、是といふのも熊さんが、二階へ上つて下りねえから、さがしに來たので逃したのだ。

熊藏　おれをそんなに捜さねえでも、逃げ隱れもしやあしねえ。

お繁　其爭ひは跡にして、早く行つて捜して下さい。

三五　逃した日にやあ玉なしだ。（ト三五郎先にお繁付いて下手へはひろ。熊藏思入あつて此方へ歸り）

熊藏　大事な玉は逃しても、己が見込んだ賢三さん、こんたは滅多に逃されねえが、今の返事はどうしなさる。

賢三　望みの通り五十圓、器用に出してやらうから、混雜紛れに此二階を、己が無難に逃げる樣に下拵へをしてくれろ。

熊藏　金せえ貰やあ己も又、其處は男の達引だ、娘を捜すと誤魔かして、裏手の口を明けて置くから、

其處からこつそり逃げなせえ。（ト此内お千代屏風の蔭より札の包みを持て出て）

千代　それでは是を遣りますよ。

賢三　こいつを緣に又其内、廻り合つたら禮をするから、それぢやあ手筈をしてくんねえ。

ト熊藏件の札を受取り改め見て、

熊藏　己より上手な惡黨だけ、切放れのいゝ五十圓、是で爰を逃げられりやあ、其方も仕合せ兩爲だ。

ト札を懷へ入れる。

千代　熊さん、都合が直つたら、二階で遊んで行かないか。

熊藏　お前の本音が分つちやあ、此二階ぢやあ遊ばれねえ。

賢三　さうして是から熊さんには、直に東京へ歸る氣か。

熊藏　逃げた娘を搜し出し、もう一儲けやらかして、湯治場へでも行つて見よう。

賢三　それなら今の一條は、うまく趣向をしてくんねえ。

熊藏　裏の出口を明けて置くから、透を覘つて逃げなせえ。

千代　あの子が逃げた混雜が、此方の爲にはいゝかも知れねえ。

熊藏　其方の爲にはよからうが、知れねえ日にやあ此方の損だ。

賢三　高が娘の足弱ぢやあ、知れねえ事はありやあしめえ。
熊藏　どれ己も行つて捜して來よう。
千代　熊さん、きつと頼んだよ。
熊藏　そこは己だ、如在はねえわな。（ト熊藏下手へはひる、跡見送りて、）
賢三　お前と一緒に逃げようと、約束したが斯うなつちやあ、今夜連れちやあ逃げられねえ。
千代　落着く先さへ知れて居れば、跡から逃げて追付くから、其氣で待つて居ておくれ。
賢三　落着く先は今言つた笹子峠の下に居る、七兵衞といふ安泊だ。
千代　それはいゝが路用の金の、先立つ所へ五十圓、彼奴に取られて悔しいねえ。
賢三　何さ、彼奴に遣つたのは、少時の間預けたのだ。
千代　それぢやあ直に取返す氣で、
賢三　娘を捜しに出ると聞けば、裏からこつそり脱出して、彼奴の跡を付て行き何處ぞで直に殺す氣だ。
　　ト此時雨の音になり、お千代上手の窓より外を見て、
千代　おや。殺すといふ口の下から、雨がばら〱降つて來た。
賢三　彼奴を殺すに幸ひな、丁度今夜の俄雨。

千代　道は大方濡るみだらうが、ぬからぬ様にしておくれ。

賢三　どれ、熊藏の跡を付け、裏からこつそり抜けようか。（ト立上る。お千代は是を止めて、）

千代　もし、それぢやあきつと待つておくれよ。

賢三　待つて居ねえでどうするものか。

千代　浮氣をするなと、（ト背中を叩くを道具替りの知せ、）聞きやあしないよ。

ト此模様雨の音、合方、時の鐘にて道具廻る。

酒匂川原の場。——本舞臺一面の平舞臺、向う酒匂川の河原の遠見、裾通りへ蛇籠を並べ、よき所に榛の立木、上の方に葭簀の小屋、ずつと上下植込の張物にて見切り、諸所に腰を掛ける程の捨石あり、爰に女郎買の仕出し〇△□の三人上手の小屋の下へはひり雨宿りをして居る、此模様水の音、雨車にて道具留る。

〇　女郎買に行く道で、俄雨に出會すとは、こいつは今夜は程が悪い。

△　途中で降られて向うへ行き、今夜女郎に振られりやあ、三人共に立つ目はない。

□　さう又頓馬に行く時は、傘を持つて居ない代りに、瘡でも背負つて歸るが落だ。

○丁度明日が検査日だから、今夜はうつかり旅女郎の、初會などには揚られねえ。
△さうかと言つて馴染の見世へは、借があつて揚られぬから、いつそ女郎買はやめにしよう。
□雨が止んだら女郎買も、止めにして内へ歸るが、爰迄來ちやあ歸られねえ。
○それぢやあやつぱり小降の内、濡れる覺悟で宿へ行き、
△どこぞ毛並のよささうな、内を覘つて初會で揚らう。」
□爰等がいゝふりの客人で、ずつぷり雨に濡事師だ。
○兎角言ふ内小降になつた。
△又大降のしねえ内に、
□一ツ走りに遣つけよう。
三人 それがいゝ〳〵。(卜右の鳴物にて、三人は花道へはひろ、跡誂への合方になり花道より以前の熊藏白張の番傘をさし、安下駄を穿き出て來り、花道にて、)
熊藏 娘を捜しに出たはいゝが、思ひがけねえ俄雨で、傘と下駄を散財だ。是で行方が知れねえ日にやあ、四十五圓になる玉を、棒に振つてしまふのだが、まだしも二階で賢三といふ、旨え奴に出逢つたので、いたぶり取つた五十圓、こいつがありやあ東京から、わざ〳〵出て來た中費もあり先

づ當分は湯治場でおつな遊びが出來るといふもの。まあ兎も角も河原へ行つて娘の行方を捜して見よう。（ト舞臺へ來る、此時花道揚幕の内にて、）

賢三　おゝい熊さん、ちよつと待ちねえ。

トばた〳〵になり以前の賢三郎頰冠り尻端折り跣足にて追駈け出て、舞臺へ來る、熊藏振返り見て、

熊藏　己を呼ぶのは誰だ〳〵。

賢三　熊さん己だ、賢三郎だ。

熊藏　おゝ賢三さんか、裏口から首尾よく拔けて來なすつたか。

賢三　お前が庭の門を明け、娘を尋ねに出た跡を、覘つて脫出し裏傳ひに、小橋迄來て隱れて居たが、大層此方は手間取つたな。

熊藏　お前を逃して遣らうばつかり、出ずともいゝに庭口から、態と裏手へ飛出したが、降出す雨が止まねえから、表へ廻つて下駄と傘を買つて爰まで捜しに來たが、呼掛けたのは何ぞ用かえ。

賢三　お前を呼んだは外ぢやあねえ、今方遣つた五十圓はちつと此方に入用だ、そつくり返して貰ひてえ。（ト是より誂への合方になり、）

熊藏　大方そんな事だらうが、一旦遣つた物を取返すのは、子供でせえ返し泥坊になると言へば、何ぼ

強盜のお前でも、大惡黨にも似合ねえ、こけ未練な事を云ひなさんな。

賢三　いや、金ばかり取返し、未練な奴と言はれぬ爲め、命も序に取るのだから、文句を云はずに覺悟しろ。

熊藏　それぢやあ惡事を知られた故、お前は己を殺す氣か。

賢三　そりやあ云はずと知れた事、手前の樣なびいつくに、己の惡事を知られたとて、五十圓といふ金を器用に渡す氣はねえが、づきが廻つてあの二階で、かれこれするも面倒と、ふける手筈の先馬に使つて置いて其金を、悉皆此方へ取返す、積りで預けて置いたのだ。

熊藏　道理で器用な出し方だと、己も不思議に思つたが、子供だましを見る樣な、小刀細工は止しにしろ、手前の目からは熊藏を見下げて居るか知らねえが、小皿博奕や淫賣の尻尾を押へてねだり込むけちな野郎のごろ付とは譯の違つた兄い株、兇器を持つて強盜を働らく程の奴だから、安直に負けて五百圓の一割稅で五十圓、上納させて遣つたのを、其運上が惜しくなり、未練な眞似をしやあがると、己の命を取らねえ先、手前の命がなくなるから、其氣で手向ひしやあがれ。

賢三　降出す雨に水が增し、河原の幅が廣がるから、手前も大きな御託を吐き、爰で往生するもいゝが高の知れたる破落戸が、己の惡事の上前を取らうなどゝはふざけた奴、併し所も都路の蛙なくな

小田原で、口故其身を果すのも、人間僅かの定命に、員數の合つた五十圓、濡手で粟と思つたのが、榮華の夢の見納めよ、早瀬の水に押流され、魚の餌食にならうとも、洒落た小石と一座をして、死んだ骨迄ごろ付くとも勝手次第に此河原で、迷はず往生しやあがれ。

熊藏　づきが廻つて其首が、細つて居ながら太々しく、己の命を取らうとは、盆の見えねえ獸め、取られるものなら取つて見ろ。

賢三　網の魚でも鰐鮫が、見込んだ鰯の小野郎め、只一吞だ覺悟しろ。

ト懷より短刀を出して切つて掛る、熊藏是を傘にて受止め、

熊藏　えゝふざけた事を吐かしやあがるな。

ト是より水の音誂への合方になり、兩人傘と白刃の立廻り宜しくあつて、トゞ熊藏肩先を切られ糊紅になり、小石を取つて打付けながら逃に掛るを、賢三郎追詰めて引戻し立廻り、白刃にて熊藏の脇腹を刳る、熊藏立身にて苦しみ、ばつたり落入る、賢三郎白刃を拭ひ鞘へ納め、四邊を見廻し思入あつて、

賢三　見掛によらねえ手強い奴、大骨を折らしやあがつた、先刻の金を取返し、水葬禮にして遣らうか。

ト熊藏の懷より以前の札を探り出し、懷中して死骸を後の川へ打込む、是にて水の音、賢三郎流れの水にて手を洗ひ居る、此時早き合方はた〳〵になり、花道より以前のお夏、手拭を冠り跣足にて走り

出て來り、舞臺にて小石に躓きばつたり轉ぶ、賢三郎びつくりして是を見遣り、

そこへ來たのは、お千代ぢやあねえか。

お夏　いえ、左樣ではござりませぬ、何れのお方か存じませぬが、跡より追手の掛る者、お助けなされて下さりませ。（トおど／＼して跡を見返り居る、賢三郎お夏をよく／＼見て、）

賢三　見りやあ年端の行かねえ娘、跡より追手がかゝるとは、若しや今方話しのあつた小田原の相模屋から、逃出したといふ子ぢやあねえか。

お夏　えゝ、どうしてそれをお前樣が。（トびつくりこなし。）

賢三　丁度二階に居合せて、噂に聞いて知つて居るが、そんなら其子に違えねえか。

お夏　何をお隱し申しませう、惡者の爲に東京から勾引されて參りまして、今日小田原の相模屋へ女郎に賣られる悲しさに、手水に參る振をして裏の庭から逃げましたが、何處へ行くにも勝手は知れず、裏道傳ひにやう／＼と爰迄遁れて參りましたが、跡より追手がかゝりませうから、どうぞお慈悲に私を、お助けなされて下さりませ。

賢三　大方そんな事だらうと、俺も二階で話しを聞き、早くもそれと悟つたが、さうしてお前は東京の、何處の產れで何者の、娘かそれを言ひなせえ。

お夏　はい、私は淺草の、東仲町の產れにて、渥美巳之右衞門と申す者の娘で、夏と申しまする。
賢三　えゝそれならお前は金滿家の、渥美さんの娘だとか。
お夏　はい、あなたは御存じでござりまするか。
賢三　いえ、内へ行つた事はないが、あの近所での金持だと、人の噂に聞いて居る。
お夏　さういふお方でござりますなら、どうぞお慈悲に私を、お助けなされて下さりませ、内へ戻れば
どの様にも、御恩返しは致しまする。（ト是にて賢三郎思入あつて、）
賢三　爰で此子を助ければ、手疵を負はせた罪亡し。
お夏　えゝ、何とおつしやりまする。
賢三　いやさ、私は年中德を積み、人の難儀を救ふのを、樂みにする位だから、身に引受けて助けてや
る。それは安心するがいゝが、さうしてお前の父さんは、達者で内に居なさるか。
お夏　はい、先日内を出ました時迄、達者で居りましてござりまする。
賢三　さうしてお前が内を出たは、何日の事だかそれが聞きたい。
お夏　はい、先月の十七日に觀音様へ參りまして、戻りにちよつと向島へ廻りませうと枕橋で、俄雨に
逢ひまして、それが難儀の初めにて、勾引されてござりまする。

賢三　それぢやあ先月十七日に。（ト思入あつて、）成程、安否を知らぬ筈だ。

お夏　え、。

賢三　何さ、もう半月にもなつて居るから、親の安否は分るまい。

お夏　それゆゑどうぞ東京へ、お連れなされて下さりませ、父さんに此由を、申しきかせて御恩返しは、きつと致すでござりませう。（ト賢三郎思入あつて、）

賢三　是がたづねの身で無くば、いやさ、是が旅先の事でなくば、頼みの通り東京へ、直にもおくつて遣り度いが、甲州へゆく商法用、おくつて遣るにも遣られぬわけだ。

お夏　あなたにお別れ申しまして、しらぬ夜道を参りますと、またも途中で悪漢に出合つて憂目を見ませうから、何卒お慈悲に旦那様、お助けなされて下さりませ。

賢三　遠い難所の甲州へ、廻つてよくば連れて行き、商法用を達した上、きつと送つて東京の、此方の内へ帰して遣らう。

お夏　そりやもう御無理に願ひまして、お縋り申す程なれば、どんな難所でござりませうと、それに厭ひはござりませぬ。

賢三　日数の掛るを承知なら、きつと無難に東京の内へ送つて遣りませう。

お夏　それでやう〳〵わたくしも、安心致してござりまする。

ト爰へ下手より、以前の三五郎安下駄を穿き出て來り、お夏を透し見て、

三五　や、其處に居るのは、お夏だな。（ト此聲を聞きびつくりして、）

お夏　あれ旦那樣、勾引が、（ト賢三郎の後ろへ隱れる、賢三郎三五郎を支へて、）

賢三　己の身寄の此娘、指でも差したら免さねえぞ。（ト三五郎賢三郎をよく〳〵見て、）

三五　や、己は先刻の賢三とやら、入らぬ邪魔立てしやあがるな。

賢三　それ知られたら、もう是迄。

三五　娘を此方へ渡しやあがれ。（ト是より水の音になり、兩人ちよつと立廻り、賢三郎三五郎を後の川へ打込む
是にて水の音、お夏前へ出て此體を見て、）

お夏　てもよい氣味でござりまする。

賢三　惡の報いは、（ト莞爾笑ふを木のかしら、）こんなものだ。

ト此模樣水の音、本釣鐘の送りにて宜しく、

ひやうし　　幕

六幕目

笹子前一里塚の場
峠下安泊笹屋の場

【役名――船木賢三郎、穂積文三、根津忠藏、安泊髭の七兵衛、道具屋吾市、古着屋十兵衛。賢三郎女房お千代、文三女房お崎等。】

(笹子手前の場)――本舞臺一面の平舞臺、眞中より上寄りに榎の大樹、腰を掛ける程に根株の切口、下手に同じく根株の切口、上下藪疊。後在體の遠見、日覆より同じく榎の釣枝、總て甲州街道笹子手前の體。爰に序幕の道具屋吾市、古着屋十兵衛、半合羽脚絆草鞋、背に商ひの荷を肩へ掛け居る、下手に駕籠舁○△二人半纏草鞋にて山駕籠を傍に置き駕籠を勧めて居る、此見得馬士唄にて幕明く。

○ もし旦那、極く安く參りますから、峠を乘つて下さいまし。

△ 今日は朝からあぶれまして、未だ口明でござりますから、いくらかくらは申しませぬ。

吾助 さつきから言ふ通り、身延山へお參り申すに、馬や駕籠に乘つて行つては信心にならぬから、

十兵 いくらお前達が勧めても、己達二人は乘らねえから、口を利くだけ無駄な話しだ。

○ そんな事を仰しやらずと、御信心參りのことだから、駕籠に乘つて下さりますりやあ、

△ 二人の者が助かつて、どんな御功德になりますかしれませぬ。

吾助 そりやあさうでもあらうけれど、抑々内を出る時から、五十里近い身延山へ歩いてお參り申すの

十兵　が、御祖師樣への御奉公だ。

十兵　就ては二人も商人故、無駄な錢は五厘でも遣はぬ大のしまり店、所詮話しに成らないから、思切つて行きなせえ。

○　さう仰しやれば仕方がねえ、此方も錢が欲しいから、口を酸くしてお勸め申すが、いやだとあれば仕方がねえ。

△　此頃峠へ狼が、時折出掛けて旅人を喰ふから、歩いておいでなさるなら、氣を付けておいでなせえ。

吾市　それぢやあ峠へ狼が出て、時折旅人を喰ひますとか、そいつあ氣味の惡い話だ。

十兵　どうで難所で草臥れるから、杖を買つて煙草の火に、火繩を付けて持つて行けば、決して喰はれる事はない。

○　まあ喰れるか喰れねえか、峠へ登つて見るがいゝ。

△　一文惜しみの百損といふ古い譬がありますぜ。

吾市　假令狼が出ようとも、首に掛けてる此珠數で、方便品を唱へれば、

十兵　そこは御祖師樣の御利益で、喰れる樣な事はない。

○ 今日の様な間の悪い、仕事の出來ねえことはねえ。
△ 緣起直しに一杯遣らう。（ト馬士唄にて、兩人駕籠を擔ぎ下手へはひる。）
吾市 今の駕籠屋が言ふ樣に、狼が峠へ出ようか。
十兵 二人を駕籠に乘せようと、威しに出ると言つたのだらう。
ト又右の鳴物にて上手より四幕目の忠藏以前の裝、脚絆草鞋笠を冠り、杖に縋り足を引出て來り。
忠藏 足の病に平地と違ひ、山坂道で草臥た。どれ一休みして行かうか。（ト立留る、兩人見て）
吾市 や、お前は下谷茅町の、
十兵 穗積の若い衆忠藏殿か。
忠藏 これは道具屋の吾市さんに、古着屋の十兵衞さん、何處へおいでなさります。
吾市 二人共に法華宗故、身延山の御開帳へ彌次喜太で出掛けたが、歸りは早瀨の船に乘り。
十兵 東海道をぶら〱と、箱根の湯場で一週間も、話しの種に湯治をして、夫から内へ歸る積りだ。
忠藏 それはお樂しみな事でござります、思ひがけなくお二人さんに、爰でお目に掛つたは、身の幸ひでござりまする、早速ながら主人の内は、どうなりましてござりまする。
吾市 近所の人の話しに聞いたが、向島で身を投げた文三さんも網船に、助けられたと言ふ事だが、内

へは歸らずそれぎりに、何處へ行つたか行方知れず。

十兵　所で内は貸方へ、身代限りの處分となり、お袋さんは自身の緣家へ、引取られたといふ事だ。

忠藏　お内儀さんはどうなされました。

吾市　詳しい事は聞ねえが、文三さんの行方は知れず身代限りで内は無し、どうする事も成らないのを厄介好な長兵衞差配が、内へ引取つて置いた所

十兵　あんまり毎日くよ〱と泣いたせゐか風眼で、終に兩眼見えなくなり、他人の所にぺん〱と、永く居るのも居惡いから、自身の里へ歸ると言つて、先頃立つたといふ事だ。

忠藏　それはお氣の毒なことでござりました。

十兵　眼の惡いのに子供を連れ山坂道を甲府迄容易な事では行かれない、さうしてお前はどうしたのだ。

吾市　見ればびつこを引く樣だが、横根でも踏出したのか、又は怪我でもしなすつたか。

忠藏　心得違ひでお内儀さんへ、難儀を掛けた其罰で、小佛峠で谷へ落、左りの足を岩で打ち大した怪我を致しましたが、折能くそこへ通り掛つた樵夫の衆に助けられ、六七日も世話になるうち打身の藥がありまして、思ひの外に早く癒り、歩ける樣になりましたから、惡い心を入替て、誠の人になるつもりで、懺悔ながら身延山へ、私も參ります。

吾市　聞けば此方はお崎殿に、豪氣に惚れて居る所から、

十兵　旅へ連出し口說いたと、專ら世間で言ひますぜ。

忠藏　不圖した心の迷ひから、跡先見ずに御主人へ濟まない事を致しましたが、生れも付かぬびつこになつたも、道に背いた天の罰と、すつかり改心致しました。

吾市　そりやあ何よりいゝことだ、己等二人も生業ぢやあ、隨分惡い事をするから。

十兵　罪亡しに身延山へ、今度お參りに出かけたのだ。

吾市　ときに、そろ〳〵出掛けよう。

十兵　おゝ、先刻から餘程休んだ。（ト兩人立上る、忠藏思入あつて、）

忠藏　誠に申し兼ねましたが、御覽の通り着た儘で、小遣錢もござりませねば、以前のよしみに私へ、合力をして下さいまし。

吾市　さういふ姿になつたのも、氣の毒だとはいふものゝ、一つはお前の心柄。

十兵　たんとの事は出來ないが、草鞋錢なら進ぜませう。

忠藏　決して多少は申しませぬから、お惠みなされて下さいまし。

吾市　ほんのこりやお心ばかり、蕎麥でも喰つてくんなせえ。（ト錢を二錢遣る。）

忠藏　へえ、こりや二錢でござりますか。

吾市　二錢で惡くば止しなせえ。

十兵　遣て遣らうとは言はねえのだ。

忠藏　いえ。斯る姿になりましては、一錢でも宜しうござります。

吾市　いや、思はぬ事で手間取つた。

十兵　少しも早く出掛けよう。

忠藏　左樣なればお二人さん、

吾市　跡からゆつくり、

兩人　お山へ來なせえ。（ト馬士唄になり、兩人花道へはひる、忠藏跡を見送り）

忠藏　今の衆が言ふ通り、心柄とは言ひながら、見る影もない姿となり、僅か二錢の此錢を頂いて貰ふとは、生甲斐の無い我身の上、是を思へば彼時に死んだ方が增だつたのに、慾じ命があつた丈、今此態をかくといふもの、何にしろお內儀さんが、甲府へおいでなさるとあれば、お里へお尋ね申して行き、心得違ひで御難儀を掛けたお詫を仕度いものだ。どれ日のたけぬ內行きませう。

ト時の鐘合方にて、忠藏杖を突き花道へはひる、右の合方にて上手より、前幕の賢三郎、着流し兵兒帶

駒下駄黒の帽子を冠り、出て來る、跡より髭の七兵衛、胡麻鹽髷のある鬘、どてら三尺帶 草履下駄
にて出て來り、

七兵 もし賢三さん、お前に聞き度え事があるが、内ぢやあ四邊へ遠慮があるから、爰へ掛けておくんなせえ。(ト根株を手拭で拂ふ。)

賢三 何を聞くのか知らねえが、爰は四邊に家はなし、どんな事でも話せるな。

ト謎への合方になり、賢三郎は上手の根株、七兵衛は下手へ腰を掛け思入あつて、

七兵 何でも人は勉強次第で、ずん／＼腕の上るものだ、初めてお前を私が連れ郡内領の織屋の内へ、刀を拔いて強盗に躍込んだ其時は、縛り上げた亭主よりお前がぶる／＼震へて居たが、何時の間にか舞臺を上げ去年の暮にお前に連れられ、八王子在へ這入つた時、さあ、命が惜しけりや金を出せと、極つた臺詞もたんかが切れ、斯うも役者が違ふものかと、實に己あ感心した。

賢三 そりやあ何でも舞臺數で、初めは齒の根が合はなんだが、一度が二度と度重り、今ぢやあ震へる事もなく、どんな所へ躍り込んでも、怖いと思つた事がねえから、素手で歸つた事がねえ。

七兵 わつちが敎へて七八年だが、定めて盜んだ其金は、大した高であるだらうが、終に一度赤い仕着を着ねえといふは豪氣な事だ、惡運強い事だなあ。

賢三　盜みはするが是迄に、困る者の金を取らず、千圓からの身上が無けりやあ百圓盜まねえ、田舍は豪家町方は、質屋か又は金貸か、百や二百取られても痛みにならねえ金滿家の、金で無けりやあ取らねえのに、それを無暗に遣はねえから、今日迄運よく遁れて來たのだ、それといふのも是迄に、小町の樣な女があつても強姦をした事がねえ、金は世界の涌物に、千圓己に盜まれても、ある身上なら直埋るが、人で無しの盜人に、汚された身は一生涯、是を淸く仕樣がねえ、こんな罪な事はねえから、終に一度仕た事はねえ、爰等で少しは遁れるだらうよ。

七兵　成程、お前は變り者、さういふ心で盜みをするから、今日迄運よく遁れた筈だ、とはいふものゝ、加減に、見切を付けて止しなせえ、長追すれば其内には喰え込むに違えねえから、何ぞ大きな仕事をしたら、それを名殘に堅氣になり、草葉の蔭に案じて居る親に安心させなせえ。

賢三　己が駈出で出た時分は、非道な事のみしたお前が、どうしてそんな氣になつたか、餘程燒が廻つたな。

七兵　すつかり箍が弛んだから、何をするにも怖くつて、強盜などはもう出來ねえ。

賢三　さういふ心になつたらば、喰え込むからしねえがいゝ。

七兵　時にお前に聞きてえのは、跡から内へ尋ねて來た小松といふ意氣な女は、ありやあ元は何だな。

賢三　産れは甲州石和の者だが、東京育ちに訛りも抜け、先頃迄數寄屋町で小松と言つて藝者だつたが、ちと東京に居られねえ譯があつて、小田原の相模屋で自前同樣、お千代と名を替へ娼妓で居たが、己と逃げる約束で、跡から笹子へ出て來たのさ。

七兵　見るから凄い拵らへだが、なか〱据つた度胸だな。

賢三　女でこそあれ人殺しも、仕かねねえ性だから、疊の上ぢやあ死ねめえよ。

七兵　さうしてお前が小田原から、一緒に内へ連れて來た、處女育ちのあの娘は、ありやあどういふ筋の娘だ。

賢三　今もいふ相模屋に、久しく居續けをして居た所から、づいきが廻つた樣子故、こつそり逃げて來る時に、丁度酒匂の川端で、助けてくれと縋られて、樣子を聞けば東京から勾引されて來た娘、見るに忍びず連れて來たのは、親御に恩を返さにやあならねえ譯があつての事だ。

七兵　どういふ譯か知らねえが、己が所へ來る迄に、旅人の少ねえ根方の宿屋、七十五日生延びたらうね。

賢三　そりやあ今も話す通り、假令一緒に寐ようとも、手出をしねえが己の味噌、内へ歸れば聟を取り御新造樣と言はれる體、何で疵を付けるものだ。

七兵　そりやお何より感心だ、白髮だらけの己等でせえ、まだ〳〵其氣は失せねえのに、よく辛抱が出來たものだ、さういふ堅い心と知らず、お前の色だと思ひ違え、毎日姉御が彼子をば、苛くするのがかはいさうだ。

賢三　己が目にも掛るから、歸して遣らうと思つて居るが、何をいふにも三十里、つい其儘にして置くが、そんなに酷くするならば、一日も早く歸して遣らう。

七兵　此間から此事を、話し度く思つても、内にやお姉御が傍に居るから、今日爰へ連出したのは、あの子がいかにも不便だから。

賢三　以前はそんな氣は無かつたが、情深くなつたな。

七兵　爰が白髮になつた故だ。して連れて來たあの娘に、恩を返すといふ譯は。

賢三　是も内ちやあ出來ねえ話。（ト四邊へ思入あつて、）斯ういふ譯だ。（ト根株へ片足上げるを道具替りの知せ、）聞いてくんねえ。

ト時の鐘合方にて、兩人思入宜しく、此道具廻る。

（番屋の場）――本舞臺三間の間平舞臺、向う上手一間押入戸棚、眞中障子出這入り、下手一間鼠壁、

是へ賣藥の看板を掛け、上の方一間折廻し障子屋臺、門口跡へ下げて九尺腰障子、御安泊笹子宿笹屋と記しあり、下の方奥深に一二軒家のある往來の片遠見、柱の際立木で見切り、總て笹子下、安泊の體、爰に七兵衛女房お六結髪和し裝にて、矢張り御安泊笹子宿笹屋と記せし角行燈を掃除して居る、此見得馬士唄にて道具留る。

お六　ランプを遣ふと菜種より、石油の方が安いから、餘程錢が違ふけれど、碌な者の泊らない間の宿の安泊、一のお客が千ヶ寺參りで跡が按摩に瞽女の坊、旨い物でも買つて喰ふのが、世間を忍ぶ泥突だ、いけぞんざいなやから故、轉倒返して燃上り、火事にでもなつた日にやあ、元も子も失ふから、灯りの暗いを我慢して、菜種ばかり遣つて居る。然し内に居る者は明るい體の者がねえから、灯りは暗い方がよからう。（ト時の鐘床の淨瑠璃になり、）

〽日も西へ落葉の時雨木枯の風も身に染安泊、壁に張つたる清書の反故も悋氣の角文字に小松はお夏を追掛け出で、

トお六行燈を下手へ片付居る。ばた〳〵になり、奥より前幕のお夏同じ裝にて逃げて出て來る、跡より前幕の小松、結髪男の帯をしめ、半纏好みの拵へにて長煙管を持ち追駈けて出て來り。

お夏　あれ、堪忍して下さいまし〳〵。

小松　今日ばかりは許されぬ、どうするか見やあがれ。
お六　又お夏さん、しくじつたのか。
お夏　どうぞおやまつて下さいまし。（ト お六に縋り附く。）
お六　何をしたのか知らないが、腹も立たうが小松さん、堪忍して上げて下さいまし。
小松　お前に口を出されると、迷惑だからお六さん、今日は止めずに置いておくれ。
お六　止めてくれるなとおつしやつても、みす〳〵爰で打たれるのを、止めずにもゐられませんが、何を其子がしましたのだ。
小松　盗みをしたから折檻するのだ。
お六　え、此子が盗みなしましたとえ、おや〳〵顔に似合はねえ呆れ返つた事だねえ。
お夏　いえ〳〵、何で私しが盗みなどを致しませうぞいなあ。
小松　私の差して居る珠の簪を、お前が盗んだに違ひない。
お夏　いえ〳〵覚えはございませぬ。
小松　覚えがないといふからは、裸になつて振つてお見せ。
お夏　それは堪忍して下さいまし。

小松　裸になつて振へぬからは、やつぱり盗んだに違ひなからう。

お夏　いえ〳〵、何で私が。

小松　えゝ、小じれつてえ阿魔女だ。

〽煙管を取つて打据ゑる、小松をお六は押止め、（ト小松お夏を煙管で打つ、是をお六止めて、）

お六　腹も立たうが小松さん、まあ〳〵待つて下さいまし。（トお夏に向ひ、）これお夏さん、盗んだら盗んだと、早く言つておしまひ、簪さへ返しなさりやあ、私が誤まつて上げようから、さあ早く爰へ出してお返し、それとも覺えが無いならば、裸になつて褌まで、振つて盗まぬ證據にお見せな。

お夏　證據はお見せ申し度が女子が裸になりますのは、恥しうございますから、お許しなされて下さいまし。

お六　それではお前の懐から、帯の間袂の中、私が檢査をして上げよう。

〽言ひつゝ懐帯の間、尋ねる袂の八口から、ばつたり落つる簪に、はつとばかりに驚くお夏、お六は手早く取上げて。

トお六いやがるお夏の懐帯の間を尋ねる、此時袂の八口より珠の差込の簪落ちる、お六取上げて、

お六　お夏さんの袂から、此簪が落ちましたが、是を取られなすつたのか。

小松　今朝迄私が差して居たのが、何時か見えなくなつたから、爰等其處等を搜したが、無いのは何處へか落した事と、其儘にして置いた處、此子の素振がをかしいから、鎌を掛けて聞いたのだが、鑑識は違はず袂から、此簪が出るからは、いよ〳〵取つたに違ひない、欲しけりや姉さんおくんなさいと、ねだれば簪一本位ゐ惜しむ樣なわたしぢやないよ。

お六　よもや此子がそんな事を、仕なさらうとは思はなんだが、今袂から出て見れば、覺えがないとも言はれぬ譯、一つ内の物を盜んで、差される譯でも無からうに。

小松　大方是を屑屋に賣り、買喰でもする氣だらう。顏に似合ぬ太へ阿魔女だ。

へ身に覺えなき疑がひも、解くに解かれぬ麻絲の、縺れに涙呑込んで、

　　　トお夏口惜き思入あつて、

お夏　假令何と仰しやつても、其簪を私しは盜んだ覺えはござりませぬ。

小松　盜まぬものがどうして又、お前の袂にあつたのだ。

お夏　それは誰か私しに、科を着せよう其爲に、入れましたのでござりませう。

小松　誰か入れたといふからは、外に女の無い此内、私が入れたと言ひなさるか。

お夏　いえ〳〵、さうではござりませぬ。

小松　それぢやあ、お六さんがしたといふのか。

お夏　さあ、それは。

お六　人に罪をなすらうと、そんな事を言はれては、默つて聞いては居られない。

小松　隱さずそれを言つたらば、欲しけりやお前にくれて遣る。（ト簪を打付ける。）

お六　さあ、早く盜んだと言つておしまひ。

お夏　人樣の物をわたくしが取ります樣な恐ろしい、心の者と思召すか、何程お問ひなされても、盜んだ覺えはござりませぬ。

小松　なに、盜まぬ事があるものか、簪位ゐはおろかな事、人の大事の亭主迄お前は盜んで居るくせに。

〽思ひがけなき一言に、

お夏　え、何と仰しやります。

小松　私の亭主の賢三さんを、疾から盜んで居るだらう。

お夏　何で私が其樣な事を。

小松　知らねえ事があるものか。（ト又煙管で打つ。）

お六　お前さんは知らないが、賢三さんが爰の內へ、此子を連れて來た時に、手を引合つて來なすつたに、優しく世話をしなさるから、私も怪しく思つて居たが、それおやお誠でござりますか。

小松　餘儀ない義理で連れて來たといふのは互ひのてれ隱し、私の居ねえ隙を見て、こつそり二人で樂しむのは、男も憎けりや女が憎い、是が藝者だとか女郎だとか、下ツ腹に毛のねえやつなら、仕方がねえと我慢をするが、年も行かねえ小阿魔子に、馬鹿にされるが腹が立つ、こんな悔しい事はねえ。

お夏　お前さんの目を忍び、道に缺けたそんな事を、致したことはござりませぬから、お許しなされて下さりませ。

小松　致した事がねえとは言はさぬ、小田原から笹子迄來る內根方の宿泊で、一緒に寐たといふ事は、賢三さんが七さんにのろけた事を聞いて居る、欲しけりや亭主も簪もお前に遣るから盜んだと、今有體に言ひなせえ。

お夏　いくら言へと仰しやつても、覺えのない事は言はれませぬ。

小松　言はにやア唯は置かねえぞ、打つて〳〵打据ゑるが、それでも覺えが無いといふか。

お夏　さあ、それは。

小松　泣いて居ちやあ分らねえ、性根の附くやう撲つて遣らう。（ト又煙管で打つ。）

お夏　どの樣にお打ちなされても、覺えが無ければ申されませぬ。

小松　まだ強情を張りやあがるか。

〽情も荒く煙管にて、打てば機みに飛散る雁首、

ト小松煙管でお夏を打つ、雁首脱けて落ちるを、お六拾ひ。

お六　もし、首が落ちました。

小松　え、首が落ちたとは。

お六　雁首が脱けましたのさ。（ト出すを取つて、）

小松　えゝ緣起でもねえ。（ト投げ捨てる。）

お六　櫛簪なら取られても、金せえ出せば買はれるが、惚れた男は買はれねえから、腹の立つのも尤もだ。

小松　それだから此女を、打ちでもしにやあ腹が癒ぬ。

〽襟上取つて引倒し、滅多無性に打据れば、痛みに堪へかね身を悶き。

ト小松お夏の襟上を取り引倒し平手で打つ、お夏宜しく苦痛の思入にて、

お夏　痛くて怺へられませぬから、どうぞお慈悲にお六さん、誤つて下さいまし。

お六　外の事なら口を添へ誤つて上げるけれど、私も覺えのあることだが、亭主を人に取られた位ゐ腹の立つものはない、小松さんが腹を立ち、お前をつねるも尤もだ。賢三さんと一緒に寐て、嬉しい思ひをした事を、思ひ出して辛抱おし、私は口は利かないよ。

小松　賢三さんを迷はしたは、汝が面が綺麗な故。定めて寐た時可愛いと、此口で言つたらうな。

〽口の端をつねりあげ、憎い女めと突放せば、お夏は亂れし姿をば繕ひもせず其儘に、痛さ怺へて顏を上げ、（ト小松お夏の口の端をつねり、酷く突放す、お夏宜しく思入あつて、）

お夏　此身に覺えもない事で。

〽斯る憂目に逢ふといふは、何時なる因果な事なるか、枕橋にて勾引され、袖に涙の乾く間も泣いて明せし旅の空、日毎夜毎に打擲かれ、

〽憂い責苦もどうぞして、再び内へ歸り度く今日まで怺へて居ましたが、左程憎くば一思ひに、

私を殺して下さりませ。

〽言ふも哀な秋の末、露に弱りし蟲の聲、情知らねば耳にも掛けず。（トお夏宜しく思入）

小松　亭主を取れば泥坊同様、お前の様な太い者でも、殺せば人間一人故、此身に罰を着にやあならねえ、決して殺しやあしねえから、痛い思ひを辛抱しねえ。

お夏　すりや、殺しては下さいませぬか。

小松　殺さず憂目を見せるが腹癒せ、お嬶あお前も覺えがあるなら、共に傍から助けてくんねえ。

お六　助けますとも〳〵、情嫌ひの慾張好き、こんな事は大好だ。

小松　禮は跡でわたしがするから、新手で女をしめてくんねえ。

お六　あい〳〵承知しました。さあ姉さん、とても遁れぬ事だから、痛い目せずと言つておしまひ。これ、默つて居ては分らねえ、お前は唖か聾か。(トお六お夏をこづく。)

お夏　いくら言へと仰しやつても、覺えがなければ言はれませぬ。

お六　まだそんな事を言ふのか。(トつねる。)

お夏　あいたゝゝゝ。

小松　いけ强情な阿魔女だ。

お六　手强くしにやあ言ひますめえ。

小松　泣面をかゝせて遣らうか。

〽圍爐裏に有合ふ鐵灸取り、是で打つぞと突出すを見るより驚き寐出すお夏、お六が酷く引据ゑて既に打たんとする所へ、賢三七兵衞立歸り、門口より内を窺ひ、

ト小松四邊を見廻し、下手の圍爐裏にある鐵灸を取上げる、お夏是を見て逃出すを、お六止めて酷く引倒し、小松打たうとする、下手より以前の賢三郎七兵衞出て來り、門口より樣子を見て、

賢三　又お夏をいぢめる樣だ。

七兵　是だからわつちが言ふのだ。（ト言作ら内へはひる。）

賢三　これ、何をそんなにお夏を打つのだ。

小松　打つてもいゝから、私が打つのだ。

賢三　縱令救つて遣たとはいへ、内へ送り屆ける迄は、言はゞ人の預りもの、疵でも付いては親御に濟まねえ。

小松　なに濟まねえ事があるものか、打たれた疵より抱いて寐て、體へ疵の附た娘、どんなにしたとて構ふものか。

賢三　手前は己が旅籠屋で、抱いて寐でも仕た樣に、をかしく絡んで物を言ふが、そんな事はありやあしねえ。

小松　あるかねえか知れたものか。
七兵　これお六、何を此子が失敗つたか、手前も傍に附いて居ながら、なぜ誤つて遣らねえのだ。
お六　そりやあお前が言はずとも、只の事ならおせつかいに、私しが誤つて上げるけれど、小松さんの簪を、お夏さんが盗んだ故、傍から口が出せねえから、默つて爰に見て居たのだ。
七兵　なに簪を盗んだと、そりやあ何かの間違だらう、世間知らずのお孃さんが、何でそんな事をするものか。
小松　なんぼ一つ仲間だとて、賢三さんと馴合つて、世間知らずのお孃さんと、初心な樣に云ひなさるが人の亭主を取る程な、勝れた度胸のある娘、簪位は譯はねえのだ。
賢三　それぢやあ手前は此娘と、どうでも譯があるといふのか。
小松　これが七十か八十の爺いならば知ぬこと、男盛りの賢三さん、女に掛けちやお腕前の勝れたお前が此娘を、四邊に氣兼の無い宿屋で、何で一人寐かすものか。
お六　こりやあ小松さんの云ふ通り、女は女同士だから、用があるなら小松さんに、云ふのが當然だのに、人目を忍んで賢三さんに、こそ〳〵話しをしなさるのは、傍で私が見て居ても、岡燒餅が燒けますよ。

七兵　これ、手前が傍から藥を焚き、其樣餘計な口を利くな。

お六　餘所目に怪しく思はれて、岡燒餅が燒けるから、さう云つたのが惡いかえ。

七兵　內輪に揉の出來ねえ樣に、傍で止めるが手前の役だ、焚付けるやつがあるものか。

お六　小松さんにはお世話になるから、肩を持つのは當然、默つて見ては居られないよ。

七兵　まだそんな事を言やあがるか。

お六　明いた口だから云ひますのさ。

七兵　うぬ、其いけ口を。

〽打て掛るを支へる賢三、小松はお六を引止むればお夏は中へ割つて入り、（ト七兵衛打たうとするを賢三郎止める、お六打てといふを小松止める。皆々捨ぜりふ宜しく、お夏思入あつて、）

お夏　まあ〳〵待つて下さりませ、元の起りは私故、さう皆さんが爭論をなさいましては此儘に、傍に見てはをられませぬ、身でも投げて死にませねば、申譯がござりませぬ、便りない身の私を、不便と思召しまして、お靜まり下さりませ。旦那樣、お內儀樣、どうぞお願ひ申しまする。

〽お夏はおろ〳〵手を合せ、拜み廻るを突倒し、

ト　お夏皆々を拜み廻り、小松の所へ來るを突倒し、

小松　お前が死ねば私が安心、決して止めはしないから、死ぬなら勝手に死ぬがいゝ。

お六　私も餘計な厄介だから、知らぬ顏で止めないよ。（トお夏情ないといふ思入あつて、）

お夏　此身に覺えもない事で、毎日斯うして打叩かれ、つらい憂目を怺へまするも。

〽さぞ父樣や母樣が、定めて死にでもした事と、思召してござりませう、せめては無事な此顏を、

お目に掛けるが孝行と、今日迄怺へて居りましたが、此儘内へ歸られませずば、いつそ死にたうござりまする。

〽思ひ迫つて泣伏せば、

賢三　お前を内へ置く時は、互ひに覺えも無い事で、毎日苦情が起る故、疾から内へ送らせて歸して遣り度く思つて居るが、今は浮世を忍ぶ身に、それも心に任せねえ、最う二三日の其内にきつと内へ歸して遣るから、必ず死なう杯といふ無分別を出しなさんな、死んだらよいはと其死骸を、山へ捨てる譯にもいかねえ。假令五日が七日でも爰の内で世話になり、此七兵衞に厄介を懸けるは濟まねえ譯だから、長い事でも無いこと故、つらくも辛抱してくんねえ。

お夏　内へ歸して下さいますれば、假令どんなつらい目に逢ひませうとも怺へますから、どうぞ歸して

下さりませ。

七兵　是が十里かそこらなら、疾に送つて行くけれど、東京迄は三十里、容易に行けねえ山道だから、わつちも今日迄見て居たが、いかにも此子がかはいさうだから、送つて行つて遣りませうか。

賢三　お前がさういふ心なら、足弱連で氣の毒だが、どうかさうして遣つてくんねえ。

七兵　なに、足弱だつて八王子から、車が利くから譯はねえ。

お夏　そんなら私をお前さんが、内へ送つて下さいますか。

七兵　送つて遣るから案じなさんな。

お夏　えゝ有難うござりまする。

小松　そいつお己らも有難え、亭主の傍に居なけりやあ、よけいな氣を揉む事がねえ。

お六　相手替つて私の苦勞、是から此子と二人連、泊り／＼の旅籠屋で、ほんの旅寐の假枕と、落人筋は御免だねえ。

七兵　作内ならば知らぬ事、己に勘平が出來るものか。

お六　私の目にはさうでもないよ。

小松　お前も亭主に惚れて居るね。

お六　小松さんと同じことさ。
賢三　それぢやあ明日立つてくれるか。
七兵　行くとなつたら善は急げ、是から直に立ちませう。
小松　一晩でも此子が居れば、私が苦勞をしにやあならねえ、是から送つておくれなら、餞別をあげようね。
七兵　そりやあ有難うございます。お六、脚絆とトンビを出してくれ。
お六　トンビは内にあつたかしらん。（下お六奥へはひる。）
七兵　姉さん、お前も支度をしねえ。
お夏　別に何もございませぬから、是で宜しうございまする。
賢三　着替も無いからそれでいゝが、山坂道で難所だから、もつと裾を端折りなせえ。
小松　餘計なお世話をお焼きで無いよ。（下賢三郎をつれる。）
賢三　あいたゝゝ。（下奥よりお六トンビと脚絆を持出て來り、）
お六　打殺したと思つたら、トンビは奥にしまつてあつた。（下合方にて七兵衛は脚絆を穿きトンビを着る、お夏は裾を上げる、賢三郎小松は戸棚のカバンから札を出し紙に包み、）

賢三　それぢやあ是は二人の路用だ。
小松　是は私の餞別だよ。
七兵　是は〳〵有難うござりまする。（ト頂いて叺煙草入へ入れる）さあ姉さん、支度がよくば出掛けませう。
お夏　はい、お連れなすつて下さりませ。（ト賢三郎に向ひ）旦那様、命をお助け下さいました、御恩は家へ歸りまして、何れお禮に上りまする。
賢三　近い所でも無いこと故、決して禮には及ばぬから、よく歸つたらさう言ひなせえ。
お夏　いえ〳〵、遠い所でもお禮に上らにや濟みませぬ。（ト小松に向ひ）お前様にもお世話になり、有難うござります。
小松　お前が内へ歸つたら、嘸惡く言ひなさるだらう。
お六　嘘をして待つて居ますよ。
お夏　何で惡く申しませう。
七兵　餘計な事を言はねえで、日のたけぬ内出掛けよう。
賢三　内へ送つて行つたらば、主人は達者か聞いてくんねえ。

七兵　承知しました。
お夏　左樣ならば、皆樣方。
賢三　氣を付けて行きねえよ。
お夏　有難うござりまする。（ト合方にて草履を穿き門口へ出て）
七兵　今に駕籠に乘せて上げるよ。
お夏　いえ、それには及びませぬ。
七兵　嘸のう〳〵としたらうね。
〽お夏は籠を放れたる小鳥の如くいそ〳〵と、打連立ちて急ぎ行く。
ト　お夏嬉しき思入、七兵衞勞りながら花道へはひる。お六跡を見送り、
お六　一昨日おいで。（ト障子をしめる。）
小松　賢三さんの思ひ者、けち〳〵にしては濟まないよ。
お六　是は粗相を云ひました、眞平御免なさいまし。お〻今日は御膳が夜食炊き、どれ仕掛でも致しませう。
〽言紛らしてとつかはと、お六は奥へ入りにける。（トお六急ぎ奥へはひる。）

小松　今夜はお樂しみが無く、お氣の毒でありますね。

賢三　まだそんな事を云ふか。（ト奥へ思入）手前が詰らぬ廻り氣で、燒餅を燒くがあの娘を、世話をしたのは罪亡しだ。

小松　え、罪亡しとは。（ト誂への合方になり、）

賢三　日外小梅の曳船通りで、金を持つてる事を知つて、手をば負はして五百圓己が盗んだ渥美といふ金貸の娘だが、化地藏といふ山女衒が勾引して連れて行き、已に小田原の相模屋へしづめられる所を逃出して、酒匂で計らず己が出會ひ、名前を聞いてびつくりなし、金を盗んだ罪亡しに、内へ送つて遣らうと思つて、それで一緒に連れて來たのだ。

小松　隨分邪險な料簡で、非道な事のみしたお前が、金を取つた罪亡しに、娘を内へ送つて遣ると、世の人情を失はず、情心が出た上は、是から先はもうお前も、大した金は取れないね。

賢三　己も段々取る年に、非道な事をし度くねえから、早く足を洗ひてえのだ。

小松　足を洗つて止めるにも、先立つ物は金だから、どうかみつしり金になる大きな事を仕度いものだ。

賢三　譬にもいふ果報は寐て待て、奥へ行つて樂寐としようか。

小松　娘が歸つて鬱ぐのかえ。

賢三　まだそんな氣障を云ふのか。

〽世を忍ぶ身は群立ちし、小鳥の聲も身にこたへ、心の奥へ入りにける。

ト賢三郎思入あつて奥へはひる。

小松　あの娘を歸したので、心に掛る雲もなく、日本晴がした樣だ。（ト時の鐘幽めて山下しになり、）

〽唯さへ秋は物憂に、幼き子をば杖となし、お崎は馴れぬ旅の空、盲目に探る石高道。

ト花道より四幕目のお崎結髪和し裝、眼病の拵へ、風呂敷包を斜に背負、竹杖を突き草鞋にて、德太郎やつしなり草鞋、お崎の菅笠を背負出て來り花道にて、

德太　母樣、道が悪いから、杖の方へ寄つて下され。

お崎　あい〳〵、よく敎へてくれたの、さうして爰等に家はないか。

德太　向うに家がありまする。

お崎　それでは其處へ御無心申し、お湯を一杯貰ひませう。

〽差込む癪に歩み兼ね杖を力にやう〳〵と、辿りし門も緣の端。（トお崎胸を押へ舞臺へ來り、）

德太　母樣、爰が家だよ。（ト門口へ連れて來る。）

お崎　申兼ねましてござりまするが、持病の痞へが起りまして、薬を呑み度うござります故、お湯を一

杯私に、頂かして下さりませ。

小松　それは嘸お困りだらう、藥を吞むなら熱いより、ぬるい方がよからうね。

お崎　はい、其方が宜しうござりまする。（ト小松茶碗へ湯を汲み水を差して持つて來る、お崎は丸藥包みを出す。）

小松　さあ〳〵、水をうめて來たよ。

お崎　これは〳〵有難うござりまする。

〽厚き情と差出せし茶碗の湯をば押頂き、藥取出し吞む樣を、小松は障子の蔭より見て、

ト　お崎茶碗を頂き藥を吞む小松見て、

小松　見ればお前は兩方共、眼が惡い樣だね。

お崎　惡い風が眼に染みて、俄に双方見えなくなり、誠に困りきりまする。

小松　連れてる其子はお前の子かえ。

お崎　はい、左樣でござりまする。

小松　役者にしたらよささうな、誠に綺麗なよい子だね、坊は今年何歲だえ。

德太　おい、今年八歲でござりまする。

小松　お前は小さな子を連れて、何處へおいでか知らないが、是から先は笹子峠、嘸や難儀な事であら

うが、何處を當に行きなさるのだ。

お崎　はい、私は甲府の八日町迄参りまする。

小松　斯う見た所が物言から、裝の樣子は東京だね。

お崎　はい、左樣でござります。

小松　東京と聞くと懷しいが、さうしてお前の居なさる所は。

お崎　下谷邊でござります。

小松　私も以前は下谷に居たが、下谷は何處でござりまする。

〽問はれてお崎は差俯向き、

お崎　元は可成に暮しましたが、斯る姿になります迄落ぶれましてござります故、何處の誰と申しまするも、お恥しうござりますから、所も名前も申しませねばお許しなされて下さりませ

小松　成程落ぶれなすつては、名前を言へぬも御尤も、何にしろ山坂道へ、眼の悪いのに子供を連れ嘸お困りな事であらう。

〽言つゝ子供の手を取りて、腰に付けたる巾着の迷子札を小松は見て、

ト小松德太郎の巾着に付けし迷子札を見て、

下谷茅町二丁目八番地、穂積文三郎倅徳太郎。えゝ。

〽思ひがけなく驚けば、見えぬお崎は不審に思ひ、（ト小松びつくりなす。）

お崎　どうして私の町所を、御存じでござります。

小松　さあ、それは。

徳太　今おいらの迷子札を、此小母さんが讀んだのだ。

お崎　え、それでは其方の迷子札を。あゝ面目なうござりまする。

〽我身を恥ぢて俯むけば、小松は是が噂に聞く、文三の妻や倅かと、餘りの事に呆れ果て、

ト　お崎は俯向き、小松は思ひがけなき思入あつて、

小松　思ひがけないお前さんが、穂積文三さんのお内儀さんでござりましたか。

お崎　お前さんは文三をば、御存じでござりまするか。

小松　いえ〳〵少しも存じませぬが、私の内は安泊り、四五日跡に爰へ泊つた、下谷邊の商人衆が、噂をするのを聞きました。

お崎　それでは文三が藝者にはまり、諸所へ多くの借が出來、身を投げました事抔も、お聞きなされてでござりませうな。

小松　私も下谷に居ました事故、話が合つて其人から委しう様子を聞きましたが、お氣の毒な事でござりますな。

お崎　一旦身をば投げましたが、網船に助けられ、達者で居ると聞きましたが、そんな事をお聞きなされませぬか。

小松　文三さんは助かつて達者で居なさるといふ事だから、必ずお案じなさいますな。

お崎　それは何より嬉しうござりまする、達者でさへ居られますれば、又逢ふ事がござりますから、それを樂しみに致しまして、此倅を育てまする。

徳太　お父さんに逢ひ度いわいの。

お崎　時節が來ると逢はれるから、おとなしくして待つて居や。

徳太　あい／＼。

小松　以前は立派なお内と聞いたが、どういふ事で其様な、姿におなりなすつたのか、袖振合ふも他生の縁、話してお聞せなさいまし。

お崎　御親切に仰しやつて下さいます故身の上を、只今お話し申しませう。

小松　何は兎もあれ其處は往來、内へお這入りなさいまし。

お崎　左樣なれば御免なされませ。

〽探りながらに子に連れられ、内へ這入りて座に着けば、
卜子役手を取り、お崎内へ這入り、下手へ住ふ。

小松　して、お前さんの身の上は。

お崎　何をお隱し申しませう。（卜誂への合方になり）良人文三が數寄屋町の、新常磐屋の小松といふ藝者に馴染みて、晝夜となく、内を外に遊び歩き、元より大した身上でもござりませねば地面から、諸道具迄も賣盡し、家作は終に抵當に取られて内は身代限り、それも良人の爲す事故辛抱致して居りましたが、義理ある中の母樣が昔堅氣のお人にて、悴が藝者狂ひをするも一つは女房の扱ひが、惡い故に氣もそぎれ斯ういふ事になりましたと、世間の人に仰しやるを、聞く私の其辛さ、いつその事に死なうと思ひましたのは。

〽幾度なるか知れませぬが、さうしたならば亡き跡で此子が憂目を見ませうと、子に引されて一度は止り、二度は此子も諸共にと、背負つた儘に欄干へ、手を掛けましたが生先の、長い者をば殺すのは、不便と存じて思ひ止り、辛抱致して居りまする。

〽云ふも持病に咳入るを、年はゆかねど孝行に、背撫摩る德太郎、小松は水を汲み來り、

ト　お崎咳入る、徳太郎さする、小松茶碗へ水を汲み來り、

小松　咳には湯より水がよい、ちよつと一口上りなさんせ。（ト茶碗を手に持たせる。）

お崎　これは〳〵有難うござりまする。（ト頂き水を呑み。）

小松　さうして今のお話しは。

お崎　悪い時には悪い事の重なる物で、内に居る忠藏といふ若い者が、悪企みとも存じませず、甲府の親が大病と申す使ひを誠と存じ、其忠藏を供に連れ、病氣見舞に參る途中、小佛峠で私へ迫り既に此身を汚す所を、折よく其處へ石和村の甲作殿といふお人が、通り掛つて助けて下され、道を案じて八王子迄一緒に伴なひ宿屋へ泊り、翌朝車へ乘りまして、やう〳〵下谷へ歸りましたら、身代限りで内は無く、詮方無さに差配人の世話になつて居ります内、兎や角氣をば揉みし上悪い風が眼に染みて、終に皆目見えなくなり、他人の所の厄介になるのも辛うござります故、甲府の里へ歸る積りで、出掛けましてはござりまするが、

〽杖と頼みし夫に捨てられ、子供を連れての俄盲目、何處へ行つてよい事やら、途方に暮れて居りますれば、

世界に鬼は無いもので、一緒に連れて下されたり、身延參りの御功德に駕籠に乘せて下さいました

り、知らぬお方のお情で、やう／＼爰迄參りました、生甲斐の無い身の上を、御推量下さりませ。

〽涙乍らに身の上を、話すお崎が此樣な姿になりしも我故と、小松は二人を勞りながら、

ト此内お崎宜しく思入、小松も氣の毒だといふ思入あつて、

小松　それは／＼お氣の毒な、左樣な事とは聞きませなんだ、それに付けてお聞き申すは、お前さんをお助け申した石和村の甲作は、何處へ行くと申しました。

お崎　其甲作殿は鵜遣で、生業用で玉川までどうで行く故送つて遣ると、御親切なお方にて、八王子迄お連れ下され、それから車で歸りました。

小松　久しく便りを聞かなんだが、それでは兄貴も、

お崎　え。（ト思入）

小松　いえ、其甲作といふ人は、私の兄の友達で、正直な人でござります。

お崎　これから私もお禮ながら、お尋ね申して參りまする。

小松　今の話しの樣子では、お前さんの御苦勞は、實にお察し申します。髮も亂れて其儘なれど、生れだちからよい御器量、殊更素直なお心立、斯ういふお方がありながら、藝者に深く溺るとは、文

三さんとやらが心得違ひ、又其藝者も心なく身代限りをする程に遣はせると彼悪い心、嘸お前さんは其藝者の、小松が憎うござりませうな。

〽小松がわざと裏問へば、

お崎　いえ〳〵何で恨みませう、連添ふ亭主の心の變るは、母様の仰しやる通り、其の女房の扱ひが悪いゆゑでござりまする、見替へられるも世帯の爲めに、五日目に結ふ其の髪も、七日も八日も持たせる上、内の家業が米屋ゆゑ、木綿布子も藁灰に、穢れた儘の姿なれば、嫌はれますのは無理はない。それゆゑ良人も恨みませねば、小松殿も恨みませぬ。只私しが不束故と、我身を恨んでをりまする。

〽世にも稀なる貞節な、お崎が詞に恥入りて流石小松も我胸を裂るゝ思ひ身に迫り、性は善なる心に感じ、暫し涙に暮れたりしが、（下お崎思入にて云ふ、小松宜しくこなしあつて）

小松　ても感心なお心立、赤の他人の私でさへ、此胸が一杯に、思はず涙がこぼれます、是を藝者の小松が聞いたら面目無くてお前さんに、合はす顔がござりますまい。

お崎　さう仰しやつて下さりますと、少しは胸も晴れまして、痞へも宜しうござります。

〽折から納戸を立出る、お六も共に涙を拭ひ、（下奥より以前のお六出て、來り、）

お六　もし姉さん、障子の蔭で聞きましたが、こんなばくれんな者でさへ、身につまされていとしくなり、先刻干した前垂を、ぐつすり濡らしてしまひました。

小松　それぢやあお前も泣いたのか。

お六　どんな邪險な女でも、是を聞いちやあ誰でも泣きます。

德太　母さん、睡ぶ度くなりました。

お崎　今からそんな事を言つて、泊りへ着かねば寐られぬわいの。

德太　それでもおいらは睡ぶ度いものを。

お六　もし姉さん、お困りなさる樣子だから、爰へ泊めて上げてはどうだらうね。

小松　私もさうは思つたが、今夜は馴染の千ケ寺參りが、四五人泊に來ると言ふから、駕籠で越したら峠をば明るい内に越せようから、さうした方がよからうぜ。（トお六へ泊めて惡いといふ思入。）

お六　成程、駕籠なら越せませう、お前さんも駕籠に乘つて、早く峠をお越しなさい。

お崎　有難うはござりますが、御覽の通りの姿故、路用とても手薄なれば、中々駕籠へは乘られませぬ。

小松　それは心配なさいますな、失禮ながら駕籠賃は、私がお前にあげませう。

　ト巾着より礼を出し、紙に包み手へ渡す。

お崎　見ず知らずのお前さんに、斯樣な御心配を受けましては、どうも心が濟みませぬ。
小松　斯して私が御難儀を、承まはるも何ぞの緣、駕籠賃位は些細な事、どんなにもして上げ度いが、
（ト思入あつて、）ほんの心ばかり故、どうぞ受けて下さいまし。（ト此内お崎包みを開き算へ見て、）
お崎　只今お惠み下された、包みの内には一圓札が、三枚あれば三圓のお金、是をお貰ひ申しましては。
お六　それはお前が入らぬ辭儀、此姉さんは氣が大きく、二圓や三圓位は何とも思ひなさらないから、其三圓を貰ひなすつて、是から駕籠で峠を越し、早く泊りへ着きなさい。
お崎　左樣なれば仰に隨ひ、是をお貰ひ申しまする。
小松　どうぞさうして下さいまし。
お崎　これ德太郞、よくお禮を申しやいの。
德太　小母樣有難うござりまする。
小松　これお六さん、其處等迄一緒に行つて、慥な駕籠屋によく賴んで、二人を乘せて上げておくれ。
お六　あい〳〵、承知しました、私が賴んで上げませう。
お崎　思ひがけなくお情深い、お前樣にお目に掛り、峠を打越す駕籠迄下され、何とお禮を申しませうか、有難うござりまする。

小松　お前に禮を言はれると、身を切られる程、いや、是が身寄であつたらばと、思ふと實においとしく、どんなお世話もして上度いが、それも心に任せませぬ。（ト時の鐘になり、）

お六　さあ日の短い時分だから、少しも早く出掛けませう。

お崎　もうお暇致しませう。（ト小松に向ひ、）何れお禮に上りまする。

小松　決してそれには及びませぬ。

お六　此子は私が背負つて上げよう。

お崎　それは有難うござります。

〽お六は子をば背に負ひ、片手に手を取り急立つれば、お崎は跡を振返り、伏拜みてぞ歩み行く。

ト お六徳太郎を背負お崎跡を振返り、片手で拜み乍ら下の方遠見の蔭へはひる。小松は門口から跡を見送り、

小松　思ひ掛なく藥を呑む、湯を上げたのが緣となり、隱す素性も迷子札の名前で知つて是非無くも包ますなされし身の上話し、豫て噂に聞いて居たが、世にも稀な心立、亭主を取られ内を潰され、どんな佛の樣な者でも恨まにやならぬ所をば、亭主に愛想を盡されるは皆な其身が不束故と、人

を恨まぬお崎さん、あれが誠に女の鑑、是迄随分女房子のあつた人を欺しても、恨まば恨めと思つて居たが、あの美くしい心を聞き、實に此身が恥かしく、こんなに泣いた事はない。

〽又も涙の雨やさめ、時雨る空の晴れやらぬ思ひは同じ賢三郎、一間の内より出來り、

ト小松ぢつと思入、奥より賢三郎涙を拭ひ出て來り、

賢三 出るに出られず障子の内で、己も思はず涙をこぼした。(トよき所へ住ふ。)

小松 お前も其處に聞いておいでか。

賢三 流石の手前も情に迫り、今日は眞實に泣いた樣だな。

小松 泣いた所か手拭を、絞る樣に私は濡らした。

賢三 一つ腹に生れても、兄は惡事に身を持崩し、人でなしと云はれるに、世にも稀な妹が貞節。

小松 え、お崎さんを妹とは。

賢三 此賢三郎が實の妹だ。

小松 えゝ、それは誠でござりますか。(ト誂への合方になり、)

賢三 まだ此己が八日町の、親の内に居た時分、文三の所へ甲府から嫁に遣つたあのお崎、其後己がぐれ出して諸所を遊んで歩く内、錢に困つて七兵衞に勸められて盜みを初め、それから手前を八王

子で色になつて連れて逃げ、下谷に隱れて一年ばかり遊んで居る內持つて居た金は殘らず遣つてしまひ法の附ねえ所から、手前は藝者己は又旅を稼ぎの護摩の灰、時折旅から東京へ逢ひに出て來た其時に、文三の事を隱して居たから、知らずに居たも小田原で、委しい話を聞いてびつくり、妹聟故打明けたら手前が面目なからうと、それで今日迄隱して居たのだ。（ト小松思入あつて、）

小松　段々素性が知れて見ると、實に濟まない事だらけ、どうしたらよからうか。

賢三　今更言つても仕方がねえ、是も二人が因緣づくと、諦めるより外はねえ。

小松　何だか胸が一杯で、又血の道でも起りさうだ。

賢三　起らぬ內に前用心、合藥でも呑むがいゝ。

小松　大坂町の高木で賣る、精婦湯がよく利くから、あれを振出して呑みませう。

賢三　己も何だかもやもやと、胸騷ぎがしてならねえ。

小松　お六さんが歸つたら、酒でも買つて一杯お上り。

賢三　酒で愁ひを拂はうか。

小松　私は奧で藥としませう。

〽頭痛押へて奧の間へ、物思ひ氣に入りにける。

ト小松宜しく思入あつて。奥へ這入ろ、賢三郎思入あつて、

賢三 あゝ妹が態々甲府迄、尋ねて行つても内はなし、又親類の厄介故苦勞をさせるが不便だから、出て止めようと思つたが、甲府の内の絶えたのも己の身性の悪い故、妹に逢ふも面目なく、奥に隠れて居た苦しさ、何かに付けて直涙の、出るのは己もゆるんだか。どれ、夜食の茶でも沸して置かうか。

〽圍爐裏へくべし粗朶よりも、恨みに燃ゆる胸の火の、消ゆる間ぞ無き旅の空、文三は煙る軒を見て、

ト時の鐘幽めて山下し、賢三郎圍爐裏へ粗朶を入れろ、花道より三幕目の文三、脚絆草鞋菅笠、達磨の風合羽を引掛け出て來り、花道にて、

文三 火を借りる所がないと、頻りに煙草が呑み度くなる。やうやく家にありついた、向うの内で火を借りて一服呑んで行きませう。

〽笠を脱捨て門へ來て、（ト文三笠を脱ぎ門口へ立ち、）

もし、御無心ながら火を一つ、お貸し下さりませ。

賢三 さあ／＼這入つて付けてござれ。

文三　有難うございまする。（ト内へ這入り）眞平御免下さりませ。

ト合方になり煙草をつぎ、煙管を出して付ける。

賢三　今朝は何處からお立ちなすつた。

文三　犬目から立ちました。

賢三　それはお早うございましたが、何れへお出でなさいますのだ。

文三　はい、石和迄參ります。（ト又煙草を吸付けようとして、顏を見合せ）や、お前は。（ト賢三郎頷き）

賢三　おゝ、下谷の穗積文三さんか。

文三　おゝ、お崎が兄の太之助さん。

賢三　お前に逢ふも何年振りだか。

文三　はからず爰で出合ふといふは。

賢三　思ひ掛けない。

兩人　事だなあ。

賢三　草鞋を脫いで爰へ來なせえ。

文三　それぢやあ兄貴御免なせえ。（ト礒の入りし合方になり、捨ぜりふにて草鞋を解き下手へ住ひ）久しい跡

に東京へ來なすつた時逢つたぎり、其後音信不通故、何處に居なさるか知らなんだが、それぢやお爰に居なさるか。

賢三 お前に逢ふのも面目無いが、知つての通り遣ひ過ぎ、七年跡に内を出て、それから諸縣を彷徨つて是といふ目途も無く、此頃爰へ泊込んで何か商法に取付かうと、久しく日和を見て居ますが、文さんお前はどうしなすつた。

文三 私も矢張同事、惡い藝者に引掛り、遂々内を耗つてしまひ、生れ故郷の下谷にも居られぬ譯で餘儀なくも、女房子を跡へ殘し、少し尋ねる者があつて石和邊迄行きますのさ。

賢三 そりやあお前も詰らぬ事だが、惡い藝者と言ひなさるは、何處の藝者に溺つたのだ。

文三 數寄屋町の流行子、新常磐屋の小松といふ藝者にすつかり欺されました。

〽言ふ聲洩れて奥の間より、障子細目に窺ふ小松、ハツと驚きさす障子。

ト此内上手の障子を少し明け小松文三を見てびつくりせし思入にて、そつと障子をしめる。

賢三 それぢやあ其の小松といふ藝者に、お前は欺されたのか。

文三 我身の恥を打明けて他人で無いから言ひますが、近所の事故松源へ初めて呼んだが緣となり、それから諸所へ呼んだので、ぱつと世間へ浮名が立ち、他から客を呼ばぬと聞き意地に掛つて何日

毎晩、揚詰にした其果が、月々溜る借金に、終に仕舞は首も廻らず、いつその事に身を投げて死んで來世で添はうといふ無分別から向島の、三圍下へ飛込みましたが、川下に居た網船の六右衛門といふ人に危ふい命を助けられ、跡にて人の話に聞けば、初手から小松は死なぬ氣で、履物ばかり其處へ置き、言替して居る男の所へ逃げて行つたといふ噂さ。

賢三　して其小松が言替して居る、男といふは何者だ。

文三　何處の者やら知らないが、其名は船木賢三郎と言つて、素性分らぬ者とやら、是迄河岸の交際で藝者を買つた事もあれば、馬鹿にされない料簡で居たのが矢張此方の自惚、金を取られた其上に、命迄も取られる所、神や佛のお惠で助かつたからいゝけれど、あの時死でしまつたら、世間の人の笑ひ草、實に悔しうござりまする。

〽兄弟中に打明けて話す内にも悔しさの、見ゆる文三が敵ともいふは我身と聞くつらさ。

ト文三悔しき思入、賢三郎は切なきこなしあつて、

賢三　そりや嘸悔しからう、腹の立つのは尤もだ、さうしてお前が石和迄行くのは何しに行きなさるのだ。

文三　其小松が生れた所は、石和村だと聞いた故、故郷へ歸つて居ようかと、尋ねにわざ〳〵來ました

のだ。

賢三　尋ねる小松が親里に、居たらばお前どうする氣だ。

文三　存分恨みを言つた上、弄殺しに殺さねば、私の心が晴れませぬ。

賢三　そりやあ悪い料簡だ、欺されたのはお前が誤り、弄殺しにしたならば、そりやあ心が晴れようが、折角お前が網船へ引上げられて助かつた、命を再び捨てにやあならねえ。

文三　そりやあ人を殺せば死罪になるのは、元より覺悟でござりまする。

賢三　妹の縁でいふではないが、死なうといふは跡先見ず、憎いと思ふ小松を殺し、お前は心が晴れるだらうが、跡に殘つた女房が子供を抱へどの位な難儀をするか知れやあしねえ、そこを思つた事ならば、殺すは思ひとまりなせへ。

文三　跡へ殘つた女房子が、難儀をするも思つて居るが、男の意地故どうあつても、小松を殺してしまはねば、死んでも中有に迷ひます。

〽拳を握り齒嚙をなし、さも悔しげに見えければ、（ト文三悔しき思入、賢三郎も是非無思入にて、）

賢三　それ程迄に思ふなら、幾等己が止めたとて、所詮止りなさるまいから、心の儘にしなさるがいゝ。

文三　己より見れば年上の、お崎が兄の太之助さん、お前が斯うして止めてくれるを、止まらないのは

分らぬ奴と定めて思ひなさるだらうが、死なうと言つたが噓だと聞いては、どうも小松を殺さねば、悔しい胸が晴れませぬ。

賢三　さういふ事なら止めないから、殺して心を晴らしなせえ。

文三　どうで殺せば自首する料簡、是限りお前に逢はれるか、逢はれないか知れませぬ。

賢三　そりや己とても同じ事、斯うして居ても老少不定、明日にも知れぬ人の身の上。

文三　それも命が助かつて、

賢三　生きて此世に居たならば、

文三　退れぬ緣の兄弟中、

賢三　目出度く再び、

兩人　逢ひませう、

〽互ひに死ぬる覺悟故、是が別れと兩人が名殘を惜しむ門口へ、此家のお六が立歸り。

ト兩人宜しく憂ひの思入、下手より以前のお六出て來り、

お六　もし、小松さんは。（ト言掛ける。）

賢三　おこれ、今こまつたとお前が言つたは、隣の内の氣違ひか。（トお六に呑込ませろ、お六頷き、）

お六　あゝ氣違ひ〳〵、踊り出して困りました。（ト此内文三は草鞋を穿き、）
文三　そんなら兄さん。
賢三　急いで行きねえ。
文三　明るい内に越せればいゝが。
〽文三は笠を打冠り、峠をさして、（ト三重幽めて山下しにて、文三下手へはひろ、お六跡か見送り、）
お六　今の人は何でござります。
賢三　あれが小松に欺された、穂積文三といふ人だ。
お六　さうとも知らず小松さんと、迂濶言つたは私が粗相。
賢三　此後も人が居たならば、氣を付けて言つてくんねえ。
ト山下し馬士唄の合方にて、花道より以前の七兵衛出て來り、
七兵　あい、今歸りました。
お六　何ぞ忘れ物でもしたのか。
賢三　連れて行つた娘はどうした。
七兵　駕籠に乘せて行つた處、あの子の内から捜しに出た、番頭殿に途中で出合ひ、娘も大層悦んで、久

番頭も私が、受取りますれば送るには及びませぬと止めるから、しつかり渡して歸りました。
賢三　そりやあ東京迄行かねえで、いゝ所で出合つたな。
七兵　其番頭が此内迄、お禮に參らにや濟みませぬが、兩親共に夜の目も寢ず、行方を案じて居りますれば、一刻も早く立歸り、悦ばせ度うござりますと、禮の印と十圓渡し、何れ跡から上りますと、直に連れて歸りました。
賢三　さうして主人を聞いてくれたか。
七兵　聞きましたらば疵所も治り、達者になつたと言ひました。
賢三　そりやあ何より有難え。おゝ、小松が奧に隱れて居よう、もう歸つたと言つてくんねえ。
お六　あい、承知しました。（ト奧へはひる。）
七兵　それぢやあ十圓渡しますよ。（ト懷ろから紙包を出し、賢三郎に渡す。）
賢三　思ひがけねえ金が出來た。（トばた〳〵にて奧よりお六出て、）
お六　もし、内にはおいでなさいませんよ。
賢三　文三が殺すといふを聞き、裏から外へ逃げ出したか。
お六　小松さんにも似合はない、逃げなさらずともいゝ事を。

七兵　いや、居なさらねえのは丁度幸ひ、賢三さんも裏から山へ、早く爰を逃げなせえ。
賢三　なに、逃げろとは。
七兵　目明し手合が爰彼處に、網を張つて居る樣子だ。
賢三　それぢやあ己の足が附いたか。
お六　七さん、お前も一緒かえ。
七兵　爰等が己も年明だらう。
賢三　どれ、鞍替に、（ト立上るを木の頭）逃げようか。
ト兵兒帶をしめる、七兵衛は門口を窺ふ、此見得時の鐘早き合方、山下しにて、宜しく。

ひやうし　幕

七幕目

笹子峠小松殺の場
同古宮猿集會の場
駒飼山越捕物の場
石和川原鵜遣の場

〔役名――鵜遣甲作、船木賢三郎、穩積文三、根津忠藏、三五郎、甲作忰乙松。賢三郎女房お千代實は小松、文三女房お崎等。〕

（笹子峠の場）――本舞臺一面の平舞臺、上下雪山にて見切り、正面上手折廻し畫心の雪山、下手谷間遠山の書割、此前に小高き山、此蔭へ死骸を入れる事あり、よき所に杉の大樹、日覆より雪枝の杉の釣枝、總て甲州笹子峠、中頃の體、爰に○△の獵人二人手綱田達附草鞋、ほくそ頭巾を冠り、鐵砲を擔ぎ立掛り居る、此見得臼挽唄雪下しにて幕明く。

○何ぼ甲州が山國だとて、未九月の末だのに、こんなに雪が降られては、思ふ様に働けず、又四五日も休まにやならねえ。

△それに此頃狼が、爰等邊へ時折出て、旅人を喰つてならぬから、出合つたらば一打に、打殺さうと思つて居るに。

○向うも命が惜しいと見え、己等達の影を見ると山の中へ一目散に、尻尾を卷いて逃込むが、早く殺してしまひてえものだ。

△こんな噂がぱつとすると、自然と往來の人が無くなり、土地の衰微になる事だ。

○それ故峠の甘酒屋が、禮をするから狼をうつてくれろと私等へ頼み。

△四五日跡に喰殺されたは、隨分可成な女だつたが、あれは何處の者だつたな。

○駒飼邊の者ださうだが、元が旅の女郎をして、人を欺して金を取つた惡い奴だといふ事だ。

△どうで狼などに喰はれて、非業な死をばする者は、そりやあ碌な者ぢやあねえ。

ト雪下しになり、雪降つて來る。

△だん／＼強く降つて來る、こりやあ今夜も積るだらう。

△山から出て來た猪を打つて、今日の立前を取つたらば、

○早く歸つて濁酒で、溫まつて寐るとせう。

△己は餅を搗いてあるから、雜煮を喰つてあつたまらう。

○いや、餅と酒とは右左り、

△是から二人も左右に別れ、

○もう一廻り廻らうか。

△滅法寒くなつて來た。

ト右の鳴物にて兩人左右へ別れてはひろ、時の鐘誂への合方、雪下しにて日覆より雪を降らし、ばたばたにて花道より前幕の小松頰冠り跣足にて出て來り、花道でちよつと跡を見返り、舞臺へ來りほつと思入あつて、

小松　遂に話しに聞かぬ故、賢三さんの妹の亭主と知らぬ文三さん、取る丈金を取つた上向島の渡し場で、

一人情死させたから、私を切らうといふのも尤も、奥に隱れて居たけれど、お崎さんの貞實な心に強い氣も挫け、臆病風に怖氣立ち、裏から此處迄逃げて來たが、思ひがけない此雪で、往來の無いは丁度幸ひ、澤山積らぬ其内に、裏手を廻つて内へ歸らう。（ト向うへ思入あつて、）や、向うへ人が來る樣子、疵持つ足故小蔭へ隱れ、遣過して跡から歸らう。

ト石の合方にて小松思入あつて杉の大樹の蔭へ隱れる、花道より前幕の文三出て來り、

文三　小松の產れが石和と聞き、それを目當に尋ねて來て、思ひがけなくお崎が兄太之助殿に出合つたが、心が急く故そこ〳〵に、出ると間も無く此大雪、それに付けても今しがた遠目に見掛けし女姿、どうやら小松に似て居る故顏を見ようと思ふ内、風に冠つた笠を取られ、跡へ戾つて拾ふ間に、其女を見失つたが、横道へでも曲つたか、何にしろ向うへ行つて一息繼いて行くとしよう。（ト舞臺へ來り、四邊へ思入あつて、）雪に殘つた足跡は、正しく女の足跡だが、此處ぎり先へ見えぬのは、何處へ行つた事なるか、はて合點の行かぬことだなあ。（ト合方きつぱりとなり上の方を尋ねる、此内小松杉の上手へ廻り大樹の蔭より顏を出し逃げようかといふ思入、文三下手を尋ねる、トゞ顏を見合せ、）や、おのれは小松か。

小松　文三さん。

文三　よくも己を欺したな。
小松　えゝ。（ト逃げに懸るを引戻し）
文三　目に掛つたら逃しやあしねえぞ。（ト小松是迄といふ思入にて）
小松　逃げるなと言ひなさりやあ、何で私が逃げるものかね。
　　ト文三を振拂つてづう／＼しく裾を捲つてしやがむ。
文三　汝ばかりはあの様な、不實な者とは思はなんだ。よくも／＼此文三を、一皮冠つて欺したな。
小松　そりやあお前が間抜だから。
文三　何だと。（トきつとなる、誂への合方になり）
小松　女郎や藝者は客生業、いやな座敷も賣物に、機嫌を取つて勤めにやならぬ、惚れたと見せて鼻毛を算み大した金を貰ふのは、口直しにする情人を遊ばしておく金にするのさ。腹を立つてはいけないが、行渡りのいゝ顔をして綺麗に金は遣ひなさるが、まだ／＼青い藝者買、そんな事ぢやあ惚れられないから、惚れてる内のお内儀さんを、可愛がるのが錢入ず、只程安い物は無いから、お内儀さんを大事におし、それが一の分別だよ
文三　そりやあ汝が言はねえでも、百も承知をして居る事だ、其女房に難儀をさせ、親から貰つた地面

家作、諸道具迄も賣つてしまひ、大した金を入上げたも、心がら故今更に愚癡を言ふにも及ばねえが、よくも日外一緒に死なうと、虚涙を零した上、いでといふ時己一人に身を投げさせて跡へ殘り、死んだ積りで影を隱し、男の所へ行つたとやら、己も運よく助けられ、命は捨てずにしまつたが、友達中へ此文三が、顔の出せねえ樣にしたは、皆な小松おのれゆゑ、その悔しさに女房子の難儀も餘所に諸所方々、捜し歩いた甲斐あつて、爰で逢つたは天の助け、殺して恨みを晴らさにや置かぬ。

小松　遲かれ疾かれ一生に、一度は死なにやあならぬ體、まだ二十五の曉を越して間の無い私だから、ちつと死ぬにやあ早いけれど、お望みなれば殺されようが、惡たれ者でも人一人、言はずと知れたお前は下手人、今度は一緒に死なれるから、それを樂みに文三さん、欺した事は許しておくれ。

文三　假令下手人で死罪になるとも、汝を己が殺さにやあ、恨みの念が晴れねえぞ。

小松　元欺されたは間抜だから、それを思はず恨みに思ひ、死んでも私を殺し度いとは、お前も松助同樣に、死神にでも誘はれてるのか。

文三　其生口を。（ト懷から短刀を出し拔かける、小松止めて、）

小松　もしお前は、私を切る氣か。

文三　おゝ、切らねばおれの腹が癒えぬ。

小松　いよ〳〵切るなら、私は逃げるよ。（ト文三を突倒し、小松逃出す。）

文三　なに、逃げようとて逃がすものか。

ト文三立掛る、小松雪を取つて打付け逃げる。文三雪を拂ひ、追駈けて引戻し、ちよつと立廻つてきつと見得。是より誂への鳴物になり、文三短刀で切つて掛る、小松は菅笠を取り是を受止め、雪下し烈しく、舞臺一面に雪降る立廻り宜しくあつて、小松逃行くを、後から一刀切る。

小松　人殺し〳〵。（ト杉の大樹の廻りを逃廻る事一二度あつて、顏へ糊紅を附けし吹替逃出る、疊掛けて切り倒るゝを乘掛り　止刀を刺す。）

文三　よくも己を欺しやあがつたな。（ト死骸を踏にじり悔しき思入あつて、）是で日頃の恨みも晴れ、心もさつぱりしたからは、一先故郷へ立歸り、女房や子供の始末を附け、訴へ出てお仕置受けん。や、向うへ人が來る樣子、見咎められぬ其内に、（ト文三死骸を山の蔭へ入れ、）間道傳ひに裏手へ越し、むゝさうだ。

ト文三短刀を懷へ入れ、笠を持ち上手へ急ぎはひる、舞臺花道とも雪布を引いて取り、知せに付ドロ

ドロになり、道具居所替りになり、上下の雪山只の山に替り、釣枝杉の釣枝に替り、正面の雪山を引いて取る、遠見打返しになる。

(古宮の場)——本舞臺三間の間常足の二重、岩の蹴込此上に九尺常足の二重、古びたる辻堂、茅葺屋根、木緣附上手板羽目、打破り、下手狐格子、左右板羽目、是も打破りになる仕掛、大樹の杉を其儘殘し、向う一面岩山杉の梢を見せし夜の遠見、左右岩山にて見切り日覆より杉の釣枝、總て笹子峠、古びたる辻堂の體。ドロ〲にて道具納まると、大薩摩かゝり床の淨瑠璃になる。

〽それ連山峨々として杉樹茂りて森々たり、梢を落す木枯に、岩にせかるゝ谷川の水より外に音ぞなき、笹子峠の辻堂に結びし夢も破れ格子、扉開いて立出る、小松は四邊見廻して、

ト此内よき程にドロ〲にて、差金の蝶二羽辻堂の内へ這入る、是にて扉を開き以前の小松夢を見たる思入にて、前へ出で、ホッと思入あつて、

小松　そんなら今のは夢であつたか。(ト本釣鐘を打込み誂への合方になり、小松思入あつて、) 先刻思はず文三さんの、お内儀さんにお目に懸り、聞くも哀れなお話しに、人を欺して金を取る惡い心の私でもまさか鬼の子でも無ければ世の人情は知つて居る故、人を恨まぬお心立に、涙に暮れて過去つた惡い事が胸に浮み、我身を悔んで居る所へ文三さんが内へ來て、見えがゝりに殺すといふ話し

を聞いて若し奥へ、踏込れて殺されたら、賢三さんや七兵衛さんに、難儀を懸けねばならぬ故、裏からそつと脱出して、此辻堂に隱れて居る内、花を引いた昨夜の勞れで寐るとも無しに寐たと見え、文三さんに殺された、どつとしない夢を見たので、木の葉颪の此寒さに、びつしより肌へ汗をかいたが、餘程私も神經が狂つて居ると見えるわえ。何にしろ切齒まれ、惣身へ金が這入つたから、儲口でもあるだらう。（ト空を見て、）寐た故時は知れないが、未だ六時にはなるまいから少しも早く歸ると仕よう。

〽木の間の星をよすがとなし、帶引しめて辻堂を下りるとたんに生茂る、藪を隔てゝ狼の鳴く音に小松はびつくりなし、

ト小松帶をしめ辻堂より下りようとするとたん、下の方にて狼の遠吼する。小松びつくりなし、跡へ足を引き、

今見た夢に獵人が、時折此處へ狼が山から出ては人を喰ふと、言つたはもしや正夢なるか、今一聲鳴いたのは犬とは違ふ樣子だが、あれが狼の遠吼かしらん。何ぼ氣丈な私でも、惣毛立つ程氣味が惡い。（と向うを見て、）向うに二つ並んで光るは、若し狼の眼では無いか。

〽人を人共思はざる氣丈の小松も狼に、ぞつと身の毛も忽ちに、齒の根も合はぬ胴震ひ、（ト

小松氣味の惡き思入れ〽一陣落す山風に、連れて笹原がさ〳〵と、連立ち出る狼に、

ト風の音にてちら〳〵と木の葉を散し、下手山の蔭より縫ぐるみの狼三疋出て來り、小松を取卷く、

や、こりや狼が、

〽びつくりなして辻堂の内へ逃込み戸をしめれば、緣へ上りて戸や羽目の破れを嚙割る音烈しく、小松は詮方泣聲にて、

ト文句の如く狼緣へ上り、戸や羽目の破れを嚙割る、小松破れたる狐格子より顏を出し、

誰ぞ助けて下さいまし、狼に喰はれます、助けて下さい〳〵。

〽一生懸命呼立つる聲は谺に響けども答ふる人も嵐し吹く音も烈しく戸や羽目を、嚙割り嚙割り狼が、中へ入るよと見えければ、あつと計りに嚙付かれ、扉を毀して逃出る小松。

ト文句に倣ひ宜しく、狼戸と羽目を嚙割る音して、ト、ばら〳〵と毀れし穴より狼二疋はひると、内にて小松アツと言つて下手の崩れ掛りし狐格子をばら〳〵に毀し、小松手足へ糊紅を附け逃げて出る、狼も追駈け出て、

〽耳迄裂けし口を明け眼怒らし取卷れ、詮方なさに手を突いて、

ト狼三疋小松を取卷く、小松是非なく下に居て、

これ、どうぞ命を助けて下され、内へ歸れば此禮に、魚なりと肉なりと、きつと禮に持つて來るから、命ばかりは助けて下され、これ拜みます／＼。

〽兩手を合せ伏拜めど、見向もなさず惡獸は、見込みし女逃さじと、牙を鳴らして飛附きたり。

ト小松宜しく思入、文句の切床二挺の合方、幽めて山颪になりて狼小松へ飛附き、狼に喰るゝ立廻りあつて、小松辻堂へ逃げ込む、狼追行き立廻つて上手の羽目をばら／＼と毀し、二方吹拔になり、辻堂の正面は中段四枚開きの書割、小松糊紅になり、ひよろ／＼として柱へ取付ききつと見得、狼又飛付き小松どうとなり、

あゝ苦しい／＼。

ト狼手を銜へて出て來る、小松左りの手を隱し、ひよろ／＼と立上り、花道へ行かうとするを、狼裾を銜へて引戻し、小松立廻つてどうとなる。

〽手負は苦しき息を繼ぎ、

かゝる非業な死をなすも、十四の年から家出なし、親に不孝をした罰と、多くの人を欺した報い、自業自得で仕方がねえ、早く己を殺してくれ。

〽言ふ聲さへも四苦八苦。(ト小松ひよろ／＼と立上り辻堂の縁へどうとかける。狼一疋後ろから襟へ嚙付き二疋は左右の足へ嚙付く、)

〽哀れなるかや。

ト本釣鐘を打込み、仕掛にて小松の襟より糊紅流るゝ。本釣鐘山おろし三重にて、　幕

(返し、駒飼宿の場)――道具出來次第明けると本舞臺中足の二重、土手の蹴込み上の方山の張物にて見切り、下の方藪疊松の立木、日覆より同く釣枝、向う石和へ續く枝川の流れを見たる田圃夜の體。駒飼宿入口の體。爰に前幕のお崎德太郎を連れ立懸り居る。下手に前幕の忠藏下に居る、此見得合方水の音にて幕明く。

忠藏　もしお内儀さん、定めてお腹も立ちませうが、どうぞ御勘辨下さりませ。

お崎　小佛峠で谷へ落ち死んだと思つたが、それでは其方は助かつたか。

忠藏　崖から谷へ落ちました時、左りの足をひどく打ち、歩く事が出來ませず、ひく／＼致して居りましたを、山稼ぎの杣が見付け、どうして落ちたと聞かれた時、賊に出合つて此谷へ、落ちましたと申しましたら、それは如何にも氣の毒だ、私が家で歩ける迄、療治をしろと親切に言つてくれますは、地獄で佛と連立參り、杣が木から落ちた時附けますといふ打傷の藥を貰ひまして附けま

したが、甲斐に名高い德本の傳法とやらで奇妙に利き、僅かな內に痛みも去り元の樣には成りませぬが、歩ける樣になつたゆゑ、惡い心を改めて、眞人間になります氣で、身延山へ參詣に出掛けましてござりまする。

お崎　そなたばかりは正直ものと、思つて居たゆゑ賴みに思ひ、甲府へ供に連れた所、小佛峠で私に迫り、既に此身を汚さうと言はう樣無い事をして、まだ飽きたらず其樣な、其方は巧みなしやるのか。

忠藏　其お疑がひは御尤でござりますが、親から貰つた大事の體を、不具になしたも心から、濟まない事を致しましたと、思ひまするも勿體無い。どうぞお詫を仕度いものと、思ふ所へはからずも、爰でお目に懸りましたは、御祖師樣の引合せ、どうぞ御免なされて下さりませ。

ト側へ寄り、辭儀をする。

德太　母樣、忠藏が怖いわいの。（トお崎に縋る。）

お崎　なに、頑是ない德太郎でさへ、其方を此樣に怖がるもの、私は猶更怖つてならぬ。

忠藏　今更お詫を致したとて、お取上はござりますまいが、噓と眞實は長い目で御覽なすつて下さりませ。此坊ちやんに迄忠藏は、怖いと言はれまするのも、皆な心の間違から、今改心をして見ます

と、どうしてあゝいふ氣になつたかと、實に悔しうござりまする。

ト忠藏顏へ手拭を當て泣く、德太郎是を見て、

德太　あれ、忠藏が泣いて居るよ。

お崎　おゝ泣いて居るとか。（ト誠かといふ思入、忠藏眼を見て、）

忠藏　お前樣はどういふ事で、お眼がお惡くなりました。

お崎　重なる苦勞に兎や角と、初手は逆上眼であつたが、惡い風が球へ染み、終に見えなくなつたわいの。

忠藏　德ちやんをお連れなされ、嘸お困りでござりませう。是迄の申譯にお供をさせて下さりませ。

お崎　いえ〳〵それには及ばぬわいの。

ト此時上手より前幕の賢三郎頭巾を冠り七兵衞のトンビを着て、草履にて出て來り此聲を聞き、

賢三　其處に居るのは、妹のお崎か。

お崎　えゝ、私を妹と仰しやるは。

賢三　そちが兄の太之助だ。

お崎　えゝ、（トびつくりなし、）兄さんでござりましたか、えゝお懷しうござりまする。（ト賢三郎に縋付く、）

賢三　久しく音信せなんだのは、深い譯があつての事、どうぞ堪忍してくれろ。

お崎　これ徳太郎、是が不斷いふ叔父樣ぢやぞ。

徳太　そんなら私の叔父さんかえ。（ト取付く、）

賢三　おゝいゝ子だ〳〵。（ト天窓を撫で、）斯ういふ可愛い子がありながら、藝者に現を拔すとは、文三どのも心得ちがひだ。

お崎　それに付いて内はなく、艱難辛苦をした故に、終に盲目となりました。

賢三　そちが苦勞をしたことも、仔細あつて委しく聞いた、久しく逢はずに居た故に話し度い事聞度い事、山程あるが此處は往來、殊にはゆつくりされぬ身の上、斯うして居る間も心が急けば、石和村の鵜遣で、甲作といふ者の家を尋ねて行つてくれ、己も跡から直に行くぞ。

お崎　おゝ其甲作殿といふ人には、小佛峠で難儀を救はれ、厚いお世話になりましたから、私がお禮に其家を尋ねて參ります所。

賢三　知る人なれば丁度幸ひ、少しも早く其處迄行け。（ト忠藏前へ出で、）

忠藏　甲作殿へ私も改心致した事を話し、此身の詫を頼みますから、どうぞ其處迄私を、お供にお連れ下さりませ。

賓三　して、此人は。
お崎　此間まで家に居た、忠藏といふ若い者。
忠藏　心得違ひでお內儀さんに、御難儀を掛けましたが、忽ち此身に罰が當り、御覽の如くの跛になり、改心致しました故、御詫を致して居りまする。
賓三　さういふ事なら石和迄、案內をして遣つてくんねえ。
忠藏　へい、德ちやんを背負して、御案內を致しませう。
お崎　それではほんまに改心したか。
忠藏　まだお疑ひなさりまするか。
賓三　直に己も跡から行くから、氣遣はずと行くがよい。
お崎　成らう事ならお前と一緒に。
賓三　少し爰に川があるから、一足先へ行つてくれ。
お崎　それでは跡から來て下さりませ。
賓三　今に行くから待つて居やれ。
忠藏　どれ、お供致しませうか。

ト合方水の音にて、忠藏德太郎を背負ひお崎杖を突き、花道へはひる、賢三郎跡を見送り、

賢三 思ひがけない文三が來たので、小松は何處へ逃げて行つたか、此方は笹子と思つたが、文三が石和へ行くと聞き、初狩の方へ行つたか知らぬ。是に付ても小田原の、相模屋へ來たゆすりの熊藏、己が盗をした事を知つてる故に酒匂河原で、據なく殺した時、助けてくれと縋られた、娘は己が金を取つた渥美の娘のお夏殿、内へ歸して遣つたので、足手纏ひが無くつて安心。まだ安心の出來ねえのは、先刻七が言ふ通り、探索方が近邊を歩くは己を張る樣子、もう一遍小松を捜し、知れずば一先づ石和へ行かう。（ト此以前上手へ五幕目の化地藏の三五郎脚絆草履にて窺ひ居て、）

三五 おい、小松が色の賢三さん、よく己が邪魔をしたな。

賢三 其方は何處かで見た顏だが、邪魔をしたとは何の事だ。

三五 元手を掛けて東京から、金に仕ようと連れて來た、渥美の娘を酒匂から、お前が連れて來た故にそれを返して貰ひてえのだ。

賢三 おゝ、其一言で思出した、日外酒匂で出會した、勾引しの三五郎か。

三五 勾引しとは何の事だ、面に似合ぬ言種だが、色になつて東京から、引攫つて來たあの娘、得心づくで相模屋へ前借をして遣る所、誰が差がねか裏から逃し、お前が酒匂の河原から、富士の根方

へ連れて行つたから、又盗人に追錢で、此甲州迄出掛けて來て、笹子下の安泊、笹屋と聞いて隱家へ尋ねて行つたら誰も居ず、近所で聞けば夫婦共、盗みの廉で引かれたといふのでこいつお峠を越し、慥に逃げたに違えねえと、お前の跡を追つて來たのだ、玉がなけりやお償ひの金を出してあやまんなせえ。

賢三　渥美の娘は七兵衞に、今日東京へ送らして立たしてやつた其途中、尋ねる人に出會し、直に娘は渡したから、用があるなら東京迄、出懸て行つて文句を言へ。

三五　そりやあお前の指圖は受けねえ、行かうと行くめえと己の勝手だ、路用を遣つて笹子迄、來たのは仕事の邪魔をした、償ひ金を貰ひに來たのだ。

賢三　おれに向つて償ひを出せといふのはどういふ氣だか、餘まり目先が見えねえ奴だ。

三五　大きな聲で威すのは、己より此方が目先が見えねえ、假令娘を引攫ひ、勾引しの科があるとも、何程か苦役をすれば濟むんだ、兇器を持て手疵を負はせ、小梅通りで五百圓金を盗んだ强盗に、酒匂河原で熊藏を慘く殺した人殺し、此二ヶ條で命のねえ大した科のあるこなた、それを知つてる己だから、何程か金を出してもよからう。

賢三　路用を遣つて來た事だから、草鞋錢を呉れろといふなら、其方を素手で歸しやあしねえ、いやな

威しを言はれちやあ十錢も遣る氣はねえ、いかにも其方の言ふ通り兇器を持つた強盗に、人殺しのある賢三郎、むだな口を利かねえで、早く内へ歸るがいゝ。

三五　五百圓濡手で取つた餘りの金があるだらう、手取早く百圓出したら、それで命を繋いでやらう。

賢三　天窓に習つて滅法な大きな事を蒔出したな、強盗の上人殺し、とても命のねえ己だ、默つて歸りやあ許して遣るが、ぐづ／＼言やあ殺してしまふぞ、一人殺すも二人殺すも、取られる首は只一つだ、命が惜しけりや早く歸れ。

三五　四邊に聞手がねえといつて、此まゝ素手ぢやあ歸られねえ、度々人に切られたから、化地藏といふ仇名を取た、山女衒の三五郎、體は地藏の石より堅え、切られるものなら切つて見ねえ。

賢三　命を取るも殺生だが、世間の爲にならねえ野郎、どれ一思ひに殺してやらうか。

三五　小癪な事を。

ト賢三郎懷中から短刀を出し拔掛るを、三五郎止めちよつと立廻つてきつと見得、時の鐘誂への鳴物になり、三五郎木ッ切を持ち宜しく立廻りあつて、目潰しに砂を打付け賢三郎おこつく、三五郎は上手へ逃げてはひる。

賢三　えゝ、口程にもねえ野郎だなあ。今彼奴のいふを聞けば、七兵衛夫婦が引かれたといふが、舊惡

のある體だから、所詮歸る事はなるめえ。小松の行方も氣掛りだが、浮々しちやお居られねえから、石和へ行つてにけると仕よう。

ト此内風の音烈しく、上手の山の蔭より以前の狼一疋小松の切首を銜へ出て來る、賢三郎是を見て、

や、こりや狼が人を喰つたか。

ト狼首を下へ置いて賢三郎を目掛飛掛る、賢三郎短刀を拔き狼を突く、是にてぐる〳〵廻つて倒れる、手拭ひで短刀を拭ひ、鞘へ納め懷中へ入れ、

何處の誰か知らねえが、喰殺されたは女と見える。（ト風の音になり焚殘りの火燃上る。）今一吹の風につれ、殘つた焚火が燃上つたは、丁度幸ひ此灯りで。（ト首を覗き見て手に取揚げ、）や、こりや女房小松が首、え、、、。（ト首を持た儘どうとなる伏鉦の入りし地藏和讃になり、呆れし思入にて、）扨は矢張峠へ逃け、此頃噂の狼に喰殺されて死んだのか。是迄多くの人を欺し、曲つた事をした故に、惡事の報いで此樣な非業な最期を遂げたのか、心柄とは言ひながら、思へば不便な事だなあ。（ト首を見て愁ひの思入宜しく、）何は兎もあれ此首の、我手に入つたも盡きせぬ緣、是を小松が實の兄、石和の鵜遣甲作へ、少しも早く屆けて遣らう。

ト賢三郎手拭で首を結へ行かうとする、上手へ三五郎先に目明し六人紺付草鞋尻端折り褌鉢卷にて十

手を持出て、

捕手　強盗船木賢三郎、

六人　御用だぞ。

賢三　扨は露顯に及んだか。

三五　おゝ、此三五郎が訴へたぞ。

捕手　さあ尋常に、

六人　縄に掛れ。

トどんどんにて六人打つて掛る、片手に首を持ちちよつと立廻つて、見得より竹笛入りの誂への鳴物になり立廻り、首をかせに宜しくあつて、捕手首を引取り、後へ投る。是にて川へはひりし心にて、

賢三　やゝ、首を川へ投込んだか。

ト是より短刀にて手の利し早切の立廻り宜しく、皆々上手へ逃げてはひる、爰へ三五郎出て後から組付く、振拂つて立廻り宜しくあつて、三五郎の脇腹へ短刀を突込み、三五郎糊紅になり、立身にて苦しむ　賢三郎短刀を抜き血を振ふ、三五郎はどうと下に居る、双方見合つて木の頭、賢三郎手拭ひで短刀を拭ふ、三五郎は落入る、此模様宜しく寺鐘、早き合方にて、

ひやうし　幕

ト浪の音にて繋ぎ直に引返す。

(石和河原の場)――本舞臺跡へ下げて常足の二重、蹴込岩組高低のあゝ誂へ、上下蘆原後ろ奧深に半分山半分川上を見たる川原、夜の遠見、日覆より闇ぼかしの張物を卸し、總て石和川の體。波の音にて幕明く、と波の音打上げ床の淨瑠璃になる。

〽名にしおふ甲斐の白嶺に連なりて山又山の谷間より、落る早瀨の石和川、目先も知れぬ闇の夜に篝の火影使りとなし、落來る鮎を漁りの、業に馴れたる鵜遣ひが、友は妻乞ふ鹿の聲、礒の音も卷込みて哀れを添ゆる秋の末。

ト鮎歌の合方水音礒を冠せ、花道より乙松筒ぽの小長き半纏紺の腹掛、松の脂を結びしを肩へ掛け、誂へ柄の付きし篝を持出て來る、跡より甲作手拭を冠り、好みの筒ぽ半纏胸當、腰蓑鵜籠を擔ぎ出て來り、川を渡り上手よき所へ籠を下し、

甲作　宵に一降掛らうと、思ひの外に持直し、西の方が切上つて、星がちらほら見えて來た。

乙松　雨氣いせゐか眞暗で、篝の利が豪氣にいゝから、鮎の寄りがきつといゝぜ。

甲作　それに今夜は降ると見込んで、仲間の者が出ねえから、川上に少し見えるばかりだ。

乙松　それに風は少しもなし、今夜はしつかりとれるだらう。

甲作 斯ういふ時に儲けにやあ、月夜に遊んで居られねえ。

ト右の鳴物で甲作誂へのビクを襟から斜に掛け鵜籠から鵜を二羽出し繩調べをする。

乙松 此間阿父が買つて來た、此方の鵜もよつ程馴れたね。

甲作 久しく内に飼つて置いた大事の鵜が死んだから、態々己が玉川へ行つて四谷村の斧右衞門どんに此鵜を讓つて貰つたのだ。

乙松 知らねえ者は烏同樣、直もねえものゝ樣にいふが、中々さうでねえものだね。

甲作 買つた方が二十圓で、古い方が馴れて居るから三十圓がものはあるな。

乙松 ざつと二羽で五十圓だね。

甲作 是が己の内の身上だ、是さへあれば親子三人樂に浮世がおくられる。

乙松 己も早く阿父の樣に、一人で鵜をば遣ひたいものだ。

甲作 今の内己が遣ふのを、よく見習つておくがいゝ。(と乙松空を見て)

乙松 又阿父大分曇つて來たぜ。

甲作 おゝ降らねえ内に一汐やらう。

ト鳴物きつぱりとなり甲作乙松兩人川の中へはひる。乙松は篝を前へ出す、甲作川の中へ鵜を二羽放

し、

それ〳〵〳〵うじや〳〵〳〵、それゐた〳〵〳〵。

ト水音烈しく鵜へ水を懸ける、此内鵜鮎を呑み甲作鵜を引上げ鮎を吐かせ、ビクの中へ入れる、捨ぜりふにて宜しく鮎を取る事あつて、よき程に上の方より誂へ小松の斬首流れて來る。

や、こりや女の首が流れて來た。

乙松　延起でもねえ、流して遣らう。

甲作　向うの方へ突出してくれ。

乙作　合點だ。（ト乙松竹切を取つて首を向うへ突出す、水音烈しく、又甲作の手許へ流れ着く。）

甲作　こいつあ不思議な事だわえ、又此首が流れ着いた、大方こりやあ此己に、葬むつてくれといふのだらう。（ト甲作片手で首を取上げる、乙松は氣味の惡き思入）。

乙松　其首は若い女かえ。

甲作　おゝ、まだ三十にならねえ女だ。

乙松　何だか不氣味なものだねえ。何處から流れて來たか知らぬが、川ですつかり洗つたから、切口の血が止つて居る。

乙松　怖い〳〵と思ひながら、矢張首が見たいね。

甲作　それが怖い物見たしといふのだ、それ、とつくりと見るがいゝ。

　　　ト乙松の方へ向けて首を見せろ、乙松怖々ながら首を見て、

乙松　阿父、此首はお前に似て居るぜ。

甲作　なに、己に首が似て居ると。（ト甲作首を見ようとする、鵜鮎を呑む。）

乙松　それ呑んだぜ。

甲作　合點だ。（ト首を川の中の石の上へ置き、鵜を引上げ鮎を吐してピクへ入れ、又首を取上げろ、乙松篝を差出す、甲作首を見てびつくりなし、）や、こりや己に似て居る筈だ、十年先に家出をした、己が妹のお千代の首だ。

乙松　えゝ、（トびつくりして川の中へ尻餅をつき立上つて、）それぢやあこれが内を出た、おいらの實の伯母さんか。

甲作　永年音信不通の妹、爰へ流れて來るからは、此川上に居たと見えるか、何で便りをしなんだか。

乙松　大方こりやあ泥坊にでも、首を斬られなすつたか。

甲作　えゝ、折惡く又呑んだか。（ト首を又石の上に置き鵜を引上げ鮎を吐せピクへ入れ、）思ひがけなく妹の

の首が、己が手に這入つたからは、今夜は漁は止しにせう。

乙松　早く仕舞つて歸りませう。（ト甲作鵜を引上げる、乙松篝を下へ置き鵜を受取り鵜籠の中へ入れ蓋をする、甲作は首を持ち二重へ上り、憂ひの思入にて竹笛の合方にて）

甲作　子供の折から身性が惡く、そでねえ事のみしたやつ故、大方惡い事をして首を斬られた事であらう、何處で川へ打込んだか、己の所へ流れ着いたは、血筋の兄の甲作に葬むつてくれと言ふのだらう、親兄弟に苦勞を掛け憎いやつだと思へども、たつた二人の兄弟に己を慕つて來たかと思へば、憎い所か可愛さうで、胸がいつぱいになつて來た。

乙松　そりや阿父尤もだ、己でせえも悲しいもの、お前は一人の妹だから、嘸悲しい事だらう。是を祖母さんが見たならば、どんなに歎くかしれやあしねえ。（ト手拭で涙を拭ふ。）

甲作　まさか隱して置かれもせず、それが今から胸のつかへだ。

乙松　何でこんなに伯母さんは、みじめな死樣しなさつたらう。

甲作　是れといふのも不孝の罰。

乙松　子は孝行にしろといふ、

甲作　世間の人の見せしめに、

乙松　なるは何たる因果なことか。

甲作　思へば不便な。（ト甲作首を見て涙をふり拂ふ、鵜籠の中で鵜の騒ぐを、乙松蓋を押へる、双方宜しく木の頭。）事だなあ。

ト憂ひの思入、乙松篝を取上げる。此模樣よろしく、合方竹笛水音烈しく、

ひやうし　幕

八幕目　石和村甲作内の場

〔役名――鵜遣甲作、穗積文三　根津忠藏、船木賢三郎。文三女房お崎、悴德太郎、鵜遣女房おあい等。〕

（甲作内の場）――本舞臺三間の間平舞臺、正面上手一間押入戸棚、上へ三尺佛壇を取込み、内に佛具宜しく此脇三尺畫圖抔を張りし襖、此下へ袋戸二枚、引續きて一間古障子出這入口、下手一間中窓、古障子を建て此下鼠壁、上の方一間折廻し古障子屋體、例の所丸太の門口、竹簀戸、下の方一間葺下しの下屋、三尺口繩簾、三尺下地窓鼠壁、此前に鮎籠を繩にて結へ積重ねあり、中窓の前に圍爐裏自在竹罐子掛けあり、傍に粗朶茶碗を入れし籠などあり）、總て石和村鵜遣甲作内の場、下手に角行燈を燈し、此傍に甲作母おいさ、白髮髷結び髪世話姿の拵へ、袖無半纏を着て針仕事なして居る、下手に鵜遣の女房おあい、おいし、やつしなり世話女房の拵へにて居る、鮎唄へ水の音を冠せ幕明く。

おい　今日は朝から曇つた故、今夜は降らうと思ひましたが、風が出たので持直しました。

いし　甲作さんも乙松さんも、生業に油斷なく、よく精をお出しなされますな。

いさ　最う今に月夜になるから、今の內稼がにやならぬと、孫を連れて出掛けました。

あい　私共の內などでは、降らうと云つて休みましたが、只休むばかりなら仕方も無いが、酒を吞む錢も取らずに遣ふ故、雁木に鑢でござります。

いし　それも二合か三合でしまひますとよいけれど、吞出しますと跡引で、直一升になりますから、翌日稼いだ位ゐでは、其穴が埋りませぬ。

いさ　私共の甲作は、酒は一滴も吞まぬのに、休む事が嫌ひ故、其苦勞はござりませぬ。

あい　甲作さんは此村で、評判の親孝行、目の寄る所へ玉が寄ると、其又孫の乙松さんが、親に劣らぬ孝行者。

いし　實に此方のお母位ゐ、世に仕合な人はない、是で死なれたお信さんが、達者で居なされば言分なしだ。

いさ　ほんにお前方の言ふ通り、お信が達者で居てくれゝば、夜延仕事をするにも及ばず、實に每日彼が事を、思ひ出さぬ事のないは、臺所許から濯ぎ洗濯針仕事も人手に掛けず、夜は每晩かゝさず

に、私の肩を揉んでくれ、恐らく世間にあの様な素直な者はあるまいと、思ふ程の心立、それ故片時忘れませぬ。

あい　其くせ不斷は達者であつたが、不圖した風邪が元となり、思ひがけなく死なれたも、昨日今日の様であつたが、最う三年でござりますな。

いし　甲作さんも四十二の、厄を越えて間が無いから、未まあ男盛り故、跡目を一人貰うたら、よからうと思ひます。

いさ　それも私が勸めたけれど、もう乙松が十八ゆゑ、二三年の其内に嫁を貰へば其時に、他人が居ては何かと面倒、年を取つたお前を使つて、心無いやうなれど、二三年の事なれば、辛抱をして居てくれと、あれが言ふのも尤も故、諸所からお世話をして下さるが、皆お斷りを言ひまする。

あい　成程嫁御を貰うた時、違つた中のお袋が、あつてはもめの起るもの。

いし　こりや甲作さんの言はるゝ通り、貰はぬ方がようござりませう。

いさ　水入らず故遠慮がなく、體に骨は折れましても、心安うござりまする。

あい　是に付てもお千代さんが、内に居なすつたらよからうに。

いし　今は何處に居なさいますか、便りでもござりましたか。

いさ　兄と逢つて彼女めは、十四の年から苦勞を掛け、女のくせに内を出て、何處へ行つて居る事やら、とんと音信不通ゆゑ、生きて居るか死んだ事か、少しも便りがございませぬ。

あい　お千代さんとは子供の折、遊び友達でございましたが、其時分には病身で、よく苦勞を掛けなさんしたが。

いし　其大恩を返さずに、叉々苦勞を掛けるとは、不孝な事でございますな。

いさ　死んだ親父も正直者、私も惡い心は持たぬが、どういふ事であの樣な、不孝な者が出來ましたか。

あい　其代り甲作さんが、二人前の孝行なさるは、天道樣がそこいらで差引勘定がしてありませう。

いし　ついうか／＼と長話しで、夜延仕事の邪魔をしました。

あい　わたしは用を忘れて居た。（ト風呂敷包みより小重箱を出し）今日は婆さんの十七年で、先刻團子を拵へたが、つい遲くなりましたが、乙松さんに上げて下さい。

いさ　それは／＼有難うございます。

あい　重箱は其儘に、明日返して下さいまし。

いし　それではお暇致しませうか。

いさ　今茶でも煮ませうから、もそつと話してござりませ。

あい　茶の御馳走にはなりたいが、内の酒もしまつた時分、

いし　早う歸つて片附けませう。

いさ　蘆久保の茶が貰つてあれば、又明日の晩話しにござれし。

あい　何ぞ明晩は茶の子を持つて、茶の御馳走になりませう。

いさ　それなら二人の衆、

あい　大きにお邪魔を、

兩人　致しました。

ト右の鳴物にて兩人花道へはひる、と直に花道より前幕の忠藏古き小田原提灯を提げ、杖を突出て來り、跡より前幕のお崎、子役の徳太郎に手を引かれ出て來り、

忠藏　もしお内儀さん、今の女中に聞きましたら、鵜遣ひの甲作殿は、向うの家でござりまする。

お崎　やれ〳〵、それは嬉しい事ぢや、もう僅かでござるかいの。

忠藏　つい、向うでござります。

徳太　おいらは足が痛うてならぬ。

忠藏　嘸お痛うござりませうが、私がびつこ故、背負する事がなりませぬ。
お崎　もう少しぢやといふ事なれば、辛抱して歩きやいの。
德太　あい〳〵。（ト右の鳴物にて舞臺へ來り、）
忠藏　立場でくれた古提灯、此お蔭で參られました。（ト門口から內を窺ひ、）はい、御免下さりませ、甲作樣のお宅は、此方でござりますか。
いさ　甲作は手前でござりますが、何方からおいでなされました。
忠藏　東京から參りましてござりますが、御在宿でござりますか。
いさ　日が暮れてから甲作は、漁に出ましてござります。
忠藏　さう仰しやるお前樣は、お袋さまでござりますか。
いさ　へい、左樣でござります。
お崎　お袋さまでござりますなら、御免なされて下さりませ。（トお崎前へ出る。）
いさ　つひぞお見受け申さぬお方、何方樣でござりまするな。
お崎　私は東京の、下谷茅町に居りました、穗積文三の妻崎と申します者、不思議な御緣で先達て、小佛峠で甲作樣が、難儀をお救ひ下さりました、お禮に出ましてござりまする。

いさ　玉川から悴が歸つて、委しい話しを致しましたが、それでは貴女が御難儀なされた、お崎樣でござりまするか。

お崎　御子息の甲作樣に、厚いお世話になりました。

いさ　見ればお眼の惡いのに、山坂道を態々と、お禮には及びませぬもの。

お崎　いえ、わざ〳〵は上りませぬ、元私しは甲府の生れ、八日町で穀屋を致す、栗原太兵衛の娘にて、今度里へ參ります故、お禮に上つてござります。

いさ　八日町の穀屋樣のお娘御でござりましたか、さういふ事なら、先づ〳〵是へお通りなされて下さりませ。

お崎　有難うござりまする。

忠藏　お詞に隨つて、彼方へお通りなされませ。

お崎　左樣なれば御免なされて下さりませ。

いさ　さあ〳〵お上りなされませ。

ト合方になり、お崎德太郎の草鞋を忠藏脫せる、おいさ下屋から盥へ水を汲み持て來り。

いさ　さあ、足をお灌ぎなされませ。

忠藏　是は〳〵有難うございまする。（ト忠藏足を洗つてやる、おいさお崎の手を取り上手へ住はせ、德太郎傍へ住ゐ、忠藏は盥を片附け、入口に腰を掛け居る。）

いさ　悴から其砌り承はりましてござりますが、お供に連れた若い衆が、小佛峠で貴女を捕へ、無體な事を致せしとやら、憎い奴でござりますな。

お崎　はい。（ト返事に困る思入、忠藏は天窓を押へ居て迷惑なる思入。）

いさ　何處の國にかお主樣を捕へ、其樣な事致すとは、道も法も知ぬ奴、申さば人の皮を着た畜生でござりまする。

お崎　はい。

いさ　其時崖を踏損じ、谷へ落ちたと申しますが、大方岩に天窓を打ち、非業な死をば致しましたらう。

ト　お崎は返事に困り俯向く。忠藏うづくまり居る。

德太　其忠藏はお附ちやんの、お供をしてそこに居ますよ。

いさ　え、（トびつくりなし、）其忠藏がそこに居るとは。（ト是にて忠藏前へ出て、）

忠藏　何をお隱し申しませう、小佛峠でお内儀樣へ、無理難題を申しました人の皮着た畜生は、此忠藏でござりまする。（トおいさ氣の毒なる思入にて、）

いさ　お前を忠藏殿と知らねば、飛んだ粗相を言ひましたが、どうぞ堪忍して下され。

忠藏　其御挨拶には及びませぬ、實に畜生でござりまする。

いさ　合點の行かぬは左程迄、惡い事した忠藏殿が、どういふ譯でお崎樣の、お供を致してござつたぞ。

忠藏　御主へ難儀をかけました罰で崖から谷へ落ち、左りの足を酷く打ち、生れも附ぬびつこになり、惡い事を致しましたと、後悔致して心を改め、身延山へ參詣致す、途中ではからずお内儀樣に、お目に掛つてお詫をなし、申し譯に駒飼から、押してお供を願ひまして、御案内を致しました。

お崎　後悔せしと私へ、頻りに詫を致しますれど、目が見えませねば樣子も分らず、又偽りではあるまいかと、心ならずも連れましたが、山坂道を兎や角と二人をいたはりくれます樣子、誠惡い心をば、改めしかと存じられます。

忠藏　全く改心致しますれば、お疑ひをお晴らし下され、以前の如くお心置なく、お遣ひなされて下さりませ。

いさ　何は兎もあれ甲作の、歸りも遲うござりますれば、汚ないをお厭ひなくば、今宵はお泊りなされませ。

お崎　お泊めなされて下さりますは、何より有難うござりまする、忰が睡がりまする故、お願ひ申さう

と存じましたが、鐵面しい女子ぢやと、思召してござりませうと、申兼ねて居りました。

いさ　八日町の穀屋樣は、久しい跡に鮎を取りにお出なされた事あれば、見ず知らずといふでもなし、お心置なくゆつくりと、今宵はお泊りなされませ。

お崎　それは有難うござりまする。これ德太郎、此方で泊めて下されば、今に寐かして遣りますぞ。

德太　早う寐度いわいの。（トおいさ忠藏に向ひ、）

いさ　さあ、お前さんも足を洗つて、上へお上りなされませ。

忠藏　有難うはござりますが、少し用事もござりますれば、街道筋の安泊へ參りまして泊りまする。

いさ　それはお前無駄な事ぢや、御一緒に泊りなされたが宜しいに。

忠藏　いえ旦那樣もお達者で、おいでなさると承はれば、お內儀樣と御一緒に、一つ所へ泊りましては、一旦不埒を致せし故、どうも心が濟みませぬ。

いさ　成程お前の言ふのも尤も、一緒に泊つて濟まぬとあるから、今宵は餘所へ泊りなされて、明日お出なされませ。

忠藏　左樣致しますでござりまする。

お崎　さういふ事なら少しも早く。

忠藏　何れ明朝上りまするる。（トおいさ提灯を附けて出し、）

いさ　朝の支度は此方でなされ。

忠藏　有難うござります。（ト鮎唄腹めて山下しにて忠藏杖を突き提灯を提げ花道へはひる、跡合方になり、）

いさ　お前樣の御難儀は先達て玉川から、甲作が歸りまして委細を話しました故、よく存じて居りまするが、太い御難儀をなされましたな。

お崎　甲作樣と八王子で泊つた晩に一部始終、お話しを致しましたが、母子が難儀を致しますも、良人が色に迷ひし故、親の代から住み馴れし住居も人に取られてしまひ、御覽の通り袖乞同樣、見る影もない此樣な、果敢ない裝に成りました。

いさ　嫁においでなされました穗積樣は存じませぬが、八日町の御實家はよい御身上でござりましたが、其お娘御が此樣なお裝におなりなされますも、元の起りは小松とかいふ嬖者故でござります、どんな者か存じませぬが憎い奴でござります。

お崎　それも私の足らはぬ故、小松殿のみ惡いといふ必ず譯ではござりませぬ。

いさ　いえ〳〵それはお前さまに、惡い事はござりませぬ、男を化す古狐、小松が惡うござりまする。

ト又鮎唄になり、花道より、前幕の文三以前の忠藏附き出て來り、

文三　思ひがけなく其方に逢ひ、尋ねる甲作の家が知れた。
忠藏　もう一足で私が安泊へ泊りますと、お目に掛られませなんだ。
文三　お崎も向うの家に居るか。
忠藏　はい、お泊りなされてゞござりまする。
文三　其鵜遣ひの甲作が、己を欺した小松の兄、それ故小松を尋ねに來たのだ。
忠藏　それでは内に居た老母は、小松の母でござりましたか。
文三　素知らぬ振で尋ねるから、小松の事を言ふまいぞ。
忠藏　それは承知でござりまする。（ト兩人思入あつて舞臺へ來り、）へい、又上りました。
いさ　何ぞ用でもござつてか。
忠藏　いえ〳〵、左樣ではござりませぬ、手前主人にはからずも、此先で出合ひました故、是へ伴ひ參りました。
いさ　すりや、文三樣が。
お崎　え、それは誠の事かいの。（ト立上り躓いて轉ぶ。）
さい　あゝもし、おあぶなうござゐます。（トおいさお崎を抱起す、此内文三は草鞋を脫ぎ、）

文三　眞平御免下さりませ。（ト合方になり文三内へはひる。）

いさ　さあ〳〵、是へお通りなされませ。（ト文三よき所へ住ふ。）それでは貴方がお崎樣の、お合連でござりますか。

文三　いかにも、穗積文三でござりまする。

お崎　おゝ、思ひがけない文三殿、よく達者で居て下さりました。

德太　お父さん、逢ひ度かつた。（トお崎探り寄ろ、德太郎縋り附く。）

文三　内の樣子は來る道〳〵、忠藏からあらまし聞いたが、其方一人に難儀を掛け、實に言譯の仕樣がない。

お崎　連添ふ女房に其樣な、言譯などは入りませぬ、只お變りのござりませぬが、何より嬉しうござりまする。

德太　己らも嬉しい〳〵わいの。

いさ　噫お二人共に嬉しからう。（ト兩人嬉しき思入、文三おいさに向ひ）

文三　お前樣は甲作殿の、御老母でござりますか。

いさ　お初にお目に掛りますが、私は甲作が母いさと、申しまする者でござります。

文三　お崎が厚いお世話になり、誠に私身に取りて有難うござりまする。（ト手を突き辭儀をする。）

いさ　其樣に仰しやつては、却つて痛み入りまする。

お崎　深い御恩に成りましたから、よく仰しやつて下さりませ。（ト文三お崎を見て、）

文三　お崎、其方は眼が見えぬか。

お崎　お前さまが内を出てから、艱難辛苦致せし故、初手は逆上で煩ひましたも、段々重りて兩方共、見えぬ樣になりました。

文三　それは嘸かし難儀であらう、丁度幸ひ東京を、己が立つ折目を煩ひ、上槙町の桐淵樣へ御願ひ申して藥を貰ひ、一と附で癒つた故、又煩つた其時にと紙入へ入れて持つて居た。（ト紙入の中より小さな壜を出し、）是を其方に遣らうから、直に其眼へ附けるがよい。（トお崎の手へ渡す。）

お崎　それは何より有難うござります。

文三　目迄惡くなる程に、夫を思ふ貞節な其方に艱難辛苦させ、實に逢ふのも面目なく、何から詫を仕ようやら。

お崎　私も何から申さうか、お目に懸つた嬉しさに、胸に支へて出ませぬわいな。

文三　そりや己とても同じ事、氣を落着けてゆつくり話さう。

忠藏　それに付て私も、旦那樣へお詫をば致しませねばなりませぬ、まづ其方のお話しが濟みましたらば其跡で、お聞きなされて下さりませ。

いさ　定めて積るお話しが、澤山ござりませうから、至つて汚うはござりますが、内に嫁が居つた時分、私が居ました放れ家がござりますから、其處でお話しなさりませ。

文三　それは何より遠慮もなく、有難うござりますが、

お崎　甲作樣のお留守中に。

いさ　いや、其御斟酌には及びませぬ、程なく悴も歸りませうから、ゆつくりとお話しなされませ。

忠藏　御親切に仰しやりますれば、御老母樣の仰せに隨ひ、

文三　それでは暫く放れ家を、

お崎　お借り申しますでござります。

いさ　どうぞさうなされて下さりませ。

忠藏　左樣なれば私は、明朝早く上りませう。

文三　忠藏、其方にも是迄の、内の樣子を聞き度ければ。

お崎　共々奧へ來たがよい。

忠藏　其お許しがござりますれば、お供致すでござります。

いさ　田舍は隣が半町あれば、何處へ憚る所もなし。

文三　遠慮なければ是迄の、

お崎　積る互ひの身の上話し。

忠藏　奥へ參つてゆつくりと。

いさ　どれ、御案内致しませう。

ト時の鐘合方にて、おいさ先に文三お崎德太郎忠藏附いて正面障子の口へはひる、時の鐘打上げ、床の淨瑠璃になる。

〽冬近く時雨を誘ふ雨催ひ、雲足早く立歸る甲作親子は道邊の、傍へに暫し彳みて、

ト花道より前幕の甲作篝を持ち胸當へ首を包み、是を抱へ出て來る、跡より前幕の乙松鷄籠を擔ぎ出て來り、兩人花道へ留り、

甲作　これ、母さんに話したら必らず歎くに違ひないから、首の事は己が言ふ迄、手前は默つて何にも言ふな。

乙松　己あ決して言はねえが、首は何處へ置きなさる。

甲作　物置にでも入れて置かう。
乙松　鼠が喰ふから止しにしねえ。
甲作　それぢやあ手前番をして居てくれ。
乙松　己あ氣味が惡くて、一人ぢやあ出來ねえ。
甲作　えゝ、いくぢのねえ奴だな。
〽露に濕りし草の家の門へ二人は立歸り、（ト兩人舞臺へ來り、門口にて）
何ぞ首を入れて置く、入物はあるまいか。
乙松　親父、此ビクは如何だらう。（ト下手にあるビクを出す。）
甲作　これは丁度宜さゝうだ。
〽首を隱して蓋をなし、（トビクの中へ首を隱し蓋をして）
かうして置けば大丈夫だ。（ト下手へ置き奧へ向ひ）母さん〳〵、今歸りましたよ。
いさ　あい〳〵。
〽母は奧より立出て、（ト奧より以前のおいさ出て）
おゝ甲作歸つたか、だいぶ今夜は早かつたな。

甲作　先刻ばら／＼降りましたから、早仕舞にして歸りました。
乙松　籠は納屋へ入れて置かうか。
甲作　おゝ、餌を遣る迄入れて置いてくれ。
乙松　あい／＼。（ト合方にて乙松籠を擔ぎ下屋の内へはひる、甲作足を拭ふ、おいさは戸棚より布子と帶を出し、）
いさ　嘸夜露で濕つたらう、はやく着物を着たがよい。
甲作　もう九月も僅か故、露が深く下りますから、今が一番濕ります。（ト言ひながら三尺帶を解き、筒袖を脱ぎ布子を着替へ、）こりや、洗濯をした布子に、四角な帶を出しなさつたは。
いさ　今夜は内にお客があるから。
甲作　往來でない石和村、客があるとは珍らしい。
　　ト甲作帶をしめ下に居る、乙松も下屋より出で、内へはひり。
乙松　なに、お客が内にありますかえ。
いさ　おゝ、其方も着物を着替へたがよい。
乙松　あい／＼。
甲作　して、其客といふのは。

いさ　其方が此間小佛峠で、お助け申した穀屋の娘御、お崎様がおいでなされたわ。
甲作　え、お崎様がおいでなされた。
いさ　まだそればかりでなく、お連合の文三様もおいでなされた。
甲作　それは思ひがけない事でござりますな。
いさ　まだ／＼、それに忠藏といふ心得違ひをした者が、御供をして來ましたわいの。
甲作　して其衆はどうしました。
いさ　其方に逢うて行き度いと言はれる故に三人共、内へ留めて置きました。
甲作　それはよく留めて上げて下すつた。（ト此内乙松布子を着て漁に着た半纏を片附けて、）
乙松　三人お客が内にあつては、追炊をせずばなるまいな。
いさ　いや、時雨空で寒いから、芋や蘿蔔を刻み込んで、雜炊を炊いて進ぜませう。
乙松　成程それが溫かでよい。
甲作　お留め申した三人に、私もお目に掛り度いが、何處においでなされます。
いさ　いろ／＼お話がある樣子故、裏の放家へお連れ申した。
甲作　それでは私も裏へ參り、御挨拶をして來ませう。

いさ　まあお飯でも喰べてから、ゆつくりしたがよからうよ。

甲作　いえ、ちよつとお目に掛つて來ませう。

〽言ひつゝ、忰へ目配して、とつかは奥へ入りにける。

ト甲作乙松へ思入あつてばひろ、おいさ團子を入れし重箱を出し、

いさ　先刻仲間の卯之作殿から、志しの佛があつて、拵へたといつて團子を貰うた、幸ひ内に黄粉があればお飯の前に喰べてはどうだ。

乙松　團子は不斷好きだけれど、今夜は喰度くございません。

いさ　夜食を喰べたは明るい内、何ぞ途中で喰べたのか。

乙松　いえ〳〵、何も喰べませぬが、胸に支へて喰へませぬ。

いさ　それでは明日喰べたがよい。（ト乙松團子を見て、）

乙松　黄粉も附けぬ白團子、是は丁度幸ひだ。

いさ　なに、其團子が幸ひとは。

乙松　さあ、幸ひだと言つたのは、親父が團子を喰度いと、先刻途中で言ひました。

いさ　それでは忰に喰べさせませう。

〽心ならねばそこ〳〵に、一間を立出る甲作が、(ト奥より甲作出て來り、)

甲作　後にお話し致しますと、御挨拶のみして來ました。

いさ　どうで泊つておいでなれば、ゆつくりお話ししたがよい。(ト思入あつて、)其方は團子が喰べ度いと言つたさうだが丁度幸ひ、卯之作殿から貰うた團子、黄粉もあれば喰べたがよい。

甲作　いえ〳〵團子が喰ひ度いなどゝ、そんな事は言ひませぬ。

いさ　今乙松がさう言つたに。

甲作　何をあれが言ひましたか。

乙松　親父が團子を喰べ度いと、言つたは是へ供へ度い。(トピクヘ思入)

甲作　あ、これ、餘計な口を利くなと言ふに。

いさ　それでは團子が喰べ度くないか。

甲作　胸が支へて喰へませぬ。

いさ　二人が二人胸が支へて、喰べられぬとはどうした事か。

〽不審立れば兩人は、拾ひし首を明し兼ね差俯向いて躊躇ば、

ト甲作乙松と顔見合せ首の事を言ひ兼ねる思入、

見れば何だか二人共、物思ひげな顔をして、心持でも悪いのか。

甲作　いえ、私は何ともござりませぬ。

乙松　己も悪くはござりませぬ。

甲作　さういふ母さん、お前こそ顔附が悪うござりますが、持病でも起りましたか。

いさ　別に持病は起らぬが、心氣の勞れか二三日此方、兎角夢見が悪いので、氣分が常の樣でない、達者の樣でも年の上、煩はぬ樣に仕度いものだ。

甲作　どうぞ煩はぬ樣にして下さりませ、女房でもあればよいが、男ばかりでござりますから、心に幾等思つても、お前のお世話が行屆きませぬ。

乙松　己が女でおつたらば、どんなにもお世話をして手助をするけれど、男だから役に立たねえ。

甲作　斯ういふ時に妹の、お千代が内に居ましたら、お世話が十分出來ませうよ。

〽話に事寄せ甲作が、母の心を裏問へば、（ト甲作思入にて言ふ、）

いさ　いや／＼、あんな不孝者は、内に居ぬ方がよい。

乙松　其樣な事を言はしやつても、居たら悪くはござりますまい。

いさ　内に居れば氣を揉ませ、親に苦勞を掛けるばかり、實に顔を見度くもない。

甲作　それではお前お千代が事を、何とも思ひなさらぬか。

いさ　あれは我子で無いと思へば、私は何とも思はぬわいの。

乙松　其様な事を、祖母さん言つても、今伯母さんが死んだと言つたら。

甲作　嘸お歎きなさるであらう。

いさ　何で私が歎くものか、あれが死んだ事を聞いたら、黄泉の障りが無くてよい。

甲作　それではお歎きなさりませぬか。

いさ　おゝ、悦ぶとも歎かぬわいの。

〽歎かぬといふ母親の、詞を聞いて甲作が、

甲作　其思召ならお話し申すが、お千代は非業な死を仕ました。

いさ　えゝ、（下悔りして、）死んだとは、そりや何處で。

甲作　何處で死んだか知れませぬが、今石和川で流れて來た、お千代が首を拾ひました。

いさ　えゝ、（下悔りなし、）

〽えゝとばかりに打驚き、餘りの事に涙も出ず、

して、其首は何處にあるぞ。

甲作　只今お目に掛けまする。
〽ビクの中より取出し、蓋の上へ首を載せ、(ト下手のビクの中から首を出し蓋の上へ載せて、)
不幸な者でも血を分けた、たつた一人のお前の娘、よく顔を見て遣つて下され。
〽泪ながらに差出せば、母は取上げ顔を見て、(トおいさ切首を取上げ見て、)

いさ　おゝ、お千代だ〳〵、何でまあ情ない、此樣な姿になつたのだ、えゝ見るも悲しい事だなあ。
〽首を抱へて正體なく、涙に暮れて打歎けば、(トおいさ首を抱へ歎く思入宜しく、)

甲作　不孝者故歎かぬと、今仰しやつたぢやござりませぬか、あんまり未練でござりまする。

トおいさ首を下へ置き、

いさ　おゝ、不孝者故歎きはせぬ、是で黄泉の障りがなく、嬉し涙がこぼれるわいの。

乙松　祖母さん、泣くのは尤もだ、己でさへも悲しくて、涙の止度も無いものを、遠慮せずと泣かつしやい。
〽いふに涙を押拭ひ、

いさ　こんな非業な最期をしやるも、子供の時から身持が惡く、十四の年に家出して、それぎり便りもせぬ程な、親に不孝をした天罰、世間の娘のよい手本、是で死んでも氣障りなく、心易くなつた

わいの。

甲作　何處から流れて參つたか、不氣味な女の首なれば、突出しましたが又元の我足許へ流れ着き放れませねば不思議故、取上げますれば乙松が、親父に首が似て居ると言はれてよく〳〵見てびつくり、別れ程經たお千代が首、扨は今夜流れ着いたは、兄を慕つて妹が葬むつて貰ひ度い故と見えます。

いさ　それ程兄を慕ふなら、何故達者で居る中に、詫手紙でもよこさぬのだ、おのれが達者で居る内は親兄弟を何とも思はず、首になつて便つて來るとは、死んでも心の曲つた奴、こんな樣になるはずだ。

甲作　久しく人の噂にも妹が事を聞きませなんだが、斯うして見ますと親兄弟に、逢はうと思つて甲州路へ參つた者と思はれます。如何なる事で此樣に、首を切られました事か、親には不孝な奴なれど、たつた一人の妹ゆゑ、私は不便でござります。

〽流石親身の兄弟に、首取上げて甲作が、身の果敢なさをさめ〴〵と、託ち歎けばとも〴〵に、（ト甲作首を取上げ憂ひの思入宜しく、乙松も泣きながら首を取って、）

乙松　小い時に別れたから、ろく〳〵顏は覺えませぬが、斯うも親父に似て居るものか。

〽是が東京で死なれたら、此伯母様に逢はれぬもの、首でも斬うして逢はれるのは、誠に嬉しうございます、たつた一言乙松かと、伯母さん言うてくれないか。

〽首を抱へて乙松が、歎くも眞は泣寄りに、婆も堪へず咽び入り。

ト乙松首を抱き宜しく憂ひの思入、

いさ　おゝ尤もだ〳〵、己は不孝な娘故、憎うて〳〵ならぬ故、死んでも悲しく思はぬが、是程親が疎む様な女に稀な惡たれでも、伯母と思つて乙松が、一言物を言うてくれと歎く優しい心根が、嬉しさ故に涙がこぼれる、決してお千代で泣きはせぬ、此乙松で泣くわいの。

〽孫によそへて泣く母の、心の内のいぢらしく、共に甲作乙松も暫し涙に暮れたりしが。

トおいさ首へ思入あつて泣く、甲作乙松も憂ひの思入あつて、

甲作　かういふ姿になつたからは、是迄お前に不孝をした、科はどうぞ水にして、許して遣つて下さいまし。

いさ　言はう様なき人でなし故、どう其方が詫びるとも、子と思はねば許されぬ。

甲作　是が生きて居る事なら、一つの功を立てさせてお詫を致す事もあれど、明日葬むれば土となり再

び御恩の返されぬ、果敢ない首の此妹、私が一生の頼み故、詫を聞いて下さりませ。

いさ　そでない者を兄弟とて、不便に思つて詫びるのを聞かぬは嘸や強情な、者と其方は思ふであらうが、最早餘命もない體、翌が日死んで冥土へ行くとも、あれとは詞を交さぬ心ぢや。

甲作　それではお前の罪になります、後生を願ふは老の役、是も功德の一つ故、お免しなされて下さりませ。

乙松　假令どんなに伯母さんが、孝行が仕度くとも、首になつては仕方がない、今日からおいらが伯母さんの替りに孝行しますから、免して上げて下さいまし。（ト手を突き賴む、おいさ思入あつて、）

いさ　それ程迄に人で無を二人して、詫を言ふのを聽ぬのは、老いては子に從ふといふ譬に悖れば二人に免じ、不孝を免して遣りませう。

甲作　そんならお免し下さりますか。（ト首に向ひ、）これ妹、其方が不孝を二人して、お詫申して御免になつたぞ。

乙松　嘸伯母さん、嬉しからうね。

〽生きたる人に言ふ如く、首に向ひて親と子が言ふも涙の村時雨、母も乾かぬ袖絞り、

ト三人宜しく憂ひの思入あつて、

いさ　二人の詫に是迄の、不孝の罪を免して遣るぞ、男ならば是非無れど、女の身にて此樣な、そでない事を致すとは、言はう樣ない人でなし、存生中は言ふに及ばず、死んで迄も此樣に親に耻を與へるとは、何たる不孝なことなるぞ。

甲作　かゝる非業な死を遂ぐるも、皆な其身のなした科、斯ういふ娘や妹を持つ是も前世の約束事、今更言うても返らぬ事だ。

乙松　早く伯母さんへ線香でも、手向けて上げ度うござります。

甲作　おゝ、手前の机を持つて來い。

乙松　あい／＼。

〽あいと返事も尻輕に、取出す机水向の茶碗も其身の瓱燒に、香爐へ立てる線香の烟りと消える果敢なさは、見るも哀れな白團子。

ト此内乙松下屋より手習机を持來り、佛壇の前へ置き、此上へ首を載せ佛壇の香爐へ線香を立て、瓱燒茶碗へ水を手向け、以前の團子を備へ、

甲作　是に附けても合點の行かぬは、此お千代が首の切口、刀で切つたと思はれぬが、遺恨を受ける事でもあつて、嬲殺しにされたのか。

いさ　何處でどういふ目に逢つたか。

甲作　委しい話しを聞き度いものだ。

〽言ふ折門に最前より、窺ひ居たる旅人が、

ト此以前よき程に下手より前幕の賢三郎出て來り、門口に裏向に窺ひ居て、

賢三　其御疑念の晴れる樣、委しくお話し仕つらん。

〽頭巾脱捨て靜々と、入來る賢三を見るよりも、（ト賢三郎頭巾を取り內へはひるを見て、）

甲作　思ひがけないお前樣は、

いさ　何れのお方で、

兩人　ございまする。

賢三　年限立ちし事故に、見忘れられたでござらうが、私は甲府八日町の穀屋、栗原太兵衛の悴でござる。

甲作　すりや、栗原樣の御子息でござりましたか。

いさ　さう仰しやればお小い時、親御樣と御一緒に鮎を取りにおいでなされた、太之助樣でござりますか。

賢三　如何にも、其太之助でござる、壯年の頃武藝を好み、士族にならん志願にて、武藝を修行なせし故惡き友に交はりて遊里へ通ひ放蕩なし、遂に實家を立出て永々諸縣を遊歷なし、此程當地へ參つてござる。

甲作　其栗原の御子息が、妹お千代を御存じなるは。

乙松　どういふ譯でござりまする。

いさ　仔細をお聞せ下さりませ。

〽言ふに此方は座を進み、（ト賢三郎前へ出て、砧の入りし誂への合方になり）

賢三　お噺し申すも面目ないが、五年跡に八王子の鶴屋といへる料理茶屋に、お千代が奉公なせし折、我も同所に寄留なし、時折酒を呑に參り酌をさせしが緣となつて、遂に深く言替し、夫婦約束なせし後、二人連立ち東京を見物ながら參りてより、爰に二月彼處に三月と、する事もなく遊びし故、所持せし金も遣ひなくし、詮方なさに相談づくにて、お千代は下谷數寄屋町の新常磐屋の世話になり、小松と名を替へ藝妓の勤め、我は少しの目的ありて奥州地方へ旅稼ぎ、其折互ひの素性をば明さぬの爲に我妹の、お崎が亭主を文三と知らねば、色をもつて深く欺し、多くの金を取りし上情死なさんと僞つて、文三のみに身を投げさせ其身は死したる體に見せ、影を隱して小田原

にて、女郎となつて我知邊へ文通せしゆゑ尋ね行き、又もや其處を逃去つて、笹子下の笹屋といふ安泊りに潛み居しに、今日はからず文三が來たり、小松を殺して遺恨を晴らすと、聞いて裏より逃出せし行方を尋ねに出し途中、此首銜へて狼が飛掛らんとなしたるを、只一刀に刺貫き、よく〳〵見れば小松が首、扨は狼に喰れしかと、暫し悲歎に暮れたりしが、縁ある當家へ贈らんと攜へ行かんとせし所へ、我に遺恨のある者が打て掛るを拂ひ退け爭ふ内に後ろなる、川へ首を打込みしが、流れ〳〵て石和にて甲作殿の手に入つて、親御の許へ來りしは、誠に不思議な奇縁でござる。

ト一部始終を物語れば、聞く甲作は打驚き、
賢三郎宜しく思入にて言ふ。此内甲作おいさと顔見合せ、驚く思入あつて、

甲作　扨は文三樣やお崎樣に、御難儀掛けし小松といふ藝者は妹でござりましたか。

いさ　知らぬ事とて今の今迄、餘所の娘と思ひしが、

乙松　現在親身の伯母さんとは、

甲作　思ひがけない、

三人　事ぢやなあ。

〽母も悴も諸共に、暫し呆るゝばかりなり。（ト甲作おいさ乙松宜しく思入）

甲作　此切口が只ならぬと思ひましたがお話しでは、此頃世間で噂のある、笹子峠の狼に喰殺されたのでござりまするか。

いさ　惡い奴とは言ひながら、みじめな死をば致しましたな。

乙松　其狼が知れるなら、おいらが殺して遣り度いものだ。

賢三　それは手前が其場にて、只一刀に刺殺せしぞ。

乙松　敵を取つて下さりましたか、えゝ有難うござりまする。

甲作　お千代が小松といふ事は、實に存じませなんだが、貴方も栗原太之助様と、今でもお名をおつしやりますか。

賢三　仔細あつて變名なし、今は船木賢三郎と申す。

甲作　それでは船木賢三郎様と、

いさ　お名をお替へなさりましたか。

〽一間に始終立聞せし、文三お崎忠藏も共に其場へ立出て、

ト奥より以前の文三お崎忠藏出て、來り、

文三　是まで知らずに居つたるが、小松の色の賢三郎は、

お崎　兄さん、お前でござりますか。

賢三　二人に名乘るも面目ないが、船木賢三郎は我なるぞ。

文三　知らぬ事とて是までは、戀の敵と思つたが、

忠藏　思ひがけないお崎樣が、尋ねる實のお兄い樣。

賢三　それゆゑ最前安泊へ、お崎が湯をば貰ひに來た時、奧に隱れて名乘合はず、文三殿がござつた時も、只餘所事に言ひなしたは、其名を明し難き故。

お崎　それでは最前藥の湯を、貰ひし時に良人の事を、委しく知つたお内儀さんは、

賢三　あれが小松の、なれの果だ。

お崎　え、道理で詞の端々が、心得難く思ひしに、小松どのでござりましたか。

文三　我も斯くとは存ぜぬゆゑ、小松に恨みを返さうと、此家へ尋ね來りしに、お崎忠藏兩人が話しに聞けば大恩ある甲作どの、妹にて、今では打つに打たれぬ義理。

忠藏　それも非業な最期にて、見るも果敢ない此首級。

甲作　文三樣も妹が、嘸や憎うござりませうが、貴方がお手を下さずとも、天罰うけて狼に喰殺されし

は自業自得、只一思ひに切られますとは事替つて、此首を喰切られます苦しみは、どの樣でござりませう、憎しと思ふ恨みをば、お晴らしなされて下さりませ。

〽涙ながらに甲作が、妹の罪を詫びければ、（ト甲作宜しく詫びる。）

文三　兄御の詞を聞かずとも、此身にさら〳〵恨みはない。（トおいさ思入あつて、）

いさ　女子は幼い時よりして愼むべきは戀の道、斯る最期を遂げたるも男狂ひをせし故ぞ。

乙松　此伯母さんも眞當に、亭主を持つた事ならば、こんな死樣はなさるまいに。

いさ　親に不孝な奴ではおる。

賢三　お千代が斯ういふ死をなせしも、元の起りは言替せし、此太之助がなせし業、親兄弟への言譯は。

〽言ひつゝ短刀取出し、拔くよと見えしが脇腹へ、ぐツとばかりに突立つれば、

ト賢三郎懷ろより短刀を出し、肌を脱ぎ脇腹へ突立てる、皆々びつくりして、

甲作　やれ、こりや何故に此生害。

お崎　何でお前は死なしやんす。

文三　早まつた事、

皆々　なされしよなあ。

賢三 〽人々縋り止むれば、手負は苦しき息をつき、（ト皆々思入、竹笛入りの合方になり、）
今迄包み隠せしが、我は兇器を携へて、強盗なして是迄に多くの金圓盗みし上、酒匂川原駒飼にて悪漢とは言ながら、熊藏三五郎兩人を殺害なせし大罪人、所詮一命なき身の上、お千代が詰所へ連れ歩き人を欺き金圓を掠め取りしも我故なれば、親兄弟への言譯に、命を捨つる此太之助、是で罪をば許して下され。

〽免してくれと血に染みし手を合してぞ伏拜めば、（ト賢三郎手を合せ拜む。）

甲作 私等親子へ言譯なら、今死なずとも良い事を。

賢三 身の悪逆を後悔なし、一命捨つるはかねての覺悟、よしや爰で死なずとも死刑になるべき我身體、必らず妹も歎くまいぞ。

お崎 悪い人でも親身の兄、是が泣かずに居られませうか。（トお崎探り寄つて泣く。）

賢三 今般の際にお頼みは、世に便なき此妹、行末長く文三殿、どうぞ見捨てずに下さりませ。

文三 見捨つる心はなけれども、身代限りをせし上は、再び歸る家はなし。

忠藏 附いては何をなさるにも、先立つものは資本の金。

〽いふに甲作打領き、

甲作　人の噂に、妹が、娼妓になりしと聞きし故、主人に借りし前借を返して内へ呼歸さば、嘸老母が悦ばうと、長年溜めし其金が、丁度此頃百圓に纏まりましてござります。妹が此世に居りませねば、多くの金を遣はせし、文三樣への申し譯に、是を貴方へ差上げますから、僅なれども資本になされ、家業をお始め下さりませ。（ト甲作戸棚より封じたる札包みを出し文三の前へ出す。）

文三　志しは忝ないが、折角溜めし其金を、私が方へ借受けては。

甲作　其遠慮には及びませぬ、お遣ひなすつて下されば、

いさ　娘が爲によい追善。

忠藏　左程迄に仰しやれば、一先それをお借りなされ、家業をお始めなされた後ち、再びお返しなされませ。

文三　それでは詞に隨ひて、此百圓を借りまする。（ト札包みを取り頂く、）

甲作　借りるなど、仰しやらず、お遣ひなされて下さりませ。（ト本釣鐘を打込賢三郎顏をあげ首級を見て、）

賢三　我故お千代が非業な最期、今に冥土に赴くから、三途の川に待つて居よ。

お崎　せめて今般の此名殘に、（ト薄き風の音お崎眼を明き四邊を見て、）や、、思ひがけなく此眼が明き、兄さんの顏が見えまする。

賢三どうして其眼が癒つたぞ。

文三 それぞさつきの藥の效驗。

お崎 えゝ有難うござりまする。（トばたくにて奥より徳太郎駈け出で）

徳太 お母さん、一緒に寢ておくれ。

忠藏 徳ちやん、お目が覺めましたか。（ト又本釣鐘鷄笛になり）

甲作 秋の夜長も鷄の、

いさ 聲に明行く朝ぼらけ、

乙松 東へ登る日の影に、

お崎 憂ひを拂ふ山風や、

賢三 西へ隱るゝ月影は、

文三 消ゆる間早き東雲に、

忠藏 悲しみあれば悦びの、

甲作 吉事を告ぐる。（ト木のかしら）

皆々 明烏。

ト賢三郎引廻す、甲作首を取つて賢三郎に見せろ。皆々引張宜しく、本釣鐘、烏笛カケリにて

ひやうし　幕

鵜飼の燎（終り）

（附錄）主なる興行年表

千歳會我源氏礎

年時	座名	名題	忠信	辨慶	義經	義時	覺範	小車	淨雲	梶原	敎信尼
明治十八年二月	千歳座	千歳會我源氏礎	市川左團次	市川左團次	尾上菊五郎	市川團十郎	中村芝翫	中村福助	市川團右衞門	片岡我童	市川團十郎
明治二十四年六月	市村座	碁盤忠信源氏礎	市川左團次	市川荒次郎	中村福助	尾上菊五郎	中村芝翫	中村福助	尾上松助	市川小團次	なし
明治三十六年十一月	東京座	碁盤忠信源氏礎	市川左團次	市川荒次郎	中村芝翫	中村芝翫	市川猿之助	市川米藏	市川荒次郎	市川莚升	なし
明治四十一年四月	明治座	碁盤忠信源氏礎	市川左團次	市川團升	中村歌昇	市川小團次	中村時藏	市川女寅	中村時藏	中村又五郎	なし
大正五年十一月	帝國劇場	碁盤忠信	市川左團次	市川九團次	片岡我童	市川壽美藏	中村歌六	市川松蔦	尾上松助	片岡我童	なし
大正八年二月	歌舞伎座	山伏接待	なし	市川中車	市村羽左衞門	なし	なし	なし	なし	なし	中村歌右衞門
大正十年四月	市村座	碁盤忠信源氏礎	大谷友右衞門	市川新十郎	市川男女藏	尾上菊五郎	淺尾工左衞門	尾上榮三郎	尾上菊三郎	尾上伊三郎	なし

清水一角

年時	座名	名題	一角	おまき	丈左衛門	與一郎
明治六年十一月	村山座	忠臣いろは實記	五世尾上菊五郎	市川門之助	關三十郎	中村重藏
明治二十四年十一月	深野座	同	尾上菊五郎	坂東彦十郎	尾上松助	尾上菊之助
明治三十八年六月	市村座	同	市村羽左衛門	尾上芙雀	尾上松助	坂東三田八
明治四十三年八月	歌舞伎座	清水一角	六世尾上菊五郎	尾上芙雀	中村翫助	坂東三津五郎
大正六年十二月	明治座	同	市村羽左衛門	澤村源之助	市川八百藏	
大正十一年三月	帝國劇場	同	尾上菊五郎	市川鬼丸	大谷友右衛門	市川男女藏

關ケ原

年時	座名	名題	家康	敷浪	刑部	三成	仁右衛門	湯淺	鳥居	正齋	石見
明治二十年六月	新富座	關原神葉	市川團十郎	市川團十郎	市川團十郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	市川左團次	市川左團次	市川左團次	市川小團次
明治[illegible]十年十月	明治座	關原神葉	市川團十郎	市川團十郎	市川團十郎	なし	市川權十郎	市川左團次	市川左團次		市川小團次

年時	座名	名題	宗五郎	おつた	主計之助	おはま	十右衛門	典藏	太兵衛	おなぎ	紋三郎
明治三十五年七月	市村座	烈婦敷波	なし	中村芝翫	なし	なし	なし	なし	なし	片岡市藏	澤村訥升
明治四十一年五月	歌舞伎座	烈婦敷波	なし	中村芝翫	なし	なし	なし	なし	なし	市川猿之助	澤村訥升
明治四十三年三月	明治座	關原神葵葉	市川高麗藏	なし	市川高麗藏	なし	市川壽美藏	市川左團次	市川小團次	なし	なし

新皿屋敷

年時	座名	名題	宗五郎	おつた	主計之助	おはま	十右衛門	典藏	太兵衛	おなぎ	紋三郎
明治十六年五月	市村座	新皿屋敷月雨暈	尾上菊五郎	尾上菊五郎	片岡我童	河原崎國太郎	嵐璃寛	尾上松助	市川壽美藏	岩井松之助	片岡我童
明治十六年六月	大阪戎座	菊模樣新渡花皿	嵐璃寛	嵐璃寛	中村宗十郎	中村紫琴	實川延若	中村琥珀郎	中村琥珀郎	片岡松太郎	嵐橘三郎
明治二十九年四月	明治座	新皿屋敷月雨暈	尾上菊五郎	尾上菊五郎	市川小團次	坂東秀調	片岡市藏	尾上松助	尾上松助	尾上榮三郎	尾上菊之助
明治三十二年十月	歌舞伎座	新皿屋敷月雨暈	尾上菊五郎	中村福助	市川八百藏	尾上榮三郎	尾上松助	尾上蟹十郎	尾上松助	尾上菊三郎	市川染五郎
明治三十五年十月	淺草座	新皿屋敷月雨暈	澤村訥子	澤村源之助	澤村訥子	澤村門之助	阪東又三郎	中村助五郎	阪東又三郎	中村銀之助	澤村訥升
明治四十一年八月	歌舞伎座	新皿屋敷月雨暈	尾上菊五郎	尾上菊五郎	中村吉右衞門	尾上芙雀	市川新十郎	中村翫助	市川新十郎	岩井粂三郎	守田勘彌
大正二年十一月	市村座	新皿屋敷月雨暈	尾上菊五郎	守田勘彌	中村吉右衞門	尾上芙雀	尾上榮三郎	中村翫助	市川新十郎	河原崎國太郎	坂東三津五郎
大正三年六月	歌舞伎座	新皿屋敷月雨暈	市村羽左衞門	中村歌右衞門	片岡仁左衞門	市川門之助	市川段四郎	中村歌十郎	尾上卯三郎	阪東秀調	市川八百藏
大正六年八月	帝國劇場	新皿屋敷月雨暈	尾上菊五郎	尾上菊次郎	守田勘彌	尾上菊次郎	中村吉右衞門	中村翫助	尾上松助	河原崎國太郎	坂東三津五郎

大正十年二月	市村座	新皿屋敷月雨暈（しんさらやしきつきのあまがさ）	尾上菊五郎	澤村宗之助	中村吉右衛門	澤村宗之助	大谷友右衛門	中村吉之丞	大谷友右衛門	岩井粂三郎	坂東三津五郎

うかひ

年時	座名	名題	小まつ	甲作	賢三郎	熊蔵	文三
明治十九年五月	千歳座	戀闇鵜飼燎（こひのやみうかひのかゞりび）	尾上菊五郎	尾上菊五郎	市川九蔵	尾上松助	坂東家橘
明治四十年二月	宮戸座	戀闇鵜飼燎（こひのやみうかひのかゞりび）	澤村源之助	澤村源之助	市川鬼丸	尾上菊四郎	嵐芳三郎
大正三年二月	宮戸座	戀闇鵜飼燎（こひのやみうかひのかゞりび）	澤村源之助	澤村源之助	淺尾工左衛門	中村勘五郎	中村芝鶴

大正十四年十二月十五日印刷
大正十四年十二月十九日發行

『默阿彌全集第十七巻』

非賣品

著作權者印

上演、轉載等の場合は藏版者の許諾を得られ度候。

補修　河竹糸女

校訂
編纂者　河竹繁俊

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷者　堀江關武

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷所　常磐印刷所

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂



